THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年特別號

(我國文化の最高標準號)

第四十三年 第一號 第四百八十號



謹賀新年

客年中は一方ならぬ御愛顧を蒙り難有厚く御禮申上げます。何卒本年も相變らず御引立の程偏に御願ひ申上げます。

昭和參年元旦

松屋呉服店

◇東京・銀座◇

續國譯漢文大成

平俗なる形態　高邁なる精神

岩波講座

内容説明書進呈

宣言

時代の凡ゆる騷擾と喧囂との間にあつて、到る處に聞かれ、絶えまなく高まりつつあるは、大なる民衆の學藝解放への叫びである。これ今や最も偉大なるものに對して自己を準備せんとする者の情熱と本能との表現である。我等は此情熱と本能とのうちに明かなる眞理を感ずる。蓋し眞理は職業的學究者のみのものでなく、却て一切の人間の素直なる心に屬する。我等は此確信の上に立つて、岩波講座の刊行を企て、その著手事業として「世界思潮」の計畫を茲に發表する。本講座は世界に於て歴史を創造し變革したが如き、又現在斯の如き任務を遂げつつある思想の潮流を與へることを目的とする。そは努めて平明なる敍述を旨とするも卑俗に陷らず、嚴正なる知識を目差すも學究に泥まず、高邁なる識見を求むるも高踏にはしらず、單に專門的學問の見地から興味を惹くものよりも、萬人を動かし得る生ける眞理を傳へんとする。岩波講座の此目的は可能である。なぜなら、眞理はそれ自身何人にも理解し檢證し得べき性質を有する。そして筆者は、その學問に於て大觀し得るだけに深く、その見識に於て達觀し得るだけに高きが故である。徒に偏狹にして煩瑣なる從來の諸講座に拔んづる本講座の此特色のうちに、それが現代に對して有する比びなき意義は存する。此意義の爲に、その實力に於て眞に畏るべき學徒と其熱意に於て實に烈しき出版者とは、力強く結ばれた。岩波講座は岩波文庫と竝んで、一は他の準備となり、他は一の補助となり、進展してやむことなき現代文化の戰線に於て、最も重大なる歷史的使命を果すであらう。我等は本講座がかの岩波文庫の如く、萬人の熱誠なる歡迎を受け、友情ある協同を得ることを期待する。

第一次講座　世界思潮　會員募集

主潮

世界思潮　阿部次郎
西洋思潮　坂口昂
希臘思潮　波多野精一
基督教思潮　石原謙
中世思潮　岩下壯一
文藝復興　林達夫
啓蒙思潮　矢崎美盛
浪漫主義　谷川徹三
東洋思潮　矢吹慶輝
印度思潮　宇井伯壽
支那思潮　津田左右吉
日本思潮　村岡典嗣
佛教思潮　椎尾辨匡
印度佛教思潮　木村泰賢
支那佛教思潮　境野黄洋
日本佛教思潮　境野黄洋
儒教思潮　武内義雄
支那文藝思潮　青木正兒
支那社會思潮　松井等
神道思想　宮地直一
日本文藝思潮　岡崎義惠
日本社會思潮　西田直二郎
現代思潮　三木清
現代經濟思潮　小泉信三
現代政治思潮　吉野作造
現代法律思潮　田中耕太郎
現代社會思潮　長谷川如是閑
現代教育思潮　長田新
現代道德思潮　高橋穰
現代文藝思潮　茅野蕭々
現代美術思潮　兒島喜久雄
現代科學思潮　阿部良夫
現代哲學思潮　伊藤吉之助
現代宗教思潮　野々村直太郎

思想家

ヴイダ　[illegible]
老子　武内義雄
孔子　[illegible]
ソクラテス　出隆
墨子　[illegible]
荀子　[illegible]
孟子　[illegible]
莊子　[illegible]
プラトン　[illegible]
アリストテレス　[illegible]
イエス　山谷省吾
パウロ　波多野精一
龍樹　宇井伯壽
世親　宇井伯壽
プロチノス　久松眞一
アウグスチヌス　河野與一
聖徳太子　辻善之助
智顗　佐藤泰舜
法藏　[illegible]
最澄　花山信勝
空海　[illegible]
法然　矢吹慶輝
親鸞　金子大榮
榮西　[illegible]
道元　衛藤即應
日蓮　姉崎正治
トマス・アキナス　岩下壯一
ダンテ　阿部次郎
レオナルド　兒島喜久雄
マキャヴェルリ　羽仁五郎
ルーテル　[illegible]
カルヴィン　高倉徳太郎
朱子　本田成之
王陽明　三宅雪嶺
ブルノ　安倍能成

傾向と運動

ガリレイ　石原純
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
デカルト　[illegible]
中江藤樹　西晋一郎
熊澤蕃山　[illegible]
スピノザ　安倍能成
松尾芭蕉　小宮豊隆
新井白石　羽仁五郎
荻生徂徠　[illegible]
モンテスキュー　宮本[illegible]
ルソー　平林初之輔
スミス　大内兵衛
カント　桑木嚴翼
フィヒテ　[illegible]
ペスタロッチ　長田新
ゲーテ　[illegible]
シュライエルマッヘル　石原謙
ヘーゲル　小山[illegible]
賀茂眞淵　村岡典嗣
本居宣長　[illegible]
コント　[illegible]
ダーウィン　小泉[illegible]
ニイチェ　[illegible]
マルクス　大[illegible]
レーニン　山田[illegible]
安藤昌益　狩野亨吉

猶太教の宗教運動　高倉徳太郎
ギリシャ啓蒙運動　野上豐一郎
波斯思想　松本[illegible]
回教思想　赤松智城

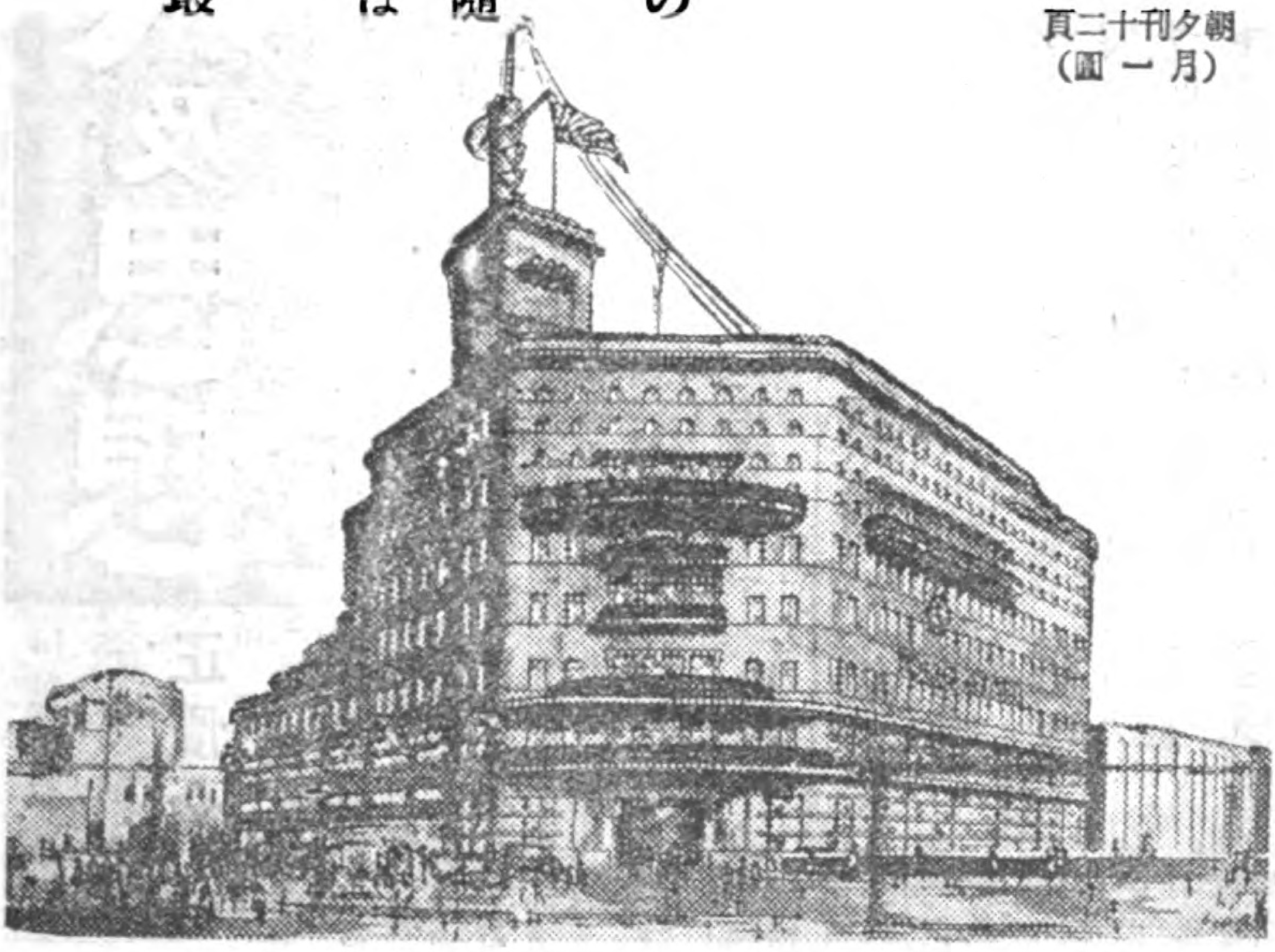
[illegible]
近代藝術論　矢代幸雄
基督教經濟思想　[illegible]
ユートピア思想　[illegible]
[illegible]哲學思想　[illegible]
社會經濟思想　[illegible]
近世進化思想　小泉丹
社會學上より見たる平等思想　高田保馬
無政府主義　森戸辰男
マルキシズム　櫛田民藏
日本宗教運動　[illegible]
日本キリシタン運動　太田正雄
日本人道主義　竹岡勝也
日本精神　紀平正美
佛教社會思想　渡邊海旭
印度現代思想運動　大川周明
現代イギリス政治運動　大内兵衛
現代法律思想　末川博

菊判假綴。九ポイント組。毎冊四百頁以上。全十二冊。
昭和三年一月より十二月迄毎月一冊宛發行。會員以外に頒たず。
本會に申込順。入會金不要。端書にて申込まれたし。但し豫定部數に達する時は期日内と雖も〆切ることあるべし。
會費　毎月拂　一圓二十錢
　　　二回拂　六圓八十錢
　　　一時拂　十三圓
送料　毎冊　市内六錢　地方十二錢
〆切期日　昭和三年一月十日

即時端書にて申込まれたし

（入會金不要）

東京神田南神保町
振替東京二六二四〇番
岩波書店



半峯學人 高田早苗著

半峯昔ばなし

四六判七三〇頁 總布函入美裝

定價參圓 郵稅拾六錢

新たに重版

昔は**政界の花形**として天下に著聞し、今は**大學の老總長**として萬餘の學生が景仰の標的となれる著者が、六十年の過去を回顧し**無遠慮**に其經歷と所感とを述べ、平生**熱愛**した早稻田學園の創立四十五年祝典を期として特に世間に發表したもの則ち本書である。著者の性格は**多趣**、其觀察は**明敏**、其語る所の時代は、明治初年に始り憲政布かれ議會開かれし當時より、日清・日露の戰役・世界大戰に及び、範圍は歐米・支那に渉り、政治・敎育・文學・美術・演劇に關し、大隈侯・伊藤公・星亨・市川團十郎・橋本雅邦・尾崎紅葉等明治年間の**人豪篇中に活躍**する。大體に於て**挿話的**であるのは、反つて讀者の興味を深くし、敎訓に資する所が多い。而も書中所々に、著者の友人坪內**逍遙**・市島**春城**二氏各其所感を挿入したのは一段の生彩を加へてゐる。

▼**コロタイプ口繪及オフセット別刷挿畫二十七枚**

（**內容の一部**）

▼大隈侯に初御目見得▼網の中から演說▼文豪紅葉君の臨終▼名人團十郎の面影▼私の遭難▲私立大學の計畫▼ラフカヂオ・ハーン▼早稻田の今昔▼逍遙君の「書生氣質」▼讀賣新聞の由來▼憲法發布と絹布の半被▼議場發言の一番槍▼辯論の雄尾崎君▼大隈伯の知遇犬養毅君▼袁世凱と語る▼劍橋・牛津大學▼島村抱月と松井須磨子▼實用的人物の養成

（其他三百數十項）

東京牛込 早稻田大學出版部發行

振替 東京一一二三 大阪六八九〇〇

腦溢血！

動脈硬化症 治療及豫防劑

アニマザ

幼若動物の血管內膜及中膜の成分



貴重なる壯年者の生命……

を突如として奪取する腦溢血は實に壯年者及び初老者恐怖の中心となれるが何等の豫告なく突發するにあらず、血管の早老硬化に因る高血壓てふ危險信號を無視せる必然の結果なり

一の豫防は百の治療……

に優る、これに對しアニマザの有効なる事は最近多數の興味ある臨床報告幷びに批判の結果確定的となれり、卽ち血壓を低位に保ち頭重、眩暈、不眠、耳鳴、呼吸促迫等の自覺症狀を輕快し

血管に若返り現象を與ふ……

早老及び老衰に伴ふ生理的不快現象が■■するが故に精神的並びに肉體的に活動力を恢復し、生活上の愉悅を招來す、■用簡便、何等の有害作用なし

「高血壓の治療及豫防に就て」と題する小冊子御申込次第進呈す

獨逸オスナブルク臟器治療藥會社

總代理店 東京日本橋本町 [illegible]田逵元三郎商店

三〇錠……二圓四十錢
一〇〇錠……六圓八十錢
錠劑…二五瓦入[illegible] [illegible]六圓[illegible]
[illegible]藥店にあり

▼説苑

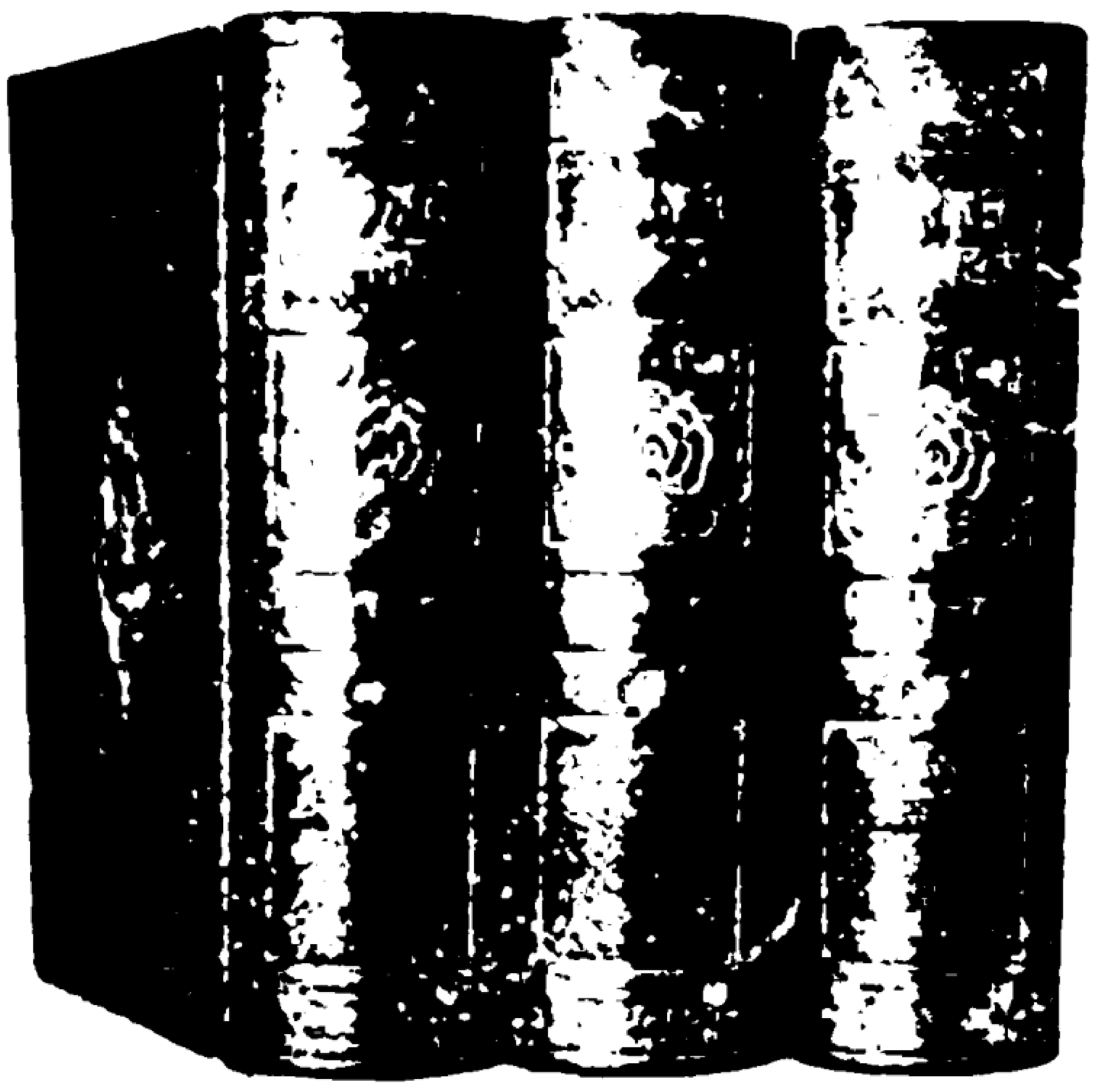
日本家庭大百科事彙

百科辭典は質・量共に群籍の上に卓出する出版界の帝王者、萬有知識の寶庫、最も廣い範圍の社會の爲に、自由簡易に開かれた一大民衆的殿堂であつて、正に學校教育の國民的延長ともいふべく、所謂大學普及事業や成人教育は、何人も座右に一部の百科辭典を備へることによつて校堂も教壇も、講座も講師もなしに、いかなる所でも容易に、完全にこれを受けることが出來る。遂にこれ以上徹底した社會教育はない。今や二十世紀に入つて二十七年、一切の事純然たる新世紀的の眉目を備へ來り、萬有知識の大改造時代に際してゐる。この時に當り家庭といはず、社會といはず、新しき生活に適應する新しき萬有知識を滿載し、時代の全相を摑んで一部の書中に縮圖した大百科辭典の表現は、現代文化を大成せしむる最も意味深き收穫でなくてはならぬ。幸ひにして我國百科辭典事業の先驅者たる斯界を擔ふ冨山房が、更により大に、より完い百科辭典の完成によつて、昭和出版界の劈頭に第二の大辭典時代を導くことはその當然にして且光輝ある責任であると信じる。即ち十箇年繼續事業として、冨山房百科辭典編纂部を特設し、この第一期事業として二百五十余名の各專門の學者、技藝家、精通者と、十余名の專門編輯者とが、協力一致、桔据五年、全力をあげて、ここに「**日本家庭大百科事彙**」の編纂を完成し、**第一卷刊行と共にこれが民衆化、普及化を徹底するため、豫約特價提供を斷行する。詳細は内容見本の御覧を乞ふ。**

◆體　裁◆

全三卷（三千二百余頁）
装釘背及角革竪八寸横五寸三分（國際的百科辭典版）金文字入最上製本、函入
着色版三百余面、
本文挿畫約五千箇

二百五十名家執筆



内容見本　無代進呈

體裁・内容ともに出版界に一新例を開きたる三十二頁の見本はハガキにて御申込次第進呈
「百頁大見本」は全國各書店にあり、御立寄御覧を乞ふ

豫約略規

定價　金三十圓（各卷十圓）
特價（十萬部限り）
甲　金二十二圓五十錢（三回拂）
乙　金二十二圓五十錢（六回拂）
丙　金二十四圓（十二回拂）
申込金一圓（甲・乙・丙共）
最終御拂込に充當

東京神田　**冨山房**　振替東京五〇一番



高嶽霽雪

平福百穂筆

野間五造著

立法一元論

貴族院無用論

全二冊

菊判箱入
頗美裝
上卷四百頁
下卷六百頁

定價
上卷金貳圓五拾錢
下卷金參圓五拾錢
（送料各金廿七錢）

上卷六版　下卷新刊

今や貴族院問題は漸く天下の視聴を集めつゝあるが、其の過程は如何、其の展開と歸趨とは如何、本書は嚴正なる政治哲學の立場から我國の貴族院問題を扱つたもので近來の一大文献を以て、目せらる る、上卷には一院制の正當なるを高唱し、次で院制史、貴族院の構成、兩院の衝突史等を說き、我國に於ける上院が如何に無用有害の長物たるかを論證した。下卷に於ては階級制度を論じ、横暴史實を剔抉し、世襲制度の弊を說き、眞向より憲法改正の大鐵槌を振下して、貴院の癈止、樞府の根本改造を縱横力說した。殊に其の資料は數年の苦心に依り官延宮中までも蒐集し、一々氏名を擧げて論難する等、著者半生の苦心は全く本書に結晶されて居る。嚴密なる考證、辛辣なる批判と相俟つて、實に近來の一大快著、一面貴族院問題辭典である。社會學徒、政治研究家必讀の書は之れ！

內容

上卷―院制の歷史―院制の種別―貴族院の構成―院制の理論―貴族果して優秀か―賢良政治―兩院の衝突―英國上院衰亡外史―十四章三六八頁

下卷―階級觀念と上院―日本現代の階級は如何にして發生したか―貴族院横暴史、世襲制度の不合理―貴族院改革諸案の矛盾―憲法改正―直接立法等六百頁

天下の視聴本書に集まる!!!

新聞雜誌を始め二百有餘の本書に對する批評集を近日出版する豫定

東京神田美土代町二の一
白揚社
振替東京二五四〇〇番
電話神田二二八五番

文學博士 井上通泰先生著

全八卷五千六百餘頁の提供

豫約募集

萬葉集新考

略規

▲申込金四圓 ▲毎月會員より[illegible]

[illegible]分[illegible]全[illegible]

▲刊行一時拂全部前納割(申込金不要) ▲外に送料を要す

▲三月より毎月一冊宛刊行八ヶ月完了

體裁

▲全八卷菊判天金總布裝紙口繪コロタイプ挿入總革本每卷紙數七百餘頁。

▲日本の古意を知らうとする者は必ず「萬葉集」を精讀せよと加茂眞淵は力說した。日本民族の傳統精神を其本に溯つて適切に味解せしめるものは實に「萬葉集」の歌である。

▲萬葉學者として現代の第一人者たる井上通泰先生が十九年間の精力を傾注せられ、玆に「萬葉集新考」の大著が完成したのは、學者、思想家、教育者、神道家、歌人、古典研究者、一般愛書家等の爲めに、雲散じて麗日の光に接するものと推稱したい。

▲「萬葉集新考」を讀む時、今や「萬葉集」は決して難解の書で無く、我我現代人に取つて、最も親しみ易きものとなつた。祖先の血が我我の溫き血であるが如く、祖先の剛健壯麗なる思想趣味が我我の心に復活し漲騰するのである。

▲井上先生に由つて前人未發の創見を加へらるる所無慮、玆に「萬葉學」は驚くべき長大の飛躍を爲した。現代の著書中、能く千古の秘を啓いて、學界永久の準據、昭和新代の記念塔たる大著は正に此の「萬葉集新考」である。

▲内容見本 申越次第進呈

▲豫約申込 一月三十一日限

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

電話[illegible]七八三●二一八八●三六八六番

振替口座東京五二二九八番

國民圖書株式會社

婦人

公論

新年特輯號

ラヴ・シーンの感想……十六俳優氏

（歌）冬日……茅野雅子

（詩）敵手……西條八十

共產黨革命十年祭……永井荷助

厄年について……富士川游

土に癒ゆる……德田秋聲

系圖……宇野千代

第七の天……牧逸馬

顯現……谷崎潤一郎

憂鬱な愛人……松岡讓

中央公論社 定價七十錢 郵稅二錢

早慶野球戰を見る……尾上菊五郎

（抒突畫）戀の一杯賣……藤本斥夫

女流名選手の搖籃……春日俊吉

スキー場の戀……高嶺雪子

蘆花が不如歸を書いた頃……德富愛子

新春の流行批判……婦人記者

ビーズの織物の作り方……安藤佐久子

化粧に大切な水の良否……婦人記者

斷髮の切り方と手入れ法……田中雅子

手と指の化粧法……早見君子

家庭向のフランス料理……東佐與子

溫くて手輕な鍋料理……村井多嘉子

全國の名物雜煮……

（童話）ユキウサギ……大原澄子

小話

笑ふ話

編輯室から

ムーヴイセクション （一）デパート娘大學 （二）フラフラ姬

戀愛賣買史論……白柳秀湖

再版

駒澤大學學長
文學博士 忽滑谷快天著

禪學思想史

▼上下二巻菊判總布
▼紙數壹千六百五十頁

上巻六圓五拾錢
下巻六圓五拾錢

郵税内地二十七錢
外六十五錢

禪家に未だ曾つて思想史あらず。本書を以て嚆矢とす。著者の博士論文は實に本書の一部分である。

十三版

獨逸 ヘッケル博士著
文學士 栗原古城譯

宇宙の謎

◆四六判總布 定價參圓 郵税十二錢

著者は、近代獨逸に於ける科學界の最大大家で、專攻の生物學に於ては世界第一の泰斗と仰がるゝ人。原書は發賣後本國にて**數十萬部**、英譯のみにて**十四萬部**を賣盡したといふ程の世界的名著である、譯筆の明快は云ふまでもない。

八版

英國 ラスキン著
文學士 栗原古城譯

胡麻と百合

▼四六判總布 定價貳圓 郵税十錢

本書は美術批評に關する以外のラスキンの著述中で最も有名で又一番弘く讀まれた書物である。原文又**「王者の寶庫と女王の花園」**と云ふ。王者の寶庫は讀書論で、女王の花園は婦人論である。孰れも修養書の白眉と云はる。

再版

石龍子著

形貌學講義

▼圖面二枚入

▼四六判總布 定價貳圓五拾錢。郵税十二錢

これ博覽達識、學東西を兼ぬる當代觀相家の第一人者石龍子先生が多年の蘊蓄を傾盡せるもの。叙述平**明何人にも解し易く**、人の顔面、**手相**、或は**皮膚色**等に由りて心理、心術、**生涯の運命**等を知り得る術を説明せるもの。著者の所謂**「人生行路の一大羅針」**として萬人必讀の珍書。

東京市本郷西片町

玄黄社

電話小石川一三九番
振替東京七九九五番

昭和戊辰の歳を迎へて

——（卷　頭　言）——

昭和戊辰の新春を迎へんとして明治維新の大業を回想し更に新なる意氣を以て國運の飛躍的發展を圖らんとするの叫びがチラホラと聞える。無事に六十年を過ごしたと云ふことも一つの祝賀に値しない、日月百事歩を進め西洋諸國と伍して耻しからぬ發達を遂げたことは偕に大白を擧げて之を祝福するに値する。併し國家の前途は永い、六十年は一瞬にひとしく、今日の隆運は必しも明日の繁榮を保證せぬ。油斷は大敵のもと、吾人は寧ろ所謂還暦の此機會に於て維新當時の先輩に倣ひ緊褌一番更に大に勇を鼓して幾多の改革に猛進するの必要を認める。徒らに過去の業績に安ずるは眞に世を憂ふるものゝ爲す所ではない。

然らば今日の所謂識者階級に眞にこの必要なる改革を敢行するの勇ありやと云ふに之れ頗る覺束なかるべきは亦識者諸君の容易に首肯さるる所であらう。此意味に於て今日此際王政維新の昔を回想しここに華々しく活躍した先人の徳を追慕するは強ち無用の業ではない。たゞ之等先哲の如何なる行事が今日吾人の最も留意して學ぶべき所なりやを見定めることが大事である。過去を語つて今日に活かすの用意を以て我々は六十年の昔に何等かの教訓を探りたいものだと思ふ。

過去の追憶は動もすれば甘い陶醉に陷り易い。陶醉は時として安逸を誘ひ勇氣を奪ふ。六十年はお目出度い、併し今日はお目出度いとて國民に渾然たる陶醉を許すべき時勢ではない。故にこの際自ら過去を語るの已むを得ずとせば、少くとも二つの方面に於て次の如き效果を有たしめなければならぬと考へる。一は老成勳勞の先輩をして往年の辛惨に反省せしめ今日の安逸に慨ちて當年の意氣に復らしむることであり、二は少壯客氣の青年をして漸く複雑なる混亂裡の人たらしめ何か夫の紛擾から生命を正しく導いた素因であつたかを合點せしめることとである。強て青年の勇躍を制止せんとするのではない、又故らに先輩の功勞を沒却せんとするのでもない。先輩には今日の青年の改革の意氣を諒として貰ひ、青年には只猪突過進だけで事功の擧るものでないことを呑み込んで貰へばいゝ。

明治維新を回顧して戊辰の再來を祝するは、右の意味に於てのみ現代に一つの使命をもつ。單なる懷古趣味の閑事業に終らしめてはならない。

中央公論



稀有難遭の時代

第四十三年第一號
新年特別號
第四百八十號

河上　肇

量から質への轉化、委しくいへば、單なる分量上の變化が、ある點に達すると、品質上の差異に變るといふことは、ヘーゲルがその論理學において發見した法則である。吾々は差し當り、エンゲルスに倣ひ、その最もよく一般に知られてゐる例證の一つとして、水の凝集狀態の變化を擧げることが出來る。『水は、通常の氣壓のもとでは、攝氏零度で液體から固體になり攝氏百度で液體から氣體になる。』この場合には、單なる分量の變化が、ある點に達すると、突然、品質上の差異に變るのである。例へば零度以上の水に段々熱を加へてゆくといふのは、單なる分量上の變化である。そして斯る熱量

の變化にも拘らず、ある程度までは水は依然として液體である。しかるに、若かる熱量が漸々に與へられて、遂に攝氏百度に達するや、液體たりし水は、突然に變化して氣體となる。これは極めて突然である。何故なれば、攝氏百度以下九十九度に達するまでは、三十度でも、五十度でも、七十度でも、九十度でも、乃至九十九度でも、水は依然として液體の形態を維持してゐるのに、最後のところで僅かに一度だけ熱量を增加すると、それは突然に變化して氣體となるのであるから。吾々は、かゝる事例をば、自然および社會に關して、無數に列擧することが出來る。現にマルクスは彼の本論のところ〳〵において、これが例證を指摘してゐる。しかし私は今、誰でもが知つてゐる今一つの例證を擧げるに止めるであらう。吾々が病氣の時に用うる藥は、その分量上の規定が非常に嚴密なものであるといふことは、誰でもが知つてゐる。殊に謂ゆる劇藥においてさうである。それは何故か？ すべての藥物は——殊に劇藥は——その分量がある程度を越すと、全く正反對の毒物に變化するからである。單なる分量上の變化のために、起死回生の藥が、忽ちその品質を變化して、人を殺すための毒となるからである。

さて以上述べたるが如き量から質への轉化が、私の見るところによれば、人類の歷史において曾て見たることなき大なる規模をもつて、今や將に吾々の生産關係の上に實現されんとしてゐる。

私はこのことを明かにするために、先づ人類の歷史を大觀してみよう。學者のいふところによれば、人間が始めて地球上に現はれたのは千數百萬年前のことであるといふが、その時人間は如何にして人間となりえたか？それは後脚で直立するといふこと、すなはち前脚を手とするといふことに、よつてである。犬、猫、牛、馬、彼等はみな四本の脚で步いて居り、手を有つてゐない。それが先づ人間とけだものとの相違として現はれる。このことのために、地球上では人間のみが道具を作りうる動物となつた。フランクリンが言つたやうに、人間は道具を造る動物なのである。

人間の勞働の生産力が他の動物と比較すべからざる程度の發展を遂げえたのは、人間が彼れ自身の勞働の生産物たる勞働手段すなはち道具をば、勞働の對象たる自然と、勞働者たる彼れ自身との間にさしはさみ、彼が自然に向つて働きかける場合に、彼れ自身の生産物を媒介とするに至つたからである。もし此の媒介物としての道具がなかつたならば、例へば釘抜きがなかつたならば、吾々は一本の釘をも抜き取ることが出來ない。ただの赤手空拳では、この家を造ることも出來ず、この机を造ることも出來ず、着物を織ることも出來ず、ひげを剃ることも、頭髪をかることも出來ず、紙も筆も墨も造ることが出來ず、從つて「資本論」も出來ず「マルクス主義講座」も出來ず、かくて人類文化の土臺は一切地を掃ふことになるであらう。

人間が自ら道具を造り、その道具を手に握つて働くやうになると、人間の手に今までなかつた種々新たなる機械が賦與され、また今までの機能は各般の方面に亘つて、或は強められ、或は細かくなり、或は遠くの方まで屆くやうになる。つまり人間は道具を造り、これを手に握ることによつて、自分の持つて生まれた手を、いろ／＼な形において伸き延ばし、これを千變萬化さすことが出來るやうになつたのである。鋸を手に持つたならば、それで人間の手は鋸の働きをする。手の長さが鋸だけ延び、その一端はギザ／＼をもつた刄金になる。人間はそれで大きな木を切り倒すことが出來る。鎗を手に持てば、手が槍の長さだけ延び、その尖端は、人間の爪とは比較にならぬ鋭い刄物になる。人間はそれで虎を刺し殺すことが出來る。或時は自分の手を釣針の形にして水の中へ延ばし、それで魚を釣り、或時は縫針にして着物を縫ふのである。

そこで、人間以前の動物の進化の歴史は、いろ／＼な地層から掘り出される遺骨によつて判斷されるが、人間の進化の歴史は道具の遺跡によつて判斷される、といふことになつたのである。人間の手そのものはもとのまゝであつても、道具さへ發達すれば、人間の手が大きくなつたり、強くなつたり、長くなつたり、したのと同じことだからである。マルクス

が「資本論」において、「何が造られたかではなく、如何にして、如何なる勞働手段をもつて造られたかが、經濟上の諸エポックを區別する。云々」と言つてゐるのも、そのためである。

ところで、人間の進化の歴史が、斯様にしてその生理的器官の發達に適應する代りに、人間自身の造り出す道具の發達に適應するやうになつた、といふことは、つまり、人間が自分自身の進化の原動力を何程か自分の支配のもとに取り入れた、といふことを、意味するのであり、そして斯様な動物が始めて現はれたといふことは、地球上における生物の歴史において、實に一大エポックをなしたものである。それが今から振りかへつて見ると、ほゞ千數百萬年前――千數百年前ではなく、その一萬倍の、千數百萬年前のことである。

さて、一たび人間がこの地球上に現はれてこのかた、道具の發達は徐々に行はれ、それにつれて勞働の生產力もまた徐々に發達し、そしてその勞働の生產力の發達につれ、人間同志の生產關係――社會關係――もまた、様々な變化を閲して來た。人間は自然に働きかけることにより、自然を變革すると同時に、また彼れ自身を變革する。全體としての人間の生活が、その一面としての外界または自然に對する關係において、生產力の發展となつて現はれれば、それは同時に、人間の生活の他の一面としての、社會の内部における人間と人間との關係において、生產關係――社會關係――の變化となつて現はれるのである。だからマルクスは、『資本論』において、「勞働手段は、たゞに人間勞働力の發展の度を測る物差になるばかりでなく、人間が勞働するために取り結ぶところの、社會關係を指し示すものとなる」と言つてゐるのである。生產關係は生產力に適應するのである。この二つのもの――生產力と生產關係とは、從來すべての人間の歴史における辨證法的發展にとつての、根本的契機である。

以上述べ來つたことを頭の中において、吾々が今、吾々自身の現に住みつゝある現代社會を視ると、吾々は、今の時代

が實に稀有難遭の時代であることを意識せざるを得ない。

私は先づ、第十八世紀以降における機械の發明および發達について一言せねばならぬ。私は先きに、道具の發明によつて、人間は始めて人間となり得たことを述べた。しかしその道具を操縦するのは、やはり不完全な人間の手をもつてするの外はなかつた。そこで、例へば一人の人の手で、同時に何十もの道具を取扱ふことは、不可能であつた。さういふ狀態が、實に千數百萬年も經續されたのである。ところが第十八世紀の末になつて、機械が發明された。機械の特徴は、それが道具の道具であるといふ點にある。それは道具を操縦するための機械的裝置である。そこで、人間の勞働力は、自然に働きかけるに當つて、二重の媒介を經ることになつた。最初道具の發明により、自然と人間との間に、道具が介在することになつたが、今や機械の發明により、更に道具と人間との間に、或る機械的裝置が介在することになつた。そのことのために、人間は不完全な手で直接に道具を取扱ふことの不便から免れた。

私はその一例として、最も小さな機械の一たるミシンをとつて見やう。シンガア・ミシンのキヤパシテイーは、一分間に九千針を縫ひ得るのであり、一秒間にほゞ百五十針の割合になるが、此の如く針を迅速に且つ正確に使用することは、人間が直接に手をもつて取扱ふかぎり、到底不可能なことである。ところが機械の主たる効用は、かゝる方面よりも、むしろ人間をして澤山の道具を同時に操縦せしむる方面に存する。機械は、言はゞ人間の手をたゞ二本でなしに、十本にも百本にもしたのと、同じ効果を齎らしたものである。これを第十八世紀末において機械發明の先驅となつた紡績機械について見るのに、アークライトの發明した機械は最初一つの機械に四個の紡錘が裝置されて居り、ハーグリーヴスの發明した機械には、一つの機械に八個の紡錘が裝置されてゐたのであるが、かゝる裝置のために、一人の人間が同時に四個乃至八個の紡錘を利用することが出來るやうになつたのである。そして、その後における紡績機械の改良は、主として、同一の

機械内に集積される部分數の増加といふことになつたのか。このためには[illegible]いやうな大きなものになり、從つて機械を動かすための機械が發明され、機械と人間との中に更に機械が介在するやうになり、かくて今日の工場にあつては、様々な機械が有機的連絡のもとに統一されて、一大機械を構成するやうになつた。今日紡績工場の最小限の規模が、一萬錘となつてゐるのも、そのためである。エキソースト・オプナマといふ機械一臺をフル・キャパシティーで利用するためには、種々なる機械の連絡から、一萬錘の工場であることを必要とするのである。私が小供の頃は、私の郷里ではまだ昔ながらの紡車を使用してゐたが、この昔から傳つた道具によると、紡錘一個が一單位であり、これを利用するために、一人の人を必要としたのである。しかるに今日では、一萬錘を利用する機械が一單位になつてをる。數年前における——最近の數字はちよと見付からなかつた——鐘淵紡績會社の状態を見ると、あらゆる種類の使用人員が合計約三萬であるが、紡錘數は約六十萬であり、外に七千臺あまりの機械がある。機械の發明のために、一人の人間が同時に澤山の道具を利用しうるやうになつたといふことは、この具體的な數字が示す如くである。

かゝる事情のため、人間の勞働の生産力が非常な勢をもつて増加したことは、言ふまでもない。多くの人が知つてゐるやうに、アダム・スミスは、一七七六年——約百六十年前——に公にした彼れの『國富論』の中で、ピンの製造に關し彼れの實見した或る工場の例を擧げてゐるが、彼れの言ふところによれば、そこでは分業のために、一人の職工が平均一日に四千八百本のピンを生産することになつてをり、これを分業の行はれざる場合に比すれば、勞働の生産力は約二百四十倍に増加してゐるのである。ところが、これより約九十年後——今から計算すれば約六十年前——に著されたマルクスの『資本論』を見ると、これには次の如く述べてある。今日では一個の機械が一日十一時間のうちに、十四萬五千本のピンを生産するが、しかも一人の女工は、かかる機械をば平均四臺づつ受持つてゐるから、つまり一人の女工が一日に約六十

萬本のピンを生産する割合であると。これをスミスの引用した職工の生産高に比すれば、約百三十倍である。しかるにそれより更に三十年あまり後になつて、今世紀の初めに公にされたセリグマンの原論を見ると、一人の職工が平均一日に生産するピンは、約千五百萬本としてある。すなはちマルクスの擧げた例よりも、更に二十五倍の增加をしてゐるのである。スミスの見たものは、從前の二百四十倍、マルクスの見たものは、更にそれの百三十倍、今世紀の初めにおいては更にまたその二十五倍、此の如きは速度をもつて、吾々の生産力は激增しつつあるのである。

同じやうな進歩は、交通機關の方面にも行はれてゐる。私の祖母は先年九十六歳で永眠したが、この激變の時代に約一世紀間も生きてゐると、實に百萬世紀の間に行はれた變化よりも、より大なる變化をコンデンスして一生涯のうちに眼で見ることが出來る。祖母の生まれた時はもちろん、嫁入した時も、まだ封建時代であつた。當時津輕から薩摩まで馬上の急使をもつてしても、二十三日乃至三十日かゝつた。しかるに今日では、電信電話の便があり、僅かな時間のうちに、東西數百里を距てて語り合ふことが出來る。しかも、これ一に、機械の發明のおかげである。維新前における旅行機關といへば、海では和船、陸では籠であつたが、私の祖母は、長命したお蔭で、汽船にも乘れば、汽車、電車にも乘り、死ぬる前には飛行機で人間が空を飛ぶのをさへ見ることが出來た。籠での旅行と、汽車での旅行とでは、時間の節約から言つても、とてもひかくにならぬが、此の如き激變的進歩は、また全く機械の發明に負ふのである。人間から道具を取り去つたならば、犬や猫と同じやうになると同樣に、近代人から機械を取り去つたならば、彼等の生活は封建時代と同樣になるであらう。機械こそは、近代文明の母である。

ところで機械の發明の結果、人間の勞働の生産力が此の如き恐ろしき程度の急速さをもつて發展するといふことは、必然的に吾々人間同志の社會關係に影響を及ぼさずにはおかない。

「勞働手段は、ただに人間の勞働力の發展の度を測る物差になるばかりでなく、人間が勞働するために取り結ぶところの、社會關係を指し示すものとなる」――といふマルクスの言葉は、すでに先程引用したところである。勞働手段が道具から機械に發展してくれば、これにつれて人間が自然を征服する力――すなはち人間の勞働の生産力が發展するばかりでなく、人間社會の内部における人と人との關係がまた變化して來なければならぬ。

しからば、どういふ變化が社會關係の上に、今日現に起りつゝあるか？

一言にして蔽へば、對資本家階級の關係において、勞働者階級の生活が、相對的には年一年みじめになる、といふことである。

これは、今の社會組織のもとでは、必然的の結果である。何故といふに、マルクスが「資本論」で委しく展開してゐるやうに、商品の價値はこれを生産するために必要とされる勞働の分量によつて規定される。しかるに、勞働の生産力の發達は、とりも直さず、益々より僅かな分量の勞働で一定の商品が生産されるといふことを意味するのであるから、諸商品の價値は、今や非常なる勢をもつて年々減少しつゝあるのである。もちろん貨幣材料たる金の價値が、更に甚しき程度をもつて減少しつゝあるがゆゑに、諸商品の價値を金で測つたもの、すなはち價格は、必ずしも下落しはしない。しかし價値と價格とを區別しなければならぬことは、言ふまでもない。斯樣なわけで諸商品の價値は、非常なる速度をもつて年々減少しつゝあるのであるが、今、勞働者階級の賣りうる唯一の商品は、彼れの勞働力である。そして、この勞働力といふ商品も、――今委しい理由に立ち入るわけには行かぬが、――他の諸商品と同じやうに、その價値は年一年減少しつゝあるのである。ところで、勞働者階級が社會の總生産物に對する分前を請求する權利は、彼れが彼れの勞働力を賣つて得た勞賃の高に限られてをり、そしてその勞賃の高は勞働力といふ商品の價値に依存してゐるのである。して見れば、勞働者

階級の生活が、現在の社會組織にして維持されるかぎり、相對的には年一年みじめにならざるを得ないといふことが、火を睹るよりも明かである。

簡單にいへば、生産力の發展につれて、生産關係が――勞働者階級と資本家階級との關係が――段々に變化し、資本家階級は益々富んでゆくに反し、勞働者階級は資本家階級に對する相對的の關係においては、益々みじめになり、かくて貧富の懸隔は年一年甚しくなるのである。勞働者階級の生活が多少は改善されたとしても、大資本家の富が增加する速度に比べたら、比較にならぬ。しかも斯かる事態の根本原因は生産力の發展にあるのであり、そして、その生産力は、前に述ぶる如く、今日非常な勢をもつて發展しつゝあるのだから、資本家階級が益々富むことと、勞働者階級が比較的には益々貧乏になることと、このことは今日非常なる速度をもつて、現に吾々の眼前に實現されつゝあるのである。

しかし、かゝる變化は、現在の社會組織が維持されるかぎり、言ひ換へれば、それが現在の社會組織のもとで實現されるかぎり、その年々に起る變化は、單なる量的變化である。しかし××量的變化が、次第に集積されて或る程度に達すると、突然、質的變化に變ることがないと、誰が斷言しうるであらうか？　水は攝氏九十九度の溫度までは液體であるが、百度の溫度に達すると、突如として氣體に××するのである。

私は先きに、道具の發明によつて、始めて此の地球上に人間の歴史の第一頁が開かれた、といふことを述べ、且つそれによつて、人間は自分自身の進化の原動力を何程か自分の支配のもとに取り入れた、といふことを述べたが、今や千數百萬年に亘る進化が累積され來つた結果として、人間は遂に機械を發明したのである。このことは、人間の歴史の上に、必ずや第二の紀元を劃するものとなるに相違ない。そしてこれと共に、人間は自分自身の進化の原動力を、今度は十分に、自分の支配のもとにおきうるに至るであらう。

かくてマルクスの言ふ如く、人類の前史は終りを告げ、眞の人類の歴史の

第一頁が開かるゝに至るであらう。かくて様々なものが——例へば階級が、従つて階級鬪爭がなくなつても——人間の歴史から姿を消すに至るであらう。『すべて從來の歴史は階級鬪爭の歴史である』といふことは、文字通り從來の歴史に限定されるに至るであらう。マルクス自身がいつてゐるやうに、生産力と生産關係との鬪爭としてでなしに、言ひ換へれば、人間相互の鬪爭のための精力浪費の歴史としてでなしに、生産關係を人間自身の意識的統制のもとに齎らすことにより、自由意志に基づく人間の協力によつて行はるゝところの、自然の征服の歴史に轉化し、かくして將來は、自然と人間との直接の對立をば、歴史にとつての辨證法的契機となすに至るであらう。

吾々は既に、生産力の方面において、何人もが曾て夢想だもせざりしところの、且つ過去千數百萬年の歴史において一度もその先例を見ることなき程度の、驚くべき發展を實現し、且つ實現しつゝある。しからば生産關係——社會關係——の方面においてもまた、曾ては何人もが夢想せざりしところの、且つ過去千數百萬年の歴史においては一度もその先例を見たることなき程度の、一大變革が齎らさるゝであらう。それは地上を創つてゐた人間が、空を飛ぶに至るよりも、更により大なる變革であるであらう。そして、生産力の發展のため年一年窮地におしつけられつゝある無産階級は、必然的に、かかる大變革の擔當者となるであらう。今や吾々は、この無産階級が斯かる歴史的使命を自覺せんとしつゝある時代に際會してゐる。水の溫度は××八十度乃至九十度××××××××××。東の××××××××××ゐる。××××××××××××××。（このところにて警官により中止を命ぜられたるをもつて以下すべて省略す）。

右は東京青山會館における『マルクス主義講座』のための講演手控である。當日私が講演の目的としたところは、一千にあまる聽衆を相手に——しかも其等の聽衆のうちにはマルクス主義に對して何等の智識をも有せざる人々の多かるべきことを顧慮に入れつゝ——聊も感情に訴ふることなしに理論を說かんとするに在りたるがゆゑに、講演の內容はおのづから極めて大さ

つぱな見通し論に限られたのであり、今更これを雜誌に公にすべきものではないけれども、——殊に講演は途中にて中止を命ぜられ、佛を作つて魂を入れず、龍を畫いて睛を點ぜざるまゝのものであるけれども、——『公論』に對する寄稿の約束、容易に果しがたきがゆゑに、しばらく之をもつて責を塞ぐ。また他日をもつて讀者にそむくの罪を償ふの日あるべし。

昭和二年十二月一日追記

人間だけは別か

丘淺次郎

一

昔は宇宙を天と地と人から成るものと心得て、之を三才と名づけ、天地間の有らゆる物を繪に書いた書物に三才圖會といふ名を附けた。その頃には人間を天や地と對等の位にあるものと思ふて居た故人間は生物の一種であるといふ考へなどは毛頭なかつた。その後段々と實物の研究が進んで、人間も身體の構造からいふと哺乳動物に屬することが疑へなくなつても、尚、人間だけは他の獸類とは成るべく離して置きたかつたと見えて、初めは、人間だけを二手類と名づけ、猿類には別に四手類といふ名を附けて、その間に境を設けた。然るに解剖學や發生學の知識が增すに隨ひ、この區別にも何らの根據がないことが明になり、今日では人間は全く猿類と同じ仲間と見做され、たゞ猿類といふ代りに靈長類といふ名稱を用ひて、自ら慰めて居るに至つた。斯様に決するまでには、相當の年月を要したが、その間の變形の跡を辿ると、今まで特に畜生などと名づけて極度に輕蔑し來つた、犬猫や馬牛と同じ綱目に編入せられることが嫌で堪らぬにも拘らず、學問上の確な證據の前には頭が上がらぬので、澁々ながら承認し來つた様子が有り有りと見える。而してこの感情が世間一

般に爆發したのは云ふまでもなく、進化論が初めて公にせられた時であつた。

進化論とは人の知る通り、生物の各種は長い間には段々と變化するもので先祖に比べると子孫は非常に違ふたものに成る。また同じ先祖から起つた子孫でも、變化の方向が違へば、後には數多の相異なつた種類に分れると唱へる說である。この說に隨へば、最も相似た種類は最も近い過去に共同の先祖から分れ降つたもの、次に相似た種類は、その少し前に共同の先祖から分れ降つたもので、その間には何れも血緣の繫がりがある。之を人間に當て嵌めて見ると、人と猿とは比較的新しい昔に、共同の先祖があり、犬や猫とも、今少し古い昔には共同の先祖が有つた譯になる。この進化論なるものは、唱へ出された初めの頃には、未だ一個の學說に過ぎなかつたが、その後、生物學の盛になるに隨ひ、解剖學、發生學、化石學、分布學等の各方面から無數の證據が發見せられたので、今日では生物學者間には、恰も地球が丸いとか、一晝夜に一回轉するとか云ふのと同樣に最早確な事實と見做され之を疑ふ者は一人もない樣になつた。

斯樣な說が初めて世に持ち出されたときに、世人が之に對して非常に騷ぎ立てたのは素より當然である。他の動物の間の關係が如何に說かれようとも、それは勝手であるが、自分らまでが、その仲間に入れられ、今まで、自分らだけは全く別であると考へて居た所へ、猿とは兄弟で、犬猫とは從兄弟の間柄であると聞かされたのであるから、トテも憤慨し、誰も彼もが猛烈に反抗して、或は人類の威嚴を害ふとか、引いては社會の秩序安寧を亂すとか云ふて、この說を敲き潰さうと努力した。この反抗は陰に陽に今日まで引き續いて二十世紀も已に四分の一を經過した頃にも、尙アメリカの或る州では中學校で進化論を敎へることを法律を以て禁止し、之を犯した敎師からは一〇〇ドルの罰金を取つた。併し、如何に法律で禁じやうが、幾ら罰金を取らうが、事實を事實でなくすることは素より不可能である故、自然界に於ける人類の位置は、斯かる事件があつて世人の注意を引く每に、却つて一般の人々に知れ渡る樣になつた。

二

私は今まで幾度も人間に關する自分の考へを述べたことがあるが、何時も、人間を生物の一種と見做して論を立てた。それ故、私の述べた所は人間を他の生物とは全く別のものと考へて掛かる學者らの云ふこととは、無論、大に違ふた所があり、特に將來に關する豫想の如きは、全く相反する點もあるが、之は十人十色であつて如何とも致し方がない。私の說に反對の意見を公にして下さつた方も數名あつたが、人間だけは別である。人間は決して他の動物と一括して論ずべきものでないとの考へが、何れにも共通で、その基には、意識的か無意識的か、他の獸類と同一に取り扱はれたくないとの感情が橫はつて居る樣に思はれた。たゞ眞理を探り求めやうとする冷靜な思索と感情に基づいた議論とでは全く性質が違ふから、互に爭ふて見た所で勝負は附くまいが、この感情は、根ざす所が餘ほど深いと見えて、生物の進化を事實と信じ、人間を哺乳類の一と見做すことに躊躇せぬ學者でも、尙「人は猿と共同の先祖から降つたものではあるが決して猿の子孫ではない」と態々斷はつて廻る人があり、アメリカの雜誌などには、斯樣な論文が度々出て來る。一體猿類と一口に云ふが、その中には三十六枚も齒のある南アメリカの猿もあれば、尾の長いアジヤアフリカの猿もあり、臀部が大きくて尾の全くないゴリラや猩々もある。これ等と人間とを並べて、その系圖を調べて見たら、共同の先祖と云ふのは、決して或る一時期に限つた譯ではなく、ゴリラや猩々だけとの共同の先祖もあれば、アメリカ猿までもの共同の先祖もある。時代の順に云へば、初め猿類全體の總先祖から降つた子孫は、先づ西半球の猿と東半球の猿との二組に分れ、其より後に、東半球の猿が更に尾のある組と尾のない組に分れ、之れより更に後に至つて尾のない猿がまた二組に分れて、一方はゴリラ、猩々となり、一方が人間となつたのである。而して何れの時期の共同の先祖を取つても、分類上に云へば、尾のない猿類であつたに違ひないから、人と猿とは共同の先祖から降つたと云つても、人間は猿類の子孫であると云ふても、實は全く

同じことである。同時代に生存する二種の生物の一方が他方の先祖であり得ぬことは三つ兒にも知れたこと故、今日の猿が今日の人間の先祖であるなどとは、誰も思ふまいから、その事ならば何も心配して斷はつて歩く必要はなからう。それよりも正直に、人間は元、猿類から起つたもので、今も尙、猿類の一種であると、有りのまゝを云ふた方が明瞭で宜しからうと思はれる。

身體の構造や、胎兒發生の模様などから見て、人間が猿類に屬すべきことには、一點の疑を容れる餘地もない故、人間だけを他の動物とは全く別のものとしたがる人たちは、何時も、それ以外に差別の點を求めた。或は靈魂を有するものは人間だけであるとか、自己の存在を自身に意識するものは人間の外にはないとか、動物は總べて本能的に働く自動機械であつて、毫も自由意志を持たぬとか、その他、様々なことを持ち出して、人間だけは全く別物であると論じた。これ等の夢の様な議論は暫く措くとしても、尙その外に、實際に人間のみが有して、他の動物には全く見られぬ性質を擧げて、この通り人間は別であると論じた人も少なくないが、他種に見られぬ特性を備へて居ると云ふことならば、殆どどの動物にもある。若しも、それで威張れるものならば、犀は鼻の上に角のあるのはオレばかりだと云ひ、駱駝は水を入れる巾着が胃袋に附いて居るのはオレばかりだと云ふて威張つてよい譯になる。然らば、人間が他の動物に比べて眞に異なる點は何所にあるかと云ふと、私の考へによれば、たゞ腦髓の發達が一歩進んで居るだけである。

人間のすることと、他の動物のすることとを比較すると、その間には素より雲泥の差がある。飛行機で空を飛んだり、五十階のスカイ、スクレーパーを建てたりする動物のないことは云ふに及ばぬが、その相違も原を質せば、單に腦の働きに優劣の差があつた爲と思はざるを得ない。私は人間をたゞ腦の特に發達した一種の猿と考へて居るが、已に人間を生物の一種と見做す以上は生物界に通じた天然の理法には人間も無論隨ふべきものと思はれる。私が今まで人間に關して書いたものは、皆この考へを一部分づつ敷衍したものに過ぎなかつたが、人間を猿の一種と見做すことが誤りであるかないか

は、人間の過去の歴史が、生物界に通じた理法に從ひ來つたか否かを調べれば、知れるであらう。

三

生物界に通じた理法と云ふ中に、此所で最も關係の深いのは自然淘汰である。少しく横道に入るが、人間とか猿とかに限らず、一般に自然淘汰は如何なる結果を生ずるかを考へて見るに、凡そ、生物界には絶えず烈しい生存競爭があつて、同種のものが多數にある中から、僅に少數のみが生き殘り得るものとすれば、その少數は最も生存に適する者であつたに違ひない。生物には變異性と名づける性質があつて、同じ親から生れた子でも寸分も違はぬものは決してなく、何れも必ず多少の相違がある故、常に最も生存に適する者が生き殘つてその優つた性質を子に遺傳すれば、代が重なるに隨ふて、その性質は次第に進步し、先祖に比べると、子孫は益々生存に適する樣に變化して行く筈である。之が、自然淘汰說の唱へる所であつて、生物進化の事實は餘ほどまでは、之によつて說明が出來る。例へば、兎は足が遲くては忽ち犬に喰ひ殺される故、代々足の最も速ひものが生き殘つて、今日の如き頗る足の速ひ種類と成つた。鷹は眼が鈍くては、何時も餌を兄弟に攫はれて餓え死にせねばならぬ故、代々眼の最も鋭いものが生き殘つて、今日の如き極度に眼の鋭い種類と成つた。兎に角、生物界には生存競爭があり、その結果として適者のみが生存する以上は、代が重なると共に、勝敗の標準となる性質が次第に發達することは、爭はれぬ事實と見做して宜しからう。

その代りに、淘汰が止めば、今まで淘汰によつて發達し來つた性質が忽ち退化し始めることも、また疑ふべからざる事實である。年中眞闇な洞の内に移住した魚類には、視力の強弱は最早生存競爭に於ける勝敗の標本とならぬ爲に眼は忽ち退化し始め、終には全く盲目の種類が生ずる。アメリカのマンモス洞に産する盲魚はその一例である。また飛ぶ必要のない所に住む鳥類には飛翔の巧拙は淘汰の標準とならぬ故、翼が次第に小さくなり、終には全く用をなさぬものとなつた。

ニュージーランドのキヴィ鳥や、モーリシウス島のドド鳥などはその著しい例である。斯様に、生存競爭に於ける勝敗の標準となる性質は、自然淘汰の行はれる間は次第に發達し、淘汰が止めば、その時から退化し始めるのが、生物界の全部に通じた理法であるが、人間も若し生物の一であつたとすれば、その過去の歴史は、無論この理法に從ひ來つた筈である。併し、人類の歴史は、文字で書いた部分には嘘が多く、文字の無かつた頃のは漠然として分らぬから、事實如何であつたか、確め難い。それよりは寧ろ新生代の末期に、腦の特に發達した一種の猿が居たと假想し、その子孫が生存競爭に基づく自然淘汰の結果として如何に變化し、今頃は如何なる状態に達して居るかを演繹的に考へて、それが如何なる程度まで、今日の人間の状態と一致するかを調べた方が面白からう。

四

但し、その前に一つ明にして置くべきは、生存競爭は種々の單位の間に行はれることである。同じく生存競爭と云ふても、その中には細胞と細胞との競爭もあれば、個體と個體との競爭もあり、また個體の集まりなる群體と群體との競爭もある。細胞と細胞との競爭が何代も續けば細胞の單獨生活に適する性質が發達し、個體と個體との競爭が何代も續けば、個體の單獨生活に適する性質が發達する。それと同じく、群體と群體とが何代も競爭を續ければ、その結果として、群體の單獨生活に適する性質が發達する。群體の單獨生活とは、二個以上の群體が聯盟する如きことがなく、他の群體を悉く敵とする群體生活である。單に競爭と云ふと、多くの人は當然、個體間の競爭と云ふ意味に取る位で、個體を單位とした自然淘汰に就いては、世人がその結果を誤解する虞はないが、群體を單位とした生存競爭となると、常々餘り考へて居ない人も多い樣であるから、此所に少しくその説明を試みたい。

群體と群體とが相戰ふ場合に、何れが勝を占めるかは色々の原因によつて定まることで、その判斷は容易でなからうが

總べて他の條件が同じであるとすれば、內部の個體間に協力一致の行はれることが少しでも敵に優つた方が勝つに違ひない。協力一致が完全に行はれる群體では個體は千あつても心は一つであるが協力一致の行はれぬ群體では千の個體には千の心があるから、斯樣な二群體が相戰ふときには、その勝負は已に前以て知れて居る。されば群體を單位とした生存競爭が長く續けば、その間には、自然淘汰の結果として、個體間に協力一致の行はれるべき性質が次第に發達し、終には、各個體に、生まれながらに協力一致せずには居られぬと云ふ性質が備はるに至るであらうが、この性質を假に群體本能と名づける。群體本能は群體生活を營む動物には素より無くてはならぬ性質で、蟻蜂の如き昆蟲から、猿や野牛の如き獸類に至るまで、凡そ多數が集まつて共同の生活をする動物ならば、之を備へぬものはない。自然界に於ける相互扶助の例として引き合ひに出されるのは、何時もこの類である。

さて群體生活を營む動物には必ず或る程度の群體本能が備はつてあるが動物の群體生活には、樣々の型がある故之れに應じて群體本能にも種々の型がなければならぬ、協力一致の行はれることは何れにも共通であるが如何なる形式で、それが行はれるかは動物の種類によつて大に違ふ。例へば蟻や蜂ならば、生まれたまゝの本能に從ひ、生れたまゝの力で働けばそれで最も有効に協力一致の實を擧げることが出來る。言を換へれば、各個體は生まれたままで、已に一人前であつて、誰に教へて貰ふ必要もなければ誰に導かれる必要もない。之に反して哺乳類の如きものになると生まれたまゝの幼兒は極めて弱く、極めて無智で、敵と戰ふときは何の役にも立たずその後生長するに連れて日增しに強くもなり、利口にもなつて、漸く一人前の資格を得るのである。而して一人前に成つても、皆一樣な力を備へるに至るとは限らず、強い者もあれば弱い者もあり、賢い者も出來れば、愚な者も出來る。斯樣な動物の群體が相戰ふ場合に最も有効に協力一致の實を擧げるには強者は弱者を導き、賢者は愚者を教へるの外に良法はない。即ち群體の内部を上下の階級に分け、下の者が上の方に服從するのが、群體の生存に最も有利な仕組である。されば階級型の群體生活を營む動物が、長い間生存競爭を續け

ると、自然淘汰の結果として、群體内の各個體には生まれながらに、上の者には服從せずに居られぬと云ふ性質が發達する。この性質を假に階級本能と名づける。前に群體生活を營む動物には群體本能が備はると云ひ、今また階級型の群體生活を營む動物には階級本能が發達すると云ふたが、實はこの二つは決して別のものではない。名を二つ附けると物が二つある如くに考へる傾があるが、階級型の群體生活を營む動物に於ては群體本能と階級本能とは相重なり合ふた一つのものである。貝類の繪を書いた昔の寫本に同じ貝の表と裏とを並べて掲げ、この貝は表より見れば桔梗貝と云ひ裏より見れば蓮の葉貝と云ふと書いてあつたが、自然淘汰によつて階級型の群體動物に發達する本能は、云はゞ、この貝の如きもので、一面より見れば群體本能、一面より見れば階級本能である。この二者は離し難いもので、群體本能が退化すれば、上の者が無理を云ひ出す故、階級本能も成り立たなくなり、階級本能が衰へれば、下の者が云ふことを聞かぬ故、協力一致は不可能になる。階級型の群體と群體とが長く競爭を續けて居る間に、自然淘汰によつて養成せられるのは、實は階級型群體本能とでも名づくべき一つの性質である。

五

以上はたゞ生物界の全部に通ずる理法の一として、自然淘汰によつて、群體生活を營む動物には群體生活に必要な性質が發達することを述べたのであるが、之から本題に立ち歸つて今より何百萬年か前の新生代の末葉に現れた獸の優れた一種の猿が、この同じ理法に從ふて、如何に進化し、發展し來つたかを考へて見よう。

今日の猿類が多くは群體をなして生活して居る如くに、その猿も群體をなして居たものと、假定する。その群體が、今日の猿の群體の如くに、各々一定の大將に引率された階級型のものであつたことは勿論である。その猿の子孫が今日まで長い年月、生存し續ける間には、各方面に大なる變化が起つたであらう。或は鳥獸の鳴き聲を眞似たり、風の音を聞いて

ヒューヒューとか、雷の音を聞いてゴロゴロとか云ふて居る中に、次第に言葉が發達して、後には何でも自分の思ふことを随意に話せる様に成つたでもあらう、また目に見る物の形を描いて楽んだり、心覚えの助けとして居る中に、遂に文字といふものを工夫して、之を随意に用ひる様に成つたでもあらう。或る時は大風の後に自分らにはとても倒すことの出来ぬ大木が根から抜けて居るのを見たり、自分らがとても動かすことの出来ぬ重い岩が転つて居るのを見たりして、目には見えぬが何所かに全智全能の大きな猿が居るものと信じて、之を恐れ崇める様に成つたこともあらう。その他、種々のことを行つたであらうが、その中で、子孫の運命に最も重大な影響を及ぼしたのは、道具を造り始めたことであらう。

猿の手には、犬や猫とは違ふて運動の自由自在な五本の指があつて、何でも握つたり、撮んだりする事ができ、樹の實を捥ぐにも、蟲を捕へるにも之を用ひるから、猿は生まれながらにして已に一種の重寶な道具を所持して居るとも云へる。手頃な天然物を道具として應用することは僅に一歩の差に過ぎぬ。現に今日の野生の猿類でも敵を防ぐためには、遠くから石を投げる、また動物園に飼ふてある猿が棒を用ひて何を引き寄せたり、箱を積んで踏み台を造つたりすることは珍らしくない。石を敲き合せて居る間には、石が破れて偶然鋭い石の庖丁や石の錐が出来ることもあり、また火花が散つて傍の枯葉に燃え移ることもあらう。斯くして手を用ひて、簡單な道具を造り用ひて居る間に、新しい經驗が積もり、經驗が積もると同時に腦が次第に發達して、更に新しい道具を造り用ひる様になる。また、一旦火を自由に造ることを覚えたには、何らかの機會に金属を熔かし始め、石器や、土器の外に銅や鐵を以て道具を造るやうに成つたであらうが、この程度まで道具製造の術が進めば、地球上の如何なる動物でもこの猿と戦ふて勝つ望みは無くなる。たとひ、牙は小さく、爪は鈍くとも、矢で射たり、鉾で突いたり、網を張つたり、落し穴を掘つたりして攻めて掛かるから、虎でも鰐でも到底これに敵はず、追々山の中に引込んで了ひ、この猿一種のみが幅をきかして全盛を極める世の中と成つたであらう。

六

さて、腦で考へ手で作つた種々の道具を用ひて、總べて他の動物に打ち勝つた件の猿は、その後は專ら仲間同志で互に相戰ふたであろうが、前にも述べた如く、階級型の群體が長く生存競爭を續けて居ると、その間には、階級型群體本能が段々と發達する。この本能は元來一つのものであるが、その實際に現はれる形は様々であつて、それに、一々別の名を附ければ、恰も數多くの異つた性質がある如くに見える。自己の屬する群體のためには生命を捨てゝ顧みないと云ふのもその一である。同僚が常に相助けて、苦んで居る者であれば直に之を救ふのもその一である。互に固く信じて苟且にも嘘をつかず、一旦約束したことは決して破らぬのもそれである。上に位する者を尊敬して、その命令には絶對に服從するのもそれである。その他一々の場合を數へたら、まだ幾らでもあらう。要するに、今日德育の項目として掲げてあるものは皆この類に屬する。されば件の猿の群體に於ても、小群體が數多く對立して、群體を單位とした生存競爭が續いて居る限りは知らぬ間に階級型群體本能が追々と進んで、各個體の生まれながらに爲すことが自然に悉く群體生活に有利なことのみとなり、協力一致が完全に行はれ、群體の內部には些の不調和もない理想の狀態に近づいて行つたであらう。

然るに件の猿に限つては、その後、他の群體生活を營む動物に於ては決して見られぬ一種固有の事情が起つてそのために、折角ある程度まで進み來つた階級型群體本能も、次第にその進歩が止まり、却つて僅に退化し始めざるを得なかつた。一種固有の事情とは即ち道具を用ひたために、各群體が過度に大きくなり、その結果として、群體を單位とした自然淘汰の働きが中絶したことである。道具を使はぬ動物には、群體の大きさに一定の制限があつて、それを超えると、群體としての纏まりが附かぬために生存上却つて不利益となる。蜜蜂の群體が內部の個體の殖へるに隨ひ絶えず分封して幾つもの群體に分れるのは、その爲である。特に階級型の群體に於ては、道具が發達せぬ間は、各個體は大將の命令の屆く距離

以外に出ては働けぬから勢ひ各群體には一定の大きさ以上には膨張し得ない。所が件の猿だけは何をするにも道具を用ひ、良い道具を使ふ群體ほど戰爭に勝つ見込みが多いために、道具は益々精巧なものと成らざるを得なかつたが、斯くして一通信や運輸の道具が精巧になつて、遠距離でも不自由でなくなるに随ひ、それだけ、群體は次第に大きく成り得る可能性が生じた。元來群體と群體とが相戰ふときには、大きさの優つた方が勝つべきは知れたことゆゑ、大きさの制限が撤廢せられた以上は群體は何所までも大きく成る傾が生じ、結局は非常に大きな群體が數少なく對立することに成つたらう。さて、非常に大きな群體が數少なく存在する様になると、たとひ、その間の戰爭が相當に烈しくあつても、勝敗の結果は昔ほどには徹底的でなくなり、敗けても全部滅亡する譯でないから、群體を單位とした自然淘汰は結局行はれぬことになる。而して自然淘汰が中絶すれば、今まで自然淘汰によつて養成せられ來つた性質がその時から退化し始めるのは生物界の全部に通じた理法である故、件の猿の群體に於ても、自然淘汰が止んでからは、階級的群體本能は次第に退化し、時を經るに随ふて、退化の程度が益々著しく成つたに違ひない。先づ群體内の各個體は、群體全部のためよりも自分一身の方を大切に思ふ様になり、同僚の迷惑などは少しも構はず我まゝ勝手に振舞ふ様になる。また上に位する者を尊敬せず、その命令には一々反抗する様になる、一言で云へば今日の徳育で教へる項目が悉く亂れて行く譯である。但し如何様になると云ふても、それは單に方向を示すだけで決して總べての個體が步調を揃へてその方に變化する次第ではない。凡そ或る性質が退化する場合には、その程度が各個體によつて著しく異なるのが、生物界の全部に通じた規則であるから、今尚この場合にも恰も人間の盲腸の蟲様突起に一寸に足らぬものから、七寸以上にも達するものがある如くに、同一群體の中に、群體本能や階級本能が未だ僅に退化して居ない者から、その甚だしく退化した者まで、様々の程度の者が混じて、各々の欲す所には甚だしい矛盾のあるを避け得なかつたことと思はれる。

以上は唯少しく後れた一種の猿が自然淘汰の理法に從ふて進化したならば、その子孫は終に如何なる運命に到着すべ

きかを想像して見たのであるが、その要點を摘んで云へば、略々次の如くである。即ち、初めは小さな群體が互に競爭し續け、その間に、階級型群體本能が段々と發達したが、後には群體が大きく成り過ぎて、自然淘汰が中絶し、この本能が追々退化した、それ故、もし、その間に於ける階級型群體本能の發達の程度を曲線で示したならば初めは上り坂、後は下り坂のパラボラ線を以て書き現はすことが出來やう。

七

さて、今までは、一種の猿の歴史を想像して述べたのであるが、之からは現今の人間の狀態を觀察して、それが如何なる程度まで前述の最後の時代に一致するかを調べて見よう。若し一致する點が多ければ、それだけ人間も過去に於て同樣な歴史を經て來たものではないかとの說が眞らしくなり、人間を猿類の一と見做す考が誤りでないことになる。前に想像した一種の猿では初めは階級型群體本能が次第に發達して各個體には協力一致せずには居られぬ性質や、上の者には絶對に服從せずには居られぬ性質が生じたが、途中からその本能が退化して、段々と協力一致が行はれなく成り、上の者の命令に反抗する者が出た。斯樣になると前期中に出來上つた種々の社會制度と、後期に現はれ出た樣々の思想とが衝突して、到る所に矛盾が生ぜざるを得なかつたであらうが、今日の人間の生活狀態を見て思ひ當る所が全く無いであらうか。

他の動物の生活狀態を少しも知らず、たゞ人間の生活狀態のみを見て居る人は、今日の矛盾や不調和に充ちた人間の生活狀態を以て當然斯くあるべきものと考へ、生活とは、元々、斯樣なものと思ふて其所に何らの不審も起さぬ樣であるが、少しでも他の動物の生活狀態を覗ふた者ならば、今日の人間の生活狀態を見て必ず疑問を起すべき筈である。何故と云ふに、一般に動物界に於ては、單獨生活を營む動物ならば徹底的に單獨生活に適する性質を備へ、群體生活を營む動物ならば徹底的に群體生活に適する性質を備へ、その發達の程度には差があるとしても、必ず何れかの一方に定まつて、決

して兩者が混じて居る如きことはない。然るに、今日の人間は社會を透つて生活し、一人一人に離しては到底生存は出來ぬに拘らず、その社會の一員たる各個人は、皆自分の一個の利益のみを考へて隣人と相戰ふて居る。即ち生活の形式は群體生活でありながら、各個人の思想は全く單獨生活に傾いて居る故、何れの方面を見ても悉く矛盾だらけである。之を他の動物の何れか一方に徹底して居る生活狀態に比べれば、何故、斯様な生活狀態が生じたかとの不審が當然起るべき筈であるが、之に對する私の答は、人間の過去には、階級型群體本能が發達し來つた上り坂時代とその退化し來つた下り坂時代とがあつて、今はその下り坂を更に下りつゝあると云ふのである。私の考へによれば、この答は現在の人間社會の各方面に見られる總べての謎に對する共通の鍵であつて、この鍵を以て解けば、如何なる問題も、その因つて起る源を知ることが出來之を用ひなければ、何れの疑問も終に不可解に終るの外はない。

今日の人間社會を觀察すると何れの方面にも矛盾や撞着のない所はないが、私の考へによると、その眞の原因は各個人の持つて生まれる階級型群體本能が異なつた程度に退化してゐるためである。即ち低い程度に退化した人は思想が未だ舊式である故、上り坂時代に出來上つた舊制度をそのまゝに遵奉することを悅び、甚だしく退化した人は物の考へ方が全然變つて居る故、舊い制度では到底我慢しては居られぬ、其所で兩者の間に烈しい爭鬪が生ずるを免れぬと云ふのが今日の現狀である。

八

新聞紙は社會の鏡であるから、今日の人間生活の一斑を覗ふには先づ毎日の新聞紙を讀んで見るが宜しからう。他人には如何に見えるかは知らぬが、前に述た如き考へを持つた者から見ると新聞紙上に出て來ることは、殆ど一から十まで、階級型群體本能の退化及び、その退化の程度の相違から生じたことばかりの如くに思はれる。便宜上群體本能と階級本能

とに分けて、その進化の未だ著しくないものと、已に著しく進んだものとの例を擧げて見よう。

群衆本能が今日の人間にも尚、存して居ることは、態々新聞紙を讀まずとも、銘々自分の經驗で明瞭に知れる。打ち續く不運のために悲慘な境遇に陷つた人の話しを聞けば、たとひ、それが全く知らぬ他人であつても、非常に氣の毒で堪らず、何とかして救ふてやりたいと思ふのはその一例である。貧乏で晝飯の食へぬ子供のために同級生が自分等の小使錢を集めて辨當を買ふてやつたとか、新聞紙上で知つた憐れな孤兒に誰かが無名で衣服を贈つたとか云ふことが屢々出て來るが、これ等は皆その人々が持つて生まれた群衆本能の現はれである。路傍の乞食に一錢を投げてやつて、何かよい事をした如くに感ずるのも、この本能の働きである。その他、數へ上げたら、尚幾らでもあるが、この本能は何か非常な事の有る際には特に著しく現はれる。戰が始まつたとか、大地震があつたと云ふときにはこの本能は恰も睡りから覺めた如くに急に異状に働いて、國のために命を捨てる人や、思ひ切つて多額の金を提供する人などが、此所からも彼所からも出て來る。尤も斯様なことは長くは續かず事件が終つた後には再び常態に復するに定まつて居る。

群衆本能は小群衆が互に競爭を續けて居る間に發達して來たもの故、元來、排外的である。この事は平時には餘り目立たぬが、何か事が有つて、群衆本能が異状に興奮した場合には俄に著しく現はれる。戰時に排他的の感情が盛になることは云ふに及ばぬが、大地震の際などにも、仲間同志が相助け合ふて親密になるだけ、異分子を排斥する氣分が烈しくなり、合言葉の解らぬ者は總べて敵と見做した原始時代と同様な状態に立ち歸ることさへ屢々ある。

なほ、群衆本能が働いたかの如くに見えたが實は左様でない場合も隨分多いことは云ふに及ばぬ。今日の世の中には何らかの動機から群衆本能の働きを意識的に眞似る者が甚だ多い。所謂僞善とは斯様な類の行爲を云ふのである。或は大きな惡事を働いて成功した者が世間からの攻撃を恐れ豫防の意味で公共事業に大金を寄附する者もあらう。或は甘く當つたら名が知れて、出世の手掛かりに成るかも知れぬと投機的に眞似をやつて見せる者もあらう。今これだけ善い事をして

置いたら後に何層倍かの利子が附いて大丈夫歸つて來ると思ふ、高利貸的の者もあらう。大した手間も掛からぬ施しもよいからと惜み半分に善い事をする者もあらう。これ等の例は世間には無數にあつて新聞紙にも一々は出て來ぬ樣な世間の狀態を見ると世の中の善事とは悉く偽善のみではないかとさへ思はれる。併しこれ等の偽善を引き去つても何處に群體本能から發した同情や義勇が世の中に存することは素より疑はれぬ所である。

九

次に群體本能の退化から生ずる事件には如何なるものがあるかと云ふに之は殆ど無數であつて毎日の新聞紙上に出て來ることの大部分はこの類に屬する。群體本能が完全に發達すれば蟻や蜂の社會に於ける如くに協力一致が理想的に行はれて群體內には少しも爭鬪が無い筈であり、また、この本能が發達しなければ、群體は大きくは成り得ぬ筈である故、已に大きくなつた群體の內部に爭ひが絕えぬと云ふことは、それだけでも已にこの本能が退化した證據である。

群體本能が退化すれば各個人は自己の屬する群體全部の爲よりは、先づ自分一身の爲を思ふ樣になるから同一物を獲ようとする人々の間には勢ひ爭ひが起らざるを得ない。而して爭ひに勝つには人數の多い方が無論有望である故、同志の者が徒黨を組んで互に對抗し、群體の內部は忽ち數派に分れて盛に相爭ふことになる。但し各派が纏まつて居るのは敵と對立して居る間だけであつて、一旦爭ひに勝つて敵が無くなれば、その派の中には、また黨派が分れて互に相戰ふに定まつて居る。群體本能が退化すれば各個人は生まれながらに他と協力一致することは出來なくなる故人々が互に我慢しながら結合するのはたゞ、共同の敵を前に控へた場合のみとなる。イザ戰爭となれば反對黨も政府案に贊成して、國內に協同一致が行はれるが外との軍さが濟んで了へば、また內輪に喧嘩が始まるのが定例である。外國と戰端を開きさうにすることは何れの國でも一時國內の紛擾を靜めるために狡猾な政事家の取る慣用手段であつた。

生物界に於て最も競爭の烈しいのは、同一の需要品を求める相似た種類である如くに、人間社會に於ても常に喧嘩の絶えぬのは最も相似た考へを持つて最も相似た事業に與かる人たちの間である。極外者から見たら殆ど區別が附かぬほどに相似た仲間が當人ら同志は血眼になつて相爭ふて居るのを到る所に見受ける。同じくキリスト教を宣傳しながら新教と舊教とで喧嘩して居る。同じくローマ字を採用しながらヘボン式と日本式とで喧嘩して居る。同じく國際語の必要を唱へながらエスペラントとイドとで喧嘩して居る。同じく謡ひを唸りながら觀世と梅若とで喧嘩して居る。その他、世間には斯様な例が幾らでもあらうがこれ等は所謂商賣敵であつて、群體本能が退化した以上は、如何に大同團結を説いた所で、目前に共同の大敵が現れぬ限りは到底何の効もなからう。

尚群體本能の退化に伴ふて現はれる他の方面の變化は群體間の關係である。群體本能は元來、排外的のもので、この本能が發達すれば同一群體内には完全に協力一致が行はれる代りに他の群體に向ふては、悉く敵對の行動を取る。蟻や蜂の群體は現にこの狀態にある。然るにこの本能が退化すると、群體内に爭鬪が起り、エネルギーの大半は内部の摩擦で消費せられる故外に對する勢力はそれだけ減じ、群體間の爭ひは、それだけ緩和せられた姿となる。その有様は、恰も、如何に仲の惡い士が途中で二人出遇ふても互に腹の中で、心臓に肺臓、肝臓に腸胃などが掴み合ひをして烈しい腹痛が起つて居ては容易に刀が抜けぬのによく似て居る。斯様な次第で、群體本能の退化と共に群體間の交際が徐々と可能になり、終には國際聯盟などと云ふことを唱へ出すまでに至つたのである。

一〇

群體本能に就いて述べることは先づ、それだけとして、次に階級本能の退化は如何と見るに、この方は更に程度の相違が著しく殆ど退化して居らぬと思はれる者から、僅に痕跡を止めるに過ぎぬ者まである。階級本能に基づいた社會制度が

最も發達した時代には社會は恰も階段の如くに數段の階級に分れ何れの階級の者も、その上の階級の者に絶對に服從して居たと思はれるが、その頃の社會に、この本能を有する人が住むのは恰も水の中に魚が住む如くに極めて自然であつたらう。上の者に認められることを無上の光榮と心得、少しでも上の者と關係のあることを大なる名譽と思ふのがこの本能を有する人の特徴であるが、今日の世の中を見渡すと、この本能を何多量に持合せて居る人は決して尠くない。例へば某公爵の前で講演をしたとか、某伯爵の前で繪を書いたとか云ふことをその學者や畫家が大なる名譽と心得て有難がつて居るのは常に見る所であるが、之なども階級本能が未だ餘り退化して居ない例である。無關係の第三者から見れば、學問を深く修めた學者が、無學の公爵の前で講演をしたり、繪の上手な畫家が、丸で繪の解らぬ伯爵の前で繪を書いたりして、何が有がたいのか、少しも見當が附かぬであらうが、階級本能を以て生まれた當人らには、之が心から有り難くて堪らぬのであらう。

偉人を崇拜することも自分の頭の上に他人を戴いて有り難がるのであるから、之また階級本能の未だ著しく退化して居ない徴である。自分だけで崇拜して居たのでは物足らぬと見えて、之を形に現はして他の人々にも自分同様に崇拜せしめたいとの願望から、或はその筆蹟を額にして掲げたり、また銅像を建てたりする。此所にも彼所にも偉い人の銅像が立つて居るのは未だ階級本能の餘り退化せぬ人が多い證據とも見做すことが出來やうが、今日の社會の制度は大部分は階級本能に基づいて出來たものゝ、其まゝの引き續きである故、この本能の退化せぬ人が多い間は、大に治まり易い譯である。

また、この本能の退化せぬ人らは、肩書を非常に尊重し、肩書きの有る無しによつて、人間を上段と下段とに分け、一方を貴び一方を賤める。各個人の價値は、當然その當人の有する力量によつて定まるべきもので、肩書の有る無しには必ずしも、それと一致するに限らぬことは、實際の例で誰も知つて居る筈であるに、生まれながらに多量の階級本能を持つて居る人は、如何にしても、それでは承知が出來ず、同じ醫者を呼ぶなら博士の方に來て頂きたいと云ふて、細菌も病理

ふから、醫學の修業をして博士に成らぬのは損と定まり、誰も彼もが有らゆる方法を盡して學位を得やうとする。世間では粗製濫造などゝ云ふが、その實は、階級本能の未だ退化せぬ人らが寄つて、たかつて盛に造つて居るのである。

二

斯樣な次第で今日の世の中には階級本能が未だ碌に退化して居ない如くに見える人も甚だ多いが、また一方を見ると、それが次第に衰へて行く樣子も明に知れる。第一、自由とか平等とか云ふことは、階級本能が大分退化した後でなければ全く思ひも附かぬことである。人は生まれながらに自由であるとか、天は人の上に人を造らずとか喧しく云ひ出したのは地質學的に云へば現代の末期に當る頗る新しいことで、それまでには、上に位する者を神として崇拜せずには居られぬ心理狀態の時代が隨分長く續いたのであつた。人は、その本性として自由を愛するものであるなどと書いた論文を見たことがあるが、斯樣な本性は實に最初からの本性ではなく、階級本能が退化してから後に出來上つた新らしい本性に過ぎぬ。自由とか平等とか云ふ文字に已に現はれて居る如く、自分の頭の上に他人を載せず、足の下に他人を踏まず、自分も威張らず、他人にも威張らせぬと云ふのが階級本能の退化した人の特徴であるが、斯樣な人間も少數ながら已に現はれて居る樣である。但し眞に斯く成つて了ふのは、階級本能の全く退化した者だけであつて、退化の途中にある者は單に從來の階級制度に反抗するだけで、自分は、やはり、威張りたがつて居る。所謂新らしい人等の大部分はその邊に位する。

前に肩書きのことを述べた故、更にその續きを書いて見るが、階級本能が退化すると肩書きなどは全く眼中に置かなくなる。他人の肩書きに注目せぬと同時に自分も肩書きなどを少しも欲しがらぬ、今日では斯樣な人間も皆無ではないから、人に肩書きを授ける場合には、前以て、よく當人の意向を聞き質して置かぬと、飛んだヘマを生ぜぬとも限らぬ。何年か前に文學博士の連中が集まつて文學博士會を開き、その決議に基づいて夏目漱石氏に文學博士の學位を授けることに

なつたか、同氏が知らぬ顔をして受け取りに行かぬので、學位記が宙に迷ふて居ると云ふ噂を聞いたことがある。又同氏が何故拒絶したかは知らぬが斯様なことは階級本能の退化した人ならば當り前と思ふて居たのであらう。然るに、或る縣の教育會の總會に夏目氏と私とが講演に招かれたことがある。その席上で、我ら兩人と他の講演者等と云ふ面々に並んで臺を掛けた。而して、その時の講演者は私ら二人だけであつたから、兩者とも、隣り合せであるから當然向ひ合つて居た。台長の挨拶とか、幹事の報告とか、隨分手間が取れたが、その間夏目氏は何ら知らぬ顔をして居たので、私も同じく知らぬ顔をして居た、その中に會が濟んだので、其まゝ別れたが紹介せられた多勢の方々は殆ど記憶に殘らぬに拘らず、紹介せられなかつた夏目氏だけは未だによく覺へて居る。後から考へて見ると、同氏が博士號を貰はなかつたのは或は知らぬ顔をするのが好きであつた爲かも知れぬ。

上の者から褒美を貰ふことは階級本能の衰へぬ人に取つては無上の光榮であるがこの本能が退化すると有り難いとも何とも思はなくなり、却つて入らぬ御世話と考へるかも知れぬ。授ける方では自分らの頭を標準として、非常な恩典を施して居る積りの御褒美を、知らぬ顔をして貰ひに行かぬ様な人間が今後は時々、出て來ぬとも限らぬ。

二

以上は最初に想像した猿の子孫の行末と、今日の人間の状態とが如何なる程度まで似て居るかを調べるために、兩者に於ける階級型群體本能の退化の結果を比べて見たのであるが、私の考へによれば、人間の現時の生活が示す無數の事實は、たゞ人間の過去には階級型群體本能が發達した上り坂の時代と、その退化した下り坂の時代とが有つたと云ふ假定によつてのみ解くことが出來る。何時の時代にも、誰それであるとか、世が末になつたとか云ふて來たがこれはこの假定に從へば當り前のことである。若しもこの假定の通りに、前述の本能の發達や退化が自然淘汰の結果またはその中絶のために起つたものと

すれば、人間も全く他の生物の全部と同一の天然の理法に從ふて進化し來つた譯ゆゑ、人間だけを特に別物として取扱ふ理由は少しもない。

人間の階級型群體本能が現今退化の途中にあるとすれば、其まゝに捨て置いては、階級型の群體生活を營むことは次第に困難に成り行くを免れぬ、今日、道德教育によつて、未然に防ぎ、法律刑罰によつて已然を制しやうと努めて居る對象は悉く、この本能の退化が形に現はれた事項ばかりである。併し、斯樣な手段によつて、生まれた後の人間を或る程度まで陶冶することは出來るかも知れぬが、生まれながらに持つて居る本能の退化を防ぐことは決して出來ぬであらうと思はれる。若しも自然淘汰の理法を超越して、群體を單位とした生存競爭によらずに、群體生活に適する本能を發達せしめ得たならば、その時こそは、眞に人間だけは別であると云ふて宜しからう。

機械の人道化を論ず

田中王堂

敵の主張を撃破する方法としてソクラティスの創めたものは、古今に亘つて最も優秀なものである。其れはソフィスト等の見解を姑らく彼等が言ひ張るまゝに受け取り、而して後、其れに含まれた論理を飽くまでも無慈悲に追窮し行くことに依りて、其の論理自身の勢を以て彼等の議論の中におのづから到底辯護すべからざる破綻を生ぜしむることであつた。例へば、世の中には共通の善、共通の正義といふものは無いとソフィスト等の主張するに對して、ソクラティスの用ゐた議論は、「卿等がさういふならば、姑らくさうだと假定して見よう。然し、卿等と雖も眼前の事實としてこのアテンスの協同生活の儼として存在することだけはよもや疑ひはすまい。さうしたならば、卿等はどうして共通の善、若くは、正義なくして其れが存立し得ることを説明するか」といふのであつた。

斯くして、一擧にして破邪と顯正との二重の効果を齎らしたソクラティスの論法は、公準の名の下に、永遠に辯難の典型として嫒られねばならぬものである。

然し、不幸にしてソクラティスのこの賢き、そして、刋微せる知見は、後世の學者に依りて、多くの場合に於て、忠實に参照されなかつた。社會主義經濟學者が資本主義經濟學者の學説に對して取る態度の如きも、世上の學者の多くが誤謬

であると信ずる他人の所說に對して動もすれば取るに至る態度の偶然なる一派生に過ぎないのである。

わたくしの理會に隨へば、社會主義經濟學の志向は、極めて氣高く、極めて賞讃すべきものであるとしたところで、其れが多くの點に於て不合理のものとなり、不徹底のものとなつて居るのは、沒批判的に資本主義經濟學の假定の或るものを最後の眞理として容認した上、其れより必然に生ずると想像される弊害を防遏する目的を以て、其れと等しき程度に於て沒反省的に、其れに對抗せしめようとして、其れと全然同じレヴェルに於て新たに一つの假定を採用することに由來するのである。この結果は、一切の誤謬を掃蕩しようとする其れの期待を裏切つて、最初の誤謬を繼承した上に、更らに一つの誤謬を付け加へることになる。わたくしは之れが最も顯著な實例として機械の性質に關して嘗て資本主義經濟學が其れの本來の立場より工夫した解釋を社會主義經濟學は何等の擬議するところなく、平然として萬古不易のものとして承認する一事の中に、夙に胚胎されるいろいろの實際的、理論的の兩側面に於ける悲喜劇を擧げなければならない。

わたくしは、平常、現時の經濟組織を徹底的に改造するには、啻に其れの工場經營の方法を革新するに止まらず、更らに進んで其れの機械の構造と運用とを支配して居る根本志向をも併せて革新しなければならぬ、そして、どちらかと言へば、前者よりも後者の方が一層重大なる意義と使命とを有つたものだと信じ、且つ主張する者である。わたくしのこの確信よりすれば、總じて世の社會主義者の理會と實際運動とに關してわたくしの遺憾とする點は決して尠なくない。

わたくしはこの論文に於て機械の性質に關して、隨つて、經濟組織の改造の方針に關して世上の論者とどれだけ意見を異にして居るかを披瀝して見たいと思ふ。

杉森孝次郎氏は機械の性質に關して社會主義者と共通の理會を有ちながら、其れを根柢として經濟組織の改善に關して彼れに特有な一種の計畫を抱く一人の論者である。わたくしの見解を披瀝するに方つて、わたくしの批評の對象として彼れが最近に公表した所論を採ることは、決して其の當を失したものであるとわたくしは信じない。

杉森氏の經濟說を讀んでわたくしの不審に堪へたいのは、彼れが一方に於て所有主義が今日の經濟組織を支配して居るのは、確かに其れの墮落である、どうしても其れをして使用主義のはたらきにまで復歸せしめねばならぬと力說したなら、他の一方に於ては、機械生産の性質に關して所有主義の與へ來たつた見解を唯一のものとして素朴的に受容し、少しも使用主義の立場から之れが解釋を試みないのみならず、彼れは機械と人間との關係より出來るだけ自由創造の餘地を驅除することを高調して居るのであるから、十分なる意味に於て、彼れは其れをして所有主義的たるの傾向を一層增長せしむることを志向して居るのであると言はねばならぬ。こゝに、確かに彼れの經濟說には大なる矛盾、若しくは、不徹底が伏在する。

姑らく彼れの理想とするところのものに隨つて、彼れの所期する結果を一通り述べて見よう。

生産が個人、若しくは、家庭に依つて爲され、謂ふところの手工の形を取つて居た道具時代に於ては、生産は一種の創造であつた。其れを通して個人の品性は發露し、彼等の美的衝動は其の結果から滿足を得て居た。然し、機械時代になるに及んで、事情は全く一變して了つた。機械は社會の所産ではあるが、如何たる意味に於ても、個人の創造であるとは言へなくなつた。何故ならば、機械は個人の集合力に依つて始めて動かされるのであるが、個人が彼等の力を集合して一つの機械を動かすことになると、そこには、最早や彼等の個々の選擇や、趣味や、美的衝動をはたらかす餘地はなくなつて、彼等のはたらきは純然たる物質力となつて了つたからである。この結果として、仕事と勞苦とは同意義の言葉となつて、仕事と言へば直ちに勞働を意味し、勞働でない仕事は全然地上より其の跡を絕つたのである。斯くして、嘗て人間が彼れの勞力の自然の發動とし、彼れの品性の自然の反映として仕事を營んで居た樂園は永遠に失はれ、これから先き生産の方法として專ら機械が採用される限り、其れを回復する術は、人間と仕事の關係の中に見出されたくなつたことは明らかである。そうなつた以上は、其の失はれた樂園の代償物はどうしても機械生産のプロセス以外に求められたければなら

ない。

本來、機械を通して爲される仕事は手足、若しくは、道具を通して爲される仕事に比して、十倍、乃至、百倍も其の効果の量を増すものであるから、機械を通して爲される仕事は、どんなに殘忍、且つ、無趣味なものであり、隨つて、どんなに嫌惡すべきものであつても、わたくし共にして出來るだけ廣く其れを生產生活のあらゆる側面に應用して行けば、人間の欲望が今日のまゝで不變である限り、生活維持に必要とされる勞働を最小限度に減少することが出來、其れの自然の結果として勞働者をして最大限度に閑と產とを獲得し、享樂せしむることが出來る。

此れが杉森氏の意見の骨子である。

つまり、彼れの所見に隨へば、一旦機械の出現に依つて人間と仕事との關係の上に失はれた樂園は再び其れ等の關係として回復することは機械の頑迷に超個人的たる性質より到底望み得られないことである。されば、たゞ毒を以て毒を制し、機械をしてますます其れの特徴を發揮せしめ、人間は其の効果を利用することに依つて、他の形式に於て、之れが賠償を求めることが彼れにまで殘された其の樂園回收の唯一の方法であるといふのに歸することになるのである。

わたくしは杉森氏のこの見解を素直に其れの表記價値に於て受け取ることの出來ない者である。畢竟するに、わたくしの不滿は、不服は、彼れの所說は必しも根本的に所有主義を使用主義にまで轉換する方法の核心に觸れるところがないといふ一點に歸着するのである。然し、わたくしはわたくしの批判の依據する理由を敷衍するところがなければならない。其れはおのづから二段に分れる。

一、第一段のものは今日より將來に亘つて仕事の機械化の効力と範圍とに關する彼れの豫想の餘りに非科學的に樂觀的なるを指摘しようとするのであり、

二、第二段のものは、假りに彼れのこの沒批判的な豫想に客觀的な根柢があるとしても、其れは嚴密なる意味に於て、

尠しも所有主義の弊を匡めて、其れをして使用主義にまで轉向せしめるに與かるところはない。所有主義を使用主義にまで徹底的に改善する唯一の方法は、畢竟するに、人間と機械との關係を變更するに限られる。そして、今日行はれて居る機械の構造と其れのはたらき振りとは、杉森氏が軽率に想像するやうに、決して人力で左右出來ないほど永久的に固定したものではなくして、資本主義の支配の下に偶然取つた一時的の相に過ぎないのであるから、使用主義の新らしき理想に合するやうに、機械の構造と其れのはたらき振りとを改變する餘地は十分に存する。されば、この一つの努力の中にのみ、わたくし共は經濟組織の改變の曙光を期待すべきであるといふことを説明しようとするのである。

これまで人間は彼れの仕事の有効性を發揮する目的を以て道具を工夫し、更らに進んで其れを發揮する目的を以て機械を發明したのであるから、これより先き、ますます機械を改良し、普及して、出來るだけ彼れの仕事の有効性を増長するといふことは彼れの自由を擴張する一手段として、固より合理的の事柄である。然し、事實として、將來に於て人間に取つて必要とされる仕事の量を決定する三要因たる、(一)、仕事の機械化の可能の範圍と、(二)、欲求の變遷及び增減と、(三)、人口の成り行きとが、それぞれ、而かも、異なる風に、動搖性と不安定性とを有ちながら錯綜し、照應してはたらく以上は、今日のところ、其等の綜合結果がどんなことになるか、何人と雖も確信を以て豫言出來る筈はない。「方法に於て勞力を必要とせず、結果に於て最も高い生產能率を示しうるもの即ち機械が發達するならば、勞働が、すくなくとも一定額の生產が目的とされる限り、減少する必要がある。」などと、杉森氏は無雜作に言ひ放つて居る。然し、仕事の量を決定する三要因の悉とくが變動要素であるのに、「すくなくとも一定額の生產が目的とされる限り」と說いたところで、其れは彼れの豫想に何等の客觀的根柢を與へるものではない。數學のやうな極めて抽象的な假定より成り立つ學問に於てさへも、一つ、一つの力の帶が豫め知られて居らなければ、其等の綜合結果は到底計算出來ないではないか。然るに、杉森氏は極めて複雜な性質を有つた經濟事件に關して、其れを決定する總べての要因が變動要素であるのに、尙ほ一定の綜合結果を豫

旨して居るのである。

わたくしとしては、將來に於てどんなに機械が改良され、普及されても、人間の仕事の中には機械の應用されることの出來ない領域と、人間がさうすることを欲しない種類とが永久に多分に殘るであらうと思はれると同時に、機械生産の容易化の進歩につれて欲求と人口との動搖と變遷とを硬直に安定せしむる魔術は永久に發見されないと思はれるから、將來とても、人間に依つて必要とされる仕事の量は永久に絶えず變遷しつゝ、動搖しつゝ、杉森氏の極樂鄕的の豫想を永久に裏切るであらうと考へないわけに行かぬ。

かういふ理由からして、杉森氏の立てゝ居るやうなあやふやた理想に多大の望を懸けることは出來ない。然し、ほんの議論のために、百歩を讓りて其れに望が懸けられるとしたところで、人間と機械との關係は未來永劫に繼續するのであるから、經濟組織の改善の計畫の最も重要なる部分は、畢竟、人間と機械との關係を改善するところに存せねばならぬ。されば、わたくしからすれば、其の計畫は他にどんな事柄を包含するとも、若し其れにして人間と機械との關係の改善を通じて結果されるものを取り殘すならば、其れは到底經濟組織の改善の名に價せさるところのものである。

通例、經濟史家が觀察して居るやうに、資本主義の勃興と機械の發明とは偶然なる同時的の發生であつて、兩者の間には何等の有機的關係はなかつたとしても、機械生産が資本主義の勢力下に歸して以來、其れの志向が資本主義の精神に依つて支配され、隨つて、機械生産のヴエヒクルたる機械の機構樣式と其れのはたらき振りとまでが資本主義の精神に依つて支配されて居ることは顯著な事實である。

功利主義は資本主義の倫理學說である。其れは十七世紀、十八世紀に方つて、始めて海外投資といふ事業を企てた資本家の行動に倫理學的標準を與へようとして、其れを一つの學說の形にまで組織したものに他ならない。彼等のこの全然新奇な行動に對しては、それまで久しい間傳統的の信仰に依つて養成されて來た道德情操は何等の批判も下すことは出來なか

つた。そこで、彼等の心意氣に適合して、其の投資が齎らす利得と損失との量に依據して、行爲の價値を決定する一つの形成が消費者に依つて計畫されたのであつた。當の行動のプロセスの中に價値を認めようとしないで、其のプロセスの終つた後に其れの結果として生ずると豫想されるものの中に價値を求めようとするのが功利主義の特徴をなすものである。

世人が動やもすれば濫りに使用し、無思慮に非難する言葉の一つとして功利主義がある。この場合に、彼等は功利と功利主義とを混同して居るのである。正確に語らうとするならば、わたくし共は、嚴然、功利と功利主義とを識別しなければならない。功利は同じ効果を收げるならば、出來るだけ簡約な手段と少量の材料とを用ゐて其れをしようとする考慮の謂であるから、人間の生活に取つては瞬時と雖も離るべからざる其れの重要なる統一原理の一つである。美の實現を域とする藝術の活動にしても、全然、功利の統制を離れては到底成立し得ないのを見ても、如何に其れが普遍的の原理であるかが解かる。功利主義は實際に人間の生活の中に在つて等しく重要なる役目を滿たして居る他の幾つかの統一原理と協同してはたらいて、始めて役立つことの出來る功利を生活に於ける其等との實際の關係より引き離すことに依つて、本來一つのプロセスであるものを一つの結果であるとした上に、其れを生活全體の目指す唯一の目的物であるとした二重の誤謬に陷るところから、功利のはたらきを固化し、其れの機能を物質化することになる意見に與へられた名稱である

資本主義の精神は功利主義の組織を通して發動しなければならない。一旦機械生産が資本主義の勢力下に歸して以來其れの實績からして、功利主義が直接に機械の機構様式と其れのはたらき振りとを指揮して居たか、どうかを疑ふ餘地は殆どないやうに思はれる。功利の考慮が機械生産の方法を指揮するのは自然であるが、わたくしはこゝに功利主義が其れを爲して居たと謂ふのである。何故ならば、機械生産の最後の目的は仕事を道徳化し、人道化するにあつて、この目的からすれば、勞苦の減少は第一義的のものであり、産額の増進は第二義的のものであるのに、現在の機械は此等の一方を高

調するがために、他の一方を輕視し、若しくは、甚だしきに至つては、全然、其れを無視して、産額の多量を期するために、勞苦の減少を犠牲に供して居るからである。斯くして、今日に至つては、功利主義的の考慮より獨立した機械の機構樣式や、はたらき振りはどんなものであらうかと想像することすら困難になつたほど、功利主義と機械とは同身一體となつて居る。

人間の携はるあらゆる種の仕事の最後の性質は當然人格的でなければならない。例へば、科學のやうな一見したところ人間の經驗を絶えず出來るだけ非人格化することを其れの理想として居るものでも、人間の生活全體の立場よりすれば、其れは中間的の活動を代表するところから、暫らく便宜上さうあるのであつて、其れがさうあるのは、再び生活そのものにまで復歸した時に其の生活を一層豐富に、一層柔軟に人格的にする一時の方便に過ぎない。然し、非人格的の科學を生活に應用することに依りて、其れをして一層人格的たるの効果を擧げしめるには、一先づ道徳化する、即ち、其れを知覺世界に於ける生活の實際的要求に當て篏まる樣式にまで還元する一段の工夫が必要とされるのである。往々にして科學的抽象がこの道徳化の工夫を經ずして其の生硬なままで直ちに生活に應用されるところから、謂ふところの科學萬能の弊害が生ずるのである。

仕事のプロセス其のものに價値を認めずして、一向に其れの産出能力の結果にのみ其れを求める功利主義が科學を機械製作に應用するに方つて、其れを道徳化する工夫を全然缺き、非人格的の形のまゝで其れを應用して居るのである。さうした不用意で組み立てられた機械が其のはたらきの結果に於て人格的の性質を缺き、單なる恐ろしき物質力として進行するのに尠しの不思議もない。然し、わたくし共は科學的方式が道徳化された後、應用されて組み立てられた機械だけが正しき意味に於ける機械であるといふことを篤と心に銘記して置くところが無ければならない。

わたくしは科學の純眞なる信者である通り、機械の純眞なる信者である。わたくしが機械の純眞なる信者であるのは、

其れを方便とすることに依りて、他のあらゆるものを方便としてでは到底達し得られない點と、程度とに人間の生活を人格化し、人道化することが出來るからである。そして、機械が人間の生活一般を人格化し、人道化するには、『慈善は家庭より始められねばならぬ』といふ諺のある通り、其の高貴な業績は直接に其れを通して爲される仕事を人格化し、人道化することより始められねばならぬ。

いろいろ異なる欲求より成り立つ人間の生活一般に對して、どれほど大なる犧牲を強ひても、たゞ、生産能率を高めることを唯一の信條とする現在の資本主義は特殊の方法で職工を使役し、管理することと、併せて、特殊の方法で機械を設計し、運轉することとの二つを以て始めて其れの精神たる功利主義を完全にはたらかして居るのである。此等は一つの淵源より派生したものである。この嚴たる事實の前に立つて、世の社會主義者は産業の人道化を絶叫しながら、彼等の理想を實現する手段として、彼等の理會は纔かに工場管理の改革の必要なることだけには達し得るが、彼等の知見の更らに深く進んで機械製作の志向の改造の一層根本的なることに尠しも到徹するところのないのを見て、わたくしは彼等のために齒痒く思ふ者である。

杉森氏は、人間の考慮が彼れの作業を有効化しようとして道具の工夫に止まつた間は、彼れの趣好や、目的で其れの製作や、取り扱ひを支配することが出來たが、其の考慮が更らに機械の發明にまで進むと、機械そのものの固有の性質から、忽ち、其れの製作や、取り扱ひは彼れの趣好や目的では全然支配することの出來ない一個の怪物と化して了つたと說いて居るが、其れはわたくしの理會からは頗る受け取り難い話である。わたくしからすると、機械の機構やはたらき振りは他のあらゆる種の活動、例へば、政治や、道德や、學問の機構や、はたらき振りと等しく、必然に或る一時に方つて、或る個人の中に若しくは、彼等の團體の間にはたらいて居る特定の理想に依つて豫想され、決定され、そして、其の理想が續く限りに於て支持されて居るに過ぎない。隨つて、彼れ、若しくは、彼等の理想の變るにつれて其れの機構もはたらき振

りも絶えず變らなければならないし、又、事實、變つて來て居る。たゞ、これまでのところ、其れが資本主義の專制下に在つたところから、其れの幾多の變化も絶えず功利主義に依つて緊縛されて居たために、其れの圏外に發展の方角を選擇することが出來なかつただけである。

正當に理解された時、『機械的』なる言葉は或るものの一つの理想に依つて的確に構成され、其の志向を實現するやうに忠實にはたらいて居る狀態、若しくは、プロセスを言ひ表すものでなければならない。『機械的』なる言葉には何等の固定的、物質的の意味は含まれて居らないのみならず、其れが必然に人間の理想と終始するものならば、其の理想にして絶えず變遷して居る限り、『機械的』なる言葉は當然改造的、意圖的の意味を含まなければならないものである。この一點に關しては、學問的、藝術的、乃至、道德的といふ言葉と何等の相違のあるべき筈はない。成る程、一つの作り上げられた機械の機構を機械的と呼ぶならば、其れは丁度描き上げられた繪畫の形態を繪畫的と呼ぶと同樣であつて、孰れの場合に於ても、固定したものを指すことになる。然し、機械にしても、又、繪畫にしても、其等を要求し、創造し、支配する理想にして變遷し、進化して居る以上は、機械一般といふもの、繪畫一般といふものは等しく永久に變遷し、進化して行かなければならない。

わたくしは經濟道德の見地よりして、折角、所有主義を倒して、使用主義をして其れに取つて代らしめようと熱心に主張する杉森氏が、機械生產の性質に關する見解に於ては世の凡庸なる社會主義者の其れに一歩も出づることなく、所有主義の淵源をそのまゝにして置いて、彼等とは異なつた風にではあるが、纔かに其れの下流に立つて、其れを使用主義にまで轉向せしめんとする彼れの計畫の、たとひ其れが大した害惡を齎らすほどのものでないにしても、一片の徒勞に終りはしないかといふことを彼れのために危ぶむ者である。

杉森氏は機械の性質に關して徹底した理會を有たず、所有主義と機械生產との關係に關して大なる誤解を抱く結果、機

械生産の性質は今日其れが在るまゝで永久に一分も増減し得ざるものと假定し、其れのプロセスより自然に生ずる缺陷の代償として全機械時代なる（彼れの理解に随つて、）、富裕時代の到來の可能性を夢想して居る。彼れのこの夢想に就いては、さきにわたくしが検討したやうに、其れには法外に非科學的の想像が含まれて居る。然し、假りにこの非科學的の想像に多少實現される可能性があるとしても、之れが方便となるものは、現存する冷酷無慈悲な機械であることに相違する時、わたくしは其のやうな全機械時代の到來を歡迎するよりも、反つて其れを呪咀する者である。わたくしはさういふ時代の到來するといふことを考へただけでも、戰慄するを禁じ得ない者である。何故ならば、其の時代の到來は今日在るよりも更らに根本的に經濟と技術とを結緣し、出來るだけ人間と機械との交渉を單なる重學的のものと化した上、機械をして其れの全力を擧げて人間の生活のあらゆる部分を征服せしめることに依つて、始めて實現されるものであるからである。さうすると、其の全機械時代なるものは開闢以來、人間が始めて遭遇する最も冷血的な奴隷制度の跳梁を是認する時代でなければならない。わたくしはこのやうな醜惡なる奴隷制度が、わたくし共の社會生活の中に重大なる地位を占めて頑張るといふ事實がどのくらゐ永久に人間の文化を迫害し、人間の品性を墮落せしめるか知れないといふのである。わたくし共にしてこのやうな醜惡なる奴隷制度を是認する以上は、其れのヴエヒクルたる機械の運轉を餘儀なくせしめられる人員や時間の多寡の如きは最早や問題とするには足らないと思はれる。このやうな奴隷制度の存在を忍び、其れを方便として勞働者に麵と闇とを與へようとする思想の如きをこそ、わたくしは功利主義の精神とも、所有主義の心意氣とも呼ぶのである。

杉森氏は動やもすれば仕事と勞働とを混同して、仕事は必然に勞働であり、勞働ならざる仕事はないやうに考へて居るが、此れは確かに彼れの謬見であらねばならぬ。仕事其のものの中に何等の興味を有たず、纔かに其れへの誘引物として掲げられた報酬だけを目當てに、いやいやながら其れに携はるから、其の仕事は始めて勞働の性質を取ることになるのであ

る。人間の生活に於て遊戯と仕事が分れた後と雖も、適當な樣式に於て、適當な量が取られるならば、仕事は生活の維持に必要な職業であり、同時に强烈な、若しくは、純眞な興味を惹き起す活動であつたのである。そして、彼れが手足の補助、若しくは、洗練として始めて道具を工夫し、次に機械を發明するに至つたのは、其れに依つていろいろな意味に於てだんだんに仕事を一層適意のものとする目的からであつた。そして、この目的は顯著な程度に達せられて居る。今日の機械生産の場合に於ても正確なパアスペクチイヴより其れを觀察するならば、わたくしのこの觀察は間違つて居らないと考へる。たゞ、今日のところでは、機械生産は功利主義に依つて一概に多量生産を其れの唯一の目的とすると誤解され、この誤解に基づいて、其れがこの一方にのみ濫用されて居るがために、本來ならばいろいろの形式に於て仕事を出來るだけ適意のものにするといふ其れの一層根本的なる目的の大部分が壓迫され、若しくは、閑却されて居るのである。されば、機械生産にして今に方つて資本主義の覊絆より脱出し、其れの本來の使命に隨つて其れの志向が正解され、其れの機構樣式が正造され、其れのはたらき振りが正調されるならば、其れは人間に取つて必要な仕事であつて、同時に、彼れが興味と價値とを感じ得る活動となることを誰れが否定し得るか。否、苟くも人間文化の一成分としての産業の歴史と事理とに通ずる者である限り、誰れがさうなることを肯定することを躊躇し得るであらうか。

機械産業の出現に依つて失はれたる樂園を回復する方法は唯一つしか在り得ない。其れは、機械をして功利主義道德の表現たらしめることより轉向して、作用主義道德の機關たらしめることとである。

デモクラシーの再考察

――デモクラシーへの社會主義の態度――

蠟山政道

一 歐洲戰後におけるデモクラシーの進展

一箇の思想上の問題として、デモクラシーが我が論壇において紹介論議されたのは既に十年一昔のことである。最早今日においては何人も當年の如き議論をデモクラシーに就て試みようとする者はあるまい。即ちデモクラシーは、當時の思想問題たる意味において問題たることを止めたのである。しかしながら、制度としてのデモクラシーが社會事實として發展したのは、我國は勿論のこと歐洲においても、歐洲戰爭の後その結果としてである。このことは、多くの人の注意を惹かない所であるが、それだけとりたてて考察して見る必要がある。殊に、近時デモクラシーの「危機」と稱へられて、これを原理とする諸制度の存立の基礎に對して鼎の輕重を問はんとする者出で、或は學者政客の間にも又實際政治家の中にも、種々なる判斷と意見とを存して憚らない者ある時に、この平凡なる事實の生み出せる問題、この動かすべからざる事實の有する意味を反省することは決して徒事ではない。

今日地球上の總人口は凡そ十八億あるが、その三分の二たる十二億は、諸種なる政治形態をとつてはゐるが、獨立國として組織されてゐる。而して、その總數は五十七ヶ國であつて、歐洲に二十七、アジアに六、アフリカに三、而してアメリカに二十一の割合となつてゐる。而してこれら獨立國の政治形態に就て、歐洲戰後驚くべき變化の生じたのは、歐洲に於て三大帝政國が倒れて、そこから十箇の共和國と一箇の王政國とが生じたことである。即ち戰前僅かに、フランス、スウイス及びポルトガルの三箇の共和國しかなかつたのに、新に約一億五千萬人が

共和政を採用するに至つたのである。更に歐洲以外にて、トルコの王政が隣國のギリシアのそれと共に倒れたこと、支那の共和政が曲りなりにも固まらうとしてゐること、我國における普通選擧制度の施行等は注目すべき現象である。いま、全世界の獨立國の政治形態を分類して、それに屬する國々の數を擧げて見ると次の如くなる。

	ヨーロッパ	アジア	アメリカ	アフリカ	計
絶對專制	—	二	—	一	三
立憲王政	一三	二	—	一	一六
共和政體	一四	二	二一	一	三八
總國數	二七	六	二一	三	五七

次に、右の如く政治形式の下に包括せられてゐる人口の、その内部における政治的活動の如何を知るために、その選擧制度を見ねばならぬ。ここにも、歐洲戰前と戰後との間には劃然たる、飛躍的な差異がある。その選擧資格者の統計を左に示して見よう。

	戰前		最近	
	總數(單位千人)	總人口百分比	總數(單位千)	總人口百分比
ドイツ	一四四四二	二二、二	三八九八七	六五、八
イギリス	七七〇六	一七、〇	二二〇九八	四九、二
フランス	一一四六三	二八、九	一一〇七〇	二九、二
イタリー	八六七二	二四、二	一二〇六九	三〇、二
ベルギー	一七四六	二三、五	二二二五	二九、八
オランダ	八五五	一四、六	三四七一	五〇、六
スウェーデン	一〇六六	二〇、四	三三三九	五七、五
ブルガリア	九八八	二四、四	一二四八	二五、三
フインランド	一四三〇	四五、九	一五三九	四五、七
ノルウェー	八二七	三四、六	一四一二	五三、三
日本	一五〇四	二、九	三五〇〇	二一、三
カナダ	一八二一	二五、三	四六〇七	四九、二

この表の示すやうに、單に戰爭や革命によつて非常な變動の與へられた國々ばかりでなく、別に大なる政治的變動を經驗しなかつた國々においても、選擧權の擴張は、同樣に行はれたのである。而して、その擴張の方法又は方向とも見るべきものは凡そ三つある。一は財産資格の撤廢であり、二は年齡制限の低下であり、三は婦人への擴張である。財産又は身分資格に就ては、大體之が撤廢の趨勢にあるが、特殊の國に於ては之が撤廢に進まず或は他の理由よりして一定の身分資格を要件としてゐる。前者の例は、印度のそれで、全人口三億二千萬中僅かに五百萬人のみに選擧權が與へられてゐるに過ぎぬ。後者の例は、ロシアのそれで、勤勞階級のみに賦與されてゐる。年齡に就ては、戰前は二十五才を以て限度としてゐたが、戰後は二十一歲とするものが大多數である。中には、オーストリの如く二十歲、スウェーデン、ノルウェーの如く二十三歲、又ロシア、ト

ルコ、アルゼンチンの如く十八歳とせるものもある。驚くべきは、戦後において婦人参政権の賦與された國々の多きことである。戦前において婦人の参政権を有せし國は、フィンランド、オーストラリア、ニュージーランド、及びアメリカ合衆國の或る州のみであつたのに、今やロシア、ドイツ、イギリス、ポーランド、チェッコスロバキア、ハンガリー、オランダ、レットニア、エストニア、リスアニア、オーストリア、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、ルクセンブルク、ダンチッヒ、カナダ、アメリカ合衆國、及び若干の南米諸國に及んだ。今では婦人参政権のない國を數へた方が早い位である。

斯くの如き有資格者の増加は、勿論直ちにこれが現實に投票者數の増加を示すものでないことは、過般の我國における第一回の府縣會議員選擧の例が示した通りであつて、選擧権者の數と反比例して投票者の數の割合が減じ、いはゆる投票率が低下することは各國の實例が示してゐる所である。殊に婦人の投票率は男子のそれよりも低いことが現れてゐる。そしてその投票する政黨も有産者政黨に對する割合が多いことが示されてゐて、婦人は保守的であり、反動的傾向があると言はれてゐる。然しその有権者の職業を調べて見ると、主婦又は家庭の勤労に從事してゐる者に比較的少く、工場勞働に從事する者が比較的多いことを考へ合せると、かうした合點に限られた事である。即ち婦人有権者が男子有権者に比して政治的意識におくれてゐるといふことは云ひ得るが、保守的反動的であるとは云ひ得ない點もある。この點は、婦人参政権の歴史の日尚淺い今日、將來の發達を俟つて論斷しても遅くない。

選擧権の擴張に伴ふて政治的勢力の分野に如何なる變化を生じたかの點が最も興味に値する所であらう。これに對しては、デモクラシーの階級政策的傾向は、我々の豫測するよりも錯綜であると言はねばならぬ。所謂の選擧を標準として見たる社會の階級構成の點からすれば、今日の大多數の國々において、プロレタリア階級は、總人口の五〇乃至七〇パーセントを占めてゐる。然るに、この階級的政黨の勢力割合は、決してさうなつてゐないのである。イギリスの例は、その長い歴史の點から見て、模範的であるが、徐々としてプロレタリアはその階級的政黨の旗の下に結成されつゝあることが認められ、決して選擧權の擴張と共に、その政黨的結成は行はれぬのである。

戦後の選擧制度の一つとして、一般の事例より推して異常な形態をとりつゝある注目すべき現象がある。即ち選擧権の擴張てふデモクラシーの原理に立ちながら、組織されたる少數の專制を可能ならしむる制度の發生したことである。これは、歴史

上現れたる單純なる專制形體とは異る性質を有し、デモクラシーを肯定しつゝ、デモクラシーと異る原理を加味したものである。即ちデモクラシーのマントを被りつゝ、デモクラシーの機能を抑止しつゝあるものである。そこに、ロシアのプロレタリア獨裁やイタリーのフアッシストの獨裁の特異性がある。獨裁には行政上のそれと政治上のそれとがある。行政上の獨裁は、非常特別の場合において、通常のデモクラシー國においても施かれ得るものであるが、政治上の獨裁は或る特定の事情よりして普遍的な制度として、即ち國家形態として採用され、且つ理論づけられてゐるものである。その仕組はイタリーやルーマニヤにおける如く、議會制度を廢止することなく、ただ選擧の上における少數黨をして一定の條件の下に、その議會の內における多數黨たらしむるものと、ロシアの場合の如く階段的選擧の仕組により全國民から見れば少數者たる共產黨をして、その上級選擧機關に至るほど、多數を選出せしめ得るものとがある。何れにしても、少數黨をして強制的制度の下に多數黨たらしむる方法によつてゐるのである。

イタリーにおいては、一九二三年十一月十八日の法律によつて、總投票中の比較多數（但し二五パセントを下らざる）を得たる政黨をして、三分の二の議席を進めしめ、他の諸政黨は假令相合して七五パセントを得ても、殘りの三分の一の議席しか與へられぬといふ風に定められた。ムッソリーと黑シャツ將吏の下において、ファッシストが四分の一以上の得票を確保することは容易である。このイタリーのモデルを模倣して、先頃死んだブラチアノ執政下のルーマニアが採用した仕組は、最大多數黨が―それはいつでも政府黨である―半數の議席を占め、殘りを政府黨と他の政黨とが、得票數によつて按分比例的に分配すると云ふ仕組である。ロシアの方法は、共產黨以外によつて候補者の選任を有さず、總て共產黨の細胞組織によつて選ばれ、共產黨員か若くはそれに接近せる無黨籍者（パルタイローゼ）である。次表は、一九二五―六年の選擧に現はれた共產黨員の當選者數の割合である。

村落ソヴィエット（第一段）	九、〇％
ウオロスト會議（第二段）	二三、一％
郡會議（第三段）	五一、〇％
縣會議（第四段）	六四、六％
全國會議（第五段）	七七、〇％
中央執行委員會（第六段）	八二、〇％

その方法の別はともあれ、又その少數者が如何なるものであれ、夫々その一定の仕組によつてその獨裁が確保されてゐるが、かやうな仕組がデモクラシーの一變形でありとせらるる限り、或はそれはデモクラシーの否認であると言はれる限り、デ

モクラシーとは抑も何を以て本質とするものか、と云ふ疑問が生じて來よう。又それは如何なる社會的、經濟的理由よりして、政治制度として發生し、維持せられてゐるのか、と云ふ疑問も、當然デモクラシーを考察する場合に、解釋せねばならぬ。換言すればデモクラシーの一般的發展の事實と共にかやうな變形的發展の事實をも併せて、こゝにデモクラシーに就て再考察を施す必要ありと考へられるのである。殊に社會主義運動の立場よりして、そのデモクラシーに對する關係を如何に考察し、規定すべきかは、實際上及び理論上よりして、現下の一時事問題であると思ふ。これ、十年以前のデモクラシー論とは、聊か異れる視野の下に、新なる方向に對して、こゝに復びデモクラシー論を紹介せんとする所以である。

二　英國社會主義におけるデモクラシー觀の變化

社會主義と云つても、未だ社會主義一般なるものを概念づけることは甚だ困難である。各國の社會主義がその様相を異にしてゐる點は區々であつて、今當面の問題たるデモクラシーに對する態度の如きも正にその一つの場合に屬する。而して、いま、このデモクラシーに對する英國社會主義と獨逸社會民主々義との態度を比較するとそこに顯著に對する相違があるばかりでなく、各個の場合において年代を逐て見る時に、夫々デモクラシーそのものゝ觀察を變化せしめてゐるのである。而して、その思想上の變化が、制度としてのデモクラシーの變化と共に生じてゐることを注意しなければならぬ。

英國社會主義のデモクラシー觀は、その一足をジェームス・ミル一派の哲學的急進派によつて普及された代表制デモクラシー（Representative democracy）に置き、他の一足をロバート・オーウェン以來勞働組合を中心とする生産者團體の傳統思想たる職能制デモクラシー（Functional Democracy）に置いてをると言つてよい。ジェームス・ミルの代表制デモクラシーの前提は、極めて單純なる假設の下に成立つてゐるものであるが、近代議會政治の理論的基礎を提供してゐる。民衆に選擧權を與えよ、然らば議會は民衆の要望に答えん。なぜなら、若し社會自身選擧團體たらば、社會の利益と選擧團體のそれとは同一となるであらう。と言つたやうなのが、英國功利主義者のデモクラシー論であつたのである。かやうな原子論的個人主義的社會觀に根ざしたデモクラシー論が過去百年間の歷史において如何にその事實と一致し或は背馳したか、はこゝに多言を俟たずして天下周知の事實であらう。選擧權の擴張は除々として來り、

而して無産階級の利益は直に議會に反映しなかつた。從つて今日においては、かやうな單純なる前提の下に、議會による代表デモクラシーへの信認はもはや存在し得なくなつた。否歐洲戰前においても既にサンヂカリズムに依る直接行動論がフランスより輸入せられ、戰後はロシア革命並びに各國共産黨の成立によつて議會行動に對する全く異れる戰術が宣傳せられるに至つた。茲においてか、新なる理論的基礎の下に議會制によるデモクラシーの辯護が試みられねばならなくなつたのである。

その思想的代表者の一人として先づ指を屈せねばならぬのはマクドナルドである。彼は勞働黨の成立よりその第一次の組閣に至るまで、黨の運命とその生活を共にして來た。今や黨は彼れを殘して前途に進まんとしてゐる。然し乍ら、戰爭直後英國勞働運動におけるデモクラシーの危機に際して、彼の爲せる活動は最も目覺しかつた。彼が『議會と革命』（一九一九年）、『勞働黨の爲の政策』（一九二〇年）、『社會主義、批判的並に建設的』（一九二一年）等の諸著を矢継早に出して、混沌期の運動に對してエヴァンジェリストの使命を果したことは、パアリメンタリアンとしての彼の技倆を除外しても、彼は英國勞働黨にとつて無くてならぬ人物であつたのである。而して、彼が代表制デモクラシーを辯護せる論據は、凡そ次の如くである。即ちデモクラシーは群衆政治に反して指導者政治であること、現代國家の複雜せる諸問題の解決策の決定は單純なる原理の適用によつて可能とされ得ないが故に、小數の代表者の凝議に俟つ必要あること、直接投票その他のデモクラシー制度は反つて責任の確保を不可能ならしむること、又集團代表制或は職能代表制は現代國家の相關的統一性に矛盾し、國家統治の普遍性より見て實行不可能なること等これである。以上は多く直接的デモクラシー又は機能的デモクラシーに對して代議制デモクラシーを辯護せるものであるが、他面において彼は組織せられたる小數者の獨裁に對しても防衛せねばならなかつた。これに對しては、彼は歷史的事情として大衆が小數者に指導せられる可能性の有無と社會心理的根據として破壞的行爲の容易なるに比して建設的行爲の理性的協働を必要とする程度の大なること等を擧げ、英國の事情と大戰によつて崩壞せる舊ロシアにおける事情の異ることを力說すると共に、議會制度の積極的理由として彼の高調せる所は、社會の構成狀態よりして、その諸種の集團的小社會の平均的相關的側面のみが政治の任務たることが知られるが故に、その方法としては討議によつてのみその解決點等に到達し得るとなした點である。即ち、各個の職能的集團又は階級的立場のみからして見られる行政的技術的作用の遂行はその直接の任務で

ないが故に、かやうな特殊目的に必要なる智識又は伎倆の有無は、その問題とする所でない。これ、主として行政的機關の階段的構成と見られ得べきソヴィエット制度に根本的に反對する見解と言はねばならぬ。然し乍ら、諸種の革命思想によつて非難され、彈劾されつゝある現在のブルヂョア議會制度に對して彼は如何なる見解を持してゐたか。彼は現在の議會が大衆の機關でなくて、依然としてブルヂョア階級による小數專制の道具であり、現在秩序の維持の爲の城砦たることを認める。彼は、その原因を大衆の群集本能を利用して、大衆をして社會的自覺に到達せしめざる現存社會に於ける諸種の經濟機構の存在に求める。即ち大衆の理性と叡智とを蔽へるブルヂョアジーの經濟的機構の獨占的支配がその根本原因である。然らば、この獨占的支配の破壞、これのプロレタリアへの移收によつて、この社會的心理の根源を除くべきか、と云ふ極めて單純なる論理が生れてくるが、これは、彼に從へば、ロシアにおけるマルキシストのとれる道である。この革命プロレタリアは、ブルヂョアジーと同じく、大衆を受能的な動物と見做し、資本主義のかけた陷穽を利用して、大衆の爲に外科手術を施さんとするものである。即ち革命プロレタリアと資本主義との間には、力には力により手段には手段によつて對すると云ふ關係しか存在しないのである。從つてかやうな方法に對しては、行動的な少數者が社會組織の變革を齎らすことによつて大衆の受動的承服を直に受け得るといふ假定を容認するか否かの返答あるのみである。又その道を現に實行せる革命プロレタリアの國には、反革命のみが反動勢力として發生するものでなく、革命そのものの中より反動勢力が發生するであらう、と答ふるの外はない。獨裁の支配が自由の支配への準備階段となすべきか否かが、マクドナルドとレーニンとの區別であり、やがて英國社會主義とロシア社會主義との差異であらう。

かくの如く、マクドナルドは、彼自身の政治思想に基いて飽くまで代表制デモクラシーの擁護を試みた。然し乍ら、英國社會主義は、既に一言せる如く、他の一支柱を勞働組合を中心とせる職能性デモクラシーに求めてゐる。而して、勞働組合の企圖的發達を遂ぐるとき、その一面的職能を基本として、その切線は政治と接觸せざるを得ない。この二箇のデモクラシーは如何に關係せらるべきか。この問題に觸るることなくしては、戰後における英國社會主義のデモクラシー觀はその全面を窺ふことを得ない。惟ふに、社會主義の主要任務が産業社會の改革に存し、その鬪爭力の把持者が組織されたる勞働者階級に存する以上、單純なる地理的區劃に依存せる今日の代表制デモクラシー

に、職能上から見て部分社會を根據とする職能デモクラシーと何時かは、相衝突する時期は豫想せられたのである。問題の要點はプロレタリアの闘爭武器としてのデモクラシーの機關、即ち議會の構成方法として地理的標準可なるか職能團體可なるか、に存したのである。之に對してギルド・ソシアリストやその他のアカデミカルな思想家の理論的宣傳が、從來の地理的代表制を論難攻擊したことは英國社會思想上の一齣として普く知られてゐる所である。實際政治に多くの關心を有するウェッブ一派のフェビアン協會すら、この思想に對して若干の讓步したことは、この思想が單にアカデミカルなものとして卻けられ得ない實際的要求を多分に包藏するものであることを示すものである。ウェッブは、デモクラシーの發現形態の單一ならざることを議論の出發としてゐる。即ち人間を人間として代表する場合に、十八世紀の自然權論の如く單一の方法をとることなく、人間の社會生活における諸種の主要なる樣相に着目して、或は生產者として、或は消費者として、或は市民として、或は特定の文化目的の要望者として、或は特定の智識又は信仰の追求者として見る。ここに、從來の如く特定の地域における居住者たることを資格として構成する組織に對抗して機能的集團組織が發生する因由がある。而してその爭點は各人の生存問題に關連してくる時に尖銳化する。勞働組合てふ集團組織を有する勞働者階級が議會制度に對して、その階級闘爭の武器としての價値に疑惑を持つのは、この點からである。而して、この種の論爭は、その初期においては、各種の集團的立場よりして、極端なる形式において、その各個の獨立性が主張せられたのであるが、それがやがて妥協調和せられて、今日では大體三つの集團に分たれ得るやうになつた。即ち、ウェッブの言を借りれば、生產者、消費者、及び市民としての集團之れである。而して、いま、この基準よりして、議會制度の仕組を考ふる時、現在の議會制度の維持すべからざるは云ふまでもなく、ウェッブはこれを政治的及び產業的議會の二院制に分ち、その職分の分擔を嚴格に規定すべし、となしてゐる。いま、その職分の內容に就て論議する必要はないが、この案に對して究明しなければならぬことは、この何れもが市民としての人間集團を基礎としてゐる政治機關であつて、消費組合又は勞働組合の如き消費者又は生產者の集團を基礎とするものではないことである。從つてウエッブは、その選擧方法を集團代表でなく、依然として地理的區住を基礎とする從來の制度によつてゐる。故に、此の產業議會が生產事業の統制に關與しても、それは生產者の機關としてではなく、市民の代表機關としてである。即ち、ウェッブのギルド・ソシアリズム等に對する讓步は、議會の職務分擔を制度上明白にする點であつて、假令他に職能的デモクラシーの地位を認め

ても國家政治に對しては飽くまで市民の立場においてこれに參加し得るものと規定してゐるのである。マクドナルドの議會改革案も大體ウェッブの見解と類似してゐるが、異る所は第二院の權限を限定的のものとなしたる上、その選擧方法を比例代表又は大選擧區制によつて職能代表方法に依らしむべし、と云ふにある。即ち、議會制度は市民としての資格に根據し、地理的代表制を原則となし、之を補足するに職能代表を部分的に應用することを以てすべしと云ふのである。英國社會主義のデモクラシー觀には、斯くの如き複雜性があり、古きヴイクトリア朝時代のブルジョア・デモクラシーの根幹の上に立つてゐるのである。政治制度としてのデモクラシーは、結局において、議會制度と不可離的に結合してゐるものであると言はねばならぬ。然らばウェッブの認めてゐる如き產業制度としてのデモクラシーとの關係は、原理上及び制度上如何に考へらるべきか。英國社會主義者は、ウェッブやマクドナルドの議論を以てしても未だ、この問題に對して、革命的企畫やアカデミカルな議論を排斥するに急にして、積極的に充分なる答解を與へて居らぬ。

三　獨墺社會主義におけるデモクラシー論の意義

歸つて同じ問題を以て獨墺社會主義に向て見る。獨墺社會主義の國家見地は、ラッサール及びマルクスの二人にその淵源を有する。從つて政治制度としてのデモクラシー觀も亦、この二人の國家觀に多かれ少かれ負ふてゐると言はねばならぬ。近時ケルゼンの如き批判的立場に立てる國家學者の口より獨墺社會民主黨の國家觀がマルクスのそれより寧ろラッサールのそれに歸りつゝあるとの評を聞くが、これにはケルゼン自身のマルクス國家觀に對する見解が正當であることが證明されなければならぬ。ともあれ、斯くの如き批評の當否を別として、獨逸社會民主黨の結黨當時多分に認められたラッサールの影響が、エアフルト綱領において殆んど消滅に歸し、マルキシズムがその指導的精神となり、これ以後今日に至るまで獨墺社會民主黨内における一切の論爭がマルキシズムと關聯せぬものはない、と言つても大なる誤りではあるまい。この意味において、獨逸社會民主黨のデモクラシー觀も亦、マルキシズムのそれに對する見解を中心として展開し得るのである。

獨逸社會民主黨におけるマルキシズムの理論的指導者としてカウツキーを擧ぐることに何人も異議はあるまい。彼は戰前著した著書、例へば『社會革命論』(一九〇四年)及び『權力への道』(一九〇九年)等の如く、主として修正派及び勞働組合派に對して試みたる論爭において、デモクラシーに對する彼の見解を述べてゐる。彼はデモクラシーを以て議會を通うしての

政權と見做し、プロレタリアによる政權の把握を以てデモクラシーの發展の極地と見てゐる。從つて、現存國家はデモクラシーと同意義であり、デモクラシーの廢棄される時は、現存國家の棄揚されるときである。かうした見解は、當時勞働組合や消費組合や地方自治團體における勞働者代表の增大等の發達を以てデモクラシーの發達と見做し、これによつて一向に平和的な課程を以て資本制國家の社會主義國家への轉移は可能なるべし、と云ふ修正派その他の議論があつたのに對し、國家權力の把握なくしては、それは不可能であると云ふことを力說せんが爲に述べられたものである。然し乍ら、この場合、國家權力の獲得又は把握とは如何なる具體的內容又は方法を意味するものであるか、に就て、その立論に多少明確を缺くものがあつたのである。即ち、彼の立場は、何んでもかんでも合法的と云ふのでもなく、又は何んでもかんでも革命的といふのでもない。歷史的事情は人の希望通りに作られるものではないから、その戰術はその事情に應じて立てられねばたらぬ、と言つたやうなものであつた。物理的な暴力に依らず、經濟的、立法的及び道德的の軌道によつてその轉移が可能となるやうな事情の熟しつつある國が、ロシアを除いては以前より多くなつたといふやうな立言もある。この點は、後年ボルシェヴィキーからの「裏切り」といふ非難に答へてゐる場合に、屢々引用してゐる所である。要するに、戰前の彼が、主張した所は、政治制度としてのデモクラシーの極度の發展によつて政權がプロレタリアの手に移らなければ、社會革命は實現され得ぬ、ブルジョアジーとの合同內閣などの手段では駄目である、といふに在る。ただ問題となるのは、デモクラシーの極度の發展とは如何なる經過をとつて進むものか、を再び逆に、それは政權がプロレタリアの手に落ちた時であるといふ風に答へてゐるかの如く見ゆる點が一箇の循環論法であつたことである。然るに、その後歐洲戰爭による革命によつて、この循環論理の節が切斷され、カウッキーの正體が、はつきりと分るやうになつたのである。即ち、政權が一度プロレタリアの手に落ちたにも拘らず、社會革命は發生しなかつたのに對して、カウッキーは、假令政權がさうした機會によつて把握されても、未だデモクラシーの成熟たき時、社會革命は成立し得ぬものである、と說明を加へてゐるからである。こゝに政權の把握といふこととデモクラシーの成熟との關係が明瞭となつた。カウッキーは、かやうた見解を、レーニンのプロレタリア獨裁論と對抗する爲に餘儀たく明白にせねばならなかつたのである。彼の積極的見解は、『ゲーアリッツ綱領』の後、それの批評として出した『プロレタリア革命とその綱領』（一九二二年）の中に述べられてゐる。

ここにおいてか、レーニン對カウッキーの「獨裁かデモクラシー

かゝる論爭が、マルキシズムの本家爭ひとしてなされたのであるが、カウツキーは、クノウがマルクスの國家觀引いてデモクラシー觀には、時代を劃つて又異れる方法論的主張によつて、互に矛盾するものを有してゐる、と見てゐる如く、レーニンのロシア革命においても、その國家破壞の課程は、政治家的意識の下にサンジカリズム的、無政府主義的であるに反し、國家建設の課程は社會學的法則の下に行政技術的立場に立つてゐて、兩者は決して統一された見解の下に立つものでない、といふやうに批判してゐる。いま、クノウの如く、或は又ケルゼンの批判する如く、マルクスの國家觀に、かくの如き矛盾ありと考ふべきか、又レーニンのプロレタリア獨裁論が、サンジカリズム的無政府主義的部分と行政技術的組織論との二つの部分を統一的に包有し得ないものでないか、の議論については、今ここに立入つて論議する餘裕を有たぬが、ここにこれに關連して、一連の論爭のあることを紹介して、この問題に關する獨墺社會民主黨内の論爭の意義について、他の點よりして考へて見たい。

これは、マックス・アドラーが、クノウの擧げたる如きマルクスの矛盾は、デモクラシーの意味を政治的原理と解せず、そのより廣汎に人間的自由の原理を有するものであること、從つて政治的デモクラシーは眞正のデモクラシーではなく、經濟的デモクラシーのみが之れを實現し得るものである、と解することによつて、矛盾ではなくなる、と論斷し、ことに意を存するのである。ケルゼンが、この見解に對して、政治的デモクラシー、即ち地理的共同性の下にある市民に平等性を賦與することを目的とする國家體系を豫想することなくして、經濟的デモクラシーの成立は考ふることを得たいと駁論してゐる點に、我々の一考を要する所である。前段述べたる獨墺社會主義の政治的デモクラシー觀を、形式的法律概念主義の下に照らせば、ケルゼンのデモクラシーの概念と化し得よう。アドラーが、このケルゼンの形式的論理主義を非難してゐる點は必ずしも當を得てゐないと思ふ。然し乍ら、ケルゼンが、政治的デモクラシーの屬性を多數決の原理に求め、デモクラシーの發展として行政における委員會制度、(殊に地方分權による自治體)、裁判における陪審制度を擧げてゐることは多少考慮を要する點ではないかと思ふ。デモクラシーの原理は、三權分立論の謂れる適用によつて、之を單に立法制度にのみ制限する根據はない。ことにケルゼンの云ふ如くであるが、立法制度におけるデモクラシーの屬性を、デモクラシーの發展だからと云つて、之を行政及裁判にその儘適用することは、聊か形式的な方法に偏してゐるやうに思ふ。なぜなら、立法と行政又は裁判はその機能を異にするものであつて、その組織原理はその機能の性質によつ

て、之を異にするのが當然であるからである。即ち、行政又は裁判には、立法と異れる固有の技術的法則が存在するのである。之を無視して立法のデモクラシーの原理による組織原理を他に應用することは、無謀である。この點、ケルゼンの名著『國家學概論』(一九二五年)におけるデモクラシー論に服し得ざる所である。ここにおいてか、抑もデモクラシーの本質は何處にあるかをケルゼンの如く、制度的形式的に見ず、寧ろアドラーがマルクスの人間的自由の理念について云へる所に立ち返る必要あるを覺ゆるのである。

而して最後に、現存秩序の如き政治的デモクラシーの下においては、カルテル、トラストの如き經濟機構の獨占化、金融資本による資本の統一化と云ふが如き組織の下においては、政治的デモクラシーは人間的自由の實現に由なきものであるとして、その解放への道を、アドラーの解する如き經濟的デモクラシー、即ち社會化せる經濟組織のソリダリテイに求むべきか將又レーニンの如く、獨裁的統一權力の下における行政技術的組織の實現に求むべきか、の問題が生ずる。若し、レーニンの如き主張が正しいとするならば、それはマルクスにおける國家觀の矛盾は、彼において統一され更に發展されてゐるものと見られよう。然しながら、これが、特定の國家における絶對專制主義によるデモクラシーの制限のため、憲法上の自由が抑止されて來たと云ふが如き事情の存在に依て理由づけられると、レーニン自身ロシアについて説明せるが如きとであるならば、その論理の普遍性は疑はれねばならぬ。アドラーが獨裁政治を否定する根據はそこに存する。且つ彼は、ソリダリテイの生む强制秩序は、獨裁の不必要を積極的に說き得るものとなしてゐるのである。

以上の如く、英國社會主義及び獨墺社會主義の兩者について、そのデモクラシー觀を考察したが、余はその考察の不充分なるためか、なほ幾多の疑問を殘してゐる。殊に、政治的デモクラシーを以て、一凡の政治制度の組織原理となし、その適用の際に技術上の制限を加ふれば足る、とするケルゼンの議論について惹起せる疑問の如き、又、反對にレーニンの主張せる如き物質的生産力の維持增進の爲に必要なる社會制度の組織は、デモクラシーの原理を行政技術的にのみ解することによつて、プロレタリア・デモクラシーの制度たり得るとなす見解について生ぜる問題の如き、何れも今日の思案と考察とを以てしては、充分答へ得ない所である。こゝに、再びデモクラシー論を試みるに當り、斯種の問題の發生的過程を語り、識者の教示に俟つ所以である。(十二月三日)

無產政黨合同問題批判

猪俣津南雄

一　プロレタリア戰線の統一への促迫

ながく我國無產大衆の要望であつた無產政黨の合同統一は、遂に實踐に移されるに至つた。

世界大戰以來の我が勞働運動及び農民運動は、異常に旺盛なる生長力を發現した。だが、運動そのものは若く、プロレタリアの階級意識は進まず、而かも支配者階級は飽迄も運動を抑壓し弱めようとしたから、無產階級の戰線は絕えず分裂によつて混亂せんとする傾向があつた。此の傾向にうち克つことは、言ふまでもなく、無產階級先進分子の任務であつた。しかるに、昨年來、プロレタリア陣營の一角に現はれた「指導的」理論は、多數の先進分子をして分裂を正當視せしめるやうな方向に導いた。本來、分裂主義は、組合なり政黨なりを自己の繩張りと見、所有物と考へる所の日和見主義的指導者によつて代表される傾向であり、彼等の幹部閥によつて強められる團體利己主義に基礎を置く。しかるに此の分裂主義に對して最も勇敢に指弾すべき階級的先進分子までが、理論上では異る立場からにもせよ、實踐においては均しく組合や大衆政黨の分裂を促進する態度に出でたことは、全戰線の支離滅裂を更に激甚ならしめた。かゝる態度に出でしめたところの「指導的」理論は、今や、「小派的分裂主義」乃至は「福本主義」として徹底的に清算されてゐる。

今ま問題になつてゐる無產政黨の合同は、プロレタリア戰線の統一への運動の一形態に外ならない。戰線統一の運動は、(1)分散した闘爭力を單一なものに集中し、(2)その過程において分裂主義その他の有らゆる反階級的な傾向と闘ひ、(3)眞實の階級的指導勢力を結晶せしめ、(4)かくしてプロレタリアの闘爭を××××政治闘爭にまで高め行くことを任務とする。そして、

當面の統一運動の社會的基礎、乃至は直接の動力たるものは、勞働者、農民、小市民その他被抑壓階級全般に對する帝國主義的反動支配の攻勢が猛烈なることと、これに反抗するプロレタリア先進分子及び被抑壓大衆が、戰線の支離滅裂と反階級的な「指導」精神とに反逆しつゝ、鬪爭力の集中を熱望し始めたことである。

無産政黨合同の問題は、ヨリ一般的な統一戰線の運動との關聯においてのみ考察されねばならない。だが、茲では、問題の範圍を一應政黨合同のそれに局限することとする。

二　單一無産黨主義に歸れ！

具體的な一例として過般の府縣會議員選擧の實績について見ても、無産諸黨の合同は既に急務である。一般的に見れば、現在の無産黨は何づれも、勞働者大衆が農民大衆との强固なる結びつきによつて共同の政治的戰線を形成する爲めのものであり、その戰線には他のすべての被抑壓大衆が動員せらるべきであるから、共役的な小黨分立は無産黨の存在意義そのもの、滅却でなければならたい。わけても、歴史的意義ある「普選」による第一回衆議院議員選擧が數ケ月うちに迫つてゐることを思へば、無産諸黨は實に即時の合同を必要とする。

大正十四年から五年にかけての無産政黨結成の過程において唯一の正しき目標として高々と掲げられてゐた「單一無産政黨」は、現に社會民衆黨の幹部にして當時の勞働總同盟の幹部であつた鈴木、松岡、赤松氏等の頑强なる反對によつて遂に實現を見なかつた。單一無産政黨の代りに生じたものは日本農民黨、社會民衆黨、日本勞農黨、勞働農民黨の分立である。そして此の分立以來極度まで强められた排他的競爭的な對立意識に基づく侵略併呑政策の下に、——日和見主義的分裂主義に終始した社會民衆黨の若干幹部諸君は姑く論外とするも——、更にはあくまでも單一無産黨主義を把持し高唱した勞働農民黨及び日本勞農黨の幹部諸君までが、行動においては正に分裂主義に追隨するの實狀を呈した。

だが、清算の日は遂に來た。最近に展開した合同運動は呼んでゐる、——「單一無産政黨主義に歸れ！」

三　最近の展開

聞くが如くんば日勞黨は、十一月末の大會に於て無産政黨合同促進の決議を行ふ筈であつたといふ。しかるに勞農黨はそれに先立ち、「すべての勞農政黨の合同のための協議會の開催を日勞黨と協同して提唱すべく」日勞黨に對して提議するであら

うことを先決として聲明した。日勞黨はこれに對し、その提議が共產黨の態度の不可解なる結果であり、從つてその眞意の信ずべからざるものがあることを指摘し、勞農黨の指導分子にして宗派的分裂主義を代表するものの自己清算を要求し、しかしながら「吾々は、戰線の統一を欲するが故に、分裂主義者の自己清算を求めんとするものである。吾々は過去の經驗を再び繰返すことを欲しないからである」と結んだ聲明を發した。そしてその數日後に、日勞黨は自ら、無產政黨統一協議會を組織せんことを、勞農、社民、日農の三黨に對して正式に提議した。但し、協議會の組織は、「宗派的分裂主義（所謂福本主義）及び同主義者の徹底的排除を第一絕對條件」とするものであつた。此の提議に對して、勞農黨は再び聲明を發し、日勞黨が積極的に合同に努力する意思を表明したことを喜び、同黨が合同協議會の開催に關して若干の條件を附してゐることも敢て合同の前途に暗影を投ずるものでない、大衆は熱烈に合同を要求してゐるから、と述べた。そして數日後に、日勞黨への回答を兼ね、更めて正式に合同協議會の協同提唱を申し出で、日勞黨の附した條件には直接觸れることなく、「想ふに各黨の合同は、各黨が所謂その指導精神にこだはらず、ひたすら支配階級との鬪爭といふ根本的な一點における各黨の一致に基いてこそ初めて可能である」といふ理由の下に同黨の提案を固執した、だが日勞黨も同樣にまた自黨の提案を固執し、其に兩黨の折衝は一先づ停頓するに到つた。

一方、日本農民黨は日勞黨の提議に對する態度を保留した。最後に社會民衆黨は、勞農黨の合同提議も又た日勞黨の合同提議も、何づれも共產黨運動の陰謀に過ぎないからといふ驚くべき理由の下に合同運動に反對し、合同統一に對して極めて冷淡な態度を示した。即ち、同黨は、日勞黨の提議に對してなせる回答において、勞農黨並びに日勞黨の合同提唱の基づく所の主張は「同一の共產黨運動の內部に於ける左右兩翼の分派に過ぎないものであつて、我が社會民衆黨の指導精神には根本的に相容れないものである。吾等は、無產階級の政治的統一戰線はどこまでも反共產黨主義の上に立脚してこそ眞に合理的にして可能なることを信ずる」と主張してゐる。

斯くして、我國無產政黨にとつて焦眉の急であるところの合同の運動は挫折し、ひとり支配階級とブルジョア諸黨とを喜ばせてゐる。

四　社會民衆黨の合同拒否は何を意味する

社會民衆黨の態度は明白に分裂主義である。同黨の主張、即

ち無產階級の政治的統一戰線は、どこまでも「反共產黨主義」の我が社會民衆黨の指導精神の上に立脚せねばならぬといふのは、實踐においては、他の無產政黨をつぶしてその黨員を自黨に獲得することに歸着する。だが、社會民衆黨の爲めにおめく\とつぶされる政黨はない。從つて事實においては、分裂狀態の繼續となり、共殺的な對立鬪爭となるのみである。だが、それが全大衆の要望ではなく、社民黨所屬の大衆の要望でさへもないことは、同黨の大會に於て幹部に向つて放たれた質問の數々によつても明かである。恐くはまた、同黨の幹部諸君すべての意見でさへもないと信じられる。例へば安部磯雄氏の如きは、如何に異る指導精神を有する者と雖も、一定の點までは無產階級の進む大道を共々に進み得る筈であり、また進まねばならぬといふ見解であつたことを私は親しく知つてゐる。

事實に徵しても、勞働總同盟はその一部の幹部の排他的な繩張り意識の爲めに分裂に分裂を重ねて遂に現在の如き小團體に沒落したものであることは爭ふ餘地がない。即ち勞働者大衆は、事實において、勞働總同盟の若干幹部の指導精神――從つてまた謂はゆる「我が社會民衆黨の指導精神」を支持してはゐないのである。果して然らば、同黨の若干幹部が絕對に合同を拒否するのは、合同し統一された一大無產政黨の內においては自己の無氣力な指導精神が敗北することを恐れるからでなければならぬ。「我が社會民衆黨の指導精神」が正しいことを眞實に立證し得る唯一の途は、率先して合同を決行することにある。合同によつて大衆化された團體內においてこそ、正しき指導精神は必然に勝利してその正しさを立證するであらう。無產階級運動において、指導方針の是非に關する見解の相異が生ずるのは必然である。その何づれが正しきかは、實踐を通してそれが大衆の前に示された時にのみ決定される。一の指導精神を奉ずる黨が、指導精神の相異の故に他黨との合同を拒むといふことは、大衆的無產政黨の場合にあつては、徹頭徹尾、非「合理的」である。

異なる指導精神は、統一された大衆團體の內部において、その正しさを爭ふべきである。當面緊急の問題は戰線の統一にある。そして如何なる指導方針でも、それが無產階級の爲めの指導方針である限り、プロレタリアの戰線を統一して鬪爭力を集中する爲めの合同には反對し得ない筈である。反對するのは即ち、謂ふところの指導精神が反階級的であることを證據立てるのみである。

また、社民黨における總同盟系の若干幹部が試みてゐるやうに、自己の好まざる指導精神には何づれも「共產黨」といふ形

容用を供することは、或る目的の爲には極めて好都合であらう。支配者階級は、すべて「共産黨」的なものを排斥し、彼等と共にそれを排斥する者を支持するからである。すでに支配者階級が「共産黨」的なものに反對するからには、勞働運動の内部にも、それと歩調を合せて反對する者の生ずるのは怪しむに足らない。だが、斯やうに支配者の意欲に迎合し追從する「指導」分子が世界各國の勞働運動に於いて如何なる害惡を流したかは事新しく述べるまでもない。

繰返していふが、當面の問題の重點は分裂の無産政黨を合同統一することにある。そしてそれこそはひとり無産大衆のみならず、有らゆる進歩的分子の一致した要望であるではないか。さればこそ無産政黨運動に對しては單に社會的同情者の立場にあるに過ぎない東京朝日新聞の社說さへが、社會民衆黨の合同拒否の理由を批評して次のやうに書いてゐる、——曰く、「共産黨の我國無産政黨の形態として許すべからざるはいふを俟たない。若しこの私有財産を否認する結社運動が存在するならば、學生の社會科學研究會さへも罰した治安維持法の寶刀が政府の手に在るのである。これを見て見ぬ振りをしてゐる田中反動内閣の鈴木内相は、社會民衆黨の諸君よりも、ヨリ寛大であるとでもいふのであるか。茲に問題がある。既成政黨なり、反動内閣なりさへその存在を許してゐる程の政黨を、無産政黨の内から共産主義の名をつけて攻撃することは、治安維持法で告發するのと同じだ。これが果して正しいかどうか。勞働總同盟の大會でもすでに共産系排除のみを呼ぶにすぎであって、積極的に何も說してゐない幹部に對する質問があった。……云云」(十二月二十六日)

五　日勞黨の過誤

日勞黨と勞農黨の態度の特徴は、社民黨とは反對に、積極的に合同を提議した所にある。だが、兩黨とも、焦眉の急なる合同の爲めの協議會を即時に成立せしめることに失敗した。

日勞黨は、宗派的分裂主義及び同主義者の徹底的排除をもつて無産黨統一協議會の組織の「單一・絶對條件」たらしめた。これにおける「徹底的排除」の意味は明瞭でない。それがもし、宗派的分裂主義者を勞農黨から除名することを意味するならば、日勞黨もまた社民黨のそれに類した誤謬を犯したものといはねばならぬ。宗派的分裂主義は、他の指導方針とは違つて合同統一の方針と直接的に對立するものである點に於いても、之れを排撃すべき特殊の理由はある。だが、大衆的無産政黨の原則としては、宗派的分裂主義の傾向を代表する者と雖も、單にその

傾向があるといふ理由をもつて之を除名することは出來ない。また、その除名を條件として合同を提議することは、謂はゆる一玉姉クラブの申し合せ」の精神にも悖るであらう。

更にまた事實において、かゝる條件は、ひとり勞農黨との合同協議會の即時成立を不可能ならしめたと見得るばかりでなく、社民黨をしてヨリ不合理な理由を理由として合同を拒否せしめる口實を與へたかの觀がある。果して然らばそれは、分裂主義に徹底した社民黨の若干幹部をして、その傳統政策であるところの、「共産黨運動」呼ばはりによつて日勞黨の一角を崩してこれを自己の繩張りに奪取せんとする卑劣極まる政策に一歩前進の機會を與へたものといはねばならぬ。だが、統一主義の日勞黨は、あくまでも彼等の日和見主義的分裂政策に對して警戒を怠らぬであらう。日勞黨は、今や漸くその立黨の精神たる「階級的大衆統一主義」に立ちかへつて之を實踐に移すべき機會を迎へた。吾々は、同黨の大衆及び先進分子が、この精神の貫徹に向つて直進するであらうことを希望して止まない。

言ふまでもなく、日勞黨の主張する通り宗派的分裂主義は之を日和見主義的分裂主義と共に徹底的に排撃せねばならぬ。だが、これが排撃は、合同そのものによつて最も有效に行はれるであらう。

六　勞農黨の先進分子の任務

勞農黨をして、自己の提唱せる合同協議會の即時の成立に失敗せしめた責任は、同黨内において一種の政黨官僚たる役割を演じて來た所の淺野晃氏以下の宗派的分裂主義の一派の諸君に歸さねばならぬ。「日勞黨を潰して大衆を吾々の方に取る」ことに熱中し、それを以て「戰鬪的統一」の戰術であると揚言し、日勞黨の幹部を誰彼の區別なく罵倒し、幹部のみならずその大衆までも勞農黨を仇敵視するに至らしめたのは諸君である。諸君の「戰鬪的統一」の運動は、勞農黨に依つて合同の提議がなされる殆ど直前まで續けられて來た。そして勞農黨をして「無條件合同」に對する絶對的反對の聲明を――しかも自ら無條件的合同の提議をたす僅か以前に――行はしめたのも諸君である。

かくして勞働黨の提議は、同黨内の分裂主義の一派に有らゆる反合同的雰圍氣を極度まで強めて之を頂點に達せしめた時に爲された。かくしてまた、「戰鬪的統一」の戰術を強ひられてゐた勞働黨の大衆それ自身さへた、自黨の提議がかの惡むべき「無條件合同」と何處が違ふかと怪しんだのも當然であつた。從つてまた、日勞黨をして、勞農黨の「誠意を疑ふ」と聲明せしめ

あべこべに有條件合同を主張せしめたとしても不思議はなかつた。日勞黨の附した條件が、宗派的分裂主義者を除名することを意味する限り、誤謬であることは前言した通りである。、だが、宗派的分裂主義の諸君の自己清算を要求することを意味する限りでは全く正しい。

諸君は、自己の戰鬪的統一即ち分裂主義の誤謬を階級のために公然と清算することを避け、階級的指導者として當然なすべきことをなさないのは何故であるか。この一點は特に諸君に對して追窮されねばならぬ。諸君こそは自ら眞正の左翼主義者を以て、任ずる人々ではないか。——諸君にしてもし自己清算を回避し、所究そのもののやうに偽された合同の提議は新しき狀勢に適應した戰鬪的統一の戰術であるといふ詭辯を弄するならばそれこそはデマゴギー以外の何ものでもない。

吾々は、勞農黨にこそ、吾國現在のプロレタリア運動に於ける先進分子——最も獻身的なる——の多數が見出されると信ずる。この先進分子のみが、階級のために「我黨」意識を滅し、自黨に蟠居した宗派的分裂主義の傾向を清算せしむるに躊躇しないであらう。問題は誤謬を犯したことを責めるか否かに在るのではない。勇敢に闘ふものはしばしば誤謬を犯す。問題は、階級のために公然と誤謬の清算を敢行せしむるか否かにある。その敢行によつて勞農黨が眞に大衆的政黨であることを全大衆の前に立證し、他の如何なる在來大衆にも勞農黨の「誠意」を疑はしめる機會を絶滅し、以て無產政黨合同の路の先鋒あるイニシアテヴを再び勞農黨に取らしむること、——それこそが勞農黨先進分子の當面の任務であらねばならぬ。銘記されよ、無產政黨の合同統一とは、日勞黨や社民黨と共に勞農黨そのものをも「揚棄」することを含意する。

だが、それにも劣らず主要なる當面の任務は、勞農黨の先進分子それ自身が、日勞黨及び社會民衆黨の先進分子と直接に結びつくことにある。かゝる結びつきは、三黨を橫に貫く楔として、三黨を合同統一にまで押し上げる槓杆であるであらう。それなくして、眞に階級的意義ある合同統一運動はあり得ない。宗派的分裂主義と、日和見主義的分裂主義と、又たそのいづれかへの追隨とによつて強められた所の、階級を忘却する「我黨」意識、——それを克服し得るものは、三黨内の先進分子のみである。諸君の直接の結びつきにより、その克服のための共同の努力を通じてのみ我が無產諸黨は、合同統一への大道を踏みしめて強大なプロレタリア政治戰線の實現に直進し到達し得るであらう。

貴族院制度の運用

近衞文麿

×

貴族院の改革、その制度の運用といふことは、約十年前、私が貴族院に入つた當初から有つてゐた二つの目標である。

貴族院改革に就ては、學生時代から多少學究的に研究して居つたので、早晩改革の必要を痛感し種々その具體案も考究してゐたのであるが、實際問題にぶつつかつて見るとそこに色々な障碍を生じ、今日でもまだ具體的に考が纏つてゐない程で、そこには相當愼重なる考慮と研究調査の必要を認める。一昨年の貴族院改革の如き間に合せのものなら何時でも出來ようが、兩院制度の精神のある所を考へ、又日本の國情から考慮して、貴院の根本的改革は一朝一夕に成るべきものではない。然ればといつて、その改革の出來るまで、貴族院制度なるものに對し何等考慮も拂はずに漫然之を放置しておくと云ふことは、時勢も許さず、又その弊害も恐るべきものがある。故に將來の改革は改革とし、一時的方便として現制度下に於ける貴族院をして如何なる態度を執らしむべきかが問題である。

一は貴族院をして自制せしむること、二は貴族院の政黨化を防ぐこと之である。狹少なる基礎の上に立つ代表者から成り而も解散のない貴族院が政府に楯つくことは立憲政治の本旨から云つても、政治の運用の上から云つても、之を愼しまねばならぬ、又その政黨化――換言すれば政黨の兩院縱斷は矢張り政治の運用を妨げること大なるものがある。併し私は一部の人の如く政黨なるものを罪惡腐敗の集團の如く見、貴族院をば此罪惡腐敗に汚されぬ清淨潔白の處とせねばならぬといふ道德論から、貴族院の政黨化を防がねばならぬと云ふのではない。私は寧ろ政黨政治の肯定者である。私は政黨は混沌たる政界に秩序を齎らすものであり輿論の指導者であり一種の社會教育機關な

りと云ひしブライス卿と共に政黨の價値を認めるものであつて、貴族院から將來永遠に亘つて政黨を排斥するといふのではない。只現在の制度の下にあつて貴族院が政黨化することは政治の運用を阻害する恐れがあるから不可なりと申すのである。

然らば貴族院をして自制せしめ又政黨化せしめざる爲めには、特に貴族院議員として如何なる方策に出づべきか。過去數年間研究會に於ける私の出所進退を明かにして此問題に對する私の所感を述べたいと思ふ。

×

私が最初研究會を選んで入つたのは、兎に角研究會は貴族院の現實の大勢力として存在して居り、研究會を左右するものは即ち貴族院を左右し、研究會が右を向けば貴族院も右を向く、研究會が左すれば貴族院も左するといふ狀態――さういふ狀態にあることの是非は別問題として――にあつたから、微力ながら入會して私が前述の如き方面に就て努力して見たいと思つたからである。私の入會したのは確か震災前年である。其後まもなく病氣に罹り一年程京都に療養してゐる間に、清浦内閣――即ち護憲運動の動因となつた清浦内閣を貴族院で守立てゝゐるといふことが起つた。之は私は貴族院の執るべき態度として最も不可な事であると思ひ、當時幹部の人にも進言し又新聞を通じて私の意見を一般に發表したこともある。併し當時未だ所謂陣笠であつた私の意見がさう重きをなすわけもなく、又直ぐ研究會を脱するも穩かでないと思ひそのまゝ隱忍して居つたのであるが、その中、加藤高明伯を首班とする護憲内閣が成立し、私も亦研究會幹部の席に列したので、平素の考へ通り政府と貴族院とを出來るだけ協調せしむるやうに多少の努力をする決心をした。所が、この護憲内閣は貴族院に反抗して出來たやうな内閣であつたので、貴族院の政府に對する空氣は非常に險惡であつた。例へばこの護憲内閣成立後開かれた臨時議會に於ける政務官設置問題の如きに對しても非常な反感を有つてゐたのである。當時の内閣は憲政會、政友會、及國民黨の三派聯合により成立したものであつたが、その實裏面を覗ふて見ると、憲政會と政友會は兎角睨み合ひの形である。或一派は寧ろ貴族院を煽動して内閣に反對させるやうな策動を盛んにやつたものもある。一方、貴族院殊に研究會は、政友會内閣が長年續いて居つた結果政友系の人が多く、又政友會の色彩を帶びてゐる人が尠くなかつたので、動もすると是等策士連の陰謀に乘り易い狀態にあつた。私は政友系でもなければ憲政系でもない。――此事に就てよく誤解を受けるが、事實私は何れにも偏して

ゐない。偶々加藤高明伯が護憲内閣を組織された際に研究會の幹部となり、政府と貴族院とは常に協調して行かなければならぬといふ平素の私の貴族院本分論から屢々首相官邸に出入し、今日偶々政友會の田中内閣出現と同時に研究會を脱することになつた爲めの誤解である。世間からは隨分憲政會の御用でも勤めてゐる如く噂されるが、私は絶對に憲政系でも又政友系でもないのである。――それで單に貴族院の立場から考へて、一部策士の陰謀に乘つて護憲内閣に反對するのはいけない。若し内閣がそれで崩壞すれば宜いかも知れぬが、倒れなければ又第二の護憲運動が起るのは必然である。事實一派の策士は旨く行けば三派の内閣を倒して自派を主班とする内閣を組織し、若しそれが成功せざれば自分は内閣にあつて再び貴族院横暴の叫びを擧げてやらうといふ二段の策戰を準備してゐたのである。が幸ひに私は加藤伯に對しては政黨政派を超越して、個人としてその人格に信頼し屢々親近してその間多少の微力を盡した積りである。續いて起つたのが普選問題である。之も貴族院では非常の反對であつた。一日も早く加藤内閣を倒さうとする一派は裏面に策動する。貴族院は屢々その手に乘らうとし又乘り掛つたのである。こゝでも私は加藤伯や元老の間を往復して政府と貴族院の協調のために盡力したのである。又政務官の問題にしても同樣である。研究會から政務官を入れることに對しては世間種々の議論があり、又私も純理としては宜しくない事と思つたが、實際問題として貴族院と政府、研究會と政府との協調を保つには、あの際入れた方がいゝと考へて、加藤伯の要求を容れ、水野君に話して遂に研究會から政務官を出すことになつたのである。私が研究會に於て自分の理想なり、又貴族院といふものに對する自分の豫ねての考へなりの一端を快く行動し得られたのは實にその當時である。

×

貴族院はその本分からいつて常に時の政府と協調して行くべきであると考へてゐることは以上縷述した通りであるが、加藤伯が逝くなられ、若槻さんの内閣になつた頃から、兩者の協調が一歩深入りし過ぎた觀があつた。即ち方向と結論は同じであるが、その途行きに於て私の考と一致しないやうなことが屢々起つて來たのである。

その後若槻内閣倒れ、田中内閣起るに及んで、私の貴族院に對する考を理想的に實現するには研究會に居るよりは寧ろ他の方法に依る方が遙に良策であることを覺つた。結果に於ては私と同じ結論に達するであらうが、その途行きに於ては大に考へ

度いと思つたのである。

そこで私は昨年の暮頃から、研究会を脱会して他の新しい天地に於て自分の考へてゐる貴族院の執るべき態度を明にして行きたい、假令數に於ては研究会の如き大勢力は得られないにしても、茲に純眞なる人が集つて、研究会よりももつと公明正大な堂々たる立場にあつて貴族院の執るべき態度を明にして行きたいといふ考へを起し、今年夏頃から純無所屬無所屬團等の公侯爵等と多少話を始めた。徳川議長に對しても此春の末頃からさういふ話をしたのである。所が公侯爵の諸君は非常の共鳴を寄せられ、さういふことなら一つ團體を造らうではないかといふので、その結果愈々研究会を脱し新團體を造る運びになつたのである。

×

今回組織した團體も、私が十年前貴族院に入つた當初に考へたと同じく二つの任務があると思つて居る。一つは貴族院の根本的改革といふことであるが、これは次第にその研究の歩を進めて行きたいと思つて居る。第二はその改革の成る日まで、一つの團體として現在の貴族院の制度を如何に運用して行くか、貴族院として如何なる態度を執るべきかといふことである次、

この現在の問題に就ては大體時の政府、時の多數黨に追從せず、それと協調を保つて政局に臨む。これが牽制も受けず、又國民代表の位地に立つてゐない貴族院としての執るべき道であるといふ考の下に進んで行く積りであるから、現在の制度の下に於ては自らその歩調は研究会と一緒になるかも知れない。が唯その行程に於て、ヨリ公明にヨリ嚴正なる道を進んで行きたいと思ふのである。

これから今回公侯爵だけが集まつて團體を組織したのは、決して公侯爵なるが故に一團を組織するといふが如き階級的觀念から出たものではない。私は現在の制度の下に於ては自分の考へて居るやうな貴族院の制度を運用して行く上に於て、世襲議員と有爵互選議員に可なり多くの望を持つて居る。勅選議員は、その多くは何れかの政黨、何れかの政府のお聲掛りで選ばれたものであるから、何等かの色彩がある。少なくともその嫌疑がある。故に私の現在の制度では貴族院が政黨化してはならぬ、政治的にはもつと消極的にならなくてはならぬといふ考から言ふと、勅選議員よりは、貴族院の本分を最も忠實に行ひ得る立場に在るものは有爵議員であると思つて居る。所が現在は有爵議員の中伯、子、男爵議員は互選規則といふものに依つて拘束されて居つて、その進退は自由でない。そこで最も選擧の自由た

る世襲議員が寄つて一團を造り、眞先に立つて貴族院の歩くべき途を指示して行かふといふ譯である。

それからもう一つは、前に述べた如く今回吾々の組織した團體の第一の使命たる貴族院改革に就て、種々調査研究をし、又實際運動に移るといふのにも、やはり一番捉はれない自由な立場に在る公侯爵議員が眞先に立つてやるのが、貴族院の使命の上から言つても宜くはないかといふやうな考から、世襲議員だけで組織したのであつて、決して公侯爵だから一致してどうのとか、特權階級の中に更に特權階級を造つてそれを擁護するとかいふ意味ではない。他日は無論同志の人があれば入つて貰ひたいといふ考も有つて居ないではないが、併し今のところではどんな人を入れるかといふことは中々問題であると思ふ。是は理論上の話ではない唯實際上の問題である、多數の中には必しも吾々と同じ考でない人もあり、或は政黨的色彩を帶びた勅選議員もあるのであるから、誰でも彼でも入つて來るといふことになると、歩調も亂れるし、當初の目的を達することも出來ないから、當分は世襲議員にお集まりを願つて戴かうといふ考を有して居る。要するに徒に頭數を多くして強大なる勢力を作らうと云ふよりも、寧ろ少數でも善いから唯一に純潔無垢のものにしたいと云ふのに在るのである。

（十二月二日談）

東京市長の進退に絡んで

田川大吉郎

○西久保東京市長に對する不信任の理由は、事務の澁滯といふ點に在つたのに對し、西久保市長は、臆せず、事務は澁滯してゐないと答へられた相であるが、私の見た東京市公報に由れば、昨年四月より九月まで半年の間に、東京市役所の仕拂はれた一切の費用は四千三百萬圓であつて、殘る十月から本年三月まで半年の間に、その仕拂はるべき一切の豫算は一億一千五百萬圓となつてゐましたから、この數字から考へると、事務の澁滯は事實である、過去の半年に四千三百萬圓しか仕拂はなかつた東京市役所は、次の半年にも四千三百萬圓位ゐしか仕拂ふに過ぎられまい、さすれば一年八千六百萬圓の總支拂高である、本年三月の末、四月の初めには、殘り八千三百萬圓の殘額を生ずることになる、これをどう考へらるるのであるか、西久保市長の辯解は、私には一場の頭辯としか思はれませんでした。

○さりながら、僅に一年や二年の間では、どんな三面六臂、才俊氣英の人にしても、目ざましい功績を立つることはできません、且、そんな短時日の間に功を擧げやうと焦ることは危險であり、自治體の性質にも叶ひません、仕事を爲さしむる爲には、もつと、ゆつくり、長久の時日を假すべきである、日本の市長の任期は法律に於て四年と定めてあるが、普魯西のはそれは十二年と定めてある、さすれば日本のゝ任期の丁度三倍である、私はそれ位ゐの期間は、必ず要るものと思ひます、それ位ゐの期間をかけなければ、大した事業は到底できないものと思ひます、然るに西久保氏の在任期間は僅に一年一ヶ月と十八られました、事蹟の擧らなかつた筈である、西久保氏のみなら

ず、東京市の歴代の市長、全國の他の市長も、日本の市長は概して一年か二年の短い間に、ぐら／＼入れ換へらるゝ事になつて居る、これでは、事蹟の擧らないのみか、自治體としての面目、平和、協調の保たれないのは自然の狀勢である、毎々の事ながら、如何にも痛恨の次第であります。

○

それよりも、黨派の爭ひが、日に／＼甚しく、年ごとに激しくなつたことを嘆かずに居られません、凡て相爭ふ國は亡び、相爭ふ家は立たないと申しますが、こんなに相爭ふ東京市、其の他の市、日本の自治體の將來は、どう成り行きませう、自治體のみではありません、源氏の時代には、源氏にあらざる者は人にあらざるなりと言はれ、平家の時代には、平族にあらざる者は人にあらざるなりと言はれ、廣い日本が、狹い日本に窄められて、吾等の先祖は、五尺の身體を容るゝに所のない辛い日に逢ひました、今日の日本はどうなのでせう、これは既に革新せられたのでせうか、私どもは今尙源平爭覇の時代に居るのではないでせうか。

何にしても、こんなに相軋り、相せめがれては、東京市は、ます／＼困弊するばかり、能く發達するわけには參りません、どうかして、この黨派の爭ひの風を一掃することに、それを全く終熄せしめて、影も、形もとどめしめない程度に、改善し革新したいものであります。

○

それに就ては、東京市民の自覺が、何といつても、何よりも先に、必要になるのでありますが、東京市民には、今その自覺があるのでせうか、ないのでせうか。

東京市民とのみ限りません、日本は立憲政治の國である、國民自治の國である、日本國民には、その自治の自覺があるのでせうか、ないのでせうか。

自ら治せる國民なら、國の政治に注意し、政府を監督し、指導するだけの覺期と、理解と、責任を荷ふ、道義上の信念がなければなりません、自治體の事に至つては尙更であります、自治體を視ること自分の家の如く、家の内を拔け目なく掃除しその品位、面目を中外に保全する樣に、細かい注意と同情とを市の政治の内外に注がねばならないのであります。

私は、全體に見て、東京市民にも、日本國民にも、この理解か欠けて居る樣に思ひます、立憲の理解なく、自治の理解なくしての、今日の議會政治、市會政治である、行き惱んで、醜態百出、目を蔽はしむる所以でありませう。

○

西久保市長は、遂に辭せられますでせう——十二月四日執筆の時——この失態、醜態を演出して、平氣で居られる筈はありません、必らず身を退けて、後の賢者を待つ方針を採られるのでせう。

それにしても、その後任者は誰でせうか、見當は些しもつきませんけれど

一、長く官吏をされた老政者でせう、爵位、勲等の高い貴人達が候補者でせう、それ以上に資本家の後援のあられる人でせう、

二、或は資本家自身かも知れません、近來は、こんな人の影が散らつく樣になりました。

私は、略斯樣に察してゐます、だから、前段の如く、市民にその理解があられないと思ふのです。

自治政といふは、勿論、平民の政治、丸腰の政治、柵柄、格式に由らず、協議と、諒解とを旨とする懇意、折れ合の政治であります、長く官吏をされた方は、上から下を見る、柵柄を笠に、人民を見下す癖がついて居られます、自治政治を行ふ根本の資格を欠いで居られます、うまく行かう筈がないのであります。

金持だからとて、排斥すべき理由はありませんけれど、金持だからとて、信頼し、崇拝すべき理由もありません。もつと平民的に、市民の長をお撰びたいものであります。

○

現實の問題としては、私は、田中政友會總裁と、濱口民政黨總裁との、懇切なる話し合ひ、妥協を求めます。

いづれも、其の子供達の喧嘩である。餘所事しせらるべきでありません、子供の喧嘩は、やがて親の喧嘩、否、否、親が喧嘩して居るから、子供も喧嘩するのでせう。

そこで、兩者は出合つて、

一、東京市の事、洵に困つた狀態である、

二、此のまゝには捨てゝ置かれない、

三、さりとて政府、政黨が關係すべきでない事は勿論である、吾々は、市に關係ある黨員同志に向つて、左に其の旨をたしかに説明しやう、

四、彼等關係者達に、双方熟議し、讓歩し、妥協して、兩黨に直接關係のない、公平、純正の人を擧げて、其の位地を永く保障することに努められたいと勸告しやう、

五、吾等は市政に關係しない事を誓ふ者であるが、若し必要ならば、かくして擧げられた後任市長の位地は、兩黨首に

於ても、永く支持する方針であると誓ひたい。

と、斯様の相談を遂げられたい、東京市に干渉せらるゝのではない東京市に干渉せられないのである、それを聲明せらるゝのである、聲明して天下に示し、尙天下を率ゆべく努めらるゝのである、私は、たゞこれを望みます。

○

然らば後任者はどうなるか、どんな人を、市會の關係者は妥協して選ばるゝだらうかと申すに、

一、市民の長老であります、東京市は一大家族、市長は其の家長に準ずる者でありますから、市民の中の長老者が、適任であります、それでは、尙漠然の嫌ひがあるとして、もつと突き詰めて、誰を推すかといふことになれば、

二、市政に通曉した市民の中から選ぶ、市會議員は市政に通曉した人達であるから、其中から選ぶ、市會議員の長老は市參事會員であるから其中から選ぶ、市參事會員の中の一番の古參者或は一番の長老から舉げたら可からうと思ひます。

三、それとも國に由つて、物の順序の考へ方が異なります、若し市會議長其人を、市民の適當な代表者と認めるなら、其の人を推すもいゝと思ひます。

要するに、市會議長か、市參事會員かの中から舉げる、其の人達は、東京市のために、多年、市政の監督と指導の任に當り、それに精通して居られるから、其の人々の中から舉げる、それが最も順當な、合理的でもあり、實際的でもある方法だと確信します。

或は、あんな人達が、どうして市長になれるかと申されませうが、若し市民の代表者である人達が、市長となるだけの資格、能力がないわけなら、其の市は自治體としては成り立たないわけであります、東京市は初めから自治體としての資格、能力を缺いでゐたわけになります、東京市微なりといへども、それ程に微弱、無能ではありますまい。

○

さて、東京市は、今回の見にくい爭では、どん底として、端を改め、これより幾分にても向上の方に向ひますか。

それとも、今回の爭ひも未だどん底でなく、尙々、より以上の見にくい爭ひ、激しい衝突をつゞけますか。

どうかして、今回をどん底とせられたいものである、その鍵を握る者は、東京市民、日本國民、私は、たゞ〳〵我が國民の自治に目ざめ、其の責任と義務とに目さめんことを祈ります。

大學卒業生の就職難と知識階級の沒落

特權的知識階級の沒落と實質的知識社會、集團、個人の新來

杉森孝次郎

道具が個人を發見した。その結果が近代の個人主義だつた。機械は社會を發見する。いなむしろ、道具は個人を造つた、そしてそれの發見に導いた。機械が社會を或程度まで造つた。現代はそれに導かれて社會を發見しつつある。

機械が生活を社會化した。交通機關がそれの範圍を擴げた。機械一般がそれの分業を生んだ。機械に引きずられて、生活はいはゞ一夜の間に、過去一世紀前後間に、大跳躍的に社會化した。

現代の頭腦は、したがつて心胸も、しかしながら、道具時代までの原則を習性的に持ち續けてゐる。現代はそれが持つ、現に持つてゐるだけの社會をすらも知らない。持ちうる社會をばなほさら知らない。

知識界に社會科學的知識を比較的に、即ち物質科學的知識との比較に於て、今日ほど酷烈に缺いた時代は嘗つてなかつた。

物質技術は現代に於て機械時代を實現してゐる。物質技術は物質科學を直接に反映する。社會技術は、しかるに、機械以前時代のほとんどそのまゝだ。その證據を三つ擧げよう。

現代には、生産制限を條件とする消費制限がある。現代の生産力は一杯に使用されてはゐない。その證據の一は失業、就職難にある。原料も世界即ち地球の全表面、しかも人間が住みうる範圍内を單一なる原料地として見るならば、決して徹底してゐない。

生産者は、現代に於て、生産費を制限することに熱心だ。失業はその一結果だ。現代の生産者は廣告に熱心だ。その一動機は需要が供給を出來るだけ高く凌ぐ狀態を創造するにある。要約すれば、値段を上げることが目的だ。個人的利益のみの見地からして現代の機械を使用するならば、かうした結果は不可避だ。生産費を制限し、生産額を制限する。そして、さうした制限主義の範圍内に於て一個の自己、自家族、自會社の財力を肥やすことに苦心する。國際を見れば、國境が、ただ民族主義といふ近代的一物と結托して、やはり制限主義を實行しつゝある。その制限主義の範圍内に於て利益をむさぼり且つあさりつゝある。

錢と國境が現代に於ける二つの制限力だ。しかるに錢と國境は不自然作爲物だ。錢は黄金ではない。國境は天險ではない。社會が改廢、破棄、新作する氣にさへなれば錢と國境は柔軟にその命に服する。錢と國境によつて社會が自縄自縛しつつある現實が、或見地からは、甚だしく目につく。

錢即ち購買力即ち信用は社會技術の責任物だ。金融組織が現代に於て消費的人口の目的に奉仕せず、主として利益主義的生産者の目的にのみ奉仕してゐることは、社會技術に、それの時代錯誤に原因する。國境も勿論社會技術の責任物だ。

大量的自動的生産方法の發達を條件とする無産階の階級的發達が現代にいちじるしい。こゝにも社會技術の幼弱と固陋が顯著だ。道具時代に於ては、またその時代までのすべての時代、即ち農業時代、狩獵時代等に於ては、無産階は絶對的に、また合理的に、道徳的に不可避だつた。道具使用は小量生産だからだ。またそれは手工業とも適當にいはれうる通り、絶えず手を有事たらしめるからだ。

大量的自動的生産方法即ち機械が社會の手に入つたにかゝはらず、無産階の階級的發達がいちじるしいといふ事實は、道具時代の必然的無産階が現代に、それの社會技術の世界に、しふねく巣をくつてゐるからだ。習性的に現代は無産階であるのだ。それは必要的にではない。

多數共働的生産方法を條件とする少數獨占的所有も現代に顯

實だ。これら社會技術に於ける動物及び間隔を立證する。

社會技術が道具時代、農耕時代、狩獵時代あたりに出關々々してゐるあひだ、物質技術に於ける機械時代は人間に奉仕するばかりでなく、人間を破壊する。前に記した消費制限、無產因、無消費的生產等は、その破壞現象に屬する。

社會技術をさへ發達させれば、現代は史上最初的に藝術時代を實現しうる條件を持つ。藝術とは勿論、目的を自身に有する行動全體だ。狹義藝術はその無限に廣い藝術的世界内の一分野にほかならない。古代ギリシャ人は一つの藝術時代を實現した。しかしその藝術時代は階級的制限を持つた。奴隸階級を條件とする有產閑階級の自己表現だけのものでそれはあつた。その奴隸階級には自身の藝術的解放はなかつた。

社會技術をさへ發達させるならば、現代は、繰り返へしていふが實に史上最初的に、藝術時代を、階級的にでなく社會的に實現しうる物質技術的發達を持つてゐるのだ。この至寶の扉に手を着けないことは怠慢だ。その着手、有効的着手の可能は、即ち鍵は專ら社會技術の發達にある。その社會技術の發達は、しかるに、社會科學の發達を原因とする。

機械が社會を造つたけれども、現代はそれを發見しない。可能的社會の發見、したがつて新社會の發明はなほさら始まらない。現代が最も必要とするところのものゝ一つは社會の發達に對することは最も熱烈たりといはねばならん。

最近、世界を通じて、ボルシェギズムとファシズムとが年わかき情熱と想像を齎しつつある。宗教が死滅を告げ、デモクラシが老廢し去つたゆゑに、進步的生命の熱が宇宙に遊離し、それをその二者が逸早く捕へてわがものとしたかたちがそこにはある（最近のエルズ氏の發表に自然に聯絡想起される部分がある）。クリスト教乃至一切の權威的既成宗教に取つて代はつたものとしての資格に於て、兩者は必要的に、必然的に、新宗教そのものだ。デモクラシに取つて代はつたものとしての資格に於て、兩者は必然的に、必要的に直接行動的、革命的だ。態度に於て兩者は宗教的であり、方法に於て兩者は革命的だ。正確に宗教とデモクラシの新陳代謝だ。

熱が關する限り、ボルシェギズムとファシズムとは十分に異常だ。光りが關する限りすくなくとも問題だ。

熱は貴い。これあれば事がなされ、これなければ事は始まらない。熱さへあれば事がすくなくとも始まる。想ふに、人類が、與へられたる任意の瞬間に、有する可能的心熱には大體に於て量的一定がある。それがいかなる狀態に置かれるかだけが不定だ。從つて人類の或部分は或宗教にかれらが現に有した限り

の可能的熱量をさゝげた。曾つて人類の或部分はデモクラシ、政治的デモクラシにむかつてさうした。いまや人類の全體がその兩者から釋放された。熱、遊離された可能的熱量はどこかに出途を見つけねばならず、作らねばならない。ボルシェギズムとファシズムはその現在までに作られ、見つけられた二つの出途だ。

現代にとつて最も有意義な熱の形式はなにか。これが現代の知力、聰明が答へねばならない一つの最も必要な問ひだ。この問ひに答へるためには、時代が社會認識に於て批判的、思索的に訓練される必要が先づある。大衆にかゝはらず卓見、創說、正論を自身持ち、造り、主張する人の一人でもあること、多いことは最も望ましいが、人口の可能的極大部分が聰明なる意見の持ちぬしであること、聰明なる意見の持ちぬしと容易になりうることが同時に極めて必要だ。

社會認識に於ける社會的教育、訓練が今日最も、そして無限に必要だ。印刷、交通の外的便宜が開けた今日、その認識の教育、訓練の機會、設備、方法は決して貧弱でない。學校體系はその内の一つの有力なる中心を構成しうるにすぎない。その知識を條件とする範圍内に於ては學校體系が知識、社會認識に於ける批判的、思索的訓練に貢獻しうる可能と、貢獻する責任とは不可測的に大だ。習性、社會認識に於ける純粹學術的習性が最も便宜多く養成されうる場所は學校だからだ。勿論、そのためには、現在の學校に相當の改作を先づ與へる必要がある

知識階級なるものが、現制に原因する私財的特權階級を直接に反映する、及び間接にすら反映するものである限り、それは社會的存在理由を持たない。知識は財力の前に開放されず、人間の前、素質の前に開放される社會的必要が明白だ。産業に於て、經濟に於て、現代は古代ギリシャのやうに奴隷階級を持つてはならぬ如くに、知識に於て現代は從來のやうに、及び現在のやうに、奴隷階級を持つてはならん

知識は社會に直接に原因、目的、方法を、意識的に、持たせられねばならん。その結果として、本質的に、進化的に、比較的に優秀たる知識の持ちぬしたる個々人、集團がどんなに發生、發達しようとも、それは社會から見てひとへに歡迎すべき事柄に屬する。社會の進歩はその方法を必然採用する。特權的知識階級なるものは斷じて存在を社會から許容されべきでない。

マークシズムとファシズムが、前者は世界善をもつてみづから任ずるかたちに於て、後者は一國善をもつてみづから任ずるかたちに於てではあるが、最近の宗教そのものであるかの如き觀を呈することはすでに注意された通りだ。從來、いはゆる宗

教なるものは知識の敵、曖たる蓄積を概ね多分に示した。クリスト教の歴史にそれは顯著だ。これは、勿論、一つの惡だ。新來の宗教たるものは、知識の敵、曖では、いかなる部分に於ても、限度に於ても、意識及び目的に於ても、斷じてあつてはならん。新來の宗教のテストは、それがいかに聰明であるか、聰明に對する徹愛者であるか、知識の信者であるかに存する。

斷じて、勇敢に、常に知識の命にしたがふ。宗教に必要な熱、徹底、革命的性質はこれ以外のものであつてはならん。知を多少とも犧牲にする新宗教的なすべてのものが、眞正新宗教への過渡物的不完全物だ。眞の宗教は、飽くまで、光る熱であることを要する。

頭腦勞働者としての現實に徹せよ

青野季吉

知識階級の生活難——就職難はその一部に過ぎない——が訴へられたのは、餘程久しい以前からである。我々が學校を出たのは最早十餘年の昔であるが、その當時から、否、我々がまだ中學當時からその訴へが聞かれてゐて、今日も依然として變らないのである。

年に一度か二度は必らず定つて、當局者や社會政策家が、知識階級の生活難を云々して、その解決の新らしい方策を講ずると言つたことが、新聞で麗々しく報ぜられる。だが、どんな新らしい方策が樹てられるのか嘗てその結果を報告されたことが無い。

何故かく知識階級の生活難、大學・專門學校等の卒業生の就職難が訴へられるのか？ これを考へて見ておく必要がある。

資本家社會においては、常に一定數の作業豫備軍が必要である。言ひ換へると常に一定數の失業者が必要である。これは勞働者について言はれてゐることであるが、知識階級者にとつても同樣に適用される資本家社會の法則である。資本家社會の全

業は、必要がなくなればいつでもその勞働者を失業の世界に放り出すが、必要がある時にはいつでも手近かに直ぐ雇へる勞働者群がなければならない。それは知識階級においても毫も變りはない。必要がなくなればハガキ一本で斷はるが、必要があればいつでも直ぐ雇へる知識階級群がなくてはならない。

そんなわけで知識階級者の生活難や就職難や失業の全くなくなることは、資本家社會の存續する間到底あり得ない。何ほどかの知識階級者が必らず失業してゐる。必らず就職難に惱んでゐる。必ず生活難にあえいでゐるのである。

だから今更、知識階級者の生活難、就職難を云々する必要はないのだが、それが特に痛切に訴へられるについては、理由がある。即ち或る一定の度合を越して、知識階級の豫備軍が增大すると、そこに始めてこの全體が『新らしい現象』でもあるかのやうに、世に訴へられるのである。が、實は相對的の話に過ぎないのである。

そこで我々から見ると、知識階級者の生活難や就職難、實は勞働者のそれと少しも變りはないのであり、從つてそれが本統の、間に合せでない解決の道も、勞働者もそれと變りはないのである。つまり知識階級の位置と運命も今日では、勞働階級のそれと少しも變るところは無いのである。

勞働階級がその生活難や失業を克服するためには、或は經濟的に資本家と、或は政治的に支配階級と、いやでも鬪爭しなければならないし、その鬪爭を通じてのみ、それが本統の克服へと前進し得るやうに、知識階級も亦、それが生活難や就職難や失業やを克服するためには、或は經濟的、或は政治的に、資本家階級や權力者と鬪爭しなければならない。さうでない以上、今日の狀態は永久に變るところがないのである。

ところで勞働階級は、最早やすでにその鬪爭を開始してゐる。にも拘はらず、知識階級はまだ、資本家や權力者の空幻的な施設や恩惠にすがつてゐる。これは知識階級が本質的に弱いとか何とか言ふ理由からでなく、歷史的な理由から來たことである。

資本家階級が全體として巨大な利潤を收め得てゐた時代は、先づ第一にそのお裾分にあづかつた者は知識階級であつた。それは封建時代に大小の封建諸侯の收得のお裾分を先づ第一に武士階級がありついたのと同樣である。だが、それは封建諸侯が與へて他に及ぼすだけの餘裕のあつた間のことだけだ、それが出來なくなつて札差から年貢米を引當に金を借りたり、町人の丸持ちから融通して貰はねばならなくなると、手下の武士にかまつてはおれなくなり、武士階級にひどい貧乏士も出れば浪人

者も出る。資本家階級に最早他に及ぼすだけの餘裕がなくなると、知識階級は遠慮會釋もなく街上に放り出される。それが「危險思想の源泉」であらうが何であらうが、全體としての資本家階級は、そんなことにはかまつて居られない。資本の命令が無上命令である。

現實はこの通りである。收入もその社會地位も運命も、勞働階級と知識階級とにおいて殆ど變りはない。この狀態を言ひ表すために、無產知識階級とか洋服細民とか言つた言葉が、いつの間にか案出されて、支障なく流用されてゐる。

だが、知識階級の意識は、なかなかその現實と符合しない。何か知ら勞働階級よりは一段上の身分に在るやうに考へてゐる。恰かも痩せても枯れても猶一箇の武士だと云ふ意識に似てゐる。痩せたり枯れたりしたら最早町人と同樣か、以下である筈だが、武士の意識はその現實を容易に肯定しない。理解では肯定しても情感でそれを肯定しない。

そこで知識階級者の苦痛は、二重の重きを加へる。一方には甚だ散文的な現實の生活難の苦痛であり、他方にはその知識階級者としての非現實的な意識の負擔から來る苦痛である。第一の苦痛も手痛く存骨をおさへてゐるが、第二の苦痛も心臟にたへられぬ苦痛を覺えさせる。

この二三年來、何々會社員とか下吏とか云つて知識階級者の一家自滅の悲劇が、よく新聞に報ぜられる。自滅にいたるまでの苦痛を解剖して見ると、必ずそこに今言つた知識階級の苦痛の二重性が感ぜられないことはない。近い話が芥川龍之介君の自殺である。そこには勿論いろんな要素があるが、芥川君でさへその遺書にすでに生活上の漠たる不安を述べて居り、周圍の人々に常に收入の不安を洩らしてゐたと聞く。それほどこの苦痛は執拗である。

既にも觸れておいた通り、大學や專門學校の卒業生の就職難も、この廣汎な知識階級者の生活難の全體を形成する一部分である。從つて就職難にたいするそれらの卒業者の心理も、ユアンスの違ひこそあれ、普通の知識階級者のそれと違ひはない。もし一方の幻想的な、非現實的な意識から來る苦痛がなかつたら、生活難から來る苦痛はよほど緩和されるに相違ない。そうして一種の勞働者即ち技術的勞働者としての自覺と意識とを持つて來たら、自ら進むべき道が開けるに相違ない。

イギリスのディスデール・ストッカーといふ人は、歐洲大戰後におけるイギリスの知識階級——廣く中間階級の位置の低下を憤慨して、『中間階級に何の誤りありや？』といふ冊子を書いて、知識階級者は社會の中堅だといふ意味のことを世に訴へ

である。と思ふとドイツ社會民主黨のギョルリッツ綱領は、知識階級者のプロレタリヤ化を說いてゐる。更にそこでは頭腦勞働者などと言ふ新用語が行はれてゐる。いづれにしても知識階級の經濟上の地位の低下は、世界的現象であることが分る。

そして知識階級の地位が最も困難となつてゐるドイツでは、官吏社會でも會社員社會でも、謂ゆる頭腦勞働者の勞働組合が出來てゐて、その力によつて進まうとしてゐる。日本ではさういふ運動は極く最近のことで、無產俸給生活者組合と云つたものの出來たのは、この二三年來のことである。その點で見るとまだ日本の知識階級者は『幸福』であるのかも知れない。それとも氣力がないのかも知れない。

そこへ行くと資本家の方が遙かに現實的である。今日でも一昔も二昔も前のやうに、知識階級を直參扱ひにするやうなことは殆んど無い。その雇用も解雇も勞働者にたいすると殆んど變りはない。ところが知識階級者の方ではまだ資本家や雇主を恃つて、自分達の仲間の力を恃ることをしない。それほど非現實的である。自分の小さな經驗を云々して少し氣がさすが、十年ほど前、或る新聞社に勤めてゐた時、本統にその新聞社の文化的使命！などを考へて、報酬などを大して問題にしないで働いてゐたが、その新聞社の資本家は、どうしても經濟的に立つて行かないと分ると、忽ち一本のハガキで大勢の記者を處置してしまつた。その時何だか狐につままれたやうに思つたが、實は平生から狐にばかされてゐたのであつた。

大學や專門學校の新卒業生が社會に送り出されるシーズンがまたやつて來た。そして社會政策家や當局者が知識階級の救濟を云々するシーズンがまたやつて來た。

新卒業生の就職も、知識階級の救濟も、それだけ切離された問題ではなくて、大きな社會經濟の一部分であるから、社會經濟がどうにかならない以上、シーズンが何度やつて來やうと、來るものも來るものも一層惡くこそなれ、良くなる目當てはない。これだけは十分に心得ておく必要がある。から言ふといかにも悲觀的、消極的に響くが、實はこの現實をしつかり掴んでおくことが、凡ての初まりである。

光明的、積極的な出發はそこから成される。頭腦勞働者たることは現實である。現實を知ることそのことが、すでに光明的、積極的な出發の一歩である。（終）

知識階級の沒落と其の更生

永井亨

一

世に知識階級といふ用語ほど不正確で不適切のものは尠からう。一般に學問又は知識を提供してこれで生活の資料を受くる階級がそれだといはれ、或は精神又は頭腦を働かせて生活の資源を求める階級がそれだといはれ、或は又知識階級といふのは「文化的能力の優秀なるもの」の集團であるといはれてゐる。一方所得の源泉を智的勞働又は勤勞に求める精神勞働者乃至頭腦勞働者としての資格から見れば筋肉勞働者と並ぶ勞働階級の如くに考へられ、他方生活の資源を財產に求める餘裕もなく、從つて又不勞の所得もなく、勤勞の報酬でその日を生活して行く勤人、給料生活者としての地位から見れば賃銀勞働者と同じやうに有產階級ではなくして無產階級に屬するものゝ如くに考へられる。それ故に嘗てはマルクスが「民族的階級」又は「自らを民族として構成する階級」でさへないとした賃銀勞働者又は筋肉勞働者ばかりをプロレタリアといつてゐたのであるが、今やそのプロレタリアの中には給料生活者又は精神勞働者も含まれて、謂ゆる知識階級が無產階級即ち勞働階級の一部を構成するかの如く說かれてゐる。嘗て又マルクスが有產無產の階級を對立させてそこに搾取なければ階級なしとしたそのマルクス流の見方に發する有產者即ち資本家、無產者即ち勞働者といふのが今日普通の用例であるが、その無產者の範圍はマルクス當時から見れば甚しく擴大されて今や、謂ゆる知識階級に屬する精神又は頭腦勞働者も一般にその中に包含されるやうになつたのである。それは知識階級が勞働階級と共に產業革命の產物として生れた新興階級であつて、その多くは國家、公共團體又は資本階級の下に職業を求めて從屬的勤務に服しそこに地位の安固もなければ生活の安定もないこと昔日の知識階級と全然違ひ、その知識も勤務も商品の如くなつて需給の法則に從はねばならぬことと今日の勞働階級と毫も異なるところがないから

である。かくては知識階級は從屬的なる經濟的地位に置かれた智的勞働者に外ならないで、その利害を共にし境遇を同じうするものは勞働無産階級であらう。

然しながら謂ゆる知識階級中の極めて少數なる自由職業者例へば、醫師、辯護士、著述者といふが如きは暫く措いて問はず、その最大多數のものは大企業の使用人又は官公吏となつて資本階級を擁護し或は少くもそれを支持する立場に置かれてゐる。しかもこれはその提供する知識技倆や學問藝能が企業管理、經營乃至統制といふ方面にその職業を求めその地位を獲得し易いからである。そこには又久しきに亘る傳統因襲の然らしむるところからも名譽、體面、尊敬、威力、さては虛榮などがその職業地位に伴ふことを常としてゐる。そこで知識階級は勞働無産階級とは甚しくその職業地位、その心理環境、その待遇勢力を異にして一般に勞働者を見ること劣級者の如くであり又無産民衆に對すること優越者の如くであり、有產資本階級と並列して勞働無産階級を見下すこと恰も昔日の僧侶が貴族と伍して有産市民を見下した如くである。ましてやその日常生活を見ればその家族と共に勞働無産階級のそれとは全然生活様式を異にして、住宅、衣服、調度も、言語、振舞も交際、娯樂もおのづから違つてゐる。然らば知識階級は寧ろ資本階級に從ひ有産階級に加はつて智的有産者たるべく運命づけられてゐるのか、如何せん智的有能者であらうとも財的獨立者とさへなり得ないものが容易の業では智的有産者となり得べき筈がない――極めて少數の自由職業者を除いては。

顧つて知識階級の職業上の性質を見ると上述の如くにまとに一見有利な立場に置かれてゐる。よしやその具へる知識は餘人を以て代へがたいものでたいにせよ何ものか學歷と素養とを必要としておのづから專門に涉るとを常とするから、いかにその經濟上の地位は從屬的であらうともその受くる報酬は必ずや一般勞働者のそれよりも多い。そこで恰も有産無産の二階級の間に挾まれた中間の中産者の如くなつてくる。殊には又その職業が甚だ多岐に亘り區々であつて――事務的にも技術的にも――複雜してゐるばかりでなく、或は指導的の管理者ともなれば器械的の使用人ともなり、或は勞働資本何れかの階級の中に籍を置く者があり、或は有産無産何れかの階級の境界に身を橫たへる者があり、その成員の在籍、所屬甚だ明瞭を缺き、宛ら社會階級の中間に位し中流を泳ぎ中等に座するが如くである。時としては社會の中堅を占める階級の如くにさへいはれてゐる。嘗てヨーロッパにおける第三階級ブルジョアは貴族僧侶に次ぐ市民階級であつてまさしく時代の中產階級でもあつたが、一たび產

業革命の過程を經んだ後にはその一部のものは有產な資本家となつて殘る小工業者、小資商人等々の如き貧しいながらも多少の財產を有し又小規模ながらも獨立の企業を營む者が今や舊中產階級又は小有產階級の名によつて呼ばれ、更に又專門家の資本と勞働の結合によつて生計を營みそれで生活が安定してゐるところから中產、中流、中等、乃至中間などの階級名が冠せられてゐる。恰もよし產業革命と共に勃興した新知識階級は有產無產、勞働資本の二階級の間に彷徨し介在してゐる。そこでそれが舊中產階級と伍する新中產階級と呼ばれ、或は又小有產階級と並ぶ中流(中等、中間)階級とも名づけられることとなつた。さうして多くの學者はいふ、中產又は中流階級とは時代に適應せる人間らしい「文化生活を營み得る階級」であると。その所得標準額は戰前のドイツにあつては九百圓を最低として我國では千二百圓を平均としたといはれ、戰後(大正十一年)東京市の調査にかゝる一家五人の中流階級標準生活費は一年二千圓であるといはれ、或る學者は中流階級の生活又は所得標準を「新日本標準」と稱して年額千五百圓乃至五千圓(平均二千五百圓)のところに置いてゐる。同じ學者は全戶數の四分四厘即ち五十萬戶がその階級に屬するものだといひ「中流階級の中堅である知識階級を代表して居る官公吏」就中文官中その階級に該當するものは一萬二千人(年俸平均金壹千五百七十一圓)であつて判任官(十四萬七千人)は下級として除外し平均月俸(十七圓八十錢人)に至つては貧民階級に屬するものだといふ。かくては知識階級は容易に中流階級の潮流に棹させず中產階級の地位を維持し得まい。かやうに知識階級が中產階級の實たる中堅を占めてゐても——しかも一大多數の者はその埒外に置かれてゐては——對等の交際も結べず、況んやその職業において又その生活において共通するものが殆んどなく、一は智的有能者であり他は財的獨立者であり、一は財產も貯畜もなくして生活程度が高く他は知識も教養もなくして生活標準が低く、一は消費者として他は生產者又は販賣者としてのみ交渉を有するのであらう。その事よりも、舊中產階級には小有產階級が漸次に沒落して有產無產の二階級の對立となるといふマルクス風の見解に從へば、かかる階級といつまでも旅路を同じうしてゐては知識階級の運命が不安とならう。といふのは知識階級が中產階級とは異なつて一方財產上の所得を缺如し他方從屬的の勤務に束縛されてゐるために甚だ不利の境遇に陷らうからだ。

結局において知識階級は獨立の智的一階級を構成するものでなく又それを存續し得るものでないのであらうか。

二

上述の如く謂ゆる知識階級は一方勞働無產階級として有產資本階級に對立するが如くであり、他方中產又は中間階級として有產無產、勞働資本の間に介在するが如くである。從つて財產の有無多少から見れば有產階級に對立する無產階級の如くであり、所得の源泉から見れば資本階級に對立する勞働階級の如くであり、所得の大小から見れば有產無產の中間に位する中產階級の如くであり、職業の種類から見れば資本勞働二階級の間に介在する知識階級そのものゝ如くである。この最後の場合こそ知識階級の知識階級たる所以があるのでなからうか。

今こゝには階級の本質概念や區分標別や身分と階級、階級と政黨、さては財產や所得や、職業と階級との關係異同については一切論及しない。が、謂ゆる知識階級はその性質階級的といはんよりは寧ろ職業的であつて、分業に基づく職業、職業に基づく階級といふところにその意義と價値とがあるのであらう。苟もそこに社會的勢力及び地位の異なる一團の人々があり又階級的利益及び意識の異なる一團の人々があれば、必ずやそこに社會階級が成立して垂直的か縱斷的かの社會的區分が劃され或は堆積的か成層的かの階級的集團が結ばれ、その間おのづから上下、權力服從、治者統治者、搾取被搾取の關係が生ずるのであらうがしかし同時に又苟もそこに社會的統制及び目的——或は社會的利益及び意識——の存するところ、將た又社會的職能及び職業的利益の異なるところ、必ずやそこに水平的か橫斷的かの區分が劃され或は並列的か系脈的かの集團が結ばれ、その間おのづから對等、均衡、指導被指導の關係が生ずるのであらう。從つて階級專制又は獨裁が行はれてゐたから社會階級がたゞ上下の關係にのみ割れて對等の關係には劃されなかつた。將來の社會組織が民主的に改革されるやうになれば社會階級も縱橫の關係に組まれ又は經緯の關係に織られて機能的となり職能的となるのであらう。謂ゆる知識階級の將來の運命はかゝつてこの點にあるのではなからうか。

何れの國にあつても現代の謂ゆる知識階級は教育の普及發達と伴つて供給夥多となり易く、その所得は固定して動もすれば物質とかけ離れ、名聲や、威信や特權は漸次に減滅してそこに勤人、使用人、給料又は俸給生活者の社會問題が生じたのである。當初のほどは有產資本階級を擁護し支持することによつて自己を擁護し支持して來たが後にはその下にあつては悲慘の境遇に陷るべき傾向を知つて自らの階級のために又その境遇を同

じうするが勞働者階級のために社會運動を起すやうにもなつたのである。然、しかし前述の如く知識階級を必ずしも同じ境遇に置かれてゐるのではなく、もとより中產階級とはその境遇を全然異にしてゐるのであるから、結局自らの本然の立場に歸つて自らの運命を開拓する外ないといふのに、さてその職業は多岐に亘つて階級の意識が弱く團結鬪爭の力に乏しく、從つて自らの問題である如き社會問題を勞資二階級の間のいはゞ第三者の問題の如くに傍觀する譯にもゆかず又傍觀してはならぬ。然らば沒落せんとする知識階級の更生を何れの途に求めたらよいのか。

時として學者は教へる、これ資本主義末期の必然の事象であると。借問す、アメリカの資本國では職業人口の七パーセント半が事務員階級で五パーセントが自由職業者である、そのアメリカにあつては知識階級の問題が深刻であることを聞かない、革命後のソウエト・ロシアには一時その使用人階級が勞働者階級の六十三パーセントまでに達して驕いて執抑をしたと聞く、共產主義の社會にあつては謂ゆる知識階級としての職業に高き報酬を拂つて勞働階級と異なる優越の地位を與へるであらうか。幸か不幸か日本の社會は資本主義と封建主義の兩つながらが支配してゐる過渡的の社會である。ここに勃興したる謂ゆる何の階級も苦しくなり進み、農民へ一日の暇…以前の如くには…じ…今までにはなくなりはじめてきた。…奴隷、後には革命後のロシアの文化的職業者に…をさへ得られなかつたといふのに。我國に封建制度が崩壊してまだ六十年を經過したばかりである。士農工商の身分階級は廢されたが平士族平民の名稱が今も猶ほ行はれてゐる。官尊民卑と職業的貴賤の念慮は深く人心を支配して今も猶ほ去らずにゐる。明治時代殊にはその前期にあつてはこれこそ眞實に新知識を要求した。當時においては知識こそ何よりの目標であつたがその商品は遺憾ながら粗製濫造されて技術よりも事務を、それよりも議論を重しとし、經濟よりも法律を、數字よりも、文字を重しとした。一般に知識階級は職業に從事するといはんよりは寧ろ身分を獲得するといふことを考へた。かゝる知識階級の要求と封建時の風習とが今も猶ほ遁つて日本の知識階級を特徴づけてゐる。その資格や學歷も市場の商品と化して賣らされば知識が勞働よりも甘んぜられ資本に假られることはいふまでもない。しかも猶ほ體面を重んじ品位を保たんために自らの生活標準の當然高かるべきであることを信じ、所得不相應の生活を營んで借金をしながら身分相應の生活が營めないと嘆じてゐる。かくて日本の知識階級は資本主義の社會といはんよりは寧ろ封

らの封建主義によつて沒落せんとしてゐる。恐らくは封建主義よりも資本主義、資本主義よりも共産主義の社會は知識階級に向つて特權と名譽と威信と體面と虛榮とを與へてくれないであらう。報酬も暇閑も奢侈も怠惰も。社會が生産的となればなるだけ能率的となればなるだけ。然らば日本の知識階級はいかにせば沒落の運命を免れて更正の途を見出し得るのであらうか。

三

さて終りに日本の今日の知識階級が更生せんための方策を案ずれば、大要左の如くである。しかしそれは日本の今日の知識階級の運命をトするとともならうから易者の立場に置かれた私のいさゝか當惑するところでもある。といふのは當るも八卦當らぬも八卦といはれてゐる如く吉凶何れにもトし得られようからだ。もう一つ念のため斷つて置くが知識階級といふのは謂ゆる知識階級であつて、例へば有産、無産、中産何れの階級たるとを問はず知識程度の高まるべきことは勿論だがそれはこゝに扱ふ知識階級の問題ではない。

一　何よりも先づ知識階級の人口を減少してその増加率を低下せよ

二　次には知識階級の素質を高めてその生産能率を増進せよ

三　各自の職業を専門化して職業階級としての立場を明かにせよ

四　封建的の傳統を棄てゝ資本制の缺陷を去らしむべく、卒先せよ

五　各自の知識を深め品位を高め教養に努めて知識階級たる內容を充實せよ

六　學問技能を資本や企業と結んでそれを有效ならせ進んでその啓發に任ぜよ

七　科學技術を勞働や熟練と結んでそれを有効ならせ進んでその指導に任ぜよ

八　職業的利益を増進しつゝ社會を機能化し職能化すべく努力せよ

九　社會的目的を達成すべく民主化過程を遂行すべく努力せよ

然らば將來の知識階級は智的職業階級として又職業的社會階級としてその地位を確保しその勢力を獲得しその機能を發揮し得るであらう。

昭和一〇・一一・六

窮乏化の「知識階級」と無産者運動

猪俣津南雄

(1)

現代日本の「知識人」は明かに「生産過剩」狀態にある。

今日の知識人は社會的に生産される。謂はゆる「知識階級」は決して一の社會階級ではない。だが、「高等教育を受けた人間」として特殊の勤勞を賣り、時には筋肉勞働までも賣りながら、而かもブルジョア的な生活樣式を生活し、ブルジョア的な生活標準を維持せねばならないといふ共通特徴によつて一つの社會群（乃至社會層）を形づくつてゐる。

此の意味の知識階級は、一の資本主義的生産物である。資本主義はプロレタリアと共にサラリーマンをつくり出した。ブルジョア的國家行政（乃至司法）に携はる官公吏辯護士をつくり出した。そして之等の知識人を養成する爲めの知識人——教員、講師、教授をつくり出した。更にまた、資本主義に依存し、資本主義的に點睛された自由職業の人々をつくり出した。——醫者、藝者、文士、批判家、記者、劍客、牧師、俳優、等、等。（尤も、此のグループの或者は、知識階級の仲間入りを許されてゐない）。

近來殊に著しくなつた知識人の生産過剩は、不景氣の深刻さと密接に結びついてゐる。工場で生産される絹糸や鐵材やセメントの捌け口がないやうに、學校でつくられる知識人は自己の勤勞や「頭腦勞働」の市場を見出すに苦んでゐる。加ふるに多くのサラリーが首になり、また、たらんとしてゐる。しかるに、絹糸や鐵材やセメントの生産過剩は直ちに資本の利潤斷定に現はれる所から利潤を標準として然るべく生産制限を行ふか若しくは資本そのものの整理を行ふのが「合理的」だとされ、また行ふてもゐるが、知識人の生産過剩にあつては知識人それ自體の窮乏化を來たすのみで資本は別に痛痒を感じない所から、知識人生産の「操業短縮」や諸大學專門學校の「徹底的整理」といふが如きは不合理若しくは背理として全く問題にされず、

また問題にしたからといつて「輿論」はそれの實行を許さない。

さりとて、日本知識人の勤勞乃至頭腦勞働の捌け口を生糸や綿布のやうに海外に見出すといふ譯にも行き兼ねる。茲において聰明なる我がブルジョア政治家の對策は、知識階級の職業紹介機關特設の宣傳及び實行となつて現はれた。が、もちろん、その效果と實績の點については、發案者それ自身が「甚だ疑問」とする所である。

(2)

かくて我國における資本主義組織は、商品生産の發展のみならず又た知識人の增殖をも阻碍するところの桎梏となつてしまつた。

といふのは、此の不景氣なるものが尋常一樣の不景氣ではないのだからである。大正九年來の深刻な慢性的不景氣の本質に關しては曩きに本誌に寄せた一文に詳論して置いたが、それを一口に言へば資本主義に生じた質的變化の故の不景氣だといふにある。我國の資本主義は、戰時から戰後にかけて、獨占を主要特徵とする最后的な資本主義に變化すると同時に沒落期資本主義の世界的連鎖の一環となつた。獨占の資本主義は、海外への發展によつてのみ好景氣を期待し得るのに、世界市場に最早や調和ある順調な發達がなく、特に、「開發」し掠奪すべき半開未開の領域は急に狹ばめられてしまつた。日本資本主義はそれ自身未だ下向運動を開始するには至らないが、發展の速度は甚だ緩慢で、絕えず恐慌の危險に脅かされてゐる。

獨占の資本主義の一特徵は、絕えず企業の合同や併合を行ふことにある。かくして一單位の資本に對する使用人の數を減らすことにある。戰前の獨逸においてさへ、此の「冗員淘汰」主義はサラリーマンへの脅威であつた。今日の日本では、資本主義の發展の速度そのものが緩慢なることにより、脅威は一段と深刻化してゐる。雇つた人間を減らす企業があるといふだけでなく、雇ふべき人間を雇はないのが多いから堪らない。銀行會社が繁昌しない時節柄に、官吏や辯護士や教員だけは景氣がよく、文筆勞働者の懷だけが暖かいといふやうな資本主義社會はあり得ない。

(3)

知識階級の就職難といふ見地からすると、知識人に對する資本主義的需要の相對的減少といふ事實と並んで、知識人の供給の絕對的增加、—例へば學校卒業者その者の、從つて求職者數そのものの增加といふ現象をも無視するとは出來ない。戰前ま

での傾向として、「子供は月給取りにするのが一番よからう」といふのが、中産階級の父兄一般の意見となつた。戰爭時代の途方もない景氣は、その意見を信仰にまで引上げた。おまけに學費の工面もよかつた。そこで中學、高等學校、大學の入學難が盛に論議された。——むろん、資本主義萬々歲を隱れたる前提として。

今や、幻滅の日が來たのである。

知識階級とその無數の候補者逹とが、考へ深くなつて來た。失業と就職難！　だが、待つてくれ、たとひ仕事にはありついても其の收入で「紳士」としての體面が保てるかしら？　それは贅澤か、——だが待つてくれ、吾々はどんな仕事をさせられるのだ？　紙幣の勘定——簿記係——勸誘員——工場監督——セールスマン——そこで吾々の人格と個性はどうなる？　だが、昇進！　さうだ、吾々は、資本家の、重役の子弟を向ふに廻して爭ふまでだ。——かくして決意は愈々悲壯である。だが、玄關から出入りせずに、そつと勝手口を利用するに至る時、問題は、再び「人格と個性」に戻る。

獨占の資本主義は、優れた頭腦をたゞの機械に轉化する。乃至はまた歯車の歯に。

（4）

奴隷化の知識階級に動搖する、有らゆる社會的動機は、この政治的表現を有つ

勝手口を利用する方の一味は當然にブルヂョア反動政黨へ行く。だが、知識階級大多數の行方は、小ブルヂョア政黨である。

しかし、また、その少數——我國にあつては比較的に大なる少數は、必然に、プロレタリアートの運動に參加する。「學生社會科學運動撲滅」の根據は、知識人過剩生産の根因を絶つにある。だが、それをなし能ふ社會は、既に資本主義社會ではない。

「考深き」インテリゲントにとつては、問題は今や簡明的に二つに一つだ。即ち、個人的に生きて社會的に自己を殺し、從つて眞の自己を殺すか、それともまた社會的に自己を生かしてもつて個人的にも生きるか。そして、生きようとすれば、プロレタリアートと結びつくより外はない。プロレタリアートの奏する進行曲のみが「人間的自由」の獲得を保證してゐる。

プロレタリア運動は、常に優秀眞摯な知識分子を待ち設けてゐる。だが、なまなかな分子は之れを反撥する。わけても、インテリゲント固有の個人主義的人生觀を持込む者を排斥する。

無產階級は、社會的に自己を生かし得る知識分子のみを吸收して同化し、同化してそして自分自身を强めゆき、高めゆくところの、偉大な能力に惠まれてゐる。

知識階級の過剰と質の變化

長谷川如是閑

今日の教育制度の欠陷の基く所は社會制度である。生產の組織が社會的經濟即ち消費と分配との社會的管理に基づかずに、統制のない個人的意欲の鬪爭に依つて行はれてゐる狀態に於ては、その社會に必要な人間的技能の分配に於ても、全體の關係に於ける統制を持つてゐない。どれだけの物資がいか樣の分配に於て、社會的カロリーを滿たすべきかといふことに就いて、少しも科學的な意識を持つてゐないといふ有樣であるから、生產も消費も、社會の胃の腑のむしろ病的な要求に從つてゐるといふ狀態である。人間の機能は、物資が社會的生理のカロリーを滿たすために適當に分配されねばならぬと同じやうに、必要な機關に對して、必要な機能を分配する組織をもたなくてはたらない。教育は人間的機能を完ふするための智能の養成で、物資の生產と同じく、その智能の社會的要求に應ずるものである。智能それ自體の要求といふやうな事は、社會的生存に何等の機能を持つてゐない階級の閑事業である。

近代の教育は、昔の貴族階級の教育が、社會的生存の機能に關係のない、階級的享樂として行はれたに對し、一般社會の需要に應ずる必要な機能の養成であると考へられた。恐らく新たに起つた教育の革命的變更としては、機能的の諸技術を教育の中心に取り入れた事であつた。中世紀迄の教育は、人間の機能的方面はやはり社會に機能的の働きをしてゐる、ギルド的の諸集團が自治的にそれを行つてゐたが、それは教育とは言はれなかつた。即ち天文、醫術、農學、工學、商業其他一切の機能的なる能力は、凡て教育とは沒交涉に、その各の機能の自治的集團たるギルド式の社會集團に於て、徒弟的の組織で行はれたのである。そして教育といふ方面は、人間的智能の機能的たるも

の、即ち右に述べたやうた技術的方面のこれを一切除き去つて、ただに智能から社會的機能を抜き去つた、抽象的た、理念的た、形式的な方面のみを取扱つた。昔の教育は、人間の生活から一切の地上に於ける具體的の生存行動を取り去つて、天空に浮ぶことの出來る人間生活——即ち觀念の生活——だけを取扱はうとしたのである。さういふ生活は、地上に立脚する生活様式の全部を、中空から眺めた心の狀態であつた。即ち純支配者的の教育である。人間的生存を生きる方法でなくて、それを左右する方法であつた。

教育が革命的變化を來したのは、さういふ中空的の生活が、全部的に崩壊した、即ち貴族政治の崩れた爲であつた。支配か天空から地上に降つて、社會的機能の組織の現實なマネージメントにあたるものが、支配の實權を握るに至つたことが、教育を天空から地上に引き離した所以であつた。昔の支配が生産の組織と沒交渉な統制であつたに反し、今の支配は、支配者が生産手段を獨占することに依つて、その支配力を得たのであつた。從つて現代の教育は、生産手段の獨占者が被等の支配組織に於ける必要な道具、即ち機能的な智能並びに技術の養成であつた。けれども新教育制度の起り始めは、機能的な意識よりも、支配的な意識が實際に教育方面を支配して、どこまでも教育が技術的支配と結びついてゐた。同時に、特に技術的な教育が起らなければならないことを主張したものも間々あつたが、實際に勃興した教育は、多く政治、法律に關したものであつて、その外には醫術位のものであつた。技術教育は實際生産手段の獨占者が、國家なり自治體なりの政治的實權を握つてゐるまでは、國家や自治體の教育として、概して不振であつた。教育を受ける側も血統的な支配意識が、一般教化の方面に行き亘つてゐたので、やはりその方面にのみ進出したがる傾向を持つてゐることを免れなかつた。從つて機能的でない支配者的の學校を設けることが、經濟的にも有利であるといふ事になつて、益々教育が非技術的の學術機關に傾いた。今日の知識階級の就職難は、主として右のやうに教育が時代と食ひ違つて、非機能的な、貴族的な、支配者的な智能の養成に傾いたことに主な責任がある。現にさういふ教育を受けた者も、實際社會に出て見ると「高級」な「超世間的」な智能が少しも役に立たないので、下級教員や、下級事務員のやうな者として、働く外がない有様である。其中で高級に上つたものは、皆技術的に發達してそこまで行つたものではなく、殆ど悉くが政治的理由に依つたのである。然しさういふ理由に依る發達は、極めて少數者の特權であるから、大多數は高級の智能の少しも役立たない機械的の地位

に呻吟してゐる外はない。又高い地位に發達した人々と雖も、彼等が教育に依つて與へられた智能は、何等の機能を發揮することも出來ないで、全部忘却されて了つたことは、後藤新平氏の醫術だけではない。要するに何の爲に高級の教育が與へられたのか意味のないものとなつて了つた。そして今日ではその教育に依つて養成された非機能的な智能の持主が、一番悲慘な失職者として氣の毒がられてゐる。

　これは日本の狀態であるが、然し恐らく西洋の文明國では、そんな狀態を卒業して、もう一歩先に行つて、而かも同じ樣に難局に陷てつゐるのである。日本のやうに一つ都會に法律、政治に關する大學が十もあるといふやうな時代錯誤の國は何處にもなからう。又そんなものを拵へすぎて閉口したのは、恐らく戰前のロシヤ、ドイツ位のものであらう。西洋の大學は、その起源に於て國家的でなかつたためでもあらうが、ギルド的に良く需要と供給とが一致してゐた。近代以前迄は、大學は社會的必要若くは階級的必要を滿たす機關として、比較的機能的な範圍を守つてゐた。中世紀の大學の如きは、むしろ社會的に必要な智能のギルドとして、非常に盛大を極めたが、而かもその無數の卒業生の行き場が無いといふやうな事は少しもなかつた。でなければイギリスの大學のやうに、貴族の遊び場であつて、やはり卒業生の就職難を感ずるやうな剩餘製造機關ではなかつた。

　ヨーロパ大陸の教育は、現代に及んで、日本と違つて、大學そのものが急劇に機能的方面に進出して、著しく技術化して、時代の要求に應じた。從つて彼等の教育の欠陷は、その內容實質ではなく、その統制が社會統制と同じく、全體的管理を持つてゐなかつたといふ點である。丁度物資の生産が資本主義的自由に依つてゐると同じく、教育もその必要な機能を無統制の組織に依つて供給した。現代のヨーロッパの教育の被害者は、與へられた智能が無機能なるがために、難局にあるのではなく、有用な智能を抱いてその働き場所がないのであるから、言はゞ日本の智識階級の失職が、不熟練職工の失職であるとすれば、ヨーロッパのそれは、熟練階級の失職である。戰前のドイツに留學した日本の高級の技術者は、ドイツに行つて自分よりも數倍優れた高級技術者が、汚い下宿にウヨ〳〵してゐるのを見て、驚かされた事は珍しくない。

　日本はヨーロッパのやうに、教育が、機能的に進んで而かも無統制なために、その機能を空費せしめるといふ狀態に至らない前に行き詰つた。機能的な智能が全體的に行き亘らないために、さういふ智能の持主は概して就職難を逃れてゐる。中間階

級の內容は、ヨーロッパにおいては有用な機械が用ひ所がないといふ狀態であり、日本のそれは、有用な機械が——機械でない人間が——遊んでゐるといふ狀態である。機械になりきれば、日本ではまだ少しは需要がある。有り餘つてゐる中間階級の內容に、日本と西洋とはこれだけの相違がある。

この事は比較的重大な社會的影響を持つ。中間階級は何れにしても、智能的要素である。だから社會が日常の平和な進行を採つてゐる時にも、その機能的な作用を中心的につとめる地位にある。純勞働者と純支配者とは兩極端にあつて、知識階級はその中間を繋いでゐる。その點は技術的な階級も同じである。從つて智能的地位を造る機關は、この統制關係の必要に應じて、嚴重に調節されなければならない。支配的のものも技術的のものも、全體の統制と沒交渉に、資本主義生産の物資のやうに、造つて置いてから賣り込むといふやうな方法を以てしたならば、物資の過剩以上の難局に陷ることは知れたことである。物資の過剩はダンピングに依つても、腐らして了ふことに依つても、海に投げてもそれで濟むのであるが、智能の過剩はその人間が生存を主張する限り、必ずその人間の生存方法に影響する。從つて如何なる過剩智能を持つ者が多數であるかといふ事が、恐らく統制組織にも影響する。人間は單なる物ではなく、質でもあるから、質の異つた事は、社會的に異なつた影響を與へる。同じ過剩人口でも、その人口の內容如何にすると、その効果が自ら異る。昔のスペインの人間が、アメリカに發展すれば、單純なる掠奪者となり、土着人を滅してそこに掠奪國家を造る。これに反して支那人が他國に流れ出せば、極端に平和な商人や勞働者として、到る所にギルド都市を造りあげる。

彼樣な事は一定の社會それ自體の變化に對しても、同代の影響を與へる筈のものである。明治の新たな社會組織を持ち來たすために、當時の知識階級が、舊時代に教育された智能が、全然時代錯誤であることを知つて、それを捨てゝ生産的方面に發展した。そしてこれだけが時代を進展せしめる根本的動力となつた。舊智能にへばりついた者は、頑強にその舊智能を固持した者全部が沒落し、その舊智能を新しい支配的智能に展開せしめ得た者は、貴族院や、政黨や、軍隊やにその位を止めてゐる。その當時の中間階級は、其中で、それ以來、資本家に轉じ、又は資本組織の支配的智能乃至技術的智能となつた者が、新時代に發展することを得た。

然るに今日の日本の知識階級の失敗は、支配的智能の過剩で、資本主義組織の統制に使ひ途のない程多量の支配的智能を供給した結果である。ヨーロッパのそれは、これに反して技術

的智能の過剩である。而して智能が兎に角組織の中心的部分を占めるといふ結果、ある組織が變化を來す場合にも、智能が中心的な働きをするのであるが、その場合にその智能の性質が支配的であるか、技術的であるかに依つて、その進化に逆つた影響を及ぼすに違ひない。維新當時に智能の方向轉換が行はれたのは、智能が時代に適應して變化したのであるが、彼等の變化を受けない部分が、やはり支配的方向に活躍した。その當時はいかにも時代の進化にこの支配的智能が必要なやうに思はれたが、それは外觀で、實際時代を轉換せしめたものは、舊智能を捨てゝ、商人に轉じた連中であつた。そして結極この連中が、支配的智能の所有者を自分の道具にして了つた。

今日教育に依つて與へられた舊智能の所有者は、恐らく維新當時の智識階級と同じ樣な轉化を採るであらう。即ちその一部は全然支配的智能を捨てゝ、機能的方面に生活轉換を行ひ、他の一部は智能の支配的性質は捨てないで、その內容に於て方向轉換を行ふのであらう。前者は、現代の支配的勢力を持つ機能が、機能的の勞働であるといふ事實から、その方面に進出しようとするであらう。後者即ち支配的の智能は、維新當時には封建的のそれから、ヨーロッパ傳來の自由主義に轉じたのであるが、今日のそれは、社會主義のそれに轉ずべき必然性を持つてゐる。而かも維新當時のそれは、ある意味で失業者の方向轉換であつたから、實際的であるよりも、むしろ急進的であつた。今日の方向轉換者も失業者だから亦實際的であるよりも、急進的であるのは當然である。

ヨーロッパのやうに、技術的智能の過剩の存する場合は、社會組織の變化にあたつて、甚だ有利な地位を持つと言へる。機能的な智能の過剩は、組織の變化にあたつて、その活路を發見する機會が多い。如何に機能的な智能でも、統制關係の釣合上、全く過剩となつたならば、それは無用の智能の餘つたのと同じことであるが、然し現代の組織の欠陷は社會的生存に必要な機能が、その適當に作用する場所に置かれてゐないといふ事で、要するに一般物資の場合と同じく、分配組織の欠陷であるから、組織の變化が起る時は、必要な智能がその機能を働かせる場所に、適當に配置される機會が著しく增進するのである。從つて組織の完成が調子良く進行する筈である。これに反して、法律、政治、文學、經濟其他の支配的智能が、舊統制に根柢する智能であつて、過剩となつた場合には、組織の變化にあたつて、その儘では機能的に働かないから、配置さるべき場所を持たないことになる。要するに維新當時の溢れ儒者と同じ運命を免れない。これ今日のさういふ智能階級の一部に、質的變化を起さうとしてゐる所以である。維新前の舊知能に育つた儒者がルッソオや、スペンサーや、バックルや、ダーウヰンや、物理化學やを翻譯したのと同じ轉化を、今の智識階級の中の生存力のある者が、採りつゝあるのは當然である。

經濟時評

本年の景氣はどうか

牧野輝智

「景氣はどうなるか。」之は私等の常に聞かされる質問である。

私は此の質問を受けた場合に『一體景氣が良くなる、惡くなるといふのは何を標準としてのことです』と反問することが多い。すると或る人は『も一度大正七、八年頃の景氣は出ませんかね』といふ。是などは可なり無理な質問である。大正七、八年頃の好景氣は世界大戰といふ未曾有の大事件の賜物である。あゝいふ大戰爭が滅多にある可きものではない。又あつてはたまらない。既に大戰爭は想像されないとすれば、五十圓拂込の郵船株が四百二三十圓もし、東株が拂込の十一倍にも騰貴し、生糸は四千四、五百圓、綿糸は六百七十五圓といふやうな馬鹿値の好景氣が再現しやうなどとは考へられ得ないことである。

又或る人は私の反問に對して『現在と比較して、も少しふくなりませんかなあ』といふ。この意味の好景氣ならば本年當りは、實現しさうなものと私も考へてゐる。一體不景氣の嘆聲も可なり長い間のことである。大正九年春の財界反動で景氣は急に惡くなつた。其の頃の豫想では二、三年も我慢してゐたら又景氣が出るだらうと觀測してゐたものも尠くなかつた。然しながら大戰爭による經濟的打擊が世界的に深刻であつただけに、二年立つても財界には何等東天紅の謳ふべきものがなかつた。そこに又大正十二年の大震災が突發し、是が爲に受けた經濟上の損失は百億圓にも達したといふから不景氣の原因が二重になつて財界を沈滯せしめた次第である。

○　○

斯の如く我國の不景氣の原因が大正九年の反動と大正十二年

の大震火災であることは、何人も承認する所であるが、乍併此の原因からの打撃は、全般的にいふと、年一年に薄らぎつつある有様であるけれども、此の外に毎年異つた事情又は事件が突發して、其の歳々の不景氣を新たにしてゐる。今後の景氣を觀測するには此の點を明にする必要があるが、一昨年の不景氣は爲替の急騰が重大原因をなしてゐる。新年に四十三弗二分ノ一であつた對米爲替は年内に四十八弗四分ノ三まで恢復した。爲替の恢復は大體論としては大に喜ぶ可ことであるが、一昨年の恢復は餘りに急激で、而かも不自然であつたため、昂騰の道程にありて種々の悪結果を財界に及ぼした。爲替が安いために、對支輸出や南洋貿易などいふ輸出貿易の旺盛つてゐたのが、爲替の昂騰に會つて鼻先を折られた。しかもその昂騰が急激なため、後の船から送る商品は其都度値が高くなるといふ有様であつた。從つて買手は控える。輸出は頓挫するといふ結果を出した。然らば輸入の側はどうかといふと輸入ストックの所有者も亦損失を蒙つた。元來爲替が昂騰すれば輸入商は外國品を安く買える譯で、工合がよろしい筈であるけれども、是も回復の道程にありては損失を免れないものである。といふのは輸入商やストックの所有者は、後から來る品毎に輸入品の市價が安くなり、所有ストックは値が下る一方であるから、是を手放すために大なる損失を免れない次第である。斯様な譯で一昨年の財界は爲替急騰のため財界は著しい打撃を受け、商品界の爲替受難などと稱せられた。

歳が明けたら爲替も安定するし、必ず景氣は恢復するであらうと聊か望みを屬してゐる所に、暮も迫つて、先帝の崩御に遭ひ、一陽來復の望は頓挫された。

斯くて諒闇の中に新年を迎えたが春に入つて未曾有の金融恐慌が突發した。商工業者就中中小商工業者の金融は梗塞し、高利の日歩を出しても資金を得ることは出來なくなつた。資金の所在が急動し、三井、三菱、住友、第一、安田等の大銀行は預金がだぶついて、預金利下を提唱し、多くの銀行を之に隨從せしめたけれども、多數銀行の預金は激減してゐる。大銀行は中小商業者對手には資金を貸して呉れない。又是まで資金の融通を受けてゐた者でも、少しく信用の怪しいものはどしどし手形の切替へを拒否せられる。其の結果が事業界の金詰りとなつて現れ、昨年の不景氣を更に深刻ならしめた次第である。此他にも不景氣の原因は色々とあるが、此の點は特に陳ぶるに足る重大原因である。

○　○

私は昨年一昨年の不景氣の原因を割合に詳述したが、それは

今年の景氣を卜するには過去の事情を諒解してかゝることが必要であるからである。然らば今年の景氣はどうであるか。私は大して良くはならないが、昨年などに比すれば幾分よくなることゝ思ふ。第一に大しては良くならないといふのは何故であるか。それは不景氣の根本原因はまだ十分除去されてゐないからである。先づ世界的に見ても大戰の痛手は依然恢復するに至らず相當甚しい變調を呈してゐる。一例をいつても世界各國中、名實ともに兌換制度を恢復してゐる國がどれだけあるか。尤も米國の經濟界は綽々たる餘裕を示してゐるが、その米國にしても米國の生産品の捌け口たる歐洲各國の經濟的復活のはかばかしくないことは一つの悩みに相違ない。歐洲の各國が大戰の打撃を恢復し得ないやうに、我國も大戰中及大戰直後の放漫なる經營の後始末、大震災の打撃の後始末が共に片付いてゐない。此の整理が完成しない限りは堅實なる財界の繁榮は期待し得ないことである。私は財界恢復の基調たるべき此の根本問題の實状に鑑みて大した好景氣の出現はまだ望み難いと考えてゐる次第である。

○

併しながら年々の特殊原因に就て考察すると、今のところ昨年一昨年のやうな突發原因が財界を脅迫しやうとは想像され得ない。なほ貿易は昨八億を越す超過を示して居るが、今年の出超は四十六億程であるが、我國の國際貸借の實状より對外信用の程度等に鑑みて今以上に低落しやうとは考へられない。又今よりも一層騰貴しやうとは信ぜられない。結局本年の爲替は甚しい變動はないと見ることが妥當であらう。従つて爲替のフラクチュエーションに依る財界の脅迫といふやうなことはあるまいと思ふ。又昨年の不景氣の原因たる金融硬塞の問題にしたところで、是も急に改善を見ることは望み難いにしても、休眠問題も何とか片付くであらうし、昨年程の金詰りはあるまいと考へられる。特に金融界の基調は外科手術を受けて大に改善の實が現はれてゐる。金融界の癌腫たる臺銀問題が曲りなりにも解決したことなどは其の顕著な一例である。財界反動以來破綻に瀕し缺損を重ねて來た不良銀行の多くはいよいよ整理を斷行したのであるが、是が解決さるれば、之又金融界の基調を著しく改善するものであることを勿論である。

斯く觀察すると今年の財界は昨年一昨年よりか幾分好轉であるに相違ないといふ結論に到達する。併しながら積極的の事實を擧げ是れ等の理由により今年の財界は大に發展すると保障し得る程のものはない。此の場合政友會内閣が切りに人氣的の景氣誘導策を講じつゝあることは我々の看過してはならないこと

である。私は堅實なる意味の財界恢復は大に希望するけれども、不自然なる人爲策にて中間景氣を煽る如きことには斷じて同意しかねるものである。實は一昨年の爲替の奔騰も、昨年の金融混亂も、政府が政策を誤つたゝめに發生したもので、此の點に於て片岡前藏相の責任は重大であつた。今後政府が輕卒に景氣を煽るやうな策を講じたならば、或は花火線香のやうな景氣は出ても、それが爲に金融基調の改善も破壞され、産業界の根抵ある發展も期し難いこととなる。私は此の意味に於ても現内閣の不眞面目なる政策には多くの遺憾を覺ふる次第である。

明年度豫算案を評す

財界不況のどん底に無謀にも積極政策を遂行しやうと高言しつゝある政友會内閣が如何なる豫算案を作製するかは多くの人人の深甚なる注目を惹起した問題であつた。多年積極案の本尊の如く稱せられて居た高橋是清翁でさえ現在のやうな場合に放漫な豫算案を編成するは國家財政を危ふするものであるといふ意見を漏してゐた。財政上の直接責任者たる三土忠造君も無い袖は振れない、新事業を起すには既定經費の整理が必要であるとて各主務大臣に對して、既定費の節約による財源の捻出を要求したが、しぶしぶながら各省大臣が節約又は繰延を行ふた額は既定費の僅に三分、金額にして二千萬圓に過ぎなかつた。而かも新規要求事業の總額は一般會計だけで三億九千萬圓の巨額に達した。流石に豫算閣議は近年にない紛糾を來した。中にも最も無責任な意見を勇敢に戰したのは小川鐵道、山本農林などであつたと聞く。小川鐵相の積極論は就任早々から新聞紙上に頻りに傳えられてゐたが、何でも鐵道は哩數を增すことが焦眉の急務である。枕木などは減じてもよい。其の財源としては公債をいくら增發しても構はない。外債も亦結構といふ意見であるといふから、豫算編成閣議でも、財源難などてんで耳に入らなかつたのは當然である。山本農相に至りては之又小川鐵相以上の積極論者で、明年の豫算を編成するに、遠い將來の國力發展をも見越して財源とせよと提議した程の人であるから新事業の削除などには容易に應ず可くもない。しかし流石に自作農地法

案に至りては、山本君が如何に弁疏しても與黨に殆ど一人の支持者もなく、さんざん其の杜撰な點を指摘され、之が爲め物價案から削除す可く余儀なくされた。私は山本君の此の讓歩を正しい讓歩として寧ろ敬意を表する次第である。

○　○

近年に稀なる節約を重ねて漸く作り上げたる昭和三年度一般會計本豫算案の概數は、十七億六千一百萬圓である。容認した新事業の總額は一億八千一百萬圓である。尚ほ此外に追加豫算が三千萬圓位であるであらう。斯くて三年度豫算は十八億圓を突破せる巨大なる豫算となるであらう。經濟界には依然幾多の暗礁があり、一層緊縮節約の必要を痛感し、其の實現を期すべき場合に、是だけ思切つた大豫算を編み上げて、而かも何ほ政友會の一部連は未だ積極振りが足りないと不平顔である。

今は世界の各國を見るに米國だけは歳入過剩で財政の餘裕が綽々としてゐるけれども、其の他の各國は皆な公債償還其他に追はれ一種緊縮豫算などと喘いでゐる國は一つもない。英國然り、佛蘭西然り、獨逸然り。而して歳入過剩の米國でも財政の膨脹を恐れ、剩餘金は減税其他國民の負擔輕減となる可きものに振向けてゐる。然るに我國のみは世界の不況にも頓着なく獨りに新事業を起し、歳計は一年一年に膨脹するばかりである。公債に至りては非常な勢を以て増額を續けてゐる。大正三年の歳計六億圓八千萬圓であつたものが昭和三年度には十八億圓[illegible]倍にならんとしてゐる。十五ヶ年間に三倍にも近い増加である。公債はどうかといふと、歳計財源不足の補充と種々の失政の補塡などのために著しい増加をなし、大正三年に廿五億圓であつたものが、昭和三年度には六十億圓を突破しさうな勢である。眞に寒心に堪へない事實である。

○　○

憲政會内閣は加藤首相の在世中は濱口君が藏相として財政整理をなしたゝめ、更に[illegible]從前始末の關係上稍増せんとする豫算を幾分削減することが出來た。ところが若槻首相となり片岡君が藏相となり、政友會と同様の放漫政策を行ひ、豫算の如きも昭和二年度のそれは十七億三千萬圓といふ尨大なものを編成した。片岡君の此の不明なる遣口が前内閣倒壊の一因であることは何人も承認する所である。

元來財政は經濟を其礎として立つものである。經濟界に背はずして財政の膨脹を求むることは不可能である。又財政を放漫にして經濟界の整理刷新を望むことも矛盾した話である。現内閣は財界は財界、財政は財政といふ工合に、全然無關係のものであるかの如く考へてゐる。財界は不況でも財政には公債發行の手段がある。租税増徴の手段があるとなし、事實公債の發行額を二億圓近くに増加し、門税なども増率し一時的不景氣に不當

んとしてゐるが、今日の場合公債の增發が財政の前途を危ふするは勿論、産業界に如何なる惡影響を及ぼすかを忘却してゐる。關稅增率の如きも之が如何に國民の經濟生活に不利の影響を與ふるかを忘却してゐる。而かも二言目には産業立國が我黨の政綱であるといふが、眞に産業立國を思念するならば、目今の問題としては産業上に於ける財政の壓迫を緩和することが何よりの急務である。此の意味に於て政府の明年度豫算案は其の力說する産業立國主義とも矛盾する次第である。

○　○

斯の如くにして組み上げた豫算であるから財源の調達に非常な無理がある。第一に剰餘金から一億二千萬圓以上も繰入れることになつてゐるが、是まで年々繰越して來た剰餘金もいよ〳〵涸渇し追加豫算の財源さへ調達しかねる事態となつてゐる。第二に一般會計だけで九千二百萬圓からの公債金を收入として豫算を立てゝゐることは財政政策からいつても公債政策からいつても甚だ好ましくないことである。財政の基礎を鞏固にする點からいへば公債目當の事業は努めて打切り、剰餘金は現在の公債償却に充當することが當然である。

次に歲出の方面に就ていふと此の際一億八千萬圓といふ巨額の新事業費を容認することの無謀は、既に陳べた通りであるが、其新事業を二に政黨政治の常弊として總花的に色々の事業に振り別けたため、其數のみ徒に多く、中心となる可き新施設が一つもない。片岡前藏相の編んだ昭和二年度の豫算でさへ、減債基金繰入の增額のやうな目新らしい項目が一つや二つはあつたが、明年度豫算案にはそれが一つもない。結局産業立國などいふ漠然たる主張をなすばかりで、具體的には何等經綸がないことを暴露してゐる次第である。今一つ私等の憂慮に堪えないことは繼續費又は繼續費類似の事業が益々多くなるばかりで是が將來の財政を著しく壓迫することである。我國の財政にて今は繼續事業として進行中のもの丶總額を計算すると、一般特別兩會計を通じて、八十四億圓に達し、其の約半額は既に支出濟、殘りの四十二億圓が今後約十年間に支出さる可きものである。それすら相當大なる財政の壓迫であるのに、此の種の繼續事業が思切つて殖えることは寒心に堪えない情勢である。而かも其繼續事業たるや其の數を多くする爲めに、完成年限を無理に長くし、其工費を甚しく不經濟ならしむる弊害が確實に現はれてゐる。要するに公債問題、繼續費問題、等我が財政上の禍根は明年度豫算によりて更に一層其嫌いを大ならしめんとしてゐる。斯の如き不眞面なる豫算の成立により、我財政の基礎をいよ〳〵危ふし、國民經濟上に甚大なる壓迫を加ふることは、識者の等しく憂慮に堪えないことであらうと私は信じてゐる。

文藝時評

日本プロレタリヤ文學の三四の作品

片上伸

作品の階級的對立

本當のところは、初期から最近に至るまでの、日本に於ける凡てのプロレタリヤ文學の作品について、多少まとまつた批評を試みたいとかねてから考へてゐたので、大分材料も集めて置いたりしたのであるが、すつかりを一度にといふことはなかなか思ふ通りに行かない事情もあるから、差しあたりその中の二三の新らしい作者の作品について書いて見る。

一と口にプロレタリヤ文學の作品とは言つても、勿論人によつていろ／＼に作風も違ふし、プロレタリヤ文學として通用してゐるものが、徹頭徹尾プロレタリヤ的であるとも限られてはゐない。プロレタリヤ文學にもいろ／＼あつて、そこからまたいろ／＼の重要な文學上の問題が取り出されるのである。

私は十二月の雜誌小説の中から、偶然の順序で、中條百合子氏の「一本の花」(改造)を讀み、次ぎに佐々木俊郎君の「或る物語」(文藝公論)を讀んだ。私でなくとも、この二つの作品を相前後して讀んで見れば、恐らく何人もその作品の世界の著しい違ひを感じないではゐられなかつたらう。どちらの作品が上手とか下手とかいふやうなことは、こゝでは差しあたり問題にならない。(またどちらも決して下手な作ではない)。この二つの作品を通して見る二人の作者の住んでゐる世の中は、全く別個のものである。生活に對する興味の感じかたがまるで違つてゐる。而してその違ひは、この場合勿論この二人の作者の個人的な違ひでもあるが、それだけのものとして見ることの出來ない、それ以

上の違ひである。つまり階級的の違ひである。

この二つの作品から讀者は何を感じさせられるか。『一本の花』からは、職業婦人ではあるが、何となくふところ手をして暮してゐられさうな、その職業も、どこか、遊び半分と言つてわるければ、失業者になつても何とかなるといふ安心のありさうな感じのするものに受け取られる。それくらゐこの作中の女の人たちはどこかノンキな、少なくとも小市民的なノンキさとか自由とかいふやうな生活のゆとりを、出來るだけ微細に敏感に享樂しようとしてゐる。さういふノンキさや自由を享樂することのためには一生懸命に心づかひをしたりする。自分の氣持ちとか周圍の人たちの氣持ちとかいふものについて、聰明で敏感である。自分を内省したり自分に反撥したりして、いろ〳〵氣をつかつてゐるから、決していつもノンキで晴れ〴〵とばかりはしてゐないのだが、即ち多少いつでも不機嫌で、生活に襞と陰影とが出來てゐるのだが、よくよく見ると、その自分の不機嫌であると、寧ろあり得るとに、一種の複雑な自足の感じを持つてさへゐる。かういふインテリゲンチヤの中の才女型が、多分の小市民的特兆を持つて讀者の前にあらはれて來る。かういふ型、かういふ生活氣分といふものは、極大ざつぱに平たく言つてのけて、實はもう今日ではあんまり新鮮な感じを與へない。知識階級的凡俗の一つの型だと言つては少し失禮であらうか。

この作では作中人物の生活氣分が同時に作者の生活氣分である。作者は斷えず作中人物を極めて微妙な寧ろ氣むづかしいくらゐの心持ちの動きを見つめてゐる。作者にとつても作中の人物にとつても、何よりも大切なことはその氣むづかしいくらゐの心持ちなのであつて、生活の實相を構成するもろ〳〵の客觀的事情ではない。どこまでも小市民的だ。生活の客觀的事情を支配するためには、大資本家的になるか、プロレタリアートの立ち場を取つてこれと闘爭して行くよりほかはない。中條百合子氏はこの二者のどちらにも屬するものでない。そのどちらにも屬するものでない――寧ろ屬するとの出來ない小市民的な社會集團の落ち行くかくれ家は、いつでも即ち「心の世界で」ある「氣分の世界」である。そこに何か「自由」な生活が營まれ得るかのやうた誇りと望みとを持つて行く。

それに比べると、『貧物』から讀者が受け取らずにゐられないものは、全く別だ。こゝでは氣分や心持ちや、些かの氣安めや、そんなものは冬の午後の日の日よりも弱くはかなく、たよりないものである。作中の人物が、いくら自分の呼吸で自分のかぢかんだ手をあたゝめるやうたことを心持ちの上でしてゐても、作者も讀者も、そんなことの哀れな滑稽な氣安めに過ぎ

ないことを自ら下も承知してゐる。作者の見つめてゐるものは、そのはかない氣安めの螢火を取り圍む暗い深い闇である。客觀的な社會の機構である。この闇は、心の持ち方で拂ひのけるわけには行かないところの生活の實相である。この客觀的の事情が、讀者に、いきづまるやうな、じつとしてゐられないやうな憤りの感じを起こさせる。この感じの指す方向は、この客觀的事情を他の客觀的の事情へ變へて行くことである。だからこの作品はプロレタリヤートの立ち場から書かれたものである。

單に文章の上から見ても、中條氏のは一段活用止めの動詞が頻りに用たりして、今までのこの人のものよりも妙に氣取つた印象を與へてゐる。文法的特兆の上にだつて階級性は顏をのぞけるのである。瀧井孝作君のものなどにもそれが著しい。變な小市民的な aloofness の感じである。それももう今日では、質はあまり新鮮な感じを與へなくなつてゐると言はなければならない。佐々木君の文章が特に新らしいと いふわけではないが、素朴で單純で、氣取りなどは少しもない。客觀的な現實が自然にものを言ふといふ自信が、どこか作者の肚にあるから、變な aloofness の態度などで「心持ちの世界」の消息を印象づける足し前にしようとしたりするには及ばないのである。

「二本の花」の作者は、サヰエート・ロシヤの見學で、何よりも、この小市民性を克服することを學んで來なければならない。

客觀的文藝批評の意義

上記三作について、つい多くを說いたのは、今の日本の文壇に於ける階級的の對立について、最初に讀者の想起を促したいと思つたからである。しかし、上記の三作は、必ずしもその對立を示す最も代表的なものだといふわけではない。また、日本現在文壇上の作品が、型の如くに截然と二つの階級的對立に分れてゐて、互ひに寸毫も相容れないやうな形態を成してゐるといふわけでも勿論ない。イデオロギーの採用の中でも、文藝の如きは最も複雜な組織構造を有するものの一つである。ところで、この二つの階級的對立が、文藝の上にもあらゆる方面で現はれて來たのが事實である以上、この對立を中心として、文藝上のいろ〳〵の問題が起こつて來るのは自然の結果である。文藝の批評は、殊にかういふ時代に於いては、單なる好惡や趣味の表白に止まつてゐるわけには行かなくなる。單なる好惡や趣味の表白に止まるところの批評も、或ひはまだなか〳〵世に行はれるでもあらうが、しかしながら、さういふ批評は、現代の文藝が提出するいろ〳〵の問題を解釋說明することすら出來ないのである。或は寧ろさういふ問題の存在を認めず、問題を問題と

して考へることを拒絶しもしくはこれを閑却することによつて、わづかに舊來の趣味批評の立ち場を守つて行くでもあらう。文藝の上に社會意識の問題を考へずにゐられなくなつたといふことは好き嫌ひで決定することの出來ない客觀的の事實である。客觀的の事實を説明し解釋することの出來るのは、その客觀的の事實を事實として認めるところの客觀的な歴史的な立ち場の批評である。

文藝の批評もまたイデオロギーの一様相にほかならないのであるから。今のやうな時代では作品の上で「心持ち」を主とする唯心論的傾向と客觀的な唯物論的傾向との對立、混交、爭闘が行はれるやうに、批評の上でもやはり同じやうな事實が行はれる。

私の文藝批評は、客觀的な歴史的な観方から、差しあたつては現在眼前の、また遡つては過去の文學現象について、出來るだけの説明と解釋とを加へて行かうとするものである。とかく昔から、何かにつけて、批評はどちらへもつかない相撲の行司か何かのやうに思はれたりして、批評の公平といふやうなことが言はれて來たが、一體批評の公平といふことは、一切の文學現象に對して、第一に客觀的歴史的な説明を加へることなしには、批評といふものが本當に成り立たないのだといふことを言はうとしたものにほかならない。言ひかへれば、批評の公平といふことを、何かの場合に言はなければならないとすれば、それは、個々人の「氣分」や「心持ち」の好惡によつて判斷を下して平氣でゐるといふやうなことをせず、必ずその一定の文學現象に客觀的歴史的な説明を加へることを忘れないといふ意味以外のものではあり得ないのである。客觀的歴史的説明といつたからとて、それがたゞ冷たい「説明」だけのものだと思つてはいけない。たとへば、小市民的な立場の文學についての客觀的歴史的説明の眞實を承認して、更に次ぎに代つて起るべきプロレタリアートの立ち場の文學についての客觀的歴史的説明の眞實を承認する場合に、それ等の眞實は承認したが、それはたゞ冷たい「説明」だけだなどといふことは有り得ない。その場合に於ける説明の眞實の承認は、即ち直ちに批評家その人の判斷である。かういふ客觀的歴史的説明を抜きにした判斷らしいものには、正しい意味の權威はあり得ない。

客觀的歴史的批評によつて、新たに批評の權威を打ち立てて行くことが、今日以後の文學批評もしくは文學理論の困難な仕事である。

文學現象についての客觀的歴史的説明は、それの現在の發達の程度では、必ずしも常にその説明を試みる當事者即ち批評家の好惡の感じと一致しないかも知れない。それはあり得ること

である。其の場合に於いて、その安易的説明が直に客觀的であるかぎり、その説明によつて、好惡の感じが啓蒙せられ、訂正せられて、新たな意識に統制せられて行かなくてはならぬ。權威ある批評はそこに於いて成り立つ。而してそれは十分なる意味で一つの訓練である。

自然に持つてゐる好惡の感じと、それに對して加へられる客觀的歴史的説明による啓蒙訂正乃至統制との關係は、決してひとり今日の文藝批評に於いてのみ見られるものではない。いはゆるプロレタリヤ作家と見られてゐる人々の作品に於いても、また同じやうな事情の存在するのを見る。その一つの著しい例は、藤森成吉君の『父と子』（文藝春秋十二月）と、以前に書かれた『何が彼女をさうさせたか』とである。『父と子』は父の追憶記といふ以上に出てゐない。殊にプロレタリヤ的作品らしいところは見えない。然るに同一の作者の手に成つた劇はたしかにプロレタリヤ的である。これは作者が一つの場合に於いては生活の客觀的歴史的説明を比較的明白に加へてゐるのに對して、他の場合にはそれが甚だ足りないからである。作者の心理が客觀的の説明で新たな意識に多少とも統制せられた場合と、それの足りなかつた場合との差である。かういふムラは今のところ一般的に言つても已むを得ない。だからこの場合特にこの作者はこの點でひどく責めらるべきであつた。かういふムラがなくなるやうにするためには、特に生活一般に對する（この場合では父と子との生活に對する）作者の客觀的歴史的説明が成長して、作者の自然の心理と別々になつたりしないまでにその意識を統制して行くといふ道よりほかにはないのである。勿論この過程——訓練の過程は、一方は批評一方は創作といふ點から、全く同一である筈はなく、それ〴〵違つたところを持つてゐる筈だが、それにも拘らず、客觀的認識が意識を統制するといふ訓練の原則は、いづれの場合に在つても守られなければならないのである。

黑島傳治君の『豚群』その他

一兩日前の讀賣で、正宗白鳥氏は黑島傳治君の短篇集『豚群』を批評して、その中のある作品が、瀬戸内海沿岸の地方色をよく描いてゐること、感傷誇張を用ひずして素朴に平明に事象を描いてゐることを認め、内海の漁村や農村のにほひがするといひ、中んづくすぐれた作品として「脚を折られた男」をあげ、「しかしこのくらゐたところまでなら、私などが以前書いた田舎小説とさう違はないやうに思はれる」と言つてゐる。

瀬戸内海沿岸の地方色がよく描けてゐる（「一村の紛亂」な

ど）といふことも、素朴平明であるといふことも正宗氏の言ふ通りである。しかし、この短篇集はさういふ點だけが特色で、その中の最もすぐれた作品としてあげられた『脚を折られた男』でも、このくらゐなら正宗氏の昔書いた田舎小説と大差ないと言へるであらうか。なるほど黒島君の作には、里村、林両君などに比べると、自然主義的な手法を一層多く用ひてゐる。客觀的現實を重視するといふ點で、自然主義文學とプロレタリア文學とは一致する。だから黒島君の作がその意味で自然主義的であるのは差し支へないことである。一體この作者は、平板で自然主義的で、引きしまつた力に乏しいといふ點から非難されることがあるやうである。部分部分の細叙に丹念で、談理感傷をまぢへずにありのまゝに書くといふことは自然主義の一特徴であるが、これがプロレタリヤ文學であるかぎりは、その談理感傷をまぢへずにありのまゝに部分部分を細叙するといふことだけでは、――その自然主義的手法が一つの意識で強くあるポイントへ湊合せられて行く勢ひがなくては、たゞの平板な客觀叙寫になつてしまふ。この危險は『村の網元』などにもある。だからこのくらゐなら、正宗氏の田舎小説と大差ないとも思はれたりするのである

しかし、この短篇集の中で、『二銭銅貨』とか『豚群』とか『電報』とかいふ小品の中には、正宗氏の田舎の生活を書いた作品からは受け取ることの出來なかつた何ものかがないであらうか。『脚を折られた男』には、たゞの農村生活の描寫といふ以上のある社會的暴露が感じられないであらうか。この中には收めてないが、『橇』とか、殊に『彼等の一生』とかゝら、人はある社會的憤激を感じないであらうか。この點では、私は『二銭銅貨』と『彼等の一生』（結末の附け加へはない方がいゝやうだ、それは聊か談理である）と『脚を折られた男』と『電報』とを採る。

評判になつた『豚群』は、プロレタリヤートの反抗としては、兒戯に類したやうなところもあるし、こゝに描かれた生活に終りまで同感して行くことが出來ない。プロレタリヤートの反抗意識が、この程度の一時の痛快さで充たされるとすれば寂しい。村中の豚を一度に野に放つて所有者の識別が出來ないやうにすることによつて差押へを不可能ならしめるといふのは、一寸思ひつきで、一時的の痛快さはないでもないが、それを痛快がるのは寂しい氣がする。結局どうせそんなことで不當にすむものだとは思へないからである。その痛快さは全く一時的な遊びのやうなところがあつて、客觀的の現實は、容易にその一時の痛快な心持ちなどを蹴飛ばして肉迫して來るであらうと思はれるからである。プロレタリヤートの反抗は、勿論かういふ

円波や商門に於いてさへ表現せられてはいけないといふ理くつにない。しかしその反抗が、とにかく及ばずながらも敵の急所を衝いて止めを刺さうとするほどの意氣込みで行はれてゐるのでなく、寧ろ一時のからかひに終るやうなものである場合には、乾いたさびしい感じしか與へられないといふのである。一つのプロレタリヤ的笑話としては認められるが、――そしてさういふ種類のものが林房雄君の作中に相當多いやうであるが、プロレタリヤ文學が、もしかりにかういふ種類の笑話を痛快がつて數多く生產するやうにでもなつたとしたら、それはプロレタリヤ文學の自慰的自殺だともいひたいくらゐである。プロレタリヤ文學は陰氣で憂鬱たる生活をのみ表現せよといふのでもなければ、陽氣な明るさはそれの本質に反くといふのでもない。（後段里村君の作品の批評參照）しかし、そんなことで安心してゐられるわけでもないく世に、小說に書かれた範圍だけで一寸一時痛快にやつゝけて、やつゝけただけ得だつたといふくらゐのところで筆を止めてをくなどといふのは、切言すればあまりにおめでたい。小說に書かれただけで世の中はおしまひにならないのだから、そのならないところを、一々書き現はしこそはしなくとも、肚にすゑてゐなくてはなるまいと言ふのである。それが肚にすゑるかぎり、さう安價に痛快がつてはゐられないだらうといふのである。

『豚群』に對するこの批評は、少し馬鹿丁寧になり過ぎたやうであるが、この考へは、この作の出て評判になつてゐた當時、ある機會に青野季吉君や藤森成吉君にも簡單に述べて同意を得ることの出來なかつたものである。『豚群』といふ一小品は、さほど力瘤を入れて論ずるほどのものでもなからうと言ふ人があるかも知れない。しかし、この作に對する上述の批評の正否は、單に文學上の問題ばかりに止まらないやうにも思ふので、少しくどく書いたのである。

『二錢銅貨』といひ、『脚を折られた男』といひ、『彼等の一生』といひ、『電報』といひ、さらにまた『橇』といひ、この作者の作中のおもなものは、これから批評しようとする里村、林兩君の作品と比べて見ると、殆どその悉くが、壓迫せられてゐる人間の、壓迫せられてゐるそのなりの姿を示すことによつて、その壓迫を加へるところの不合理な力、――道德や因習の由つて來たるところの社會組織への抑へがたい憤りを感ぜしめることに於いて一致してゐる。讀者は憤りを感ずるとともに、壓迫せられてゐる人々の生活に深い哀憐の情をそゝぐ。『二錢銅貨』などがその最も鮮明な實例である。この點では、里村、林兩君はよほど違つてゐる。（そのことは後に說く）。この作者を自然主義

的だといふとすれば、その部分部分の平板な細叙の技巧の點からばかりでなく、寧ろ現實の生活を靜かにじつと視てゐるといふ基礎的な態度手法の點に於いて、この特兆を認めなければなるまい。自然主義的な現實の靜觀が、社會組織の不合理といふ一角に集注せられて、そのために苦しむ人々の姿をありのまゝに寫し出ださうとすれば、それは憤りと哀憐との兩面の色を帶びてあらはれて來る。こゝでは、しかしながら、社會組織の不合理といふ一角が、單なる一角でなく、現實觀察の焦點になつて、あらゆる事象がそれを中心にして受け取られ叙寫せられるから、それへの憤りの感じが強く浮き出して來る。『彼等の一生』などがその著しい實例である。『電報』は現實が單純化せられ過ぎてはゐないかと思ふくらゐにその焦點の方が光つてゐる。『脚を折られた男』や『梶』には、その焦點が弱くなつてゐるわけではないが、滿べんなく靜觀平叙する方に可なり多くの努力が費されてゐて、そのうちの一つの作品の如きは、正宗氏をして、「このくらゐたところまでたら」自分の田舍小說と幾らも違ふまいと思はせたりするのである。

『脚を折られた男』や『梶』は、ある意味で申分のない、出來上りの作品だといふやうな印象をさへ與へる。『電報』などは、これだけでは描きかけの繪のやうでもあるが、これが出來上つたら端的に迫るところを多く持つものになりさうな、生ま生ましさがある。結局前後の斷り書きのやうな、理くつのやうなものを取つて見た『彼等の一生』が、現實の把握でも豐富で、はつきりと一點の見るべきところを見つめてゐて、強く迫る力を持つてゐるのではないか。折角のあの作品に前後のよけいな附け足しを置いたやうなところを見ても、作者は今のところ、自然主義的なものを「清算」しようとして、ひそかに苦心をしてゐるのではないかと想像せられる。

里村欣三君の『苦力頭の表情』その他

黒島君の作風が、黒島、里村、林三君の中で、最も自然主義的だとすると、里村君のは多少ロマンティックな匂ひを持つてゐると言へば言へる。とにかく、この作者の物語に出て來る生活は、決して安樂な小ぎれいなものではない。深く考へて見るまでもなく、勿論社會的に壓迫せられてゐる人間の生活から題材を採つて來てゐるに相違はない。しかもそれでゐながら、黒島君の場合のやうに、その作品の殆ど凡ては、壓迫せられてゐる人間の姿をありのまゝに示して、憤りと哀憐とを感ぜしめるやうなものでない。飢とか病氣とか死とかいふやうな事實を取り扱ひながら、それは陰慘な滅入るやうな感じを與へるものとし

ては示されてゐない。この作者の描く生活は、放浪の生活である。而かもその貧苦窮乏の放浪生活を呪つたり悲しんだりしないで、寧ろその中に魅力を感じてゐるものの生活である。放浪の生活から、人間の世界的視野とか、純情の流露とかいふやうな形で、被壓迫階級に屬する人々の心からの結合が生れるとさへ思つてゐるらしく見える（「苦力頭の表情」「飢」「黒い眼鏡」など）。また著しくエロティックである。ある場合にはデカダン的で、一種にアナキスティックである。これだけ生活に對する感じが柔軟性に富んでゐて、ゴムのやうに、抑へても凹んでひしやげてしまはないところがあつて、奔放で、陽氣で、英雄崇拜的なところがあつて、それがまた賤民の力の讃美といふやうにもなつてゐる。氣の弱いところもあるが、どんなときにも、

……雪が消えた畑には、黒々として夢のやうな水氣をあげて、溫暖な陽光にぼこぼことほぐれてゐた。私は陽氣な考へを胸一杯に抱いて、打ちならした畝に指さきで穴をあけ、一粒づつの豌豆の種を蒔いてゐた。すると、ひとりでに、その陽氣な考へが口笛になつて、清冽な大氣のなかに溶け込んで行くやうな氣がした。（「娘の時代」）

といふやうな一面も少くはない。だからこの氣質にとつて現實はさうやゝこしいものではない。やさしい軟かい快かしいところと、烈しい刺戟に激しいところと、この二つが正面から立ち向つて來る。これに對する態度は、すなほに讃歎したが、大膽に向ふ現實に踏み込んだ。この作者の示す現實の世界に、壓迫せられたり戰つたり反抗したり嘲笑したりしてゐる姿を見せるものではない。それよりも寧ろ、その空氣に、やがて來る嵐の匂ひが充滿してゐるやうな、善良さも大膽さも現實適合も、エロティシズムも、一切のエナジーが大膽に思ふ存分に溢れ出たがつて、少しも靜かにしてゐないやうな世界である。現在の現實の組織の中では、不法なあぶれものであつても、この若々しい陽氣な剛健な革命的な氣質は、未來の世界では亡びないで、寧ろすく／＼と生きのびさうに思へる。——その可能性への興味が、この放浪的な生活を元氣ないき／＼したものにしてゐる。而してかういふ生活は、苦力や、淫賣婦や、小さな村驛の錢箱番人などの中にある。だから小市民的な、小ぎれいな安寧を擁護する。これは取りも直さず小市民的なインテリゲンチャへの反抗である。

かういふ世界は丹念には細叙せられない。現實は簡潔に取捨せられて、簡明に、內面的に、明確に、太い線で、ある程度のある節つきで、強く、しかし圓みを帶びて描きあらはされ

る。

世界觀としては客觀的の訓練が著しく足りないから、アナキスティックである。しかし感情は躊躇なしに表白するから、鮮やかで強い。それ等があつまつてこの作者の作品に、一種のあたゝかみと魅力とを與へてゐる。

この作者はこれから幾多の段階を經て、その意識に客觀的訓練を加へて行かなくてはなるまい。しかし、それがためにこの樂天的な陽氣な buoyancy を萎縮させるやうなことがあつてはならない。恐らくまた、その素質はもう失はれる心配はないであらう。殊に、小市民的な小ぎれいな安樂な生活への輕蔑は、この作者に在つては一つの情熱であつて、その點は林房雄君と著しい對照を形づくつてゐる。林君は觀念的には小市民性を輕蔑しようとしてゐるし、また實際さうしてもゐるのだが、それは情熱の世界までは滲み透つてゐないやうに見える。

現實の生きた具體的な材料は、文學の創作に當つて、考へて作り出すといふわけには行かないものである。それは實生活が自然に與へてくれる。實生活が自然に自から見出だし、選び、保留して置く。この點では、里村君も黑島君も、それ〴〵の生き方で、多かれ少なかれプロレタリヤ的な生活を生きくゞつて來てゐるところがある。たとひそれは自然主義的な境を脱け切らなかつたり、自由奔放の放浪生活を營むことによつて、アナキスティックなロマンティックなヘロイズムの匂ひを少なからず持つてゐるにしても。

『苦力頭の表情』や『放浪の宿』（改造十二月）の作者は、前から說いて來たやうないろ〳〵の點で、ゴーリキーの初期の作風と似かよつたものを多分に持つてゐるらしく見受けられる。『デマゴーグ』（文藝戰線八、九、十月）は、今日のところ未完中絕の作で、恐らくはまだその全體の最初の一部分に止まつてゐるものであらうと思ふが、この作者が長篇の作者としても、なか〳〵侮りがたい技倆を持つてゐるらしいことを想はせるものである。しかし、作者自からこの作を一旦中絕するに際して正直に自告してゐるやうに、あれだけのアンビシヤスな長篇を、——作者の言ふところによると、この作は、「勞働組合の發生から、未曾有のストライキに破れて組合が瓦解するまでの經路と、その間に活動する無名の鬪士、及び罷業勞働者の家庭組合は滅び、鬪士は失はれて行くとも、資本家の肌からダニのやうに離れないデマゴーグの一團と、その組合の再組織に至るまでの事件を表現したいと意圖」するものであるのだが、——これだけの大規模な、日本の文壇に未だ曾てないほどの長篇の社會小說を、單に表面の事件の仕組みばかりでなく、イデオロ

ギーの上からの一つのプロレタリヤ的意識を與へ一組み立てゐるためには、作者自から自己の理論の危うさを自ら惧れるにとまつてゐるのは、少しも無理のないところである。私がこれまで度々說いたことのあるやうに、凡そ長篇小說の特徵は、單に表面の事件の仕組みの上に一つの筋即ち結構があるばかりでなく、その表面の事件の筋即ち結構を組み立てさせるところの一定の社會理想とか道德感情とか、もしくは時代のある階級的集團の生活興味とかいふ何かの中心的指導的なモーラルがあつて、その意味での筋が、自のづから表面の事件の仕組みの上にも、一つの筋を作らせることになるのだと言へるのである。この二つの意味の筋が完全に一致したところに、長篇小說が成り立つのである。このことは、今まで世間に行はれてゐるところの通俗的な長篇小說について見ても、大衆ものといはれてゐるものに就いて見ても、ひとしく事實の上に認められるのであつて、それを實例について說明することは別の機會に讓らなければならないが、とにかく疑ふ餘地のないことである。ところで、今までのあり來たりの社會道德なり、支配的な階級的集團の生活興味を中心的指導的なモーラルとして、それの上に成つて筋のある長篇小說を書くことは、今世に時めいてゐる小說作家にとつてさほど困難なことではないのだが、プロレタリヤートの立場から、完全に社會の客觀的批判的意識を通して描寫的なモーラルとして、新らしい社會小說の長篇を築き上げるといふことは、今世に時めいてゐる作り來たりの長篇小說作家の、必ずしも成しよくするところではないのである。これを成しよくするためには、社會機構の客觀的批判的意識に於いて、十分な徹底がなくてはならない。而してそれは、それを理論的にばかりでなく、それの具象的な藝術的表現に於て操作することは、決して容易のことではない。いつかの評論の合評會で、久米正雄君や芥川君たちが頻りに主張したほどには容易ではないのである。

それだから、この點についての里村君の反省は、當然のことであつて、私は寧ろ、この作者が、今丁度重大な自己清算の時期に臨んでゐるらしいことをよろこぶものである。短篇小說は、どうしても現實の一斷片を取り扱ふところから、やゝもすると現實の全體的組織についての客觀的批判的な認識に於いて十分に透徹しないところがある。十分に透徹してゐないでも、大してボロを出さずにすみやすいところがある。しかし、現實の複雑な關係交渉を多分に取り入れて、その錯綜を取り扱はずにゐられない長篇小說では、現實の機構組織について、はるかに深く且つ廣い客觀的批判的認識を必要とするのである。里村

君が長篇小說に着手するに及んで、この必要に衝き當つたのは、當然である。

殊にこの作者は、その短篇小說の多くに於いて示してゐるやうに、本來アナキスティックなところを多分に持つてゐる。その放浪性といふやうなものも、一方から言ふと、小市民的な主觀的な「自由」を追ひ求めるものであり、客觀的な現實をそのまゝにして置いて、「心」の「自由」に滿足するやうな、一種の自己陶醉的傾向だと言へないこともない。その點では、形こそは全く違つてゐるが、前にあげた中條百合子氏の小市民性と共通するものがあるとも言ひ得るのである。放浪による小市民的安寧への輕度の表示の如きも、今までの作品にあらはれた範圍では、結局客觀的批判の下には否定せられなければならなくなるであらう。だからそれに對して、作者は十分な客觀的批判を加へて行く必要がある。この作者が、最初の長篇小說の試みで行きつまつて、これを中絶し、自から創作的情熱を失ひかけてゐると告白してゐるのは、恐らくは作者自からも氣がついてゐない程度に、無意識的に自己に對する客觀的批判の心が動きかけてゐるためではないであらうか。作者は筆をすて、再び放浪したいと言つてゐるが、放浪が眞にプロレタリヤ文學の作者としての情熱をよみがへらすものであるか否かを、この作者は一應先づ反省する必要がある。プロレタリヤ文學の、殊に前來說いて居たやうな意味での長篇小說の作者としての情熱を、眞に深く培ひ養ふの道は、現實に對する透徹せる客觀的批判的認識のほかには恐らくあり得ないであらうと信ずる。

林房雄君の『繪のない繪本』その他

その作品がプロレタリヤ文學として先頭的乃至代表的であるからといふよりも、その複雜な形態の中に、日本プロレタリヤ文學の發生期に於けるさま〴〵の問題を宿してゐるといふ點で、著しい過渡期的現象として注目に値ひするものは林君の作品である。私は前に黑島君の『豚群』を批評した中で、それがからかひ半分なやうな、プロレタリヤ的笑話ともいふべき狀態に止まつてゐる點について不滿を述べた。そして林君の作品の中にも、さういふ調子のものが少なからずあることを述べておいた。『繪のない繪本』、『新いそつぷ物語』などの中には、作者が諷刺のつもりで書いてゐるらしい小話がいくつかあるが、それ等の殆ど凡ては、或ひはそのアレゴリカルな巧みさで讀む人を微笑せしめ、極めて知識的な輕い痛快さに似たやうなものを感ぜしめ、その皮肉の眼のつけどころに機智を感ぜしめるものである。たとへば『繪のない繪本』の中の第四夜の、檢閲を諷刺

したやうな小話を見よ、またその第八枚の、勞働者の不良な衛生を主題にしたものを見よ、或ひはまた『新いそつぷ物語』の中の、『市役とダイナマイト』を、『地主と泥醉』を、『大學生と勞働者』を見よ。これ等がその中で特に代表的だといふのではない。その他のものも殆ど皆共通の特兆を持つてゐるのである。これ等の小話がプロレタリヤ的諷刺であるのなら、プロレタリヤ的風刺は、結局大して危險なものではなくなる。いかにも思ひつきだと感心させもする。うまく考へたとその巧思さを喝采させもする。氣がきいてゐて、なかなかハイカラで、軽く小ぎれいに皮肉で、手ぎはがよい。しかし、かういふ小話——この程度までの社會主義的知識を分らせる小話なら、ブルヂョワのサロンで、モダン・ボーイやモダン・ガールの集まりで、歯切れよく巧みに話して聴かせても、十分喝采を博しさうである。ブルジョアジーは、この程度の皮肉は恐らく自分たちへの風刺などとは感じないで、寧ろこれを多少の新味ある飲料か何かのやうに賞味することが出來るかも知れない。

これ等の小話の骨筋は、憤りでなくして知識である。而かもこれくらゐの知識は、もう今日では、現實の暴露だとは言へなくなつてゐる。だからこの程度の知識が自分にとつて暴露でも何でもないやうな種類の讀者にとつては、あまりに今さらしく、平凡で、或ひはただそれだけのやうに、思ひつきな小話として、——全く『新いそつぷ物語』の中の『石屋と民人』の冒頭に、作者は偶然らしく、『これは、ある西洋の老人からお茶をのみながら聞いた、文字通りの茶話です』と書いてゐるが、その思ひつきな茶話としていかに手ぎはよく書いたかといふ點にあるに過ぎない。要するに、社會主義理論應用の小話二十題とでも言ふほかはないのである。

この作者は、文藝戰線同人の合評に對する答への中で、自分がお坊つちやんの大學生上りでなく、幼少の頃から窮乏の間に成人して來たものであることを述べて、自分の社會主義的思想が、ただのつけ燒刃でないことを承認させようとしてゐるやうである。しかし、この辯解はをかしい。幼少から窮乏の間に成人したといふことが、その人を必ずしも革命家だとして信用させる保證にはなるまい。この場合に於ける眼目は、それだけの實生活の經驗が、現實に對する客觀的批判的認識をどのやうに裏づけてゐるかといふことであらねばならぬ。知識の上では、現實の客觀的批判的認識が、ひと通り行はれても、それがその當事者の感情や意志の生活をどのぐらゐ統制し支配し得てゐるかは、おのづから別問題である。經驗的な生活では窮乏の間に成人して來ても、お坊つちやんの大學生上りのやうに見えるとい

ふやうな場合は、窮乏生活の經驗と、知識上の現實認識とが、十分な統制に達してゐないばかりでなく、寧ろ深い無意識の世界で相反撥してゐるのであるかも知れないのである。一方に窮乏生活の經驗があつて、更にその經驗に發足し、その經驗を包合して、その經驗を無駄にしないだけの、現實に對する客觀的批判的認識が行はれてゐるとしたら、——即ち深い無意識の世界での兩者の反撥がなかつたとしたら、かういふ問題は起りやうがないのではないか。この「深い無意識の世界での兩者の反撥」が、林君の生活への非難となり、またそれへの無用な説明となつてあらはれたとは言へないであらうか。而してまた、この「深い無意識の世界での兩者の反撥」が、林君の文學上の作品の苦しい矛盾となつてあらはれてゐるのだとは言へないであらうか。林君がプロレタリヤートの思想的立ち場をとつてゐる筈なのに分つてゐながら、その文學上の作品の特兆は、寧ろブルジョワのサロンや、モ・ボ、モ・ガの集まりでも、十分享樂せられさうに見えたりするところのものを少なからず所有してゐるのである。而してこのことは、單に文學上で爾來の趣味や様式から影響せられてゐるとだけでは濟まされない事實である。また更に別の方面から見ると、現實に對する客觀的批判的認識が、一と通り知識の上で行はれたからと言つて、また何等かの文學上の才能があつたからと言つて、それだけで直ぐプロレタリア文學が生れるとは限らないといふ事實を例示してゐるものとしても考へられる。更にこの點を押しひろめて言へば、イデオロギーと文藝との相互關係についての問題としても考へられる。政治上のイデオロギーは、ヲロフスキーの言つてゐるやうに、勞働運動の思想や要求に適應して一定の形態を取つて行くとしても、文藝上のイデオロギーはその通りには行かない。文藝の特殊の性質上、文藝に於ける現實の反映はどうしてもおくれて行く。これは政治とか文藝とかの一般についての話であるが、それを個人の上に持つて來て考へて見ても、現實に對する客觀的批判的認識が文藝作品の上に十分にあらはれて來るのは、その人が知識的に現實を批判するやうになつてから、大分後のことでなくてはならない。(この點については、十二月の太陽にも書いてをいた。)

『酒盃』とか『近代的女性、一名當世娘氣質』とかいふやうなものも、前から説いて來たこの作者の特兆の一層伸展した形のものである。『酒盃』では、思想上の同志友人ともいふべき二人の青年の間に、一人のモダン・ガールを對象とする鞘當があつて、その結果青年の一人は自殺をする——但し精神的に思想的に過去の自己を自から殺すといふ意味での自殺をするといふ話

が語られてゐるのであるが、作者のいはゆる「自殺」なるものは、いはゞ作者の思想的な立ち場の手前、世間への申譯に過ぎないものではないかとさへ疑はれる。「自殺」がこの物語の中で「自殺」した川村といふ青年の過去を眞によく殺し得たものであるためには、彼は眞にその過去を殺したのだといふ印象を讀者に與へ得るためには、その思想的轉生の經過が、この作の重要な興味關心事とならなければならない。しかし、「自殺」はほんの讀者をおや〳〵と思はせる落ちのやうなものにしかなつてゐないのであつて、作者が最も力をこめて、樂しさうに書いてゐるのは、その話の落ちへ來るまでの、デカダン的な青年男女學生の戀愛遊戲のいきさつの外の何ものでもないのである。たゞその間に多少社會主義青年らしい色が塗つてあるだけに、それだけ寧ろよけいにモダン・ボーイ的魅力を加へてゐることになつてゐるのは事實である。あまりに戀愛遊戲のいきさつを得意になつて書き立てたので、さすがに作者が多少きまり惡くなつて、最後で過去を殺したことにして面目を立てようとしたのだと言つてはひどいであらうか。「近代的女性、一名當世娘氣質」だなどといふ作も、隨分ふざけたものである。而かも平凡な、古くさい、下びた高座式の口調でのふざけ氣分に充ちたものである。このふざけは、皮肉にも何にもなつてゐないのである。

享樂してゐるふざけである。それだからまたかつてまたくやりきれない。しかし、「淺草」のためのかなり手段にこの方面にエーレンブルグ式なところがある。文藝本位時代に於ける自から識らざるピエロの姿が多少ないでもない。

當世のモダン・ボーイやモダン・ガールは、一切のものを享樂せうとする。それが善かれ惡しかれ彼等に共通の特徴である。だから彼等は、プロレタリヤ的であるといふことをも亦享樂の對象として見る。今の世間並みのブルジョワの中で多少とも社會主義者であることは、ロマンティックであつて、それは冒險の魅力と共通するものを持つ。モダン・ボーイ乃至モダン・ガールであることも、またそれ自から一つの冒險である。それはともかくも世俗への挑戰であるのだから、やはりそれ自身に冒險の魅力と共通するものを持つてゐる。それだから、社會主義者的であるといふことと、モダン・ボーイ式であるといふことが、一身に兼ね備へられてゐるとすれば、「冒險の魅力」の享樂は一層高まらざるを得ない。實にこの二つの要素の混合は、いはゞ最新型である。最も魅力あるカクテールである。林氏の作品が實質以上に評判になり、一部の世間に於てはやされるやうになつたのは、この意味で自然である。林氏のさういふ作品が、著者自ら言つてゐるやうに、「形式主義とディレッタンティ

ズムの泥沼」に游いでゐたといふだけで説明しつくされるか否かは別として、「自分に不滿足なものでも讀者には馬鹿に評判がよくて、短篇集は二冊ともよく賣れた。このとは嬉しくて淋しい」(新潮十二月)といつてゐるのは、やゝ作者自身の轉向を示すものである。全く、その日〻批評が深くならなければ、社會主義者的モダン・ボーイ的カクテールを享樂の料として提供するものだと言はれても、已むを得ないところがあるのである。

『林檎』は作者の言ふところでは事實を材料としたものだといふのに、ある讀者には何となく作り話らしい感じを與へるといふのは何故であらう。一般に、さう言へば、林君の作品には、どの作にもどこか作り話らしいところ、頭で考へて一定の理屈にあてはめたといふやうなところ、最後まで引つ張つて行つて話の「落ち」をつけて行くやうなところがある。その話の「落ち」が分つてしまふと大分その作の魅力がなくなつてしまひはしないかと思はれるやうなところがある。かういふいろ〱の特兆は、『林檎』にも、『鎖』にも、『幽』にも、『公園の蝶兒』にも、それ〲幾らかづゝ見出だされる。たとへば『酒盃』にも落ちがあつた。作り話でないといふのは『林檎』だけのことではなからう。それだのにさういふ印象を與へるのは、作者の取り扱ひかた、觀かた、受け入れかた、感じかたのある特兆から來てゐるのである。讀者は變にかつがれたやうな、どうかするとからかはれてゐるのではないかといふやうな氣がして、終始一貫して作者に信頼して行くことの出來ないやうな不安を感ずる。それは、この作者が生活の事實から何か一つの見つけどころといふか、機智的なポイントといふやうなもの、思ひつきなところを見出さうとしてゐて、そのポイントの發見に興味を持つて、そのポイントを中心として現實を批判する方面を閑却してゐるからである。『林檎』でも、「林檎で鮭を釣る話」といふ好奇的な題目を掲げて、作者がそれの種あかしをすることに專らこの作の興味をかけてゐる。それだから、その言葉の意味が説明せられて、その好奇的な題目の謎が解けてしまへば、何だそんなことかといふやうな氣持ちになつて、肝腎のその事實の社會的意義などは流されてしまふのである。この事は、「鎖」に於いても、「公園の蝶兒」に於ても、『幽』に於いても同様である。つまりこの作者は、現實の到るところに於いて、社會主義的視角から見た謎的現象を發見して來て、これを社會主義的視角から解くことに專ら興味を持つてゐると言へるであらう。そこには作者の智的遊戯分子が多分に含まれてゐる。この點があらゆるこの種の作品を、その多少の社會主義的觀照にかゝはらず、作りごとら

しく、頭でこさへたものらしく、「[illegible]」[illegible]らうとしてゐるものらしく思はせてゐるのである。この作者の作品が、この比較的すぐれてゐるものに於いてすら、これを里村、黒島兩君のものと比べて、生きた現實性に欠けてゐるのも、概念的で生活そのものの迫力に乏しいのも、輕くて熱がないやうなのも、そのくせ器用で巧緻であるのも、どこか遊び半分の感じを與へるのも、作者が知らず識らずの間に、現實を一種の社會主義的知的遊戲の對象として觀てゐるところが多分にあるからである。自からを傀儡師の位置に置いてゐるからである。而してそこには、深い無意識の世界に根強くひそんでゐるところの、小市民性を見出ださざるを得ないのである。

私は里村、黒島兩君に對してよりも、林君に對して、はるかに多く手きびしかつたやうな氣がする。しかし、林君を批評するのは、インテリゲンチャ出身のプロレタリヤ文學者の實質を解剖説明することであつて、個人的には林君自身の自己清算のためにも、決して無用のことではあるまいと考へる。それにつけても、文學と知識的な新世界觀の把握との關係が問題になつて來る。青野季吉君の提唱した目的意識と自然發生との問題をも想ひ起こす。自然發生的な[illegible]を抑制するためには、目的意識が掲げられなければならないのだが、その統制を行つて行くといふことには、[illegible]ならない[illegible]上の表現に關する場合に、殊に[illegible]。

林君の作中で、實生活の實感のしみじみと表現せられてゐたもの、前來あげ來たやうな[illegible]つてゐたいと[illegible]つてよいものが、私の讀んだ中でたつた一つあつた。それは「[illegible]の花」である。これは京都學生事件に坐して未決監に在つた當の作者の實生活からの表現であらうと察せられるが、ますます[illegible]にこの場合の實生活では、これをいはゆる[illegible]的[illegible]の對象として取り扱つてゐない。深はついてゐない。しかし、この場合に於いても、[illegible]作を[illegible]としたところに、この題材の限りのけところに、やはり林君らしい[illegible]きはあるといへたであらう。

林君の作は、前から述べて來たやうな[illegible]からおへても分るやうに、明るい。しかしその明るさは、里村君の世界が、[illegible]の中でも日光の明るさを隱れさを持つて[illegible]明るい[illegible]のあるのとは違つて、どうしても輸入の明るさである。

林君の作品にはまた目的[illegible]といは[illegible]作[illegible]制[illegible]を說いてゐた。[illegible]文學の現代に必要であることは[illegible]、それが林君自身の作品のやうなものであるとすれば、[illegible]る。林君の[illegible]的作品、たとへば[illegible]

ものが全く諷刺的でないとは言へなからうが、あれでは文學としてカあるものだとは言へない。假定より長くなつたから簡單に書いてをくが、諷刺はその非難の對象が重大な強力なものであつて、これを諷刺する理想が強く情熱的であればあるほど、力強いものとなることは勿論だが、殊に重大なのは、その對象が、諷刺によつて特に今さら暴露しなくても分つてゐるやうなものであつてはいけない。また、さういふ程度の諷刺のやり方ではいけない。暴露は、組織的に全力をつくし包みかくし蔽うてゐるものを、力をこめて假借なく引んむぐのでなくてはならない。それだから、有田吾松や大倉喜八郎といふやうな人たちを對象としてあの程度にしか暴露しないのは、已に大抵世間で知りぬいてゐるものを今さらあらためて皮肉の題材とするのであつて、さういふ作品が、階級爭鬪の武器としてあまり有力なものでなく、諷刺文學としては安易な遊び半分の皮肉に過ぎないのは當然の話である。諷刺文學の提唱には賛成である。しかしそれは林君の今までの作品のやうなものを目標とするのであつてはならぬ。（一九二七、一二、六―七）

社會時評

東京市政の紛擾に現れたる我國政界の缺陷

吉野作造

此間米國の桑港に居る友人から手紙を貰つたが、其中に今度の市長改選に又もや前市長が再選し、今日まで在職實に十有六年、更に第五回目の重任を引受けて與れたので市民はいづれも滿足し切つて居るとあつた。東京市長の更迭の頻繁を極むる事實と較べて、只何となしに感慨無量なるものがある。

去年の暮東京市長西久保弘道君が辭職を餘儀なくされたと云ふことは、單に東京市だけの問題として輕々に之を看過するを許さない。單に東京だけの問題としても、東京が帝國の首都たるの地位に鑑み、相當重大な意味を有つことは勿論だが、その外に之はたしかに政黨政治の運用に關する根本方針の問題と聯絡するものがある。東京市長を換へると云ふことが、内閣の更迭ありし以來現政府の既定の計劃であつたことを、今日誰か疑ふものがあらう。

事の顚末は斯うだ。一昨年の秋大多數を以て迎へられた西久保東京市長に對し、現田中政友會内閣の成立以來そろ〱排斥運動が始まつた。之が爲に種々の難問題の續出したことは今更言ふまでもなく、就中西久保市長擁護派たる革新會の切崩しは最も酷烈を極め、遂に去冬暮れの不信任決議となつたのである。西久保市長の在職一年間治績の格別見るべきもののなかりしは疑ないが、併し之は特に西久保市長に著しいことではない。實は歷代市長誰一人として世間の期待に裏切らぬものはないのである。中には嘗て大臣として相當の手腕を振つた人もあつた。東京市長に祭り込まれたが最後、[illegible]數く遂に[illegible]にひとしく、何の爲す所もなくして退任を餘儀なくされたのであつた。一[illegible]

何が斯の如くならしむる原因かと云ふに、それは始めから分り切つて居る。即ち市會が成つて居ないからだ。是れ亦衆口の一致する所。故に今度の紛擾に就ても、市民は特に市長に同情するの理由は有たなかつたが、市會議員に對しては殆んど例外なく極度の反感を表して居た。從て新聞の論調なども、此際市長の更迭よりも市會の廓清の方が最大の急務だと爲し、暗に市長の解散申請を支持するものの如くであつた。而して今日の市會が斯程までに腐敗し切つて居るの事實は、我々の深く心に留めて置かねばならぬ點である。

法律的にいへば市會には市長の不信任を決議するの權能はない。斯の制度の立法的合理性に就ては私に多少の疑があるが、現に仍現行法の解釋としては、市會の市長不信任決議は理論上無效であつて、有り無いも同樣のものである。夫にも拘らず斯種の例は從來も屢々あつた。而して政府はそんな場合いつも知事に命して無效の決議を取消さしめたのである。無效のものなら本來わざ／＼取消すの必要はない、取消すは却て一旦の有效を推定せしむる恐れがある。それでも其都度取消を命して市會に斯かる權能なきを明にせんとつとめた所に、一貫した政府の方針を認めることは出來たのに、今回は從來の例に反して政府は何の手續も取らない。形式上取消を必要とせざる本則に復つたとも觀られぬでない事、之に基いて提出せる市長の解散申請を却下せる所を觀れば、事實上市會の行動を是認せるが如くにも見える。故に私共はこゝにも政府のポリチックが大に働いて居ることを臆測せざるを得ない。尤も斯んな廻りくどい說明をせず、もと／＼政府が市會議員を操縱してやらした仕事だ、市長の顏を立てて議員に煮湯を呑ます樣な事のあらう道理はないじやないかと云へば、事頗る簡單明瞭である。

不信任決議なるものの法律上の根據如何に拘らず、之を接受した市長の之を無視せず少くとも道德上愼重に反省するを要するは言を待たない。法律上無效だからとて恬として顧みざるは私共の與みせざる所である。然らばこの場合市長は如何すればいゝか。一はいさぎよく辭職することである。二は市會の解決を知事に稟申することである。二者孰れを採るかの標準は、現市會が果して市長の後援を得て居るか如何の觀測に在らう。强て自家の立場を有利に解して職任の繼續をはかるべきでない。而して今度の場合は新聞等の論調に鑑みても、西久保市長の後者の措置に出でたのは必ずしも無理ではなかつたと思ふ。だから政府が解散の稟申を却下したのは、之に由て豫定の目的を達したとは云ふものの、理に於ても術に於てもたしかに拙い。西久保氏が最後に毒々しい捨ぜりふを投げつけたのは多少その所

消極々たる態度を脱けたるの感はあるが、勝つた政府側の御身に側械を負ひしの態度なるに比して、猶ほ幾分市民の同情を繋ぎ得るものがある様に思ふ。

いづれにしても市民は市政の斯うした現状に對して極度の不満を有つて居る。一體どうして斯んな惨状が制限されずに横行を続けて居るのか。又何とかして之を制し少しでも市政を浄い方に向ける方法はないものか。

東京日日新聞の公問公答欄に、東京市政の禍根排除に對策如何の問に對する前市長永田秀次郎君の答辯が載つて居る。禍根として氏は政黨の侵蝕を擧げ、對策としては政務と行政との峻別を提唱して居る。嘗てその局に當つた人の言として一應成る程と首肯されぬでもない。併し永田氏自身も懸念して居らるる様に、「黨勢擴張の爲には中學校長にまで力が及ぶやうなことになりはしまいか」と云ふ時代である。如何にして政黨的立場が行政事務の領域に侵し來らしめざることを保障し得よう。若し夫れ政黨勢力の侵蝕に至つては、制度上勝手に動かし剥き親任官はいふも更なり、株主の決議に基いて擧げらるべき特殊會社の幹部をすら思ふ儘に左右せられて居る今日だ、この横暴を喰ひ止め得べき實質的な實際的方法は到底見出せない。そこで之を如何す

ればいゝかなか中々に六かしい問題となる。女性なしで治りのつく問題ではない。青年男女と共に自ら守るべきに目醒めればいゝと希望するだけでは修正の目的は達せられないと同様だ。

東京市政の禍根を政黨の侵蝕に歸するの説には私も異議はない。併しよく考へて見ると、政黨の侵蝕がわるいのではなく、政黨のやり方がわるいのではあるまいか。政黨のやり方が良かつたら、民政系に代つて政友系が市政を握ることになつたとて私共は之に格別の不満を表すべき理由を見出さない。政黨本來の使命から觀て、それが地方行政に手を伸ばすは必しも好ましからず、且つ實際政黨の地方行政に進出するは、概して政戰に之を利用せんとするの野心的動機に出づるの常習に染み、市民の常識的立場として一應は之を拒否すべきものと考へては居る。併し斯うなふ不良の動機に基くものでないことの明なる限り、政黨の市政侵蝕はそれ自身特に忌むべきものではない筈である。政黨は國政の擔任に身を捧げんとする人達の組織する團體でもある以上、之に屬するものが必要に應じて市政に手を染めんとするは亦頗る自然でもある。

それにも拘らず、政黨の市政侵蝕と聞いただけで吾人が直に

眉をひそめるのは、それ程に今日の政黨がひとしく皆市政の料理に誠意を有たぬを知つて居るからである。だから永田君の説明の如きも、理屈をいへば其儘に背はれぬ點もあるが、普通人には自明の眞理として無條件に納得さるゝ譯である。斯くして今度の市長改選には斷じて政黨臭味の人を容れてはならぬと云ふが、市民一般の熱烈なる輿論となつた。所がこれが果して旨くゆくだらうか。

新しい市長がどの道政府の糸の引き樣一つで決まることは申すまでもない。而してその決まり方が全然市民の熱烈なる希望と相背馳すべきことも亦一點の疑を容れない。何故か。

一寸話が横道に外れるが、日本人には兎角晴れの舞臺での堂堂たる勝負を嫌ふと云ふ風がないだらうか。我々の樣な單純な學究の組織せる團體に在ても、或る重要問題の協定をすると云ふ樣な場合、豫め諒解を得る爲めと稱して事前の賛成を需められることがある。賛否の程は當日の席上具さに多くの意見を聞いた上できめようなどと云はうものなら、直に除け者にされる。人並の待遇を得ようとすれば、甲乙いづれかの仲間に入り、當日の席上では理が非でも自派の立場を押し通さなければならない。其代り内部で多少の研究調査は遂げる。そして方針の一端斯うと決した以上は、晴れの舞臺で最も安全に勝てる樣豫め準備して置いて萬遺算なきを期する。之が當節のやり方だ。政黨の對議會策にしても同じ事ではないか。只有象無象をかり集めて數さへ多く揃へて置けばいゝ。單に斯うした法政上の機關ばかりではない、銀行會社其他の社團財團にした所が、その理事者等をも出來ることなら我黨本部の命令に從順なるものを配置して置きたい。其場になつて理非を爭はねばならぬ樣では仕事が出來ぬ。否應なしに諾と云つて貰はねば困ると云ふ。詰り之れが現代の團體生活の統制に最も必要とせらるゝ根本方針なのだ。而して斯うした方針の最も極端に尊重さるるものの政黨界であることは是亦言をまたぬ所である。

今日の日本に於て晴れの舞臺で堂々と勝負を爭ふと云ふ男らしい光景は、唯一つスポーツに於て之れを見るのみだ。それでも野卑な彌次を飛ばして勝敗の數を人爲的に動さんとするものが全くないのではない。が大體に於てスポーツには國民的矜持の自覺を稍情せしめられる樣なことはあまりない。而して此スポーツを外にして我々は今日我國の何處にフェーヤ・プレーの喜ばしい光景に接することが出來るか。就中政界は最も見るに堪へない。若し斯うした點で人間の品位を定めることが出來るものとすれば、政治家を以て任ずる者程劣悪を極むる階級はな

い。

事前に優勝の地位を無理に作りあげるのが政治家の腕の示し所だと考へて居る連中のことである。事に臨んで理否を爭ふは盗を捕へて繩を綯ふが如き迂愚だと究き違へて得々たる連中のすることである。政黨的利害の關聚する所の最も深き東京市長の地位を何で公平なる第三者の手に託して置かうぞ。背に腹はかへられぬ、市民の輿望もクソもあつたものでない。やがて擧げらるべき東京市長の何種の人物なりやは問はずして最早明である。今日の政黨の勢力は理に悖り民福を蹂躙することの上に始めて築かれて居るものなることは固より今に始まつたことではない。

それにしても不甲斐ないのは市民だ。之れ程踏みつけられて居り乍ら平然として起たざるは何故ぞ。そこで最近の新聞でも頻りに市民の覺醒を叫んで居るわけである。成る程市民さへ確かりして居れば問題はない。政府の示唆に盲從し市民の期待に裏切つて黨利黨略の奴隷となる樣な者は二度と市會に出さぬがいゝ。投票と云ふ大事の權利行使に方り、市民が市政監督と云ふ意味を少しでも考へて居たら、議員などは到底不眞面目で居れるものでない。故に市政刷新の何よりの妙藥而して一番效目のある方法は、市民の覺醒を措いて他にないのである。併し之れ本質は云ふべくして容易に行はれ得る事柄ではないのだから困る。

一體今日の施政機關の組織は人民の同意と云ふ事の上にその圓滿なる運用を期待するものである。凡ゆる施政の適否は要するに其の結果として現はれる民衆一般の苦樂に依て定まるのだ。民衆が滿足して居れば現在の儘政府は引續きその任を兼ね得る。滿足せぬとあれば自然他の立場の者に代らるることとにならう。斯くすれば自ら少しでも民衆の利福に適する意見が實際に行はるるやうになる。詳しくいへば最善の智識に最も多く社會的具現の機會が保障さるるといふことゝになる。故に所謂近代政治の推奬さるる道徳的根柢があるのであるが、併しそれには一つの前提條件が許されねばならない。それは外でもない、施政の結果を直接に痛感する民衆が、常に常にその感得すべきものを等級に感得し、且つ正直に之を所要の形式に表白すると云ふことである。所要の形式に表白するとは、痛し痒しの感を正直に表白するばかりではない。痛し痒しの事實に對する責任の所在をきはめ、今日の選擧制度に依て與へられた方式に從ひ自家の之に對する積極的關係を明白に表示することである。さて斯ふ云ふ事になると、今日我國の民衆一般は果してよく〳〵この意味の

監督の實を擧げて居るだらうか。在來の政治理論は民衆の斯方面に活眼を開いて居ることを豫定して居つた。併しそれは恰かも第十九世紀初頭の所謂第三階級が自らの立場を以て凡ゆる下層階級の要望を代表せるものなるかに錯覺したのと同じではないだらうか。安價に大衆の要望だの民間の輿論だのとは云ふても、其實一般の民衆は今日なほ未だ爾く覺醒の實を擧げて居るのではないやうだ。彼等自身の利害に關はる事柄であるに拘らず、存外無頓着なことが多く、甚しきは痛し痒しの感を訊ねられてさへ即答に戸惑ふものもあるではないか。故に我々は政治上の改革を語るに當りても、從來の樣に動もすると人民の自覺などといふ事に拘泥するの過誤を繰り返さぬ用心が肝要だと思ふ。

從來の政論はあまりに人民監督といふ事にたより過ぎた。民意を諮ふ爲の解散を云々するも、解散後の選擧――選擧そのものは人民のやつた事には相違ないけれど――の結果に民衆自身が果して能く滿足し得るだらうか。今度の事にした所が、西久保市長の申請が聽屆けられて市會の解散を見たとしても、新らしい市會に私共は果してどれだけ清新の空氣を期待し得たであらうか。

併ながら云ふが、此點に於て私は今日の無產黨諸君の政治理論にも、慊らぬものが大にある。彼等が宣傳の目的を以て大衆の要望を云々するのは恕する。自ら識らずして這の前提の下に凡ゆる計劃を立て而も實際に幾多の破綻に遭遇して猶ほ悟らざるものあるに至ては、眞に憐愍の至りである。民衆は最終の決定者だ、而も公事には至て冷淡なるを免れない。此處をよく呑み込んでかゝるのでなくては、近代政治の眞の革新は擧げ難い。政界腐敗の原因を制度の不備に求め又は政黨の跋扈に歸したりするのは抑も末である。

話を前に戻す。要するに民衆に權利を認めた以上うまく監督して呉れる筈と安心したのは根本の謬りである。人民は案外に呑氣なのだ。そこに政治家が民衆の頭に泥をぬり乍らも尚に彼等の支持を欺き取つて永く其地位を保ち得るのである。否、其地位を保續することに依て益々民衆的支持なるものを欺き取るに便利を得て居るのである。是れ一見極めて背理なる今日の政黨者流の地位が、其實牢として拔くべからざる根據を占むる所以である。

斯んな狀況の下に漫然として市民の覺醒を叫んだとて何になる。

若し玆に此際眞に覺醒して貰ひたいものがあるとすれば、それは民衆一般ではなくして我々識者階級でなければならぬ。私が

前段に民衆の覺醒を前提するの要を說いたのは、民衆が本質的に覺醒するものでないと云ふのではない。筆者を以て叫んだ位で直に効果のあがるものでないことを呑み込んで貰ひたいのである。出來るものなら民衆の覺醒は洵に望ましいことだ。只之は漫然と出來ることではない。之にも一定の組織が要る。この問題に許さして始めて所謂識者階級の覺醒と云ふことが大事な事になる。蓋し識者階級が先づこの點に目ざめなくては大衆の眞の覺醒は期せられないからだ。加之識者階級の覺醒は自ら大衆の覺醒を促すの効果あるばかりでなく、亦それ自身に於て政治家を有効に制御することも出來るからである

そんなら識者階級はどんな點に覺醒すればいゝのか。試みに時代に適切なるものを擧げると二つある。一は公人としての立場の積極的表示を常に怠らぬことであり、一は民衆に對する教育的使命に敏感なことである。今之等の點につき詳述するの遑を有たぬが、後者に付ては特に茲に數言を費しておくの必要を認める。

前述ぶるが如く民衆一般は本來極めて公事に冷淡である。その結果また頗る宣傳に乘り易い。宣傳に乘り易いと云ふ事は物の鑑別をあやまる事を意味する。良いものが良いものとして通用せぬのである。民衆の斯うした缺陷を見透して最近不思議な成功を占め得たものに出版物がある。[illegible]んな事にはお構ひなしで、大袈裟な宣傳一つで[illegible]飛ぶ樣に賣れる。眞に近代の驚異である。併し之は出版界の風雲兒が始めて採用したことではない。いかさま物を宣傳一つで高價に賣り付け以て大に私腹を肥やした例に於ては、既に政黨の方が遙に巧妙な先輩である。然り、政黨程宣傳の上手なものはない。啻に宣傳の上手なばかりではない、時としては威嚇も用ゐる、誘惑もする。何れにしても良心の判斷を鈍らしめ事物の鑑別に迷はしむるに至つては一つ。そこで識者の之に臨んで大に教育的實際に努力さるゝことが必要になるのである。眞の意味の政治教育の必要なることを蓋し今日の如く急なるはない。この點に關しては猶ほ論じたいことが[illegible]あるが、之はまた別の機會にゆづることにする。

海外近事

ショーのムッソリニ辯護論

勞農ロシアが革命十年の祝ひをやり、イタリーのファスチストがお家繁昌五年の紀念祝賀をやつて居り、世界はこのところ獨裁主義の天下である。かうして獨裁主義が榮へて、今のところその凋落の色がないのを見て、世界には長い間、未だ曾て疑つたことのない重大な疑問が浮んで來た。「デモクラシー、議會政治は果して最上のものであらうか」といふのがこれである。

最近、外國の新聞雜誌で最も呼びものになつたバーナード・ショーのムッソリニ辯護に續いて、怒濤のやうな應酬問題も、この一つの現はれである。話しは少し古くさかのぼるが昨年の終りにショー君はロンドン・デイリー・ニユズ紙にムッソリニを辯護して「他の統治者とても暴力によつてこの地位を得て居るではないか。かれは決して他に比して惡くはない」と書いたものだ。それ自身は大した論文ではなく、ショーとしては餘りムッソリニが惡くいはれるので……例の野次氣分を出したものだらうが、なにしろ英國にはムッソリニのために國を追はれて流謫の地をここに見出してゐるものが非常に多いのと、殊にショーは社會主義でどう間違つても獨裁者を辯護することなどはあるまい、と思はれてゐたのとで、大變な問題になつてしまつた。

雨のやうな抗議に對してショー君は何時もに似ず默りくさつてゐた。そして今年（昭和二年）の夏から秋にかけて當のイタリーに旅行した。かれは十月二日そこ（イタリーのラゴ・マヂオレのホテル）から長い手紙を、かねて自分に抗議をして來てゐる「社會主義・勞働者インターナショナル」の幹事アルダー博士に送つた。これに對してアルダー博士は反駁した。かうして交換された始めからの文通を、ショー君の手によつて發表されたのであつた。

ショー君の論據は「イタリーの獨裁政治は既成の事實だ。君等は獨裁政治を何でもなく容易なやうにいふけれども、それでは社會主義者や共産主義者は何故同じように政權を握らないのだ。彼等とて隨分暴力を用ふる意志があるではないか」といつた點にある。これに對してアルダー博士は……この外イタリーの自由主義者サレヴァニ教授などとの論戰もあるが……「少數者の暴力による政權獲得を否定するところにわれ等の誇りがあるではないか。暴力による政治は早晩崩れる、崩れた後は反動による暴力で文明と秩序を破壞する」と力說してゐる。この勝負理屈だけではショー君に軍配團扇があがらないようである。

デモクラシーは失敗なりや?

ショーを中心に歐洲で民主々義か、獨裁主義かを騒いでゐる頃、海を超へた米國でも有名な二人の哲學者が民主々義は失敗な

りやすいといふ點で貢獻をなして來て居つてゐる。二人の哲學者といふのは一人は英國のバートランド・ラッセル君、他は米國の哲學の話の著者でヂュラント博士である。附記しておくが近頃の米國でこの「Story of Philosophy」ほど賣れた本はなく、この著者 Will Durant は一躍して流行兒になつてしまつた。この二人が討論したのだから思想界は相當に注目した。

ヂュラント君は「民主々義は失敗なり」といふ側に立つた。「現在の國家が國民によつて運轉されて居ると思つてゐるものは信仰のお目出度屋である。」かれは云つた。「教育のある者はデモクラッシー治下においては公職につくことが出來ない。所謂出世するものは政黨といふ機關をよく利用するものに限るのである。かうして一生をこれに費やす結果、職業的政治家が生れ、デモクラシーは崩壞のやむなきに至つたのだ。」かれは更に云つた。「デモクラッシーの始めの目的は、國民自身の政府を樹立することにあつた。各國はその程度において相違はあるけれども、民主國の政府は少なくとも人民の政府ではない。もしこれが最上の頭腦の政府であれば尚許すべしだが、そのことはこの制度では同じく不可能だ」これがかれの主張である。

これに對してラッセル君は「デモクラッシーは失敗に非ずといふ立場をとつた。「私のこれに對する試驗は極めて簡單だ。世界の民主的國家は全體的に、より進歩的であり、より智的であるかどうかである。試みに貴下が貴國の人民を、過去乃至は他國の人と比較して御覽なさい。米國民はその人々よりも不幸だといふことが出來るか。貴下は民主々義が失敗だといふが、これを單なる論理や空想に比してはいけない。他の政府や國民と比較しなくてはならぬ。そして何人か米國や英國が他の國よりも不幸だといふものがあらうぞ」二人の討論はかうして終つた。場所はニューヨークのメッカ・テンプル、期日は十月廿二日の夕である。

ウエルスの民主々義觀

かの様子に、も一つこの問題について面白い意見を紹介しておきたい。それはエッチ・ジー・ウェルスの意見である。こゝにショー、ラッセル、ウェルスと並べれば、世界の最も進歩した思想家が、どんな意見を持つてゐるかゞ判るであらうからである。

ウェルスは今年（昭和二年）の始めに、英國で「Democracy Under Revision」といふ題で一場の講演をした。それが最近小册子になつて出版され、私はこれを丸善で買つた。ウェルスはこの「改訂下にある民主々義」とでも譯すべき講演において、一體デモクラッシーとは何かといふ定義から始めてゐる。かれはこれを道徳的にいへば、總ての人類は神の前に一視同人なりといふことであり、法律的には何人も法律の前には同等なりといふことであり、實際的には誰の一票も一票は一票といふやうな普選の言葉で云ひ現はし得るものである。そして何れも固定して個人と權力と地位とを否定するところの一種の平等觀念的なもの乃至は反逆的なものだといつてゐる。

この民主的觀念は無論歴史の始めからあつたものだが、明瞭な形をとり始めたのは十六世紀の封建制度が崩壊したした頃からである。かうした觀念によつて一般民衆が特權と治者階級に對して挑戰し、その權限を否定し來たるに及んでこの徴候は種々な方面に現はれて來た。政治的にいへばそれは議會政治になつた。文學的にいへば自己解放の機運を作つて、バルザック、ヂッケンス、ツルゲネーフ、ゾラ其他の新しい思想家を續出せしめたのである。

ところでこの運動を觀察して來ると、近代民主々義（Modern Democracy）といふものは政治的。社會的の永遠の形式でなくて、それは大なる瓦解の一階梯にすぎないことを發見する。民心が解放されたので今まで發達しなかつた科學も發達し、經濟もすばらしい勢ひで發展したのである。けれども既成社會の瓦解階梯は早晩終つて、新しい建設が始まらねばならぬ。即ち近代民主々義によつて權力は少數者の手から離れたけれとも、それは多數の手に渡らないで世界から滅し去つてゐる、これに新たな組織を與へねばならぬ。イタリー及びロシアは少數でも熱心な者が何をなし得るかを示した有力な例である。これからデモクラッシーは建設的な一路を辿る……これがウヱルス君の説だ。

英國産業界の新傾向

議會政治は英國から出た。新しい産業政治は矢張り英國から出るであらうと考へる。それは英國における大袈裟な勞資協調の傾向が世界の産業社會に新しい刺激を與ふるであらうからである。

昨年四月の總罷業が英國に與へた教訓といふものは大變なものであつた。英國はこれがため何やかやで五十億圓近くの損をした。しかも誰が勝つても敗けても得をする者は一人もない、殊に折角國民全體で築きあげた海外の顧客は、内輪で喧嘩してゐる間に外國の商敵にとられて仕舞ふといふ状態である。そこでこれに氣がついたのが英國の朝野である。現政府の組閣の始めにボルドウィン首相が盛んに『産業界の平和』を説いた頃は、勞働者側ではテンで嘲つてゐたものだが、今度は却つて勞働者側から動いて、總罷業否定論さへ唱へるものが出て來た。

具體論を唱へたものに有名な經濟學者ジヱー・エム・ケーンズ君がある。同君は英國の棉織業は不振だから、これが原因、勞資協調の方法その他を研究する目的で『産業議會』を設置せよと提案した。またロンドン・ミッドランド鐵道會社ではその新産業政策の具體案を完成し、更に有名なアルフレッド・モンドを社長とする帝國化學工業會社では、會社側と勞働者側から同數の代表者を選出する機關を造り、これを以て平和的に爭議を解決する方法を採用せんとしてゐる。かうした案の一部は既にマンチェスター・ガーディアン新聞や、ブラナー・モンド會社に實施され相當な成績をあげてゐる。最近の電報ではこれ等の問題について大袈裟な勞資兩側の大協議會を開く計劃があつて、勞働黨の前大臣のスノーデンやトマス兩君

などは賛成したと傳へられてゐる。

一方この保守黨内閣は組合法などの問題から隨分勞働者側の反感を買つたのは事實だが、この英國における產業界の新傾向だけは遮られるところなく進んでゐるのは注目すべき事實である。何かといへば「國策」といつたやうな文字を使用せねば氣がすまない日本と對比すると有益だと思ふ。

米國の「對英戰爭」

產業的、經濟的には飛び拔けて進步的でありながら、政治的には途法もなく保守的であるのが米國である。殊に戰時中起つた「米國第一主義」「米國同化主義」といつた運動は、まだ全くその跡をひそめずに、その姿を現はしてゐる。

この一つの現はれは近頃問題になつてゐるシカゴ市長トンプソン君の「英國に對する戰爭」である。同君のいふところによれば米國の學校で使ふ教科書といふものが、英國の提灯ばかりもつて不埒なものである。

そこで親英的プロパガンダをして兒童の精神を害することを罪狀として、取敢ずシカゴの學務局長マックアンドリユーを告訴すると同時に、米國全國の讀者には悉く手紙を出して、米國第一主義の運動に同意を求めてゐる。

識者の批評はトンプソン君に同情を表してはゐないが、なにしろ進化論を教へることを禁止してゐる州が二三にして止まらないといふ米國である。この運動が大分問題になつて米國の九つの都市にはその代表者を送つて、裁判の進行を監視してゐるといふ騒ぎである。その結果は未だ判明しないが、トンプソン君が議論の如何によつては、あはよくばこれを大統領選擧に利用して共和黨の候補者になり終はせようといふのだから、すてゝおかざるを得ない。クー・クラックス・クランとか米國愛國軍人團とかいふ反動團體が中々勢力を占めてゐる際、このトンプソン君の野心も頭から笑つてしまふのはまだ早い。

附記しておくがニユー・ヨークの市長アル・スミス君は魚屋の小僧の出身だが、このシカゴの市長も嘗てはニユースボーイをやつて現在位に並び上つた人で學問はない。スミス君は民主黨から、トン君は共和黨の候補者になるであらうことは、もう動かない。

巴里を去る

柳澤健

C

思へば、巴里に送つた月日が短かいものであるとは言はれなかつた。振り返つて見て自分は、幼少の時郷里を出て東京で送ることとなつた學生時代の相當長い時期をのぞいては、この巴里での生活が一番長かつたことを發見する。自分は、學校を出て間もなく東京から横濱へと移り住んだ。然し二年ののちには、關西に移つてゐた。その關西も、そこにゐた時代に行なつた歐羅巴への旅をのぞいてしまへば、一年半にもならない。それから、再び東京へ――その近郊へと移ることとなつた。が、そこの生活が始まつて一年とならない頃、自分の身は既に數年まへに二度も渡つた印度洋のうへに再びあつた。新綠のこまやかなまなかの巴里に着いた自分は、同じ客窓からその後さうした新綠をとう〳〵三度眺めることとなつたのであつた。既に企てた旅でこの大きな都に送つた月日をも思ひ合せれば、實にこの町の街路のマロニエの綠を五度ほど眺めたことになる。

そのマロニエの柔かな綠のなかに白い焰のやうな花が現はれ出した頃、突如自分は官命に依つて北歐の水都ストツクホ

ルムに移さうることとなつた。かくて、いつかそのマロニエの花も萎れ、夏のさなかと云はれた七月十四日の賑やかな祭も過ぎて、間もなく自分の身は巴里をあとに伯林經由ストックホルムへと走る汽車の一室のなかにあつた。………

○

外國人の身で、その遍歴する土地をその人を限りなく知り得るといふことは實に稀い。殊に各國からの旅行者が肩を摩し合ふほどに寄り集つてゐる巴里のごとき大きな都ほど、旅行者の眼が兎もすれば欺きと迷ひに惑はさるる所はあるまい。

自分は曾て日本から聞いた消息いふへで、笹川臨風氏が巴里の文明を——ひいてはフランスの文明乃至ラテンの文明をバビロンの文明に喩へてその腐爛と頽滅とを悲しんでゐらるるのを讀んだことがあつた。しかも氏のこの巴里觀は主として氏がこの都に到着早々訪ねられたモンマルトル界隈の二三の見世物の觀察から出來上つてゐる。然しながら、自分の見聞に間違ひなければ、氏の見物されたやうな場所は、フランス人のために出來てゐるのではなくて、主として外國の旅行者のために出來てゐるのである。氏が巴里到着當夜直ちにさうした場所を訪ねたと言つてゐらるるやうに、この都へ着く我が同胞の大部分も亦好んでこれを訪ねることとは事實である。然し自分は、さうした場所の名だに知らずにゐる巴里生粹の巴里人さへ知つてゐる。

然しながら、巴里が全く或る意味で「コスモポリットの都」であつても、またよしフランス人がよく言ふやうに「フランスを眞によく見るためには巴里を離れて田舍へ出掛けよ」といふことが嘘でないにしても、巴里生活の面白味と價値とを言つてもそのコスモポリタンな所にあることを否定はできない。否、單に生活の面白味といふ計りでない、素晴らしいバベルの塔、——といふ言葉は過ぎてゐるとしても、さうしたある文明史的の意味の上から見ても盡きない興味、魅力、面白さを持つてゐると言ふことができやう。

これにしても、外國人の眼に映る巴里の萬華鏡の美しさは！　眞と虚とを綴り合はせ、古きものと新らしきものとを搗き混ぜ、その國の淨らけき傳統と外國人の數多き新奇さとを取り交へたその不可思議なる斷面圖は、到底一箇の平凡なる旅行者の用意せるスケッチブックには餘るものがある。その爲めには實にフランス文學通を以て鳴つてゐる人である。イギリスのエドモンド・ゴスと言へば、同國の文壇に於いてフランスの文學に親しんで來た筈である。これでゐながら、今度讀んだやうなある新らしい作品にぶつつかると、所謂自分のフランス文學通は一もなく役に立たぬこととなつてしまふ。そして自分は獨語する、果して自分はフランス文學が、その土台になつてゐるフランス人それ自體が判つてゐるのであらうか、――と。」

そうしたゴスのまへには、勿論自分に言葉のあらう筈はない。然し、それだからこそこの國のこの都のさてはこの國の面白さがあるではなかつたか！　自分の綴る文章は、自分だけにとつては決して無駄ではない。

○

この春亡くなつたボヘミアの詩人レエネル・マリア・リルケと言へば、遠いわが國にも相當讀まれてゐる筈である。この人の小說『マルテ・ラウリッツ・ブリッゲの手記』を讀むだことのある者は、彼の巴里を愛するの情の如何にふかいかを感ずるとともに、彼の愛する巴里が如何に所謂モンマルトルの歡樂境より所謂ブールヴァールの光の巷より遠い所にあるかを知るであらう。全くフランス人自身のなかにあつても、かくほどまでに『横町』の巴里を、忘れられた一隅の巴里を、さては灰いろに廢れた巴里の姿相をしみじみ眺めたものはあるまい。しかも、このリルケの巴里が、動かし得ぬ眞實の巴里の一塊であることは、言ふまでもない。……

然し自分がいまリルケを言ひ出したのは、こゝにその「表情」について言はうとしたからではない。即ちそれは、一二年まへのこと、彼が偶に伯林のある雑誌に掲せた文章のことで、彼の国籍はチェクスロヴァキアであるが、彼の諸作は独逸語として独逸で発表せられてゐた）独逸内の人々から俄かに非難を浴せられたことがあつたといふ事件についてである。その文章といふのは、巴里が何れの国の都よりも、——わけて独逸の都よりは遥かに美しいことを述べたものであつた。独逸人ではないまでも独逸語の詩人として独逸に負ふこと最も多くたるリルケが、公然と独逸の都と較べて仏蘭西の都を賞めるといふことが、人々の烈しい非難となつたといふのであつた。

そのリルケの文章とは？ 彼は、そこで巴里の街々が如何に「表情」にみちたものであるか、——といふことをしか述べてゐるに過ぎない。彼は、たとへば伯林の町を歩くとする、そこで出逢ふ顔から顔への印象は何といふ「空虚」であることか、それに較べるとこのフランスの町に於いては、道に行き逢ふあらゆるものがそれぞれの表情を湛へて輝きつゝある、わが踏み行く道の先々に喜びの叫びの楽しみの悲しみの色さまざまなる表情は充ちみちつゝある。かくのごとく賑やかなる表情に富める町は、「容易」ならざる町の姿は、到底巴里以外ではこれを見るは難いと、述べてゐるのである

自分は、リルケほどには欧羅巴の数多くの国々の町を見て歩いてはゐない。それにしても、東欧首邦をのぞいては、一通りは、大きな町といふ町を通り過ぎてゐる自分の見聞から言つても、リルケの言葉は無理からぬ感想として首づける。まつたく彼の言ふ通り巴里の町には他では見られまい深い「表情」がみちてゐる。何と言つていいか、——ヒューマンで、親しみ深い、眺めてゐても飽きない寛大な正直な表情を各自が持つてゐて、その朋々の町々までもその数々の色合ひで明晰美しく作り上げてゐるやうに思はれる。

この表情！ その仕方の賑やかさ。思へばそれこそフランスの文物の特性でもなかつたか！

巴里の町々にたちてゐるこの細やかな表情は、わけてリルケのごとき優しくまた傷みやすい心の持ち主にとつては、この上なく貴とく思はれるものであらうが、同時にそれはまた大戰後のフランスの若いジェネレエションにとつて見れば不滿と嫉妬との對象となつてゐるといふことは、面白い現象と言はねばならない

何處の國にあつても、新らしい時代と古い時代との相剋・爭鬪は免れ難いことであるが、その最も典型的な實例を自分は今日のフランスに於いて眺められる氣がする。即ち、この國に於いては、今から十年ほどまへに行はれたかの世界大戰を劃紀として、實に明らかな思想上の分界標が建てられてゐるのを見るのである。『戰爭前（ダヴアン・ゲール）』のジェネレエションと『戰爭後（アプレ・ゲール）』のジェネレエションとの間は、年表のうへでこそ僅かに數ヶ年の相違に過ぎないが、實にそこには到底飛び越し得ない深い溝渠が存在してゐると言はれてゐるのである。思ふても見よ、白き百合の花にも譬へ得べき淨らかなる二十代の靑年期を、――學校の庭に嬉戲し匂やかなる內外の雰圍のなかに談笑して育つべかりし年頃を、彼等は假借さるなき血と泥の塹壕の日のなかに送つたのである。彼等にとつては、世界は眼を開けたときから唯だ生と死との相剋であつた。神でなければ獸の領土でしかないものであつた。意志だけがさては行爲だけが辛ふじて存在を許されてゐる世界であつた。實にその世界で彼等は五年間といふものを育てられたのである。――

かうした彼等にとつて、所謂フランス風の典雅な社交が、王朝時代から何時までも離れられない纎麗な『客間（サロン）』の匂から逃げ出せずにゐる文學が、どんなに映つたかは言ふまでもない。彼等の求めるのは、最早黃昏の物思ひ、仄なる溜息、匂やかな愛撫、水上の音樂、眞白な手套のいづれでもなかつた。それは、眞黑の夜か赫々たる砂漠の上の太陽かいづれかであつた、一滴をも與へざる無情かそれとも身を燒きつくす接吻かいづれかであつた。氷かそれとも火であつた。

○

そうした彼等にとつて、巴里はまた余りに体し過ぎた。余りに甘すぎた、余りにヒユーメンすぎた。巴里を愛する者をして思ふまゝ巴里を愛さしめよ。われはむしろ「知られざる故郷」をたづねにアフリカの諸土をさして、またはオセアニアの孤島をさしてひとり旅せん、——これが彼等のひとしく抱く願ひであつたのである。

○

「夜開く（ウヴエル・ラ・ニュイ）」「夜閉す（フェルメ・ラ・ニュイ）」の著者ポール・モーランが近著「生き佛（ブッダ・ヴィヴァン）」と題した小説を読んだら、人はそこに生まれて来るあるフランスの青年に、自分が今述べて来た「戦後」の型を容易に発見することができやう。フランスの貴族の出であるその青年は、大戦が終つて巴里に帰つて来るや、身の置き所のないごとく我と身を投じてはげしい共産主義の運動のなかに飛び込む。然し、それも暫しでそこに満足を得なかつた彼は、今度は共産主義とは反対の極所にある王政主義の「アクシオン・フランセーズ」の運動のなかへと飛び込んでしまふ。が、結局彼の心の渇きはまた身の嘆きはそこにも[illegible]たらしめなかつた。彼は、巴里にフランスにヨーロッパに——否はど「文明（シヴイリザシオン）」に左様ならを告げて、とうとう未知の東洋へと飛び出してしまふのである。（尤も、この小説は、これまでを発端として、結局この青年を再びヨーロッパへ呼び寄せそこで病死させることにしてある。——）

ポール・モーランと並んでひとしくフランスの現文壇の花形の一人となつてゐるアンドレ・モロアが書いた「アルチコール島への旅」と称する小説の主人公もまた最も代表的な「戦後」の型である。大戦が終つて戦線からかへつて出て来たこの青年は、最早この巴里で自分の心に適する職業が何一つないことを発見する。「野蛮」となつた彼の性格は、巴里の愉快の一切が、空虚と退屈とでみたされてゐるやうに感ずる。結局彼は遂に太平洋をカッターのボートで航海した婦人ジエルボーの壮図から思ひ付いて、単独ヨットで太平洋を横断しやうといふ冒険を企てることによる。しかも、彼のこの企

てが新聞に掲載さるるや、彼の手許に同行を願ひ出る手紙が山のごとくに積まれる『自分のこの心持、社會生活に對するこの嫌惡、逃れ出でんとするこの願望は、今日の青年のなかに溢つてゐる』ことを、主人公は今更に感じる。否、それ計りではない、その手紙のなかには、實に數多くの女性からのもあつた。……

自分はこゝに自分に關したある實例を援用する。自分が今夏ストックホルム赴任を命ぜられたとき、巴里にあつて引續きフランス語のなかで育てられた子供の爲めに、わざわざ彼地までフランスの婦人を連れて行くことに極めた。が、フランス人がつとめて外國へ行きたがらない民族だといふことは、格言になつてゐる位だ。殊に、自分たちの連れやうとしてゐるのは若い婦人だ。果してこうした人が見付かるかしら、とは最初から掛念であつた。で、人のすゝめるまにまに、自分は二つほどの新聞へ、三四行の廣告を出させることにして見た。一日二日經つた朝、机の上を見ると片手で握るにむづかしいほどの夥しい手紙が屆いてゐるではないか！　しかも數日のうちには、實に二百通を越える手紙が自分の机のうへに集つて來たのである。――

折柄ある懇意なフランス人が見えたので、その手紙の山を指さして、自分の驚ろきを語つた。平素からの心安さで彼は一二通讀みたがらへらず口を叩いた。――「君も一度にこんなに深山女から手紙を貰つたことはないだらうねえ」然し、自渡眞面目な顏をして附け加へて言つた。『フランスの女も變つて來たねえ……』

○

モーランの『生き佛(ブダ・ヴイヴアン)』のなかのフランスの青年が巴里をあとに東洋へと出掛けて行つたのは、言ふまでもなく『光は東邦より』來るものと思つたからであつた。

詩人シャルル・ボードレールによつて、ヴイクトル・ユーゴーによつて、テオフィル・ゴーチエによつて、さては現代

にはいつてかの情緒の詩人ピエル・ロチによつても、フランス人にとつては、『東洋(オリアン)』といふ名はその響きだけでも一つの夢を作るものであつた。十九世紀末葉のフランス文壇にオリアンタリズムといふ一つの明確な潮流が存在したとまで云つてゐる批評家さへ居る。かゝる文壇の動向は、勢ひ社会のうへに何となしに汎く行亘らざるを得ない。波斯、印度、支那さては日本に對する漠然たる憧れの念慮は、多少にまれその國の何人の胸にもあつた。……

この言はゞ浪漫主義時代の『夢』であつたむしろ『夢』に過ぎなかつた東洋が、戦後まつたく別の力で人々に迫つて来ることとなつたのである。彼等は、ボードレールを、ユーゴーを、ロチを通して漠渺たる一種のあこがれに眺めてゐた東洋を、自己の眼に依つて晃々たる白日の下に見んとしたのである。ある者は史上類を見ない苦悶に充ちた今次の世界大戦に依る西洋の『没落』に絶望して、遠くその救ひを『光』を東洋に求めんとした。ある者は長い戦争が煽り立てたはげしい感情の吐き出し所に探しあぐんで東洋へ眼を向けた。埃及の獨立、印度の反亂、支那の騒亂、さては日本の擡頭、——さうした政治上の出来事に依つて今まで無関心だつたこの東洋に注意するものの多くなつたことは固よりである。

東洋對西洋！この言葉は、自分の今次の巴里滞在の期間に於いて、最も目に觸れ耳に觸れたところのものであつた。それを筆にし口にする人が、そろつてこの問題が今日の『流行(モード)』であることを、今日の『議事日程(オルドル・デュ・ジュール)』であることを米づことはつた。それは單に論説論文の形でなさるるもの許りではなかつた。前記モーランの『生き佛』は、彼の東洋方面から、生み出された彼の『東洋對西洋』観をそのまゝに小説の形で出版されたものに他ならない。自分が嘗に時事新聞に送つた原稿のなかで書いたことのあるフォウレスト女史の日本小説『ユキサン』も亦明らかなこの東洋對西洋の問題を主題として描き出されたものである。ロベール・ド・トラッツといふ人の『東方流浪(デペースマン・オリアンタル)』も亦東邦（尤もこれはイスラム）の文化と西欧の文化との相諍相剋を小説としたものである。自分が親しく聞いたものだけでも、決して僅かだとは言へない。

然らば、この大なる東洋對西洋の問題に付いてこの國の思想家と名付けらるる人の大部分は如何なる言葉を用ゐてゐる

か？

○

　一昨年の秋のこと『各月の手記』(カイエ・デュ・モア)といふ名で月刊雑誌を出してゐる所から、その特別號として『東洋の呼ぶ聲』(アッペル・ド・ロリアン)と題した數百頁の大冊が上梓されたことがある。東洋對西洋といふ問題についてフランス内の（否、なかには獨逸のカイザーリング、白耳義のマーテルリンクなども加はつてゐた）數多い思想家からの寄稿を周到に蒐めたものであつて、一般の風向を知るのにこの上なく重寶なものであつた。

　この集輯された雜多な意見を通して自分の感じたところは、結局彼等の大部分は依然西歐文化の優越を信じて疑はないといふことであつた。今日フランスの文壇の一部では神樣扱ひをもしかねまじきほどの名聲を有する詩人ポール・ヴァレリは『歐羅巴は既にその文明を選擇し終つた、最も良しとするものを既に選擇し終つた！』と明確に問題を片付けてしまつてゐる。『狭き門』(ポルト・エトロアト)の小說に依つてわが國にも愛讀者の多い小說家アンドレ・ジイドは、『西洋も東洋より受くる所は多くある。然しそれよりも更に多く東洋文明は西洋文明から受くることあるを見出すであらう』と述べてゐる。かの『ジヤンヌダルク』と題する新奇なる果實のごとき小說を書いたジョセフ・デルテールは『アジアは常に歐羅巴の補足であり……歐羅巴はアジアの諸要素に依つて肥つて行くものである』として、地理とは反對にアジアを歐羅巴の『半島』にしてゐるのを見る。近時『西洋の防禦』(デファンス・ド・ロクシダン)を書いて頓に市價を高からしめつゝあるの觀あるアンリ・マシスは、『東洋にあつて人々の爲めに東洋主義を說きつゝあるタゴールを、岡倉を、コーロマスワミイを、さてはガンデイを見よ、彼等は一人としてわが西歐文明に依り扶育せられざりしはなし』と說いて、西洋の『權威』の確立を主張してゐる。

殊に、そのなかに幾人かの手に依つて手厳しく『西洋の沒落』の著者スペングラーが批評されてゐるのを見るのは面白い。

彼等に依れば、このスペングラーの若き崇拝者（さてはカイザーリングの若き崇拝者も）大戰後の獨逸に盛んに迎へられたのは「タゴール」が同國で迎へられたのも全く同様であるが、極めて簡單たる理由からである。即ち、戰前に於いて獨逸人は人も知るごとく組織の發展と武力の充實とに懸命であつた。彼等の自信はこの盛んなる物質を用ゐ歐羅巴に覇たらん日を待ち遠しとばかりに數ふるまでであつた。然かも大戰が來た。が結局その物質は彼等を覇者たらしめるに役立つ代りに、彼等を倒すことに役立つことになつてしまつた。彼等の自信が夢が大きかつただけ、その失望の幻滅のはげしさは想到ができやう。かくして、彼等は物質の頼むに足らず目前歐羅巴に於いて到底覇す可からざるを悟つて、獨逸人の心理活動は常にかゝる時かゝる問題を描く「精神的文化」と「東洋」とにその眼を向けんとするに到つたのである。「西洋の没落」は、實にこの戰後の獨逸人の心理に最もよく適合したものである。しかも、西洋喪失、獨逸は最早「精神文化」と「東洋」とから救いて再び「物質」と「西洋」とに依つてその地盤を築かんとしつゝある。——と、かう說いてゐるのである。

兎も角、東洋が到る所問題になつてゐることは事實であるが、東洋對西洋といふことになるとその旗色はどうもよくない。さう言へば、上に幾度か援用して來たモーランの「生き佛」も、結局西洋と東洋との對峙に於いて東洋の負けといふことになつてゐる。フオレスト女史の「ユキサン」や、ド・トラツの「東邦流離」も、西洋の優勝といふことが結末見たいになつてゐる。

○

然し、負け勝ちの問題は別として、できるだけ正しく東洋を知らうとしてゐる機運が一般に濃く動いてゐることは、言ふまでもない。

そのなかでわが日本に關する方面だけでもこの種の實例を拾つて行けば數限りなくあらう。たとへば、今在る巴里の書肆から自分のところに「現代日本文藝叢書」といふやうな名で相當長篇の小說四冊を年二回づつ誌上に互つて目付し

て行きたいから選擇飜譯のうへで種々骨折つて呉れないか、と頼んで來たことがあつた。かうした企てなぞも、到底以前には無かつたことであらう。またこれと並んで、一年ばかりまへ佐藤賢君の飜譯にかゝる井原西鶴の短篇集を珍澤本の體裁で出版した書肆があつたが、この書の出版の際自分が貰つたその書肆からの手紙に依れば、この西鶴を手始めとして、今後日本の古典を續々出版して行きたいとのことであつた。古典と言へば、こゝ一二年だけのことを言つても、いろ／＼のものが佛譯されてゐる。岩村英武君の遣つた徳川時代の小唄の選集の刊行もその一つ。松尾邦之助君の遣つた俳人其角の句集の刊行もその一つ。これは英譯からの重譯だと斷つてあつたが、あるフランス人の手で出來上つてゐる紫式部、和泉式部の日記の出版もその一つ。これは全譯ではないが、近く山田お菊さんの手で出來上らうとしてゐる源氏物語の出版もその一つ。宮森麻太郎氏の英文近松傑作集の佛譯出版もその一つ。多少傍道にはいれば、野口米次郎氏の研究になつた『光琳』『北齋』『廣重』『歌麿』の分冊刊行もその一つ。數年まへ『日本芝居』を出版したアルベール・メーボン氏が今しきりに稿を急いでゐる筈の『日本古建築史』の出版もその一つ。

勿論かくのごとき日本紹介の數々は、過去にその類例を見ない盛事であると言はゞ言へ、わが日本がフランスから受けたものまた受けつゝあるものに較べれば、固より問題にはならぬほど量に於いてまた質に於いて少ないと言つていゝであらう。それにしても今日までの所、フランスの學界思想界乃至文壇は、すくなくも日本を通しては未だ眞の『東邦よりの光』が感受できさうもない狀態にあることは、異邦に居るもののひとしく傷心をもつて觀察するところである。紹介者の足らざるためか、さては日本には眞に世界に廣く傳ふるものの存せざるためか、その判斷は更に未來を待つて知るのほかはあるまい。——

日本紹介と言へば、トマ・ローカ（Thomas Raucatと綴る）氏の書いた『御遠足（オノラブル・ピクニック）』といふ日本小説ほど、近來受けた讀物は多くあるまい。フランスの國内ならばどんな田舎の小さな本屋にでも必ず何冊かはおいてあらう。現に自分は、昨夏ある南佛の海濱の町で、御丁寧にも麗々とした漢字で『御遠足』といふ三字を入れたこの本の廣告のビラが本屋の店頭にぶらさがつてゐたのを見たことがある。否もう近頃は、單にフランス内のみに限らず、既に他の國にもこの翻譯が現はれたらしい。——といふのは、自分が今度巴里を立つてストックホルムへ來る途中に立ち寄つた伯林の町の本屋の店頭で、まぎれもないこの書物の獨譯を見たからである。このうちには、いづれ本場の日本でもこの邦譯が現はれることであらう。（現に、いつぞやこのトマ・ローカやポール・モーランやシャルル・ヴィルドラックや、日本へ行つたことのあるこの國の文學者の連中と一緒に食事をしたことがあつた時に、彼は東京のある人からこの小説の翻譯を希望して來たと自分に語つたことがある。）

この人氣小説は、要するに現代日本のカリカチュアである。トマ・ローカといふ作者の名が實は數々の意味を持つ日本語の『泊らうか（トマローカ）』から取つたものであることから見ても、その荒ましの傾向は、それとなく想像が付くものと言つてよい。要するにカリカチュアだ。從つて、そこに描かれてゐる日本がほんとうの日本かうその日本かの吟味は別として、すくなくとも外國人のなかに日夜を過してゐる我々の身にとつては決して愉快な讀物とは言はれない代物である。ジョン・パリスの日本小説『キモノ』『バンザイ』などが、倫敦邊の同胞をして肩身の狹い思ひを起さしたといふのも、今更に想ひ當る氣がした。然し、原文を讀んでゐない自分には何とも言へぬけれど『キモノ』『バンザイ』は文章もどちらかと言へば拙いし結構も不自然であり、純粹の文藝作品としては甚だ價値の高くないものであるといふことを聽いてゐる。これに反し、この『御遠足』に至つては正にその點で、『キモノ』『バンザイ』と類を異にしてゐると言つても、間違ひではあるまい。自分の記憶に誤りがなければ、たしかこの小說は一九二五年度の『フェミナ』賞（この文藝賞は日本でも有名な

かの『ゴンクール』賞と相對抗してその向ふを張つてゐるとも言へるほど有力なものである）の授賞に當つて僅か一票の違ひで、前にも烏渡書いたジョセフ・デルテールの『ジャンヌダルク』の爲め惜しくも勝を逸したと言ふ來歷のある作品である。兎も角その年刊行された數百種の文藝作品のうちから、これはと言つて選び出されたほどの小說だ。それだけに、この『高級』カリカチュアの素材をつとめてゐる日本人としては一層困る譯である、と言へば言へる。

然しながら、また思へば、低い鼻も高いと言はれていゝ氣持になるのが人情とはいへ、その爲に低い鼻が決して高くなるわけではないことは知らねばならぬ。むしろ低きを低しと言ふ者のなかにこそ眞のキャマラドリイを見出す。その意味で、われ等はトマ・ローカの日本觀察を、微笑して迎へるだけの度量はあつていい。殊に、この種の書がフランスの讀者の心に如何に映るかは、むしろわれ等には想像の外なるものすらもある。ピエル・ロチの『お菊さん（マダム・クリサンテム）』を、『日本の秋（ジャポヌリ・ドートム）』を普通の日本人が讀んで決して愉快にはならないことは、今も昔もさして變りはなかろう。しかも、一般のフランス人には、この書あるが故に日本が懷しく美しく床しく感ぜられると云ふのである。それトマ・ローカの『御遠足』に於いても亦然り、現に小說『ケニクスマール』『アトランチード』の作家として同題の活動映畫を通じその名のみは古くから日本へも聽えてゐたピエル・ブノアが昨秋わざわざ日本へ出掛けて行つたのは、この『御遠足』を讀んで日本への遊志をそゝられたからだと自白してゐるではないか……

そう思へばたとへば、巴里にゐる藤田嗣治君が、この『御遠足』の飜譯本のためによろこんで挿繪を描いてゐるといふことも別に責めるには當るまい。——

○

トマ・ローカの名の次にクローデルの名を並べるのは自分として氣が引けぬでもない。然し、この際巴里を去るに當りそ

これに馴染んだ日本人としてわがクローデルの名を忘れようといふことは世にも想され得ないことと思ふ。

クローデルは今フランス文壇に於いて燦然と天空に輝き渡つてゐる大彗星の概がある。フランス文壇の誇り、その誇でさへある。然しながら、自分はこゝで今更らしく彼の名誉のことを彼の作品のことを書かうとはしない。自分の作は、単に彼と日本との関係に止まる。

彼に古く「東方所観」と題する一巻の極東紀行が存したことは人の知る通りである。また彼の「詩技」と題する著書の巻末に於いて例へばわが日光の美を説いた章節のあることは知る人は知るであらう。彼は、既に大使として日本へ赴任するまへに、既に身親しく日本の地を踏み、日本の美の存する所を観じてゐたことは事実であつた。然しながら、今次大使として数年の星霜を日本に送ることになつてはじめて、彼の日本に対する真の理解の眼が生じたと見ることとは、自分だけの見解ではあるまい。兎も角、彼は「詩人の眼」で、日本の隅から隅まで、また古い昔から今に到るまでの時代々々を、ぢいと眺めたのであつた。彼はかくして普通の日本人の気の付かぬことまでもその眼で眺めたのであつた。——彼は、平凡な日本人よりももつともつとよく日本を観日本を感じたのであつた。

今は絶版になつてゐる筈であるが、彼がある夏日光で讃つた講演のテキストだといふ「日本精神の黎明」と題せられた小冊子を読んだことのあるものは、自分のこの感想を何等の留保なしに裏書きして呉るるに相違あるまい。僅か五六十頁にも充たぬ小型のこの本のなかに、彼の深く見詰めた眼で捉んだ日本精神の姿相といふものが如何に如実に出てゐることか！

これは詩集として一冊の本になつたかどうかは知らないが曾つて雑誌の『女性』(?)に掲載され、クローデル「聯想」のなかに挿載されてゐる東京の帝城を中心とした外濠の長詩なぞも、わが日本の為めに作てられた美しいモニュメントとも言へる立派なものである。(今から数年まへ自分は東京である日の暮れ方四ケ關からぶら〳〵濠の方へ歩いて行くと、はし

たくこれおたぶら〳〵ひとり淋しげに歩いてゐる彼に出逢つたことがあつた。その時の情景が今も眼に浮ぶ。あゝ、その靜かな溝ばたを好んでゐた彼はいま自動車と活動寫眞の邦アメリカの眞中にゐるのだ！）自分は、この詩によつてどれほど深く忘れてゐた古い『日本』の美と力とを思ひ出したことであつたらう。

『四風帖（カトル・ヴァン）』と題して洒落れた裝釘で日本から出版された近時の彼の詩集のなかに蒐められてゐる彼の短詩も、また自分の驚ろきと悦びとの對象となつたものである。その短詩は、形式だけでも既に西洋放れのしたものである。しかもそこに盛られた詩人の情感は、言はゞただちに芭蕉の寂びに迫り蕪村の雅に迫りさては古支那の雄健深遠なる數々の詩人に迫るほどのものであつた。自分は、これほどまでに東洋人日本人になり切つた西洋人のあるのを多く知らない。『クローデルは、すつかり東洋のものと日本のものを取つてしまつてゐる。そして、その代りに我々は彼から何を取つたか？——』そんなことを自分はいつか人に言つたこともある。

兎も角クローデルにとつて日本は心の故郷であつた。そうした彼にとつて、日本を語るといふことは深い樂しみであつたに相違ない。一昨年頃一時日本からフランスに歸つてゐた時も、よくスペーンとかベルジックとかイギリスとかの外國の首都へ講演に出掛けては、『日本の文學について』といふやうな題の話しをしたものであつた。誰かも言つたやうに、彼はある意味では、フランスの大使といふよりも、日本の大使と言はれていい人であつた。

あゝ、それにしても、わが日本は、——日本の文壇は、數年に渡つてこの人をその土地のうへに置きながらこの人から何を取つたか？何を貰つたか？

○

巴里においてこのクローデルの姿を最後に見たのは、忘れもしない六月廿四日の夜、あのコメデイ・ド・シヤンゼリゼエ

の劇場の廊下でであつた

この晩こそはその劇場で岡本綺堂氏原作の「修禅寺物語」が「仮面」と改題されて上演されたその第一夜であつた。常日頃は上層の知識階級をしか客としてゐない、巴里の築地小劇場とも言へるこの劇場は、今晩ばかりは燕尾服とデコルテとでうづまつてしまつた。肝腎の日本人側は大使が恰度ジュネーヴの会議に行かれて留守であつたが、これでも大人は見えたし、なかなか賑であつた。フランス人側からは大臣で見えた人もあり、すぐれた文学者たどもゐて、これまた賑やかであつた。クローデルもこのなかにゐた。彼は、幕間にはよく廊下の片隅で、その感想らしきものを、これもこの夜来合せたヴイルドラックなぞをまへに語り合せてゐる。を自分は見た。二人ともひどく歌舞伎芝居に讃仰した人であることは世の知つてゐる通りだ。（さうだ、この際ヴイルドラックが歌舞伎を見てから発した言葉を書き付けて置かう。——世界の芝居のなかで日本の芝居だけが「完成」まで達したものだ。これをこそ真の芝居と呼べる。欧羅巴の芝居は未だ芝居にまでなつてゐたいものだ。……）

然し、ここでまた自分はクローデルを持ち出さうといふのではたい。「修禅寺物語」上演のことを、——といふよりもその主人公の夜叉王をやつたジェミエのことを書き記さうとしてゐるに外たらないのだ。

「修禅寺物語」の上演は、——自分が前にその初演の夜を「忘れもしない」なぞと書き出してゐるやうに、自分にとつては實にいろいろの意味で記念となるものであつた。自分は、この爲めに初めて巴里の舞台裏を知ることができた。初めて巴里の役者たちの日頃といふやうなものを知ることができた。さては、東西さして變りもたいらしい芝居道の一種の不愉快な空氣といふものも知ることができた。それ許りではない、日本人が外國人と一緒になつて仕事することの如何に容易たらぬものであるかも知ることができた。何しろ自分は、最初から最後までこの上演について縁の下働きをさせられたやうたものだつたから……然し、そんたことは今となつては如何でもいい。自分がこの芝居の上演に依つて何と言つても相

當感謝していい機會を與へられたのはわが名優ジェミエを知るを得たと言ふことである。

ジェミエのごとき男は日渡一口に言ふのは難かしい。殊にわが日本に於ては、――殊更劇壇に於いては、――こんな型が存在してゐるやうな氣がせぬ。天才といふ言葉で蔽つてしまへばそれまでであるが、兎に角これ程の力と才と德とのある人は珍らしい。

彼の熾んな活動振と言へば、巴里では周知のことである。今夜オデオン座（國立劇場の一つで數年來彼が座長を務つてゐる）でたとへば『ヴェニスの商人』で彼の名うてのシャイロックでも遣つたとする。と思へば、その翌くる日はたとへば伯林でラインハルト邊に逢つて芝居のうへの佛獨提携談をしてゐる。かと思ふと今度はたとへば羅馬邊に飛んで行つてそこの公衆を對手に講演をしたり、首相ムソリニや劇作家ピランデロなんぞと食卓をかこんで佛伊間の劇壇連絡方法を計劃したりしてゐる。かと思ふと、もうその翌日には巴里に歸つてトロカデロ邊の大きなホールで一萬人位の聽衆をまへに手を揚げ卓をたゝいて、樂聖ベトーヴェンの苦難の生活とその革命的理想とを絶叫したりする。が、その翌くる日は自分等日本人のなかに伍して、大きな手に木の割り箸を持ち刺身を辛ふじてはさみながら、小兒のごとく滿面に笑みをたゝえて喜ぶ好々爺振りを見せるのである。……

また彼の頭の確かさよ、鋭どさよ。舞台稽古の日、既に一切の備付けを終れる舞台をまへに、彼は夜叉王の扮装のまゝ暗闇の觀客席の一席に座して指揮する。大きな彼の『始め！（コンマンセー）』の言葉とともに照明、音樂、役者の演技は同時に動き出す。一瞬、二瞬、三瞬。彼の大きな聲は『否！（ノン）』と怒鳴り出す。……照明の青い色がやゝ淡すぎた。もすこし強く、併しその光の角度が舞台で目立たぬやうにする。音樂のテンポを全體に亘つてもすこし速める、がヴィオロンが中心となるとそこの樂節はもつと緩やかでもいい……『それから、クラリオン！』と、たとへば伴侶に扮した役者に向つて叫ぶ。『おまへの右足を、もうすこし引つ張るやうに。それから、顔をもすこし頼家の方に寄せて。もすこし、もすこし、あ、それ

でよし、よし、それから、再び繰り返す――「誰より出し！」

かくして、ジェミエの一門の頭脳に依つて、照明と背景と役者の演技とは漸次相寄り相抱き合ひ終局に伴ふ一つの『生きた』舞台を見る見るうちに創り上げる。

彼の稽古振りのきびしさは、「修繕寺物語」の二三十回にも亙らうレペテシォンに一度でも立ち合つたほどの日本人に感ぜぬものは一人もあるまい。あの穴蔵をのべつ言つてゐるやうな好々爺の師匠「パトロン」が、さて稽古をはじめたとなると、照明に何十人の他人が立ち見をしてゐやうが一向頓着もなく、弟子たちの演技振りをがみがみ叱りつける。そして氣に入るまでは、何度までも「繰り返し！」だ。自分は、あの彼の門下の高弟に扮したゴーが、酔ひで傷付き蹴けたがら門にはいつて來て倒れかゝる姿を繰り返し幾度見せられたことであらう！俳優と小道具とは離れない所作相棒のベラン嬢でさへ、舞台で顔をしかめながら小声で自分に言つたことがある。――「すこし過ぎますね。これでは疲れてしまつて、却つてだめ……」

この稽古のきびしさも、自分を一層動かしたのは、弟子どもがこのやかましい個所の出口でも言ふところが、腹から心服してゐるらしいといふことを見たからであつた。うちのパトロンは實にいい人ですよ――話したが顔を見て自分は武若いカヴェ嬢（姉娘に扮した）からもきいた。前作まで舞踊をやつてゐたといふマルサック（頼家に扮した）からもきいた。原本をやつた）からもきいた。叱られ続けの私のあつた、その化の出當いい役を振られてゐる修禅のゴーからもきいた。……作にはなかつた魔法使のお婆さんをやつたこんな端役に苦の惜くなほど熱心だつたロージエからもきいた。

このジェミエを親しく知ることができたといふこと、――これが自分にとつてどうして巴里滞在の大きな収穫の一つでないと言はれやう！

○

この年の春、空の晴れ渡つたある日、ジェミエを主賓としたある午餐會である。食事のはじまる一寸前、陽の耀いた青葉の見渡せる露台に人人と話を交してゐた彼が、自分の姿を見付けるや、あの大きな顔で、鳥渡話があるから來い、といふ表情をした。自分は何の氣なしに、その側へ行つた。すると彼は、人々から離れ露台の隅の方に自分を誘ふて、低い聲で突然こんなことを口にした。——

『君は、ジャン・ジョレスのことを書いて日本へ紹介したといふぢやないか？』

自分は、誰がジェミエにそんなことを喋べつたか知らと、不審がつた。が、その通りだと答へた。すると彼は、低い聲をそのまゝ續けて尋ねた。——

『日本では彼の思想のやうなものを紹介することが、よろこばれないといふではないか？』

自分は、それこそ誰がこんな風にジェミエに日本を紹介したのだと思つた。それにしても自分は　この質問に、『その通り』とも『いやそんなことはないよ』、とも言へなかつた。で自分は、わざとから見當はづれの答辯をしたものである。——

『ジョレスの思想といふものは、本來日本人の思想には親しいものだよ。西洋人の眼からはどうか知らないが、日本人から見ると、彼の思想は殊に哲學思想は佛教の哲理に非常に近いところがある。だから、日本人には彼の思想はよく理解できるよ』

もつとこの話を續ける筈であつたらしい彼と自分との間にまたぞろぞろ他の人たちがはいつて來たので、ジョレスの話はこのまゝになつてしまつた。……

ジェミエがジョレスのことを持ち出したのは、實は無理がない。彼は、その思想その活動その事業に於いて疑ひもなくジョレスの示せるが如き道を歩きつゝあるのであるから。舞台上のその態度すらもジョレス達をして充分に感ぜしめるであらうことも想像し得られなくもない。おそらくジェミエの心中に於いてジョレスは最も懇ろな意中の人の一人であることは疑ひを容れまい。

自分も、もとより今でもジョレスは意中の人の一人ではある。然し、それかと言つて、ジョレスの政治思想とその政治活動とを祖述してゐる彼の今の社會黨、さては急進社會黨の古き主張が、その首領たちの言動がいつも他にまして自分の興味を集めてゐたとは決して言へない。むしろ、最近の自分には、何かなしに所謂右黨を形造つてゐる人々の言動の方にい、より多くの興味が惹かれるやうにさへ感じられる。しかも自分の觀察に誤りがないとすれば、現在フランスの知識階級乃至若きジェネレーションを形作れる者等のなかに於ても亦大體に於いて、「左」よりはむしろ「右」に興味を持つもの頗る多きが如く見受けられるのである。從つて自分の最近のこの興味の轉向を若し『變化』と名付け得べくば、この變化は或ひは滯佛數年日夕缺かさる新聞雜誌等の閲讀に依り所謂ミリユの影響を識らず知らずに享けた結果かも知れない。兎も角自分は、最初の年に豫約して讀んでゐた左黨機關紙『ユーチチアン』紙に、二年目には保守主義の『エコー・ド・パリ』紙の豫約に代り、三年目には更に右傾した王黨機關紙『アクシォン・フラーセーズ』が何よりの愛讀紙となつてしまつたのであつた。ジョレスの遺業を繼いで今日強大なる社會黨を統率せるレオン・ブルム（最もその思想系統より言へば、ジョレスよりはむしろゲエドに近いとせらるる。）が武者振りましく編輯に努めてゐる社會黨機關紙『ポピュレール』に到つては、日刊紙となつたのが最近であつたとは言へつい徐々お馴染となるに及ばずして、フランスの土地を離れることとなつてしまつた。

思ふにフランスの近代並びに現代史を仔細に點檢する者の感ずることは、實際政治のうへに於いて政權は常に右より左

へたへと傾移しつゝあるといふ事實である。即ち、政權を握る者は殆んど常に中央よりは左方に地位する政黨であり、その政黨が時勢の動くにつれ新たに發生する政黨に依つて右に押し遣られれば、遂に政權と遠ざかるといふ現象を來す。その結果、この國に於いては、左黨が絶えず永久的與黨であり、右黨が永久的野黨であるといふ今日までの所他の國々に於いては珍らしいと言つてもいい狀態を續けて來てゐるのである。勿論今日まで社會黨が朝に立つたといふ事實はない。然し、既に百名前後の下院議員を有するこの强力なる政黨がいづれ遠からぬ將來に内閣を組織する日のあることは、殆んど誰しも豫見してゐる所である。これ許りか、三年まへの例のエリオを首相とした左黨聯合(カルテル)内閣には、社會黨より閣員は出さざりしもののこれら中堅として殆んど内閣の指導者を以て任じてゐた程であり、引續いてパンルヴェ内閣、ブリアン内閣でもまた現存のポアンカレ内閣さへもが、その組閣に際して社會黨員の入閣を切に勸誘するところあつたと取沙汰されてゐる。この事實から推しても、この國に於いては既に社會黨自身、野黨ではなくて、政權が眼前にぶらさがつてゐる政黨のサークルの一をなしてゐると言ふことができる。

かゝる現象は、如何なる結果を生むこととなろか? 言ふまでもなく、政權を握る者また握り得るものは、絶えず現實の難問題に逢着するを以て、時に平素の主義主張を拋棄し讓歩し、妥協衒合の途に出でざるを得ぬ破目に陥るものである。そこに到ると、政權を握る日の容易にあり得ぬ連中は呑氣だ。何等の係りなく徹頭徹尾理論の貫徹を期することができる。彼の世界は、政府黨其他のごとく、現實界の悲哀を知らない。妥協衒合が生み出すウソを知らない。その言説は、現もすれば政府黨其他が口にする辯疏、陳辯と事違つてあくまで明晰にして高邁である。と言へる。一般知識階級乃至新興ジェネレーションが、實際政治に極めて無關心なるか、左もなくば左黨を排して言はゞ翕然として人氣右黨に聚まると言ふやうな現象を見せてるといふことは、この間の消息を考へればまことに當然事であると言はなければならない。(このフランスの現象の恰度反對を示すものに、——同時にこれと均しい眞理を證明するものに日本があると言へぬであらうか?

日本の既成政黨にはこの國で言ふ左右の對峙はなく一樣に右ばかりである。從つて、左翼黨は、今のところ實際政治の圏外からは全く閑却されてゐる。わが國の知識階級を以て稱ばるる人々さては若き學生等の間に實際政治を　　するものの多いことと乃至左傾思想熱の相當盛んだと傳へらるることは、けだし其時の消息を示してゐるものと言ふことはできぬであらうか？）

批評家アルベール・チボーデーの論じたもののなかで、今フランスの文學者にして前記王黨機關紙『アクション・フランセーズ』を讀んでゐぬものは一人もないであらうと、まで言つてゐるのを見たことがある。その眞否は自分の關より知る所ではないが、兎も角この新聞は右黨も右黨所謂極右黨の本山で、それだけ實際政治の圏外からは思ひ切つて離れてゐるわけだ。（極左黨としてはこの王黨と對峙するものに共産黨があり、機關紙として『ユーマニテ』を持つてゐるが、下院議員に三十名近くの多數を有するこの黨は、王黨と比べれば、勿論實際政治圏内にちやんと喰ひ込んでゐる。從つて、この問題で彼此相對比することは當るまい。）それだけに、ここに揭載さるる論説批評は、旗幟堂々、文を讀ること縱横無礙言はんと欲する所を盡して誰に遠慮も會釋もあつたものではない。理論に於いてこれほど明晰なるはなく、理想に於いてこれほど高遠なるはないことを思はせる。加ふるに、その主筆シヤルル・モラス、レオン・ドデーの兩氏は人も知る通り當代無比とも言はるる秀れたる論客でもある。讀み物としてその新聞が面白からざる筈はない。一度この新聞の面白味を知つたものにとつては、何と左黨の『コーチチアン』の味の甘さよ。『ポピュレール』の武者振りの心細さよ。さては『ユーマニテ』の悦くし切れぬ機會主義のおめでたさよ。……

兎も角、フランスの國際政治の結果を直接蒙らないものにとつては、右になればなるほどにその新聞が面白い。新聞許りではない、著作なぞに於いても、概して右の傾向に屬する人々の書いたもののが質に於いても秀れてゐる、と右翼の人はまた言ひ出す。そう言へばたとへば、前記のモラス、ドーデーの才能に比べられる人が、今社會黨や共産黨の系

統の人のなかに誰が居やう。ピエル・アンプやアンリ・バルビュスでは、まだこの二人の敵ではあるまい。あの大戰終了近くに亡くなつたモーリス・バレス。この稀有な才能を持つた人、このはつきりした政治上の立場を持つた人の側へ並ぶことのできる人が、左黨の方に半人でもあるのか？――とその人たちは言ふ。まつたく、そう言へば政治的に左傾した人で、これはと言ふ人は出てゐない。アナトール・フランスは？と言ふ人があるかも知れないけれど、この人は本質的には徹頭徹尾貴族主義者で傳統主義者で、むしろモーラスも言つたやうに右も右極右に分類さるべき人であるかも知れぬ。ジョレスを强いて文學者の地位まで移して見やうと言ふ人があるが、それも稍々滑稽な感は免れまい。

フランスの左黨の知識階級に於ける立場、思想界に於ける立場、さてはまた文壇に於ける立場といふものは、から眺めて見ると相當贔屓眼でも、右黨の夫れと較べればめつきり影の薄いことは事實と云はねばなるまい。

○

巴里へ着いて間もなくのことだつた。オペラの横の通りをぶらぶら歩いてゐると、急にわあといふ喊聲がきこえてきたので、何事かと後を振り向いて見ると、二三十人ほどの一團が、騎馬巡査を交へた十數人の警官に追はれて此方へと逃げて來るのだつた。自分は一寸道を避けて思ひがけないこの光景に眺め入つた。追はれて來た人々は、いづれも十七八からせいぜい二十三四位かと思はれる白面の少青年たちであつた。最初時節柄他分共產黨の示威運動でもあつたのかと思つた自分は、その若々しい顏を見るに及んで、更にそのそろつて如何にも品のいい顏だちを見るに及んでまたそのそろつて小ざつぱりとした身なりを見るに及んで、各自胸のところに垂らしてゐる紫いろの帛を見るに及んで、ははあ、これがかねて聽いてゐる『アクシォン・フランセーズ』のなかの學生團『カムロ・デュ・ロア』の連中であるな、といふことに思ひ付いた。それにしても一見からした若々しい貴公子の群を荒々しい巡査が追ひ廻すなぞといふ光景は、不調和でもあり且つ

は多少痛々しくもあつた。巡査は遠慮もなくこづき廻した。蹴り取られて地上になげ出された黒い帽を拾ひ返さうとして身をかゞめた青年を、大きな靴で蹴り倒す巡査もあつた。青年たちが逃げる拍子に落した帽子を、容赦ないまで踏み砕いてゐる巡査もあつた。逃げ後れた二三人の青年は折り重つて来た巡査のために捕へられ、擲られながら、彼方に牽かれて行くのも見えた。……

翌日の新聞を見ると、三四行の記事が出てゐた。フランス翰林院（アカデミー）の新会員としてジョナール氏が選挙されたのを、平素から同氏の言説を快しとしなかつた『アクシォン・フランセーズ』の学生団が相蹶起して示威運動に出でたといふのである。昨日自分がオペラの横で見たものは、言はゞその示威運動の流れであつたのだつた。而も何、これこそ自分が巴里へ着いて最初に見た『カムロ・デュ・ロア』であつた。

この光景は当分暫らくは自分の頭から消えなかつた。何とはなしに自分が『アクシォン・フランセーズ』の運動に、『カムロ・デュ・ロア』の活動に、漸次興味を持つやうになつたのは、この日の印象が強く原因をなしてゐたやうにも想はれる。

——日本に於いては学生のなかでの政治運動乃至社会運動と言へば、兎もすれば社会主義乃至は共産主義の為めの運動が連想される。ところが、このフランスでは、先づ何よりもこの王党主義の運動だ。『カムロ・デュ・ロア』の運動だ。勿論、若い社会主義者の会合もあれば、共産主義の学生を集める会合もある。然し、この『カムロ・デュ・ロア』の運動とくらべれば、數でもあるまい。それが巴里許りではない、フランスの全土に拡がつてゐるのだ。

この『アクシォン・フランセーズ』の大御所は言ふまでもなくシャルル・モーラスその人である。彼と並んで今この王党運動の牛耳を採りつゝあるレオン・ドーデー自身も、元はと言へばモーラスに『改宗』された一人に外ならぬ。まつたく、モーラス無くして『アクシォン・フランセーズ』の存在を考ふることは難かしい。

モーラスの王権思想の根柢となるものは、先づ希臘思想であると言はれてゐる。それは秩序と調和との力強き美くしさである。彼は何よりも近代の現代の合言葉たる『自由』『平等』若くは『デモクラシー』の名に依つて目されたる無政府的

混亂の狀態を惡まうとする。從つて彼はフランス革命を惡み、文壇の所謂ローマンチック運動を惡み、更に現代政治の眞諦とも言はるべき共和主義議院政治を惡むのである。彼は、一人の眞に責任ある且つ永續する王者に依つて統括さるゝ秩序正しき政治社會の樹立を、萬人の幸福の爲めに主張する。

同時に彼はまた、その所說の極めて現實的であり實證的であることを强調する。オーギュスト・コムトの實證哲學は、かくして彼の政治哲學を形作るに役立つてゐる。彼は空想を排し夢想を斥け、飽迄經驗に依る政治を訓へる。從つて彼にとつて、所謂左傾政治なるものは、過去の經驗の教ふる所を忘れて、何物とも知れざる空想裡にその基準を求めんとするもの、言はゞ人類を故なく冒險せしめんとするもので、斯くのごときは皷を打つて擊たなければならないとする。過去に於ける人類の歷史は、その步みの跡を何人の眼にも明瞭に殘してゐる。その步みの跡を辿り、昨日の人類が殘せる經驗の聲にきいて、我等の步みを步むほかに、何處に我等に許されたる能力があるのか！ フランスの過去を見よ。王政は、實に國家の光榮と萬民の幸福とを齎らした一の『實證』であつた。勿論そこに改むべき點も亦鮮くないことは、また其後の經驗の訓へてゐる處でもある。よし、改むべきは改めることとして兎も角も過去に於いて政治上の實蹟を最もあげ得た王政をこの國で再び興さうではないか、――と說くのである。

モーラスのこの政治哲學は、佛蘭西大革命、その人權宣言、所謂第三共和制、議會政治、民主政治、さては普通選擧等々々の實現若くは標語に依つて一向政治の實質が改善して行くかには見えぬ現狀に暫く絕望の聲を擧げんとする知識階級、ましていづこの國にありても、所謂現狀不滿を通性とするかに見える青年學生の間に、熱烈な共鳴者を見出すといふことは無理からぬことゝも思はれる。（共產黨の機關紙『ユーマニテ』が五萬の讀者をしか有しないのに、『アクション・フランセーズ』は實に二十萬の讀者を有してゐるといふことである。）況んや、モーラスは人も知るごとき秀れたる詩人でもある。その妙なる金玉のひゞきを湛えてゐる名文章が、血涌る青年の胸を打たぬとあらば、却つて世の不思議と言はねばならぬかも知れない。……



書齋の Past & Present

魯庵生

（一）書齋は文化生活の必然要件

アトリエが無くとも畫は描ける。街頭のキヤリケチユリストは水彩の安繪具箱一つを抱へて歩道に陣取り、權兵衛でも太郎兵衛でも引捉へて帝展の大先生よりも上手な似顔を描く、書齋が無くとも本も讀めるし著述も出來る。朝夕の通勤の電車の隅や食後の運動に公園のロハ臺で受驗の準備の勉强もすれば懸賞小說の應募の作をするものもある。名畫や名著が必ずしも立派なアトリエや書齋から產れるものとは定つてゐない。

植村正久先生は無類の讀書家であつたが、私がマダ青年の時、先生は私に向つて、君は群集の中で讀んだり考へたりする事が出來るかと訊かれた。私は正直に周圍がガヤ〲してゐては讀む事も考へる事も出來ないと答へると、先生は、貧乏書生はそれでは不自由する。ドンナ場所でも勉强出來るやうに頭の訓練をして置かないと、貧乏讀書生は結局都會では學問が出來ないで、山の中へでも引込まねばならなくなると云つて笑はれた。先生はドンナ群集の中でも、例へば講演に招かれて自分の順番の來るのを講壇脇の講師席で待つ間でも、壇上の雄辯にも聽衆の騷音にも少しも煩はされないで讀書に潜入する事が出來たさうだ。アレほど忙がしく東奔西走する間に人數倍獵書博涉した先生の事であるから左もあらう。だが、如何に周圍に煩はされない先生のや

うな篤學でも讀書するには騷がしいよりは靜かな場所を撰ばれるだらう。生活の自由が許されるなら讀書子は誰でも日常家居に成るべく家人の聲から隔絕した書齋を要求する。讀書が通有興味である文化人に取つては書齋は生活の必要件である。

一體人は群居せずにはゐられないくせに時折は群居に堪へられなくなつて孤獨の寂寥を味ひたくなるものだ。熱鬧の市街に住するものほど寂寞に憧憬する。下町の商業區の中心に（今では土一升金一升どころで無いので尺寸の地をも惜んで剩さないが以前は）往々山林の幽栖を想はせる侘びた坪庭の茶室があつたのは此の閑寂を希ふ人間の矛盾の心理を語るので、十呂盤をバイブルとする町人も金の音ばかりでは生きてゐられないのだ。一體文藝や風流とは對蹠人（アンチポーヅ）であるべき筈の商人仲間に却て茶や俳諧の意外の數寄者があるのは茶や俳諧で養はれる閑寂の思想が市塵に穢れる頭の溷濁を淨めるからである。如何なる十呂盤人種でも人間は時としては十呂盤を超越した生活を味ひたくなるもんだ。十呂盤で勞れた頭は十呂盤を忘れた氣分にならなければ癒されない。

此の氣分轉換の要求が讀書の習慣の無い時代には茶趣味となり俳諧味となるのだが、讀書が學者や特殊の知識探究者に限られない普通興味となつた今日は茶や俳諧よりも讀書に親んで世務の煩勞を忘れようとするもの丶方が多くなる。隨つて又書齋の生活をも樂みたくなる。讀書が衆人群居の中で出來るか出來ないかの問題で無くして、人間は時として家族からさへも離れて獨りを樂みたくなる要求からして書齋を必要とするので、啻だ讀書する爲めのみで書齋を要求するのでは無い。

ツイ先頃の事、或る雜誌で書齋の好尚を題目として各方面の名士の廻答を集めて揭載した事があつた。其中に或る錚々の民間建築技師が書齋は學者操觚者外には必要の無いもので、自分の如き現に書齋を持たない一人であると答へたのがあつた。此の建築技師は一方に趣味家としても相當に聞えて新時代の理解もあるやうに聞いたが、御當人自身が書齋を持つてるか否かは別問題として、若し書齋が學者操觚者以外の一般人に不必要であると（アイロニイで無くして）ホントウに思つてるなら新時代の理解の程度も大抵想像される。今日の一般讀書熱が昔日の比で無いのは呶々するまでもなく每日の新聞廣告欄が殆んど新刊書で塡められるのを見ても明らかである。殊に最近の圓本全集は一層讀書趣味を煽つて、小學兒童までが小さな藏書家とならうとしてゐる。前云ふ如く、書齋の要求は必ずしも讀書の爲めのみでは無いが、讀書熱の熾烈が書齋趣味をも亦增進するは必然の結果で、今日の文化生活が書齋を必要件とするといふは

必ずしも我々著述業者が自己の趣味或は希望に依する我田引水論では無いのである。

但し書齋といふと架上万卷、牙軸牙籤を列べ文房器玩を而つた贅澤な室を聯想するが、文化生活が必ずしも大きい屋根の家を指すので無いと同様に、爰に云ふ書齋も、必ずしも數寄を凝らした風雅な茶室や三越仕込みの欧風家具を列べた別棟の洋館を云ふのでは無い。三疊でも四疊でも讀書安息を目的とする主人専用の起居の室を指すのである。

尤も讀書の習慣の無い從來からして、毎日出勤し或は奔走して碌々自宅に沈着く暇の無い職業者の家でも、茶の間や座敷の一隅に小さな机を据ゑて主人の座席を設けたもので、机の在る處即ち主人の牙城であつた。が、讀書の趣味が普及して誰でも雜誌の二三冊や豫約の叢書や全集の二三種も取るやうになつては必要上から一隅だけの領分では満足出來なくなつた。書齋の必要は最早學者や操觚者だけに限らなくなつたので、一般人も亦各々經濟力の許す範囲で三疊でも四疊半でも讀書の爲めの別室を要求するは、文化人として贅澤でも我儘でも無い必然の欲求である。

（三）樽の書齋

讀書は必ずしも明窓に几を必要としない。[illegible]存斷が必しも[illegible]では無い。心靜かに悠然として[illegible]樂む事が出來るなら、電車や自動車が山を聾する町の中でも、日が聞へる狭苦しい部屋でも厭ふ處では無い。安易と情況を[illegible]讀書子としては千疊敷よりも方丈の室、豪奢な御殿造りよりも簡素な佗作りが却て心を落付かして居心がイヽものだ。時には月の洩る破れ窓が却て讀書の興趣を深くする場合さへもある。

チオゲネスの此の樽の室を見よ。歴史上のチオゲネスは樽の中に犬のやうに蹲まつてゐたので、此の紳容平のやうに風雅を知はせる生活では無かつたらうが、日光を遮る勿れと歴山帝を叱咤した意氣から云へば樽の生活が決して窮屈で無かつたらう。紳容平にせよ數寄の書齋を擁する樽の書齋は高更で無い。青原の樹伏の窮命と違つて、之ならば渡世[illegible]をして見たくなる物數寄があるさうだ。

樽を住居としてゐたのはチオゲネスばかりでない。近き前は十八世紀の英人の出所たるグラッブ街（ストリート）の詩人の中にも樽の生活者が何人も有つたらしい。詩名よりは醜名で鳴るトーマス・ナッシュも其の一人であつた。日本の庭植りの樽は形が俗ッぽくて漬物桶か手桶代りにしかならず、手桶代りとしても地蔵坊樽次の一篇でも無ければ酒樽に入れられて葬られるのを[illegible]

るものは無さゝうだが、西洋の樽は中部が凸圓で極めて雅味がある。此圖を見ても萬更住み心が惡くなささうで、樽で暮したくなる和製ヂオゲネスが一人や二人は有りさうに思はれる。廣い庭園に亭や茶席を三つも四つも作つて樂む長者茶人は草原の隅に大きな古樽を一つ轉がして見るも亦風流であらう。



Diogenes Lanthorne (1631)

亞米利加では禁酒の嚴令が布かれた結果、到る處で釀造用の大樽が不用となつて荷厄介にされてる。オハイオのオネエルといふシヤレ者が之から思ひついて廢物の樽を集め、郊外のヴワーミリオンに樽の家の部落を作つた。唯見る一列の樽が恰も今倉庫から搬出されたやうに行儀よく横に轉がつてゐる。左右から一々支柱を建てて動かぬやうにし、正面には小さな採光（あかりとり）の窓を明け、背面にはポーチを取附け、內部を二室又は三室に仕切つて浴槽までも設備し、生中のバンガロウよりも住み心よく設計されてゐる。突飛好きの米國人は忽ち評判して人氣が湧き、オハイオの樽の部落は遊米觀光客のピルグリメージの一つとなつた。何しろ三十幾つかの樽の家がズラリと列んだ光景は頗る奇觀を極めて、勝誇つた禁酒黨を苦笑せしむる皮肉なユートピヤである。

樽の家は日本でも曾て或る年の博覽會に或る麥酒會社のビヤホールとして設計された事があつた。外形が頗る雅味があるに加へて中央が凸圓だから內部が存外廣く使へる。尤も博覽會のは拵へ物だからイクラでも大きく都合のイヽやうに設計出來る。だが、本物の樽でも釀造用の十石二十石入なら可成な大きさがある。オハイオで住家に改造されたのは九呎に十二呎といふのだから六疊以上の廣さで、器用に造作すれば立派な住宅になる。書齋とするには十分である。近頃上方の或る富豪が千石積の和船を買つて內部を茶室に改造して、漁村の入江に作つた池に浮べたといふ咄がある。酒樽なら千石船と違つてドンナに大きいのでも安く買へる。且入江擬ひの池を作らないでもドコへ轉がしても笑止しく無い。隨分プロの墓口でも支辨されさうだ。だが、我がプロ黨の諸君の中には樽の書齋を作るシヤレ氣のあるものは無さゝうだ。

山の手の或る邸宅の接地にタイール崇拜の夜學の老人がうつて、小さな夜學小屋にタゴールの肖像畫を額にして書架の著作や傳記評論を集めた小さなタゴール文庫を作つてるといふ新聞記事が見えた。町内の有志者は此の街頭の哲學者にチオゲネスの樽の書齋を作つて寄進したらドウであらう。

(三) 書齋は一つの藝術

我々無産者の矮屋では書齋は客間を兼ね、寢室にも早變りするは常であるが、我々のに限らず書齋は性質上、

(1) 讀書靜觀の道場
(2) 著述研究をする工房
(3) 親朋と心置きなく語る閑談室
(4) 鹿ケ谷の陰謀をさへ企らむ密議室
(5) 家人をさへ闖入を許さゞる秘密室
(6) 外部から絶縁する逃避室
(7) 家事世事から解放される安息所
(8) 一家の法治から獨立する治外法權地

等、等である。一言すれば書齋は容易に外間の覗閲を許さゞる主人の城郭でもあらうし、又内面的に外延的に一家の生活の樞機を處理する政廳でもある。

が、書齋の本來は[illegible]である。[illegible]けて客を迎へる室でも無い。一切の拘束から解放されてのび伸びする自由國であるから使用者の個性の本來の面目が思ふ存分に赤裸々に發現される。書齋に心あるものは客間と等しく或は客間以上に飾付けに心を配るが、伊勢流でも小笠原流でも無い無手勝手流である。趣味に活きるものは火鉢一本、文房一つにも凝るが、必ずしも茶人好みでも文人好みでも無い自分好みである。萬事に無頓着な家人任せのドウでもイヽ流儀のものは無關心が無關心の儘に現はれてをる。人の家には大々流儀の違つた特色が現はれてゐるもんだが、客間は來客の批評を豫想とするから勢ひ在來の因襲に從はねばならぬである。茶の間は主婦の管轄で毎日の生活の樂屋であるから、萬事が實用本位で支配されて大凡形式が一定してをる。但だ書齋だけは何者の拘束をも受けない主人獨自の自由の天地であるから、主人の個性が[illegible]に發現されてゐる。建築上及び生活上から見て書齋が[illegible]の深いのは大體の輪廓から細部へ渉つて大なり小なりに現はれる此の個性の發現である。

凡そ人の家の生活は玄關や客間を見たゞけでは解らない。ド[illegible]の商人が衣服其物よりは帽子や履物で判斷されるやう

住居も亦客間よりは風呂場や便所を見て趣味の高卑が決定される。が、住居哲學は本稿の題目で無いから他日に讓ることして、前云ふ如く書齋は因襲の型に俘はれる客間と反して思ふ存分の個性が發揮されてゐるから、丁度茶の間や臺所を見て主婦の人品(ひとがら)や家政の狀態が大凡想像される如くに、書齋へ通ると主人の品性や學問見識や性癖氣風が頗る露はに窺へる。

近頃二三の雜誌が相前後して各方面の名士の書齋に關する意見を徵求し、或は書齋を訪問した記事を掲げたが、生中の藝術論や思想論よりも却て其の人物を想見するに足る興味が有つた。世界の大文學や大思想を一と呑みにする大見識家の中にも案外三越や伊東屋から仕入れた器具調度を列べ十一屋の玻璃器で冷たいものでも飲むのを書齋の最高趣味とする恰も銀座を享樂するモダーン・ガールと相擇ばざるものがある。中には又、マダ書齋に就て考へた事が無いとか、或は考へる餘裕を持たないとか、書齋の好尚をブルジョア趣味と速斷して得々として大いにプロレタリアート的氣焰を揚げて故更に書齋無關心を衒ふものがある。

が、書齋の最高趣味が三越や十一屋、乃至は二葉屋で直ちに獲られるやうに思ふ中學生的書齋觀の幼稚さは論外として、書齋をブルジョア趣味の産物として速斷する放膽的無關心說も亦斜視眼(やぶにらみ)である。ヂオゲネスの樽の生活は決して趣味から好き好んだのでは無からうが、亦決して金殿玉樓に對する反感から故意に樽の中に蹲まつたのではない。ヂオゲネス自身に取つては樽も御殿も區別は無かつたので、樽を窮屈と思はないと同時に御殿を人間の榮華の極みとも考へなかつたらう。其には家などの觀念はなかつたので、樽の生活が窮屈よりは贅澤であつたかも知れない。

假に書齋をブルジョア趣味であるとしても、趣味や好尚は一金に換算して秤量するものでは無い。君臺觀や看聞日記を一一引合に出さなければ說明出來ない古器調度を列べた芝居の書割じみた書齋ばかりが書齋では無い。中には机上三寸の塵の積つたのを愛さないまでも無關心に放置して座邊雜然とガラクタ本を狼籍さした屑屋の梯子部屋のやうなのもある。或は又、机邊淸掃一物をも留めざるを喜びて恰も空屋の如くガランドウにして說くのもある。一言すれば質屋の庫の如く或はガラクタ道具屋の店頭の如く埒もなく物を積重ねるのもあるし、役場の人民控所の如くガランとしたのもある。或は茶室然たる、或はお寺の本堂めきたる、夫々趣きは變つてゐても皆等しく個々の好尚であつて、飾れば飾るほど、飾らなければ飾らないなりに各各個々の面目が現はれる。

書齋は一つの藝術である。デスクや椅子の不用意な位置にも、座邊に與存する書籍の山にも、机の上に無心に置かれた硯筆や墨の破片にも其人特有の個性の閃きが現はれる。殊に架上に存を列べた大小書籍の種々の裝訂と色彩とは少しも巧まないで自然の諧調を奏してゐる。且又机上座邊の器具調度が大方は其人の趣味に由て選ばれるから、小さな文鎮一つにも其人の好尚が窺へる。そこらの百貨店で賣つてる月並の仕入物でも其人の息が掛り手垢が附けば自づから別様の感を與へる。況してや架上の群籍は其人の思想の傾向や源流や關系や過程や縦斷を語つてゐる。所謂書齋は一つの藝術であつて、其人の人格を表現して鮮明たる印象を與へ、若くは其人に親炙する陶醉的氣分を醞釀する。同時に一品一點までが其人の風格や品性や好尚を反映するから其人の肖像であるとも云へる。

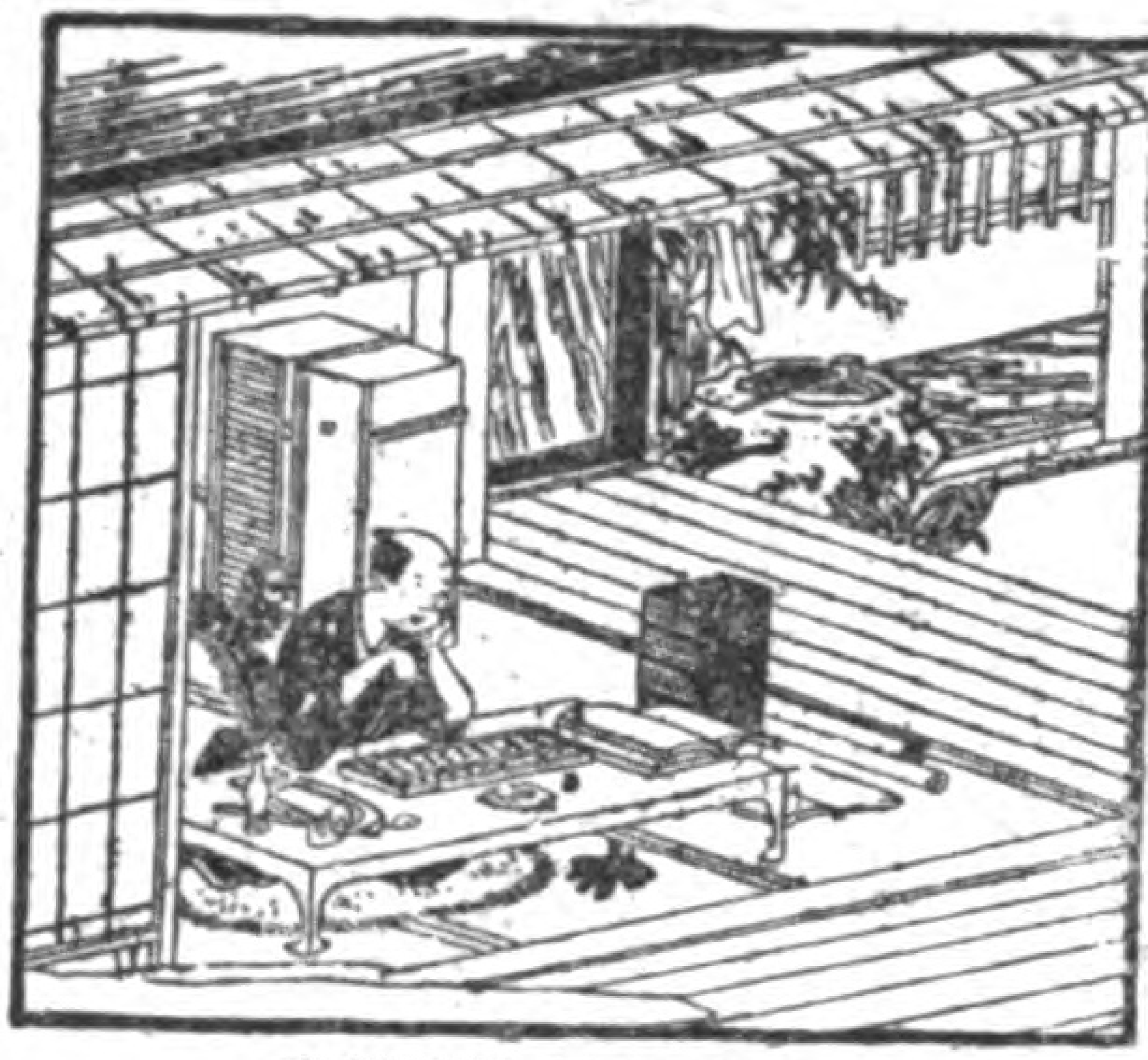
此の微妙の書齋心理を適用して、中には、丁度白洲に拷門道具を列べて罪人を威嚇する如くに嚇かしさうな書物を澤山列べて人を嚇かし、或は擬態やカモフラージで敵を眛ます如くにエタイの解らぬ奇怪な畫やオモチヤを列べて群客を煙に巻くものがある。本來書齋は客を通す室では無いが、鬼面を被つて人を嚇かすを快とするものは往々嚇かし道具を列べて客を引いて、メンタル・テストや肝試しをして得々たるものがある。

ながら、[illegible]茶の一味・しんみり[illegible]になると、[illegible]つたのだが存外オカメの面であつたりヒヨツトコの面であつたりする書齋がある。此弊を[illegible]爲めに或は自己を隱さす代りに書齋の道具立がヘタをやると自分を裏切る本性[illegible]となる。無心の雅致を衒かさうとヘタに[illegible]を置換えたり彩色の塗直しをしたりすると頗る人形臭くなつて[illegible]減る。書齋の道具立も[illegible]無いので、嚇かし道具を列べ過ぎると見世物となつて了ふ。

（四）昔の書齋は唐風

讀書の習慣の稀薄であつた昔は武家でも書齋を設けるほどの讀書家は少なかつた。が、机に向つて[illegible]紙を[illegible]るは[illegible]劍以外、武士の嗜むべき最高の心掛としてゐた。學問を[illegible]滅の浮び上る讀書を呪つた町家でも机に向つて[illegible]に[illegible]風雅の道として許されてゐた。文字の心掛に[illegible]されないまでも必ずしも輕蔑されてばかりはゐなかつたので、武家は勿論[illegible]工商とも中産以上は讀書するとせぬとは左も右くも机を据ゑたいものは殆んど無かつた。机が即ち讀書の趣味の[illegible]であつた其頃の移動書齋であつたので、兎も角も机を[illegible]人、[illegible]に[illegible]はしい[illegible]作るの用意に[illegible]であつたなと云つた態で、前にも云つた通り桐の机[illegible]、[illegible]

心な歌書か俳書の二三冊を日常必要な日記や帳簿と一緒に積重ねた位のもんだが、中にも學問が身代を破滅するお手本になる不心得な若旦那があつて、商賣を餘所に見て齋にばかり閉籠つて日がな一日机に囓りついてるのもある。恁ういふのは萬事が唐風に、卓氈を掛けた唐机に硯を中心に筆架、硯屏、墨臺、水滴等を列べ、ドウいふわけだか（魔除けの呪ひだとも云ふが）其頃は孔雀の羽を筆筒に挿したもんだ。机の上に載つてるのは大抵俳書か川柳狂歌の本であるが、中には帙入の唐本や法帖を机邊に積重ね背ろに本箱の二つや三つを脊負つて一見學者然と構へてるのもある。



世渡名所圖繪挿畫

町家の出だからツて蒹葭堂や篠崎小竹の立派な學者があるからウツカリ馬鹿には出來ないが、大抵が（町家に限らず武家でも）學者がりの青標紙三昧で、看板ばかりの机だからイツデモ奇麗にキチンと整理いてゐる。机がお役に立つのは手紙を書くか小遣帳や日記をつける時しか無いんで、怪しからんのは聖人の教を說いた經典の前で、風雅な寂栞の俳書を載せた机に十呂盤を置いて貸金の利子や借屋の屋賃の勘定を調べてゐるのもある。恁ういふのは身代を耗り減らす心配は無いので、同じ道樂なら女に鼻毛を讀まれて色男振るよりは讀めもしない四角な文字を捻くつて高慢がる方が、少と鼻持がならないがマダ無事であるかも知れない。尤も高名な大學者の中にも學問よりは潤筆を成るべく利廻りのイヽ儲け口へ廻すに骨を折つたものもあつたので、夫から比べると十呂盤人種の町人が机の上で利息の勘定をする位はマダ罪が淺い。

閑話休題、一體唐机を使用し初したのはイツ頃からか知らぬが、天明頃から文化文政頃の物の本の挿繪を見ると、其頃はモウ唐机を使用してゐた。桐の引出し附きの机を使用してゐたのは俗人で、文人畫でも床へ掛けやうといふ知識階級者は唐机に唐硯唐墨唐筆と文房は皆唐づくめであつた。

日本は昔から常に外國文化の追躡者であつた。殊に翰墨風流は支那を宗とするので、歐米と交通しなかつた頃のハイカラは長崎を通じての所謂文人趣味であつた。當時の學問といふは漢學で、多少でも四角な文字を讀むものは皆支那趣味の讚美者であり模倣者であつた。唐机は即ち其頃のチヤンカラで、丁度此頃のホヤ〳〵の紳士が猫も杓子もマホガニイ卓のデスクに倚

掛りたがるやうたものだ。漢學が普通教育で三字經や唐詩選を以呂波と同時に授けられた其頃の知識階級者は幼さい時から自づと支那かぶれがしてゐたから、蒔繪の硯箱よりは水滴や硯屛や墨臺を列べるのを喜んだ。御殿式お姫樣好みの蒔繪本位の調度よりは唐風の簡素が一般階級者の好尙とピッタリ陷つた。上掲挿繪は黃表紙の二三圖を湿ち合はして構圖した戲作者の書齋であるが、戲作者で無くとも大體其頃の知識階級者の書齋はコンナ鹽梅式だつた。



或る戲作者の書齋（黃表紙に據る）

（五）支那式書齋

支那人は一面から見ると貨殖人種で、金儲けにばかり屈托してゐるやうだが、一方には翰墨を嗜んで（此頃の近代かぶれした支那人は大分變つて來たが）昔は脂光りのしたプンと臭ひのする勞働服を着て『支那、縮緬、繻子、買ひませんか、』と門並の勝手を覗いて步く行商人でも四君子に七言絶句の題贊ぐらゐはする風流人種であつた。一と口に支那人は文字國といふが、支那人の學術文章に對する尊敬は書契以後五千年來の傳統で、市井の賈豎も亦文字の趣味を理解するは橫濱の支那町を覗けば解る。八百屋でも肉屋でも大吉大利とか萬福自天來とか吉祥多福とか極めて欲張つた文字を金箋や蠟箋へ墨痕美はしく認めたのを壁や窓に貼付けてある。又床屋でも湯屋でも各々商賣に相應はしい對句の楹聯を門柱に掛けてをる。此の文字三昧や文章遊戲は殆んど支那人を通串する民族性であつて、貴賤士庶皆典籍を愛し文房生活を喜び文房器玩の精鑑に就ては何百年來の研尋を積んでをる。随つて彩釉玉器の絢爛を喜ぶと同時に塑泥木工の簡素をも亦理解してをる。貪婪愛錢を恥としないと同時に清貧守靜を君子の美德としてをる。

雜誌『書齋』の創刊號に載つた上海湖心亭の徐星州の書齋の

如き、其の曾訪の記事に由ると、四周雜遝の汚穢極まる裏店の間借であつて、寢室とアトリエと應接室とを兼ねて脂光りした寢具と便器と食器と狼籍たる中に塵埃だらけの高卓を据ゑた頗るミジメな生活であるらしいが、起し圖を見ると此の物置とも仕事部屋ともつかぬ陋室が棄て難い風雅な住居であるやうな心地がする。且此の細民窟の荒廢した古寺の二階に老ひたる印人徐星州と忘れられた老畫家蒲欽とが相隣りして貧居する支那式ボヘミアンの生活は、直面したら悲慘に堪へぬだらうが、單なる話材とすれば『貧士傳』或は『高士傳』の一節を聽く心地もすれば『綺郎双紙』を展舒するの感もある。

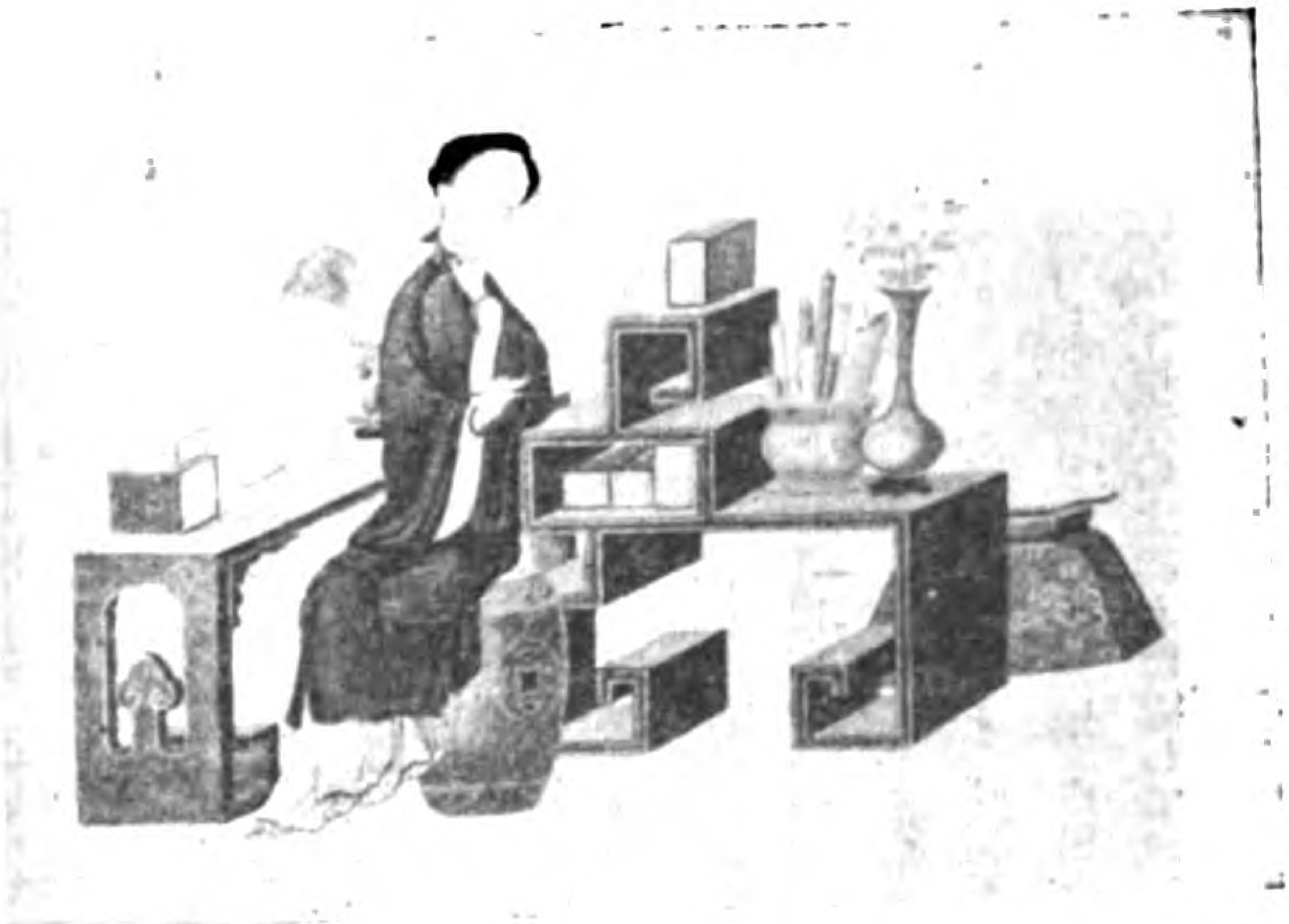
今日長火災で燒燼した大倉集古館内に支那室があつた。鍍金の寶軸寶器を列べた頗る豪奢な當屋であつたが、蒔繪づくめの御殿式や金泥唐草彫レネイサンス式と違つて支那人の好尚であつて、實質は千金を値ひするものであつても外見には簡素な趣きがある。集古館開館式の當日、如何にも沈靜いて居心がよささうなので紫檀の長榻に十分ばかり横になつて見たが、我々貧措大が我物顔に臥て見ても少しも尻の痒ゆいやうな氣持がしなかつた。

次圖は"Chinesische Miniaturen"に載つてる支那貴婦人の染毫作詩の圖である。几案調度の好尚が瀟洒であつて、日本の婦人室の蒔繪の手箱や御所人形などを列べた燦びやかなよりは遙かに趣きが深い。緞子の流蘇附きの帷圍に座つて脇机に倚れ、蒔繪の火箱を擁しつゝ筆を舐る川合源氏の挿繪にあるやうな上臈よりは此の榻に踞して高卓に肱を陳べる少婦の方が身邊器什から察して遙かに詩情豐かな惠心蘭質の女秀才を懷はしめる。

日本は衣食住萬事が二重生活であると、和風洋風の混用を屢々批難するが、一千年來浸潤した支那文化は殆んど醇化されて日本の物となつてゐても猶ほドコかに痕跡を殘してゐる。殊に書齋は經籍文章を生命とする儒學者の好尚に負ふてゐるので今猶ほ支那の文物に執着する支那癖の拔けないものがある。有體に云ふと日本人の創意に成つたものは兎角に纖巧小細工に過ぎて較やもすれば卑俗に流れる。殊に文房器玩の制は本來支那に學んだのだから製法様式總てが支那を宗としてをる。隨つてチャンカラ趣味の高級讀書人は筆墨硯總て支那産を使用するが近古以來の流行であつた。

就中、チャンカラ中のチャンカラたる漢詩人は平生支那人と往來する爲め益々チャン趣味を長じ支那式書齋を構へるものがあつた。日本橋の問屋町の中央に在つた永阪石埭の書齋の如きは最も著名で、あの殷賑雜沓の町の十呂盤玉のオーケストラの耳を聾する中に叢篁修竹を繞らした綠瓦朱壁の小亭を中心に齋

散閑雅な小仙境を開いてゐた。著名な蔵書家中川得樓翁も庭の一隅に小さな支那式の園亭を作つてゐた。今は二つながら震火の灰燼となつたが、富豪の別業を尋ねたら支那式園亭又は書屋



を構ふるものは決して二三に留まらないだらう。日本は二重生活だといふが、二重生活どころか三重生活を營んでゐるものさへも有る。

殊に最近の支那趣味の世界的流行は日本に於ても一端廢れ掛けた文人趣味を復活した。氣の早いモダン・ガールの中には短かいスカートを脱いで繻子のチャン服に換えるものが簇出して、近くはシヤルマン服と稱する歐支折衷の奇妙な合の子服が賣出された。此塩梅では追付け上圖のやうな支那式書卓に納つて、赤い翡翠の傘金の亂の下で紹興(シャンコー)でも啣めながら麻雀(マージャン)を闘はすのが一番新らしくなるかも解らん。

だが、日本のチャン趣味は起源を遡ると大分古い。一千年前阿部仲麿は唐朝に仕へて晁衡と名を改めてをる。近古では徂徠が東夷物茂卿と名乘つて物議を招いたのも大分久しくなつてる。日本人のチャンカラは殆んど第二の鄕土色で、漢學で涵養された士人の書齋がチャン趣味であるのは當然過ぎる當然である。德川時代から明治へ掛けての有識階級者のチピカル書齋ともいふべきは即ち此の文人流で、書櫃、蠟架、方卓乃至長卓、筆架、筆洗、水注、墨牀、書鎭、壓尺、麈尾、無塵子、如意、花尊、鐘磬、風爐等、總て漢名で通用する器什を排置する。此のチャンカラの文人趣味は漢字廢止や漢字制限が叫ばれる今日でも容易に拔けないので、碌々白文の讀めないものゝ書架にも唐本數帙、法帖印譜の二三帙は文房清堂として缺くべからざるものゝやうに積重ねられてゐる。運送屋の帳場から持つて來たやうな紅殻塗のデスクの上にさへも三つや四つの支那雜貨が列べられてゐる。現に東京にも數十軒の支那雜貨商が各々相當の商ひをし、墨硯筆紙其他の文房器什を相應に賣つて昔年

年やタイプライタを白眼冷笑してゐる。

（六）現代の歐風書齋

だが、時勢は如何ともし難い。ドコの大百貨店にもライブラリー・セットが陳列されてる。セエブルやコーペンハーゲンの擬ひ物やスウヰスの木雕や伊太利のマーブルが二葉屋や三越へ度々輸入される。寒山拾得よりもザチルス、元祿の若衆人形よりもピエロが喜ばれる。モダーン・ガールやボーイばかりかと思ふと、白い髯や頭の禿げた伯父さんまでが腕の斷げた佛像と列べてタナグラ人形の擬ひ物を飾る。法帖や古印材を鑑賞する文人趣味の最古典派とも云ふべき好事家の中にさへ書齋となると歐式を推奬するものがあるほど大程一般の書齋生活者の氣分が歐化して來た。例へば同じ支那の骨董を鑑賞するにも文人畫の軸を掛けた前で香を炷き茗を煮て品藻する風流を樂まないで、マホガニー塗の飾り棚の上に西安の出土明器や宋窯の壺をセエブルの陶器や南洋の土器と雜陳して、佛蘭西刺繍の白いカバーを掛けたマホガニー塗の小卓で紅茶を啜りながら東洋畫論をする。萬事が此調子で、名古屋出來の佛蘭西擬ひの小さな花瓶にカーネエションの二三輪を挿し、伊東屋仕込みの陶人形の一つか二つを大理石の置時計と一緒に棚に列べ、複製の錦繪の二三枚、エチングの額の一枚も壁へ掛けなければ納まらない文化好みで、之がモダーン・ガールかボーイの部屋かと思ふと案外、堂々たる何々博士の書齋であつたりするから驚く。今日では文人風の書齋などは藥にしたくも見られなくなつた。

では此の赤い瓦の下の安價文化式が歐風書齋の標本とするに足るだらう乎。明治の初年に出版された福澤先生の『西洋衣食住』といふは其頃のハイカラの所謂文明開化の生活諸調度の解說書であるが、六十年前の此本の挿圖と同じ椅子テーブルを列べた西洋室もマダ有るので、夫から比べると今日の赤い瓦の生活は大分和臭が拔けて來たといふ條、現代の歐羅巴の書齋を代表させるにマダ〱距離が有る。

だが、日本では新らしい様式の書齋を作りたくても第一、價の高下は別として（甚だ漠然たる言葉だが）氣の利いた外國の器具調度は日本の本場では獲られない。新たに構圖して家具屋へ注文しても、第一指物道具からして日本には揃つてゐないから、圖案に由つては日本の家具屋では應じられないといふ出來ない相談となる。隨つて『ドイッチエ・リンスト』や『インネン・デコラチオン』に毎號挿圖されるやうな書齋は技術や材料の關係から日本ではマダ當分は空想に屬する。

夫故に今回の書齋を代表させるには殘念ながら赤い瓦の下の

安價文化式を舉げる外は無い。だが、アレでは後世から見たら丁度明治の初期の西洋建築を見ると同じ歴史的興味は有らうが現代歐羅巴の書齋の標本とするには足りないから、爰にはワールリヒの『室内粧飾圖集』の一圖を借用して一例としやう。一隅の寫眞であらうが、略ぼ全壁を想像すべく、我が到る所の文化村の瀟洒な但し安價な文化書齋を比較して思ひ半ばに過ぎるものが有らう。



が、家屋は容屋として置くので無い以上は居住の生活とシツクリ適合する乎否乎が第一要件である。紙上の設計が如何に完備して、建築的に科學的に裝飾的に申分無く最善が盡されてゐても、居住者の生活とシツクリ合はないものは落第である。殊に書齋は氣分を重んずるから猶更使用者の氣持とピツタリ適まらなければ打寬ろいだ安息は得られない。佛蘭西や獨逸の最新様式でもソツクリ其儘に直譯したのでは日本の現代文化とは相容れる事が出來ないのである。

日本の今日の文化は封建の舊文明から速成的に近代へ轉化したので、東西古今の文化がマダ未消化のまゝ混糅されて少しも統制されてゐない。封建と文明と、野蠻人とコスモポリタンとが手を携へて連れ立つて行く東京の市街は恰も此の未消化の混糅を體現してゐるのだが、此の市街の亂脈が亦恰も我々の書齋に縮現されてをる。斯ういふ東夷南蠻北狄西戎の文化が雜然として混錯する室を氣持よく調整するといふのは容易で無いので、同じ系統の器具調度を排置する歐米人の書齋を考案するやうに簡單では無い。佛蘭西や獨逸の新らしい建築粧飾圖案集から撰擇つたプランを其儘に、或は數プランを折衷し按排して作圖したなら（縱合醜界にしろ）相當氣の利いた設計も出來やうが、夫は博覽會へ出品する容室の模型であつて活きた書齋にはならないのである。

嘗を云ふと今日の日本はマダ完全に明治の初めの所謂文明開化を脱し切らないのである。近年頃に一足飛びに歐化したやうでも赤い瓦の家から謠曲の聲が聞え、近代劇を讃美する口の下から南北劇を面白がり、洋服のお孃さんがラッグの上へ座つて琴を彈くのをお父さんが安樂椅子（イージーチェア）に倚掛つて聽くといふのだから、書齋が獨り渾然と近代的に陶化される筈が無いので、東西混殽南北雜居であるのも亦止むを得ない。

が、看方に由れば此の歷史と傳統とを異にする吳越同舟の文化の混錯が如何に融合されるかを小さな書齋に由て實驗するも亦興味が無い事は無い。文人畫の幅の前に石膏のトルソを置いた床の間にはカメラや麻雀の箱が全集と一緒にゴタクサしてゐる。帙入の唐本と倣革の洋本とが同じ書架に列び、明治の初期の銅版表紙の本とバウハウス式の構成派のラッパーの本とデスクの上に積重ねられてをる、之に向つて廻轉椅子に悠然と腰を卸すルパシカの男がブライヤーを横啣へに白い煙を吐きつゝモダーン・ガールと支那問題と、サッコ・ヴワンゼッチと芥川龍之介とを論ずるのが今の書齋である。何しろ當の御本尊の頭の中が當人自身にさへもハッキリ解らない闇汁（やみじる）のやうな腦味噌だから、書齋も亦隨つて昔の文人風の明窓淨几でも近代的大陸のビブリオテク・チンメルでも納まらないのである。

（七）學者文人の書齋

書齋と一刻も離れる事の出來ないのは學者及び著述家である。渠等の全生活は書齋である。書齋の居心の良否は渠等の心身の藥（くすり）ともなれば累ひともなつて渠等の仕事の能率に關係する。渠等が書齋を重視して（中には一向無頓着なのもあるが、）左に右く自分の氣持とシックリ適るやうに家具の選擇や排置に多少の考慮を費やし、金の掛るをも惜まないのは當然である。私の友人の某は居宅を新築するに方つて、學者の常として最も力を書齋に効し、殆んど總額の二分の一を書齋に掛ける豫算を立てた。愈々着手すると段々贅澤が出て、追加に追加をして結局三分の二に上つたさうだ。學者の立場からは書齋は全家の頭のやうなものであるといふ條、二分の一が既に賴朝公以上に巨頭過ぎる豫算であつたに、更に三分の二に上つたのでは全家の釣合が取れない片輪普請と云はなければならない。けれども學者や著述家に取つては書齋は一生を獻身する持戒精進の三昧道場であるから、書齋が居宅の中心であるといふよりは居宅即書齋で、家人の居室を初め其他は總て書齋の附屬室である。啻に渠等の一生の大部分を其中に暮すアルバイト・チンメルであるのみならず、其名を不朽ならしめる曉きは後世へまでも永く

光輝を發れるモニュメントでもある。

現に歴史的記念物として今猶ほ手厚く保存される學者文人の書齋は世界のドコにも有る。日本では契沖の圓珠庵、宣長の鈴乃舍、山陽の山紫水明處等は最も著名でピルグリメージの一つとなつてる。日本では學者や文人の位置が低いのと、家屋が脆弱で保存に朽し易い爲め保存されるものが少なく、偶々保存されてるものも材料が粗惡であるから見窄らしく、平素の生活が簡素であるから判明的文豪の故宅も餘り大きく無い。契沖は隱者、宣長は田舎學者だから圓珠庵や鈴迺舍が貧寒を容るゝに過ぎない矮屋であるのは怪むに足りないが、盛名當時を壓した一代の寵兒として渭南第一と學者仲間に羨ましがられた山陽の住居も鴨水に臨んだ景勝の地であるが、家其物は今なら職工級でも玄関を張り大いに見榮坊には氣に入り言うも無い侘居である。評判の山紫水明處も竹田の畫で見ると極めて風雅で、河を距てて叡山と指顧の間に見える佳景と對して詩を談じ史を論ずる高士の風標を懷はしめるが、實は四疊半と二疊の唯ツた二タ間ぎりで、二三人も客が詰め掛けたら風流を談ずる處か芋を洗うやうだらう。

一體學者や文人は物外に超越して清貧を樂むのが是までの風であつたから、中には堂々たる構へをして俗客を嚇かすものもあつたが、大抵は封建制に[illegible]生活を[illegible]らなかつたもので、盛名嘖々たる文・詩[illegible]の書齋も案外狭陋で無いのは西も東も同様である。但だ西洋の家には日本のと比べて規模が大きく用材がマッシーヴだから簡易な生活を送つた學者や文人の居宅も日本の貧弱な住居とは一つにならない。一生を悲慘に終つた不遇文人の標本のやうなポーの故宅でも前記の圓珠庵や鈴迺舍や山紫水明處などよりも遙かにドッシリしてゐる。一代の大政治家[illegible]を（[illegible]相當名者を容はして當時の文人と交際をしてゐたにしろ）文人並に扱ふのは妥當で無いが、伯爵のハワーデン城は流石に一國の大宰相の居宅たるに恥ぢない王公の邸第である。書齋の如きも亦贅を極めて四壁森嚴、數萬卷の古典で天井までも隈く四方の書架をギッシリ埋めてゐる。純然たる文人の書齋で[illegible]の富と家具の壯麗と比較や之に匹敵するはスコットのであらう。四萬卷の堂々たる書庫はじ十何萬の債務を奮迅で完濟したと傳へられる[illegible]ウソても無からうと思はせる潤澤の富を想像せしめる設備を極めてゐる。

だが、十九世紀末から二十世紀へ入つて文人の位置と[illegible]とは歐羅巴でも著るしく增進したから、今日ではスコット以上の書齋に納まつてゐるものが餘り珍らしくないだらう。が、日本

はまだ駄目だ。印税成金がボツ／＼殖えて、文化住宅に納まるものや自用自働車を飛ばすものがあるやうだが、或る少數の流行作家を除いては文人の生活の平均程度はマダ餘り高くない。プロのプルのと睚み合ふが、羨ましがるものもがられるものも實際の生活は五十歩百歩の御多分に洩れないプロ同士である。文人が青年の羨望となつて小說家や劇作者の卵がウヨ／＼する今でさへ實際は此の通り餘り芳ばしく無いのだから、猶更昔の學者となると氣の毒を極めてをる。

大熊喜邦博士が雜誌『學藝』で紹介した林述齋の賓庫齋は流石に當時の權勢家の書齋だけあつて相當數寄を凝らしてる。母屋から離れた土藏の階下を書庫に充てた階上の一室で、其の半ばを仕切つて那智黑を敷詰めて屋内庭園とした頗る凝つた設計である。が、肝腎の書齋は三疊で、入口の二疊と疊を緣取る狹い板敷を合算して精々六疊そこ／＼である。大學頭と云へば今の大學總長だが、實際は總長以上の權勢を張つた文教の支配者である。此の學者の頭目たる林祭酒ともある人の書齋でさへが唯ッた三疊といふのだから、僅に町内の子弟に句讀を授けて漸く口を糊らす町儒者のミジメさは推測られる。書齋どころの沙汰では無かつたのだ。

其頃から比べると今日の學者の位置や待遇は著るしく更まつたがマダ／＼日本では學者の境遇は餘り惠まれてゐない。學者の本分の研究を餘所にして金儲けに忙がしい醫者や工學者を除いて醇乎たる學者で立派な邸宅を構へ贅澤な書齋に納まつてゐる人があるといふ噂を餘り多く聞かない。故人の老穗積の書齋が歐米の學者に見せても恥かしく無い藏書の富と什器調度の完備を盡してる外には室内裝飾の標本となるやうな數寄を凝らした學者の書齋は無いやうだ。ツイ先頃物故した横濱の左右田喜一郎博士は英獨古書肆間に聞えた世界的愛書家であつたし、先代からの富豪であるから藏書の富に比例する書齋の完備も想像されたが、藏書を二つに分けてゐたといふ横濱の本邸も東京の別邸も先年の大震火災で全滅して了つた。

が、贅澤な書齋を作るは矢張富豪の愛書家で、學者や文人は贅澤な書齋を作る餘裕も必要も無いのだ。富豪の書齋は實は金持の邸宅の道具立で、當の主人公が讀まうと思つて雜誌一冊買つた事が無い讀書嫌ひさへ珍らしく無いのだから、書齋に列べた本は皆お飾りである。然ういふのに限つて器具や調度に贅を盡すので、千金の壁掛やラッグを高しとしないで矢鱈と燦びやかに飾り立てる。が、肝腎の書齋の主體となるべき書籍となるとお飾りの金ピカ本ばかりで實質は貧弱を極めてる。金の臭ひはするが書物の臭ひはしない。ホントウの讀書家となると書

齋の裝飾なぞには丸切り頓着しないもので、四壁が閑寂で讀書の感興を破られる心配が無ければそれで滿足する。單なる藏書家ならば車を備へる書庫だにあれば書齋は無くとも餘り不自由しないものだ。

巨富家翁が古布子に納まつて無産者が却てペンペラ物を引摺るやうに、又金持の財布が屢々空乏で貧乏人が却て札びらを切るやうに、藏書家が座右に餘り書籍を置かないで、藏書に貧しいものが有りツたけを列べて置くものだ。學者や著述家の中には樂屋を覗かれるのを嫌ひ、或は秘藏の稀本を見られる以上に持つて行かれるのを恐れて書齋へ人を通さないものもあり、或は書齋を單なる接客室として書棚を片附けて置くのもある。事實又、我々如き藏書に乏しいものなら持つてるだけの書物を列べても幾何の書架をも要さないが、藏書家番附の片隅にでも收らうといふ人の所藏は八疊や十疊の室に列べ切れるもので無いから別に書房を設けるやうになる。今は故人の高名な某操觚者は藏書を書庫に納め切れないで、間每々々に一つ二つの書棚を置き、殆んど全家を文庫にしてゐたが、書齋の座邊には其の時々の入用のものしか置かなかつた。

が、單なる蒐集を樂みとする藏書家は別として、學者著述家は成るべく藏書を手近に置いて隨手亂抽するを便利とする。書齋の雰圍氣に浸るを樂む愛書家心理からいつても藏書を身邊から離して置くのはウソである。[illegible]ければ納まり切れない大藏書なら知らず、夫程で無い限りは四壁を書架として置くが書齋の本分である。道具立てばかりで肝腎の書籍の無い書齋は恰も客の不斷用を積んで置く倉庫のやうなものだ。

客の下駄箱と云へば私の知つてる或る圖書館員は、圖書館では新刊書の外側を捨てゝ了ふので、其中から成るべく立派な高い名著のみを選擇つて持つて歸つて自分の家の本棚へ列べてイ、氣持に納まつてゐる。單行名著の外側は圓本全集の假物見本よりも權威があるので、一九が簞笥の繪を描いたのを切拔いて壁へ貼付けたのよりも氣が利いてをる。椅子やテーブルばかりの家具屋のウヰンドウのやうな名目ばかりの書齋よりは此の方が書物の匂ひがする。

（八）變體書齋

ケルンの博物館にアドルフ・シュレエテルの「ドンキホテの書齋」といふ著名な畫がある。ドンキホテは當時に流行したシバルリーの本（今なら劍劇）が好きで、朝から晩まで此[illegible]ばかり讀んでゐたといふから相當蒐集家で立派な書齋も持つ

ゐたらう。シュレエテルの畫はドオミエの有名なドンキホテほどに一見噴飯させる滑稽味に缺けてゐるが、半武裝で書物を足臺にしてゐる處にドンキホテの豪傑がりが現はれてをる。古今の愛嬌者の武邊者ドンキホテも書齋では中々な讀書家で、脚下に狼籍する雜籍の中には大分珍本らしいものが見える。



武勇と讀書とは兩立しないから書齋に武器を置くのは兵學家の外には餘り無い。或る歷史家の書齋の床の間に中古のシバルリーの銀像が飾つてあつたが、西洋のだと實感味が薄くなるから趣味として眺められるが、日本の鎧武者のブロンヅでは書齋と釣合はない。況してや戰爭記念の砲彈などを書物と一緒に列べられては興が冷める。一體武器は性質上殺伐な聯想を伴ふから平和な家庭の室内粧飾とすべきものでは無いが、武家では治に居て亂を忘れずといふ武道の教訓から床の間に刀劍を首として武器を飾る風があつた。此必要からして裝劍具を初め刀架、胡簶、鞍鐙等に精巧な意匠を凝らした美術品があつて、武家、以外にも金工や髹漆の趣味から武器を鑑賞するものがあつた。一つは武家が四民の儀表として權威を振つたので、虛榮からも武家を氣取つて武器を飾つて得々としてゐたものもあつた。

今は昔、京都に何某といふ土佐派の畫家があつた。ドンキホテの再生と見えて甲冑の考證に凝つた末が武將好きとなり、正面床の間には八幡大菩薩の軸を掛けて神酒を供へ、床脇には大鎧を中央に左右に大刀と二張の弓と胡簶を列べ、七書を入れた本箱を背ろに竹中半兵衛氣取の道服姿で熊の皮の上に納まり返つて、軍扇を叉に構へて客と應對した。德川繁昌の威令行屆く頃なら僭上の罪に問はれて少くも處拂ひぐらゐになつたんだらうが、末季の紀綱弛廢した頃だつたからお咎めもなく、天晴軍師を氣取つてイ、氣持に納まつてゐた。恁うなると八笑人以上で、武器を飾るといふよりは茶番をしてゐるやうなものだ。

一體書齋は書籍夫れ自身が裝飾となるので、特に裝飾とすべきものを飾るに及ばないのである。が、讀書家又は愛書家を通

有する趣味から裝飾とするよりは自分が愛撫する爲めに机上架上に鑑賞物を雜陳するは亦書齋の一興である。が、趣味に過ぐると鑑賞物が漸次に跋扈して、架上からは書籍を驅逐して代つて占領し、机上からも亦筆紙を展べ書籍を繙く席を奪つて、書齋が一變して骨董玩具の陳列所となつて了う。所謂好事家の書齋は屢々此の通有の玩物癖に累ひされるので、書齋の名はあつても書籍は影を潜めてをる。其の適例とすべきは先年故人となつた淡島寒月の梵雲庵であつた。



寒月は本と無類の讀書家でもあり又愛書家でもあつて一時藏書一萬卷と稱されてゐた。梵雲庵は四疊半に足らない狹い部屋であつたので、棚から押入から餘地のある所は隙間なく積重ねられて寸分の空隙もなかつた。其後一世の煩惱から脫離するといふ佛者の捨身觀から、一つは其頃最も沈潜した元祿文學に飽きたのであらう、ボツ／＼賣りもし與へもして殆んど藏書を手離して了つた。が、元來が讀書が好きで何でも手當り任せに濫讀するといふ質だから、藏書に執着しなかつたが散らしもすれば買ひもして、ツマリ珍本が凡本と、善本が粗本と新陳代謝したゞけで、以前ほどでは無かつたが可成量が隣房の板敷に天井に届くほど積まれてゐた。が、三十年前梵雲庵の秘本として傳稱された稀覯書は暫時の間に地を拂つて散逸して了うと同時に、一方の趣味慾は昂進して書籍の代りに小さな古い佛像や內外土俗玩具等が段々殖えて隅から隅まで、欄間の上まで全室を占領して了つた。就中、晩年は專ら玩具を蒐集して震災前凡そ三千點と稱してゐた。

寒月は晩年には文人或は讀書人としてよりは趣味家又は畫人として知られてゐた。梵雲庵は書籍よりは骨董玩具に充ちてゐた。嚴密に云つたら書齋と呼ぶのは不適當であるかも知れぬが、專門畫家で無い風雅人の居室を器用から描くばさら繪の餘技があるからツて畫室と呼ぶのはヨリ以上不適當であらう。が、書齋にせよ畫室にせよドチラにしても先人椿岳の獨特の意匠を留めた此の梵雲庵は爰に掲ぐる一隅の寫眞を見て容易に想像されやう。(拙著『憶ひ出す人々』椿岳の項參照)惜い哉、此の梵雲庵は先年の震火災で跡方も無く燒燼して了つた。

寒月に限らず好事に傾くものは得て書籍よりは器物を偏愛する。相當讀書家で、相當藏書を蓄ふるものも、書齋を飾る器玩の類が段々殖えて次第に書籍の領域を侵蝕し、終には全く書籍を驅逐して了つて、書齋がイツの間にか小さな博物館にメタモアフォーズされて了うのは餘り珍らしく無い。一體愛書や讀書は知識欲の旺盛な青年及び壯年時代の興味であつて、總ての心身作用と等しく或る峠に達して下り坂となると次第に退縮する。一概には云はれないが、老人の愛書や讀書は脂の拔けた惰力であるから漸次に冷却し萎縮する。藏書は集めるよりは減らすを旨とし、讀書は何遍も讀古したものを繰返して新らしいものを讀まうとしない。然るに玩物は讀書と違つて愛撫するに骨が折れないから、心身共に虛耗した老人の書齋享樂は次第に書籍を遠ざかつて器玩に移つて來る。書齋がイツの間にか陳列所と變形するのは啻だ獨り寒月庵のみでは無い。


好事家の書齋（『世渡名所圖會』）

左もなくとも好事家の書齋は兎角に鑑賞物を跋扈せしむる。人類學や考古學や土俗學の研究者に取つては器物が書籍よりも重要であるから、年齒の加はるに隨つて益々器物の蒐集に熱心になつて書籍を閑却し、書齋に在つては益々書籍の領分を狹くする。『世渡名所圖會』（大坂版心學書）中の上圖は蒹葭堂を諷てこすつたのだとも云ふが、其頃大阪には蒹葭堂式の博物家が大分有つたらしく、其の末流を汲む自分免許のエセ蒐集家の高慢ちきが心學先生を顰蹙せしめたのであらう。兒供が覗いてるのは顯微鏡らしい。机に倚つてるのは阿蘭陀本らしい。床の間には阿蘭陀畫の額や長崎渡りの姿見が掛けられ、其前に喇叭を並べ、青龍刀が建掛けられてるに到つては奇拔極まつてる。書物は机の上の洋綴本と一本立の本箱が一つだけであるが、之も亦書齋の一つである

此種の好事家は今も絕えないどころか却て益々殖えてをる。何と云つても蒹葭堂は相應の學殖はあつたし、鑑識に長じた上に富力があつたから、今日蒹葭堂遺物として傳存するものを見ると筋の通つたものばかりである。其の蒐集が時人を啓發するに足る稀珍殊寶であつたのは想像される。が、世には稀代の鑒

寶として神聖視されるものゝ中にも天人の羽衣だとか文福茶釜だとかいふ變挺なものがあつて、好事家の中にも怎ういふイカモノ系統の珍奇を貴ぶるものがある。寶珠の玉だとか天狗のシヤレコウベだとか、乃至は酒呑童子が人間の血を飲んだ大盃とか、牛若丸が五條の橋で辨慶と渡り合つた時の高足駄とか、或は三桝太夫の頭巾とか與市兵衛の縞の財布とか、怎ういふ變なものばかり集めて陳列して得々として講釋して聽かして群客を悸へさせる書齋もある。書齋といふよりは寧ろ一と頃人氣を呼んだ奥山(今の公園六區)の珍世界を思はせるが、書籍と云つたら殆んど一冊も無い。怎ういふ好事家に限つて東西哲學を一と呑にし神祇釋教戀無常の八宗十宗を籠學する大知識であるからである。

が、怎ういふ好事家、といふよりは珍物家は今も昔も絶えないもので、前後左右を一々講釋を聽かねば解らない變な物ばかりで埋めた中にイヽ氣持になつて納まつてゐる。今云ふ通り怎ういふ好事家の多くは書物を餘り珍重しないものだが、中には又同じ系統の變な文書を持つてるものがある。例へばお輕が身賣の證文とか、彌次郎兵衛喜多八の關所の手形とか、曾呂利新左衛門の狂歌の短冊とか、岩見重太郎の旅日記とか、變なものを表裝して床へ掛けたり屏風の交貼にして座敷の隅へ置く。怎ういふ珍書齋も亦決して見逃す事は出來ない。

要するに云へば書齋は專門を中心とする本を、少くも一つ、百冊や二百冊くらゐの本が無ければ書齋と稱すべきものは無いのだが、書物に縁の無いのを所有とするノルジヨア階級の中には應接室には却て大英百科全書のやうな尨大な本を内證嚇かしに飾つて置いても、書齋には六法全書とか銀行會社要錄とかいふやうな事務上必要なものが二三冊ある外は本らしい本の無いのがある。精々が講談本でもあればメッケもので、中には什器を中心とし、ハイカラの歐風ならば蓄音器を中心に置くのがある。夫でも書齋と稱してゐる。尤も書齋を應接室とするのは杓子定規の解釋で、世俗の所謂書齋は實は主人の居室の別名に外ならないのである。

(九) 著述家の書齋は仕事部屋

一體書齋を使用する我々――と複數を用ひては他の諸君に對して濟まぬが、少くも私――のは一番塵埃多くて雜駁を極めてる。私達――と復た複數を用ゐるやうだが――のは仕事部屋で、書齋といふやうな品のイヽものでは無い。丁度仕立屋や指物師の仕事部屋が鉋屑で混亂となつてると同じに、我々の書齋も鋸や鉋と同じ商賣道具の原稿紙やインキ壺や鉛筆やナイフを取散らし、身邊座右は鉋屑代りの反故で一杯になつてゐる。書物

と云つても多くは實用上から集めたものばかりで、目星しいものは根つから無い。シカモ此の目星しいものと云ふのが珍本でも稀覯書でも無い。古本屋町を一巡すれば直ぐ揃へられるもので、誇りとするものも飾りとするものも無い。其上に藏書といふのは恥かしいほどの僅かばかりの部數でも、書架の設備が不完全だから三つや四つのチグハグの本箱に納まり切れないで、自然積重ねた上に積重ねて山を成してゐる。勢ひ山の下に入用なものがあるのを知つてゐても、一冊の本を引出す爲めに五冊も十冊も動かさねばならぬから、ツイ面倒になつて參考すべきものをも參考しなくなる。ドウカすると是非とも入用なものが見えなくなつて、一冊の本を搜すに大掃除同樣な騷ぎをして半日餘りも潰す事がある。其の亂脈さ加減は丸で成つてゐないで、和本、唐本、洋本、新刊、古版、雜誌、摺物、手紙類等が小さな器物やオモチャと一緒くたに地震で崩れた石垣のやうに、或る一隅ではピラミッドとなり他の一隅では算を亂してゐる。

操觚者の書齋だからと云つて誰のも恁う亂脈とは定つてゐない。中には常にキチンと片附けて座邊に煎茶器でも置いてチンと澄ましてゐるのもある。私のは矢張天性の物臭がさせるので、書齋の亂脈は昔から通りものとなつてる。三十何年前、下宿をしてゐた頃、部屋中一杯に廣げた書物を片附けるのが面倒臭くて、散らかした書物の上に床を敷いて臥たもんだ。大小厚薄の書物が凸凹して、脊中が痛くて碌に眠られなかつた事が度度有つた。夫はイヽが、表紙が傷んだり、變なくせがついたり、中には廣げた上へ敷いたのもあるので皺になつたりして散散だ。愛書家に云はしたら言語道斷で、能く書物の罰が中らなかつたもんだ。だが、參考の爲め廣げて置くのを仕事半ばに心なく無差別に片附けられて了うのは迷惑此上も無い。且又片附けたいにも手の着けやうが無い散らかりやうで、自然放たらかしになつて滅多に掃除をしなくなる。亂脈が我々の性に合つてゐるので、朝から晩まで物置部屋のやうな中に轉がつて、一日塵埃を吸つて暮すのが一生の宿命と見える。

ツイ此頃も或る書店の編輯員が來た時、丁度搜し物をしてゐる最中で、常よりも一層散らかつてゐたので、『ドウモ大變散らかして了つて……丸で大掃除サ、』と些かテレ秘しに云ふと、お世辭のツモリだらう、『ドウ致しまして、先生の御書齋は有名なもんで……』と云つた。何が有名なんだ？　散らかつてゐるのが有名では恐縮する。だが、我々（と、復複數を用ひては濟まぬが）のは、繰返して云ふやうだが、書齋で無くて仕事部屋だから斷えず散らかつてゐる。座り草臥れてゴロッと横にならう

とすると手も足も出ないで、殊にカラダを伸ばす事が出來ない。其上に滅多に腰が掛けないから、机上三寸の事を愛するわけでは無いがイツデモ事が積つてゐる。四疊半几は我々には別世界である。

（十）日本室乎西洋室乎

歐風乎、和風乎、は啻だ獨り書齋ばかりの問題では無い。住家が歐風乎、和風乎を宿題として何十年來繰返されてゐる。近年俄に著るしく家屋が歐化されて所謂文化住宅の赤い瓦が郊外の新開住宅地を埋めてゐるが、外觀だけが歐風でも內部までも歐化したのはマダ極めて少ない。殊に疊に馴れた日本人は理窟だけで疊を撤去する事は出來ない。丁度女が洋裝しても和服を捨てる事が出來ないで洋服といふ餘計なものを殖やしたと同樣、日常生活にも亦椅子テーブルの一室を増加したに過ぎないので、手狹の家だとイツの間にか椅子テーブルを撤回して本との昇に戻つて了う。但だ日常家人の餘り出入しない應接と書齋だけは漸次に歐化して、文化住宅に非ざる古風の日本建でも疊の上に椅子テーブルを置く家が日に殖える。

市島春城翁は人も知る純クラシツクの文人趣味家である。猶且書齋に對しては和洋の二室を要すると注文して歐風書齋をも亦臨に研究してをる。[illegible]て公人生活者であるから椅子の生活に[illegible]も十分ならされてるので歐風書齋をも亦經驗するに寄かで無いのであらう。且書齋生活は必ずしも趣味一點に無くして、自宅の書齋に出勤つてゐても或は職務上の下調べをするとか或は著述に從ふとか半公人生活を營む場合もあるなら、事務に機能に隨い易い所作よりは椅子に倚つた方が或が勢つて[illegible]にも適當となる。が、書齋の生活は引籠るよりは甘く寛ぐを欲し、便利よりは安易を望み、日常生活に適應する氣分を重んずるから、[illegible]に親む場合の多い邦人の書齋としては不然和風を缺いては物足りない感がある。例へば稀覯の古刻、金石法帖の如きは疊の上に安座して桐火桶を擁しつゝ、煙草を喫しながら鑑賞する時に云知れない興味が溢れるので、四疊半のテーブルの上で[illegible]時でも緩るやうに展觀するのでは其の興味に附隨する事は出來ない。春城翁が二室を要するといふのは頗る同感である。

贅澤を云へば唯だ和洋二室だけではマダ不足する。二室も四室も要する。種々の趣味の讀書人として一部に關はるでは金に不自由の無いブルジョア趣味の贅澤からであらうが、自分の專門とする政治經濟の研究家としては歐風のビュッヘルザアル、佛書や江戸文學を樂む部屋としては[illegible]風の數寄な[illegible]

びた閑室、唐本や帙帯書を捻くる室としては文人趣味の書院と、四つも五つも書齋を作つてるさうだ。恁うなると最う一歩を進めて、歐風のビュッヘルザアルは赤い瓦と緑の芝生の文化村に、俳席風の草庵は汽車や自動車の音の聞えないドコかの山懐ろに文人式の書院は水を隔てゝ遠山を眺める數株の柳の雫を垂れる江の滸にと、四鄰までも擇びたくなる。曲りなりにも此の空想を實現させるには少くも三溪園ほどの規模を要する。左も無いと書齋を各所に散設しなけりやならないから、歐文に飽いて俄に俳書や唐本が讀みたくなると、夫ッ！と周章てゝ自動車を飛ばさなければならない。恁うなると讀書人が重役懸持の流行實業家よりも忙がしくなつて、學者の生活がヘタにマゴつくと黄表紙になる。

だが、恁ういふ榮耀の餅の皮を剝くやうな傲慢た空想は姑らく措いて、單なる書齋として歐風とすべき乎、和風とすべき乎を決する前には先づ書齋の中心體たる書籍の形式を考慮しなければならない。世界の書籍の複雜なる沿革史は問題外であるから今爰に繰返す必要も無いが、古今東西を通じて書籍の發達は大抵揆を同じうしてゐるので、今日では東西共に（特殊の好事的出版を除いては）兩面活字刷の折疊み糸かゞり綴に略ぼ一定してをる。唯だ印度及び西藏の梵莢、日本及び支那の木板袋綴の方冊だけが全然用紙版式裝潢等を異にしてをるだけだ。其中印度其他の梵筴はマダ書籍の形式を完全に備へない原始狀態であるから姑らく措いて、日本では書籍の形式は全然世界化して、文字の性質、文章の構造上、縱行と橫行と、右から讀むのと左から繙くのとで活字の組方に差違ある外は歐米の書籍と少しも違はなくなつた。啻に近刊に於て然るのみたらず、古典の殆んど全部――少くも各部門のスタンダード・ウォークは活字に複印されて歐式に裝釘されてをる。

此の古典の活字飜印は明治十六七年頃からであるが、初めは矢張和紙和裝で、和本の形式を備へてゐた。洋紙洋綴となつたのは明治二十二三年頃からで、中等學校の國文教科書に充てられた抄錄物で、夫から幾何もなく博文館から日本文學全書が發行され其の成功が古典の活字飜刻を各所から簇出するやうになつた。が、當初は學生が教科書又は參考書として使用するだけで、學者や好書家は古典の活版本を輕侮して振向きもしなかつた。其頃高等學校の國文教師の某が教科書中に（何といふ文字だか今は忘れて了つたが）解らぬ言葉に撞着つて面喰ひ、有りつたけの字引を引いてもドレにも出てゐないので益々まごつき、先輩友人の間を教科書を擔ぎ廻つたが誰にも解らなかつた。最後に持込まれた一人が不斗何心たく和本の刻本を出して

見ると、何のこつたい。活字の誤植と云つたので大笑ひとなつた。何にも專門家が活版本を後生大事に有して和本を排してゐなかつたといふのが仲間の物笑ひとなつて、緣雨が何かの随筆に此の低能振を剔抉いた事がある。古典の洋裝活版本は其頃は下宿屋の書生の机に置くものと輕侮されて、學者や好書家は決して手に觸れなかつたもんだ。

夫が今、時勢は如何ともする事が出來ない、今日では堂々たる古典學者が皆活版本で間に合はして居る。古版の趣味家でさへも、趣味は趣味として實用には活版本の方が便利だと云つて洋裝複刻本を珍重してをる。事實、日本の古典は、例へば『草露貫珠』とか『集古十種』とかいふやうな特殊なものまで、大抵は大著名著は殆んど剩さず復刻されてるから、古典の考勘でもする場合の外は活版本ばかりでも少しも不自由しない。啻に學者の研究のみならず、昔は讀むよりは靈寶として本尊佛と共に禮拜供養された大藏經がブリタニカ然と什器を列べ、坊さんが回向のお經をバイブル式の折本總ギルトの六號活字の聖典集を開いて誦上げる。日本の書籍の制は殆んど活字の洋本に統一された。爭はれないもんで、此頃は洋本を扱はないのを見栄にした老書肆までが活版本を列べ、以前は二束三文に潰して投賣された活版の翻刻物の古本が物に由ては市場の價が和本の木板よりも貴くなつてゐる。

唯だ漢籍だけは依然書肆の骨董を保つてゐるもの、夫までマダ餘り活字に翻印されない。近來二三の和譯漢文叢書が發行されたが、厖大なる支那文獻は曾て江戸時代に和刻されたものゝ十一にだも達しない。尤、支那では石印本に代つて活字本が漸く／＼發行され初した。マダ印刷や裝釘が幼稚で、恰も四十年前の日本の活版本を見ると同じ感があるが、勞銀が安くて手先きの巧妙な民族だから歐風印刷裝釘上にも其中必ず刮目すべきものゝ出るだらう。涵芬樓の『四部叢刊』が恐らく石印本のラスト・スパークで、追付け『四庫全書』が一段乃至三段組の洋裝活版の活字翻印本となつて出版される日も餘り遠く無いだらう。

だが、今日ではマダ唐本は殆んど九牛の一毛だも活字洋裝に複製されてゐない。和本は前既に云ふ如く古典の殆んど全部が複刻されてゐるが如何なる古典學者も和本を一冊だも備へないでも餘り不自由しなくなつてる。和本或は唐本と全く離れる事の出來ない少數の學者及び蠹魚の臭ひを喜ぶ好古趣味家でさへも亦相當に洋綴本を備へてるので、之を除いて一般讀書子の和本の藏儲は殆んど一函を充たすに足りないほどの少分數である。中には藏儲の全部が洋本で和本や唐本は一冊だも持つてゐないものさへある。勢ひ書齋が歐化するのは當然で、之が亦文

明の世界化の歸趨である。

實をいふと、瓦斯や電氣の煖房器(ヒーター)でポカ〳〵する波斯模樣のラグを敷詰めた部屋で、獨逸式の深い革張のフツクリした安樂椅子にドツカと腰を埋めて、モカの熱い濃い珈琲を啜りながらクロース綴の活字の芭蕉全集を讀むのでは古池に蛙飛込む枯淡な俳諧の寂寞は味へ無い。又佛蘭西の近代畫の額の下でセエブル風の笠を掛けた電氣のスタンド照らして朝鮮銅活の詩集を繙くなどは何と云つてもアナクロニズムで噴飯に堪へない。が、アナクロニズムは日本の現代を一串する通有病だから、實は決して顧慮するに及ばないのだ。今の日本の新人はクロース天金の芭蕉全集で讀んでも蚤虱馬の尿する枕許の奥の細道の芭蕉の行脚の風流を十分翫味し批評する。又佛蘭西の近代畫を鑑賞するものが朝鮮の銅活本などを珍重する筈が無い。此の如きは老人の無用の心配と笑はれるだらう。

且今日の知識階級者は外國語の一つや二つに通じないのは無く、隨つて外國書の若干冊を儲へないのは無い。苟にも讀書人と云はれるものなら語學の餘り廣くない人でも五百冊や千冊の洋書を儲へてるのはザラである。殊に最近世界的接觸が徐々繁くなつて自然外國書に親むものが著るしく增加した。今日では中學校の生徒でも二百や三百の洋書は本好きなら持つてゐる。

此頃の新人の書棚は日本書と外國書と相半ばするのが普通で、中には洋書ばかりを列べて置くのがある。歐露氣分といふのは皮肉なシリウゴトで、之が特に博識を衒ふのでも學者振るのでも無い當世の文化人氣質である。といふよりも今日では書齋から洋書を驅逐する事は出來なくなつたので、日本書までが洋裝して固有の和本を書齋から追出して了つた。丁度公けの會合に參集するものは皆洋服で、和服は入場を許されても別扱ひをされ、自ら小さくなつて片隅に屏息するが如きが今日の書齋に於ける和本の狀態である。

ツイ三十年前までは、我々は常に洋綴本に親みながらも硯や毛筆と一緒に洋綴本を机の上に置くのを何となくそぐはぬやうに思つてゐた。前にも云ふ如く我々の室は書齋といふよりは仕事部屋であるから、粧飾も體裁も有つたもんぢや無いが、夫でも時折氣紛れに机の上を飾る時は洋本は陰へ潜まして代りに和本を置いたもんだ。硯や毛筆が中心である机の上に洋紙のクロース本では納まらない。此の書齋の文人的雰圍氣分を一變さしたのは硯や毛筆を驅逐した萬年筆であつて、五寸に足らない小さなエボナイト軸の金ペンから溢らす現代氣分が文房革命の第一矢となつて、書齋の歐化を促進せしめたは爭はれない。昔は象牙の箸を作つて、コンナ贅澤な箸を作るやうではマヅイ物菜

館でに迄も辛抱出來まいと昔氣質の律義親仁の前額に八の字を寄せさしたといふ噺がある。萬年筆を握つて昔の文房氣分から脱却すると、狩革やクロースのファンシー・バインディングの列んだのを眺めつゝ伊太利のマーブルでも飾つたデスクの上で書き物をしたくなる。此の如くして新人の書齋は大抵惡く歐化されて了つた。

（十一）書架

大阪のTといふ富豪、代々の素封家で、率と云へば言下に百萬圓の現金を積んで見せる實力があるさうだが、鬼に金棒の天稟の蒐書家で何の道樂も無いが唯だ書物が好きでボツ〳〵買つて樂んでをる。之が又不思議で、内容の面白いツマラナイよりは安くなければ氣に入らない。新刊は高いからと云つて決して振向かず、五十錢均一程度で古本ばかり買つてるが、古本騰貴の今日五十錢均一で買へるのは滅多に無い。眞著の本が一番安くてイヽ、と、蟲の蝕つた佛軸の秘密や陀羅尼の假綴のやうなものばかり獵つて價の安いのをニコニコしながら鑑賞してをる。ボツ〳〵買ふのでも長い間には相應に溜るが、本箱なぞは無駄だと云つて蜜柑箱やサイダーの空箱（そんなものを買つたからつて飲んで了ふ男で無いから、空箱のある筈は無いから何れがドコからか買つて來るのだらうが）へ入れて積んで置く。畢竟此上も無いが、又愛すべき一種の奇人である、

だが、價が安いからと云つて丸本や印刷の秘密の假綴を買ふといふは變挺だが、本箱は無駄だからと云つて蜜柑箱やサイダーの空箱で間に合はすといふは多くの好書家に多少共通する。愛書家には得て書物を買ふには千金を惜まないでも本箱を作るには數金をも出し惜む通有性がある。品物さへ貴ければ入物なんぞは何でも構はぬといふが好書家共通の心理であつて、之が表裝や箱に矢鱈と金を掛けて益々箔をつけやうとする骨董物書畫家と違ふ處である。

だが、本箱は決して無駄なものでも又贅澤なものでも無い。保存上にも整理上にも又使用上にも本箱は無くてならぬものだ。運送屋の荷物のやうに唯だ積んで置くだけなら蜜柑箱でも足りるが、能く之を保存し能く之を整理し能く之を使用しやうとするには蜜柑箱へ入れて積んどくのでは何の役にも立たない。之で濟むやうな本なら場所を塞げるのも無駄だから屑屋へやるなり焚いて了ふなりした方が世話が無い。蜜柑箱にも及ばんのだ。

多くの藏書家の中には書棚の設備に費やす金があるなら書籍を買つた方が勝しであると信ずるものがある。書箱を買ふ爲め

には數百金を費やすを少しも惜まないでも書棚を作る爲めには十數金を出し惜みするものがある。隨つて多數の藏書家の中には所謂積んどく先生で無い善讀者もあるが、一遍讀んで了うと放擲し去つて、書棚の設備が不完全の爲めに自分の藏書の所在を失つて了うものもあり、或は全く忘れて了うものもある。所謂積んどく先生では無いが藏書が唯山をなしてゐるだけであつて、藏書が何の用をもなさない。善讀者の藏書は頭の一部をなしてゐるものだが、此の通りに唯積んどく丈けでは知識が集積されてるだけで少しの系統も秩序も分類も索引も無く何の役にも立たない。蜜柑箱式備書は書齋の役を足さないタヽの物置である。

　爰まで書いて來て私は病氣になつて了つた。些か小康を得たが、頭が散漫して書かうと思ふ事は澤山あつても少しも纏まりが附かない。來春病癒ゆるを待つて再び筆硯を新たにして稿をつぐ事にしやう。（十二月一日）

文樂物語

三宅周太郎

近事篇（その一）

序言。私は近年、それは恐らく私には荷が勝ちすぎるであらう企てに係らず、大阪の文樂の研究を考へてゐた。日本の演劇は幸に今ではかなり調べつくされた。が、その姉妹藝術の淨瑠璃の方は、未だ比較的漠然としてゐる。そのためか、私が文樂の事を調べにかかると同時に、根本的に淨瑠璃の大部分に亘つて知る必要に迫まられた。淨瑠璃の發生は五百年昔と見るのが普通だ。尤も、的確な創始期は、我が國へ三味線が輸入された永祿（一説には文祿）時代と見て差支ない。それにしても既に約三百數十年の昔である。一方、私は實地見聞の意味で大阪の文樂へ行つて見た。幸に當事者の好意で、すべて内部の實地に接しる事が出來た。併し、それだけでは大きに不足であつた。自然、四百年五百年昔のこの發生を辨へる修練を要した。私は及ばずながらこの數ケ月殆どこれのみに沒頭した。併し、未だ道は實に遠い氣がする。凡そかういふ方向は、歌舞伎以上に正しい意味の「過去」、よき「古さ」に權威がある。例而、私の企ては淨瑠璃の僅かの一部、文樂のみの研究だ。が、それすらさうした優秀な「藝術」に價値のある對象は、知るのに「よき頭」が必要と共に、「長い年」がなくてはならぬのを思つた。平凡に云つても、人間の年の五十より六十、六十より七十が、本當に於てより多く過去に通じる理由になる。この理由を以て、この道の一部、文樂を知る研究さへ、その仕事はイコオル人間の年になる。もつときつはり云へば人間の命になる。故に、若年の私の

如きが、今の所發表出來る報告は、漸く文樂の一部分、その近事片々のみである。

老婆心の註釋を加へると、今の文樂の名は、その創立者、元、阿波の興行師植村文樂軒なる人の名前の、文樂なる二字をとつて呼ぶに至つたものである。その由來は本文中で書く。が、兎に角祖先の右の文樂軒が大阪のこの道の古書に現はれてから既に百何十年たつてゐる。で、文樂軒始める所の文樂物語とは、出來ればシエークスピアの作に於けるチヤールズラムの「沙翁物語」の如くありたいと思つてゐる。が、それは私一人の理想に終るかも知れない。併し、私はこの近事篇を何ケ月か續けて終つた後、他日、數年後に續近事篇を書いて見たい。又、私の努力體力が續けばその上で中古篇に遡つて行きたい。但し、こんな企ては前例がない。從つて、よるべき根據がない。よるべき記錄、典籍に乏しい。困難の嘆を發せずにはゐられないのである。

ある古書に、永祿年間の江村專齋なる人の話としてこんな記事を讀んだ。豐臣秀吉の祐筆が、未だ學問の開けなかつた時代だ。ある時、醍醐と云ふ字に行き詰つた。あのだいの字はと思ひ出せぬので困つてゐた。と、秀吉がそれは大の字を書けばいいと云つたさうだ。――私のこの記事は、私として一生懸命であるにしてからが、何分、相手が義太夫と云ひ、文樂と云ひ、古さのみに生きる難解事業である。私も亦、知らず識らず醍の字を、大の字でゐたりするか知れない。が、それは特に暗礁の多いこの底知れぬ深い海を行く漁夫の過ちと許して頂きたい。こゝでは今の私に出來る範圍の、文樂近事物語であるのを斷りながら、一方、世のこの方面の研究家の先進、並に大方の以上の意味の了解を豫め願つておく次第である。又、勝手至極だが紙數の關係上、三ケ月位に亙る記事故に、一と月一と月を切り離すと、私の意のある所が通じ兼ねる。もし全體的に見て貰へるなら、それは望外の喜びである。

一、「大序」の人々

大正八九年の頃であつた。今の紋下竹本津太夫の宅へ、突然、二十才の若者が現はれた。ぜひ文樂の太夫になりたいと賴むのだ。國はと問ふと九州熊本縣阿蘇郡と云ふ。津太夫の生れが九州だけに、同國のよしみで遙々と大阪へ賴つて來たわけである。

この若者は丸々と太つてゐる。體重は二十二三貫はある。兎に角、津太夫は家へおいてゐた。ある日、庭に米俵が積んであつた。と、この男はつと俵の前へ立つた。津太夫一家の人達

おやつと見てゐると、彼は伎の肩に手をかけた。うんと力んだと思ふと、伎は彼の両手の中で宙に浮いてゐる。又、うんと力むと、伎は彼の頭の上にある。かけ聲に從つて伎は上へ下へ、前や後に動く。こんな伎の曲藝をすますと、彼は「はははし」と笑つてゐた。

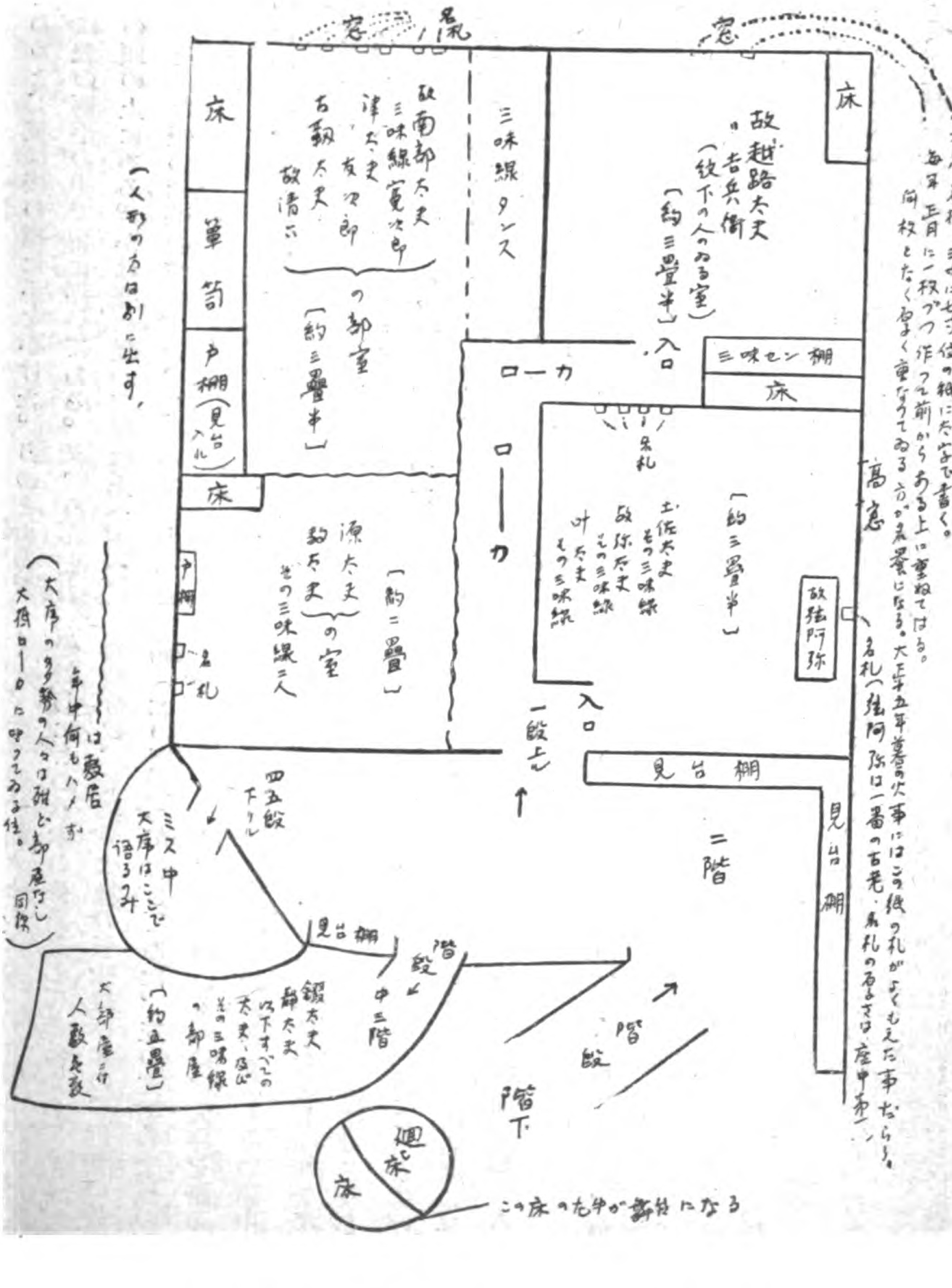
それで分つたのだが、彼は郷里の阿蘇郡で××といつて宮撲相をとつてゐた男である。が、それで飯が食へる筈なのに、新に文樂を志した。勿論、相撲より義太夫が好きなためである。

彼は斯道へ入る人の常として、多少の素養はあつた。が、津太夫の門に入つて勉強してゐた。その中に一心の効があつて、竹本津利太夫の名で文樂の大序の太夫の中へ加はつた。

所が、近年、相撲とり然とした彼の姿が文樂に見えなくたつた。よく聞くと彼は肋膜を患つた。そして立派な呼吸病になりさうなので、たうとう郷里の九州へ歸らねばならなくなつたのである。病氣の原因は、全く稽古を熱心にやりすぎたからと分つた。

一體、大序で語るのには、三味線は八本位の調子でやる。普通、大夫の語るのが六本の調子だ。それさへ、外々の日本の音樂から見ると、一倍三倍の聲帶が入る。が、大序はそれ以上の八本だ。どんな初歩の太夫でも、文樂の人である限り、口を開くと、[illegible]朗々としてゐるのに驚く。[illegible]幾年前にこの八本の[illegible]を通してゐたのである[illegible]た時分は、故津太夫の三味線ひきの、近頃の[illegible]頭（元の清助）が生きてゐた。右の文樂の[illegible]お見て頂きたい。弦阿彌のゐる所は、大序を語るのが一番[illegible]聞える地位に當つてゐる。云ふ迄もなく[illegible]中にミス中で、當時は例の薄暗い中に語る。お客などは丸でゐない。そこで八本の調子でやる。彼が終ると、[illegible]どうしてもこの[illegible]彌の前を通らなくてはならない。ここぞと避けるやうにしても一度はその前を通る。と、弦阿彌は名調の早口で、大序時の大序時分から來てゐる。そして前を通る人々に「まついな。」などと叱る。

併し、八本などの高い調子は、元來無理で、かなりな腕の人でもとても聲は自由に出ない。代りに、さうした序の稽古から叱る弦阿彌を、八本の糸で口を開かせたとしても、決してうまくやれるものではない。だが、叱る。それで大序の人々は[illegible]方が無理と分つてゐても、その前を通るのがつらい。丸で[illegible]同然だ。が、彼の何人かはここで叱られる。自然、大序の中か[illegible]る者はおつとしてゐられない。[illegible]たまけ者は文樂と雖も少くてこの限りではないか。



御靈時代文樂樂屋の圖（大正十年前後の分）

津和太夫は要するに勉強家だつた。このやうな稽古をはげみすぎた。それ故に、つまりは義太夫の八本の糸が、二十メの米俵さへ易々と持ち上げた彼の頑丈な身體を害したわけになる。八本の調子が、力士××の腕脇を破つた事になる。そして彼は今も猶、九州の阿蘇郡で病を養つてゐるさうである。

新劇協會の伊志井寛氏も亦この大序にゐた太夫の一人である。同氏も稽古に熱中して、腹に力を入れすぎたため脱腸にかかつた。それで三四年前に文樂を退かねばならぬ結果になつて、今日の俳優に轉じた。

畫家九里四郎氏の知人に、東京に野邊地某なる人がある。本年五十と聞く。天性の美音で義太夫を始めてから三十年位になる。清元の梅吉氏が、先年延壽太夫と別れた時、野邊地氏の美音を聞き知つた。すると梅吉氏は自分の方の太夫になつてくれぬかと申出でたさうだ。二三年辛抱してくれゝば自分の糸で立派な清元の太夫にして見せると云ふのである。が、野邊地氏は斷つた。そして二三年前から大阪へ行つて文樂へさへ入つてしまつた。古靱太夫の門に入つて武藏太夫となつてゐる。併し、この經驗家で年五十才、梅吉から望まれた人でゐて、未だ大序の初めの方だ、その名を番附で見つけるには蟲眼鏡が入る位である。

又、同じ大序に、源太夫の弟子で源平太夫と云ふ人がゐる。彼は本年二十七才、大阪府[illegible]上梅若湖なのである。即ち、大正十二年一月角界を引退した。そして翌年源太夫の門に入つた。大正十五年一月大阪朝日會館で披露をして源平太夫となつて大序に入つた。相撲をよして好める道に入つたわけだが、一方が幕内に係らずこの方は文樂としてふんどしかつぎでゐる事になる。

又、大序に駒登太夫と云ふ人がある。二十三才の盲人である。十二三才の子供時分から同じ盲人の駒太夫の弟子になつた。御靈の文樂時代に、この盲目の子供は誰よりも早目に來た。家は大阪の住吉方面だ。當時、夜があけると杖をついて御靈神社の方へ向つて出る。阪堺の電車線路を覺えてゐて、そのレールを杖でからからとさぐりながら大阪の市中へは入つて來る。文樂へ着くとミス中の一隅へは入つて、ぢつと人の語り耳を聞くのを常とした。このやうに彼は今も道頓堀の辨天座へ電車の線路を杖でたたいて毎日通つてゐる。

× × × ×

殆ど客の姿は見られない。勿論、自分の姿をもミス中で客には見せられない。その大序の人々さへ、このやうに一箇一ケで出來上つてゐないのが、譬へたと云つても今日の文樂の御世である。そしてこの大序すら、これに加はる迄は大抵は何年か甚

生や下男の内弟子的見習時代の年期を入れなくてはならない。それで今の文樂の大序にはそれぞれの三味線ひきを入れると約四五十人はゐる。（太夫が三十人弱、三味線二十人位。）

所で、太夫の名を貰つて大序には入ると、その人は何をおいても大阪名産粟おこしの金五錢の品を、百三四十個求めなくてはならない。そして普通の人家の標札大のその粟おこしの表面一杯に、一々半紙を切つて張りつける。それに與へられた太夫（或は三味線）の名前を太い字で書く。その上で文樂の太夫三味線人形幕内表方一同の全部の人に右の百三四十個を配るのである。即ち、それが今日から太夫になつた披露の挨拶である。

が、去年一月辨天座へ移轉してから、この長年の慣例を、土佐太夫の發案でやめてしまつた。この粟おこし百三四十個の代金が、大序へは入る人の中に買へない者が尠くないからだ。その上、大序に加はつてもすぐ飛び出す辛抱のない者さへ尠くない。で、兩樣の意味でこれがかなり重い負擔になるので中止したわけだ。興味ある五錢の粟おこしは、これで文樂の藝術的存在から見捨てられたわけである。

翻つて、この大序とはどんな仕事をしてゐるか。人は以上の苦しき犠牲を拂つて迄、大序に止まつてゐるのを見て、かなりな報ゐがあらうと思ふか知れない。が、全くその逆である。試みに大正十年頃出た「加賀見山舊錦繪」の大序「凱陣の段」の語り場を調べて見る。それは五行本で十三枚程ある。十三枚と云ふと枚數は多く聞える。が、誰も知る通り五行本の字は初號の活字よりは大きい。で、これを四百字詰の原稿紙に書き直すと約三枚半位になつてしまふ。これを一人で語るとして僅か十五分ですむ。併し、これを一人で語るのでない。實に十二人の太夫で分けて語る。退屈ながらその語り場と太夫とを書いて見る。

「加賀見山」の大序

「武威遠近にいちじるしく。靡く加賀の中屋敷。殿の歸陣を壽きて、床には兜鎧櫃。」

これだけが當時大序の初めにゐた呂智太夫の分だ。字數三十三（四ロ位。）で語る時間は一分に足りない。續いて、

「矢柄矢の根に器物類。すらりと列べて奥の間へ。奕葉變じて蒔繪迄、かざり立てたる家の風。故ある事と見えにける。」

これが雀太夫（今の土佐太夫の養子になつた人、但し、近年逃げ出して文樂及び土佐家にはゐないさうだ。）の分だ。一分未滿、一々本文は省くが續いてこんな風の文句の三十四五字語る一分未滿の津若太夫になる。次に四十字位語る魁久太夫になる。次がその程度の津駒太夫、それから同じ程度で南枝太夫、次が

五十字位の清太夫である。この人は三四年前迄に文樂を斷念した。そして東京へ來て守田勘彌の弟子になつて、坂東喜昇と名のつてゐた。が、志を得なかつたらしく今は鄉里尾の道市で黑潮社なる新劇團を自分で主宰してゐる由。その後が矢張りその程度の淀路太夫。それから五六十字で一分間位やれる陸路太夫になる。但し、この人は何年かこの大序を勤め上げて、今では大序をぬけて、その一つ上の位、序中へ上つた。その後が同じ程度の富榮太夫、これも大序はぬけた。それから七八十字語れる越登太夫になる。これで二分見當、この太夫は美聲で文樂の大序中で有望視せられてゐた。拔擢されて出世しかけたが、一年前に若い身で病死した。腹滿とかで死んださうで、或は稽古をすごしたので出た病ではないかの說を成す人がある。その次が辰太夫、これも今では序中にゐる。それから「――大鴨の羽打つが如く、九萬里の大鵬間へと入りにける。」の終り迄の七八十字が源福太夫になつてゐる。この終りを語る人が大序の**とめ**と云つて、大序中の最上位だ。無論、この人も今は序中へ進んでゐるが、このとめになる迄が中々大變だ。素質のいい人で十分數年はかかる。

猶、この持場を語るのは、ミス中だから肩衣はつけない。略着の儘、以上の同勢十二人の太夫が、何人かの三味線ひきと一列に並んでミス中にすしづめになつてゐる。[illegible]の一人が代る。又一人が次をやる。恰も何かの早業でとんとん代つては語り、語つては代る。戰場のやうである。これが七八本の高い調子でどなるのだから、心なき者がミス中のこの有様をのぞいたなら、一種の瘋狂院かと思ふだらう。

一寸云つた五十才で素人として三十年の稽古をした武藏太夫さへ、この大序の末席である。そのやうに文樂は大序へは入る迄の稽古の年限は丸で太夫の資格に數へない。しかも、大序へは入つて何年か修業しつゝ、その語り分は右の如く僅に一日一分を語るか出ぬかだ。大序の頭のとめになつて、やつと一日二分間程度とすると、そこに至る大序の修業年間を三四年と假定する。と、大序一年の修業の効は實にミス中の四五十秒にしかならない。非常な秀才でさへ一年の大序の修業で一分を語れるかどうか分らない。私は大序の修業を一年一分に數へたいと思つてゐた。が、事實はそれより遅い。ミス中で一分語るには實に三四年或は數年の年期が入るのだ。文樂の一分は、人間の勞苦が二年位はかゝるのである。そして大序へ入る迄の幾年の修業はあつても、それはすべて武藏太夫のやうに零にする。から云ふと去年五月に加入した素人の竹風太夫さんの經歷があると思ふ。が、この人はある消息通の話によると、經歷は分らぬが

去年五月の文樂出演に對して、一萬枚の切符を引受けたと云ふ。切符代約三四千圓に當る。給金はいくらか貰へるにしても、それだけの責任を持つたので、素人で一躍文樂の二流の下の地位で迎へられたらしい。併し、さう云ふ異例を除くと、以上の大序時代はすべて太夫三味線とも無給ださうだ。それで生活費は入る。座員としての負擔はかゝる。故に、文樂の大序に入りながら、續々と落伍者を出すのは寧ろ當然のやうな氣がする。

落伍者と云ふと、私にはこんな事がある。前年私が本郷の菊富士ホテルにゐた時代だ。一日、そこの食堂で一人の青年に紹介された。彼は本名竹内謙助、秋田縣の人だ。親が義太夫好きで自分もその影響から、明治四十三年頃十何才で大阪へ行つて今の土佐太夫の門に入つた。大正五年頃に伊達香太夫の名を貰つて大序には入つた。が、當時二十何才の若い血はこの難行苦行に堪へられなかつたらしい。遂に飛び出して東京にゐたのだ。ほんの一度私は語り合つたのみだがもう三十歳になつてゐる彼は、こんな身の上話をしながらほろつとしてゐる。「惜しい事をしてしまつた。」と云ふのだ。

別に、これは決して多くの人には當てはまらない。併し、明治中期の一代の尊敬すべき先覺者中江兆民氏はその名著「一年有半」でかう云ふ文辭を殘してゐる。——

「近日東西の新聞一も興味の事有る無し、大阪市長の辭職、其代人の選擇、伊藤大勳位の東北行中止、是くの如きのみ、(中略)余の期待する所は、一葉落ち涼風生ずる後大阪堀江明樂座と御靈文樂座と開場するに及び、幸にして余猶ほ往來するを得て、今兩三回大隅太夫、越路太夫の義太夫を聽き、玉造、紋十郎の人形を視て、以て暇を此娑婆世界に告ぐるを得んとの至願也、余の音曲に於ける饕餮啻ならず、而して此等傑出せる藝人と時を同じくするを得たるは眞に幸也、余未だ不遇を嘆ずるを得ざると謂ふ可し。」

我々凡俗の徒と違つて、一世の偉人すら、その死を控へてゐて、この文を書き、それに註して「兆民居士不遇に非ず」と云つてゐる。先きに云つたやうに、決してこれは萬人の眞理でない。併し、見方によつてはかう云ふ傑物の肝をさへつくのが斯道である。愚かであらうと、兆民居士のこの聲が強ち僞りでないのが斯道である。右の落伍した謙助氏の戀々の狀と云ひ、これと云ひ、この天國地獄がある點で大序は保たれてゐるのであらうか。

閑話休題、この兩三年以來、以上の大序の語り方を變更した。こんな風で十五分程度の大序を、十二人で割つてやるのは面白くない。それよりせめて三分位づつ、即ち、十五分を五人

でやらせる。併し、人數の多いのはどうにもならぬから五人位づつで二日おき、三日おきに交代する。と、かう代へたのである。が、恰も朝三暮四の例のやうに、かう改めたと云つて、全體としては、何減りはない。唯、三日おきでもいいから、少しでもゆつくり語らせる方が、毎日毎日の一分より効果があらうとの考へでの企てだ。これに對して私が稱讃してゐた「演劇新潮」の雜文に、古靱太夫はかう云ふ意見を述べてゐる。「現在では多人數のため、若い修業盛りの人達（大序を云ふ）が二日に一回、三日目に一回だけほんの少し語るのでは、碌の修業にもなりません。」蓋し、眞理である。昔はうまく行つて一日一分、今は改められても同じ比例で三日に三分、どう轉んでも大序の苦勞の一年が一分以下でこそあれ、それ以上にはならないのである。

一つだけ特別がある。「忠臣藏」が出た時だ。その大序は芝居でも大切な場面だ。義太夫の方でも大物で三十分前後はかかる。こんな長い大序は「忠臣藏」のみだ。そこで「忠臣藏」が出ると大序の連中は大喜びである。ふだんの二三倍づつ語れるからだ。で、それが出ると小僧の盆入りのやうに樂しむ。尤も小僧の盆入りは年一度だが、文樂の「忠臣藏」は三四年おきでないと出ない。盆入りさへ年々迎へられぬのがこの人達である。

參考のために順序を云ふと前に云つた大序のとめを經て序中、それから二段目の口その他あるが、結局序切になる。さきに大序の中で、今序中へ進んだ陀路太夫の名を出した。この序中になつて初めて給金を貰へるがこの人で一日一圓位（一と興行四十圓前後？）である。ここまで來て一寸つかへる。これから序切になるのが大變である。私が去年十月辨天座へ行つた時、前狂言の「碁太平記白石噺」の大序の序切を語つてゐるのは文字太夫であつた。前名八十太夫で故越路の古い弟子で、東京へ越路が來るといつもきまつて口上を云つてゐた人である。もう文樂に二三十年はゐる。今の大隅太夫になつた先の靜太夫と同じ年輩、同じ時代の人である。それが序切である。序切と云ふと此の頃のやうにおそくあくやうになつても、床へ上るのが正午前後だ。まだお客は殆ど來てゐない。そして語る時間は十分十五分程度にすぎない。それで一日の用はすむ。芝居で云へば序幕へ一寸顏を出すきりで終るのである。

尤も、二三十年年期を要するにしても、大體、誰でもこの邊迄は來られる。が、これをぬくのは果して何人であらうか。即ち、この地位は相撲で云へば二段目の筆頭の所謂資ち師、軍隊で云へば特務曹長である。大序のとめで一と苦しみ、序中から

序切へ上るので一と苦しみ、それでこの序切邊になれてもこれ以上は實に選ばれた人のみに許される。無論、一生を文樂の床に棒げてこの邊で止まる人の方が遙に多い。今この邊にゐるのは文字太夫の外に島太夫、和泉太夫、相生太夫と一と通りの古武者が隨分ゐる。いづれも立派な一人前の太夫だ。ものを知つてゐる點に於ては文樂の大きな太夫とさうさう變らない。が、語る所は序切か、二段の口、三段の中のいづれも十五分程度にすぎない。同じくさうした端場なみの短い所だからと云つて、この人達は紋下の太夫や、土佐古靱程度の大太夫の出し物の端場は絶對的と云つていい位に許されない。私の見た十月の津太夫の語り物は「近江源氏の八ツ目」だ。が、その「盛綱陣屋」の和田兵衞の件の十五分程度の中さへ源太夫が語つてゐる。從つて、何年苦しんでも序切程度の太夫は永久に外々の場面のみで、賣り物の一幕には殆ど顏が出せないのである。

かう云ひ出すと、舊劇の方もさうだとの說がありさうだ。成程歌舞伎の役者も子役から仕上げる。舞台へ出るか出ぬかの下廻り、即ち、文樂の大序の生活はする、その點は同一だ。併し、芝居の方は下廻りですら、古參になればどんないい中幕物にも端役として出られる。左團次門下の市川莚八氏は下廻りと雖も自由劇場的出し物に出られる。中幕「毛拔」に出られる。が、文樂の方はさう行かない。つまり、いい出し物の端役は既に源太夫、今の大隅太夫邊が受持つてしまふからである。それが大變な感激の相違だと思ふ。一人前の太夫でゐて、一生紋下の語り物や、ツケ物（中幕風の物或は切の出し物の意味。）の前だけでも語れないとは、結局、人に認められずに終れとの結論と同じになつてくる。併し、一人の古靱太夫、或は、下つて今の若い大隅太夫を作るためにさへ、如何に多くのこの特務曹長を文樂の床の陰で腐らせてゐる事であるか。

三味線の方も番附面の細字で何が何だか分らぬ大序程度から、俗に半澤と云ふ地位になる。即ち、番附の上で豐澤某、鶴澤某となる。その澤の字を標準にするのであるが、大序時代はそれが略して丸で糸を立てたやうな字だ。が、それを上がると澤の字が番附で少しはつきり分るやうになる。これを半澤と云つて太夫の序中邊に匹敵する。この方もこれでつかへる。澤の字がはつきり分る澤の字の所謂本澤に書かれるのは果していつの事か。太夫と同じくその半澤以上が大變である。

扨、文樂で大序の事を聞かうとすると、殆ど誰も相手にならない。「そんな事を聞いてどうしなはるのや。」などと、あべこべに私に問ひを出す。が、私として手をつくして調べて見るとかう云ふ有樣であつた。文樂としてその存在さへ意識に入れられ

てゐないやうな大序の人々も、このやうに八本の糸で吻を使つてゐるのだ。脱腸にかかつてゐるのだ。美音と三十年の鍛錬があつて大序の末にゐるのだ。松葉杖とレールの音を友達に文樂に通つてゐるのだ。或は、青年の活氣で逃げ出しても末に文樂の世界を忘れずに執してゐるのだ。しかも、こんな生活をしながら、前途はあるのであらうか。ないのであらうか。が、四五十人の人々は何年となくぢつとミス中に籠つてゐるのである。この隠忍無抵抗服從は愚かと云へば愚かであらう。そして半分は年若な人達で、幾分無心と無智とで忍耐してゐるのは事實だらう。併し、どうあらうとこれは恐く「好き」から出てゐるのは確であるだけに、その愛着の深さを思ふと、「嫌いな方が幸福」と云つた悲壯な氣さへして來る。今の世でこれ位不器用で、融通のきかぬつきつめた生活は多くないだらう。文樂は墮落した。安逸に流れてゐるの聲は屢々聞く。が、兎に角かうして昔同様な生活に耐えてゐる人々はゐるのだ。私はそれを知る故に、無益な非難や、報はれない現狀にこの人達をして、絶望だけはさせたくないと思ふ。この意味で分り難い大序の人々を知る手數を、愚かも知れぬが私はたいして厭はなかつたのである。

二、「大序會」の話

約十年以前、大正八年に土佐太夫は「大序會」なる物を作つた。大序が何時からこんな風で、一體、いつになつたら彼等は光明に接しられるか分らない實狀だからだ。それでは氣の毒だから、別に、時々大序の人々のみで集まる。そしてふだん聞き覺えで覺えてゐる筈の語り物、或は、密かに敎はつて來てもいいから何でもやりたいと思ふ物、それを土佐太夫の宅へ集まつて語る。聽き手には土佐太夫と有志の人々が集まる。そしてそれぞれの語り物を批評して實際の經驗と研究とにしようと云ふのである。そしてこれを名づけて「大序會」と呼んだ。

大序の人達は躍り上つて喜んだ。土佐太夫のやうな先輩に直接聞かせたり、批評して貰つたり、彼等は夢にも思はぬ話であつた。又長い文樂の過去でも一切そんな企ではない。忽ち、大序の連中で第一回が催された。太夫三味線を入れて約四五十人あつた。聽き手も次々に集まつて暫くの間に同好の聽衆が七十人位出來た。當日と云ふと土佐太夫の宅は上を下への大混雜になつた。やる方は四五十人で廿組以上あるため早朝から深夜に及ぶ。それを土佐太夫と常連の聽衆の主な人が一々批評する。優劣をきめる。

これは消極そのものの文樂一座に、大きな衝動を與へた。この大序會は今も續いてゐて、昨年第二十回の紀念演奏をした位

だから、一年に數回はやつてゐる。前に述べた若くして死んだ美音の越登太夫や、今日、有望視せられてゐるつばめ太夫、越名太夫など皆この大序會の人々であつた。殊に、大正十一年二月の文樂の興行の時、古靱太夫は「一の谷」の二段目「流しの枝」を語つてゐた。所が、急に休んだ。すると門下のつばめ太夫は、當時未だ十九才の少年であつたが、その以前故湍六の糸で古靱太夫が同じ「流しの枝」を文樂で語つたのを聞いて覺えてゐた。それをその前年大正十年九月廿七日の大序會で語つた。つまり、封切はそこで行つてゐたのである。で、古靱が休むと、いきなり代役で出られた。これなどつばめ太夫として正に今日のある出世の緒であつたのである。外にも尠らず若い人をこの會から世間と文樂とへ紹介した。で、竹本土佐太夫が微笑の裡に語つて曰く「これで私はいつ死でも、墓に香華は絕えぬ積りで居ります。」

又、一つの奬勵法がある。右の聽き手の七十人から會の度に一圓づつ會費を集める。それが七十圓、そこへ土佐太夫が三十圓寄附する。そして義太夫の見台一個普通品百二十圓と云ふのを、見台屋へかけ合つてから云ふ會だからと二十圓まけさせる。即ち、以上の七十圓と三十圓とで二十圓割引の見台が買へる。この愉快な人の厚意の見台を、當日優秀な成績を占めた大序會の人達に賞品に出すのである。

文樂の經營者大阪松竹の白井松次郎氏は、この大序會に刺激されて、間もなく、文樂に「向上會」を作つたのは廣く人の知る所である。毎年夏の興行の後に、これは大序より以上の地位で、ふだん役のつかぬ人達を主としてやつた。大序會より少し程度が高いわけである。その第一回で今の大隅の靜太夫が「寺小屋」を語つた。數年前私が大阪にゐた時、白井氏に當時から私はいろいろ文樂の事を聞かうとした。と、この話をしてあんな面白い「寺小屋」はありませんでしたと激賞してゐた。勿論、この種の試みの常として一心の致す所であらう。が、この時の靜太夫の大きな問題を作つたいい「寺小屋」も、源は大序會に發してゐると見て差支ない。

最後に、大序會に一つの悲喜劇が殘つてゐる。土佐太夫の門に若葉太夫と云ふ若い太夫がゐた。彼は土佐太夫の同郷で、その緣故で弟子になつた。ある時の大序會で、彼は「太十」を語る事になつた。實直な田舍者である。聽衆はと見ると、師匠を初め、大阪の義太夫通のみだ。おまけに語り物が「太十」と云ふ、越路でなくては本統に語れぬ物と來てゐる。いざ床に上つたものの、だい分堅くならぬを得なかつたらしい。

やがて「太十」で一番聲の入る「主を殺した天罰」の件へ來

た。彼はここぞとばかり、見台を両手で握つて、うんと力を入れて聲を張り上げようとした。正に「主を」と云はうとした時、床の上でどすんと怪しい物音がした。一刹那に彼の姿が消えた。おやと思つて見直すと彼は後へ倒れてしまつてゐたのである。

それと分ると満場総立ちになつた。若葉太夫は床の上に倒れて眞青になつてゐる。

明治三十一年四月、近世の類のない三味線ひきの名人豊澤團平（歴史的に云ふと二代目になるらしいが、團平の名を偉大にしたのはこの人一個の力と云ふ理由で初代に見るのが普通である。）が、博労町の稲荷座の興行の初日の床の上で頓死したのは有名な話だ。彼はこの時先代大隅太夫の「志渡寺」の三味線をひいてゐたのである。そのおくりがすむかすまぬかの中、團平は急に撥を落した。身體が前へかんがんでしまつた。――病氣は脳溢血であつた。門人などが下へかつぎ下して外へ運ぶ中に、既に息を引きとつてしまつた。これは最近ある雑誌に紹介されたさうだが、眞の名人にふさはしい死として、斯道では今に尠らぬ感激を以て語り合つてゐる。

かう云ふ例があるからだらう。混亂の中に「脳溢血だ！」と叫ぶ者があつた。が、團平と若葉太夫の相違と云ふわけではないが、幸にこの方は水をふつかけたり、醫者が手あてをする中に息を吹き返へした。併し、若き新たつ若葉太夫はこれを氣に病んだのであらう。方々での笑話の材料になるのを苦にしたのか、何となくこれ以來樂しきなくなつたらしい。間もなく彼は土佐太夫の家から逃れ去つた。今は多分その郷里四國の田舍にゐるらしいとの事である。

三、津太夫の教訓

竹本津太夫は最初自家の門に入つた太夫志願者に、よくかういふ話をするさうである。私が意譯をすると。――

文樂で太夫の修業をしようとするなら、物質上の慾望は忘れてほしい。ここはこの道の稽古場だ。ここではさう云ふ慾など十分な事はいつ迄たつても出來ないだらう。併し、自分等さへ、給金などは少ししか貰つてゐない。三味線ひきでも人形遣ひでも皆さうだ。その代り、旅興行とか、東京行の時は給金は相當貰つてやる。が、文樂ではそれは考へないでゐて貰ひたい。

大體、かう云ふ意味である。私は嘗て故人の圓右から、高座で何かの話の序にこんな事を聞いた。――圓右がまだかけ出しの前座時分、師匠の圓朝について寄席をすましてから其の家へ行く。すると師匠は懐から大きな財布を出す。そしてさらさらと音を立ててお金の勘定をする。自分の收入なのだ。それは當

時として随分のタカであつたらしい。若い圓右が思はずそれを見ると、圓朝はきまつてから云つた。「これがほしいか。ほしいだらう。ほしきや藝を磨け。」圓右はさう云はれると、俺もあんなにお給金をとれるやうになりたいと自然に藝を覺える氣になつたと云ふのだ。

序に云ふと、この圓朝は、文樂のある太夫の話に随分の義太夫の理解者であつたさうだ。高座で名人と云ふ話が出ると、當代の名人は大阪では豐澤團平さん、これこそ本統の名人ですと云つて、襟を正して推賞したさうである。その詞をはく藝道の大家である。この圓右に說いた詞はこれで一理はある。圓朝はさう云ふ方面に積極的に進ましたわけだ。そして津太夫はその反對と云ふ點で相違してゐる。が、兎に角、圓朝が死んで長い年月の後の現在に於てすら、津太夫は圓朝よりもずつと後れた非現代的な教へをその門下に述べてゐるのだ。嘗て文樂にゐたある太夫はしみじみ云つた。「あすこだけは世の中を諦めてしまねばゐられません。」又云つた。「あの太夫の修業をやり通す人は、身體からして人並みと違つて出來てゐねばなりません。考へも勿論さうですよ。」津太夫の教訓と云ひ、この會見者の述懐と云ひ、結局、文樂は一種の修道院と云つて強ち誇張でないやうである。

四、文樂の沿革

今の文樂の生ひ立ちは比較的曖昧である。私は大阪でいろいろ調べたがかなり、不得要領であつた。併し、一寸云つたやうにその起りは阿波の興行師植村文樂軒から出てゐるのは確實だ。「義太夫大鑑」などによると、文樂軒は寛政の半頃（今より百三四十年昔。）今の御靈社内に文樂軒の芝居（人形淨瑠璃の小屋の意味。）を作つてゐる。後、文化に入つて更に博勞町稻荷にも同じ文樂軒の名で芝居を作つてゐる。この二つをいづれも文樂軒の芝居と呼んだらしく、それが今日の文樂の名稱となつたのが一般の結論である。最近の良書、音樂學校から出た「邦樂年表」を見ると、右の寛政期に御靈社内芝居、文化期に稻荷境内芝居がのつてゐる。大體に「義太夫大鑑」の說に近いからそれに大差なきものと思はれる。が、これは更に調べて他日遺漏なく發表したい。併し、二年前燒失した文樂と云ふだけの意味なら、それは明治十七年九月に出來た。これが世に云ふ文樂座の明確な前身である。それが不振その他の事情で僅かの興行だけで、後は松島文樂座その他であけたりしてゐる。が、二十年一月一日から再び元の御靈神社の文樂へ歸つて來た。そして大正十五年十一月廿九日、十一月興行を打上げた翌日燒失す

る迄、改築的手入れはしたが此の間四十三年續いてゐたのである。
　但し、右の十七年九月の文樂座開場式の興行當時、後の攝津大椽の越路太夫が既に紋下で「寺子屋」を語つてゐる。別に、「三番叟」が出てゐるが、そのツレに讀めないやうな細字で常子太夫として番附にのつてゐるのが、後年の名人越路太夫である。

五、文樂で古い人々

一、衰運にある文樂は、近年、太夫三味線人形に續々と古老を失つた。最も古い物が缺き、老大家がゐるべき筈の文樂が、案外さう云ふ點では惠まれてゐない。で、今の辨天座による文樂で一番の年長者は、人形遣ひの吉田辰四氏である。安政二年十二月生れ、當年七十三才になる。大阪市天神橋筋三丁目で生れた。が、この場合の遺憾事として、このよき老人は文樂系と云ふより、元來、堀江座系統の人の點だ。即ち、明治八年（氏時に廿一才。）堀江座で三代目吉田兵吉門下に入り、兵四と名のつて人形の道へは入つた。同十七年から博勞町の彦六座にゐた。同座が廿一年に燒失した後、その後身の稻荷座、明樂座、堀江座などに出てゐた。三十三年に堀江座が新築の時、三代目吉田辰四と改名した。引續いて同座と運命を共にしてゐて、最近の近松座の晩年頃迄出勤した。それから大正三年に文樂へ加入した。もし氏が文樂側の人であつたら、古老の尠い文樂ではただ榮ある字引であり得たと思ふ。が堀江座系であると云へ、五十何年の生活上で、文樂に緣のある經驗は乏しくない。今の古靱太夫の先代、初代豐竹古靱太夫は明治初期の有數の名人であつた。太夫として名人的逸話はかなり傳へ殘されてゐる位だ。併し、餘りに名人氣質に偏しすぎた性格から、正に藝道の成熟期の五十三才で御靈神社裏、土田の小屋で大道具の通稱かち德なる男に殺されてしまつた。辰四氏は當時その現場に居合はせた唯一人の目擊者である。この斬殺事は明治初期の斯界で第一の椿事として語り傳へられてゐる。が、その實相はかなりいびつなものになつてゐた。私は漸く辰四氏から當時の實話を聞く事が出來た。その「生き證據」の話は後の今の古靱太夫の項目で述べたい。

二、辰四氏以外、純粹の文樂の生え拔きと云ふ意味では、周知の如く今の紋下津太夫が一番古い。勤續四十五年になる。當年六十才。明治十七年十一月、即ち、文樂がその前の九月に出來たのだから、今の文樂出來後殆どすぐ文樂へ入座したわけになる。十四才で故濱太夫の門に入つた。そして濱子太夫の名で

大序の末へは入つた。師の濱太夫が死去したため後に先代津太夫の門下に入つた。

三、次に古いのが津太夫の三味線鶴澤友次郎氏である。右の十七年に出來た文樂が、松島へ出開帳をしてゐる明治十九年五月に、鶴澤小庄の名で三味線の最下位の番附にのつた。時に十三才、當年五十五才、勤續四十三年になる。

四、次が竹本叶太夫である。この人は始め三味線ひきで十五才の時、鶴澤叶吉となつて、同じく斯道の末席に加はつた。時に明治二十年一月、當年五十六才で勤續四十二年になる。

五、別に、表方（東京の出方）兼人形小道具方の肩書つきの藤吉氏。本名藤田外吉、この人は明治二十九年に文樂座へ表方としては入つた。勤續三十三年になる。本年六十五才。文樂のこの方面で一番古い人である。

この人に右の肩書がついてゐるのは所謂「とやぶれ」をするからである。それで特にここに紹介した。文樂の太夫が床へ上る。と、「よう／＼何々何々太夫様――」と獨得の眠いやうな聲で小屋の表から聲を入れる。その主任である。これはかなり練習の入るもので、近年はこの人が得意である。

御靈文樂時代に向うの客が木戸口へは入る。と、木戸の係りが「一枚、二枚」とお客の數を札の呼び方の枚數で呼んだ時があつた。肝腎のお客を皿みたいに何枚何枚と呼ぶ。そして自家の太夫には「とやぶれ」で何々太夫様と様づけにする。決しからんと云つた人さへあるさうだ。が、ある古書に。

「淨瑠璃太夫の號は、院中に召されえい聞ありしとき、假りに五位を給はりしに起れり。」とある。

又、「太夫は五位の通稱なり。凡て公卿の息は童形にて五位なれば、無官の太夫などと云へり」（倭訓の栞。）

このやうに太夫の名を尊ぶべき歴史があるので、様をつける。つまり、太夫の位に様をつけるのみで、その太夫の本人には様づけにしてゐるのではないと云ふ理屈になつてゐる。藤吉氏はこの意味で、一時、文樂に様の撤廢說が出たが、今でも様をつけてゐる筈である。氏の特徴は片目がぎろりと光つて大きい。文樂黨はよく知つてゐる筈だ。私など子供時代から幾度氏の案内で文樂の一隅に座した事であらう。

六、口上の桐竹紋五郎氏。十六歳で淡路の人形遣ひの道へは入つた。二十二歳で文樂へ入つて勤續二十九年、本年五十歳である。これは人形遣ひの役を勤めつつ、別に、口上を勤める。床がぐるりと廻つて太夫が代る。と、上手から黒衣の儘出て來る。そしてぶつ切ら棒に「唯今の切、相勤めまする太夫竹本津太夫、東西々々。」と云つて引込む人である。この云ひ方が小

円で、金釘流の字のやうに、ぼきぼき味もそつけもない點が特色になつてゐる。が、この口上には一種の構成があつて、どの太夫からも所謂つけ語をする慣例があるさうである。「とやぶれ」の藤吉氏と共に、文樂の二つの變つた仕事である。そしてこの二人が相當古い點が、何となくその仕事に文樂趣味を豊にしてゐる。

もう一つ。忘れてならないのは文樂のおはやしである。舞台下手奥で、芝居に似て非なる下座をやる。あれが全部一人の業だ。笛、太鼓、鉦などなんでもかでも一人でやる。はなし家の一人芝居みたいに一人でいろいろやるのだ。これは三代目小川淺丸なる爺さんが、黙々として多年文樂でやつてゐた。名物であつたが大正十四年二月に七十四歳で死んだ。十三歳で文樂の斯道へ入り、一時、彦六座に出はしたが、文樂に多くゐた。約六十年この仕事をしてゐた勘定になる。そしてこのおはやしは大變な義太夫通である必要がある。はやしはすべて急所に入れるものだけに、義太夫的知識が十分でないと勤まらない。それがいよいよの所で、一時に一人で笛、鐘その他の澤山のはやしをやる圖は實に手が五六本ある感じである。文樂中の第一の奇觀である。で、人形遣ひよりは却つて義太夫的方面が明るいさうである。今はその一子彌三郎氏が淺丸氏死後これを受けついである。當年五十歲、氏も亦九歳の子供の時から斯道に入つた人である。（つゞく）

新一里塚

弱さ強さ

田山花袋

△

この間も島崎君と逢つて話したことだが、よくまア此處までやつて來たといふ氣がする。刹那的に考へて見れば、それは何でもないことであり、そんなことを考へるだけ年を取つたわけだらうが、この人生の堆積といふものは不思議なものだ。簡單に埃塵とかをりとかかすとか言つて了ふわけにも行かないやうなところがある。そしてそれが常に心や身に影響してゐる。やつぱり捉えられまいとしても捉えられる。またその捉えられる形がかへつて自然であるといふやうにも考へられる。

この堆積についての取扱ひ方が、人間としてこの人生に生きて行く上に非常に大切なことではないだらうか。そんなことを此頃私は考へてゐる。堆積の中のかすとか、ほこりとか、または襤褸とか、さういふものを絶えず取去つて、そしてその必要なもの（堆積中の）だけを保留して、そして常に新しくなつて行く〳〵新しいものと舊いものとをうまく整理する。それが一番大切なことだと思つてゐる。

それにつけても現在といふことは面白いことだ。それはたとへて見れば、眼の視力の幅見といふものであらう。中心になればなるほど物がはつきりと見える。そしてそれが離れれば離れたほどぼんやりとなる。そしてその幅の後が堆積であり前が空間である。その幅の中の中心に絶えずその身がゐるといふことは容易なことではない。しかし私たちはそれを目標にして進まなければならない。

△

それから波狀狀態と言つたやうなもの、これは人生に常に動いてゐる。そしてそれが細かいいろいろな力の震動見たいなものに由つて絶えず動かされてゐる。まア言つて見れば波だ。潮だ。そしてそれもいろいろなものの力で或は高く大きく或は小さく動く。私たちは後を振返つて見ると、ことにその起伏の大きく且つ烈しかつたのを感ずる。芥川君の死などは、さういふ意味で考へて見ると、いろいろなことが言はれ得るだらうと思ふ。あの波をもう一つ越したら、もつと別な世界がひらけて來はしなかつたかと思ふ。私などでもあゝした心の波に翻弄された時が度々ある。世間といふ寄せ波と人間といふ引波とが衝突したやうな場合に、よくあゝした風が起る。

△

次に此頃では、かういふことが頻りに考へられる。世間と一致出來ない心。世間といふものの正體。または世間といふものの正體がわかつて來たためにそれに動じない心持。たとへば、年を取れば年を取つたやうに世間が扱ふ。六十近くなれば六十近い翁のやうな心持を持たなければいけないといふ。さういふ世間心とこの自分の心とがいかにくひ違つてゐるか——これがかなりに大きな問題となつて私の心に橫つてゐる。何故老いたら老いたやうにしなければならないのか。老いても心が若ければ若くつて好いではないか。いくら若い女を相手にしたつて、相手が承知なら、それで好いではないか。年を取つたから氣がねをしなければならないといふわけはないではないか。かういふ氣が私には常にしてゐる。從つて秋聲氏のことなんか何も年を取つてゐるから何うのかうのつていふ必要は少しもないと思ふのである。しかしさういふことを考へるだけそれだけ昔よりも老いてゐるわけになるのかも知れないが——。

△

私は今でもかなりに強い反逆を心に感ずる。たゞ昔のやうにそれを文字にあらはさないだけだ。何故なら、それをあらはしたところで結局個人と個人との水掛論に終る場合が多いからである。水掛論ほどつまらないものはない。議論も好きさらいまで押したり押されたりするのでは、それはもう議論ではない。だまつてゐる方が好い。議論とか批評とかいふことには、多少なりとも、互ひ依估地ばかりでなく、是を是とし非を非とする公明な心持を持つてゐなければならない。批評や感想その他へたの

も結局はそのためだと思ふ。自分の利害よりももつと本當のところを目さしたものでなければいけない。

△

この頃は弱さの強さといつたやうなことを非常に感ずる。世間は弱さの強さに押されてゐる。私たちもさうしたことを非常に高調したことがあつた。飢餓に比すれば米のかゝけを拂はないくらゐなことは何でもない。一人の人間の飢えるといふことは大事件だ。こんな風に言つたこともある。ところがそれが今の世間には非常に多くあるやうである。郊外に閑居してゐる私の體にさへさうした氣持が感じられて來る。そして一種不測な危惧をさへ覺える。かうしたことは私の少年期にはつひぞなかつたことのやうに考へられる。現に、支那の列國に對する形なぞもその一例に引くことが出來やう。また最近の滿蒙問題なぞもそれに引いて來ることが出來る。それに對して、強さの強さは何う出て行くか。果してそれに對抗するだらうか。それともその弱さの強さと妥協するだらう。私は今年も注意してそれを見てゐたいと思つてゐる。

夢を追ふ

生方敏郎

私は今不惑と知命の間にゐる。丁度旅の途中に在る樣な心持ちがする。可成り長く旅して來た。色々な所を過ぎて來た。併し前途が未だ相應にある。と言ふ氣がする。

私の前途は暗くない。私の過去が明るかつた樣に前途も亦明るく思はれる。私は險阻な道を經て來たか？と自ら問ふて見る。自分だけでは相應に險阻な道をも經て來た樣に思はれもする。そして只微笑する。

長閑な日當りのいゝ花の咲いてる平坦な道を通つて來たか？と自分に訊いてみる。そして私は微笑する。

私は又前方を見る。それは遠く霞の中に隱れてゐるが、別に恐ろしくはない。前途にはどんな危うい場所が有るか？又どんな面白い所が有るか？それは危い所も面白い所もあらうけれども、危いとて面白いとて私はそんなに恐れもせねば驚きもしなからう。

前途の底が知れてゐれば安心はつくだらうが張り合ひも無からう。さうは思ひ乍らも何だか前途は安心出來るやうであり、又張り合ひが無ささうでもある。私の前途は何となく明るい氣がする。

私は人生に退屈して來た。努力、心配、歡喜、哀愁、みんな私には空しく思はれる。私は只靜かに暮し度い。心を亂されずに暮し度い。靜かな片附いた部屋で讀書でもして日を暮し度い。いやそれよりも私は穩かな田舍道を一人で散歩して暮し度い。だが私はそれよりも暖かな部屋で柔かい布團の中にもぐり込んで手足をふん伸して眠り度い。何時迄も、そして深く眠り度い。

炬燵に當り乍らふと思ひ出した事は、或牧師の死である。元日と言ふと弟子共は何時も其處に集つて屠蘇などを飲んだからだ。私はそれをふと思ひ出した。別にそれが悲しい譯でもないし又淋しい譯でもない。只あんな事もあつたとその時分の事が目の前に浮んで來るだけだ。その時分の友人の中にも死んだものがぼつ〳〵ある。まだ生きてゐる者もあるが、遠くに住んだり又近くにゐても余り親しく往復もしてゐない。思ひ出せば懷しい樣でもあるが、と言つてまさかその近所迄越して行き舊交を暖めて見ても致方あるまい。別に今更らしくそんな事をしないでも、お互の友情に變りは無いのだ。今は會はねばならないと言ふ程でもないし、又永く無沙汰してゐても辛いとか困るとかいふ譯ではない。會へたら嬉しいに違ひなからう。

死んで行つた友人達の事を思ひ出してみると、どうも死んだとは思はれない。まだ何處かに生きてゐる樣な氣がする。彼等が特に若死にをしたと言ふ氣がしない。彼等はその生涯を完成して行つた。又自分の生涯を顧ると、此の先まだ生きられるとした所で今別に未完成だとも思はれない。私はよく人に向つて「なあに、これからだ」と言つたりするが、實際それは一種の口癖であるらしい。これからどうしなければならないと思ふ譯でもない。これから何かしなければ私の生涯が未完成で終ると思ふ譯でもない。今ある借金を拂はないで死ぬとすればそれは不徳義だらうか？そうでもあるまい。藝術だつて同じ事だ。創作するだけのものを創作しないで終へば私は申譯ない譯だらうか？又は殘念だらうか？そのどちらでもない。要するに藝術も借金と同じく拂つても拂はないでも何うでもいゝ事だ。

生涯の間に金儲けをしてもよし、又しなくもいゝ。そして金儲けと藝術と何も變つた事はない。戀愛も亦同じだ。

金儲けと戀愛と藝術とどれも私は好きだ。過去に於て未だ不足だと言ふ譯はないが、併し此の先もつと手が延ばせるなら

ば伸してやり度い。

此の頃どうも世の中が平凡になつた氣がしてならない。と言つて自分は今年の間に何か波瀾を起さなければ止まないと云ふ冒險慾が強くなつてゐるのでもない。

でも私は何物も怕い譯ではない。少し怕いものにでもぶつかつて見度い樣な氣もする。

要するに人間の仲間と云ふものも、たんと面白いものではないが、併し憎くもない。私は人類愛だの博愛だのそんなよまい肩を並べる氣になれない。只戀愛だけは具體的なもの丶やうな氣がする。

私の生涯は幸福だつたか？それともまた不幸だつたか？そんな事は到底決められるものでない。だが私は少し不滿が有る。併しながら不幸だつたとも考へられない。

私は十五年間も幸福らしく見える家庭生活をして來て、今は獨身者となり子供達と暮してゐる。過去を振返つて見ると只一場の夢見たいな氣がする。樂しいにせよ苦しいにせよ夢は夢だ。今の生活はその夢から覺めて又他の夢へと這入つてゐるのだらう。

要するに人生は昔の人の考へた通りやはり夢の續きだ。と私には考へられる。

除夜の感

相馬御風

田舍に移り住んでから、年末とか年始とかいふことが、妙に私の心を動かすやうになつた。

まる十二年、私は年末と年始とを、他のどこの場所でも送り迎へしなかつた。同じ此の土地で、同じ此の家で、私は既に十二回往く年を送り、來る年を迎へたのであつた。

此のあたりの大晦日の夜の靜けさは全くいつて見やうもなく快い。日が暮れ切ると、大概の家が入口の大戶を締めてしまふ。商家も此の夜だけは店を閉ぢて休む。そして家族全體が一室に集つて、所謂「年とり」の膳につく。しめやかな團欒が夜更けまでつゞけられる。折から雪でも降つてくれると、一層そのしめやかさが加はるのである。

やがて寺々で撞く除夜の鐘の音が、靜けさを破るよりも、寧ろ一層靜けさを深くするやうに響いて來る。その時刻になると、私達は多くの場合一年に一度のそのしめやかな晩餐を終つ

て、爐邊に又は炬燵に暖をとりながら、何となくいつもと異つた溫かな氣持で話し合つてゐるのである。

年取りの酒もりおへてゐろりべに子等とわが待つ鐘の音かも

百八の鐘やがて鳴らむその音の一つを聞かば寢にゆけ子等よ

浪の音聞きつゝいつか眠りけり年のおはりのよるの炬燵に

私が曾てそんな歌を詠んだのも、さうした歲末の夜の靜けさの中に於てゞあつた。

それにしても、さうした年の終りの靜けさの底にあつて、私は幾たびわが生の孤獨に感じ入つたことであらう。初めのうちは何かと話し合つてゐたこどもたちも、妻も、夜が更けるにつれてつぎ〳〵に眠氣を催して來て、やがてつぎ〳〵に床にもぐり込んだり、又はうと〳〵と居眠りを始めたりする。その後に私はいつもたゞ獨起き殘つて、靜に自分の心の世界に閉ぢこもるのであつた。而も最後に私の心のおちつくところは、妙に深さの知れない孤獨感の外にはなかつた。

いふまでもなく、さうした場合には、誰しもさま〳〵な過去の追憶に驅られずにはゐないであらう。また將來に向つてのさま〳〵な願望や、想像に動かされずにはゐないであらう。私とても同じく自分の過去に對し、また未來に對するさま〳〵な思念をつぎ〳〵に心に描くのであつた。

しかし、いかなる色彩でも、永い間それをぢつと見つめてゐると、つひにはすべての色が消えてたゞ白の一色に歸してしまふと同じやうに、結局私の心のおちつくところは限りない孤獨感の外にはなかつた。

過去を顧れば憶ひ出のフイルムは果しもなくたぐられはするが、結局自分の心の眼の底に殘る自分の姿は、空漠な曠野の中をたゞ獨あてもなくさまよひ歩いて來た孤獨な旅人の姿に外ならない。更に又未來を望めばそこにさま〳〵な願望も湧き、さま〳〵な想像も描かれはするが、結局それらの底から最も鮮やかに浮び出て來る自分の姿は、過去に於けると同じく孤獨なる永遠の旅人のそれに外ならないのであつた。

生れて來た自分の姿。死んでゆく時の自分の姿。結局私といふ一個の存在の本當の姿は、さうした大自然の前に投げ出された孤獨なもの〻姿に外ならない。一年のおはりの夜の靜寂の底にあつて、さま〳〵なおもひに耽つた後で、私はいつもさうした孤獨な自分の姿に眺め入るのであつた。

しかし、私の心がさうした深い孤獨感に徹した時に於てのみ、私は本當の靜けさと、本當の安らかさとを感ずることが出

來た。それは決して虛無の世界ではなかつた。むしろその時に於てこそ、私は天地と一枚になることが出來たやうに感じた。さうした孤獨感の底には、もう何の不安も、何の焦燥もなかつた。悔恨も、不滿も、願望も、期待も、歡びも、悲みも、凡て消えうせて、私の心はたゞ限りない寂寥感に充されてゐた。

やがて百八の鐘が鳴り終り、時計が十二時を報ずると、そこにはもう新らしい年が來てゐた。しかし、さうした場合の私にとりては、舊い一年が去つて新らしい年が始つたといふやうなことは、何の意味をもなさなかつた。そしてさびしさの極まるところ、そこはたゞほのぼのとした靜かな眠りがあるのみであつた。

こんな風にして私はこゝ十年あまり年の終りの夜を送り、年の始の朝を迎へて來た。いつかは又こんな風にして死んで行くのであらう。

しかし、天地の前にかうしてポツリと唯一人投げ出された孤獨な自らの存在を見つめることが出來た時に於てのみ、私は眞に救はれたやうに感ずるのである。舊い年が往き、新らしき年が來る――そんな事が結局さうした寂寥感の前に何をか意味してゐよう。逝く事を悲むおもひ、來る年を迎へる歡び――そんな感じは、年一年と私の心から遠ざかつてしまつた。

寂寥の底に眠りがあり、眠りの底から夜が明ける。

夜あくれば森の下いほからす鳴く今日も浮世の人の數かも

いかにも「けふも浮世の人の數かも」である。目が覺めると、そこには又淋しい「今日の生」があるのであつた。而も其の生きることそのことの淋しさこそ、私を本當に生かしてくれるのであつた。

常綠のゆづり葉
――の色を愛す

近松秋江

お正月といふものは、何となく樂しいものである。勿論覺めた考からいへば、「元日は冥途の旅の一里塚目出度くもあり、目出度くもなし」といふ、一休和尚の狂歌の眞理が道破してゐるとほりであるが、今更そんなことを思つて、故意に苦蟲を嚙み潰したやうな氣持ちになつてゐたとて爲方もない。と、いつて、四方八方から年末の債鬼に責められ、味噌こしの越すにこされず、越されずにこすといつた四苦八苦の苦しい年の瀬を、自から欺いて樂しいものに思つて居らうとしても、それは畢竟

空虚な、寂しい感じしかせぬ。

まあ、どうか斯うか、そんなことのない限りはお正月は樂しいものに思つて年を迎へたいものだ。さうするのが、生きてゐる限りは幸福である。生きてゐないつもりなら、強ゐて不愉快なものに思ふのも可いが、既に生きてゐるなら、生存を肯定してゐるなら、今更ら、そんな愚痴や野暮をいつてみたところで爲様もあるまい。

つい昨夜も夜中にふと眼を覺まして、一時間ほど眠れなかつた際、正月が目前に迫つてゐることを思ひうかべて、そゞろに少年の頃のお正月が遠く偲ばれた。私は、妙に、このお正月の頃になると、英國の自然詩人ウオツウオースのこと、この詩人の有名の詩篇

Intimations of Immortality from
Reflections of Early Childhood

「幼時を憶うて靈魂の不滅を知る」

といふ詩を讀んでみるのである。

少年の頃、田舍に居て迎へた新年は、たゞ樂しいものに思はれた。「田家の新年」といふのは、たしかに勅題の歌詞にも詠まれたことがあつたやうに思ふ。お正月の飾りには必ず橙とゆづり葉とがなければならぬものとなつてゐて、その橙は私の家の庭に二本あつたが、ゆづり葉の樹はなく、私の里から、十七町離れた、山懐ろの部落の辺鄙な家に、その大きな樹があつたので、隣の子供と年末には定まつて、よく、もらひに行つたことを覺えてゐる。然にも「冬の日」を愛する心持ちがよく見えてゐるが、冬の日といふものは、何となく好ましいものである。その冬の日の閑かに、暖かに當つてゐる山裾の緩下道を伴ふて、渓谷の、竹林を背負つた家の籬落にゆづり葉の常緑の厚い葉が繁つてゐるのが、私には、子供心にも何となく懐しい、好もしいものに思へた。これは、この感想の主題とは、必ずしも直接に關係のないことのやうであるが、ある感覺的にそれがお正月の氣分を幾分か表象してゐるやうに思へてならぬのである。

それから、これもお正月とは直接關係はないが、冬至の柚湯といふのが、私には、季題趣味ではあるが、懐かしい情趣を何となく唆られるのである。これ等も、引つくるめて「冬の日」の情懐の景物の一つに入れられる。

何も斯も、人生のあらゆる行事をノンセンスにしてしまつたところで爲方もあるまい。そんな人は、生きてゐて、くどくいはずに、颯々つと死んでしまへばいゝのだ。

少年の頃、故郷の生家で迎へたお正月の無邪氣に樂しいものであつたに引換へ、二十代を過ぎ三十代を中心にした中年期の正月は、毎年々々、大抵苦々しく、殺風景の氣持ちで送迎した。すると、近年、子供が出來たりしたために、又何となく自分の少年の頃のお正月氣分が豐かに蘇つて來たやうな心地がしてゐる。これが即ち、前いつた「幼時を憶うて靈魂の不滅を知る」といふので、自分の老いて行くのを忘れて、子供の成長するのが待ち遠く樂みである。自分が幼年の頃、兩親や兄弟の中にあつて温かく懷しい氣分で正月を迎へたことを思ふと、今は親として、自分の子供等に、せめて樂しい氣持ちでお正月を迎へさせたいと思ふ。

浮世の波風は、この先き、どんなに強く吹き荒ぶか分らないが、自分が經驗して來た、人間生活の苦患を、さうであつたからといつて、今から悲觀して待つてゐるにも當らないと思ふ。そんな考へでゐるところから、近頃常に新聞で見る、自分が死ぬので、頑是のない三つか五つの幼者を先づ絞殺して置いて死出の道連れにすることに結着するのである。その際の親の心は實に悲しい。決して無情でさうするのでもなく、無慈悲でさうするのでもない。親として慈悲憐憫の心は、その場合溢れてゐるのであるが、一寸した心の向け方の狂ひから、そんなことになつてしまつたのだ。實に、子待つ親の心は悲しい。古來、ラファエルの聖母の名繪が人間性に不朽の靈念を湛えてゐたり、稚兒觀音の御像が崇高な畫題であつたりする所以である。これも亦たお正月とは全く關係のない感想のやうであるが、正月といふ一年を通じての最大行事の悅びを抽象的にいつてみれば、生きる者、更に又、これより愈々生きて行かんとするものの悅びを表象したものであらうと思ふ。

私も、どれ、年末には、又、暖い色の黃橙(オレンヂ)の實つた伊豆の海岸に行つて、子供とともにお正月を迎へようかな。

私には、もう、松飾りの中を、帶を結ばないで祝儀着を着た美しい人の行き交う姿に眼を惹かれたりするやうな氣持ちはしなくなつた。暖かい冬の日を背に浴びて心靜に海でも見て居りたい。(十二月五日誌す)

明日への希望

宮島資夫

家を持つてからもう已に十四五回の新年を迎えたが、まだ遂

に門松の一本を立てた事もなければ、齒朶一つを飾つた事もない家庭である。最初にたゞ、因襲打破と、偶像破壊と、生活の第一義を考へて、正月が何が目出度いのだ、などと云ふ、極めて意義ありげで斬新らしく、この平凡な有りふれた理由から、強て門松も建てなかつた。が、その癖、その當時にあつても、正月になると、たゞ正月その事を口實として、友人の家から家を飲み渡つて、甚だお目出度そうな面つきをして正月の半分位を過してゐた。考へて見ると、隨分氣障な愚劣な話だ。この頃でも、門松をたてない事や、鏡餅を——これは供へる場所もないからだが——特別に作る事もない。が然し、子供には凧を買ひ羽子板を買ひ、元日の朝は屠蘇も飲めば雑煮も喰ふ。して見れば矢張り世間並一帯に、目出度いものは目出度いとして受け入れる心持は、同じく持ち合せてゐる事と、自分でもつく〴〵感ずる。

大體人間の生れた事、生てゐる事が目出度いのか有難い事か、若い時にはこんな苦惱に充ちた婆娑世界へ、何だつて親共は無責任に生みつけたのか、然も育てゝやつた恩を思へなどと云はれる度毎に、一方ならない反抗心を燃し立てた。自分でも、最初の小供、二番目の子供位を作つた時には、全々小供に對し申譯ない感じを常に持つた。然るに年を經時のたつに連れて、こちらの考へが違つたのか、或は世の中の苦惱に慣れ過た故であるか、生てゐる事を大して有難くもなく、死を必然く恐れるべきでもないような氣持となると同時に、平氣な氣持で暮せるように幾分かなつて來た。生を全肯定、死を全否定、と道元は云つてゐるが、つまり私は餘りに死を恐れ過ぎ、生活に脅かされ過ぎてゐたのである。先日も、平田だか、本居宣長だかの書物を讀んでゐたら、其の人は、花は咲き盛りたるを愛し、月は圓かなるを喜んだればこそ、花の散るを嘆き、月の欠けたり雲に蔽はれるのを悲しんだのだが、近頃の歌人は、花の散る哀れさばかりを愛でて月の欠けた嘆きを重んずる風のあるのは、如何にも女々しい精神だと云ふような事を云つて憤慨し、兼好法師などを大にやつけてゐたところがあつたが、人生に對する積極と消極によつて、何事に對するにもその態度は異つて來る。生を肯定するものにあつては、一年を過し、新しい年を迎えた事は喜びである。門松は冥途の旅の、などと云ふ歌は、本當に一休が作つたのか作らないのか知らないが、近頃の私は餘りあゝ云ふ歌は好きでない。然し、世の中の人々の誰れもが、本當に生を肯定して生きるが故に、この新しき年を迎える事を喜ぶ時に、生活の苦惱から、この喜びに参加し得ない境遇の人々が、この喜ぶべき時に對して、自ら呪咀の眼を向けるようにな

るのも、亦自ら當然の結果である。勿論、總ての人間がその境遇の、貧富によつて、神經を傷けられず、泰然として、苦樂を超んでる事が出來たら、問題はないのであるが、そうなれば正月も亦、大して芽出度くも、芽出度くなくもなつてしまふであらうし、また人間が一様にそれ程えらくなり切れない限り、年々新年の廻り來る度毎に、世上に幾度の悲慘な出來事の起る事は、我々にとつて、最も悲しむべき社會的過程である。私の如きも現に三四年前の年の暮には餅代もなく、大阪くんだりまで金を作りに行つて思ふようにならず、郊外、玉出のあたりで、餅つきの杵の音を聞て、東京に殘る子供等を思つて、暗澹とした思に捉はれた事があつた。文筆生活などをやる者は、貧乏位は覺悟の前であるし、それに對する態度を常に養ふ事によつて、自分の生活を向上させる事も出來ると信じてゐるのであるが、一般社會に於ける人々の生活、失業等を思ふと、正月なんか寧ろない方が好いとさへ思ふ位だ。

何しろ年の瀬に街頭に立つて見ると、自動車、自轉車、の疾走する間を、眼を血走らせて人が走る。それもたゞ、この年の瀬を過す爲と、新しい年を氣持よく迎えたいと云ふ、單純な希願からだけで、然もそれが、甘く行かなければ、窃盜となり進んで强盜にまでなつて行く。高畠君の云ひ草ではないが全く血と速度の時代を現出してゐるのである。人生を肯定すれば正月は芽出度いが、社會的現實に相對すれば、寧ろない方が好くなつて來る。何れの時代にもそうであるが、これが我々の現實的矛盾であり、社會的過程である。私自身もこの矛盾の過程にあつて解決を要求しながら、自己の無力を切實に痛感してゐる人間である。萬人が擧つて、喜んで迎えられる正月の早々來るのを望むと云つたら、それは餘りにユートピアで、小兒病的だと笑はれるだらう。然し、如何に血と速度の時代であつても、我々は矢張り、その希望を捨てる事は出來ない。人生は悪に充ちてゐる。それも確に現實である。然し、明るい希望も抱いてゐる。これも亦確に現實であるからである。

日の射さない家

甲賀三郎

吉本丙午と口を利くやうになつたのは、彼が講道館に通ひ出してから半年目位で、親しく交際するやうになつたのは、それから一年半程經つて、彼が入段してからの事でした。

彼が愈々初段になると云ふ事を聞いた時には、私は嘘のやうに思へてなりませんでした。と云ふのは吉本は今でこそ、色の淺黒い健康さうな青年になりましたけれども、彼が二年前M大學の制服をつけて、始めて道場に現はれた時には、私は彼が講道館を何かの文學會か、それとも劇研究會とでも間違へて來たのではないかと思つた程で、色の生白い、見るから弱々しさうな、それに身體のこなしから、口の利き方まで、何となく女性的な青年で、どうしても柔道の稽古に來たものとはとれないのでした。

彼は入門は許されましたけれども、私は無論一月とは續くまいと思つて居りました。所が、彼は中々熱心に稽古を勵み、毎日缺かさず出場して、一月經つても二月經つても止める氣色はありませんでした。私は彼に非常に興味を持つやうになりました。色の生白い、肋骨の透いて見えるやうな、貧弱な體格の男が、たつた一人立交つてゐるのですから、廣い道場で大勢稽古してゐる中でも、探せば直ぐに眼につくのです。私は荒くれ男の中に交つて、一生懸命に稽古してゐる彼の姿を見ると、何だか悲慘と云ふやうな氣がしてなりませんでした。

が、熱心と云ふものは恐ろしいものです。寒稽古を一日も休みさへしなかつた彼は、メキ〳〵腕を上げると共に、身體が眼に見えるやうに肉づいて行きました。半年程のうちにもう普通の身體になり、業も相當になつて、私もちよい〳〵稽古をつけてやりました。一年の後には筋骨隆々とした健康そのものと云

ふ頑丈な青年になつて、立派に初段を許されたのでした。私が彼が入段を許されたと聞いて、今昔の感に堪えなかつたのはかう云ふ次第で、無理もない事なのです。

入段後はいろ〳〵の會合で會つたりしますので、自然親しく口をきくやうになりましたが、彼は溫厚な親しみのある青年で、頭腦も中々明晰でした。聞けば學校ではいつも首席を占めてゐると云ふ事でした。

彼の入段後間もない、或日の夕方、私達は肩を並べて講道館を出ました。と、恰度坂の上を、眞白な太い大根を滿載した車が、重さうな轍の音を響かせながら上つて行きました。

『あゝ、大根の季節が來ましたね。』吉本は半ば獨言のやうに云ひました。

『さうだね、之からだん〳〵旨くなるね。』私は遠ざかつて行く實際旨さうな何本かの大根を見ながら云ひました。

『私はね、あゝ言ふ風に美麗に洗はれた大根の束を見ると、いつでも思ひ出すのですよ。實はそれが私が柔道を習はうと、思ひ立つた原因なのですがね。』

かう云つて彼は私を彼の家へ伴つて行き、話して呉れたのが、次のやうなストラインキングな事なのです。

一

霜解けのひどい頃で、それが朝だつたか、夕方だつたか、僅かに二年前の事ですが、よく思ひ出せないと吉本は云ひます。陰鬱な雨か雪かと云ふ空合だつた事は確かで、彼は目黑の淋しい谷間を歩いてゐました。彼は東京に生れて東京に育ち、家も東京にあるのですが、それが神田の裏通りと云ふ繁華な所にあつたので、當時神經衰弱に惱まされてゐた彼は、兩親の許可を得て、態と淋しい郊外の目黑に、素人下宿と云つたやうな所を選んで、下宿してゐましたので、つまりその家への歸り路だつたのです。

そこは目黑では佑天寺と並び稱せられる巨刹E寺の裏で、今吉本の歩いて行く道は、可成廣い野原の右の端を走つてゐるので、ジメ〳〵とした沼とも原ともつかないその大きな野を隔てて、左の方に蜒々と小高い丘が續いてゐます。丘のとつつきにはE寺の古めかしい裏門が、笹藪に圍まれて、しよんぼり立つてゐます。その直ぐ背後(うしろ)には見上げるやうな大樹が二三本箒を逆さまにしたやうに立つてゐます。門の右手には枯すゝきの間から、墓石がチラ〳〵見え隱れしてゐます。

道の右手はもう直ぐに小さい丘になつて、雑木が所々に寂し

さうに塊つてゐます。道の行手にはE寺の丘に沿ふて流れてゐる小流が交叉して、右手の丘に突當り、大人しく又その丘に沿ふて、道に平行して走つて行きます。見える限りの野原、丘、冬木立、寺門、墓地、小流、そんなものが、歩いて行く吉本に森々と寂寞の恐怖と云つたものを與へるのでした。見渡す限り人家は無論、人一人見當らない荒野の中を行くと云ふものは、假令視野の狹い所であつても、夜よりも晝の方が反つて、氣味の惡いものです。吉本は足を早めました。

が、吉本は人一人見當らないと思つたのは誤りであつた事を、直ぐ知りました。道の傍の小流に人影がチラと見えたのです。女らしいのです。最初は洗濯してゐるのかと思ひましたが、だん／＼近づいて行くうちに、それは大根を洗つてゐるのだと分りました。

洗つてゐるのは思ひがけなく、若い女でした。彼女は吉本の近づいたのも氣づかないやうに、手拭で姉さん冠りにした頭を下げて、せつせと手を働かしてゐるので、顏はよく分りませんでしたが、村の百姓娘とも思はれないやうな派手な縞柄の着物を着て、捲り上げた裾の下から、赤い模様の下着を見せて、その下から白い素足をにうつと出してゐる艶めかしさ、吉本は思はずぞつとしたと云ひます。思ひも設けぬ冬枯れの荒野原の眞中で、大根を洗ふ艶めかしい女、それはふと吉本に妖精のやうに思はれました。さう思つて見ると、女の傍に積み上げた、白と緑の鮮かな對照を見せた美しい大根も、無氣味な動物の一部のやうに思はれて、いやが上にも恐怖を募らせるのです。吉本は足早に娘の傍を通り拔けようとしました。その途端に娘はふと顏を上げました。眞白な美しい顏です。

『あつ！』

吉本は一言叫び聲を上げると、一目散に驅け出しました。

半ば夢中で丘の上に驅け上りましたが、そこにはもう百姓家が二三軒見えますし、通行の人もゐましたので、吉本はホッと息をつきましたが、再び引返へして、娘の正體を見究める勇氣もなく、そのまゝ下宿に逃げるやうに歸りました。

彼は下宿の一室で、何回となく食事を執る催促をされながら、茫然と考へ込んでゐました。

大根を洗つてゐた女は彼の死んだ姉にそつくりだつたのです。彼女がきつと吉本の方を見た顏は、今でも彼が時々夢の中で惱まされる、死んだ姉の恨み顏そのまゝだつたのでした。

いかに淋しいと云つた所で、兎に角東京の郊外で、ちよつと丘の上に上れば人家のある所で、夜と云ふのではなし、大根を洗つてゐた女が、死んだ姉に似てゐたからと云つて、大學に通

つてゐる青年が逃げ出すと云ふのは、餘りだと云ふ人もありませうが、二年前の吉本は一見女のやうな優男で、氣も弱く、殊に神經衰弱の氣味で、轉地してゐたやうな際ですから、荒野の眞中で、不意に死んだ姉そつくりの女に會つて、驚いたのも無理はありません。それに彼の姉は尋常の死に方ではなく、自殺をしたと云ふやうな事件があつたので、一層さう云ふ風になつたのです。

吉本の家は前に云つた通り、神田にあるのですが、彼の父親といふのはさる地方の藩士で、祿に離れると共に東京に出て、商賣を始めたのでしたが、もとより士族の商法と云ふ位で、忽ち失敗して終ひ、それからは私立中學校の漢文の敎師になつて、漸く細い煙を立てて、苦しい中から吉本と彼の姉とを學校にやつたのでした。吉本の姉は女學校を卒業すると、或人の世話で、麴町の或る富豪の所へ、家庭敎師と小間使の間位の所で奉公することになりました。吉本の父は始め非常に反對したのでしたが、家計の足にもなり、又出世の蔓にもなると云ふので、姉や母が乘氣だつたので、たうたう行く事になつたのでした。

所が、間もなく吉本の姉は邸の總領の息子と戀に落ちました。この事を聞いた時には吉本の父は、不義者を斬つて棄てると云つて、烈火の如く怒つたさうです。いろ〱中に這入つた人があつて、姉はその邸の息子と正式に結婚する事になつたのです。所が、父は又もや釣はぬ緣は不幸の因だと云つて、頑として結婚を許さないのです。ですが、之も結局宥める人があつて、父も可愛い娘の事ではあり、折れて結婚を許したのでした。

かうして一時は目出度納りましたが、彼女は何と云ふ薄幸な女だつたのでせう。溫良に貞淑に何一つ缺けた事のなかつた彼女でしたが、結局父親の豫言は不幸にも的中したのです。要するに富豪の我儘なのですが、家風に合はぬとか云ふ理由で、間もなく彼女は離緣と云ふ事になりました。吉本は頑固な父親と冷酷な富豪の間に立つて、不幸な姉の爲、どれだけの涙を濺いだ事でせう。ですが、運命は最後の大詰まで、無慈悲にもどんどん進行を續けて行つたのです。

離緣は姉にとつて、死刑の宣告と同じです。何故なら、昔氣質の父は容易に許さなかつた結婚を許す時に、死んでも歸るなと堅く云ひ渡してあつたからです。彼女は美事に喉を掻き切つて、死骸となつて實家に歸つて來ました。

緣家から送つて來た數々の高價な調度品は、父はせゝら笑つて、悉くつつ返へして終ひました。たゞ一つ、彼女の指に光つてゐた、眼の覺めるやうに美しい、大きな眞珠の指輪だけは、

父親は靜かに娘の指から拔き取つて、『之はわしが預つて置かう。』と云つたのでした。

指輪は彼女の夫が莫大な金を出して、彼女に買ひ與へたのでしたが、この指輪の持主は代々不幸な死を遂げると云ふ事が、後に分りましたので、大分氣にしたものがあつて、吉本などもその一人だつたのですが、彼女は別に氣に留めず、むしろ非常に氣に入つてゐたのでした。

指輪を家に置く事は母も吉本も反對で、寺に納めるか、賣拂ふ事を勸めましたが、父は頑として應じません。

『寺に納めても、やがては人手に移る。さうすれば不幸な人間が又一人增えるのぢや。わしの眼の黑いうちは、斷じて人手に渡さん。』父は氣色ばんでかう云ふのでした。

下宿の一室に座りながら、吉本はこんな事を思出してぼんやりしてゐましたが、やがて、だん／＼氣が靜まつて來ると、彼は少し馬鹿々々しくなつて來ました。他人の空似と云ふ事は能くある事だし、若い女が目黑の小川で大根を洗つてゐたとて、格別不思議な事はなし、たゞあゝした情景の中に、動いてゐた一人の女が姉に似てゐたと云ふ事は烏渡氣味の惡い事だが、が、つまりそれだけの話で、敢えて驚くには足りない。それに考へて見ると、姉は死んだ時にすでに先刻見た女より年取つてゐたから、今生きてゐるとすれば、もつと老さんでなければならないではないか。吉本は自分を嘲ける樣に心にかう／＼と拂はうとしました。が、喉にひつかゝるやうな淋しい影が消えなかつたと云ひます。

彼は忌はしい考へを振ひ落すやうにして、食堂に當てられた階下の一室に行つて、遲がけの食事をしたが、

『下寺の下の小川で、死んだ姉によく似た女の人が、大根を洗つてゐましてね、烏渡驚きましたよ。』と、遲くなつたのを辯解するやうに、先刻の出來事を下宿の主婦に話しました。

『へえ、さうでしたか。』

主婦はニヤ／＼しながら合槌を打ちました。

食事をすまして火鉢を圍みながら、雜談に耽つてゐた同宿の二人が、ピタリと話を止めて、吉本の話に聞入つたやうなので、吉本は思はず顏を赤らめました。

二

吉本は大根を洗つてゐた女の事を忘れる事が出來ませんでした。日數が經つに連れて、だん／＼不氣味さが薄らいで、反つて好奇心が增して來るのです。姉に似た女の姿が眼にチラついて、一體どんな家に住み、どんな生活をしてゐるのか、知りた

いと云ふ氣持が、日一日と濃くなつて來ました。

或日、多分あの事件があつてから四五日目の夕方です、吉本はブラリと下宿を出て、E寺の方に行きました。丘の上からダラ〳〵坂を降りて、例の小流の傍に行きましたが、今日は老婆が二人で、せつせと大根を洗つてゐるだけで、此間の娘の姿は見えません。吉本は暫く立止つて薄汚れた大根が、老婆達の忙しく働く手に見る〳〵眞白になるのを、ぼんやり眺めたり、大根の枯葉が澱んだ流を浮きつ沈みつ流れて行くのを、見送つたりしてゐましたが、やがて思ひあきらめて、當もなくブラ〳〵歩き出しました。

彼は流れと丘に浴ふて、うねつてゐる道を辿つて、E寺の裏門に出ると、門の中には這入らず、すぐ左手の草を分けた小徑を、危なかしい足どりで進んで行きました。そこはE寺を含む丘の中腹になつてゐて、上には鬱蒼たる森が擴がつて、見下すと、下は一面の畑で、所々にポツンと人家がありました。

この道は吉本には始めての道なのですが、狹い丘の事ですから、どこをどう行つても、迷ひ込んで終ふやうな恐れがないので、彼は大して氣にせず歩いて行つたのでしたが、やがて小徑は丘の閑味に從つて、大きく弧形を畫いて曲つてゐましたので、吉本は何心なく曲角について曲ると、目の前にヒョイと一軒の家が現はれたので、彼は思はずギョッとしました。

家と云ふのは實に古めかしい百姓家で、藁屋根は半ば腐り、壁は落ち軒は傾いてゐて、鳥渡人の住んでゐる家とも思はれません。然し、徑はどうもこの家で盡きてゐるらしいのです。

吉本は引返さうと思ひましたが、念の爲に家の傍まで行つて見ました。徑はやはりこの家へ來る爲のものらしく、外へ行ける様子もありませんでした。で、吉本は引返へす外はなかつたのですが、近づいて見ると、いかにもこの家の有様が變で、何か人間以外のものが住んでゐるやうな不氣味さが泛うてゐるのですが、それでゐて、何となく中へ這入つて見たいやうな誘惑を感じると云つた風で、吉本は尻込みをしながらも、ぢつと立止つて、つく〴〵家の様子を觀察いたしました。

家全體から來る氣味の惡い感じは、家が半ば崩れかゝつてゐると云ふ外に、何とも云へぬ、ぬら〳〵したと云ふか、じめじめしたと云ふか、得體の知れぬ陰鬱さが、そこへら中這ひ廻つてゐる爲でした。さうしてその理由は間もなく分りました。この家には一年中日がさゝないやうになつてゐるのです。一體どう云ふ必要があつて、こんな建方をしたのだか分りませんが、この家は丘の中腹に建てられたので、後ろの丘を切り崩して、少しく平らな所を造つて、そこを敷地にしてあるのですが、丘の

岸が恰度東と南に切立つてゐますので、つまり東南二方は完全に塞がれてゐます。それから西に當る所には、可成大きな竹藪が茂つてゐます。開いてゐるのは北の一方ですが、そこにも大きな樹が二三本立つてゐると云ふ始末で、殆ど四方が塞がれて、日の眼を見ないと云ふ有様でした。その爲めにヒヤリとした氣味の惡い印象を與へるのでした。

『恰で化物屋敷だ。』

青木はさう呟いて引返へさうとしますと、眼の前の窓から不意に白い顏が現はれました。窓と云ふのは徑に面した、それだから無論北向きの窓ですが、朽ちた雨戸が半分程閉つてゐて、殘りの窓から見える内部は眞暗だつたのでした。そんな所から不意に白い顏が出たのですから、之は青木でなくても驚ろきます。その時に青木はその窓から二三間離れた所に立つてゐたのでしたから、白い顏は可成はつきり見えましたが、その白い顏と云ふのが、又普通の顏ではないのです。その白さが變に不透明な鉛色見たいで、生きた人間の顏色ではないのです。長い病ひで窶れたと云ふ風に、頰はげつそり痩せて、クツキリとした陰翳がついてゐます。髮は蓬々として、一部はバラリと頰に垂れ下つてゐます。それでゐて、多分女らしいが、男か女かはつきりしないのです。白い顏が餘りはつきり出てゐるので、外の部分、例へば首とか胴とか手とか云ふものが、眞黑となつてよく見えないのです。白い顏は瞬きもしないで、ジツと凝て、ぢつと青木の顏を見詰めてゐました。

大根を洗ふ女にさへ脅かされた青木です。忽ちぎよつとよふ我ながら譯の分らぬ叫聲を上げて、逃げ出しました。彼はどこをどう走つたのか、泥だらけになつて下宿に歸つたのでした。

彼は今日の出來事を默つてゐる事が出來ませんでした。

『小母さん、』彼は下宿の主婦に話しかけました。『E寺の裏門の所から、左へ小さい徑を行くと、變な家がありますね。』

『えゝ、』小母さんはうなづいた『崩れかゝつた家でせう。「日の射さない家」つて云ふんですよ。』

『誰か住んでゐるのですか。』

『いゝえ、元は人が住んでゐたのですがね、這入る人にきつと不幸が起るんですの。それで今はもう住む人もありません。一體まあどういふ譯であんな建方をしたのでせうね。あれぢや一年中日が當りつこないんですものね。健康な人だつて、きつと病氣になりますよ。あれぢやね。』

『今日誰かゐましたよ。』青木は云つた。

『えつ、』小母さんは吃驚した『まあ、誰か這入つたのかしら。そんな事はないでせう。』

『でも、確かにゐたんです。』

さう云つて、吉本は今日の出來事を話しました。

然し、主婦は笑つて取り合ひませんでした。

『いやだ。吉本さん、そんな馬鹿な事が。きつと氣のせいですよ。』

吉本はむつとしましたけれども、主婦と云ひ爭ふ氣にもなれなかつたので、そのまゝ默つて終つたのです。

所が翌日の夕食の時に、吉本は同宿の稻田と云つて、目黑の怪しげな商會に勤めてゐる、色の淺黑いキビ／＼してゐる男に冷かされました。

『吉本さん、あなたは昨日「日の射さない家」でお化を見たんですつてね。私、今日早速出かけて見ましたけれども、何もゐませんでしたぜ。アハヽヽヽ。』

吉本は下宿の主婦のお喋りを憤慨しましたが、自分の臆病を愧ぢない譯にも行きませんでした。

『さうでしたか。』

彼は顏を赤めて、言葉少なに答へました。

けれども吉本は殘念でなりませんでした。自分の臆病は兎に角、實際見たものを、作り事のやうに思はれるのは、好い氣持ではありません。彼は勇氣を出して、もう一度「日の射さない家」を訪ねる事にしました。

やはり前のやうに夕方近くでありました。彼はE寺の裏門から、丘の中腹の細道を辿つて行きました。例の曲角を曲る時には、彼は云ふべからざる不安に襲はれました。そのまゝ引返へさうかと思つたと云ひます。然し、彼は臆病な心を勵ましながら、思ひ切つて曲りました。「日の射さない家」は前日に見た通り、陰鬱なジメ／＼とした不氣味な姿で立つてゐました。窓はやはり朽ちた雨戸で半分閉されてゐます。

吉本は家に接近するまで、近づく事は出來ませんでした。前の日のやうに二三間手前の所から、ぢつと窓を眺めてゐました。三十秒、一分、吉本は次第に息苦しくなりました。恐ろしくて耐らなくなつて、多愛もなく踵を返へして、逃げ出さうとしたと云ひます。と、その時に、白い顏がぬつと窓に現はれました。

あつ！と聲を上げるのを嚙み殺して、吉本は危く踏み止りました。前に見た通りの顏です。鉛のやうな不透明な色で、筋一つ動かさない無表情な顏、ぢつと吉本の方を見詰めてゐます。吉本はその不氣味な恐ろしい顏を凝視する勇氣がありませんでした。彼は再び逃げ歸つたのです。

『やつぱり誰かゐますよ。』

晩飯の時に吉本は稲田にかう云ひました。

『えつ、本當ですか。おや、もう一度行つて見よう。』稲田は驚いたやうに云ひました。

然し、翌日の晩飯の時に、稲田は氣の毒さうに吉本に云ひました。

『吉本さん、あなたはやつぱりどうかしてゐるんですぜ。私は今の家中へ這入つて見ましたが、中はひどく荒れ果てゝ、最近に人の住んでゐる様子はありませんでしたぜ。近所で聞いて見ても、誰一人あなたの云ふやうな、白い顔を見たと云ふものはありませんよ。』

『でも、僕は二度まで確かに見たんですよ。』吉本は力なく云ひました。

『不思議だなあ、』稲田は首を捻つてゐましたが、『ぢや、一ぺん一緒に見に行つてみませうか。』

翌日の夕方、吉本は稲田と連れ立つて、『日の射さない家』に行きました。

『全くこの道と云ひ、この家と云ひ、何か出て來さうな、薄氣味の惡い所がありますなあ。』稲田はしみ〴〵云ひながら、窓を指した。『で、何ですか、白い顔の出るのはこの窓ですか。』

と、殆ど、聲に應じてと云ひたい位に、稲田が指したのと同時に、窓にぬつと白い顔が現はれたと云ひます。

吉本はガタ〳〵と顫へて、稲田に寄り添ひながら云ひました。

『き、君、あれだよ。あれだよ。』

所が、稲田はきよとんとしてゐるのです。

『えつ、どれだつてサ！』

『窓だよ。窓だよ。君はあれが見えないのか。』

今日は稲田がゐたので、吉本はずつと窓の近くまで行つてゐましたから、白い顔をはつきり見る事が出來ました。それは永い病に蝕まれたと云つた、痩せ衰へた顔で、確かに女でした。而も氣のせいだか、吉本の死んだ姉にどこか似てゐたので、彼は一層烈しく叫んだのです。

『窓だつて、』稲田は何度も訊きました。『何もゐないぢやないか。』

『き、君は、』吉本はもどかしさと恐ろしさに、卒倒したやうになりました。『あ、あれが見えないのか。見えないのか。』

稲田はすつかり困つて終つたと云ひます。彼は慄れ狂ふ吉本を、腕を抱へて、無理やりに下宿に連れて歸りました。

『どうかしてゐるんだよ。ね、氣を鎮め給へ。ね、』稲田は一生懸命に吉本を宥めました。

翌日一日吉本は茫然としてゐました。彼は氣が狂ふのではないかと思つて、悲しくなつて、止度なく涙を流したと云ひます。然し、彼はどう考へて見ても、あり〳〵と白い顏を見たのです。自分の正氣である事を疑ふ事が出來ません。

もう一度、是非もう一度と彼は決心しました。

『止し給へ。君はどうかしてゐるんだよ。餘り氣をつかつてはいかんよ。』

稻田はしきりに止めましたけれども、吉本は拜まん許りにして、もう一度彼につき合つて貰ふ事にしました。

昨日と略同時刻に二人は出かけました。

「日の射さない家」は昨日のまゝの姿で、陰慘に彼等を迎へました。

突如窓に白い顏が現はれました。

『出たよ、出たよ、君、あれが見えないか。』

吉本はブル〳〵顫へる手で指しながら叫びました。

が、稻田は窓の方はチラと見たゞけで、氣味惡さうに吉本の顏をぢつと眺めました。

『駄目だ！やつぱり俺にだけしか見えないのだ！』吉本は頭の中がめちや〳〵に混亂しました。

白い顏はふと家の中の闇に消えて終ひました。吉本は氣狂ひのやうに窓に飛つきました。稻田は驚いて吉本の腕を握りましたが、この時既に吉本は家の中を一眼見ました。

白い顏はどこかに消え失せて、その代りに窓際には生々しい白木の寢棺が横はつてゐました。線香の煙が一筋ゆら〳〵と棚引いてさへゐたのです。

吉本はグツタリと稻田の腕の中へ倒れかゝりました。

三

二日ばかり吉本は頭が上りませんでした。

吉本は恐ろしくて耐りませんでした。白い顏は無論、白木の寢棺などと云ふものは、稻田は全然見なかつたと云ひます。又常識で考へても、あんな所にそんなものはありやうがないのです。

『俺は發狂しかゝつてゐるのだ。それでなければ誰かに呪はれてゐるのだ。』

二日の間彼は煩悶し拔きました。然し、流石に未だ兩親に訴へる氣持にはなりませんでした。

二日目の夕方、うと〳〵としてゐた彼は恐ろしい夢に醒まされましたが、ふと彼の耳に隣室からの話聲が洩れ聞えました。隣室と云ふのは稻田の室なのです。對手は確かに女らしく、而も

泣いてゐるらしいのです」さうして途切々々に聞える言葉は、姉、指輪、幽靈と云つたやうな言葉なのです。吉本は訳もなく顫え出しました。

やがて、稻田は立上つて廊下へ出たやうでしたが、吉本の室の前に來て言葉をかけました。

「吉本君、這入つても好いかね。」

「えゝ、どうぞ。」吉本は頭を擡げて答へました。

這入つて來た稻田は蒼ざめた顔をして、悄然としてゐました。

「氣分はどうだね、まあ寢て居給へ。」吉本の起き上らうとするのを制しながら、稻田は吉本の枕許に座つて、ホツト溜息をつきました。

「どうしたんです。」吉本は今までに見た事のない稻田の元氣のない顔を、怪しみながら訊きました。

「妙な事が起つたんだ。どうも解せない。」稻田は獨り言のやうに云つたが、「此間の「日の射さない家」の一件ね、あれは僕は君の妄想を笑つたのだつたが、因縁では切れない事になつたんだよ。兎に角、僕は君に紹介したい女があるのだ。委しくは彼女から聞いて呉れ給へ。なに、そのまゝで好いよ。」

さう云つて稻田は隣室に歸つて、一人の若い女を連れて來ました。

一眼見て、吉本は又してもあつと聲を上げたと云ひます。

彼女はかつてE寺の下の流で、大根を洗つてゐた女だつたのです。

「君はこの人を見て驅け出したんだつてね。」稻田は聞きました。

「あゝ、」吉本は力なく答へながら、彼女をつく〴〵見ました。姉によく似た所はありましたが、姉よりもつと美しく、楚々とした温良さうな所が、忽ち好きになつて終ひました。

「徳永蒔子さんと云ふのだ。君の姉さんに似てゐたと云ふ話は、僕は君がこゝの主婦さんに話したので知つてゐるのだが、この人は君が驅け出したので隨分驚いたと云ふぜ。所で今日の話なのだが、あなた云つて下さい。」稻田は女に向いて云ひました。

「はい。」

もじ〳〵しながら蒔子は話出しました。

彼女の話によると、彼女の姉の一家がかつてあの「日の射さない家」に住んでゐたのでしたが、數年前に突如として彼女の姉が姿を隱して終つたのです。家出をするやうな原因も、自殺するやうな理由も少しもないのでした。もし強いて理由を求めるに、彼女は行方不明になつた當時、非常に高價な眞珠の指輪

を、身につけてゐたから、それを强奪する爲に、何者かゞ彼女を殺したのかも知れないと云ふ事でした。

『所が、此頃になりまして、』善子は云ふのです。

『三晩も續けて、恐ろしい夢を見るのでございます。』

その夢といふのは、朧ろながらも「日の射さない家」の場面で、色蒼ざめた彼女の姉が、茫然と北に向いた窓際に座つてゐるのだと云ひます。彼女の指には眞珠の指輪がちやんと嵌つてゐるのでした。

『三晩も續けて同じ夢を見ますので、私は恐ろしくてなりません。それに稻田さんからお伺ひしますと、私の姉の持つてゐた呪はしい指輪が、どうやらあなたのお姉さんの手に這入つたやうでございますし、私があなたのお姉さまに似てゐるとか、何だか、指輪を通じて、何となく因縁があるやうでございますので、こちらへ御相談に上りましたのでございます。』

『徳永さんの話を聞くとね、』稻田は云ひました『どうも君の見たと云ふ白い顏も、君の氣のせいとのみは云へないのだ。何だかあの家に秘密があるやうな氣がする。それにいつか君の話した眞珠の指輪とか云ふのにも、何か關係がありそうに思はれる。一度あの「日の射さない家」へ三人で行つて、どんな事が起るか、實驗して見ないか。』

然し、吉本は一度とあの恐ろしい家に行く勇氣はありませんでした。

『ほ、僕は許して呉れ給へ。』

『うん、然しね、』稻田は困つたと云ふ風に、『心理現象と云ふのか、精神感應と云ふのか、兎に角かう云ふ超自然現象はね、關係者がゐなくては駄目だよ。僕は全然他人なんだからね。現に僕には白い顏が見えなかつたのだから。君、是非來て呉れ給へ。』

『嫌だ。僕は嫌だ。』

『困つたなあ。稻田は本當に困つたやうに、『君ばかりの問題ぢやあないからなあ。徳永さんの問題を解くんだからなあ。』

吉本はそこに蒼ざめた顏をして、ぢつと座つてゐる可憐な善子を、同情に堪へない眼で見ました。彼はどうかして彼女を救つてやりたいと云ふ氣が、湧き出るのを禁ずる事が出來ませんでした。が、彼はどうしてもあの氣味の悪い家に行く氣はしません。

ふと、好い事に思ひつきました。

『稻田君、ぢや、君、あの指輪を持つて行つて呉れ給へ。あの指輪は僕以上の關係者だから、きつと何か變つた事が起るだらう。』

『うん、』稻田は氣のない返辭をしました。『これも好いかも知れない。然し、君が來なくてはねえ。』

吉本は翌日家に歸つて、父の隙を覗つて、そつと例の眞珠の指輪を盜み出しました。さうして、稻田に「日の射さない家」に持つて行つて、彼の姉か、それとも德永善子の姉の亡靈が出て來るか、試めして貰ふ事にしました。指輪を稻田に渡した時に、吉本はほつと重荷を下したやうな氣になつて、忌はしい呪ひから解放されたやうな氣がしたと云ひます。

稻田は迷惑さうに指輪を受取りながら、

『うん、まあ、やつて見よう。』と云ひました。

××××

それつきり吉本は少しも妖異な事を見ませんでした。その代り眞珠の指輪と稻田と善子は彼の前から消え去つて、再び現はれませんでした。

『つまり、稻田の企みなんですよ。』吉本は今は逞ましい腕を組みながら、ニコリとして云ひました。

稻田と善子は前から關係があつたのでした。稻田は偶然善子が吉本の姉に似てゐる事を、吉本の口から聞いて、かねて聞いてゐた眞珠の指輪を奪ふ爲に、巧みに「日の射さない家」を利用して、吉本に恐怖の念を起さして、たうとう指輪を持出させたのでした。「日の射さない家」の白い顔は善子か稻田で、多分交る／＼やつたのでせう。

『指輪は少しも惜しいと思ひませんし、厄介拂ひをした位ですが、彼等に騙されたのが遺憾でした。父もさう云ひました。それで私は神經を丈夫にしなければならぬと思ひました。健全なる神經は健全なる身體に宿ると云ひますから、先づ身體を鍛へる事にしたのです。』

私はさう云ふ吉本の顔を眺めながら、始めて彼の熱心な稽古の理由を知りました。（終り）

原稿贋札説

三上於菟吉

文學が商賣主義といふものから、結局獨立すべきものであるといふことは、理論として何人も肯定するだらう。しかし最も理想的であるべき此の仕事も、文筆家それ自身が衣食住その他一般の必要から解放されてゐない以上、多くの改革家が夢想した社會が生れるまでは、物質から、資本主義から、紙幣から分離して考へることは出來ない。いかなる反ジャーナリズム文人と雖も、彼が親讓りの財産か、法外の閑暇を有する定職かを持つ幸福人でない以上、現代に於いては、文を賣つて紙幣とせざるを得ないのだ。以下、僕が書いて見る意見は、現在の賣文事業を止むを得ざる、然し正當な、いかにも國家に所得税を納入すべき資格を有する一定の職業と肯定して置いての所感である。

さて、文學を、依つて人間が生きるための職業と考へる時、萬事が金の現世だから、さらば、その職業が大凡いくばくの收入を――一般人の好んで用ふる言葉で言へばいくばくの月給をもたらすかといふことを研究するのは順序である。僕は周圍を見渡して、これを大雜把ながら三通りに區別しよう。

A級、原稿四百字詰一枚平均價、十圓以上廿五圓、若しくは三十圓を受ける人達。

B級、同じく五圓以上十圓を受ける人達。

C級、同じく二圓以上五圓を受ける人達。

以下一枚五十錢三十錢位まではあるだらうが、少くとも文士録に登録されてお世辭のいい新聞、雜誌編輯者から（先生）を以つて喚稱される人々が支拂はれてゐる稿料なるものは、大てい以上のやうな程度だ。さればかりにA級の中流で、一枚十五圓平均價の資格を有する作家は、一ケ月百枚書けば千五百圓の收入となり、これは單に雜誌、新聞紙面への登載料にすぎぬから、

たとめて書物にした時の印税、或は上演料、映畫原作料などの雜收入を加へれば、約二千圓の月收となる。B級十圓平均價の人たちにしても、彼が多作家であり、鈍感家であるとすれば二百枚の原稿を毎月作り出すことは易々たるものであるから、雜收入をくるめて、二千五百圓の月收を越ることも多いであらう。極端な多産家または原稿料釣上げ家となつては、月に五千圓を獲得することも難事ではないやうに思はれる。最低收入者、一日三時間の勞働で、優に二百圓の月收を得て居よう。

かくの如き收入は現代の職業として、決して利益少なきものと言ふことが出來ない。ある人々は文士にしてこのやうな物質的幸福を享受するものは甚だ少なく、多くは極度に困窮してゐるではないか——彼等は商人から選まれた一人、これ位なことは當り前だといふだらうが、僕に言はせれば、この社會生活に於いて、文士ほど直接に必要の少ない職業はないゆゑ人數の少ないのも當然で、文士たるが爲めに彼等がどのやうな犧牲を拂つたにしても、落伍者としてのどんな辛苦をなめたとしても、それは最初から判り切つた需要の少ない職業だといふことを覺悟の上のことな筈だから、成功者の人員の多少に問題とする必要がないのだ。

さて、以上のやうな收入は、再び言ふが現代の職業として決して利益少なきものと言ふことが出來ない。しかも驚くべきは、文士は原稿の作成にあたつて、いかなる材料をも、資金をも要さない。彼等は一本のペン、僅少のインキ、及び原稿紙を要するに過ぎない。一本の萬年筆は優に二年役立つだらうし、これが高くて十圓、インキ、及び紙は加算する必要がないであらう。工場はすなはち家庭の一室で、助手をも職工をも、またつさへいかなる機械の据付けも必要としない。彼等を單なる勞働者として考へても、工場へ往復の電車賃をさへも要さない。夏は人なき部屋で、風通しのいい窓の下で、はだかで、冬はぬくぬくと着込んで、暖爐の側で、悠々として原稿紙を埋めて行く。

他のどの樣な職業が、この樣に無資金で成り立ち得るか？總理大臣、巡査、大谷竹次郎、僕の出入りの洗濯屋、あらゆるものを込めて、多少とも資本を投じ、また職業上の物入りに忙殺されてゐるだらう。文士のごとく、勞働、ことごとく收入となるものは一つもあるまい。

そして、かてて加へて、彼等の好都合は、職業上の犧牲の覺悟、責任といふことを不要とする點だ。同じ文作家にしても、雜誌記者又は新聞記者などは、人身攻撃の一事一行をしるすに當つて、いく分かの犧牲を覺悟せねばならぬ。僕が在社しただけで、讒謗となり毀損罪を構成し、秩序紊亂に問はれ、往

々不敬の大罪にさへ該當して鐵窓につながれる。教員は生徒の家からお彼岸のお萩を貰つて首になり、醫者は夜中の往診をこばんで詰責され、告發される。しかるに文士は、それを登載する雜誌、新聞すらあり得れば、何を書かうと勝手だ。事實の摘發ではなく、いはゆる（創作）であるから、どんた馬鹿げたことを書いてもよく、またあやふげたところはどんたにでも逃げて書くことも出來る。駄作であらうと、そのために直接の損害を蒙るのは出版社で、文士はすでに稿料を獲得してゐるから平氣でゐられる。

文士は、恬然としてさへゐれば、それでウマ〳〵世が渡れる。恬然と自分の署名を原稿の題の下に加へる度胸さへあれば、以上の如く、何の資本も要せず、何の犧牲も拂はず、樂々と世が渡れる。

うまい哉、賣文渡世！

● ● ●

さて、讀者よ、僕が、僕自身文人の名簿に名を列しながら、どうして以上の如き所感を述べたかとなれば、文界の形相を視て自ら平らかならざるところがあるためだ。正直に卿等に問ふが、いはゆる創作家、小說家として、本邦の一流雜誌、改造及び中央公論の如きに筆を取る常連諸家で、自ら遇して文士とするに足りるやうな製作を發表し得た作家が、當今果して幾人ありますか？一體に文士とは何だ？文學とは何だ？文學とは生々した、鮮やかな感動を、表現形式を通じて人生に新らしく寄與すべきを職能とする。材料に選擇があり、構成に美があり、表現に新奇がなければならぬ。（昨日）に何もつけたさないやうな文章を記して、文士とは何で言へやう。しかも彼等は自ら目して人生のわけ知りとなし、味識家となしてゐる。出鱈目も、無恥もここに到つてきはまる。

當今の文學を、つまらないと考へてゐる人間は僕のみではない。あらゆる批評家が言ひ、編輯者が言ひ、讀者が言ひ、作家自らもそれを言つてゐる。しかもそのつまらなさがいかなるところから創まるかは考へない。僕に言はせれば彼等の作がつまらないのは、畢竟彼等の人間がつまらないからだ。實社會への智識なく、潑剌たる感受性なく、空想なく、研究なく、ほんの小手先の文才だけでゴマ化すものが多いからだ。實社會への智識がないから取材は狹く、感受性が乏しいから藝術慾が燃え立つ刺戟を受けることも出來ず、空想がないから道途机邊の些事から大波瀾を想出し得ず、研究がないからこれまでの智識でしか考へられず、それを無力な描寫であらはすのだから、彼等の作のすべてが千篇一律となるは當然である。そこへ持つて來て

日本文壇の指導をこゝへ持ち來たすために、かの日本自然主義の古い主張が、いかにももつともらしく今たほ役立つてゐる。すたはち自己身邊以外に取材することは不自然だといふ主張だ。この言葉はあの當時の薄つぺらた作爲文學を討つにはいい武器であつたらうが、理論としても、實際から見ても、こんな主張で文學の職能を律しあたはぬといふことは解り切つてゐるのに、千古の文學史的現象を無視して彼等はなほ呟やいてゐる

ー自分のことしか、人間にわかるものか！

そして、彼等のいはゆる自分のことの、いかに平板で、偏劣で、無智であることよ！

・たい、自分のことそれ自身が、不滅の藝術價を持ち得る場合を考へて見やう。それはその記述が眞の告白の價を、懺悔の價を持つときだけだ。自ら知らざる馬鹿どもよ！この告白の精神が、懺悔の氣持が、さう安々と君達の胸に毎日毎月湧き得ると思つてゐるのか！それは聖なるものの折にふれての凡心への訪れだ。天才の胸にある瞬間瞬間の如く來つて宿るものだ。そしてはじめて、一個の自己身邊の記述が意味を持つ

このやうに、最も困難な自分小說を、現代に於いて最も鈍感な、最も無犧牲な、最もノラクラな人種が試みようとする程、滑稽で淺間しい話があるか。

われ／＼をして、眉をひそめしめるに足りる物々しい宣言のこしてゐる、才氣煥發な佛蘭西の傑れた詩人作家でさへも、あの「近代兒の告白」を、ああ、あの薄い一冊を書くためにも、どんなに悶えてゐるか！

要するに君たちは、君たちとして最もふさはしからぬ仕事をえらんで得々としてゐるのだ。不徹底すと雖も、反省なき作家が反省なき生活の記述をダラ／＼と書きつづけるより以上に笑止ではない。

天才のみが文學にたづさはらずともいい。しかし凡人作家には、またそれ相當た苦行の道があらう。一ばん卑俗な自分小說を、一ばん無難な仕事だ、これならどんな無器用な、どんな物知らずた、どんな工夫力も、表現力もないわれ／＼にもお茶の子さい／＼だ。何しろ、自分のことなら、自分より以上に知つてゐるものはないからなあといふ態度でやられてはまゐつてしまふ。

・　・　・

文士よ、君達の仕事ほど仕合せたものはない。相場會社にの作家がこの世で一ばん安樂な生活だと感じた自分でさへも、拙し、蒔き、肥料をやり、育つものの世話に盡くす心身を勞し、しかも風水の害があつてなか／＼完全な收穫を見ることに出來ないのだ。何度も言ふ通り、君たちほどこの世で[illegible]と勞力無勞力で儲かる仕事はない　せめてもつと工夫だけでも

らして、せめてもつと面白げな、意味ありげな——ありげだけでよい——作を見せて下さい。全く、人間は初値なさを忘れては若生だ！

更に文壇の情勢を、このやうな退嬰的な、怠惰な傾向にもたらし、懺悔僧に惚れたおしやべり娘のやうにペラ〳〵と告白好きな、無恥で醜陋な作家を簇出させたのは、勿論ジャーナリストの罪でもある。編輯者等が、實につかずして名につくの弱きを取りつゞけてゐるにもある。文壇の主潮といふやうなものを盲信して、新らしく來る波を防波堤で遮ぎり、港内の靜かな水の上の眠りをむさぼらうとする點にもある。（先生）（先生）と、あの白粉はげのした年増づらをもちやげて、女主人の目つきを怖れる質屋の番頭のやうに、冒險して首になる危險を怖れてゐる點にもある。意久地なしの編輯者どもよ、作家が何だ！　作家と同格たれ！　否、この資本主義萬能の時代に於いては、資本家代表たる卿等は、作家よりも、一段有力な位置にあるではないか。作家がどんな作を書くにもせよ、發表機關と報酬とをあたへるのは卿等ではないか。何でかの不遜なノラクラ者たちに腰を屈すべき點があらう。

僕はもはや、批評家の排撃または指導が現代の文學をいかんともしがたいのを知りすぎてゐる！　あゝ、現代のやうに批評家の無力な時代があつたか。今や、文壇の空氣を一新するには、毒を以つて毒を制するにしくはないと信じはじめた。そしてこれを刷新する方法はたゞひとつ、編輯者の選擇のみだ。資本家代表の卿等の原稿選擇の方法に依るのみだ。

こゝに於いて、僕はいつも言ふことだが、海外の諸大雜誌の編輯者の、古來諸見家に富んでゐたのを羨望する。

卿等よ、意張りくさつた文士の原稿は、多くは書き上げられた時贋札だ！その贋札をほんものの紙幣とウマ〳〵引き換へられて得々たるは、あんまり氣の利いた話ではないではないか。

・　・　・

記してこゝに到る。

恐らく、讀者は、しからば汝の多産するところのナンセンス文字、これ贋札の最も惡なるものではないかと反問されるかも知れぬ。僕は半ば恥ぢ、半ば誇る。僕、生れて原稿料を貰ふやうになつてから、たつた一枚でも、いはゆる身邊作家の惡作のやうな、意味はもとより、面白ささへないものは書かなかつた。僕は諸君のために、瘋癲して路傍に裸かをどりをして見せ、滿都の哄笑を買ふことに得意は感じるが、自己辯護の告白小說を書いて鼻汁に染んだ紙を諸君の食膳の前に並べて見せるやうな醜態だけは誓つて見せまいよ。

・　・　・

撲滅せよ！無力にして醜陋なる贋札を！

支那の不老長壽

池田桃川

一

山東省の片田舎に、とてもうまい食用蛙がゐる。これを食へば、年老いて齒落ちず、耳目生々として、元氣壯者を凌ぐ概あり、よく百歲の壽を保ち得べしといふ。よつてその蛙の名を問へば、それは若がへると申しますと眞面目に答へられて、あいた口が塞がらなかつたことがあつた。まさかこのしやれの蛙を食つたせいでもあるまいが、同省には、百四十餘歲の高齡を保つて、數年前物故した張門生といふ長壽者がゐた。村の人々も珍らしがつて、神樣のやうに叮嚀に取扱つてゐたが、本人は一向平氣で、眠たければ眠り、食ひたければ食ひ、氣が向けば草むしりなどして、行雲流水のごとく悠々たる生活を送つてゐたさうである。よく人から長壽の秘訣を問はれたが、その度に翁は

「わしは別に長生きしようとしてあくせくしたわけではないが、いつのまにやら、こんなに長生きしてしまつた。今になつてふり返つて考へてみると、わしがこの年まで生き延びたのは、呑氣にしてゐたのと、色事を愼しんだせいじやらうと思つとる、その外にこれと言つて心當りはない」

と答へるのが常であつた。で又さる人が、

「色事はいくつでおやめなさつたか」

と尋ねた。すると翁はカラ〱と打ち笑つて、

「よくは覺えてゐないが、何か八十位迄じやつたように思ふ」

と答へた。尋ねた人は、けゞんな顏をして、

「八十迄も續けばあまり愼しんだ方でもないね」

と語ると、翁は、言下に、

「わしは濫費しなかつた」

と明快に答へて、再び呵々大笑したさうである。この一言は、翁の長壽の一原因として、大いに味のある言葉のやうに考へられる。

神秘の國支那には、數限りない不思議な現象が蔵されてゐる。常識や科學で說くことの出來ない神秘な事實が、山のやうにある。支那のやうに、人事、自然、社會萬般に亘つて奥行の深い、研究してもし盡されぬほど茫然たる古老の國は、外にはない。人間を尺度ではかるやうな科學文明に行き詰つた歐米では、近年俄かに、この奥の知れない東洋文化、東洋藝術、東洋趣味に興味をもつ者が殖へたが、それは人心の歸趨として無理からぬ現象である。こゝに說かんとする不老長壽法の如きも、科學を超越した支那獨特の秘法であつて、科學萬能の現代人には容易に信ぜられないかも知らんが、枇杷の葉が萬病藥として賞讃せられ、蓬萵が日藥として貴ばれ、漢方の復活が、醫學博士達によつて高唱せられつゝある今日、一がいに、これを荒唐不稽の言として嘲笑し去るわけにも行くまいではないか。ましてそれが、神秘の國支那に於ての所産であり、生きた例が澤山あるに於ては、命の惜しい人は、實行すると否とは次の問題として、一應聞いてをいても決して損にはならないであらう。

二

まづ、支那古來の長壽者に就て調べてみよう。

人類に始めて耕漁の道を教へた伏羲大昊以前に於ては、神々は、一萬八千年乃至五千年、三千年生きてゐたと傳へられてゐるが、これは勿論神話傳說の類として信ずるに足らない。下つて大昊に至つては、やゝ慥かな記錄がある。大昊は長頭脩目、龜齒龍唇にして丈け九尺、白毫髪垂れて地に委す、壽百九十四歳。女媧は蛇身牛首にして壽百三十歳。炎帝は鴻身にして牛頭龍顔、生れて三日にして能く立ち、五日にして能く行き、七日にして齒具はり、三歳にして稼穡般戯のことを知る、壽百六十歳などと記されてゐるが、普通支那史の正確なる記錄は、黄帝から始まつてゐるので、その以前の太古時代ともいふべき頃の話は、これも傳說として聞く外はあるまい。

白樂天が九老會を催した時集まつた老人共は、李元爽の百三十六歳を筆頭として、僧滿如が九十五、胡杲八十九、吉皎八十八、劉貞八十七、鄭據八十五、盧貞八十三、張渾七十七、最少年者が樂天の七十二であつた。又同時代の許瑷は、九十九歳の壽を保つたが、長子八十一、次子七十九、末子七十五、これも老人揃ひの親子兄弟が出來上つた。その外、百歳內外の高齢者

は潛山あるが、これ等は悉く省いて、百歳以上の長壽者達を擧げてみよう。南梁時代の韓思遠は百二十で死んだが、一生の中に、七度娶り、子を生むこと十二人、死んだ時、末子が六十だつたが、この子も亦百二十の齢を保つた。同時代の張元始は百十六まで生き、而も九十七で子を生ませた。その子は形が出來てゐなかつたさうであるから、今でいふ流產だつたかも知れない。前漢の丞相張蒼は百十九、瓠の如くまつ白でよく肥えてゐたさうである。妻妾百餘人、一度子を生んだら、二度とその女に接しなかつた。後漢の[illegible]は百二十、明の王世貞も百二十一、唐の王伯照百二十八、漢の竇長生は百三十、李偏裕は百三十三、唐の張道鴻は百四十六、梁の陶弘景は百四十、後漢の周[illegible]は百五十六にして、色艶恰も四十位の壯者のごとく、明の劉京は百七十八、毎朝きれいな水で歯を磨いたさうである。明の正德年間侍御毛伯溫は百八十の老婆を訪ふたといふ記錄があり、五代の太原王仁裕の祖母は、二百で丈け僅かに三尺、眼中の水晶體が碧翠であつた。南宋時代に、浙江省餘姚を去る千餘里の海中浮鵠山には、三百歳の女がゐて、その外百歳を越えた女道士が、四五百人もゐたと傳へられてゐる。魏の華州の刺史畢軌は三百五十、明の孔無は四百、御史金燦に召されて共に飲食したさうである。

有史以來の最高齡者として名高いのは、[illegible]であつて、唐、宋、元の各朝を經、明まで生き、實に八百二十一歳の長壽を保ち、風の如く消滅したと書き殘されてある。又宋の太宗の時、李守忠が旨をうけて南方へ使した時、瓊州で、楊遐といふ一老人に逢つた。年をきくと、わしはまだ八十一にしかならない、内にはもつと老人がゐますと言ふので、ついて行つてみると、驚ろいた、楊の父の叔叔といふのが百二十二で、その父の宋卿が百九十五だ。八十一の孫といふのは、古今に珍らしい。白髮頭の[illegible]爺さんが「可愛い孫」として可愛がられた樣子だ、この世の珍景だつたとは、想像してみてもおかしい。よくもこう長生きが揃ひも揃つたものだと吃驚して、そこらを見廻してゐた李の眼に、鷄の巢みたいな箱の中にねてゐる一人の子供がうつつた。子供にしちや、頭の色が馬鹿に白茶けてゐるので、これは誰の子かときくと、楊は、

「そりや子供じやありません、おやぢですぜ」

と言ふ。

「おやぢつて、誰のおやぢだい」

おやじの意味が分からなかつたので重ねてこう問ふと、楊の返事が面ろしい。

「このお爺さんから凡そ九代の先祖で、年も何もわかりませ

ん」

李は、恐らく眼を白黒させて、二の句がつけなかつたことゝ思ふ。この記錄が嘘か本統かは知らないが、支那のやうな古い神秘な國には、その何百億人のうち、一人や二人、間違つてこんな長生きした者がゐないとも言へまい。而し、かうなれば、長壽ではあるが、決して不老とは言へない。長壽は誰でも欲するところであるが、よぼ／＼の病身では困る。不老が必要條件だ。

さて、以上の長壽者は、どうしてそんな長生きの幸福をかち得たのであらうか。

三

支那人は一般に衛生思想に乏しい。醫學なんかいふものよりも、古來の傳統習慣を信じ、これに依つて生活してゐる者が多い。現代の空氣に觸れた一部の青年子女を除いては、寺廟の靈驗をたのみ、草根木皮にたよつて病を癒さうとする。日の光りもあたらぬ陰氣な古めかしい老藥舖から、得體の知れぬ草根を買つて歸り、それを煎じて飲む。それが何といふ草だか、木の皮だか、本物かにせものか、そんなことは一向無頓着で、習慣的に常用する。その藥の作用が、何時間後に現はれ、効能がいつ分るのか、そんなことも、どうでもいゝやうな顏つきをして、飲みさへすれば直るものと信じ、老舖の門をくゞる。至つて悠長である。こんな風懐は、日本などにも、まねの出來ない老大國民の國民性であつて、無爲にして化する底の詩のやうな生活である。

かういふ傳統習慣によつて生きてゐる支那國民に、科學的の醫學衛生思想の欠乏せるのは當前のことであつて、衛生健康も亦傳統習慣に由つて律せられ、不老長壽は、その尊い體驗より、自然に得られた歸結的の秘法である。然らばその不老長壽は、いかにして得られたかといふに、これはまづ大體に於て、自力と他力との二つにわけて説明を進めねばならない。

こゝで言ふところの自力なるものは、禁慾生活、自然生活を指すのであつて、消極的の健康法である。禁慾生活は必ずしも自然生活ではないが、こゝでは密接の關係があるから、一緒にして話をする。

宋の嘉祐年間に名のわからない（當時はわかつてゐたらうが今日は傳はつてゐない）一老爺がゐた。高齡百歲を越え尚矍鑠としてよく食ひよく談じ、高齡者とは見えぬほどの大元氣だつたので、文簡公は大變これを厚遇し、大事にしてやつてゐた。老爺は常に公の脈をみてゐたが、或る日、いつものやうに檢脈

したが、不同、公は來年の今月今日にきつとなくなられると、不吉な豫言をした。公は一笑に附して問題にもしなかつたが、老爺の豫言は不幸にして適中し、翌年の同月の而も豫言した日より十日と違はぬ日に、公は落命した。このと爺は、六十にして始めて醫を知り、七十にして素問を見たさうであるが、常に髀を撫し太息して、自分がも少し早くこの書を見たなら、まだ〳〵醫を修めず、長生きができたであらうに、見ることの遲かつたのは、返す〳〵も殘念だと言つてゐたさうである。この書といふのは、素問を指したのであつて、素問とは黃帝素問、即ち支那における最初の性慾教科書ともいふべき珍らしい本である。

人間凡夫、色慾のないものはないであらう。たとひ他の情慾たる利慾、權慾、名譽慾等は振り捨てられることがあつても、色慾の本能だけは、どうすることもできないであらう。全生涯の大部分を支配するこの本能が、壽命と緊要の關係があるのは當前のことであつて、これが節制を守るのと、濫作するのとは、勿論一生の長短を支配する。素問は、性慾に對する心得を說いた一種の科學的性典であつて、これには、養生の神術は、男女接觸の法を得ると誤るとに在りとし、五徵、九勢、五傷、時季、年齡等を委しく述べてある。この所說は、今日の醫學の主張と一致するところの極めて傾聽に値するものであつて、決して荒唐なる戲言ではない。要綱を發表することは省くが、要するに性慾といふものに、その方法宜しきを得れば、却つて身のためになるが、これに背けば身を破るといふのが、その主旨である。

禁慾としては、色の次が酒だ。佛教聖典には、飲酒に十六失が說かれてあるが、支那の道德でも、酒は誡めてある。周禮に、儀式に酒を用ゐることが書いてあるが、あれは儀式以外みだりに用ゐることを禁じたのであつて、決して勸めたのではない。書經には、康叔を殷の故地に封ずる時、周公が、死刑を附して群飲を禁ずとあり、又漢律にも、宣帝五鳳二年に禁酒の詔が出で、唐の太和七年にも、國忌日には酒を禁ずとのお布令が出てゐる。歷代の帝王が、釀酒を禁じたのは、支那の土地は天災地變多く、蝗や變亂の害も屢起つて穀物を害し、その爲め生民が生活に苦しむからであつて、酒を造るために穀物がその方へ使はるゝ量は莫大なものである。かように凶る時々に酒禁の令は出たが、解かれたこともあり、許された時もあつて、酒の氣が絕えた時はない。禁酒の問題は別として、前記の長壽者に就て調べてみると、飲酒癖のあつた者は極めて稀である。又わが大阪市から出てゐる高齡者調査をみても、酒飲みは少なく、米國の百壽翁アルバート、チー、ドウも、二十五歲以來、酒を

飲またかつたと書いてある。これは外國のことであるが、亂酒が人壽に悪影響を與へることは、古今東西、その理に相違はない筈である。

長壽を慾する人は、酒も亦禁ずべきである。煙草阿片の害毒はいふまでもない。

現代は、人間の生活すべき社會狀態が、昔とは、思想的にも、實際的にも非常に違つてゐるので、今はむかしのやうに、求職の苦しみもなく、ぶらりとして暮しても行けないから、一切の慾を捨て去るわけにもゆくまいが、以上の如き禁慾生活は、勇氣一つで、出來ぬ筈はない。ある程度の禁慾をして、そうして無理をしない即ち無茶苦茶に名利に戀々たらず、行く雲に身を任せる位の悠々味は、延命長壽の一訣であらう。二百八十まで生きた魏文侯の時の樂人竇公は、長壽の法を文帝から問はれた時に、

「臣は十三の時明を失しましたので、臣の兩親が鼓琴の業を教へてくれました、臣は毎日これに親しみ、ために心中常に愉快で愁ひを知りません、長生きしたのは、このためだらうと存じます」

と答へたさうである。鼓琴の業元より延命長壽の秘ではない。只その生死を超越した悠々たる心持が、身の藥となつたのであらう。さきに述べた軒轅集も、宣宗から長壽の法を問はれた時、

「樂しみも悲しみも一の如く、心を天地日月と共に明るくもち、萬人を愛して行けば、人命長久疑ひなしでございます。」

と述べた。あせらず、騒がず、しかも心に隙なく、そして悠々と生を送ることは、自然と人との合致境であつて、又神生活の要領でもある。支那の山奥へ行くと、でつぷり肥つた色の白い神様のやうな相貌をした野人をよく見かける。これは、浮世の諸情慾を捨てた透麗玉のごとき一人格であつて、光風霽月の自然生活が生んだ長壽相の一人である。安徽の景德鎭は、陶器の産元であるが、そこへ行くと、繪をかくものは書くもの、土をこねるものはこねるもの、火をたくものはたくものと分れて、めいめいの仕事を至極のんびりした氣持でやつてゐる。多年の熟練から、時計や寒暖計などを用ゐないでも、殆んどひとりでに陶器が出來る。その悠々たる仕事のしぶりや心境が、自然に陶器、即ち製作品に現はれて、落ちついた平々たる氣像が、何とも言へず奥ゆかしく出てゐる。その色だ。その色――心に見えるその色が、自然生活の神髓である。そののんびりした氣持が、人の心にはいると、人の藝術品が出來る。藝術のごとく人の生命もいつまでか長く續くであらう。百二十で死んだ明代麻城の人劉紫珪や、さきに書いた九代の祖栗といふ人達は、清晨に空氣

を吸つて生きてゐたといふ話だが、清淨なる空氣が、自然生活の一要素であることは勿論である。降法師の六氣を食へと言つたのもそれである。六氣とは、春の朝霞、夏の正陽、秋の淪漢、冬の沆瀣、日中の氣、日沒の赤氣を指すので、これ等は今日いふところの深呼吸の原理に相當する。

ゲロコミツタといふ若返り法が、その昔、イスラエル國ダビド王に由つて行はれた。これは少女の間に挾まつて寝て、少女の生氣精氣を自然にうつしとるといふのである。これに後年ローマで改良せられてヘルミツプースと言ふが、それは、少年少女の吐き出す呼氣を自分に吐きかけて貰ふので、歯がゆい若返り法たるを免かれない。始皇や、煬帝なども、その晩年、この法を用ゐ、又民間でも、少女の臍で暖を取つたといふ話は屢耳にする。これなどは、慢性胃腸病に胃散を與へるようなもので、一時胸のすく藥にはならうが、所詮は附け焼刃に過ぎない。自然療法の妙諦は、心のおきどころであつて、かくの如き附焼刃ではだめである。

四

以上は、自力即ち消極的の健康法であるが、一歩進んで他力即ち積極的に不老長生をはかる方法がある。それは飲食物である。飲食物を分つて、日常の料理と、藥物とする。

支那料理が、その材料をいかに多方面にとり、いかに巧みに料理し、いかに滋養に富むかは、もう茲に說くまでもあるまい。凡そ世の中で食つて毒にならないものは、魚、貝、草木、禽獸、一として食膳に上らさゞるものはなく、しかもその調理は、運動不足勝ちの貴族達の胃腸が、わけもなく消化し吸收し得るほど柔らかにし、その外山のものと海のものとのうまい取り合はせや、エキスの精選、味のつけ具合など、溢れるほど滋養たつぷりのものである。材料の取り合せも、豚に燕の巣(清湯丸子)だとか、家鴨に松茸(清湯茸子)だとか、蝦と筍だとか、動物性植物性をうまく配合してゐるが、運んで來る皿の順序も、油濃いもの、次にはあつさりしたもの、もう大抵腹がふくれた時分には、胃の藥の杏仁を出すとか、うまく沢山食はせることに充分苦心がひそんでゐる。果實類も、例の西瓜の種子を始め、梨、柿、りんごの類は元より、榧の實、棗、茘枝、松子(朝鮮松の實)龍眼肉、どんぐりなど、その豐富な材料は、四季を通じて盡きる時を知らない。果中の仙と言はるゝ桃も種類が多く、有名な佛米のピーチ・ブランチーに似た桃汁も製造されてゐる。その外、日本あたりでは物好きしか食はない蛙や蚊料理などは朝飯前で、とかげでもゐもりでもわらじむしでも何

でも食ふ。食へるように出來てゐる。鳥の燒肉だと言つて食はされ、あとであれはゐもりだよとおどされて胸を悪くするような珍談もあり、かしわだと思つて食つたのが蛙であつたりして笑のたねとなるなど、知らずに食へばソレとわからない位にうまく食はせるのはやはり庖丁の冴えである。

支那料理の珍中の珍とせらるる熊の掌、鹿の尻つぽ、猪の蹄などは、食つてうまいものではないが、容易に手に入らないから、贅澤品として見得を飾るものであるが、その外又何かの食補になるかもわからない。

鱶のひれの葛粉汁、海燕の巣と玉子の白味、鷄の精蘂と筍などは、精力増進に著るしい効能あるものであつて、これ等は支那料理中の神品である。普通の料理に出るそれ等の料理は全くにせものであつて、本物は、さうやたらに出せるほど安いものではない。支那では二三十皿の卓子を普通とするが、本物の鱶のひれや、海燕の巣などが出るのは、七八十皿以上の卓子である。東京の百圓の卓子にもその本物はないかも知れない。これほど高價たものであるから、貧乏者には食へない。支那の金持が、運動もせずに、割合に長生きするのは、一つには、常にこんな柔らかい滋養物を攝取するからである。

科學的分析を試みるまでもなく、支那料理が滋養に富んで、精力を旺盛ならしむることは、事實が示してゐる通りだ。人間は、草木魚貝鳥獣を併せ、雜食主義か、補精第一とされてゐる。支那料理のごとく雜食主義的にして、しかも調理の巧妙を得たものは、他國にその比類を見ない。前に述べた神品の卓効のごときも、科學的の理窟は兎も角、長い間の種々の體驗からして、それを認められてゐる。支那人が一般に好色なのは、一に食物の關係からだとも言はれてゐるが、要するに身を養ひ、精力を増す食物として、支那料理が、世界に卓越せる効用を有するものであることに、誰も異論はないであらう。

五

次に、不老長壽に利き目のある藥物類に就て述べる。

隋の頃、今の浙江省に趙瞿といふ者がゐた。癩病にかゝつたので、家人が山に捨てゝしまつた。趙が日夜悲鳴號泣してゐると、一老翁が來て、これを飲めよと言つて、一つの藥をくれた。飲んでみると、日増しに病氣がよくなる。それから十日後に、その老翁が又通りかゝつたので、趙が先日の禮を述べその藥の無心をすると、翁は、

「あれは松脂じやよ」

と言ひ捨てゝ行つてしまつた。趙はその後松脂を常用とした

が、七十になつても歯落ちず、髮黒く、顔は子供のやうに若々しかつたさうである。松脂をどうして食つたかは書いてないが、商同なども、松脂は不老の仙法なりと盛んに唱傳してゐる。松葉を食ふ人は今でもあるやうだが、松脂賞美者は見あたらない。唐の道士梁頃は、柏の實を食つて百四十歳に達したが、晩年でも、歩行疾走に不自由を感じなかつたさうである。百十九歳の壽を保つた前漢の丞相張蒼は、人間の乳で晩年の健康を保つたさうであるが、人間の乳は、年寄にも利くと見え、魏の時、積城内には、婦人の乳で生きてゐた二百四十歳の老爺がゐたさうである。年をとれば子供になると言ふが、こんなところまで子供になり、若い女の乳を吸つて生きてゐたとは面白い。前に述べた女の傳で、壯氣をうつしとるといふ養生法と併せて考へると、壯者の精氣といふものが、年寄に元氣を與へるのは、おのづから相一致するところあるやうに考へられる。その外、王烈は石髓を服して不老の法を說いたとか、陸法師は青精飯を喫つて長壽を唱へたとか色々傳說めいた話が澤山あるが、それは一概に、すぐそれをあてはめるわけには行くまいし、婦人の乳を呑むにしても、利く人もあらうが、又利かぬ人もあるであらう。又開丹術（婦人の×水を飲む）などの怪誕な養生法も、記錄として殘されてはゐるが、それ等が果してどれほどの効能のあるものであるか、希望者の體驗に待つ外、何とも斷言はできかねる。それよりもう少し一般に知れ亘つたものは、草決明、何首烏、人參などの藥物と、內補等であらう。

草決明は日本にも澤山野生してゐるが、支那のやうに、あの實を取つて、煎じて飲用に供してゐる向きはないやうだ。一寸麥茶の味に似てゐる。いゝ風味だ。これは佐伯あたりにもよく見かける。眼藥として著しい利き目をもつてゐるやうだ。何首烏も、一時日本で大流行であつたが、ヒマシ油かなんぞのやうに、服用してすぐ利かないので、近頃は大分下火になつた。何首烏といふのは、これを發見した何田兒といふ人の孫に當る人の名で、百三十まで生き延び、髮も黒く、腰も曲らず、大變な元氣であつたさうだ。この草の本名は交藤と言ひ、竹木牆壁を這ふ蔓草で、これを掘るには、春の末か夏の頃中或は秋の初めの、よく晴れた日にせねばならない。掘りあげた根は、皮を損じないやうに泥土を拭ひ去り、烈日に乾かして箱の中に密藏し、毎月箱からとり出して日に干し、用ふる時は、先づ皮を剝いで細末となし、酒に入れて飲むのが一番よい。これも偶數の日に用ゐるのが利き目が多いとしてある。どういふわけだか分らない。深山幽谷に生ずる古いものほどよいわけで、五十年生はその大きさ拳大で、これを山奴と稱し、一年間服用すれば髮鬚眞黒となり、百年生はその大きさ椀大で、山哥と唱へ、一年間飲めば、顏色が若々しくなる。百五十年生を山伯と言つて、これを一年間飲むと落ちた齒が生へ、二百年生を山翁と言ひ、これも一年

飲むと童顔となり、行つて奔馬に及ぶとある。何首烏の最上品は、山精と言つて、三百年生、これを一年間續けて飲むと、純陽の體となり、尚久しく飲んでゐれば、地仙となると見えてゐる。地仙は形容聊か誇張に過ぐるが、古い本物を常用してゐれば、色艶がよくなり、元氣になつて、目方が増すことは、我々の知人の間にも實例がある。たゞ〱元氣になる他の偶然の原因があつたのかも知れないが、本人は全くその爲めだと言つてゐる。草決明などの常用者で、二年間後に、驚く程立派な身體になつた人もある。がすべてかういふ藥草類は、一日や二日、嘗めた位では何にもならぬ。一年以上續けて服用しなければ、その効能は現はれぬもので、それもよく新古を吟味し、眞僞を調べてかゝらぬと勞して効なしである。

明の徐溝の人蔡四は、病弱の人であつたが、人から鹿角の膠を進められて服用し、百八の壽をたもち、又良鄉孔といふ人も、鹿角を飲んで、四百歳近く生きたと傳へられてゐる。鹿角は古來藥用として用ゐられ、歐洲では昔は馴鹿、エーデル鹿及アルス鹿の角は藥に製せられ、若角は陽壯劑として貴ばれたものである。今日でも、極北の土人即ちラップ人は、鹿角を藥用に供してゐる。エーデル鹿の袋角は、毒蛇をも倒す位の怖ろしい藥力を持つものであつて、その熟した時、剝衣した皮の斷片は、傳染病又は惡疫に利くそうである。東洋では、袋角即ち鹿茸は、人參と共に、古今の靈藥として併び稱せられてゐるのであつて、その煮作法は、まづ角を長さ二寸に截り、流水に三日間つけて垢土を去り、角一斤に、楮の實一兩、桑白皮黄臘子二兩を鐵の鍋の中に入れ、水がなくなれば熱湯をつぎ、三日間とろ火にかけた後、取り出して薄く切り、日に乾かして保存しておくのである。支那の名藥六神丸には、この鹿の角が入れてあるそうで、鹿は六に通じ、本來は鹿心丸ともすべきを、外に六種の秘藥を交ぜるので、六神丸と名づけたといふ説もある。いづれにしても、この鹿角は相當に利き目があり、値段も決して易くない。市井には、鹿角と稱するまがひものが多いが、本ものは、貴重なる藥物として、地方富豪の内に大事がられてゐる。秋來ぬと妻戀ふ里や鹿の聲――霧の中に、綸のやうに浮き出たあの仙獸に、こんな靈妙な作用をする有機物があらうとは、全く神秘である。

六

憔悴した文明の裡に、名利に汲々たる小さい人々は、枯木のやうな腕を振り、足を曲げて、健康新法を説いてゐる。支那の長壽者は、雲を眺め、水を望み、天地の心を心として、悠々と生きてゐる。その意は、都をのがれて、山野に隱棲せよと言ふのではない。天地の心を心とするその心境のおちつきを指すのである。慾を節制して、自然に從ふ――これが、不老長壽の第一義で、藥物を用ゐるに至つてはもうその末節であらう。

八ポイント欄

一、この「八ポイント欄」は何若無名を問はず、廣く世の篤學者、趣味家、蒐集家のために開放して隱れたる智識と溢れたる趣味とを集めて之を天下に紹介しようと思ふ。故に「八ポイント欄」への投書をお願ひする。

一、原稿は出所責任を明かにするため筆者不明のものは採らない。紙上の匿名も許さない。そして掲載した分には十圓以上の謝禮をするが、枚數は四百字詰五枚以内にコンデンスして頂きたいことを希望する。

諸國雑煮譚

鎮目桃泉

一夜明くれば屠蘇の醉、いくら不粋者でも所謂正月では濟まされず、されば年中行事の第一にも暗い内から鳴らす市井戸の太綱は命の綱の若水汲み明けては喰積み、雑煮、福わかし、昔より正月はなんでも目のことなれども、馴れては米の飯も嫌しくなるものか、門松に次ぐ第一の景物は雑煮であらう、餅は古くは保臓といひ室町時代からホウゾウの名がある、五臓を保つの効があるといふので此名がある、今でも備後の肥前に味噌汁そいうに餅を食へると餅の精力に變ると信ぜられて居る、雑煮は古くから傳はつた餅の調味法で隨つて全國到る所に見られ、その國風の種々相が一碗の雑煮の内に窺はれるのである、古い處では

「大根、蹲鴟、こぶ、打鮑、いりこ、榧、鰹」〔雑談抄〕

「芋頭、大根、芋の子、焼どうふ、かち栗、昆布、鮑いりこ、するめ、うなぎ、牛蒡、あらめ、鱈鰭、田つくり」〔月令博物筌〕

「鯔魚、鯨魚、鰯魚、魚數た、熨斗鯣、串柿、決明、牛蒡、大根、等」〔日次紀事〕まるで魚の試食會といふやうなものでさぞ生臭いことであらう。

「昆布、打鮑、鰹節、牛蒡、海老、栗、するめ、いりこ、いもし 昔流であるこ」〔日本歳時記〕

現今では何事も簡單になつて口味第一なれば作法も定めも忘れられ、勿論其家風なも取り入れて種々なものが加へられて居る、何れにしても大根人參、は第一の添味料でそれに祝意ある品物の一二を加へて歳明祝賀の膳を飾るのである、こゝにお國振の代表的な一般的なものを陳列して見る、彼此斟酌して我家の膳に上すもよからう。

江戸前 東京では切餅、澄汁仕立（醬油のすまし汁をいふ）添物は人參、牛蒡、釜鉾、又は芝蝦、又は鶏、小松菜少々、方寸の淺草海苔一枚浮べる、これは中品で先づ江戸前の雑煮である。

茹で鮭子 仙臺に於ける商家の一例は、切餅、澄汁仕立、大根と人參と牛蒡の千六本（四國ではせん切といふ）等少々入れ、餅の煮上つた時碗に盛り別に茹でたすじこ（鮭の卵子）をパラ〳〵と振りかける、といつても豌豆位の大さである、東北地方で

は鮭の親（鹽引の）と子（生の）を愛用し色々な變つた調理をして重寶がつて居る。

水餅雜煮　米澤では水餅、搗立てから水に貯へておく）、清汁仕立、加料は人參、大根、午蒡、里芋、豆腐、油揚、と例のずいこを入れる、水餅のこと故とても柔かで上味である。

山の雜煮　羽前鶴岡では切餅、蕨、蒟蒻、燒豆腐、等を入れ海苔をかけて食ふ、年男は三時頃から雜煮作りをやる、山岡丈けにお魚がない處が面白い。

大高名　名古屋では切餅、清汁仕立、大高菜を入れる、又人參、大根、里芋を添へるのもあるが大高菜を忘れない、大高名をあぐる樣との縁喜である。

膳部には必ず田作二尾と煮豆二粒とが判じ物の樣に小皿に盛つてある、健全を祝するの縁喜だといふ、小供等唄ふらく『正月は好いもんや（中略）雪のやうな飯たべて下駄の齒の樣な餅食つて』

雪國の雜煮　越後西蒲原郡は正月を雪の底で迎へるといふ國柄で、大根、油揚、蒟蒻に千鰯のダシは珍味の雜煮であらふ。

昆布出汁　金澤では昆布だしの清汁仕立、輪切慈姑、燒鯛のむしり、里芋、小松菜、で御城下ものとしてはチト淡白して居る。

小判煎餅　加賀石川郡邊では餅は稻株の大さを象つた扁平の圓餅、膳部には勝栗、昆布、數の子、椎の實など縁喜物の數々、別に小判せんべいとて小判形の煎餅を囓るは珍である、今年も稻作豐年で小判黄金の入り來る樣との意である。

御坊富貴　縁喜を擧げれば限りがない、奈良東大寺で正月の御節會の膳部は『午蒡、豆、蕗、芹』に限るといふ、それは『御坊は健全で富貴せり』との意であるといふ、東都でも正月の膳部の品々をおせちと云つてる。

雜煮數日　加賀河北郡西荒村の は鍋の底に昆布を敷いてすまし汁又は味噌汁仕立、團子をおし平めた樣な餅を入れる、こゝでは三ヶ日以外幾日でも餅のある間は雜煮を祝ふとは恐れ入る。

若くて淡者　京都のは若餅と名くる圓餅、健全（豆）を祝ふ爲めに味噌汁仕立、添物に輪切大根、嫁の目豆腐、人の頭になれとて頭芋（八ツ頭なり）、を入れる、上品に白味噌仕上にするのもある。

日直しの食物に元日は蛤の吸物、二日は鰤の餡かけ、三日にはとろゝ汁を添へる。四日は鏡開と稱へて小松菜を入れたすまし雜煮をざつぱりと食べる。

東西雜煮　大阪は元日は生の切餅味噌汁仕立里芋と豆腐、二日と三日は燒目餅、清汁仕立、京菜を入れる、之を京菜そうにと云つてる。

小判餅　伊豫松山では雜煮用として特に小判形の餅を作る、清汁仕立、加料色々ある、小判貨の入るやうとの縁喜である。

腹痛の藥　伯耆西部地方では薄暗い內に祝ふ慣はしで、味噌汁仕立の家もあり小豆汁の家もある。神棚に供へた雜煮餅は乾かして藥箱に入れ、氷餅にして貯へ置き腹痛の時に削つて服用するといふことだ。

風味を付ける　廣島での習俗。白味噌仕立、常の加薬の外に鯛を入れる。讃岐では鮮な鰆切にして入る、地抹（地鰹）を得るとの縁起である。

大雑煮　長崎で本膳煮と云はるゝものに牛蒡、大根、こぶ、鰯、芋、鯛、鰹節の七品を煮るのである。

越後の阿部川　越後栃尾町では元朝そう煮を祝ふに先つて阿部川餅を食ふ慣はしで、大鍋に切餅を入れて湯煮したものを各自のお椀に五片位宛盛り、別に豆粉を用意し置き一片づつ豆粉にまぶしては食べる。それから雑煮を祝ふので健啖驚くべしである。雑煮には千六本大根、刻み午蒡、豆腐、油揚、蒟蒻、鰯、すじこ、塩引鮭の腹肉、の八品を煮たさつま汁のやうなものを用意し、切餅を器に盛つた上から注けて食べる。

この雑煮は三ケ日の外七日、十一日、十六日、十七日、及廿日にも祝ひ食べる、恐ろしいことだ。

汁かけ雑煮　汁注け雑煮に余り地方にもある、焼目をつけた切餅を器に盛り、大根、里芋、豆腐を入れて味噌汁仕立にしたものを上からかけて食べる。汁を上から注けることは腸の為めに汁がいつまでも濁らぬといふ利益があるらしい。

越前のとろゝ　雑煮の前奏に物食ふことは信州松本にもある、一ケ年の風邪を攘ふ呪にとろゝ汁をズル〳〵と飲んでから雑煮の箸を取る。

雑煮には湯煮した焼目の切餅、お國名物の味噌で汁を仕立る。器に盛つてから小片の鰹と短冊蒟蒻の一片を載せ、花かつをかける。

二日はいとこ　越前地方では元日は雑煮、二日の朝は小豆いとこと称して東京でいふ田舎汁粉を食べる。つぶし餡である。

元日に雑煮を食はぬ　信州南安曇郡地では、元日恵方詣の後例年の通り風邪よけのとろゝ汁を喫ひ元日丈は雑煮を食はぬばかりでなく餅を口にしない。二日になつてから初めて雑煮を祝ふのである、随分變つて居る。

元日に汁粉　常陸の一部では雑煮を祝ふことをせず、元日から團子を用ゐた汁粉を喫るといふ風習が行はれて居る。

雑煮の大役　大家では年男が暗い内から雑煮作りにかゝり切りであるが、大和國添上郡大柳生村では正月は三ケ日とも特別に潔斎をした後、元日は主人が雑煮役、二日は總領の受持、三日は次男の當番としてあるが、自ら長幼の序あることを示した美しい俗習ではないか。

雑煮腹に加へて不消化猶の數の子、田作。お節の數々に流行の下戸も胃散の頼朋といふ折には恰度七日のお粥の行事が廻つて來る、こゝにお粥の三三種を調して腸胃の料とする。七草粥については色々説がある六者略することにする。

昔は七草粥が來たものであるが、大阪では今でも七日の早朝に薺粥か、吉兆のなつたアニと觸れて來る。

上州の太田では薺、人參、牛蒡、大根、芹などを入れるのであるで雑煮のやうた感である、仙臺では薺、芹、小松菜、を用ゐ、

大和の大柳生では粥と菜種を入れる、羽前ではたらの木の芽と芹を用ゐるので薺はない。

七草は前夜又は七日の朝俎の上に並べて擂木、火箸、火吹竹などで打囃し、呼勝の囃唄を節おかしく唄ふのである。

『七草なづな、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先きに、ストトンストトン』東京

『唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に、何々たゝく、トントン』武州下郷村

『トンド、唐土の鳥と日本の鳥とうつちよとつて（打寄つて）バタバタ』大和國大柳生村

『七草ハタキ（打つこと）何ハタキ、唐土の鳥と田舍の鳥が、渡らぬうちに七草ハタキ何ハタキ』

これを七度繰り返し打たゝくを一囃とし、七囃くりかへしてたゝくのである（仙臺）

『七草なづな豆腐の骨を三本立てゝ、抜けないうちは ストトン ストトン』上州前橋地方

『七草なづな、菜ッ切庖丁まあないた俎唐土の鳥と日本の鳥とつッつき（突き）合つて パアタパタ』伊豆伊東

などがある。

薩摩の俗習に正月七日七歳の男兒や女兒が夫々盛裝をして父母や姉妹に伴はれ、平椀を携へて、近親の家七軒を訪づれて七日の雜炊（七草粥の方言）を貰ひ集め歸宅後その兒女達に食べさせてしまふので除疫息災の呪と信じ之を雜炊貰ひといふ、日本の俗習に何事にも七の數を喜び七の數を尊ぶといふことがあつて、自分が聚錄した丈でも夥しい數である、これ等もその一好例であらう。

（昭和二、十二、一、）

冬と庭園

上原敬二

庭は庭らしく、自然はどこまでも自然らしく、この相互の領域を冒し合はない所に庭作りの苦心と自然觀賞の基調とが潜むのである。

この點に於て古代の庭作りは確かに今時の皮相の方法に超絕して居たことを當然認めないわけに行かぬ、春は春らしい庭、秋は秋らしい庭、かうしたことは言ひ易くしてさて行ひ難いものである、就中冬を象る庭といふものは難中の難とされて居る、材料に乏しい、冬木立の自然の甘觀は寧ろ庭を淡入らせる許りである。料峭の風、枯梢の林冠、木枯しと野分きとに悉く振ひ落された淋しい庭面を彩るものは極めて少い特殊の材料である。

然も自然の配劑は極めて巧である、淋しさの内にも一脈のあたたか味と、懷しみと、閑雅の趣とをさうして「春近し」といふ豫想とを表はすことにかけて我が庭作りの技術は他の何れの時季に於けるそれよりも冬に於て世界獨特の何物かが認められるのである。

冬は裸形の世界である、覆蓋を撤する時季である、同時に落葉の如き自然の現象が見られる時である。更にこの時季に覆された材料は他の何れの季節よりもそれ程虐げ

られたかけ・人絲濃き葉蘭とこれに對照の美しい、さうして澁み味を添へる紅い味を數へ上げなければならぬ、シロダモ、アオキ、モチノキ、ソヨゴ、ナナメノキ・クマソヨゴの様な大きな常緑ものより小さくてはタチバナカウジ、ナンテン、マンリヨウ、センリヨウ、ヤブカウジ等、落葉のものを擧げれば更に數は多くなる、ウメモドキ、ムラサキシキブの如き知れ渡つたものより、ウラジロノキ、ウシコロシ、サハフタギ、アツキナシ、イヒギリ、さてはテリハイバラやサルトリイバラの如き野生のものまで加へて閑寂なるべき冬の荒野は賑かになる、かうした實の類に在淺くして倘枝に止り、早春の發芽に自然界の甦らんとする時に初めて樹を辭して行くのである。

かくの如き天然の妙趣を寫してそこに人生の冬を象つたものが所謂冬の庭である。時に早春の庭とも云はれ得る、亦この表現が土地に對し、氣候に對し、よく渾然と融和されて居る、それには亦變化と分化とを與へる地方色がある、冬の旅に出て、旅宿の庭に、豪家の庭に、舊家の門前にその地方の郷土的調色に惠れたるそれぞれの趣を見出す時に何か懷き郷土愛撫の情がこみ上げて來る。

所謂冬の庭とは一口に云へば落葉の庭である、常緑の庭である。一つは根の保護であり、他に枝幹の防寒である、かくの如き純な實用の分子が冬なればこそそこに實用な超越して我々に美感の意識を添つてくれるのである。天然に吹き溜つた落葉を掃き寄せてぬくぬくと根際の寒さを保護してくれる、暮れ行く夏の夕、撫でん許りに育て上げて打水にその美しさを樂んだ苔の痛まぬ様にと、文化住宅の芝生の美しさでも、趣向に餘つたヒカゲノカヅラに被はれた露路庭の美しさでも、輕い藁を投げかけて霜寒六旬をいたはつてくれる。武藏野にも次第々々に落葉を手に入れ難い時代が迫つて來た。いつか落葉は松の落葉に代つてしまつた、柔な赤松の葉である。これを散松葉と云ふ、この名は徳川時代の庭園書に見當らない樣に思はれる點から明治時代になつて用いられたものではなからうか、その纖細な形、冬らしき色彩、さうして飾り氣なしな所に、此庭には嫌にたげ用ひる所に味がある。さりながらそれさへも宗匠千利久が茶庭の一塵除一つ止めぬまでに掃いて清めた茶庭の露路に秋更に振り落した落葉の幾つかに欠陥の美を味つた様な情懐もないし、忠信が一谷城の場一に自ら掃いた庭面にも風情を添へんと紅葉を散らした風趣にも及ばない。

冬の水は亦自然の景觀として淋しいものだ。薄氷張り続らした淺い池の汀にはとろとろと霜解けの滑り加減、水の面には淡い冬の日ざしを受けて枯れて折れ曲つた蓮の莖が見える、その傍にはこの秋に取り入れた稲藁の繩束かが積まれてある、かうした冬の農家の庭は亦都會の庭にも冬を限つて眞似られる。

路地に飾つた小灌木、根際の稿藁に風情を見せた梅の老木、雪吊りに威容を加へた門前の老松、さては全身の網縄と云ふ感じの蘇鐵の菰寄せ、片庭に半面を覗かせた蜜柑の類、かうした數々の防寒装置は何れもその意匠に於て我國特有の趣と稱す可き藝術の精神の現れであると思ふ。

狭い庭にのみ意匠を凝らし易いのも冬の庭の特徴の一つである。却てこの方が纏りが一層容易の様でもある。言ひ換へれば最も普遍性の多い、最も人間味の溢れた、日本式庭園の感じの變差に現はれたものと見做してよい。初冬より早春にかけかなり長い間をこの變り榮えのない庭面に眺められて居る内にいつか落葉をかき分けて、閉ゐの内に春の芽生へが甦るのである。

好色臺所

秦　豊吉

君子は臺所に近付くものでないとされてゐるが、近付いてみると中々面白さうな事がある。僕は井戸端會議のお留守を窺つて、次のやうな臺所の研究をした。

玉葱

玉葱は古代埃及から女と關係の深い野菜である。その皮を脱いだり又殖えてゆく處から月が滿ちたり欠けたりするのに例へられて、月の神イヂスとも、隨つて又女そのものに例へられたのである。その一方に玉葱の味と匂ひから見て、催淫劑に使はれたから、埃及の坊さんは玉葱を食ふ事を禁止された。その位に性欲に關係して考へられて、やがて生産、生命、隨つて子宮の意味にも移つていつた。埃及では死んだ女に、玉葱を挾んで葬つたさうである。新しい生命とか不死の意味である。

希臘時代になると玉葱を催淫劑に用ひる事は一層露骨だ。アポロの母親のレトがアポロを姙んでゐる間に、玉葱を食つて元氣を付けたといふ話がある。羅馬人でもさうである。羅典語の諺に「玉葱さへも助けにならぬ」といふ文句があるが、これはある人の性欲の減退が甚しくて、玉葱を食ふ位では間に合はぬの意味だ。「腐つた鹽水に玉葱をつけて喰べる」と云ふ言葉もあるが、それは女の匂ひを言つてゐるものらしい。

獨逸に玉葱の入つて來たのは伊太利からだ。獨逸で使ふ玉葱「ツヰイベル」といふ言葉は二つの珠の意味で、隨つて男の大事なものに例へられた初めが、記錄によると千五百四十一年だといふ。

玉葱を切ると涙が出る。そこで盛に玉葱と涙と女とを結びつけた謎や諺が出來てゐるが、簡單なものでは「玉葱は娘さんだ、スカートを（皮を）脱ぐと男に涙を出させる」なぞといふのがある。

アスパラガス

希臘では新郎新婦がアスパラガスの冠をかぶる事があるが、後になるとアスパラガスの根を煮た汁を飲むと、子供が生れないとも言つてゐる。獨逸ではこの野菜は男の催淫劑になつてゐる。アスパラガスの根の先は薄赤くなつてゐるが、これが男に暗示されて、佛蘭西の莫迦なポンチ繪畫家は「御婦人アスパラガスを好み給ふ圖」なぞを盛に描いたものだ。

南瓜

南瓜は日本では女の附き物であるが、西

洋でも大な黄色い恰好な、肥つた女のお尻に例へた事がある。今日でもエルサスとか南獨逸とかでは、大な女のお尻の上を着物が一杯に固く包んでゐると、「南瓜が丸出しで見える」といふ位である。

お尻ばかりではない、丸々した恰好から女そのものの表徴にも南瓜に使はれて、男は南瓜へ、女は胡瓜へ」といふ言葉がある。胡瓜は男の表徴だ。北米のある地方では女の美しいのを褒めるのに「あの女は最大な南瓜だ」といふ處もある。尤も徒花が多い處から、尻輕な浮氣女の事を南瓜と昔は言つた例もある。

胡瓜

胡瓜を今日でも愛用してゐる女は、埃及や土耳其の女である。胡瓜は古くは希臘や古羅馬にもあつたものであるが、「女よ、胡瓜を喰へ作ら上着を縫れ」といふ羅典語の諺がある。この意味はいろ〳〵にとれてはつきりしない。獨逸では「胡瓜と娘 嫁りが早い」といふ。和蘭でも「胡瓜は娘のやうだ、永持がしない」といふ。いつれも早く手を付けろの意味である。

大な強さうな鼻の事を胡瓜のやうだとはどこでも言つてゐる。鼻の大な男は何やらも大いと西洋ではいふ。胡瓜を以て之を代表させる所以である。

馬鈴薯

獨逸人は實によく馬鈴薯を食ふ人間であるが、食ひ初めたのは千七百七十年の飢饉時代からだ。楕圓形の小さいのは、男の大事なものに比較されて、「男の馬鈴薯を絞り出す」といふ言葉が之から出てゐる。女の顏が妙に丸くて幅の廣いのを「馬鈴薯顏」ともいひ、厚ぼつたい大な鼻を「馬鈴薯鼻」ともいふ。いつれにしてもおさんどんには好かれない實だ。

人蔘

人蔘に希臘以來好色なる野菜である。性慾興奮劑としてはその時代から用ひられたもので人蔘の種子を呑むと、月のさはりを止し、姙娠を助けると言つてゐた。人蔘の根が催春劑とされてゐる事は今日まで變りがない。「黄色い人蔘は大師の仕事を快ならしむ」なぞといふ文句が獨逸では出來た。

人蔘はその恰好から男性の表徴に使はれてゐる。娘さんが人蔘と紫とを庭に木の杵で造つた穴へ一緒に植えておいて、その二つが一緒に大く延びると、その娘が結婚をするといふ占ひがボヘミアにある。十七八世紀の繪には娘さんが人蔘を手に持つたり膝の上に載せたりをしてゐるのが澤山あるが、みなこの意味から來てゐる。小露西亞では從つて「赤い人蔘」といふ代名詞が出來て、そのノヲゴロツド地方では、婚禮を祝ふ歌の文句の中に「花嫁に白い膝に可愛な人蔘を待つてゐらつしやる」といふのがある。

こんな事を考へてくると囈爪らしい料理法のお講義なぞふき出したくなる。まだいくらもこんな例はあるが、餘り研究すると風俗方から叱られさうだ。

懷かしいドルメン

鳥居龍藏

朝鮮に巨石文化を表現するドルメン（Dol-men）の存在することは明かなことであるが、これがまた南滿洲にも存在する。私が南滿洲でドルメンを最初に發見したのは、實に明治二十八年のことで、その場所は海城と岫巖との間の析木城附近姑嫂石と云ふ所でドルメンの數は都合二つであつた。私が此處で以上二つのドルメンを發見したのは、同年十月十日私が小孤山の方から析木城に行く際り、それから二日許此處でその調査をした。

當時私は東京人類學會から南滿洲に於ける人類學上の取調を依囑せられて同地を探査して居つたのであるが、この時の私は歳は尙ほ二十歳頃の若輩で、この二つのドルメンを發見した時の心持は何だか鬼の首でも取つた樣に嬉しかつた。そして私はこれを翌年の『太陽』第十五號に『遼東半島』の文中に「石室」として記るし、當時私のスケッチした圖を附けて置いた。

私は今度、南北滿洲を旅行したが、若い時に發見した姑嫂石のドルメンのことが氣になり懷かしくなり、十月八日再び此處へ探査に行つて見た。然るに二つのドルメンはその時のその儘で少しも變化がなく殘つて居るが、私はこれを見て何だか久しく會はなかつた古い友人に會つた樣な氣がして無情のドルメンに向つてあつい涙を流した。誠やこの二つのドルメンこそは大陸に於ける私の人類學上貴重なる發見の一つであつて、またこれが最初のそのものとして一番大きなものである樣に思はれる。そしていつもこの二つのドルメンのことを忘れたことはない。今私は此處に來てこれ等のドルメンを見るに、いかに寒い雪や雨が降ればとて、いかに強い風が吹けばとて、その他いかなる嚴寒暑氣に會えばとてドルメンは平氣であつて、何に知らぬ顏をして居る樣である。私はこれを見て恰かも私自身の守護神の樣な氣がして頗る心強いのである。

二つのドルメンのうち、その一つは完全であつて、僅かに一方の壁が半破壞せられて居る許で、その高さは地上から八尺三寸、天井の長さは二十尺四寸と十九尺五寸である。他の一つは古く石工等によつて破壞せられ、その石材で大石臼を作らうとしたが、その石工は忽ち病氣となつたからその儘にし今日に至るまで何人も恐れてこれに手を觸れるものはない。二つとも石材は花崗岩から出來て居る。

破壞せられた方のドルメンは小高い丘陵の上に存在するが、完全な方のドルメンはこれより稍〻高い丘陵の上にあつて、景色の最も佳なる所にあり、下には沙河が靜かに流れて居る。土人はこのドルメンに就て斯んな傳説を傳えて居る。それは昔々、此處に兄嫁と弟嫁との二人があつたが、兄嫁は丘上に登り歸らないで、石室となつた、弟嫁も彼女を探しに行つてまたその下で石室となつた。今日殘つて居るそれは即ち兩嫁の化身である。この關係から、これを殊に

姑娘石と稱し、またその名稱から此處の地名を姑娘石と呼ぶに至つたのである。

私は今回は更に以前よりも、精密にこのドルメンを踏査したが、その下附近から石器土器の破片等を發見した。これでこのドルメンが有史以前＝石器時代民族によつて築かれたものと云ふことが確かめられた。

朝鮮には南方の諸島嶼から北方に至るまでドルメンは夥多しく存在する。このことに就て昨年東京モリソン文庫紀要第一冊に朝鮮のドルメン（La Dolmens de la Corée）と題して佛文で發表し、またこれを本年アムステルダム開設の萬國人類學世界聯盟會でも發表した。要するに朝鮮のドルメンはその形式に於て南方・北方の二つに區別することが出來る。南方形は碁盤型であるが、北方型は机型である。然るに今滿洲のそれを見ると机型であつて朝鮮北方のものと全く連結して仕舞ふ。さうすると滿洲のドルメンは朝鮮北部の連續地帶であることが知られる。

私は以上の如く、拆木城附近で二つのドルメンを發見したが、それが今では普蘭店附近やその他にも存在することが證明せられ乃ち滿洲にも有史以前＝石器時代の當時に巨石文化（Megalithic culture）の行はれて居つたことが知らるゝのである。

私は以上のドルメンを記するに就て、そぞろにその發見當時のことが聯想せられてならない。

スキー閑話

—男にばかりわかる話—

黑田鎮夫

その冬は、何温泉も例年になく雪が多かつた。毎日寒さがはげしく、スキーには申し分のない狀態がつゞいた。こんな日はスキーヤーには嬉しい。なぜと云つて温度が低ければ低いほどいゝ雪になるからだ。

さうしたある日、私はあんまりいい雪に誘はれて、温泉から三里ばかりある山の小屋まで出かけることにした。一行はS倶樂部の十人ばかり。——これはその時の話しである。

小屋までは極く平らな緩かな道であつた。前に行つたスキーヤーの後を、雪をきしませながらつうい〳〵と杖で進んで行く氣持は、何と云つていゝかわからない。丁度何な遠足にでも來てゐるやうだ。氣のおけない友人同志が、云ひたい放題のことをしやべりながら、それでも時々は急な坂などに出ると、前の人が急にスーと見えなくなるやうに滑つてゆく。そのほんのしばらくの間さへ、あたりがシーンとするやうな雪の上の靜けさ。

一行は、若いのは中學生から年とつたのは私のやうなものまで——しかもそれ等はみんな好色者と云ふ一點で結びつけられてゐた。どんな馬鹿話しをしようが誰も咎めるものもない。至極氣のおけないグループであつた。中でもA商業學校の小島はスキーはまだ大して上手ではなかつたけれど、ラグビーの選手らしいがつしりした體格で、鬚はおや〳〵と六尺近い身長を持つた

れは愉快な男であつた。

ずい分寢坊をした上に實にゆつくり遊んで行つたにもかゝはらず、あの寒國特有の青白い光りが、まだ雪の上に這ひまわらない中私達は目指す小屋に着くことが出來た。私達は眞赤にやけたストーブに澤尺餘の薪を遠慮なく投げ込みながらコヽアの熱いのをすゝつた。その夜は樅の森にかこまれた小屋で、一行は明日の山登りを夢見ながらねたのだつた。

昨夜いつのまに吹雪いたのか小屋の周りの足跡はみんな五寸ほどの粉雪に消されてゐる。寒い／＼朝、今ついだばかりの水がもう凍る位、脫いだスキーの革具はまるで鐵のやうに凍り固まつてゐる。それでもいざそれをはいて山にかゝるとなるとさして辛くもない。一行は三十分一時間と默々と白い息を吐いて進んで行く。昨日のあの冗談話しはこの寒さに凍りついてしまつたのか、たまに道を相談する先登の二人の聲がする……かと思ふとそれもぢきに冷たい林の木に吸ひ取られて、あとは雪の上をゆくスキーの靜かな響きだけが耳に入る。天氣は至つてよく風もない。たゞ浸み入るやうな重い空氣がひつそりとみんなの周圍を包んでゐるだけ……。さうした四時間餘りの激しい勞働の後、私たちはたう／＼頂上についた。——何と云ふ美しさであらう。「タンネ」の林は樹氷に包まれて、北側だけ健氣にも活々とした綠の色をしてゐる。雪は全くの寒冷の日にしか出來ない薄い雪片スノーリーフになつてゐる。（ほんとうにこんな時、所がスキー家の天國であらう。）

眞晝、風もないのに總てが凍つて行く。十分も休まないのに足の先は針をさすやうに痛い。スキーを脫いで魔法瓶の熱い紅茶に息をついた私達は、休息とは云ひながら絕えず足踏みをしてゐなければならない。でないと、例の恐ろしい凍傷に襲はれるからだ。

歸りはたゞ下りる一方だつた。從つて冗談もつひ口をほぐれて出る。例の川島は人一倍無邪氣な冗談でみんなの心を輕くする。いよ／＼出かけようとする際、川島は一寸と云つて外に出て小便をした。

「さあいゝか」と云はれて、みんな眞深にかぶつたスキー帽の下から「おう」と答へた。と思ふと先頭から順に思ひ／＼の技でパツ／＼と滑つてゆく。かう云ふ寒いいゝ雪の時は、スキーで滑るのはスー／＼行くのではない。たゞ曲る時のスキングで飛ぶ雪煙だけの感じになつてゐる。私は最後を云ひつけられた。みてゐると、上手な連中は雪のいゝのを利用して思ふさまスキングしてゐる。（川島も群に交つて可成巧みだ。）

登りは四時間もかゝつた。降りは時々休んだにもかゝはらず一時間一寸しかかゝらない。寧ろあつけない氣持がされて、私達は寒さに紅くなつた頰をほてらせながらもう一度行きたいとさへ思つた。一同は小屋に入つた。私達は火にあたりながらまア一服とパイプをつけた。そしてまたにぎやかな雜談に移つた。すると、あのいつも中心になつてゐる快活な川島がみえない。どうしたのだらう。私は心配になつたので小屋の外に出てみると、早い冬の日暮れの迫つ

たらす湯の中に川島がひとりぼんやりとこゞんでゐるぢやあないか。そうしてふつと淋しさうな獨り言を洩らすのだつた。

「あゝ〳〵、俺も一生片輪なのかなあ」

× × ×

寒さが烈しいと一寸した不用意がチヤ凍傷の原因になる。其後私たちは川島の顔をみると、「一生片輪かい」と揶揄するのが例になつた。もつとも川島にはいまは二人の子供のいゝパヽになつてゐるから心配には及ばない。

南蠻踊と日本踊

波多野承五郎

我國の舞踊では、右の手を出す時に左の足を出す。左の手を出す時は、右の足を出す事を以て定法として居る。處が、此定法を外れて、右の手は右の足、左の手は左の足と同時に運動させれば、それは「なんばん」であると言つて居る。

舞踊の一なには、南蠻の遺であらう。ポルトガル人やイスパニア人が、爪哇や比律賓から我國に渡來して踊つた時の手振りが、我國固有のものとに異つて居て、それが右の手は右の足、左の手は左の足と同時に動かして居たから、それを南蠻踊と名づけたのである。處が、大阪では東京の「なんばん」を「なんば」と言つて居る。而して「なんば」は「南蠻」ではなくて「難波」だと思つて居る。それは大阪の難波邊に、東京の名倉のやうな接骨醫が居て、其處へ來る患者は大抵、骨のどこかに故障があつたから、兎角、可笑しい歩き振をする。舞踊の手振が定法に外れて居るのは、丁度、難波の接骨醫の所へ來る患者のやうであると嘲つたのが、「なんば」の語源であると言つて居る。

此頃、大槻如電先生の「舞樂圖說」を見たらば、我國古代舞樂の手振は、いづれも「なんばん」であつて、俗曲の舞や踊の手とは違つて居ると言ふ事が、書いてあつた。先頃、明治節に、三越呉服店で明治神宮の舞人が扮して古代舞樂の催しをやつたから、行つて見ると、其手振は大槻先生の書かれた通りであつた。

元來、我國古代舞樂は、大陸から傳つたもので、大和朝廷時代から、宮廷の儀式にも、宗教の法樂にも、用ゐられて居たのであるから、今の舞踊者流が「なんばん」と言ふ舞樂を使つて居るのは、遙に後世の事であらねばならぬ。併し、それが何時頃であつたか。出雲のお國が信長の寵を得て踊つた時には、既に堺の浦にはポルトガル人が來て居たのだから、南蠻踊と言ふ名稱を以て我國の舞踊と區別したのは其頃であつたかも知れない。

我國現在の舞踊は、手と足と左右交互に出すのであるから、我々が日常歩行して居る時の手足の運動と異らないのである。それだから舞踊とは言ふものゝ、實は歩行運動に過ぎない。亞米利加の黑人にケーキウオークと言ふ踊がある。之は音樂に連れて踊るのではあるが、其名が意味する通り、變な身振で歩行するのである。我國の舞踊

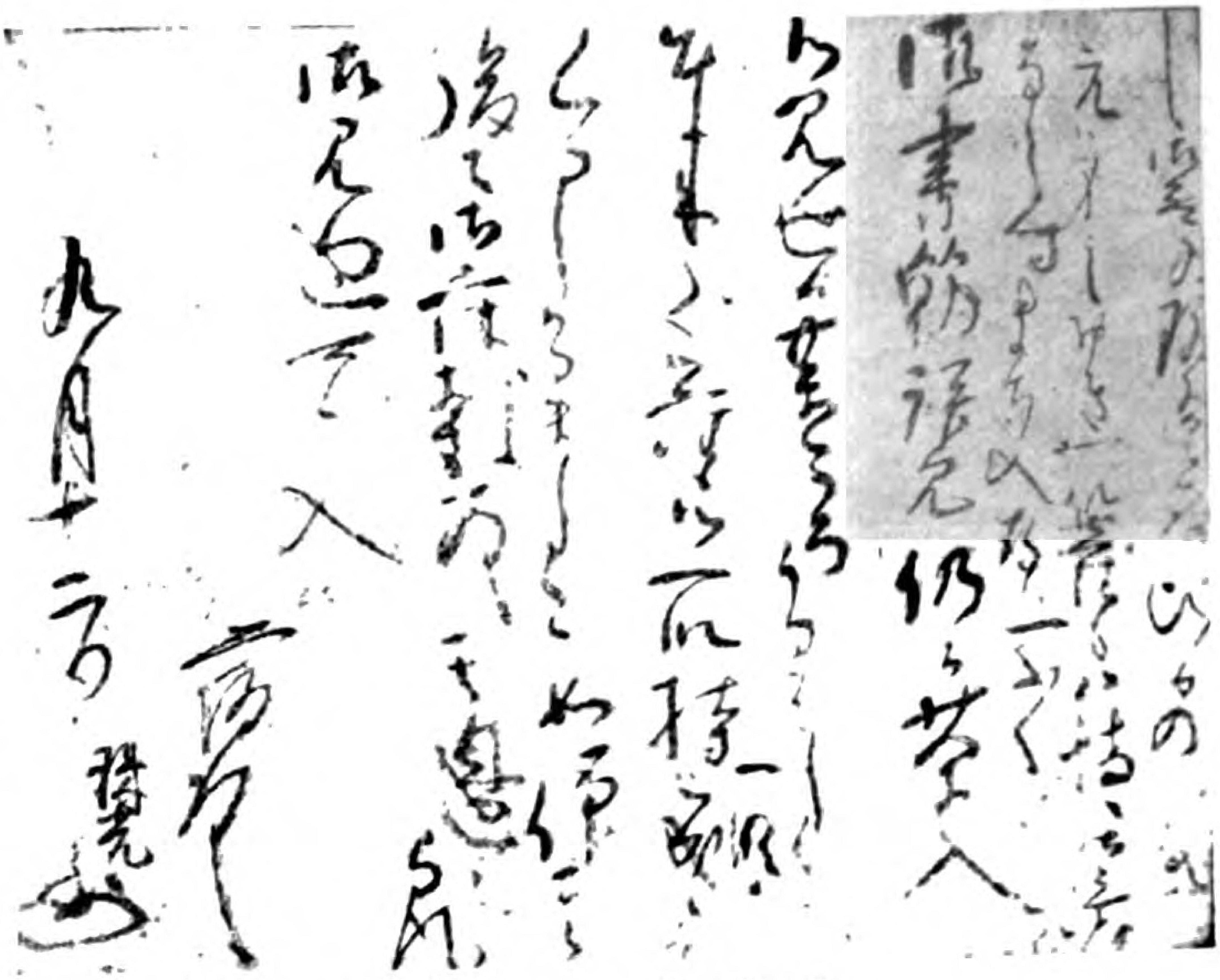
も歩行運動であるから、本來の手振から言へば、ダンスと言ふよりは、ウオークと呼ばねばならぬ筈のものである。

元來、ダンスと言ふのは、音樂の拍子に連れて踊躍する事である。踊躍するには、足で飛び跳ねる事を以て第一要義とせねばならぬから、左の手は左の足、右の手は右の足と共に動くやうにせねばならぬのである。言ひ換へれば、ダンス即ち踊躍運動は是非とも『なんばん』手振を用ゐなければ出來ないのである。ポルトガル人のダンスは、踊躍運動であつて歩行運動ではなかつたのだから、之を見た日本人が『なんばん』手振と言ふ名で、それを呼んだのだ。大阪人が難波の接骨醫から『なんば』の術語が出來たと言ふのは、こぢつけに過ぎない。それだから我國現在の舞踊には、決して『なんばん』手振はないのであるが、併し特に踊躍運動をする時に限つては、それが用ゐられて居る。三番叟を踏む時に、素袍の袖を手に卷きつけつゝ踊躍する時がそれである。勧進帳の飛六法もそれである。盆踊も、お神樂も、梅坊主の活惚も深川踊もそれである。併し活惚でも木曾節や安木節や鮒掬ひのやうな盆踊式系統のものでも、藝者がやるのは必ずしも『なんばん』にはなつて居ない。それは踊躍式が宜しく歩行式に改造されて居るのだ。

今日、歐米で行はれて居るダンスは、踊躍式であるから、所謂『なんばん』手振である。先頃、我國へ來て喝采されたパヴロバのダンスも亦、『なんばん』手振である。併し西洋のダンスの中でも、クオドリールと言つたやうな方形ダンスは、歩行運動式であるから、ダンスと言ふ名は些か不當である。

何故、我國現在の舞踊が歩行式になつて居るかと言ふと、それは舞踊の樣式が一切、物眞似になつて居るからだ。即ち、人の日常行動を美化し、樂に連れて表現しやうとするからだ。手拍子、足拍子を以て無意味に飛び跳ねると言ふ事は、我國舞踊の目的ではないからだ。こう言つた點から言ふと、踊と言ふ言葉よりも、音樂的身振とでも言ひたいやうな氣がする。或人の話に、能は態と言ふ文字が過つて書かれたものだと言つて居るが、現在の舞踊は音樂的態度の連續であるとも言はれ得るのだ。斯う言ふ特殊な技術は、世界中、何處にもない。黑人のケーキウオーク運動があるからと言つて、それは極めて原始的なもので、藝術と言ふ名は下されない。それだから我國現在の舞踊は益々之を發達させる可きである。歐羅巴大陸諸國が國家的にオペラ藝術を保護するやうに、我國でも亦此特殊藝術を、國家に於て宜しく保護すべきものだと思ふ。

(昭和二、一一稿)



新しく發見された珠光墨蹟

（多忠亮氏藏）

新たに發見された珠光遺墨

今東光

茶祖珠光は俗稱茂吉、南都中御門に住みし檢校村田杢市の男なり。十歳にして北市の稱名寺に投じ十餘年の間寺中法林庵に住す。二十歳法業を怠つて四方に漂遊し二十五歳にして還俗す。或は謂ふ鼓昭相公の命ずる所と。年三十の頃紫野大德寺に至り業を一休和尙に受く。珠光屢々睡眠を催すを憂ひ菜醫に問ふて其の效要を知り、栂尾の茶を採て之を喫し大效あるを知る。乃ち大に感ずる所あつて自ら喫茶の式を定む。偶々將軍足利義政公珠光の數奇の妙術心要を賞し、草庵を三條の邊に造しめ珠光庵主の四字を自書して賜ふ。その室四顧四壁の外半壁を加へて以て茶席と爲す。是を以て名四方に振ひ時人爭て交を結ぶ。本朝茶道の宗匠と稱する者は實に珠光より始まる。文龜二年五月十五日歿す。壽八十一。大德寺中眞珠庵に墓及び位牌あり。尙ほ遺愛の手水鉢と稱するものを傳ふ。然れども珠光墨蹟の後代に存するもの眞に稀なり。鴻池に古市播磨法印に與えし一本ある由聞けり。今回余の發見せるものは宮內省雅樂家の多忠亮君家藏の尺牘なり。



茶祖珠光の墓

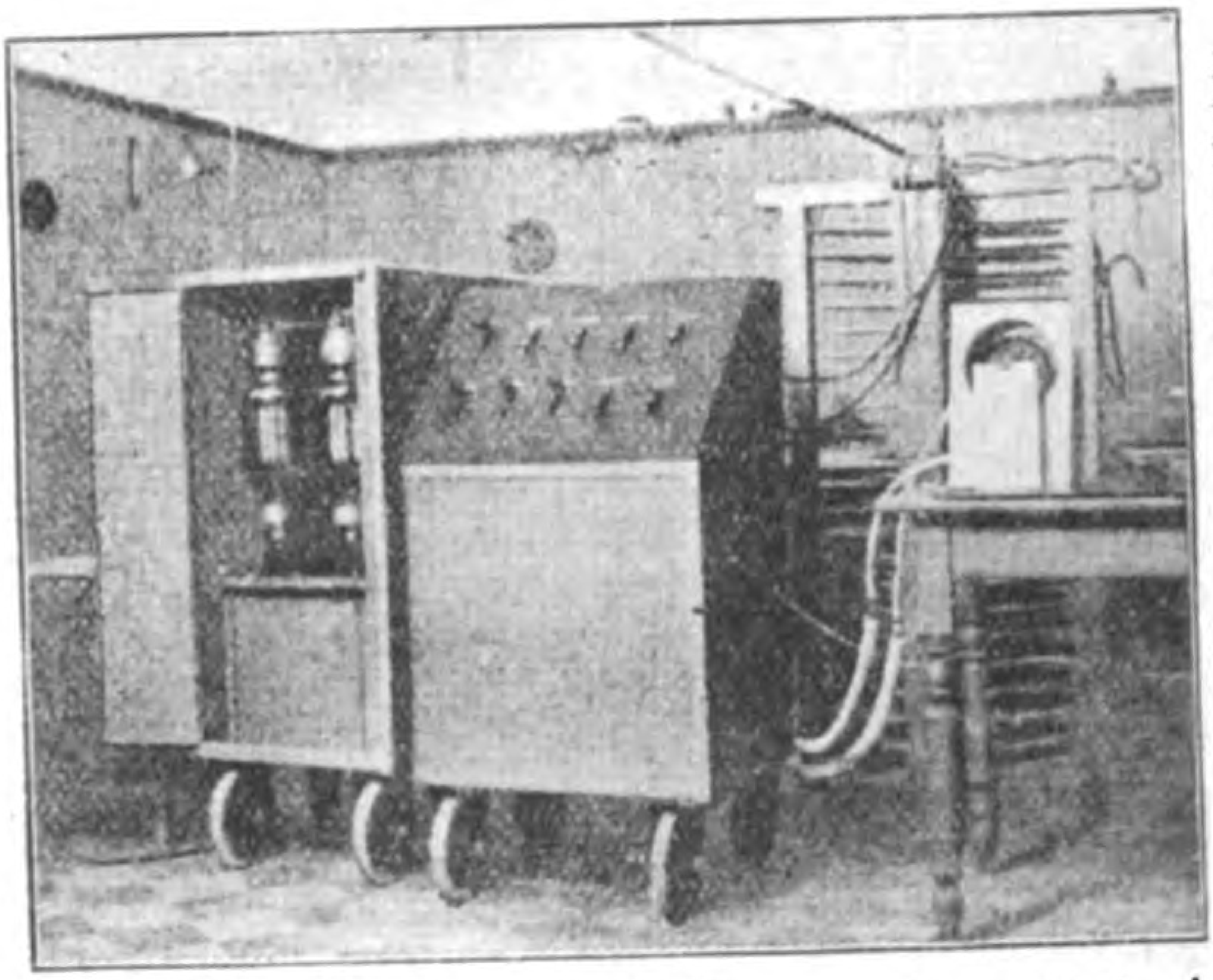
珠光遺愛の手水鉢

（京都紫野大德寺中眞珠庵）

珠光位牌

殺人音波(死音波(デス・サウンド))

竹內時男



油の槽の中に水晶のピエゾ電氣振動子(高周電流を加へると水晶杯が振動する事を利用した裝置)に五萬ヴォルトの高壓交流を加へ、一秒卅萬回の振動を爲さしめます。

此振動が油に傳はり、油面に達しますと、油面を十糎位の高さに隆起せしめ、周圍には油の飛沫を起し、是が三、四十糎の高さに上ります。

此音波は耳に聽えません。餘り振動數が多いからです。人間の耳に聽える音は一秒に付き二、三十回より三萬回の範圍の振動數を持つものに限られ、之より振動數が多くても少くても聽えません。

此油槽の中に長さ一米、直徑〇・二粍の硝子棒を浸し上端を握りますと、手に燒孔を造ります。

化學作用も此音波で促進せられます。

又フラスコの中の水に蛙や魚を容れて油槽に下げますと、一、二分間で死にます。是は振動を受けて體內器官が破裂する爲と、音波を受けて體內に熱を發生する爲とです。

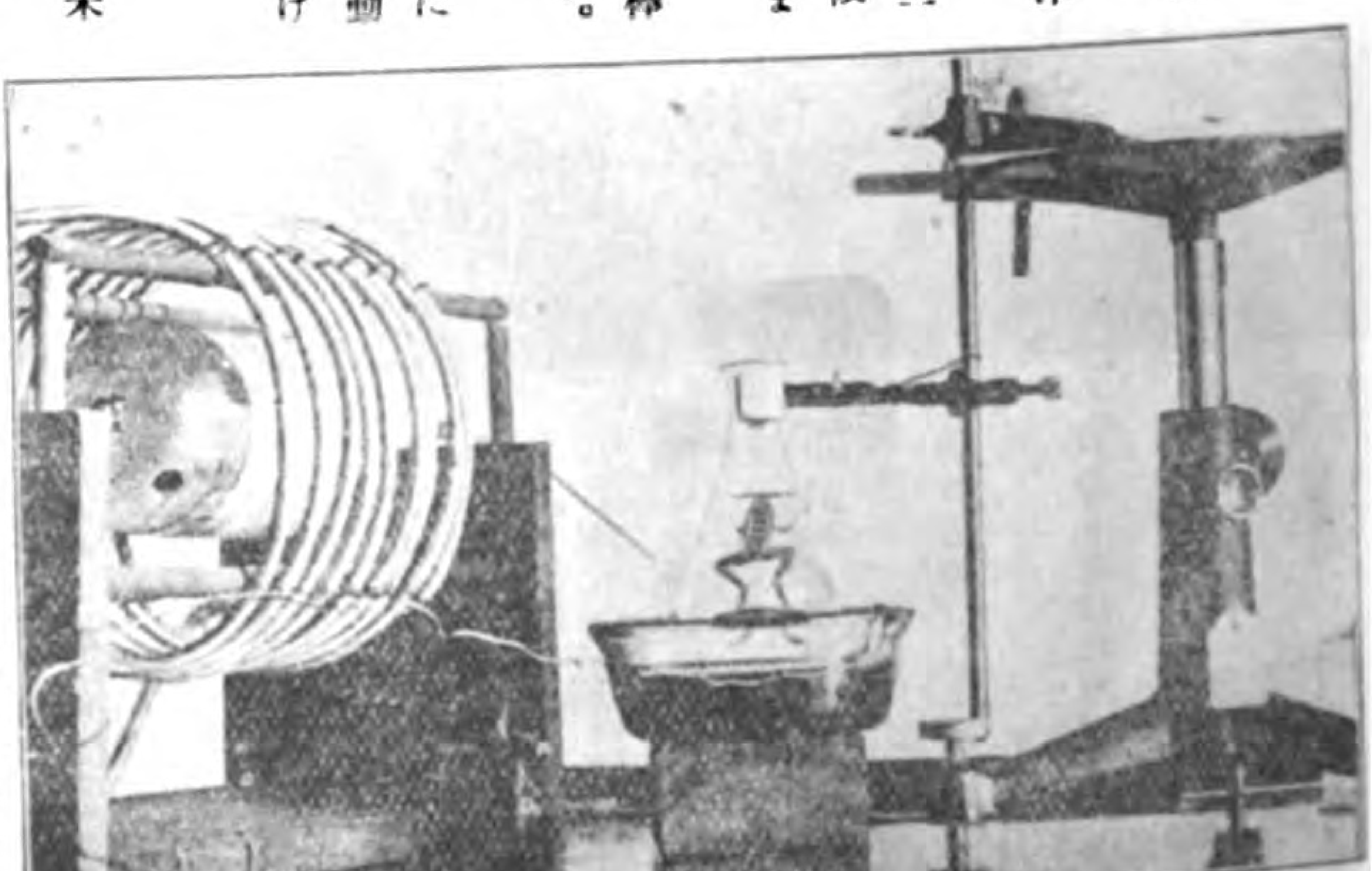
バクテリアや單細胞動物は死にません。

又殺人音波(死音波)と命名しましたが、未だ人體には試みられてはゐません。

アメリカのウッドと云ふ人の研究でありますが、當時秘密にせられてゐましたが、近頃詳細が發表せられ、其本性は私の推測と全く一致してゐました。

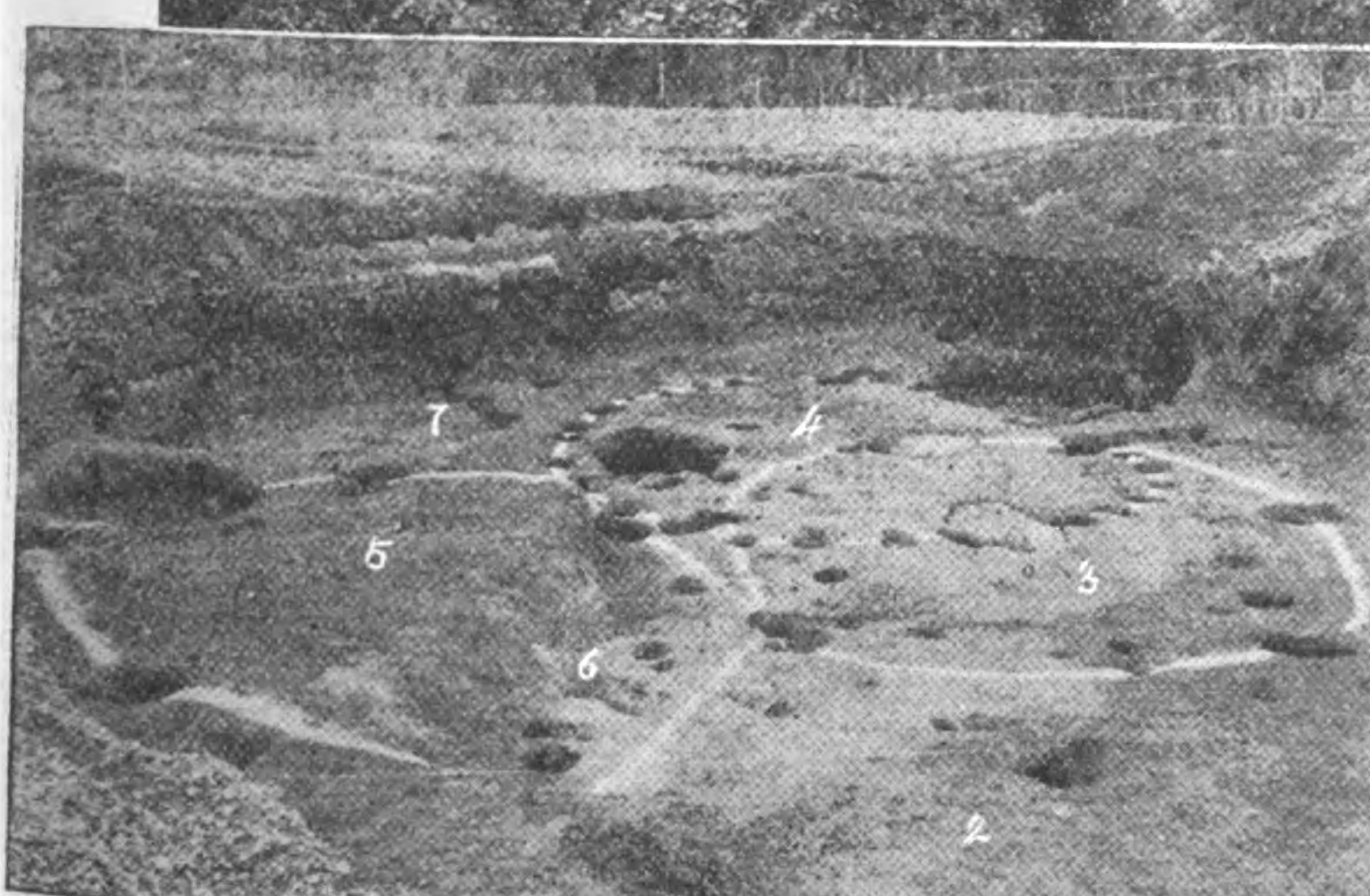
上圖は音波發生裝置で、一千ワットの眞空管二個、油蓄電器其他コイルなどが見えます

下圖は蛙を殺す實驗です。



石器時代の住居址（1）



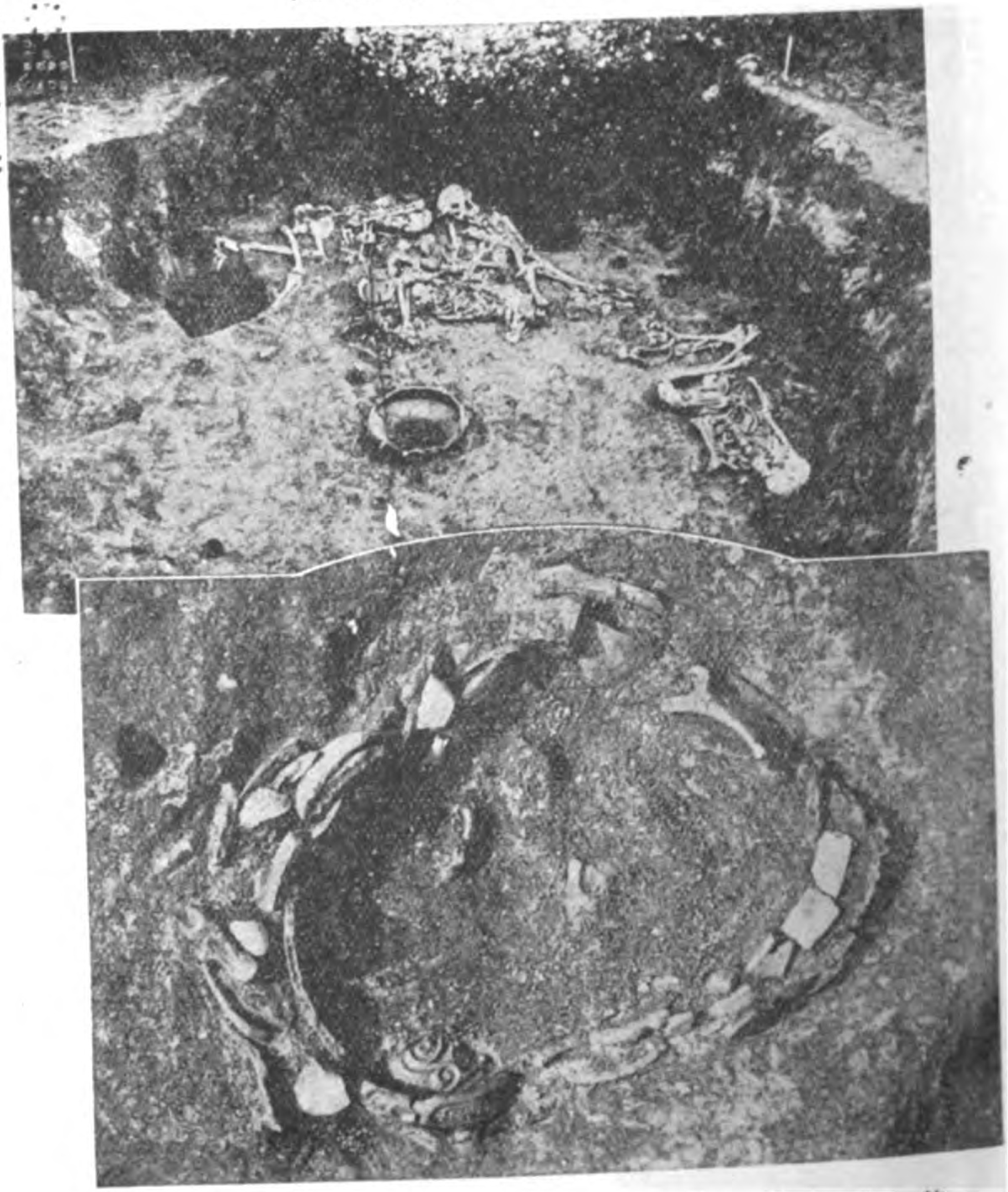


日本石器時代の住居址

松村瞭

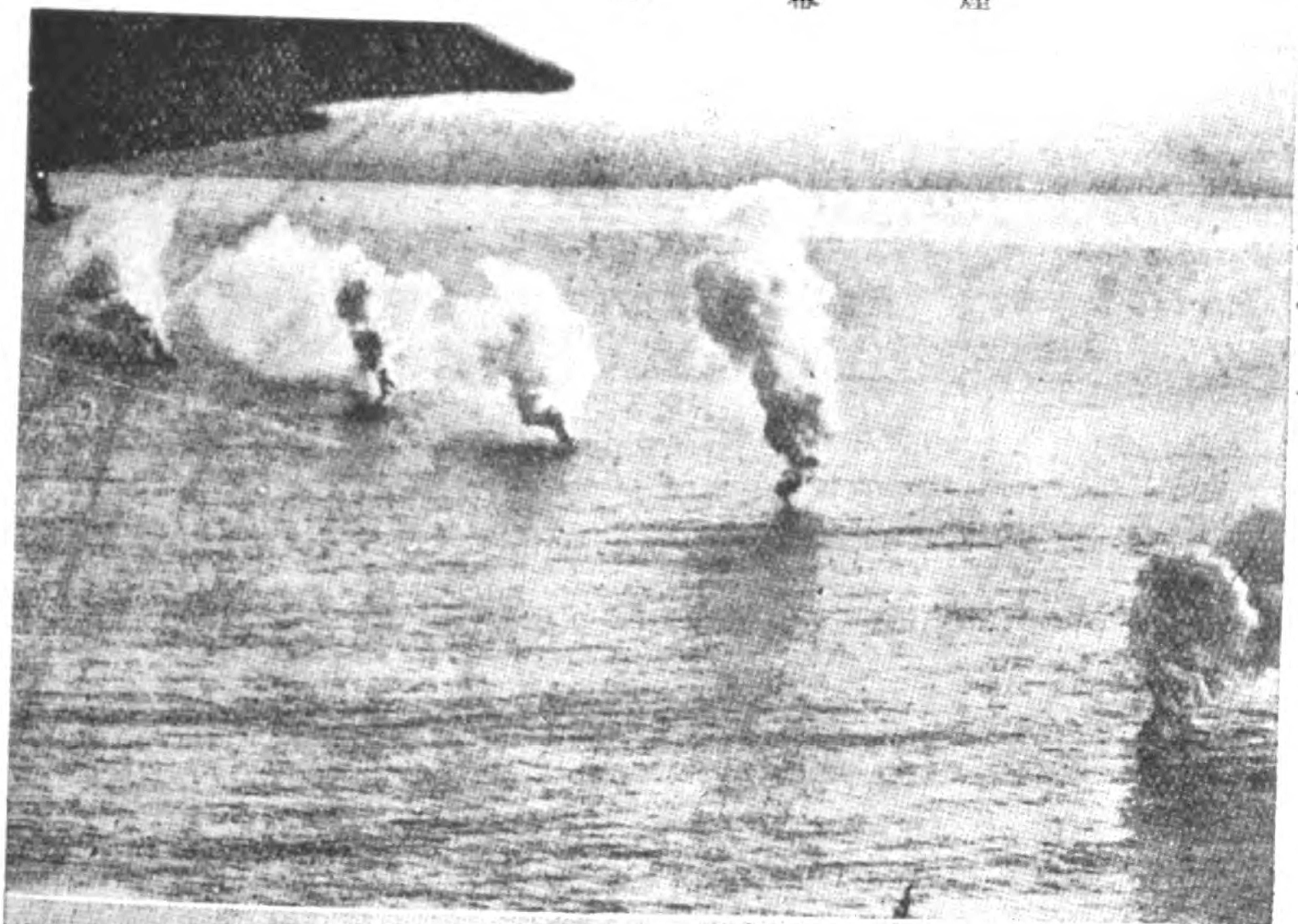
昨年東京帝大人類學教室諸員の精査に依て判明した日本石器時代の住居址。場所は千葉縣東葛飾郡柏井姥山貝塚。瑞典皇儲殿下御見學の遺跡。右上圖は表土と貝層とをはね地下五尺計に發見された住居址の一部。

石器時代の住居址(2)



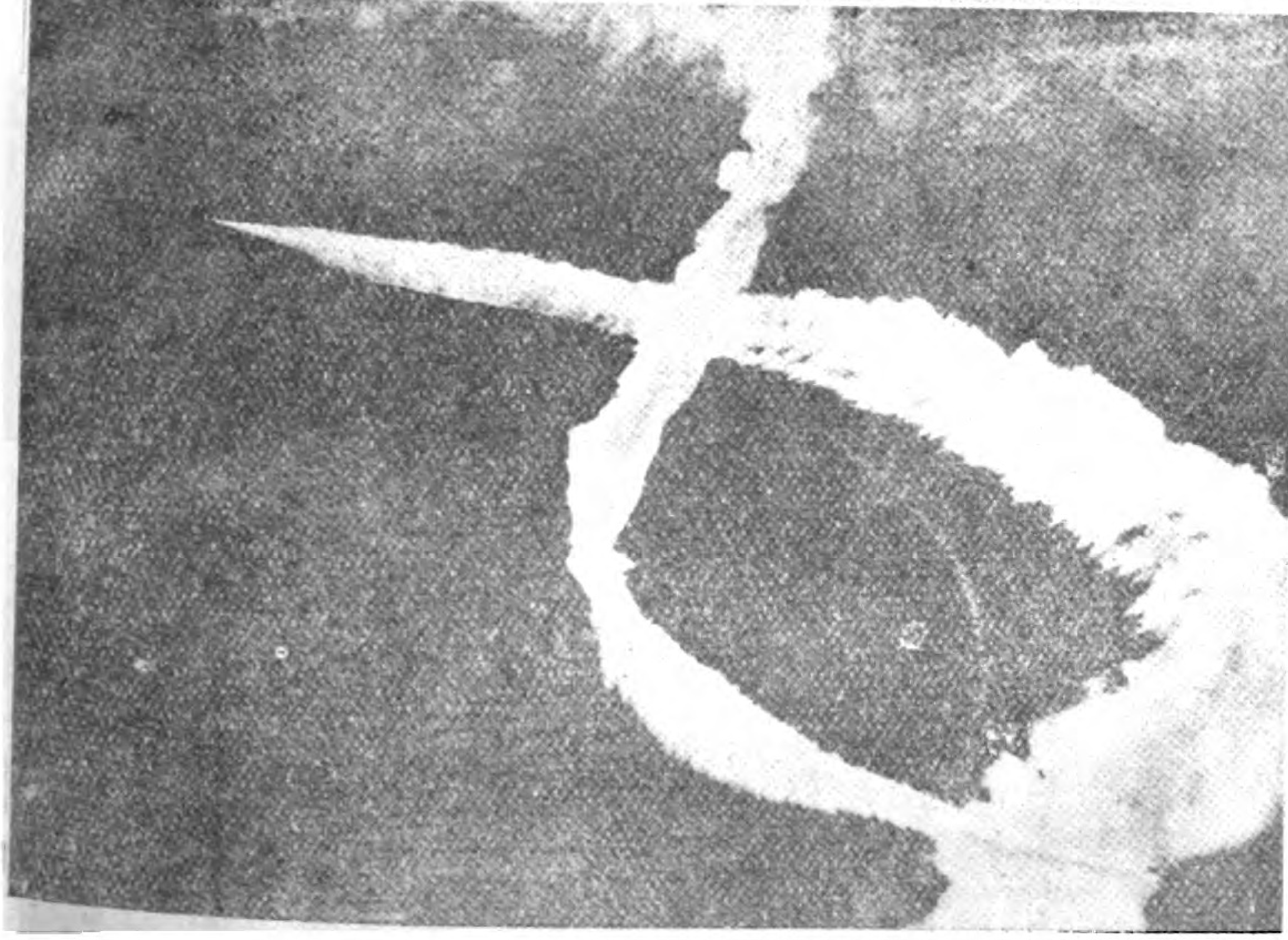
柱の穴。右下圖は完全に發掘を終つて露はれた住居址。環狀の白線は住居の形狀位置戸數を示す爲めに施したもの每戸柱の穴を存し中央には爐がある。左上圖は石器時代當時廢墟に埋葬した五つの死體。左下圖は土器片で圍んだ爐を上から見たもの。原狀のまゝ切取り今は人類學教室にあり。

煙幕の圖



左圖は英國飛行中隊が海上に作つた煙幕。敵の目を眩ましてこの後方で艦隊は自由行動をする。(普通は驅逐艦を用ゐて作る)





二重煙幕(左圖は最近の大演習に二台の飛行機がカリフォルニア州のサンヂヤゴ海岸で活躍してゐる圖)



煙幕應用の廣告（左圖は煙幕を應用して空中に文字を現出して廣告に使用したものであるが、其他森林の蝗征伐、害蟲退治に飛行機で有毒瓦斯を撒布して相當の成績を擧げてゐる）

東京府下最古の建築

佐藤　功一

東京府下に於ける最古の建築は荏原郡碑文谷の圓融寺本堂（室町時代）とされてゐたが近頃西多摩郡東村山字野口にある正福寺の佛殿が更に古く鎌倉時代のものとして早大助教授田邊泰君に依て發見された。寺の創立に就ては何等資料なく、傳說には昔は伽藍形式を備へ、何時の頃か此佛殿だけを殘して燒失したとある。殿は現存禪宗伽藍遺構の最古のものたる鎌倉圓覺寺舍利殿と全然一致し、明に鎌倉時代樣式の特徵を備へてゐる。





拆木城附近姑媳石のドルメン——鳥居龍藏（詳細本文參照）

唐人殺し

(「人買船」後篇)

大泉黒石

幻怪不可思議の連續的少女誘拐こそは実に明治中期の長崎市民を畏怖戰慄せしめた未曾有の大事件でありまして、そもそも何者が、何のために、いかなる魔法もて町家の娘を盗み去るか想ひ像とりさへつきません。偏醉宏潮、流言蜚語。ただ少かに其筋だけは、かの港に停泊中の支那貿易船金山號乗組員が爲す業と睨み、確たる犯證を摑まうと暗中に活動する折から、右の唐人船より夜陰秘かに上陸せしは近敵の水夫です。尾行中の刑事。假辮髮支那服の松村君は支那人街まで尾行したが姿を見失ひ、途上に奇異なる六神丸賣と出合ひ怪しみ捕へんとして逃亡されるる矢先に、いづれかの娘がまた拐はれたと報ずる警笛に驚いて警察へ駈つくれば、署長は漸く犯人の手掛がついたと叫ぶ處が前回の切目でした。

「ムー！　それがまだ十分とは立ちをろまいて。面體は職人か新派の田舎まわりと思はれる、色淺黒い苦ン走つて、風采は越中に白フランネル胴卷の素つ裸だ。づぶ濡れの頭から手足の先まで、打扱擲倒、血に染んだ若者が、息を切らして、こゝへたぐれ込むとバツタリ、手真似で水々といふから、すわ何事かと押つ取り巻いて柄杓をくれた、がぶがぶ、どうやら元氣づく、と、新地街の方角を指さして、喘ぎ喘ぎ訴へるところを聞くに斯うだ。先刻。何か用達の歸り、玄眞院の塀外を通りかゝつた、といふ疵だらけの此の男の目の前、山門のうちから、身のたけ七尺。肥滿。斑豹のやうな壯漢が突然のツとあらはれた。

一たい物騒な噂の場所で、おまけに人通りもなかつたし、はッと膽をつぶしたと言ふンだが、薄闇にもそれと知れる、這奴の脇下に抱ッ込まれてゐるのが十二三歳の少女、髪ふり亂し、泣き叫び、死もの狂ひに藻掻き遁れンとしてゐるではないか。この時刻にこの光景！　さては夜々港町の娘を拉つて行くのは此奴だなツ。君だつてさう思ふだらうし、はじめて怪物の姿を見屆けたら、義勇一番、武者ぶるひ、我身の危險などは打ち忘れてかゝらずンばあるまい秋だて。唐門から銅座川まで五六間のところで、疵だらけの男は侠氣の勇み肌、矢庭に後ろから跳びつく、不意をくらつて、這奴、蹌めき倒れる、と、遮二無二、少女を引つ奪りに乘しかゝつた。途端。鯨の尾が大地を打つ勢ひ、目もあざやかに、猛然と彈ね上り、あべこべに捻ぢ伏せて、滅多無性、骨も碎けんばかり打ちのばした揚句、川ン中へ蹴込んだといふのだ。ム！どうせ、そのくらいの膂力はなくて叶はぬ奴に違ひないと吾輩も推察しちやゐたがね。一たまりもない。泥水くらつて斃りさうなのを、一生懸命、向岸に這ひついた疵の男、一刻の猶豫もならンと、裸の血まみれで、こゝまで急報に來たといふわけだが、右の少女は確かに見覺えのある玄冥院の、お絹とかいふ一人娘。一方の曲者は大輪に龍の青紋の支那人であつたと言ふから、もはや紛れもない金山號の水夫だ。這奴。いかに獰猛不敵といへども、獲物を抱えて此の時刻に廓門の見張番所を通過する冒險は、よう遣り得まい、とすると、天明まで何處かに潜伏し、見張番人の退出を待つて廓外に脱出する考へに相違なからうから、今のうちに出口々々を閉塞してしまへば、袋の鼠も同然。吾輩。愉快のあまり拳を握つて掌を打つと萬歳！　みんな歡聲をあげて拝舞しをつたが、あはは、いや。なに。もう手中のものだて。ム！　そこで直ちに、居合はせた巡査を六名、南北の廓門に急派したやうなわけだ、さうして袋の口を塞いで置いて、夜が明けると市内の非常線に就いてゐる巡査を召集し、一齊に廓内の大搜索を命ずる、それについて今部長と共議をしてをつたのだ。見たまへ。犯人は矢張り唐人船の乘組員であつたらうがなツ。」

「や。近世の炯眼！」松村君は椅子に飛び上り絶叫するンであります。「正しく布袋の變化！　案の如くに遣りをつたな。汝奴畜生！」「何と？……」義經公佩き給ひし御太刀は、虎毛の鞘尻の物嚴めしきを此の頃の流行とする口髭、右ひだりに颯と捌引かして、署長は仔細げに目をしばたきます。「……おい。君。そやつに心當りでもあるンかね？」

「しやツ、ありませいでか！　署長。實は其事でちと御打合せに參つたんです……」刑事は待ちかまへて肘を張り肩

を銜つて、かの猖獗なる支那水上尾行失敗の顛末を、身ぶり交ふ舌頭より、卓上めがけて、熱烈な唾液と一緒に吐きおろし、満面得意の微笑です。「……惟ふに夫は、私がその六神丸賣りのペテン師追跡中の出來事でせう。幸ひ夫だけの手配が施してありますれば、お説の通り、彼奴め、天に翔り地に潜む術あらざるかぎり、袋の鼠。犯人逮捕は最早時間の問題です。やあ。ごらんなさい。今日の黎明と共に、恐らく太陽は斯の如き平和の表徴をもつて港の空に再び光り輝くでありませう。然し只今の御話の埠頭に來つ裸の男が飛び出した時には、やツ、件のペテン師ではないかと思ひましたよ。あはは。好漢。何うしましたらうか?」「ム! あれは手當を加へて俥で送り返した。職人か役者の類かと思つたら水上生活者だ。管内の者ではないが、裸では宜敷くないから、吾輩の着物を貸與してやつたよ。住所姓名は控へてある……」署長は欣然として申す。因に少女誘拐事件突發以來、警察に寝泊りすることもあるので、着物も用意されてゐる。更紗の下着、黒出黄八丈、白縮緬の兵古帶、貸してやつたのは、それでせう。そこで傍らの刑事部長は部下の勞を犒らひ且つ命じました。「フム。成る程、フム。さうだつたのかい。君が犯人の顔を知つてゐるのは此際大いに便利だ。御苦勞だが、交替時間まで引續き新地街の密行を頼む。言ふまでもあるまいが、尤分の警戒と注意とが必要であるね。これから玄京院にも一寸立寄つてくれたまへ。」

三十分後である。支那人街南北二個門に詰めたる見張番や巡査に就て犯人が廓外へ紛れ出た形跡のない事實を確かめた松村君は、街の西端に横たはる銅座川のほとり、玄京院唐門內、本堂とは鐘樓と向合ひの庭裡の闇に立つて案內を乞ひつゝありました。御承知の通り。此の港町には往古より幾多もある古寺の支那寺のなかで、これは極く小さく寺はない末寺。天妃・大陰神を祀るところから院號も玄宮と稱するんださうで、唐人船入港中は船の荷主や船員が顧客の貿易商・客棧・酒樓の亭主連、毎夜本堂に集り航海安全の祈禱を上げて貰ひ、手首に巻いて置くならば、風雨水災を免かれるといふ五色の絲を授かり、船人へ土産にくれる古例の貧乏寺。二年前に遷化したる本仙和尚といふ支那僧の代までは、さほど苦しくはなかつたやうだが、その頃支那黄檗山から漂來し、本仙和尚の弟子となつたる本印といふ此の町の生れの日本僧が、師僧の衣鉢をついで、後釜に坐つて以來の不景氣に、いはゆる起死回生の策略に玄宮院の六神丸なる招牌を、唐門の柱に懸けるほど窮しました。その向ふを張つて、維新前には代官職まで勤めし何名家の子孫、即ち家傳の秘方と稱する御代官ふり…を賣出す、と、鐘を撞いて時

を報せるのが本役の吏家では、阿蘭陀洗粉を創つて市に賣りそめるといふ時節だから怪しむ人もありません。で、本堂は流石にガツシリした骨組みだが、住居・臺所兼帶の庫裡と來ては、釣洋燈の火屋から煙りのぼる油煙眞黑く渦卷いた天井の、破目を漏る雨あし、崩れたる壁づたいに疊へ浸みつく頽廢ぶり。ぐわらツと、颺ふき晒しの襖を蹴あけて現はれたのが、廣びたい太眉の迫り、鼻うづくまつて唇いやしく、逞ましい恰服は、水滸傳の將門神といふ男年増の、白無垢木綿、衣下、胸もほだけて、怒つたやうな、悲しいやうな、ひどく取亂した氣色、いと險しげに、ギヨロツと目をむいて、人を見る代物です。これが住職だらうと、松村君は身分を明し、和尙の娘が掠はれた前後の模樣を知りたい旨を敍べ、愁傷の意を表しますと、この支那服の男が、ほんとに其筋の役人かしらど訝かる風でしたが、やがて、盜まれたる我子の運命を思ふ慰められぬ悲しみや、埋め合せのつかぬ損失に心顚倒してゐるらしい彼は、その悲憤の疏け口を松村君に見つけたやうに、烈しい權幕で眞つ向から喰つてかゝりました。

「先刻も巡査がさう言つて來たから申して置いたが、貴公、警官なら改めて言ひませうて。フム！どたい、よくも、おめ〳〵と提げて參る面目があつたもんぢや。今さら何うして娘を盜られたの、何時盜られたの、聞いて何うなさる？取戾してやらうとでも、言はツしやる積か、えツ？全くだ。貴公等としちや當然の務めぢやから、申譯のお體裁にも、一應はさう言はんけりや相濟んまいが、然も一體これまでに幾人の娘が消えて欠くなりをつたらうか？のウ貴公。そのうちに貴公等の手によつて、親御の許に返つたンが一人でも半人でもあつたろか？だらしのない、放埓なこと呆れ返る、警察もないわい。形ばかりぢや。目玉は節穴の木偶ぢや。今日此頃。そんなものが何の賴りにならうかい。フム！拙僧は、いや、拙僧ばかりではあるまいぞ、もはや貴公等の頓馬に用はないンぢやから、豫て覺悟はしてをつたよ。ついぞ一人の犧牲者も出さない此の新地街ぢやからと言ふて、ゆめ〳〵油斷はせなんだが、唐人船の御祈禱に今宵も大勢參詣の衆が本堂に集り、拙僧は讀經三昧ぢや。その間に何が起りをつたか、後頭に眼がないよつて知りやうがないわい。漸く勤業が終つた。娘は一人だけ庫裡に置いちや不用心と思ふて參詣人の間に坐らしてあつた。それが見えンのぢや。俄かの大騷ぎ。手を分けて椽の下まで捜したがゐない。さては盜られたと氣がついた。後の祭。阿鼻の羅刹め！黑縄の鬼蜮め！參詣衆に紛れ込んで巧みに瞞し連れ出したに違ひない。拙僧は氣が違ひさうぢやつた。天地にかへがたき一人娘。亡き妻の忘れ遺見

ちや。その妻の死が機縁で拙僧は佛門に入つたンちや。於淡に忘す身が衣のふところに乳の布施を乞ひ、艱難苦勞して育つて來た掌中の玉を奪はれて、はや何處の空に生くる力があらうか。實は眞つ暗ちや。ム！これでも拙僧は生別死別の理を說いて衆生を教化する出家の身ちやが、己れこそは生死の一大事を得も明らめで安穩いたす凡夫であるワと言はれても、何うしても。こればかりは諦め得んのちや。ウヽ！愚か者めが五尺の兒骨頭に着して煩惱苦道に迷ふとは、汝、悟りをらぬか？生也全機現死也全機現：：作麼生何所傷……喝々と己れを打ち叩くが、佛力も娘への情愛の絆は斷ち切れぬ。駄目ちや。ム！痛煞と言ふなら言へ。狂態と叱すなら叱せ。生きて搜さずに居られるものか。足のつゞく限り世界の涯まで步きまわつて娘を搜す。拙僧は今その仕度にかゝつてをつたんちや。貴公などに構つてはをられンて、お歸り。」

相手には物ひと口いはせず、罵言と泣言、並てつゞけに列べ終ると、淚ぐんだ傷めた顏にガチ／＼牙を鳴らし、プイ、悉さわりも荒々しく引込んぢまつたが、いかさま六神丸を內懷に稼ぐだけの和尙、おまけに餘程の子煩惱と見えて、日頃は教外別傳の直指人心のと、落ちつき拂つてゐるに違ひない商賣身柄も恥外聞も打ち忘れ、俗衆よりも度しがたく取り逆上てゐる。正氣の沙汰ではありません。おどろき面くらつた松村君は只呆氣に取られて引退りました。子を失へる親の心を察すれば、哀れ氣の毒の思ひ胸に迫るのだ人情だが、いやはや並では抱腹笑止ー催したくなるのは苦笑と輕蔑の念だ——此方の苦心努力も知らずに得て勝手な御託を列べやがる俗物め。何處なと往にさらせ！——そこから係て豫定の巡行についた松村君です。胡笳の高閣も月琴の嚠喨も夙に斂つて靜かに眠る暗い街の辻々へ警戒を配り乍ら、靜しく甃路を此々と、例の南京飯店の裏通りへ向つて參りました。このわたり、俗に福建小路と申し、福州、馬尾、漳州、厦門邊の、あまり結構な身分でもない支那人が、居住者の大部分を占めてゐる古佐ぼんやり、晝までも蝙蝠の飛びかふ狹い衢路でありまして、安玩具やら爆竹やら、線香やら燭台などを鬻ぐ、曖昧いぶせき店ばかり櫛々立ち列ぶなかに、たつた一軒、こゝだけは浙江省の寧波生れとかいふ、金滿べろワと倒けめくれし招牌には同興號。長札には陳向生と見える。しかし、屋號の同興で通つた六神丸屋が、南京飯店の裏口と斜かひに向合つてゐる、その軒先へさしかかると、戶締りを忘れて堅たものか、入口の扉が二三寸ほどあいてゐます。おやと松村君は立ち停つた。こゝの主人の我利々々屋といつたら、このへん一たいに、さうした氣風の唐人どもが舌を捲いて呆れるくらい。明

治初年。こゝへ渡り來たての若い身空から、胡麻鹽頭の今日に至るまで、小僧もつかはず、下婢もやとはず、子は金に生ませるを嘉として妻も娶らず、隣り近所の交際もせず、たつた一人で夜を晝につぎ、兀々と働き通して餘程溜め込んでゐるといふ噂。金匣の鍵は己れが手にすら安んじては持たせない、支那人によくある守錢奴の典型です。かりそめにも戸締りを怠つて寢る！ そんな放れ藝の出來る老人ではないのに、これは何うした間違ひだらう？ 扉のあき目から二三ど聲をかけて見たが、家の中は森閑として應ずる氣配もない。打ち棄てゝ置かうかとは思つたが、氣がゝりになる、柄のよくない粹わるの、自ら號して閭巷俠といふ輩の徘徊する物騒な界隈に、油斷をすると、いつも其の筋の厄介もんです。チョッ。松村君。舌打つて入つて行きますと、藥箱やら打紐やら紙屑で埋り、六神丸の異香に咽びかへる薄暗い店頭はガラン洞。誰もゐません。泥坊なら悠々手當り次第に掻つ拉つて行ける不用心さです――もし。もし――突當りの扉を叩いたが矢張り返事がないのに、そつと押せばあいたので、首を突つ込んで覗いたわけです。五彩の色に染めぬいた花莫蓙も瀟洒なる部屋の正面欄間に掛けし小蓬萊の額したは、切子玻璃を蜘蛛の巣形に組合せたる障子の圓窓へぴつたり、一台の寢牀。枕もと斑文竹の長脚の卓子には白磁の小鉢に秋海棠の花をつけ、足もとのそれには眞黒い石龍を躍らし、左右の壁には、鐵扇道人老頭陀の對面、艷芳未央生の閨中情景、例の、おきまりの風流奇談を繪像にしたる縫箔の幅を垂れめぐらしてゐます。中央に据えつけたる黒檀の大卓子の上には銀の水烟管と、青貝の菓子盆に雲片糕など盛つた傍ら、油ほと／＼盡きなんとして光芒弱々しく、じり／＼音を立てながら燃えてゐる玻璃洋燈のほとり、肘掛椅子に、紫紺紋縮緬の夜衣にくるまる太肉の體軀をヅブリと埋め、これはしたり、主人の陳向生、讀みさしの新聞を兩手にひろげて顏にかぶせたまんま、深い眠りに落ちてゐたもんです。

「もし。もし。」

叱るやうに鋭く呼びかけたら、おどろいて跳ね起きるかと思ひのほか、身動きもしません――ヘッ。殺されたやうに寢てござる。これ。これ。大人！ ――ポンと肩を叩く彈みに、蠟細工の鵝の喙、長つぽそく尖り曲つて半透明な爪の、大きい平打に、猫目石の指環を篏めた黄いろい相手が、ばさり、膝に落ちて、新聞紙の蔭から、ぬッと現はれた頬骨の高い醜魁な瘡痕面。生ける光もなく、どろんと濁る慘白い眼を半ば見ひらき、腐つた鮪の肉の、厚い唇のあひだから、土いろの舌を、だらりと吐い垂れ、ちび髯のあと疏らたる下顋つきいだし、すりこ

け[illegible]
一[illegible]いで、[illegible]汗[illegible]得ならず汚ないもの、これが何を意味するか、もはや一目でわかりませう。殺されでもしたやうに熟睡してゐるンではなくて、事實はほんとうに絶命てゐる老人の上に宿る生々しき死の影を見た刹那、刑事のおどろきは何うであつたか？頭のてつぺんから脊骨をつたひ流れる氷のやうな、鋭い冷たい刺戟に、總身ゾッと寒氣立ち、竦み上つて、蹌めき蹤ぎ、腰づかんばかり、どさと後ろの壁にぶちあたり、意外なるものゝ姿に對する怖ろしさに、心の底まで貫かれ、息もつまり、手足の慄へも、しばらくはやまなかつたンでありますが、かゝる非常の發見に直面するとき、しづかに勇氣を奮ひ起し、本能に打克つて、心の平靜を恢復すると共に、取るべき處置を敎へるのは、根强い職業意識と屢々なる經驗による第二の本能とでも言ひませうか。松村君は恐怖と闘ひながら、そろ／＼近づいて死人の胸に耳をあてがひ、そこに生命を刻む心臓の音、全く絶えてゐるのを確めると、己れの額の汗を拭きながら、おもむろに部屋の中を見まわし、さて、一人の承繼者もない老人の遺産の秘められてゐる家を飛びいで、前口の扉門に馳けつけて、張込みの巡査と、門番所の支那人取締に急を告げ、外事課の主任警部と檢視[illegible]て、老人の死體を[illegible]結果、醫官は何ら躊躇なく老人の死因を心臓麻痺と斷定しましたが、實際、亡者の表情には苦痛の痕跡もありません。多方。新聞でも讀んでゐるとき不意に心臓の鼓動が止まつたンで、附きものゝ咳嗽に襲はれ、反抗的に眼を見ひらき、込み上げる嘔吐の惡感に舌を吐く、その瞬間に肉體の凡ての機關は活動を熄めて了つたのでありませう。死因については少しの不審をも容れる餘地のない立派な大往生。かくの通りです。死人の身の上について、四人の間に數分間の談話が取交されると、そこで其筋の方からも、支那領事に對し、一應形式的の通告を致すのが、從來よりの慣例だが、死體その他の始末は、この支那人の取締役に宜敷く一任するといふことになつて、檢視官と警察醫は引揚げる、と、支那人の頭役は松村君に向ひ、改まつたる丁寧な挨拶を叙べるンであります。

「さて此の度は飛んだ御手數を煩はして相濟まぬ次第でした。」

「いや。何。」と刑事です。「しかし。貴公。厄介でしたな。」

「へへへ。」さう言はれると、いかさま、こいつは迷惑さうだが、人のいゝ濃髭の顔のぐるりに煙脂だらけの焦臭い微笑をひらいて街の若年寄「どうも仕方がありません。言はねここで

はないンです。こんなことになつては困るから、女房を持つやうに、手前、かね〴〵勧めたものですが、なか〴〵どうして聞きをらンのでツさ。呑ン坊。徹底しとるです。へエ。女房もてば子どもが出來る。女房子どもにムザ〴〵食ひつぶされてなるものか。女が欲しいときには、その場かぎりの女郎でも値切り倒しに行くつてな流儀。なに。それも容易に行く人物ぢや、ありますまい。なンしろ、尊官、あの船から持つて來る六神丸の篋を片つぱしから封切つては、小さい丸を一つ二つと刻銘に數へ、定つた數に一粒でも足りなかつたら、叱罵を添へて突返す。それほど細いんだから、佛の棚おろしをしたかありませんが、少かばかりの町費だつて、やつぱりネ、手前ども世話人が、月に一ど貰ひに參ると、陳さん斷腸の思ひ面。その日。一日は膨れてゐましたつけ。そんな風だから、この年齢になるまで友達はおろかです、お隣りの人にオハヨオござひますといふのも餘計な損害。藥を買ひにいらツしやる御客様にだつて有難うとも言やしません。我慾の强いことは高利貸も三舍ですわ。さうして兀々溜めた金やら家財道具やら、どれだけのものかは知らンが、死んで黃泉に土産となるわけでなし。ごらんなさい。これぢや何にもなりませんて。」

「ツン全くだ。貴公。差し當り何う處分なさる？」

「さうですね。これが米國だと役場が沒收して然るべく始末するんですけれども、御承知の通り、この居留地には町會、と申しても名ばかり、役場がありませんから、何でも斯んな時には、佛の後生のためにもよからうといふンで、本人の菩提寺へ預ける、まあ寄進するんですね。さうして墓のお守りやら、朝夕のお經など賴ンまして、佛の菩提を弔ふて貰ふことになつてます。その方がサツパリしていゝんです。お寺さんも居留民のお賽錢だけぢや遣り切れン。たまには斯ういふ奇特の亡者もゐてくれなくちや、屋根普請の眞似も出來ますまいからね。へへへ。とにかく夜が明けるのを待つて、領事へ屆けに參り、手前、一應相談はいたしますが、これまでの例に依つて、さやうの都合に取計らはれるだらうと思ひます。」

「成程。それで一切片づきますな。ぢや、これで失敬しやう。」

「どうもいろ〴〵お世話様でしたがもう結構です。爺さんの佛頂面も今日がきり、手前、お通夜のつもりで、夜が明けるまで、此處に番をしますから、どうかお引取り下さい。」

戶口まで顏役に送られて外へ出た松村君です。この方は先づ以て一段落ついたが、やれ、やれ、畜生、肝腎要めの仕事最中に、またしても餘計な道草とは！ こいつ行きがゝり何うも據

[illegible]でも、大切な時間をつぶしたと思へば、返す〳〵も忌々しく腹立らしく苦々しいのでありますが、しかし、どうして今夜は、六神から六神丸に縁があるンだらう？前に散々骨折らしたのが六神丸賓。今度がまた六神丸屋。もとより偶然とは言ひながらも、奇妙といへば奇妙です。ふつと氣がつくと、筋向ふの南京飯店の半ばあいた木戸口から、亭主の雁首が此方を向いて、瞼の皮の垂れかぶつたる寢呆け眼、三角に尖らし、同興號から出て來る刑事を見てゐました。

「あゝ、もし旦那しやん……今時刻。大へん騷々しい。わたし目さめる……同興號。何事あるか？」

「爺さんが死んだんだ。」

「死んだア!?……あゝ。それ。ほんとうか？……」と、びつくりした雁首が、胴體もろとも躍り出し、フウム、フフウム！感慨無量。澁苦茶の表情です。あんな變痼人ではあつたが、ながねん目と鼻の間に住んだ誼みも少しはあらう、けだし、獨身者の陳老人は、三度の食事を此の飯店に來て、お粗末にすましてゐたらし。松村君も一二度は卓子を同じくした覺えがある、さもない時は此の亭主に運んで貰つてゐたのだから、お得意さんの關係もあるに違ひない。死んだと聞いては流石に平氣であり[illegible]る話も[illegible]くんで、しよぼつくんでありませう、「……[illegible]らんもンだア！陳さん。何うして死んだらう？……」いかにも不思議と雁首を捻り曲げて、松村君から死體發見の顚末を聞くと、ますます訝かしげに「……新聞を讀んでゐた!? フウム！…………」と感動ごえです「……今晩。わたし食事持つて行く……陳さん矍鑠してゐる……滅多に物言はない人……珍らしい。話する……はあ。旦那しやん知つてゐるか？……この港……わる者たくさん。贋物六神丸つくる。それ全く安い。知らない人誰でも買ふ……ほんと物安くない。あやヤツ。ちとも賣れない。商賣ペケだア。もう店やアめて寧波歸る……あちら景氣大變いい……ひやア！さうか？フム！仕方ない。故郷歸る結構。然しピンしやん何うするか？わたし訊くなア。陳さん連れて行く言ふた……あゝ。その人死ぬ思はれぬ。それ。ほんと意外！……ピンしやん聞く……ま。どんなに哭くだらう。可哀相に何うするよろしいか？」

「ウム。氣の毒だね。」と刑事です「そのピンしやんとは何だい？」

亭主はつるりと撫でおろす雁首の美しい女と言ふから、別嬪のことらしく、名前を知らンのでピンしやんと申すンださうで

す。見る見る大きくひろがつた好奇の目先に、亭主は漸くさい小指を摘み出して、これ〳〵と御念に及ぶからには、外交か情婦のたぐゐでせう。刑事もしたゝか驚かうではないか。老いてます〳〵奇な石部金吉に艶物とは、さても天下これほど困難な配合があらうか？信ずるには餘り緣遠い言葉です。同日に語るべからざる事柄、いや、事件です、といふのも實は世間の噂に基づいて、一にさう感ずるンで、まさか嘘を吐く所以や筋が、飯店の亭主にあらう筈もないから、まこと老人に左様の女があつたとすると、世評、當にならンこと夥しいと言はねばならなくなつて來る、いや、さうと聞いて、つら〳〵慮ふに、これは、いかさま世巷の忖度が間違つてるンで、こちらの方が眞實であるべきもンではなからうか？見かけによらざるは人間なり。木石にはあるまじき老人。恐ろしく野暮に見えても存外話せる方であつたかも知れず。どういふ譯で女房を持たなかつたかは宛て狗、外妻情婦を何れかに囲つてゐたところで驚くには當るまい。世間が知らないのは、ことさら吹聽してまわらねばならぬことではないからであらう？いや。よろづ沈默秘密主義の老人。何を何處に匿してゐるやら、知れたもンではないのだから、生きてゐるうちは堅く秘められてゐるが、死んでから姿を現はすもの、強ち女ばかりではあるまい。で、その別嬪。日本人か支那人か、それとも……？それ〳〵確かに日本婦人と言ふのです。何時頃からの關係かと重ねて訊けば、詳しいことは何も知らないが、亭主、氣がついたのは最近のことだといふ。わからぬ筈です。おまけに、それが雜なほ暗い此の路次に夕闇匍ひかゝり、人の顔も朧ろ定かに見極めがたい時刻に、何處からともなく老人の戸口に揺めきあらはれ、青白いかげろふの靡き伏すやうに忍び入り、また何時の間にか消え去るといふ幽かなる蜴形。形畸而妖の老人とは、面相年齢ともに奇異なる美醜老若の對象をなすンださうで、老人、灘に鰭うつ大鯰、いや寧ろ海豹の化け物ならば、これはまた小波の汨ぎにも艶あやふげなる纎脆き針魚か鮎の精とでも言ひませうか？手ぶり身ぶり片言まじりの説明ながらも、かくは想像される、そのたをやめが、支那老人でも旦那に持つ了見です、どうせこの町にはザラにある苦人相手の通ひ妾や日蔭者と同じ、お金が目的であるに違ひない彼女、三日にあげずやつて來るらしいので、老人の方からは滅多に出向かぬ按排だが、ほかに行く處のない大人、昨日は半日、店の扉に鍵かつて居なかつたので、或は故郷へ歸るについての話でもしに、彼女の家へ出掛けたのではあるまいか、とか、晩飯は歸宅してから、店で食べたとか申します。すると其の女は、陳さんが寧波へ連れて行くといふ程までに、目をかけ

てゐたらンなら、[illegible]、幾ら[illegible]二百へる權利があるだらうに、そんなこたア誰も知らンし、ほかに證人もなからう、陳さんだつて死ぬとは思ふまいから、遺言狀も書いてないとすると、お妾さん、旦那の死顏に幾ら涙を落して見たところで、また君が誰彼に向つて幾ら事情を說明したところで、世間の奴が承知しまいて。おや〳〵さうでしたかと、受取るものが一人でもあるなら、あとの九人は、君と女と共謀で騙るんだとしか思ふまい。結句、一文にもなるまいだらうぜ。俺も知らなきや兎に角、それも日本人同志の關係なら、取り上げられるか、何うか、一ぺんの口添ぐらいはしてもやらうが、なンしろ財産の所有者が、治外法權國の亡者と來ては、裁判にもなるまいよ。番所の顏役——あの李君の話によれば、一切合財お寺へまつり込むんだつてね。坊主。豐年だ。何處だい。運のいゝ寺は？」陳老人は浙江省の生れだから、檀那寺は浙江寺だらうと亭主は申します。山號院名の他に其寺の檀徒の生地をつけて呼ぶ支那寺もあるンだが、浙江寺は知らなかつたので序に聞けば何とそれが玄冥院ではありませんか？吉凶は繩の糾ひ。我が子を失くした代りに他人の遺產を丸取りにするとは、さても何の因緣だか、今にさうと聞いたら、泣き出しさうな、あの物狂はしい吼え方に、どんな北叟笑ひを漏らすだらう

[illegible]君がです、實に其寺こそは、今夜人殺しの白刃に見舞はるべき顧客であつたンだと言ひますと、同じ年配の娘を持つ彼の狼狽も想像されるが、しかし忽ち刑事の頭を毆りつけに來た驚愕は、それどころでなかつた、といふのは、矢張り陳老人のことです。訊かないでもいゝんだが、習慣的職業性から、一體、陳さんの遺產は何萬ぐらいあるンかと訊いたものです。さあ。金もありませう。道具だけでも、屑屋の蹈倒し値につもつて一萬、ぢや、きくまい。それは何時ぞや、手前が賴まれて目錄のやうなものを書き綴つてやつたンで知つてゐると言ふのです——金を溜めること巧い。陳さん。讀み書き、ペケ——へヘエツ。大將。文盲だつたのかい？さう言ふ刑事の眼に、ありありと浮び出たのが、椅子に身を埋め、兩手に新聞——あれは「長崎新報」だつたか「鎭西日報」だつたかひろげて讀みながら死んでゐる老人の生々しき幻。文盲が新聞を讀む！可怪な話ではないか？

「大人。ほんたうに白丁だつたンか？」

「あゝ。陳さん。自分名前書く一生懸命……商賣する色々帳面いるよろしい……あの人。それ一つも持たない。みな頭の中。おぼえる。」

「ぢや。新聞なども讀むこたなかつたんだね？」

亭主は手を振つて、そんなものは、ついぞ取つたこともないと申す。然らば一體何の必要あつて、讀めもしない新聞など廣げてゐるんだらうと考へるなら、誰しもはや、この奇妙なる事實を、奇妙なる事實として見逃すわけに行くまい。これは、けだし、すべて腑に落ちかねる現象に對しては、常に犯罪要素の潛伏を殆んど必要條件的にまで疑ひ持つ習癖者が、探偵的直感を飛躍さする刹那である。そこで、もしかすると、これは非業の最後を遂げた陳老人に、自然の死を粧はせるための、細工ではなからうかといふやうな、暗い陰惡な怪疑を抱いたとて強ち突飛とは言ひない。例へば何者か老人を殺めて、その死體を椅子へ乘せ掛け、さも、それを讀みつゝ安らかに死んだやうに見せかけるために、どこかにあつたか、用意をして來たものか、新聞をひろげて、冷たい兩手に持たせたゝではあるまいか？もしもさうだとする。殺人の動機は何だらう？遺恨？痴情？物盜り？狂人の仕業？老人の素情・生活・周圍などあはせて考へて、そのうちから最も肯き得るに近い怨恨と物盜りを選んだが、さやうに怖ろしい強敵を持つ彼とも思はれぬ孤獨々善主義者です。靜寂なる家の中の、在るべき場所に、きちんと落着いた物といふ物は、賊の闖入したる樣子微塵もないことを暗示してゐる。それも違ふ。これも違ふといふわけでしたが、やうやくハタと思ひ當つたるは、何か、いや、是ほど手近なる、是ほど充分なる犯罪構成の動機たり得べきものはあるまいだらう一件――陳老人の遺産である。迂濶千萬！さうだッ。松村君は驚聲をあげんばかり跳び上つた。さては破れ寺の賣僧め！老人が死ねば遺産は己れが賽錢へ舞込むと知つて苦しまぎれに演りをつたゝではないかな？……けれども陳老人が息を引つたと推定される灯ともし頃のズットと前から、玄冥院では祈禱會が始まつてをり、それが濟むと、今度は娘の一件だから、人を殺す暇もなければ、それどころの騷ぎもあるまい。また娘を失して半狂亂の和尙。かゝる無道惡辣な徒輩とも思はれません。さう考へると、死因については不審を容れる餘地がないほど明白な大往生であると認められてはゐるし、やつぱり他殺ではないのかしらと思ひ直さゞるを得なくなります。それにしても不可解たのは老人の手に持てる新聞の謎です。間もなく亭主と別れて、步行をつゞける刑事。解きがたい疑問を抱きながら、玄冥院から三丁ほどの四辻にかゝりますと、折も折、寺の方から風體怪しげなる人影よろめき參ります。突差に壁の窪みへ身を平たく屋守の形に、影の通り過ぐるのを待てば、どうです、こいつめ、今まで何處を迂路つき居つたか、更紗の下着を向脛に飜ちらし、

[illegible]その時も[illegible]紛れ込んだ宵の男に違ひありません。その時も

ハテナと思つた程、二三間へだつたる街燈の薄明に後手と透して見れば見るほど、氣のせいではない、下水道に落込んだ六神丸賣り寄似の横顔(プロフィル)が氣になり。いゝ鹽梅に感づかれなかつた松村君。お定りの尾行が始まつた。やゝこしい辿りを幾つ折れ曲りましつらうか、銅座川へ注ぐ大きな深い濠ッぱたへ出ました。

こゝらは唐人屋敷時代から立腐れの怪げな荷倉・物置場が肘を張り合ひ傾き並ぶ裏町なので、滅多に來る用もなし、とんと勝手も知らない。閑杙の土蔵と解船屋(はしけ)のサンパン小屋に挾まれた白ペンキ塗の板塀先にかゝると、男は立ち停り、腰を跼めるやうに見えて、そのまゝ消え失せる。一足おくれて忍び寄れば、板塀の端に標札のない潜戸があるンで、確かに此處へ這入つたンです。誰の住居だか、どこが表口だか見當もつかンが、この時刻にまだ起きてゐると見えて、板塀の節穴から燈火一筋漏れてゐる、その穴に目をあてゝ家の中を覗けば、渺々に風鈴のついた角燈籠の小庭を隔つて取りつきが、座敷の花月床へ茶の間の道具を持つて來て、茶室(かこい)の障子を嵌めたやうな風變りの部屋です。その障子が玻璃(ビイドロ)たので、中の樣子は巨細に窺える。正面(まとも)。緋縮緬の屏風らしい。自墮落に打ち懸けた二枚屏風の右手が、[illegible]櫃。[illegible]への壁によら下たる月琴の[illegible]長火鉢といふ寸法。こちらへ頭を向けて胡坐かいてゐるお紛れもない件の男。何やら饒舌るのを、長火鉢の灰掻きならし、斜向きに聽いてゐるのが、部屋の主人公と思はれる一人の女です。それとは氣がつかなかつたが、ふと仰向きますと、小袖厨子(だな)の上から放射する銀洋燈(ランプ)の眩しい波に洗はれるその顔が、どうでせう、今猶太(ユダヤ)教會堂の前で見た大丸髷の尤物ではありませんか！でもあの時の彼女とは見違へるほど變つた拵(つくり)です。大丸髷は何時のまにか達磨返しに結び直され、じみな御召の小袖に、藤いろ友禪の襟を覗(のぞ)せ、紬の濤生羽織を着流して、黒繻子の晝夜に帶止のパチンを煌めかし、なゝめに片膝くづしたる按排、いくぶん氣品は落ちて見えるが、凡て彼女のために誂へて作られたやうに、しつくり似合ふて映るのは寧ろ此方(こちら)。どこから眺めても粋な姐御に申し分なく出來上つてゐます。事の成行。思ひかけなくも、こんな妙な場所で再び彼女の姿を發見する偶然の突飛さに、松村君は刑事の探索心を強く刺戟されると同時に、それを滿足させる何者かを求めずにゐられなくなりました。いかんとなればです。六神丸賣のではないかと疑つてゐる此の男と、六神丸賣りを勞はつてゐた女とが、此處に落合ふといふ事實は、

言ふまでもなく、さうした疑惑を一層强めるに、甚だ都合のいい材料であるからです。果して此奴があのペテン師であるとすれば、あの時の光景を思ひ合せると、眞つ先に六神丸を試して買つた此の女は、人寄せの役目を勤める狡計者(さくら)。同穴の狸であつたわけだが、一體此奴等は何だらう？夫婦だらうか？情人(いろ)だらうか？と思ひながら耳を澄す松村君。これもおきまりの道草だが、强ち餘計な暇つぶしでもないやうな氣がする。男女の話聲は手に取るばかりに聞えます。女は朱羅宇の長煙管。吸ひかけて止めると、憂色面(おもて)に現はして「……可哀相に、まあ、大變なことになつたもんだね、馬(マア)さん」と沁々です「お前さんが、その、警察から歸りに寄つたとき、不印(プウイン)さん何うしてた？」

「狂人みたひに騷いでやがつたよ。和尙らしくもない。」

「そりや、さうだらうよ。一人娘を拉はれたンだからね。でも金山號(キンシャン)が入港(はい)つてるのを知つてゐながら、何だつてまた油斷をしたンだらう？」

「なにさ、油斷もしなからうが、所詮駄目だよ。金山號(キンシャン)に狙はれて遁れッこがあるものかい。」

「それもさうだけど」女は落着かぬ物腰です。忙しげに煙草を吸ひつくして「あたし、ちよいと玄冥院の樣子を見に行つて來やう。」

「これからかい？この眞夜中にかい？御冗談です。いくら。他人ではなうてもなッ。夜が明けてからのこッてす。」

「でも心配だからね。」

「ふふッ。そいつは心配の筋違い。要らざる用心だ。昨日までは同興號(トンピン)の旦那の手前、晝間のお忍びは御遠慮といふこともあつたらうが、ねえ、お瀧さん、今日からは天下晴れてお樂しみが出來るンぢやないか。同樂號(トンピン)の店先で、お前さんと和尙とが手を取り合つて泣かうと笑はふと、天が下に苦情の申し手はありやしめえ。ふふッ。呆けなさンなよ。痘痕(あばた)の爺さんに、お前さん達は寢込みを踏み込まれ、惡事露顯に及んだらう？いゝ圖だよ。悶着のおさまりは何(ど)うなるかと思つたら、お前さんに財を附けて坊主にくれる代りに、もう一切面倒は見ない、寺の門も潜らないとあつたッけ。爺さんの頭骨にしちや、出來すぎた風流だ。聞くところによると、陳大人、お前さんを連れて近く日本を引拂ふつもりだつたッてえぢねえか。どうせ先の短い爺さんだ。神妙(おとな)に行つてりや、財產はそッくりお前さんのものになるものを、生(なま)で牛を啖ひ、燈明皿で油を舐める大入道の、どこがいゝんだか、お前さんも酔興な女(など)さ、あはは。昨日の一件。誰も知るまいが、俺は一々御存じだ。けれども、なに、お前さんの縹緻なら、また、いづれ、そのうちには、いゝ金蔓が谷

きついて[illegible]だらうか。別に不自由[illegible]、[illegible]かく
も暮さんと手が切れて見りや、何處へ行かうと何をしやうと、お前さんの自由だ。仕たいことをするなら憚りなくしなせえ。和尚の面が見たけりや、日中がいゝよ。俺も今夜はちと込話しがあつて來たんだからね。」

何と！陳老人の愛妾といふのが、然る素性の此の女であつて、しかも同時に彼（あ）の不印和尚（ブウンン）の情婦であらうとは。いや、昨日といふ昨日、さうした關係が、陳老人の前に暴露したらうとは、松村君にとつて豫期せざる、すべからざる重ね〲の發見でありました。もとより偶然の廻りあはせとはいふものゝ、かうなると、はや妙に因縁じみたる心地にも相成らざるを得んのであります。思ふに彼女は陳老人の運命を知らずにゐるンだが、さやうな譯で老人とは手を切つて、今は何の交渉もない他人ではあるにしろ、昨日までは旦那であつたのだら、死んだと聞いたら、さぞ驚くだらうし、また、彼女の手の屆くところに横はりつる幸福を、たつた一日の違ひで完全に捉えそんじた自分を怨めしく思ふに違ひない。否く今一日だけ彼女の隱し事がばれずにゐたならば、彼女に惠まれるべかりし老人の遺産。破れ寺に取られて了ふと聞かうもンなら、口惜し泣きに泣くだらう？皮肉なはなしだと思つたが、しかし、その破れ寺の住職なるもの[illegible]まだ
の行爲と老人の死とを結びつけ[illegible]に思つたる見解の[illegible]が、[illegible]つたからであります。それにつまり女を見限つて陳老人が支那へ去つて了つた日には一文にもならンのだから、此際それを食ひ止めねばならない。食ひ止めるには老人に死んで貰ふより他に法はない。死ねば遺産は瑯那寺の玄甚院に持込まれるし、おまけに情事の邪魔もなくなり、一擧兩得といつた理屈。兩人共謀（ぐる）で殺ツたのではあるまいか？かう怪しむと、いかさま、其位の魂膽は廻らしかねぬ奸物にも見えるが、矢張り何らも他殺の形跡がないのだから、さうでもないのかなと思ひ直す松村君。たゞ明確に感ずるのは、かくも途上に出會ふ人といふ人の恐くが、目に見えぬ宿命の絲につながれ、深淵すべからざる事件の縫を織りつゝある如く、彼自身は桉の役目を勵むる爲に動きつゝある如き不思議さ。

「おや。何だつて？」

さも意外なことを聞くおどろきの面體でありましたが、見る見る、女、煙管を持つた花の顏容の、すんなりと白くすき透つて青玉の煌めく指がふるえ出すや、小鬢のあたりを掠めて走る青いもの〻影あやしく、妖めいたる顏の眉尻の釣り上り、ぶるツと顫る口元斜に引ンまがつて齒を食ひしばる景色、どうやら

容易ならぬ憤り、眦にこめて物も言はず、男の顔を見つめてゐましたが、火鉢へポンと吸殻を叩き落して、煙管を投げやり、屹と居ずまゐを据え直すと、こいつは生地らしい癇癖です。

「わかツた。わかツたよ。おい。馬さん。あれは、お前さんが作者で仕組んだ狂言だね？さうだらう？」

「へゝゝ。」と男は落着したる面がまへ「白状すれば、さうだ、俺の細工だが巧く行つたね。あの勢ひぢや、たうてい元の鞘にはおさまるめえぜ。お前さんが陳の老ひぼれに突つ放されりや此方は思ふ壺。岡惚れも三年すれば何とか言ふぢやないか。おいでなすつた今日只今、想ひの丈を打明ける時が來たンだと言やア昔風だが、言はなきや心底が通じめえから、まあ聞いて貰ひたい。眞面目だ……」と男の尻が、いよいよ坐りつく「……ね。お瀧さん。玄冥院横丁は緋毛氈の床几に、瀬戸の火鉢、母娘二人ぐらしの香草屋の、愛嬌お世辭を看板のお前さんが、評判の縹緻で、お寺詣り展墓の客に得ならぬ妖氣をふりまかうてんだ。通りがゝりの衆は踏ンどまり、行き過ぎた奴まで振りかへつて、お前さんの襟脚の美麗には悉く目を奪られたものさ。こりや何うして港町の藝子衆にも見當らん、恐るべき品です。大きに腕を拱いて考へやがる。お前さんの方ぢや、思召しによつては靡き寄りませうてな脈性を現はすもんだから、寺詣りというふ柄でない唐人どもが、店先に蚊柱立つて、お互ひ同志、肚の中ぢや色仇みたいに睨み合つたらう。そこへ兀然とあらはれたのが、六神丸屋の陳大人。玄冥院に姿を持つて來るたんび、緋の毛氈に蛇坐をまく、と、ほかの客は等閑に、お前さん母娘二人がゝりで好遇したよ。婀娜者め。金のありさうな客と見て一途に商賣氣を出すんだらう位に思つてゐたところが、いつの間にやら中原の雌鹿は、まんまと親爺に射止められてゲンナリ。豚尾に油揚だ。支那人が女の口説きに妙を得てゐること先刻承知してはゐたが、まさか、子どもに等しいお前さんに野心を起すやうな年齢でもあるまいと、うつかり油斷したのか一大不覺。南無三！こんなことなら、なぜ早く當つて砕けて見なかつたらうかと悔んだところで追ツつかず。さりとて怨みを引ツさげて、お前さんに捻ぢ込む筋もなし。とんだ馬鹿を見て口惜しいけれども、指をくわへて、がつかりして引退るより分別はなかつたんだ。言ふのも極りが惡いよ。お瀧さん。その頃、玄冥院の寺男だつた俺も六神丸屋に出し抜かれ、時代のやうだが、一時は茫と氣のぬけた一人なんだ。それから間もなく、お前さんのお袋が死んで、店を疊むと、こゝへ囲はれることになつたね。男と生れた甲斐には、お前さんのやうな女を女房にと思つてゐた俺も、かうなると、吹けば飛ぶ三下野郎。どうせ叶

[illegible]お前さんの姿を見れば思ひ出して悶々する。畜生！いつそ思ひ切り、お前さんの袖を捉えて此の胸のうちを明けやうかと思つてるうち、いつの間にやら又しても先を越されたっ相手の男は誰かといへば、佛につかへる身の程も忘れた破戒坊主の不印。己れの思ふ女と其奴と、目のまへで狎戯た眞似をされて居たゝまるかい？意氣地がないやうだが俺は寺を飛び出した。以來無宿者。南京飯店で金山號の水夫と寢ころがしをやつて勝つたことがある。野郎金がないといふから、着てゐる服を引つ剝いて、髮れるのを捻ぢ伏せといて切つた髮。髮屋にでも賣り飛ばすつもりだつたが、玄冥院を出るとき引つ拉つた六神丸さ。ふつと思ひつきの、唐人に化けて賣つたら、よもや足のつく氣遣ひはあるまい。む。こいつア妙だと、さつそくやつて見りや賣れるのに味を占めて、今ぢや流閣の藥賣り。お前さんが夙に知つての通りだが、いかにも忌々しいのは、あの和尚、何とかして蟲のおさまる工夫はないものかと業を煮やしてゐたところが、昨日の夕景、玄冥院に忍び還入るお前さんの後姿がチラと目に止つたらうぢやないか。メたとばかり、陳大人に密告と行つたのよ。はゝゝ。これだけ言や、俺の心も少しやわかる筈だが、なあ、お瀧さん。命より大事の金をつかつて、お前さんに是だけ散々を[illegible]前さんぢやないか。このお前さんに想ひ焦れてゐる俺の胸だ。聞いてくれたつて、お天道さんも不思議とはなさるまいぜ。おい。何とか色よい返事を聞かしくれるわけには行くめえか？」

さりとは執拗御熱心の長つたらしい獨白があつたものです。女は目を瞬きもせずに呆れてゐましたが、聞き終るまへから、もう斯んな口說は堪らないと見え、痰唾でも吐ツかけたい厭らしさと、噴き出したい可笑しとが一緒になつた顔の神經をピリピリ躍らし、二つに開けば黑い核の光る杏のやうな紅い唇端に、銀の目立ての劈く聲をふるひ、男の面へ眞向から叩きつけました文句。

「馬鹿野郎！何をいひやがるんだい！この馬公。默つて聞いてゐりや、乞食芝居の厄拂ひみたいな寮辭を列べやがつて、何だい、その氣味のわるい目付は、お前さん、あたしを誰だと思ひかえ？」

これは豫期以上の忍びがたい侮辱であつたと見えて、男は耳の根つけまで赤くしたが、たちまち怒り心頭に發した按排。佶と氣色ばむ。

「何だと？」

「ふむ。あんまり見損つて貰ひますまいよ。憚りながら、かう見えたつて、あたしはね、お前さんみたいな人の言ふことを聞くやうな女ぢやないんだからね。」

「ふむ。厭だつてのか？」

「當り前だよ。阿呆らしい！……」剣もほろほろに拒ねつけて彼女は、例の厭氣と嘲笑ひにムカツ腹の立つ冷炎、つんと澄した鼻の峯にゆるめかしながら、よそよそしくプイと拗ね反る小袖の麝薰をけぶらし、煙管、おツ取つて、皓首しなやかに、長火鉢へ差しのべるンであります「……お巫山戯でないよ！」

「へゝゝ。御有つたね。おつかい思ひ上つて、べらぼう、お高く止つた鼻息ぢやねえか。旦那を失策らしたンで怒つてるのかい。豪せい嬢はつしやるぜ。へゝゝ。まあ、いゝや、俺の目が見えねえで、大きに不調法いたしやしたよ。全く。お前さんが然る見識の御婦人たア知らなかつたが、ねえ、お瀧さん、こちらも恥を掻いて引つ込みのつく馬藏ぢやねえツてな。いふまでもあるめえ。」

「何だつて？」ふり向く女は、睨めつける、利かン眸勢です。ぐいと懐に手を突込む男は、胴巻より拔取つて、ころツと投げ出すものへ向くと一緒に變つた。煙も喫ひかけたまんまの非常顏です。

「何だい。それは。六神丸ぢやないか？」

「む。藥名はさう申すことにしてあるんだが、實は今宵も、お前さんの御助勢を煩はした俺の商賣道具。玄冥院から持出した怪物だ。こやつ。ピリツと舌に來る按排は六神丸のやうだね。へつへつへ。お瀧さんえ。かう。原料は違つてやしねえかい？贋物！」

「贋物なら何うするンだい！」

「む。割竹に狀を挾んで、お前さんには大鬼門の筋へ畏れ乍らと言ふたらわかるだらう？」不安と怯えの影に暗くなりつつあつた女の顏も、はなのうちは齒を食ひしばる嗔恚のほむらに凄味をおびたものだが、今は血の氣も失ひつくし、慄々たる恐怖に蒼ざめふるふ顏、襟を壓へて黑光る鐵漿ぞめの齒で嚙みしめながら暫しは物も言ひません。かくて彼女は敗けたのです。

和解がついたところで、男の言ふには、玄冥院の紛擾から六神丸製造の秘密が、ひよつと露見するかも知れない模樣だから、手がまわらぬうちに二人手に手を取つて逃亡からうと思ふのだが何うかと。

「しツ。何だい。大きな聲でさ！」女は狼狽の眼を四邊へチラツと配り、「ちよいと、あたしも實は心配してゐたんだよ。耳をお貸し」と側へ摺り寄つて、男の耳に口をあてゝ囁くと、男は

一々頷いてゐたが、ふと彼女の右の手が、艶々した髪のたぼにかゝり、髷の根に挿したる古渡珊瑚玉、銀足の簪をスツと抜いた刹那、そろりと口を離した男の耳の孔へ、力一ぱい突刺しました。眞つ赤になつた耳朶を押へて悲鳴のなかに跳び上り、擲き殺されそこなつた怒りに狂ひ立ち、猛然と躍り蒐つたのは、狙ひそれた發擻です。男を突倒し、庭から潜戸の外へ飛び出した女。何うなりましたかと言へば、五分の後には、松村君にフン捕つて警察の署長室に首うち俛れてゐます。松村君は殺人未遂とか傷害罪に問ふべく彼女を引致したのではなくて、彼女の事は馬藏を仆すことに失敗したが、陳老人を仕止ることには成功したンであるといふ考へからです。果してさうだつた。彼女は旦那に詫びに參り、たうとう懷柔込んで了つて仲直りしたのです。それが是は何處の支那人でもやります。女の膝を枕に耳の垢を取らせる。お瀧なる女が、血を見ない殺人の意を起したのもわかりますが、彼女と不印に就て訊問追求の結果、圖らずも少女誘拐の大きな宿謎が解決されやうとは！そも不印たる術は、支那蘇州不斷山崇空の末寺碧羅菴の納所であつたといふ。これは上海から鎮江、浦口、杭州にかけて、人を釣り人を掠ふ無賴の徒や、六神丸の贋物で世を渡る猾が、樗蒲の席をしく巣窟。既に惡業は本山に漏れて、放逐された彼は、故鄕の此の港へ流着すると間もなく、[illegible]に[illegible]入り、此の[illegible]を襲ふたのであるが、身に染みついた惡癖は抜けず、寺の内懐の苦しさに、情婦お瀧と寺男馬藏を手先につかつて、始めたのが少女誘拐だが、搦手をふるつたのは、かれ不印ではなくて實に此のお瀧。夕ぐれの巷に遊ぶ少女を巧みなる甘言もて釣り寄せ拐き出したのである。けだし怪物の眞夜中に現はれるものとは言ひ傳へられしは、恐るべき魔力あるものと信じられた曲者の姿を見た者がないところから起つた想像の誤りだが、成る程、若い女が娘と一緒に談笑しながら町を歩く。そも誰が怪しみ訝るだらう？而もそれは彼女に取つて楽な仕事ではないか。實に！

いやはや！何と！町人の心膽を寒からしめ神經を刺し惱まし、暗澹たる恐怖のドン底に戰慄せしめたる惡鬼天魔の正體が夢想だにする能はざりし、この婉やかなる天女の如き美婦人であつたらうとは！しやつ。長々しき努力と心勞に疲れ果て斃れ僵けたる各官の耳は首を離れて空に舞ひ、目玉は顔より飛び出して床に落ち、大きくひらかれたる口は永遠にふさがらンのです。絶倒！その名狀すべからざる奇異の驚愕と意外に息づまる沈默を八ツ裂きとばかり、泡だつ牙のあひだより、河馬か海象か、いや、物凄い唸りを發して嘶いたのは、あゝ、かゝる苦慮焦心粉骨碎身の結果が、ついに是であることに啞然禁じ得ざる署

長。傲嚴不屈の精神をそなへて世の嘲罵を凌いで來た絶大の自尊家でありますれば、立ちどころに鬣をふるひ、官員髭を左右に拂ひ、額面の汗を吹雪と散らします。

「し、し、しからば兇猛無類空前絶後の大犯人は吾輩の推定通り唐人船の奴ではなかつたンか？あいや。黙れ。吾輩は斷じてさう言はせぬぞ。不印の娘を盗み去つたのは明らかにも金山號の水夫であると判定してをるのだ。その方等が己れの子に手をかける筈はあるまい？僞の申立をいたしても欺かれンぞ。」

「あゝ。全くさう見せかけるために、あたし達は」とお灘は告白をつゞけます「唐人船の入港を待ちうけて仕事にかゝつたのです、あの男は違ひます。不印は支那にゐる頃。漢成方―あの男の娘を拐かして六神丸屋に賣り飛したンです。水夫の漢は血眼になつて不印の行衛を探しまわり、たうとう突止めて復讐に來たンです。そのことは不印の口からも聞いてゐましたし、實は今宵、あたしが陳を殺めて簪の血を拭いてゐるのを、すつかり見られたのです。あの男は自分を尾行て來た支那服の刑事さんを撒くために、南京飯店の裏口から陳の家へ飛び込んで來たのです。あの男はあたしを脅迫して、不印の娘を連れ出させました。あたしは家の側の艀船小屋の舟で金山號へ逃がしてやらなければ、陳を殺したことを旦那がたへ密告される虞れがありました。あの男は自分の娘を奪られた復讐に不印の娘を連れ去つたのです。人さらひぢやありません。」

「ふうむ……然らば全體少女を誘拐して何處へ賣つたンであるか？」

「賣りはしません。生膽を刳り取つて六神丸をつくりました。」

「や。署長殿！」その時一人の刑事巡査が、慌しく驅け込んで參り、茄子を干しかためた形の不氣味な、黒褐色の剌臭ある代物を手にかゝげながら叫ぶンであります「ごらん下さい。驚くべし。玄冥院の坊主が創製にかゝはる人間の膽の干物です！彼奴め發狂しました。盗まれた娘は己れが手を下して殺したとでも思つたンでせうか。寺の裏手の墓地をあばき少女の死體を、蛆の喰ふ奴をノロノロ引出しては一心不亂に娘の名を叫びながら捜してをります。これは線香の中にありました。」（完）

映畫時評

日本映畫は何處へ行く？

小山内薰
久米正雄
室生犀星

國産奬勵

一と頃の日活映畫では、本題に入るに先だつて、特別な字幕が添へられてあつた事がある。阪谷芳郎男か誰かの字で國産奬勵！と四字、字はそんなに拙くなかつたが、映寫が初まつて、折角薄暗い幻の國の、幕が開きかゝるや否やに、此の四字を見ると、何か後へ來る國産そのもので迄、息渡反感を持ちたくなつたものだ　勿論私は、阪谷男爵が嫌ひではない。又日活が、さうした所謂名士の題字を、難有さうに掲げる事に、別に大した不贊成を唱へる者でもない。が、何とはなしに、現在の儘の日本映畫の狀態で、國産奬勵は恐れ入るなア、と感じただけだ。阪谷男爵が不快を感じ、從つてその題字を頼んだ日活が、迷惑を感じては私の本意だが、得て、あゝ言ふものは、兎角に反感を買ひ勝ちのものであるから、今度はもうちつと洒落れたものにして貰ひたい。

但し、さうは言ふものの、私もお手盛りでない意味で、映畫の國産奬勵には、實は現狀がどうあらうと、決して不贊成を唱へるものではない。不贊成を唱へるどころか、大贊成なのだ。

最近二三年間に、日本映畫が、技術方面からのみ見ても、實に急速な進歩を遂げ來つた事は、凡ゆる現代事象の發達史の中でも、一頭地を拔いて居るものであつて、一度でも邦畫を見たものは、必ず驚嘆する所であるが、しかも又一方、餘りにヒド過ぎた過去は、所謂士君子をして日本映畫に臨せしめなかつた。——などゝ六ヶ敷い漢語を使つては、今時の映畫フアンに

嗤はれるだらうが、實際今の日本映畫は、まだ〳〵過去の悪條件を背に負つて居る。「日本のものなんざア、見る氣がしない！」と言ふのが、映畫愛好家の中にも、隨分ある。果して今の日本映畫は、そんなものだらうか。私の此の映畫評を受け持つた理由の一半は、さうした考を抱いてゐる人々に、私が此の眼で見た、公平なる日本映畫の價値を、報告したい爲に外ならない。――或ひは、多くを見た上で、矢つ張り下らないと言ふ決論に達しないとは限らないが。……少くとも一年ほど、眞面目に見守つて見てやらう――さう思つたから、敢て私は私の批評の對象を、先づ日本映畫のみに求める事にした。

國産奬勵！になれば幸ひである。

映畫批評家

實際、外國映畫の批評は、一種の宣傳として役立つ以外、さう効果はない。それでも或種のファンに對しては、善導にはなるであらうが、その製作者側への批判は、どうにも響きやうがない。

その爲かどうか知らぬが、事實、吾が國のファン中にも、外國映畫の「噂」をし、「紹介」をし、「註釋」をする人はあるやうであるが、何だかそれを「批評」する人は、餘りないやうである。私は勿論さうした人々、一部の所謂映畫批評家たちから、多くを聞き、多くを學んだ。が、甞つてさう云ふ人々が、眞に、評判になつた色々な畫の價値を、ハッキリ述べる勇氣のあつたのを見た事がない。

一つは、映畫批評家と云ふものが、純粹に映畫批評家であり得ないのがいけないのかも知れない。優れた映畫批評家の多くは、他に、實際上の活動寫眞事業に關係した、一つの職務を持つて居るものが多い。でなければ、映畫雜誌に直接關係を持つて居るものが多い。

新聞の映畫批評をする人も、劇評家が單獨の立派な業として存在するやうな事はなく、何處かの人が片手間でやるか、乃至は宣傳を頼まれてやるに過ぎぬのが多い。

それは、まだ〳〵映畫と云ふものの存在を、深く認識しない世上が、結局悪いと言ふ事になるが、私は、茲で純粹の、映畫批評家が出て來る事を、先づ望んでやまないものだ。

東健而君は居るかも知れない。が、東君の存在は、結局、泰西映畫界の註解を、一流の名文と、ゴシップ的諧謔との中に、企てる森田みね子男史たるに過ぎないではないか。

好學、森岩雄君は居るであらう。そして其公平穩籍なる態度は、凡ゆる映畫人に好感と首肯とを與へずには置かない。が、

氏の父兄に云はうとする事が、由來藝術に關係してゐる以上、時として必要的でないとは誰が云へよう。――此の種の藝術が畢しむべき邪推である事を反省する前に、私は、自分の所の畫が、少しでも自分の關係した映畫が、矢つ張り何となく好く見える事實を、悲しむべくも知つて居る。雜誌の編輯者は、同一の著述者から貰つた原稿でも自分の方へ寄稿して來たものを、どうも外のより好く思ふそうであるが、森君たちも果して所謂「うちの畫」を、眞に愛顧なく見得るであらうか。尠くとも自分の所の商品に、思ひ切つて惡口が云へるであらうか。

人見直善君の毒舌は、その辛辣味に於て、眞に終稱以後の文界に、其比を見ない。が、其毒舌は要するに、毒舌の爲の毒舌であつて、其毒の來る所以が、果して眞の批評精神からであるかどうか。石井迷花氏は餘りに温健、一種のリポーターと云ふべきであらう。

キネマ旬報を根城に、或ひは映畫時代を足溜りに、俊髦英才、雲のやうに集つては居るが、中、一人あつて專門の映畫批評を物すべく、精進して居る人を聞かない。私の寡聞かも知れないが、事實、さう云ふ現象は映畫人が惡いのよりも、今の世態が惡いのだと思ふ。一人の專門の映畫批評家の存在を許さないのは。

是か、其等に對する次のものは、さう云ふ人が出して來る筈つツナぎだ。

併し、もう、だん／＼出て來る。時世はこれを要求するだらう。

劇評界には、嘗つて三宅周太郎君のやうな、若くしてしかも一徹精進の專門家を生んだ。未來の映畫批評界に名を成すもの、果して誰々だらう？

文士のそれ

文士の映畫批評といふものは、由來、見當違ひで、餘りに自分の畑へ、物を持つて來たがると云ふ批難がある。一應尤もだ。が、併し、又過去のそれらを見ると、――勿論私自身のも含めて、――隨分、見當違ひな事もあるが、それはハツキリ立場を異にしてゐる意識の下に、寧ろ批判的精神を以て書かれたものが多くて、少くとも映畫人のそれよりは、目標を上に置いて居たやうに思ふ。文士たちが、所謂映畫人が極め付の名畫を、時としてケナしたりするは、決して異を樹てて傲らぶるためでなくして、求めるものが自ら高いからである。

古典のない映畫界では、實際、眞の意味でのいゝ畫の、最高標準はついて居ない。從つて映畫人の物差は、どうしても現在

の畫の到達程度を出ない。從つて今の名作は、口を極めて褒められ易い。其處へ行くと文壇人は、名畫を計るのに知らずく己れの知つてゐる古典の標準を以てする。例へば此處に、チヤツプリン作るところの「巴里の女」を、傑作だとして聞かされ、見に行くとする。其時、彼の豫備行爲の中には、恐らく、バルザツクの疊を摩し、フローベエル、モオパツサンの域に於て、感銘を與ふるものとして、見に行くであらう。そして其處に若干の間隙を見出す。――しかも其上映畫人は「巴里の女」に對する方が「從妹ベツト」に對するよりも、より退屈でない事を、視覺に於て感ずる。

もつと分り易く云へば、文士は、何か藝術上の傑作と云へば、直ぐ、小說ならばゲーテ、ユーゴー、トルストイ、ドストイェフスキイの標準で考へ、繪畫彫刻ならばレムブラント、ミケランヂエロ、ラフアエル、ロダン、セザンヌの物差で、測りたがる。

私も嘗つて、第八藝術の名を完成したと唱へられた、――宜傳であつたかも知れぬ。――「散り行く花（ブロークンブラツサム）」を見て、自分の作つて居る通俗小說の、狙ひ所以下なのを感じ、其點では正に失望した事がある。

或る人は、――たしか森岩雄君だつたと思ふが、此の兩者の相異を、ピクチユア・センスの有無に歸した。一理はあらう。が、文士の中にも、視覺型と聽覺型とあるやうに、さうしたセンスの有無は、只單に、映畫を見つけてゐるものとゐないものとの、區別に過ぎないのではあるまいかと思ふ。そして見つけて居る人が、却つてピクチユア・センスに欠けてゐて、見付けて居ない人の方がフレツシユな感覺を持つて居る事もあり得る。私は同君が示した「大進軍」の合評の例では、寧ろ、下らない畫を餘りに見つけてゐる、乃至、作りつけてゐる映畫人諸君の有つて居られるピクチユア・センスが、あの畫を徹頭徹尾禮贊せしめたのではなからうかと思つて居る。

さもあらばあれ、私は、――凡ゆる點で自由思考家の志願を持つてゐる私は、私たちの持つてゐるもののみに、捉はれないつもりだ。が、併し過去の――誇るに足らぬ藝道修業が齎らして居るかも知れぬ、デリケートな趣味上の問題や、眞僞の見分け方なぞでは、傳家の寶刀らしいものを、引拔くに躊躇はしない。たゞそれが「寄らば斬るぞ」の「虎徹」でない事だけは云つて置く。

藝術か興行價値か

此間、京都へ行つて、今は日活で監督をしてゐる、志波青果

君に會つた。北原氏が映畫に從事する一人一人、誰彼なしに、自分ほどの映畫人、製作者、監督、俳優たちに向つて「映畫」は「藝術か否か」を問ふて、その覺悟の程を統計的に手記して居たさうである。志波君はさう云はれて、言下に「藝術だ」と答へたが、彼が手帖を出して付けるのを見て、「まあ、待つて呉れ。」と思はず云つたさうである。

北澤は、私の友人で、人生及び文學上の畏友であつたが、夙に、映畫非藝術論者であつた。非藝術と云つてはおかしいが、少くとも藝術でなくともいゝ、——寧ろ藝術であつては面白くない、と云ふ論者だつた。徹底した名論卓說であらう。同じやうな說をなすものに、直木三十五が居る。彼も、人生及び文學上では、私に取つて超特作畏友であるが、同じやうに「映畫」を「藝術」とすることの「愚」である事を說いてゐる。直木は、文藝の上でも、興味がそれ自身價値で、所謂「人生味」などは蹴飛ばして了へ、——と主張したがつてゐる男だから、勿論、もつと大衆的な、映畫を「藝術」にせずともよいと主張するのも尤もだ。

私は、自由思考家であるから、勿論、映畫が藝術でなくてはならない、なぞとは云はない。が、又それと同時に、又藝術であつても少しも差支ない、と思つて居る。それどころか、一生に一度、今の映畫に於けるうちには、其處に、ここそこと云ふと、セルロイドと現像液と、藥品と器械と、人間と自然とを用ひて作つた、一個の完成した第八藝術なるものに、お目にかゝりたいと思つて居る。一體、藝術の非藝術の、と云つたり書いたりするけれど、眞の意味での藝術映畫と云ふものが、さう例證すべき程あつたのかしら。しかも無條件で藝術とし得るやうな。

所謂、文藝映畫を藝術映畫とする馬鹿では勿論ない。文藝上の傑作を映畫化したつて、それを藝術映畫だと思ふものは今更あるまい。それと同時に、映畫非藝術論者は、所謂「藝術」なる言葉を、餘りに毛嫌ひして居るのではないか。七六ケ敷く考へ過ぎて居るのではあるまいか。

私なぞは、要するに藝術なんて、人間一個の內心の聲を、一般に流布し得べき形にして見せたのだと考へて居るから、時には監督なり、主演者なりが、自分の胸中の磊塊を、三年に一つでもいゝから、遠慮なしに吐露する機會を、狙つてゐて呉れないかと思ふ。

でなければ、——此處で僕は聲を大きくして云ふ。眞に會社のため、又大衆のために、働いて居るのだとすれば、非藝術でも何でもいゝから、その所謂「興行價値」なるものを、もつと見せて貰ひたい。

事實「藝術」である事より、「興行價値絕大」である事は、もつと六ケ敷い。のみならず、傍から見ても、眞に「興行價値」のために、浮身を窶して見せて呉れる人があるならば、私も尊敬を吝まない。私なぞも、興業價値と云ふものに、本體を掴みたい／＼と焦つて居るものだ。

だが、藝術的努力もなく、しかも興行的價値の狙ひ所にも、取柄がない、——つまり非藝術的努力もないもののみが、横行するとしたら、日本映畫は何處へ往く？？？

私は、此處でも二股大根だ。藝術を見せて呉れ。それから、新らしい、好い興行價値を作つて見せて呉れ。

私は是れから一年の間に、その二つのものの片鱗を、日本映畫の中に探して、在つたら、——無かつたら無いと、——讀者諸君にお傳へしよう。製作者よ、監督よ、俳優よ、そしてありとある映畫關係者よ。請はゞ此の二つの怪物の在り處を、一緒に探し出させて呉れ。

蕪雜言、以て序とする。（久米正雄）

エミール・ヤニングスの藝風

併せて「救ひなき人々」を思ふ

稀有の人、ヤニングス

最近の映畫界で特に私の記憶に新しい感銘となつて殘つてゐるものは、エミール・ヤニングスの「最後の人」「ヴアリエテ」「肉體の道」及び最近封切になつた「タルチユフ」等の諸作品である。これらの諸作品はヤニングス物の特異な効果ある演技を物語るものであり、全映畫界に聳立する一大奇蹟だつたことは、誰人も拇指を屈するに吝ならざるところであらう。今假りにロナルド・コールマンやアドロフ・マンヂユウ等の流行俳優と彼とを、その藝風の幅や大きさや深さの點で比較することは、コールマンやマンヂユウの小ささを證據立てる以外に、殆ヤニングスの敵國は全世界に一人として存在してゐないと云つてよい位である。殆古今獨歩の大味であり映畫界切つての怪物であることは、恐らくその演技や藝風の重厚なる新鮮と近代風なグロテスクの醍醐を極めてゐる點で、彼こそは或は映畫的記錄中の最大の俳優として後代に其聲名と演技の跡を殘すであ

らう。とは云へ徒らに私はヤニングスを讃賞するものではないが、その當時批難さるべき彼の演技上の「癖」や其他の欠陥はあるにしても、兎も角も彼の足跡の大きさと押の強さでは、私をして如實の言葉を爲さしむるだけのものを持つてゐる。何故と云へば彼の如き「面」と「技」とを同時に享有することは、稀有に近いことかも知れないからである。かういふ面と技との共有者は十年に一人の割合でさへ現れないやうである。卑しいロン・チエニイの面は啻に彼の面としてのみの變化も變貌をも表情されてゐない。ヤニングスの面の變化は東洋風の百面相に近いものをもつてゐるからである。それらの面の持つリアリズムは同時にヤニングス物の奈何なる演技の困難をも刺し貫いてゐる。そして又ヤニングスはヤニングス風なリアリズムの徹底に彼だけの世界を持つてゐる點で、少しのセンチメンタリズムの破綻を表してゐない。此の一點だけでも恐らく後人は問はず今までに無かつた人物である。

彼は多くの場合何時も演技的絕頂時に於て、硬直した立體的藝風の型を取つてゐる。そして些しの餘裕をもたないのは彼が演技的情熱の病癖であり、それ故に人氣ある今日の彼を爲さしめたものである。又それらの硬さはともすると彼の中にある烈しい通俗的効果を、知らず識らずの内に危險な亞米利加風の落し穴にも誘されるかも知れない。然し今の私には之れの反動的出現が今漸く好奇心を惹くにすぎないであり、多くの甘たるい亞米利加式哀泣悲劇の涙を拭く暇を與へて呉れるだけで滿足するものである。

最後の人「ヴアリエテ」「肉體の道」「タルチユフ」

渡米前の作「最後の人」の老門番としてのヤニングスは、文字通り宮殿の如き大ホテルの玄關に立つ金モール嚴しき老門番であつた。彼はその無邪氣な金モールの制服を脫がねばならぬ時に遭り合ひ、彼が人としての最後の人生への未練を曝すところは、ヤニングスの藝風の心理的素直さ、迪々しささへ私に感じしめた。大ホテルの玄關前に澁んだ金ぴかの制服を着た老門番が、背伸びをしながら人生への涓滴的悅樂に醉ふ有樣には、充分なヤニングスの明るい或一面の持味で表現されてゐた。彼の演技の健實さはその夜更けたホテルの廊下を行く足なみにも、自分はその熱情的な周到な用意ある表現を見落さなかつた。彼の此の一作が直ちに大ヤニングスの出現的一動機を與へたことは、その作がらから言つても當然の獲得であつた。

自分は半歲の後「ヴアリエテ」を見て、不思議な美と魅力を

もつリア・デ・プテイを發見し、デユボンの手法を見、それに拘らずヤニングスの曲藝團の「親方」には多少の失望を感じた。此の畫面ではヤニングスの硬直した力は生活の向側へ勢ひ餘つて投げ出され、膠のやうにからからに乾燥してゐた。「睨み」のシインの如きは一枚の寫眞である外の何者でもなかつた。表情の科學化ともいふべき無意味さが操り返されヤニングスの「病癖」が惡いチーズのやうに執拗に入念に固められてゐた。自分は當時一映畫雜誌に「ヴアリエテ」が失敗の作であることを指適し今さらに自分らの温かき「救ひなき人々（サルベエシヨン・ハンターズ）」に接した幸福な日を思ひ返したくらゐであつた。一つはデユボンの監督の手法の手固さがヤニングスに押され氣味であり餘りに固くなり過ぎた爲であらう。曲藝團の親方が美しき娘ベルタ・マリイの肢體に最初の好色的一瞥を加へるところなぞは、追にデユボンの手法とヤニングスの味と、不思議な美婦リア・デ・プテイの面とがかつちりと打合ふて好適なシイン的好印象を自分に殘したがそれにも拘らず戀敵アルチネリーを殺す場面の如きは唯「睨み」で押通した退屈さと幼稚さ加減は到底自分はデユボンを信じる氣がしなかつた。此の場面の如きは最も鮮やかた或瞬間的な發作の内に、美事なカツトを試みなければならぬ。憎惡の最絶頂的表現は殆一瞬の内に登り詰めて發散するのが常である。映畫と人生との隔離の存在は、映畫の進出と同程度の鈍い歩みを歩む人生の速度ではない。人生は百歩或は千歩を前進してゐる爲映畫も又それと同程度へまでも切（せ）めては進まねばならぬ。「ヴアリエテ」の速度はその大まかな映畫的人生の限度に止つてゐるに拘らず、百歩を後へ引いてゐる。我が敬愛たる無名の集團であつた「救ひたき人々（サルベーシヨン・ハンターズ）」の人々は、私をして映畫的人生が實人生と同程度までへ接近するの可能を、決して映畫が映畫としての「昨日」の物でない「今日」の彼を暗示してゐたこと等を同願する時、私は殘念乍ら大ヤニングスの中に失はれてゐる素面（しらふ）の人生を思はずに居られぬ。

若し素面（しらふ）の人生を「肉體の道」に求めるとすれば、稍々それに近い好場面が無いでもないやうである。謹直平凡な一銀行員の平和な家庭生活が、その出張先に於て一淫婦の美貌に魅了される筋であるが、「面（めん）」の變化をもつヤニングスは玆では一銀行員としての實直な心理解剖を試みてゐる。列車中の魅了されるシインや、淫婦の歡心を得ん爲にその永年の間に蓄へた美事な髭をさへ理髮店で剃るところに、寧ろ鋭い皮肉が畫面のみでなく看客の中へもその唾を飛ばしてゐる。ヴイクター・フレーミングの手法の極北であると云つてよい。此の場面の嫌厭すべき効果は不愉快な感情を伴ふに拘らず、何か私共の心を打ち挫ぐ

力強いものを持つて肉迫してゐる。ヤニングスいじ[illegible]たる溫かい善良なる性質の表現も、看客に委ねられた殘酷な心理的解剖の下によいシインを顯してゐる。後半零落した主人公が廃家の窓により乍ら、妻子が既に自分を亡き者に數へクリスマスの夜を送つてゐる有態を眺める光景は、既に度たび用ひられた陳套的な有りふれた場面である。フレーミングも此處に氣づかなかつた譯ではなからうが、その手法に將來を見ることが怪しまれる位拙劣である。

私は一映畫への解釋乃至看客的用意としては、畫面全體をではなく常にその場面のよさ惡さの細部から見ることにしてゐる。どういふ映畫でも最初の一コマから最終の一コマまで完全な藝術的組立の成功乃至效果あるものは殆稀有のことであらう。さういふ映畫を求めることは求める者の野暮臭さを自狀するものだ。映畫はシインを味はふてさへ居ればよい。シインの接續から成立つ本來の彼らの藝術である以上、私は、その場面を見るために或場合全體の效果を缺いてゐることを見逃してもよいと考へてゐる。矢張早に自分はまた「タルチユフ」を見たが、これはヤニングスの断と藝との影しく泌み出たものだつた。自分は惡魔の如きタルチユフの型の中に既に使ひ古された型を見出し、ヤンニングス物として拙いものであり邪道と通俗に近い

[illegible]ことは、彼には何時も[illegible]してゐることである。彼の人氣のある所以は誰が見ても面白く解ることであり、その面白さは大なる通俗の上にあることである。その危なさの中に平然と行くところは彼の大きさの爲であらうが、「時」は彼をして逆さま落しに通俗の凡化たらしめはしないか、と自分は「タルチユフ」を見乍ら懸念と憂慮とを併せて感じてゐた。併も惡僧「タルチユフ」は彼のお手の内のものだつた。最後に一偽善者としてのタルチユフの化の皮を自ら剝いだ時の、酒を飲み乍ら嘲笑する彼の醜い下卑た色好きな笑ひ顏は、やはり誰の中にもある同様の卑しい笑ひ顏であつた。それから鷄の足をしやぶる口が左から右へ大歪みに曲り込むところも、彼の面目の中の著しい畫風の特徴的局部であらう。リル・ダゴヴァの撮方には彫刻的美はあるが動く美はない。手ざはりも冷たい感じをもつてゐるけれど、フロイントの撮影の旨さはその自由な表現を縱横に試みてゐることを特記しておく。

ヤニングスと谷崎氏

私はエミール・ヤニングスを思ふたびに、何か知ら谷崎潤一郎氏を想起するのは自分でも不思議とするところである。(これ

は谷崎君には迷惑かも知れない。)さういふ關聯された氣持は私だけに止まるものかも知れぬが、大きさは似てゐるやうな氣がする。谷崎潤一郎氏は大谷崎である點、殆漠然たる直覺的思惟の下に此の「大」を感じしめる點に於て、ヤニングス論をかく私に想起されるのは谷崎氏自身がその大きさを持つてゐるからであらう。これに深いせんさくの必要はないのだ。今の文壇にこの「大」の字附く人物は奈何なる作家に較べても先づ見つからない故もある。

一個の怪物としてのヤニングスは、亦一個の平凡なる好々爺めいたヤニングスであり、或は亦フイリツシヤン・ミツプスの畫面からも出て來るやうなヤニングスでもある。今の映畫界に彼に匹適すべきものが無いのも決して偶然ではない。輕兆なる大根役者ジヨン・バリモアやカラアのお化の如きベン・ライエンの徒と彼とを思ひ較べる時、彼の場合何者の比較を絕してゐることを思はずに居られぬ。自分一個の好みから云へば寧ろヤニングスは自分の好み以外の、強壓された別格的好みの存在かも知れない。もう一度謂へば彼は彼をさへ如實に認めなければならぬ亞米利加式新派悲劇の渦卷の中に、漸くに「安心」をして見られる俳優だつたかも知れないのである。私共があらゆる映畫に安心をして見られるといふことは、監督や撮影者の渾一は云はずもあれ、何よりもその俳優を信じられる程度で不安や危氣なしに見られることを望むものである。ヤニングス物はかういふ意味で決して吾々を失望させるものではない。「暴帝ネロ」のネロだつたヤニングスの品の下つてゐたことは、まだ自分の記憶に新しかつたが、今の彼にはネロを再現するものな自分は見貫いて安心をしてゐる位である。

或映畫的識者は最早吾々はヤニングス物を見ることを必要としない事、もはや彼の演技に飽々した事、もはや再び「最後の人」を見た吾等看客的衝動を全然持合さないこと、又彼ヤニングスも凡ゆる映畫的俳優の如く既に或「峠」を降りかけてゐる事、又吾々の求める映畫的人生の諸相は彼の如く爾(かく)く崇高な誇張された雰圍氣ではなく、どうしても吾々の姉であり兄弟であるところの「救ひなき人々」(サルベエシヨン・ハンターズ)でなければならぬ事、吾々の母であり愛婦であり戀であり兄弟であるところのもの、吾々の無敵な孤獨を上から抱擁してくれる溫かい朝飯の如きものでなければならぬ今後の映畫に就いて、彼はヤニングスを罵り飛した上、遂に「救ひなき人々」(サルベエシヨン・ハンターズ)の夢を夢見る如き眼差しをした上、自分の目の前でヤニングスを抹殺しようとするのであつた。併乍ら今吾々は此人の如くヤニングスを吾々の映畫的人生から抹殺した後の寂漠は、頭底此友の如き簡單なる一場面的思惟によつて左右されることの、何と無意味なことであらうぞ。

(室生犀星)

荷風隨筆

永井荷風

○雀

雀の噪ぐ聲が不圖わたくしをして、書きつゞけた草稿の上に筆を擱かしめた。雀は二階の窗の下に突出でた庇の上に群れあつまつて鳴いてゐるのであつた。

二階は東南に向いてゐるので冬は殊に日當りがよい。震災の後わたくしは此の二階を書齋にしてゐる。それまでは出入口に近い階下の一室に机を据き、二階は客間に當てゝゐたのであるが、地震の際下座敷は家屋全體の重みを受けた爲めか、壁に龜裂を生じたのと、窗際の樹が茂りすぎて梅雨や秋霖のころには物がしけるやうな氣がして來たので、几案と書篋の大半を二階に運び上げたのであつた。

平生人の出入が少いので、雀は家の出入口とも知らず、日當りのいゝのを喜んで、其の檐の雨樋の中にでも巣をつくらうとしてゐるのにちがひない。わたくしは覗いて見やうかと思つたが、硝子戸を明ける音に驚いて飛び去るであらうと、其のまゝ机に臂をついてゐた。

靜な小春日和の午後はまだ三時にはならぬらしい。わたくしは柱時計のチヨキ〳〵と分秒をきざみ行く響を憎くむので、家の内には時計を置かない。懷中時計も胴衣のかくしに入れたまゝ折々螺旋を捲くことを忘れてゐる。然しわたくしは

いつもの處に据えられた机に靜坐して、西側の窓の窓掛けに映ずる樹影を顧れば、おほよその時間は之を知ることができるのである。井字をなした窓の戸の棧の上に、移り動いて行く樹の影はまさに吾が家の Cadran Soleil（カドランソレール） である。之に加るに、門外の音と四鄰の聲とが亦時計の代用をする。裏どなりの小家から法華宗の木魚の音が聞えて間もなく歇むのが正午少し前で。學校から歸つて來る子供の聲が門外の小徑に騷しく聞え出すと、やがて、三時である。竹藪越しに崖下の家からピアノを練習する響があたりの靜寂を擾（みだ）しはじめると、日は漸く傾き、小娘に手を引かれた盲人の納豆を賣りあるく聲が、崖の間の坂道からだん／＼近く聞えて來れば早や五時に近い。折から豆腐屋の喇叭も交り聞えて、窓の樹影はいつか既に消えてゐるのである。

雀の囀る聲がわたくしをして突然書きかけた草稿の筆を擱かしめたのは、靜かな午後の中でも殊も靜かな三時前。門外の小徑にも、四隣の家にも、一時物音の途絶えべき比であつたのである。勤人の女房は午前の洗濯につかれたを幸、午飯もそこ／＼にいぎたなく午睡をしてゐる最中であらう。下女は朝からの皿小鉢をやつと洗ひ畢つて、新聞のつゞき物でも讀み耽つてゐる時刻である。物騷な物貰ひや、氣味のわるい行商人が坂の多い此の邊の小徑まで入り込んで來るにはまだ間があらう。出好きの細君は既に子供をつれて外へ行き、今頃は三越か松屋の食堂で物を貪り食つてゐる最中であらう。されば窗の雀がかゝる時分に、此の窗の内に人のゐることを心づかないのも無理ではない。雀の中の二三羽はすつかり安心してゐるらしく、窗につるした野菊の鉢の蟲を啄みはじめた。菊の枝は蔓のやうに長く空中に垂れて微風に動いてゐるので、之にとまらうとする雀は、いづれも身を倒にして或はその首をねぢまげ、或はその尾を半開の扇の如くにして、頻に輕業を演じてゐるのである。わたくしは之を眺めて、ふと江戸の人のつくり始めた雀踊といふものが、いかに巧妙に群雀の嬉戯する姿勢を捉へて藝術となしたかを思つた。時人は曾て俄國の舞踊家パブロワ夫人の「白鳥の死」なるものを看て感嘆して措（お）かなかつたが、然し何ぞ圖らん、わが江戸の舞踊の其の題材を雀に取れるもの、獅子に取れるものゝ

如きは、彼に比して必ずしも遜色あるものとはなし難い。貴人の彼を迎へて清雅となし、此を斥けて陳腐となすのは蓋し時好の然らしむる所。藝術の優劣に基くものではなくして、却て時人の鑑識の足らざることを示すものであらう。

今年の秋、木挽町の劇場に於て、二三の青年俳優が雪中狗兒の嬉戯する狀を演じたことがあつた。わたくしは圖らず此を看て苦笑して席を立つた。抑かの舞踊は何人の考案したものか審でないが、舞踊者の頭面全身を包んで犬に扮せしむるに至つては、藝術の境より脫して、物眞似に類する卑俗極まる雜技に陷つたものである。山東庵京傳の戲著に腹筋逢夢石といふものがある。この冊子は歌川豐國の繪を挿入して、即席口上茶番の考案でも示したものらしく、固より嚴格なる批評を下すべき種類のものではない。然し極めて簡單なる方法を以て、動物の特徴を現した所は、例へば裀を褰げて脛を見せた男が澁團扇を尻に挾むで矮鷄の眞似をなしたるが如き、又菅笠のかげより片腕を差出して蝸牛の眞似をなしたるが如き、その滑稽の妙は縫ぐるみの俳優の犬に扮したるものとは雲泥の差があると言はねばならない。

わたくしは煙管に刻煙草をつめながら窗の雀を見まもつてゐる中、北原白秋さんの歌集に「雀の卵」といふものゝあつた事を思起した。雀を題として詠じたものゝ尠からぬが中に、

そぼ濡れて竹に雀がとまりたり二羽になりたりまた一羽來て

咳すればさみしからしか軒端より雀さかさにさしのぞきをる

ぽつ〳〵と雀出て來る殘り風二百二十日の夕空晴れて

の如きは今猶わたくしの記憶に存するものである。「雀の卵」は作者が十年間の苦吟を集めたものといふ。

雀は輕噪にして滑稽。また鄙俚にして可憐なるもの。古來俳人の好んで之を節序に配合して即興を述るの便となしたるもの。その類例の如きは多く舉げるに及ぶまい。

竹の雪落ちて夜啼く雀かな　巫丈

元日やはれて雀のものがたり　嵐雪

雀子や掌に見る死ふとり　百明

雀子と聲なきかはす鼠の巣　芭蕉

詩佛大窪天民の集に雀噪と題した絶句が載つてゐる。雀の聲を現すに嘖々槎々の字を以てしたのが、わたくしには目新しく思はれたので、此作を記憶してゐたのである。

寒雀群來繞ㇾ樹鳴。向ㇾ人恰似ㇾ賀二西成一。槎槎嘖嘖雌雄難ㇾ辨。甚勝班鳩管二雨晴一。

雀聲嘖嘖更槎槎。相喚相呼不ㇾ耐ㇾ嘩。須臾飛去跡二何處一。知是橋邊有二覆車一。

絶句中の其の二は江戸の詩人であつた詩佛の面目を想見せしめるものがある。横町の家の檐にでも群れあつまつて騒いでゐた雀が忽然ぱつと何處へか飛去つたので、始めて河岸通の橋際で荷車の顚覆した騒ぎのあつたことに氣がついたといふ意である。

雀を題材となした作品にして、その成功する所以を究めたなら、必輕妙の一點に歸することを知るであらう。わたくしのこの一家言は繪畫に於て能く證明せられてゐる。羽毛を細寫して餘さざるが如き精細なる筆法よりも、即興的なる不用意の筆致が、却つて能く此の雀躍なる小禽の活潑する狀を捉へ、看るものをして言ふべからざる雅趣を感ぜしめる。

わたくしがわが窗に群雀の嬉戲するさまを見て、此のやうな興味を催し得たのは、たま〳〵心頭に浮び來る詩賦繪畫の聯想に因るのであらう。わたくしは曾て目にした名畫と、これを目にした其の時と其の處とに思を移した。折から雀は郵便脚夫の耳門をあける音に一羽のこらず隣の藪へと飛去つた。わたくしは窗を開いて吊した菊の鉢に筆洗の水を灌ぎながら門外を眺めると、いつの間にやら日當りのよい墻に背を向けて齒入屋の親爺が仕事をしてゐた。

○巷の聲

日日門巷を過ぐる物賣の聲もおのづから時勢の推移を語つてゐる。

下駄の齒入屋は鞭を携へて鼓を打つ。この響は久しく耳に馴れてしまつたので、記憶は早くも模糊として、その起源のいつ比にあつたかを審にしない。明治四十一年の秋、わたくしが外國から歸つて來た時、齒入屋は既に鞭で鼓を打ちながら牛込邊を歩いてゐたやうである。

その比ロシヤのパン〳〵と呼んで山の手の町を賣り歩く行賈の聲が、わたくしには耳新しく聞きなされた。然しこれとても、東京の市街は廣いので、わたくしが牛込邊で物珍しく思つた時には、他の町に在つては既に早く耳馴れたものになつてゐたのかも圖られない。

およそ門巷を過行く行賈の聲の定めがたきは、日暮海潮の去來するにも譬へやうか。その始めに當つては人の之に意を注ぐものなく、その漸く盛となるや耳に熟するのあまり、遂にその消え亡ぶ時を知らしめない。婦女流行の變化も亦門巷の聲にひとしい。

明治四十一年の頃ロシヤのパン〳〵が耳新しく聞かれた時分、豆腐屋はまだ喇叭を吹かず、黄銅製の振鈴を振り鳴らしてゐたやうに、わたくしは記憶してゐる。

煙管羅宇竹のすげ替をする商人が、小さな車を曳き、其の上に据ゑ付けた釜の湯氣でピイ〳〵汽笛を吹きならして來たのは、豆腐屋が振鈴を廢して喇叭に代へたよりも以前にあつたらしい。天秤棒の後先に箱をつるし、ラウーイ〳〵と呼んで歩いた古い羅宇屋は、いつかなくなつて、新しい車に變つたのである。齒入屋も近年は大抵羅宇屋に似た車を曳いて來るやうになつた。

研屋は今でも折々天秤棒を肩にして「鋏庖丁、剃刀研」と唱ひながら門巷を過るが、鑄掛屋の聲はいつからとも知らず耳遠くなつてしまつた。是れ新時代の家庭に在つては、臺所で使ふ鍋釜のたぐひも悉く廉價なる製造品となり、破るれば直樣古きを棄てゝ新しきを購ふやうになつた爲であらう。何物にかぎらず多年使ひ馴れた器物を愛惜して、幾度か之をつくろひつゝ使用してゐるやうな醇朴なる風習が、今は既に蕩然として後を斷つたのも、此の一事によつて推知せられる。

明治三十年の春明治座で、先代の左團次が「鑄掛松」を演じた時、鑄掛屋の呼び歩く聲を模することが至難であつたので、幾度か練習した後、遂にまことの鑄掛屋を招いて書割の後から呼ばせたとかいふ話を聞いたことがあつた。

わが呱々の聲を揚げた礫川の僻地は、わたくしの身に取つては何かにつけてなつかしい追憶の里である。むかしのまゝなる姿をなした○○○や鳥さしなぞを目撃したのも、是皆金剛寺坂のほとりに在つた舊宅の門外であつた。○○○は饅頭形の籐笠をかぶり其の紐を頤にかけて結んでゐたので顏は見えず、笠の下から頤の先ばかりが突出でゐるのが何となく物凄く見られた。着物の裾を褰げて淺葱の股引をはき、筒袖の絆纏に、手甲をかけ、履物は草鞋をはかず、草履か雪駄かをはいてゐた。道具を入れた籠を肩先から巾廣の眞田の紐で小脇に提げ○○○と押し出すやうな太い聲。それをば曇つた日の暮方ちかい頃なぞに聞くと、何とも知れず氣味のわるい心持がしたものである。鳥さしの姿を見るのもその頃は人のいやがつたものである。

鳥さしは菅笠を冠り、手甲脚絆かけ、草鞋をはき、腰に獲物を入れる籠を提げ、繼竿になつた長い黐竿を携へ、路地と云はず、人家の裏手と云はず、どこへでも窃に入り込んで、雀の囀る聲に似せた笛を吹きならし、雀を捕へて去るのである。鳥さしは維新以前に在つては雀を捕へて、幕府の飼養する鷹の足を暖めさせるために、之を鷹匠の許へ持ち行くことを家の業となしてゐたものであるが、いつからともなく民間の風聞を探知して歩く隱密であるとの噂が專らとなつたので、江戸の町人は鳥さしの姿を見れば必不安の思をなしたといふはなしである。わたくしが折々礫川の門巷を徘徊する鳥さしの

姿を目にした時には、既に十有五年を過ぎてはゐたが、人は猶既往の風習を説いて之を恐れ厭つてゐた。今の世に住つては、鳥さしはおろか、犬殺しや猫の皮剝ぎよりも更に残忍なる徒輩の横行するのを見ても、誰あつてか之を目して不祥の兆となすものがあらう。わたくし等が行燈の下に古老の傳說を聞き、其の人と同じやうにいはれなき不安と恐怖とを覺えたのは、今よりして之を顧れば、その時代の空氣には一味の哀愁が流れてゐた故でもあらう。この哀愁は迷信の恐怖と共に、世の革るにつれて今や全く湮滅し盡したものである。わたくし等が少年であつた時には、風の聲、鐘の響、犬の聲、按摩の笛の音が無限の哀愁を惹起させたばかりではない。夜の闇と靜寂とさへもが直ちに云ひ知れぬ恐怖の泉であつた。之に反して、昭和當代の少年の夢を襲ふものは抑も何であらう。民衆主義の悪影響を受けた彼等の胸中には、恐怖畏懼の念は影をだも留めず、唯賣名成功の一事に齷齪たるのみであらう。聞くところによれば、現代の小學生は小遣錢を運動費となして、級長選擧の事に狂奔することを善事となしてゐるといふではないか。

市中行賣の中、恰雁の去る時燕の來るが如く、節序に從つて去來するものは、今の世といへども往々人の詩興を動す。彼岸ざくらもまだ散り盡さぬ頃から聞え始める苗賣の聲の如き、蟲賣の如き、人はまだ袷をもぬがぬ中早くも秋を知らせる蟲賣の如き、其の他、風鈴賣、忍賣、稗蒔賣、朝顏賣の如き、いづれか俳諧中の物ならざるはない。正月に初夢の寶船を賣る聲は既に聞かれなくなつたが、中元には猶お迎ひ〳〵の聲を聞く。近年、麻布邊の門巷には、梅雨または秋霖の霽れる折を窺つて、時々「竿竹や竿竹」と呼んで物干竿を賣りに來るものがある。幾日となく降りつゞいた雨のふと霽れて、青空の面にはまだ白雲のちぎれ〳〵に動いてゐる朝まだき、家毎に物洗ふ水の音と、女供の嬉々として笑ふ聲の聞える折から、竿竹賣の田舍びた太い聲に驚かされて、犬の子は吠え、干された雨傘のかげからは雀がぱつと飛び立つなど、江戸のむかしに雨の晴れた日樋竹賣の來たといふ其の頃の情景もおのづから思ひ合される。

藥を賣り歩くものには、多年目に馴れた千金丹を賣るもの、定齋の箱をかつぐものがある。千金丹を賣るものが必手に

革包を提げ蝙蝠傘をひらいて歩いたのは明治初年流行の遺風であらう。日露戰爭の後から大正四五年の頃まで、市中到處に軍人風の裝をなし手風琴を引きならして藥を賣り歩く者があつた。淺井忠の板下を描いた當世風俗五十番歌合といふものに、「風ひきめまひの大奇藥オッチニイ。」とその賣聲が註してある。此の書は明治四十年の刊本であるが、鍋燒饂飩の圖を出して、支那蕎麥屋を描いてゐない。之に由つて觀れば、支那そばやが唐人笛を吹いて歩くやうになつたのは明治四十年より後であらう歟。

支那蕎麥屋の夜陰に吹き鳴す唐人笛には人の心を動す一種の哀音がある。曾て白日に飴を賣るものゝ吹き鳴したチャルメラの音も同じやうであつたが、之れはいつか知ら聞かれなくなつた。按摩の笛の音も亦近年は全く絶えたやうである。されば之に代つて昭和時代の東京市中に哀愁脈々たる夜曲を奏するもの、唯是南京蕎麥賣の笛があるばかりとなつた。新内語りを始め、其他の街上の藝人に關してはこゝに言はない。

其日〳〵に忘れられて行く市井の事物を傍觀して、走馬燈でも見るやうな興味を催すのは都會に生れたものゝ通有性であらう。況や門巷を過る行賈の中には俳諧狂歌の好資料となるものゝ尠からぬに於てをや。されば古老の隨筆にして行賈の風俗を記錄せざるものは稀であるが、その中に就いて、曳尾庵がわが衣の如き、小川顯道が塵塚談の如きは、今猶好事家必讀の書目中に數へられてゐる。是亦わたくしの贅するに及ばぬ所であらう。（昭和丁卯十一月）

○中村さんに質する文

中村武羅夫さんは讀賣新聞十一月六日と七日との紙上に於いて、わたくしが中央公論十一月號に寄せた文に對して論駁せられる所があつた。中村さんの論文の中わたくしは爰に森先生の著述に關することについて重ねて中村さんの答辯を促すのである。他の事は凡て之を問はない。それは文學批評の以外に走せたものであるが故である。

中村さんは讀賣新聞の紙上に於て、「私としては鷗外の文學者としての業績などには今日と雖も依然として大して價値を置いて居ぬし、イヤな人間だといふ感じにも、ちつとも變りはない。荷風氏がどんなに鷗外の衣鉢を繼がうと、それは荷風氏の勝手、鷗外を私が如何に認めまいと、それは私の見識でどうも仕方がないのである。」と言つて居られる。爰にわたくしが中村さんに迫つて是非にも其の答辯に接したいのは此の一項についてゞある。

中村さんの文は漫罵に類するもので、批評の體例は全く之を具へてゐない。獨斷の結論のみを秩序なく羅列したもので其の結論に到着すべき經程を詳にしてゐない。是等に批評の體裁を具備せざるのみならず、一個人の私見を陳るについても亦不親切の甚しきものである。およそ物の善惡を判斷するに當つては其の理由を述べなくてはならない事は、人間常識の然らしむる所で、何人と雖之を拒むことは出來ない。

中村さんは第一に森先生が文學者としての業績は大して價値のあるものではないと言つてゐる。これは如何なる事實について、又如何なる理由に基いて立論したものであらう。若し中村さんの見解が當を得てゐたとするならば、わが現代文學一般の研究に關して今日までわたくし等の公認してゐた批評は、根柢より覆されることになる。わたくしは日本現代の文學史に關して、若し人の之を問ふ者があつたなら、硯友社文學の後に起つた凡ての流派の文學は、專ら森夏目兩先生の感化を蒙つて現れたものだと答へる。わたくしは坪內逍遙、森鷗外、尾崎紅葉、幸田露伴、二葉亭四迷、夏目漱石の六家を擧げて現代の文學を代表するものとなしてゐる。但し、六家を擧げたのは專ら小說について言ふ場合である。森先生が現代文化の大恩人である事は獨小說の製作にのみ限られてゐるのではない。今先生の遺著について之を見るに、その功業の赫々たるもの（一）に文藝諸般の批評に關すること。（二）に戲曲の製作。（三）に泰西文學の飜譯及紹介に關して。（四）長短の詩に關して。（五）美術の鑑賞に關する數項に分類することが出來る。此の各項について、森先生は夙く明治二十年代に於いて吾等後進者の步むべき道を開かれたのである。その最了解しやすき二三の實例を擧ぐればそれは戲曲の文體につい

てである。今日戯曲に筆を染むる作家は過去史上の人物を取つて之を自家の作品中に入れる時、皆現代語を以て之を描寫してゐる。是は森先生の「生田川」及「靜」の二曲に始まつたのである。又過去の人物の事蹟を考究して其の傳を立つる時、その人物の祖先より說き起して、その子孫におよぼし、以て一人物の完全なる生涯を描き出さんとしたるが如き浩瀚なる方式も、亦森先生の始めてなされた所である。以上最も見易き一二の例證を以てするも、森先生が文學上の功績は決して僅少のものではない。中村さんは何故に、「大して價値を置いてゐぬ」と言ふのであらう。尤も中村さんの此の評語には聊意義の透徹しない點がある。「大して價値を置かぬ」と云ふ語の中「大して」なる一語は「價値」なる無形名詞を制限する形容詞であるのか。或は「置く」と云ふ動詞を制限する副詞であるのか明でない。わたくしは中村さんの此の文の意義をば、「その價値あることは幾分か之を認ないでもない。然しその價値は大なるものではない。」といふやうに會釋したのである。

中村さんは森先生のわが現代文學に及した功績の大半を否定しやうとしてゐる。わたくしはこの否定の果して公平なるや否やを攻究して見たいのである。中村さんの論斷は既に述べたるが如く簡單にして批評の體を具備してゐない。森先生の功業の如何は明治文學發達の經路を攻究するには重要なる事件である。是れわたくしの是非にも中村さんの御返事を伺ひたいと切望する所以である。

中村さんは「荷風氏がどんなに鷗外の御輿を擔がうと、それは荷風氏の勝手。」と云はれてゐる。此の文中中村さんが「御輿を擔ぐ」となすのは、わたくしが盲目的に森先生の文學を稱揚して已まぬと云ふ意義であるらしい。わたくしは文學の評論に筆を乘る場合には理由なくして猥に稱揚の辭を連ねたことはない。それ故「勝手」と云ふ語は妥當ではない。「勝手」とは漫然として己れの好む所に從ふものを言ふのである。わたくしは淺學菲才ではあるが、こゝに一文學者の著作を取つて之が批評を試みるに當つては、まづ今日世界の文學上既に公認せられた批評の理論に鑑みて、然る後わが意

見を定めるのである。わたくしは曾て谷崎さんが初期の制作について熱烈なる賛辭を捧げたことがあつた。又久保田さんが年少の著書「淺草」についても審に其の特徴を列擧して評壇の注目を惹起せしめた事があつた。是れ皆自ら公平なる批評と信じて然る後に公表したものである。中村さんが謂ふ所の「御輿を擔ぐ」の語には、わたくしが何等か爲にする所があつて、森先生の文學を稱揚するとの意が寓されてゐはせまいか。果して然りとすれば誣るも甚しいものである。わたくしは知遇を森先生に忝くする以前、既に忝く微名を一二の先輩に知られてゐた。今日森先生が名望の羽翼を借りて文壇に立つべき必要のない事は言ふを俟たぬ所である。

中村さんは又言ふ。「鷗外を私が如何に認めまいと、それは私の見識で、どうも仕方がない。」云々。是は中村さんが「鷗外を認め」ざる文學的評論を公表せられた後でなくては全く意義をなさぬものである。中村さんが何故に森先生を認めないか否かの評論を俟つて、中村さんの文學者としての見識が始めて定められるのである。唯「認めない」と言つてゐるだけでは、恰婦女子小兒の輩が駄々をこねてゐるのと擇ぶ所がない。

中村さんは憚る所なく、「今でも」森先生を「イヤな人間だ」と思つてゐると公言してゐる。これは文學の作品と作家の人物とに關して頗興味ある問題である。わたくしは公表せられた作品は文學に屬するものにして、之を讀む者は隨意に品評して差間なきものと思つてゐるが、作家の人物の高下善惡の批判に至つては文學に關せざる私事に渉るが故に、事情已む事を得ざる場合を除くの外、輕々しく口にする事は許されざるものと信じてゐる。況や吾儕の後進が前賢の文學について云々する場合に於てをや。英のオスカア、ワイルドは男色の罪を犯して囹圄に投せられたが、世の文學を愛するものは其の詩文を尊んで珠璧となす事を憚らない。江戸爲永春水が人情本を好むものは往々にして越前屋長次郎が人品の如何を問ふことを忘れてゐる。山本北山は江戸詩文の弊を挽めて新興の文學を起さうとするに當つては、恰佛のソラがなしたるが如く、前賢の詩文の疵瑕を指摘して寸毫も許す所がなかつたが、然し私の人物に關しては一言も云ふところがなかつ

た。古人も旣に言はずや。文學の論は君子の爭であると。

心あるものは井ノ頭池畔の禪林寺に赴いて森先生が墳墓を見よ。先生は生前位階勳等の低くからざる貴人であつた。然るに其の墓表には唯姓名を刻するのみである。先生が生前襟度磊落にして、決して邊幅を修むるが如き俗人でなかつたことは冷き一片の石がよく之を語つてゐるではないか。然るに中村さんは何事に感じて、先生を目するに「イヤな奴」となし「イヤな人間」となしたのであらう。狂者の言ならば如何ともすべき道がない。愚人の言ならばわたしは諄諄乎として之を誨るの勞を惜しまぬであらう。そもそも文士中村武羅夫さんの狂人なるか然らざるかは中村さんの答書を俟つておのづから明瞭となるであらう。

偶感偶想（遺稿）

故　德富健次郎

大正十年九月五日

何故に日本の耶蘇教は不振乎？

新しい旗幟をもたぬ故に。

耶蘇教は何を日本に齎らした乎？

余曰く、一夫一婦。――社會の單位。

又曰く、人格の尊嚴。(個人)。Democracyの基礎ハ此處だ。――宇宙の單位。

M曰く、隣を愛する事――社會事業等

孔子も、釋迦も齎らさぬものを耶蘇が齎らした。
明治の日本は、耶蘇のパン種が社會に潜入したのだ。それが今日に花咲いた。
若い耶蘇の元氣が、新興日本の元氣と共鳴した。

耶蘇教が日本に與へたものは、皆成長し、しつつある。
唯一つ、耶蘇が日本に與へぬものがある、それは平和だ。
日本はまだ無抵抗でない。
まだ日米戰爭を考へて居る。
有富虎之助が嘆じて居たやうに國際平和問題に日本の耶蘇教會が不熱心で、各教會團の議題にそれを否決したり、
最近維納の會議は、日本の婦人委員が軍備制限では議決に加はらずに退席したり、
要するに日本の耶蘇教はまだ「平和」に到達せぬ。
掲げるべき新耶蘇教の旗幟は「平和」だ。

耶蘇は日本に個人を生むだ
その個人が今は國家に大に成長したのだ。
Mは曰ふ、三十三の耶蘇では、平和の君にはなれません、皆七十になつても、八十になつても、三十三の耶蘇に
止まるから駄目です。

日本の耶蘇教は行き詰つた。（世界の耶蘇教が行き詰まつたやうに）

内村鑑三さんの如きは、**耶蘇教に行き詰まつて、「復活」に活路をやつと開いて居る。**

「復活」は生命の顯現で、生命は成長が課程だ。

日本が復活の耶蘇でなければならぬ。

○

耶蘇は猶太民族を背景にしてこそ耶蘇だ。バハイは後景が無いから影が薄い。

復活の耶蘇は新日本民族を背景にせねばならぬ。

すべて相談ずくの世界である

「相談ずくで黄金淨土が出て來やうか？」と余の言は、錯誤のやうだ。

然し余の言は眞實だ。

「社會の家庭化」で、「家庭の社會化」でないと云ふ余の言も、眞理だ。

一切を自己に收むるのだ

自己を一切に擴げるの道だ。

求心作用だ。

遠心、求心は同時に働く。
異なる力が同時に働いて、球の大穴廻轉がある。

○

日本人には自己の誕生が先づ必要だ。
「日本の自己」だ。
其自己が充實すれば世界的に働きかける。

○

Minus Peace――日本は進歩したところで第二の獨逸になる外は無い。
孔子駄目、釋迦駄目、三十三の耶蘇駄目。彼等のすべてが成長し、生れ更はつて來ねばならぬ。

*　*　*　*　*

九月六日
イスカリオテのユダは羅馬官憲が耶蘇に付けた間者と云ふ最近說がある。
それでもよい。
然し間者にすれば味がなくなる。

ユダはユダで真面目だ。

ユダは我強いペテロだ。ペテロが高慢になればユダだ。ユダが謙遜なればペテロだ。

○

九月の「開拓者」を見る。皆尤だ、皆好い。

然し「旗じるし」が違ふて居る。

皆は「十字架」を旗にする。

何故「日輪」を旗にしないか。

戦は勝つて居る。勝を宣すればよい。

犠牲を造つたり、犠牲に好んでなる要はない。

「十字架」は死だ。

「復活」は生命だ。

生命は成長だ。

M曰ふ、三十三の耶蘇では駄目です、内にはなつても外に成つて居ない、それは復活の耶蘇でなくてはなりません。

何にせよ「十字架の時代は過ぎた」とは偉な宣言である。

耶蘇の外に、十字架につけられた者の外に、此宣言をなし得る者は無い。

○

山本海軍大佐の話に、×宮が巴里の地下鐵道で、切符を見せしに手放さなかつたから驛員に叱られ、翌日大佐に「わしも生れて初めて叱られた」と云ふ事がある。

×宮も、大佐も其意味が分つたかしら。

俺にも其樣な記憶がある。

それは新橋での事だ。非常の人込みに、若い驛員が、切符を手放して見せよと怒鳴る。余は其通り。面憎くかつたので「分かりましたか」と冷語を放つたら、彼怒り「分かりましたよ、分かりましたよ、」と顏をつき出した。此方が惡かつたのだ。其男は二十二三の下ぶくれ、含み聲の男だつた。

日本人の癖として、先方を信ぜぬ、切符なども容易に手放さぬ。×宮にもそれがある。

此は「日本から日本へ」の Kantara の切符貰ひの時の俺の失策と共に、失策だ。

××大夫の問に答えて、×宮が「何も無かつたよ失策は」と云ふたが、此一事を忘れて居たのだ。

* * * * *

九月七日

日本人の一圖になる癖で、今迄壓へつけた女をまた揚げ過ぎる。

Goethe の Eternal Feminine を高調し過ぎる

過ぎるは、嘘だ。

自然に作る可からず。

男は常に胤、種、生命の素の所有者だ。

女はそれを生長の役目だ。

男天、女地。交合の自然的態度がこれを證する。

天地だ。男女だ。父母だ。

○

古昔の佛徒は、生活に於ても先達で、利用厚生の功德があつた。

耶蘇教の入つて來た時も、文明のおみやげを宣教師は齎らした。

生活をはなれて何の宗教?

信じて貧しくなる事は全くの嘘だ。

○

路加はあまりに文字が勝ち過ぎる。あまりに文章に囚はれ過ぎる。

耶蘇の生れる時、其幼少の時について路加が書いた事が事實なら、阿母マリアの記憶にそれが存せねばたらぬ。

然るに母マリヤは耶蘇を信ぜず、狂人扱ひにして、捉へやうとさへ思ふたでないか?

耶蘇の母は平凡な良い女だ。人見一太郎嘉市の阿母、「何のよか、よか」のあの婆さん位の者だ。

乞食まで御馳走に呼ぶ——其後で「禮服を著ない者」云々は唐突で蛇足だ。
枝から枝がさす。
路加の文辭。
放蕩息子の話だつて、兄のむづかりはやはり蛇足だ。

* * * * *

九月九日
四福音は、色々各筆者の筆癖もあるが、また Naive で Simple で且意味を分からずに書いて居たりする。そんな處が貴重で、そんな處に耶蘇が活躍して出る。

○

明治十八年の頃、今治に居た時、米搗きの誰やらが外史を習ふて「淸盛は偉い」と云ふたのを曾我部四郎が苦笑して余に話した事がある。
Demo は自然だから、自然主義の淸盛を賞歎する。曾我部は士族上りで、淸盛をけなす教育をうけて居たのだ。
明智光秀を俺は君を弑した不忠者と唯謂ふて居た。
淺原丈平が感情純一で、自己の感情に殉する男と光秀を嘆美した時、余は一寸まごついた事がある。
人は型に入り易い。
型を破るは容易でない。

○

「新約」のユダはあまりに贔屓の引倒しだ。ユダは俗物のユダヤ人で、我強い男たのだ。立身出世の爲耶蘇に從ひ、耶蘇の事業がユダの期待に反したので、「裏切られた」と云ふ嗔恚の一念で「賣つた」のだ。Tit for tat——眼にて眼を償ふ復讎腹癒せをしたのだ。ユダは淺い男だ。

ユダの縊死は負け惜みで、單なる後悔自責ではない。

ペテロも耶蘇を知らずと云ふた。

ペテロの罪はユダより却て重い。

然しペテロは其罪を悔い、終生精進した。

ユダは縊れて一氣に死んだ。

ペテロは謙遜でユダは高慢だ

高慢が惡魔なのだ。

ユダは普通のユダヤ人、俗ユダヤ人で、行き過ぎる性格を彼はあらはした。それは耶蘇にも、耶蘇を殺したユダヤ人にもある。

「新約」は誇張し過ぎる。すべての人物を實際以下に引下げてある。

白鳥隨筆

正宗白鳥

雜文集

二三の新年號原稿を書終つて一安心した。これで例の如く歳が暮れるのである。東京に住んでゐた時分には、新年號のために忙殺されて、靜かに秋に親しむ暇のないのを歎じてゐたのであつたが、湘南に居を定めてからは、居ながらにして四季の風物に親しまうと思へば親しまれるやうになつてゐる。私の家の庭の楓樹は、この頃になつてやうやく色に染まりだした。古木にからんでゐる蔦も、この頃やうやく紅くなりだした。

庭には植木屋の鋏の音がしてゐる。植木屋の鋏の音は、靜かな心を有つてゐる風流人の耳には快く響くので、私も、一年の仕事を終つたあとで、庭いぢりでもして樂んでゐたらいゝ譯なのだが、私にさういふ趣味が乏しいばかりでなく、私の庭もろくな庭ではない。植木屋など出入させる必要のないやうな庭なのだが、當地移轉以來の知合ひの植木屋が、不景氣で仕事がなくつて困つてゐるのを見ると、「ぢや、家の庭の手入れでもして呉れ」と頼むやうになつたのである。

彼れは、當節の他の職人とは違つて、なか／＼よく働く。煙草ばかり吸つてお喋舌をして時間を潰すやうなことはない。人間もまあ正直らしい。………しかし、彼れによつて手入れをされた庭は、手の入らない前の庭よりも見窄らしくなるのを例としてゐる。昨年も一昨年も同じことだつた。「自然のまゝ打やらかしといた方がいゝのだらうから、來年からは庭の手入れを止さう」と、私達は毎年云つてゐるのであるが、手入れの時節が來て、植木屋に御機嫌伺ひに來られて、失

業の數學を磨かされると、例年の例を破つて斷る譯に行かなくなるのである。

植木屋は、大工や左官などのやうな實用向きの職業に比べると、藝術的分子に富んでゐる者だ。ところが、私の家へ庭の手入れに來る藝術家の彼れが、何をしてゐるかと見てゐると、第一にやたらに木を切ることである。庭を坊主にするのを庭園藝術の第一義としてゐるらしい。かつて、庭の椽に延びてゐて、隣家に對する目隱しになつてゐたある木を切つたから、「そんなに幹を切つたら木が死ぬるだらう」と注意すると、「なに、來年は芽を吹きまさあ」と、彼れは空呆けてゐた。その木は、Yの字の形をした骸骨となつたまゝ、一二三年來元の所に突立つてゐる。生命の元を斷たれたその木は、春の雨にも風にも惠まれなくなつてゐる。彼れは、今度は、風致ある枝を盛んに出してゐた梅の木を裸にしてしまつた。垣根に添つた一握の竹叢(むら)を見榮えよくさせるために、梅の枝をぶつぱらふ必要があつたのださうだが、その奧の竹は皆んな女竹で、葬式用として近所から貰ひに來るさうな、面白くない竹なのだ。彼れは、大骨折で梅の枝を切つた上に、御叮嚀に、さういふ女竹の皮なんかを剝いたり、磨いたりしてゐた。以前私が此處に移つた時には、多少は幽邃の趣きがあつた庭が、彼れの庭園術を發揮されたゝめに、年々、生氣を失つて、見窄らしくなつて來た。左右が切崩されて眞中だけがモヂャ〳〵と殘つてゐる有樣は、漁夫の若い衆の角刈(かくがり)頭見たいである。私に庭園趣味が乏しいからいゝやうなものゝ一株の植木にも心を勞するやうな人だつたら、さぞ失望するだらうと察せられる。

そこで、私はふと思出して、少年時代に學んだ唐宋八家文を捜して、柳宗元の種樹郭橐駝(たくだ)傳を讀んだ。

「駝は種樹を業とす。凡そ長安の豪富の人、觀遊を爲し、及び果を賣る者、皆爭ひ迎へて養視を取る。駝が種うる所の樹は、或は移徙すとも、活き且つ碩茂し、蚤く實りて以つて蕃からざるは無し。他の植うる者、窺伺傚慕すと雖も、能く如くは莫きなり。」

之に問ふあれば、對へて曰く、「橐駝は、能く木をして壽にして且つ孳せしむるに非ざるなり。能く木の天に順ひて以つ

て其性を致すのみ。凡ソ植木の性、其本は舒びんことを欲し、其培は平かならんことを欲し、其築は密ならんことを欲す。既に然して、動かすこと勿れ、慮ること勿れ、去りて復た顧みざれ。其蒔うるや子の若く、其置くや棄つるが若し。則ち其天なる者全くして、其性を得。故に吾は其長ずるを害せざるのみ、能く之を碩茂する有るに非ざるなり。その實るも抑耗せざるのみ、能く蚤くして之を蕃くする有るに非ざるなり。云々」

さすがにうまいことを云つてゐる。私の家の植木屋は、「木の天に逆つて以つて其性を致させざるもの」ではあるまいか。柳宗元は、植木屋と問答したあとで、「亦善からずや、吾、樹を養ふことを問うて、人を養ふの術を得たり」と云つてゐるが、私は私の植木屋の所行を見て、「文學の術を學び得たり」とでも云つていゝだらう。彼れは、木鋏を帯に挾み、藝術的感興に醉つてゐるらしい顔して、樹木を見てゐるが、その結果は、いゝ枝を切つたり剝いだりするだけである。私が頼んで一本だけ毒掠を免れしめた楓樹は、今、冴えないながらも、紅葉してゐる。小細工をして小奇麗らしくしなくつても、葉が老いて落ちるのを見てゐるのも面白いではないか。

かういふ非藝術な彼れも、他の多くの藝術家と同様に自己の藝術には強い自信を有つてゐるらしい。私はふと彼れに於て私自身の影を見ることもある。彼れは不遇な失業者であり、私は幸運な作家であるといふ相違があるだけで、内容にさう多くの相違はないのかも知れない。

G

敬虔なる心の所有者なら、過去一年の間、仕事にあぶれないで、身邊に何の災厄もなかつたことを神に感謝して、希望をもつて新年を迎へるであらう。私はさういふ敬虔な氣持に醉つて一年を送り一年を迎へたことは一度もなかつた。今日まで、私の書いて來たものがよくも世に迎へられたものだと、一年の終るたびに感じてゐた。今年もさう感じてゐる。私

は中央公論の新年號には、二十年の間、二三度載けたゞけで、寄稿を斷つて來た。まだ私もその下積時代に居た時分に、一寸月職」や「明日」などをこの雜誌に寄稿して以來、私も隨分多量に生産した譯であつた。しかし、量の多いばかりお自慢にならないのは云ふまでもない。わが植木屋の如く才能を欠いだ努力ばかりお自慢にならないのは云ふまでもない。……さう思ひながら、以前は文壇の技術的位を占めてゐた中央公論の所謂附錄號なるものなどに、一二三度續けて寄稿を依賴されると、おのづから鼻が高くなるのであつた。

わが植木屋は先日、落葉を燃しながら仕事休めに煙草を吸つてゐた間に、浮世の生活難をこぼしてゐたが、そこへ、珍らしくも、ある家から、庭の手入れを彼れに賴んで來た。すると、彼れは俄かに元氣づいた。元氣づいたのは結構だが、急に私の家の庭などでは働き甲斐のないやうな口吻を洩らしだした。我々原稿生活者にもよく見られるところである。私も屢々さういふ心理狀態を經驗して來た。

私がある知人に、この植木屋の話をすると、庭園に趣味を有つてゐるその人は、いろ〳〵に庭造りや園藝の話を、私に話して與れたが、そのうちに、

「しかし、名人肌の大工や植木屋にも困りますよ。變なところに凝つて、それをまた自慢にされるのでたまらない」と云ふのを聞いて、私は思ひ當るところがあつた。

料理の名人にも自慢の達人が多い。數年來私の馴染になつてゐるある鮨屋の主人は、恐ろしく自慢するので、そこのうまい鮨も、をり〳〵まづく思はれることがある。江戶ッ子は由來自分の藝に誇る習ひがあつて、文學者でも都會生れの人々は、おれの腕を見ろと云つたやうなところがあつて、をり〳〵その傑れた藝がいやみに見えるのであるが、田舍者の自慢は一層いやみである。泥臭い自慢は一層聞苦しい。

先日、ある舊知人が田舍から、帝國ホテルへ私を訪ねて來た。自分の發明したある商品を都會に賣廣めるのが上京の目

的らしく、その効能の說明をしてゐたが、しまいには、社會道德の講義までしだした。

「僕は人間に差別を設けない。僕は俥屋でも決して呼棄てにしない。俥屋さんと云ふ。金持にも威張らせない。金持が傲慢な口を利くと、あなたは自分一人の力で金持になつたのぢやあるまいと、意見をする」とその意見を二三十分說立てた。どうも田舍廻りの社會主義者から聞かされた說の受賣りらしかつた。

しかし、その人は一つだけ面白い話をした。

「このホテルは下が船の形になつて水の上に浮いてゐるのだ。だから、大地震にも倒れなかつた。たゞ、船の鎖が二つだけ千切れたさうだつた。君はまだ知らんのかね。あとで支配人にでも聞いて御覽。このホテルは船の上に建てられてるんだよ」

支配人笑つて答へず。

「ホテルでも建築上の秘術にしてるんだな」

「君の商品の製造法のやうに」と、私は云つた。

○

古來文學藝術の士には、世間的に惠まれない人が多かつた。傑れた天才にして轗軻不遇の生を過したものゝ多かつたことは、東西古今の文學史によくあらはれてゐる。今日の日本の作家や美術家のうちにも、あるひはさういふ薄倖漢が存在してゐるかも知れない。しかし、不遇なればこそ、天才が光を放つたので、トン〳〵拍子に出世してゐたなら、自足し慢心して、天才も磨かれなかつたかも知れなかつた。今、次手に唐宋八家文のところ〴〵を讀んで見るのに、韓退之でも柳子厚でも、世間的に不遇であつたゝめに、後世の讀者をも感動させるやうな名文章が作られたのであつた。天才も非凡人

もなかつたらしい明治以來の文壇に於ても、作家は常に不遇な時代に、比較的いゝものを出してゐるやうに思はれる。

私などの文壇生活は概して順調であつた。自己の天分を自覺して世に出た譯ではなかつたのに、平坦な途を歩んで今日に至つた。世路の艱難や人生の憂苦は、私もつねに感じさせられてゐたが、自己の文學上の名聲について焦慮煩悶したことは殆んどなかつたと云つてよかつた。それは、私に强烈な自負心があつたためでもなく、毀譽褒貶を度外視するほどの妙域に達してゐたゝめでもなく、畢竟原稿の捌け口に窮するやうな苦境に墮ちなかつたゝめであらうと思はれるが、それとゝもに、藝術を至上のものと思つてゐなかつたゝめでもあつた。

私は、文章の上で一氣呵成の痛快な經驗はたび〳〵したことはなかつたが、構想や文辭のために骨を削る惱みをしたこともなかつた。「うまからうが拙からうが、自分は持つて生れた天分で、それ以上にもそれ以外にも出來ないのだ。それでいけなければ爲方がない」と、筆を執る時には、一つの諦めを持つて掛つてゐた。その諦めでもなかつたら、空想力の乏しい手先の無器用な私に藝術品を創作しようといふ勇氣の出る筈がなかつた。一つ書いてしまつたら、もうそれで澤山だと思ふのを例としてゐた。是非書きたいものが腹の中にたまつてゐる譯ではなかつた。……何處からかまた頼まれるから、また書くと云ふ風で、二十年來間斷なく書續けた。「同じやうなことばかり書く」と、以前から時々非難されたが、その非難は平凡な非難であるだけによく當つてゐる。私も時としては心の轉換を企てゝ、異つたものを書かうとしたこともあつたが、書いてゐるうちに、何時となしに例によつて例の如きものになつてしまふ。人間は自己以外に出られないことがつく〴〵感ぜられる。……しかし、その自己なるものも、天上天下唯一人の自己ではなくつて、つまりは周圍の感化によつて作られた自己であつて、大した特異なものが内存してゐる譯ではない。

○

藝術を至上視してゐない私は、藝術以上のものを把握してゐるのでもなかつた。私は昔も今も、人生を不思議な存在として見てゐる。自分がこの茫漠たる宇宙に生きてゐることをも、絶えず不思議に思つてゐる。そして、やがて死ぬに極つてゐることを信じてゐる。藝術だつて、究局は生きてゐる間の戯むれ見たいなものだと思つてゐる。戀愛に醉つた時には戀愛は至上であり、文學に惑溺した時には文學は至上である譯だが、それは戀愛や文學に限つたことではない。私などは、年少の頃から文學を好んでゐたので、知らず識らずその道に入つただけであつた。そして、知らず識らず周圍の感化を受けて、今日の文壇的自己が作り上げられたのであつた。私は、幾十年間の文壇の感化から脫却したいと思つてゐるが、それは、企て及ばざることであるらしい。

私は、自分がいろ〳〵に、古今東西の文學の影響を受けて來たことを、今庭前の落葉を見ながら思出してゐる。ことに、明治以來の文學の感化を、年少の頃から今日まで受續けて、今の自己を作り上げたことを思出してゐる。前に云つたやうに、私はこと更他を模倣しようと努めたことはなかつたのだが、見やう見眞似で、おのづから時代々々の假色を使つたやうなところも少くない。

全體明治大正の文學に、傑れた作家や傑れた作品があつたのであらうか。多くの先輩が新文學を樹立するために努力したのに違ひなかつたし、我々は、その基礎の上に立つて仕事をしたことになつてゐるのだが、概して、先輩でも我々でも、安手なものを書いて來たので、後世の讀者をして仰ぎ見させるやうな文學の盛時を形づくつてはゐないのである。

實例を擧げて先輩や同輩の作品にケチをつけることは見合せるとして、私自身の作品なんか、早く亡んでしまつて惜くないものばかりである。私は自分の形骸の死とゝもに、自作のすべてが消えてなくなればいゝと望んでゐる。私は舊作を

讀むためにさう感じるか、他の作家にはさう感じないのであらうか。

○

私は、硯友社の小說は、德川文學と同樣に、相應な興味をもつて讀むことは讀んだのだが、自己本來の柄に適しなかつたせいか、殆んど感化は受けなかつた。私の生れながらに有つてゐた文學癖の萌芽は、「文學界」一派の高踏的文學や、民友社一派の基督敎文學によつて培はれたのであつた。私よりも幾つかの年長者や同年輩の文學者肌の人々には、新來の基督敎によつて、人生を見る目を開かれ、趣味性を養はれたものが少くなかつた。藤村氏でも泡鳴氏でも、有島君でも小山内君でも、さうであつたが、今日では陳腐になつてゐる基督敎でも、あの時分には清新な感情を若い心に傳へる力を有つてゐた。つまり今日、マルクス主義などが、靑年の心を啓發させ興奮させるのと同じことなのであつた。基督敎によつて人生を見る目を開かれるのも、マルクス主義によつて社會を見る目を開かれるのも、そこに永遠性がある譯でもなく、絕對の眞理がある譯でもなく、時の廻り合せでさうなつたのに過ぎない。流轉の世相のうちに永遠の姿を見るのは、天才傑人の所行で、さういふ非凡な眼力を具へた人も稀れにはあつたのかも知れないが、大抵は時代の波に漂つた木の葉見たいなのが、箇々の人間の實際である。あの頃の基督敎文學も、今見ると甚だ淺いものゝやうに思はれるが、今日のマルクス主義文學にだつて、大して深いところがあらうとは思はれない。私なども、十年か二十年か遲く生れてゐたならば、「プロレタリア文學」として分類される一種の文學に隸屬されるやうな作品を產出するに忙しかつたかも知れなかつた。

自然主義文學の「迫眞」にしても、いかばかり眞に迫つてゐたのであらう？ 私はさしたる抱負もなしに、漫然文學によつて身を立てようとした時、偶然自然主義の勃興期に遭遇したので、おのづからその渦中に引込まれたのであつた。そして、專念一意、人間の眞實を文字によつて現はしたつもりであつたが、私の摘抉した眞實なんか、生やさしい平凡な

ものであつたと、今思つてゐる。自然主義によつて新たに人生を見る目を開かれたと、事々しく我れも云ひ人も云ひしてゐたが、それは、私が少年時代に基督教によつて啓發されたのと同樣で、そのために自殺を決行するほどに人生に失望さゝれたのでもなければ、天國に導びかれたほどに希望に輝いたのでもなかつた。私の生命に取つて、有つても無くてもよかつたものゝやうに思はれる。

文學に謂ふところの理想や現實は、要するに文學の上でのみ意味のある理想や現實であつて、本當の理想や現實とは異つてゐるのではないかと、私はかねて思つてゐる。この人間の不思議な生存の眞相については、文學だつて歯が立たないのである。象に對する群盲のやうなもので、群盲の一人である或文學者の作品に隨喜渇仰して、人生の本體を見たつもりでゐた昔の私の讀書法は、極めて幼稚であつた。

○

私も群盲の一人であることを、年を取るにつれて感じてゐる。群盲の一人として、文壇人の一人として、感じたまゝを書くより外に爲方がない。

編輯者雜記

い、雜誌が出來たと思ふ。近來出色の新年號だと自負する。それでもなほ大魚を逸した點もあるが、それはいづれ追々に二月號三月號において漸次お目にかゝることにする。

×

卷頭の三大論文は他には絶對に見られない珍重の文字だ。社會科學者と生物學者と哲學者の第一人者が一堂に會するさへ珍らしいのに、三學者三樣の立場から期せずして「機械」の問題を取扱つてゐるなど異觀中の異觀だ。蠟山氏の「デモクラシーの再考察」は時にとつての重要論文だ。貴族院改革問題とひ、無産政黨合同問題といひ、市長問題といひ、人と時を得た眞に一粒選りの論文ばかりだと信じてゐる。

×

[illegible]又文もよく[illegible]に當たられたのは感謝すべきだ。而も新年號に間に合つたのは何より幸だ。[illegible]愛誦すべき文字だ。文藝時評も片上伸氏のプロレタリア作品評を得て精彩を放つてゐる。文壇の指導評論たるを得るだらう。映畫時評に小山内氏を逸したは惜しい。その代り氏はロシアで最近の活動寫眞をドッサリ見て歸られることになつてゐるから二月號にはいゝロシア土産が得られると思ふ。

×

「八ポイント欄」は、短くて、面白くて、珍しくて、得るところがあつて、話の種になるやうなものを集めたいと思ふ。特志家の寄稿を待つ。それから「特選畫報」へも珍らしい寫眞と研究とを寄稿して下さい。普通のグラフにあるやうなものでなく、もつと遙に高級な、そして珍奇な、研究物の通俗化といふ處を覗つて、大いに異彩を放たして見せようと思ふ。そして學者研究家の責任を以て江湖に紹介し推薦するの紙面たらしめたいと思ふ。

×

[illegible]と同時に、興趣に訴へる頁もあつていい。時代が段々忙しくなつて來れば、手つ取り早く腦中樞を刺戟するものをも必要として來る。「特選畫報欄」の新設はその意味に他ならない。然しながら、普通の所謂グラフィック式のものは雜誌でも新聞でも隨所に見られる。必ずしも中央公論の貴重な頁を割いてまでも設ける必要はない。それらの雜誌や新聞に洩れた、乃至はそれらの新聞雜誌には掲載し得ない種類の高級な珍品を蒐めて學者並にインテリゲンチャの爲めの眼の頁を提供したい趣旨に他ならない。可なり至難な事業である。その代り出來ればいゝものが出來ると思ふ。今月は早急で十分わが意を得たといふ譯にはゆかないが、瀬踏みをして見て良い物が得られるといふ自信はついた。可なり學界で評判も良く、又身を入れて下さる學者も隨分ある。之をいろんな方法で試みて見て中央公論の一つの特色たらしめたいと思ふ。

○

現狀打破の聲も久しいものだが、現代社會の各方面の行詰に伴ふ萎靡沈滯の空氣は一日も早く一掃しなければならぬ。併乍眞に底まで行つた行詰の狀態から初めて新しき機運は動く。現に機運は動きつゝある。我等は暗黑の夜の底に早くも黎明の微光を感じ且つ認める。昭和三年は社會の各方面に果して何を齎すか。新機運をして健全に成長せしめよ。我等は常に希望と期待に滿ちて居る。

○

「我國文化の最高標準號」は現代各方面に於ける權威の執筆に依つて光彩を放つものだが、其意義は正しき文化の現狀の批判であると同時に現代に於ける動きつゝある新機運の提唱でなければならぬ。

○

文壇不振の聲大なる時、文藝批評の權威片上伸氏が今後本誌の文藝時評の執筆を擔當されることになつたのは此際特に意味が深い。現代の文學及び今後の文藝の展開に就いての諸問題、其他文藝一般に亘る氏の明徹なる批判は現文壇に對して大なる反響を呼ぶものであることを信ずる。

○

舊臘堀江博士の逝去は餘りに突然の事で世を驚かした。博士は本誌創刊以來の寄稿家で、深奧の學識と一流の鋭銳なる筆を以て主として經濟問題、時に政治、社會問題に關して常に堂々の論陣を張られ、斯界に重きを爲すと共に、本誌の聲價を高めるに與つて力があつた。今在りし日の博士の精力に滿ちた風貌を想起して感慨深きものがある。

謹んで哀悼の意を表す。

▽

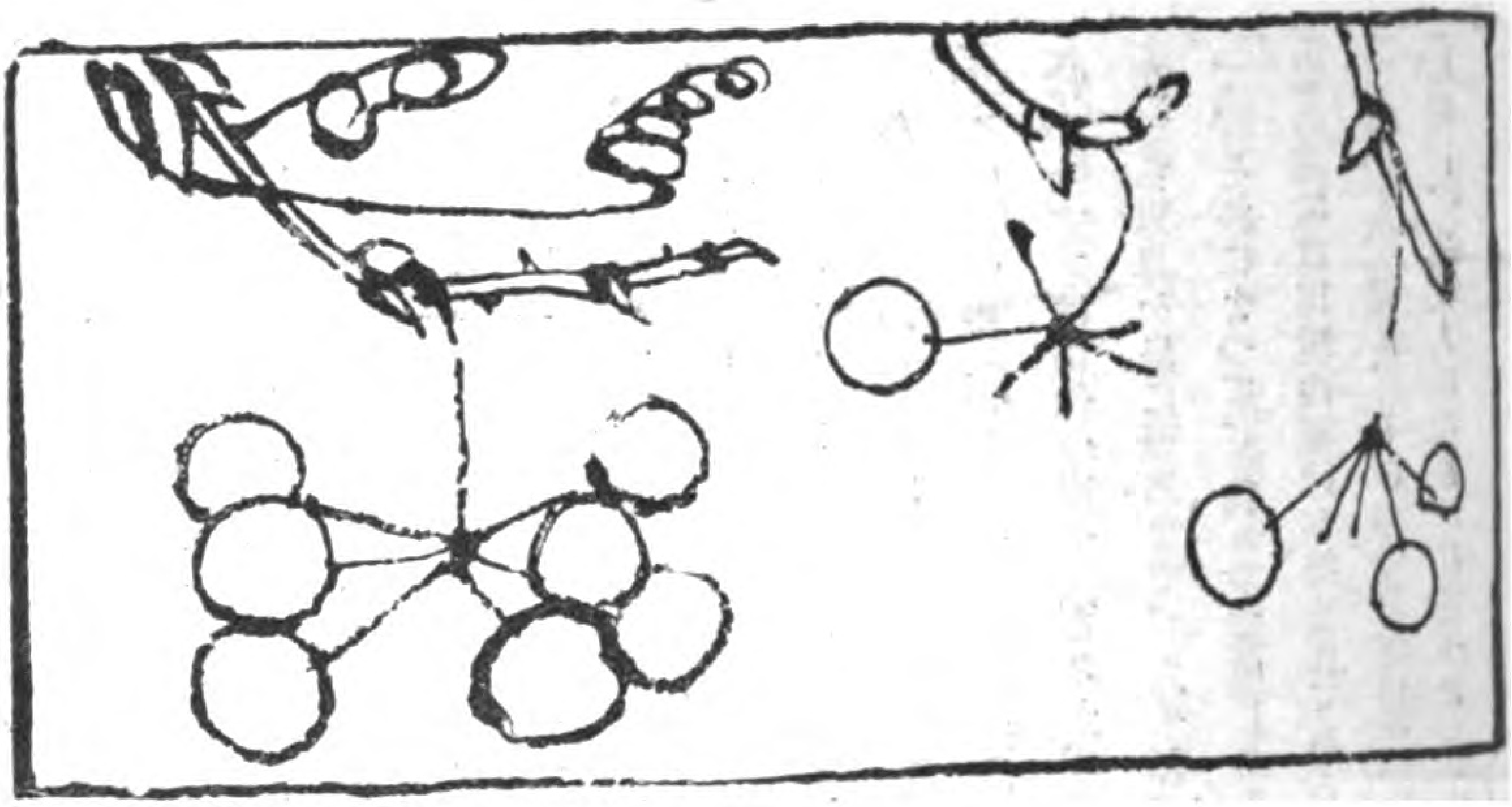
勞農露西亞十周年紀念祭に列席のため小山内氏の映畫時評が本號に間に合はなかつたことは殘念である。「途中汽車の旅が長いから車中から送る」筈で、ハルピンからも「モスクワに着くまでには必ず纏めて送りたい」意味の來信があり、本誌の躍進的企てに對し最初から非常の共鳴を寄せた氏が、旅中もかなり責任を感じてゐられたことは明かだが、遂に締切に間に合はなかつたことは、異常な期待を寄せられた讀者諸賢に對して申譯ない。

▽

併し今日の露西亞映畫にはその內容に於てその技巧に於て頗る學ぶべきものが多く、現に獨逸邊の映畫でその影響に活くるものの尠なからざるを聞くが、遺憾ながら內地では殆どその精粹に接する機會が許されてゐない。この際、「今度は主として彼方の映畫を見て來ます」と出掛けた小山內氏の御土産は、大變轉機に直面してゐる我映畫界に獻ずるところ多きを思ふ。氏は波蘭に廻つても年內には歸朝される豫定である。二月號の時評こそは大いに期待して貰ひたい。

▽

畫報の蒐集に就ては少なからぬ苦心を重ねた。併しその出來榮を見、各方面に貢獻する所多きを想ふ時、我々の苦心は償はれ更に次號以下への新な躍進に燃える。此際、御多忙中特に御後援を賜つた諸氏に深謝する。



人情の中に

正宗白鳥

（一）

空は澄んでゐた。風はなかつた。晩秋の山は靜かに聳えてゐた。しかし、私は、往路の風物を快く翫賞することが出來なかつた。私一人を乘せたボロ自動車は、屈曲凸凹の烈しい小徑を疾驅するのだから、恐ろしく動搖して、乘つてゐる私は、兩手で鐵の棒を摑んでゐてさへ、稍々もするところがりさうになつた。頭を天井へぶちつけさうになつた。車輪ににじられた霜解けの泥水が、私の肩のところまでも飛んで來た。そして、私の眩んだ目に映る秋景色は、やはりくら〱して、本來の靜寂を破られてゐた。話好きな運轉手の浮世話も、私の耳によく入らなかつた。

やうやく精進の湖畔に着いて、自動車を下りて、渡舟に乘ると、顚倒（てんたう）してゐた心も平靜に復して、周圍の光景も本來の姿を私の目に映した。私は、八年前の秋の最中（さなか）

に、近親の青年と、雨を冒して徒歩で此處まで來たことがあつたので、回顧の感に打たれながら、船頭に向つて、土地の今昔について質問をしたが、この渡舟の船頭はあの自動車の運轉手とは違つて、口を利くのも懶さうな陰鬱な顔をして、ろくな返事をしなかつた。

舟は湖面を横切つて、ホテルの崖の下に着いた。私は、落葉で埋つた小徑を上つて、ホテルの側まで行つた。入口が何處にあるのか分りにくゝ、人の姿も見當らなかつたので、私は、ひつそりしたホテルの廻りを一巡した。そして、テーブルに向つた洋服男の姿をガラス越しに見つけたので、窓の側へ寄つて、入口を訊ねると、その男は、「此方からお入んなさい」と云つて、直ぐ側の扉を開けて呉れた。その部屋は帳場であつて、その男は支配人らしかつた。

「二三日泊めて貰ひたいんですが」と、私は、テーブルの側に突立つたまゝ云つた。

「どうぞお泊り下さい。」

支配人はさう云つて、宿帳を出して記名を求めたが、私が手早く書きつけた住所姓名を見るや否や、「あなた方のところには大變印税が入りますさうですね」と、日常の挨拶のやうに事もなげに云つた。

この山の奥へ來てまで、最初に聞かされた言葉がこれだつたのは意外であつた。「この頃は儲かりまつか」といふのは、上方では慣例の辭令であるが、私などもこの頃は至るところで、この印税話を聞かせられる。一圓本の勢力は、外ケ濱から鬼界ケ島に至るまで、六十餘州に浸潤してゐる譯である。事情を知らない田舎人も、この印税といふ言葉を覺えて、それによつて、我々を羨望し尊敬してゐるらしいことが、私には、この頃をり〳〵感ぜられてゐる。近親の目にも、私の額には印税の極印が捺されてゐるやうに見えるらしい。

しかし、私は、その印税を提げて、獄殖の旅に出たのではなかつた。

私は、支配人の挨拶には答へないで、「部屋代はいくらです。」と訊ねた。

「直ぐお部屋へ御案内しませう」

支配人は私を導いて、薄ら寒い廊下を傳つて、ある部屋へ連れて行つた。紅葉の時節は過ぎてゐたので、泊り客は一人もなかつた。

私は、與へられた部屋に落着いた。富士に面した窓際に椅子を置いて、火鉢の縁へ兩足を投出して、煙草を吸ひながら、暫らく窓外を眺めてゐた。樹間に見える湖水に、ことに私は目を注いでゐた。十和田湖や中禪寺などへ遊んだ時にも、私は仰いで山を見るよりも、俯して湖心を見ることを私は好んでゐた。……さうして、無念無想でゐられるものなら、いつまでもさうしてゐたいと願つてゐた。

一休みしたあと、ボーイの知らせによつて食堂へ行つて、一人で食事をしたが、食事の間に、ボーイから、數年來遊覧客の激増したことを聞かされた。

「文化村の家見たいな宿屋が、何軒も建つてるね。」と、私が訊ねると、

「先頃、紅葉の時節には、どの宿屋も滿員でした。夏場は避暑のお客も、部屋がなくつて、日歸りで歸つてゐらつしやる方が多う御座んした」

「僕が七八年前に來た時には、昔風の宿屋が一軒あつたきりだつた。僕はたしかSといふ宿屋に泊つたのだが、あしこには、十四五の非常に可愛らしい娘があつたよ。君は知らないかね」

「知つてゐます。あしこの一人娘で、もう二十二三になつてゐます。お婿さんを取つて子供もあります」

「さうかなあ」

私は、色の白い目の涼しい小娘を記憶から呼出して見詰めた。そして、あの時私と旅行を共にした青年は、すでに二人の小供の父親になつてゐることに思及んだ。數日後には、その青年の弟の結婚式が舉げられるので、私はそれに列席する

手筈になつてゐた。

「お疲れでせうが、天氣の變らないうちに、向ひの山へお登りになつちやいかゞです。眺めが雄大ですよ。精進へゐらしつて、あの山へお登りならなきや、この土地の本當の價値は分りませんよ」と、支配人は私を唆かした。

「そのうち登りませう」途中自動車で體を揉まれた後なので、私は大儀に感じてゐた。

「しかし、この頃の天氣は當てになりませんからね。……それに、此方に暫らく御滯在なさるおつもりでも、お一人ぢや御辛抱が出來ますかどうですか」

「そんなことは……」

私は、自分が三日や五日の獨居にも堪へられない人間のやうに、相手に思はれてゐるのに對して冷笑を洩した。

しかし、窓外の山の秋は澄みきつてゐた。この日和がいつまで續くかと疑はれたので、私は急に山登りを思立つた。そして、草履とステツキを借りて出掛けた。

たかゞ二十三丁の里程なのだから、登らうと思へば何でもない譯なので、私は、一氣に絶頂を極めようとしたのだが、心臓の鼓動が烈しくつて、たび／＼落葉の上に、倒れるやうに腰をおろさなければならなかつた。私は、この頃をりに觸れては感じるやうに、自己の心身の衰頽を感じた。

今は、私の四十代も終りに近づいてゐるが、あの時は、まだ四十を越したばかりであつた。私達は、河口湖西湖の縁を傳ひ、青木ケ原を横切つて此處まで來て、翌日は、嶮しい阿難坂を上り、左右口峠を下つて、七里の道を歩んで甲府へ入つたのであつたが、私の脚力はそれに堪へられたのであつた。霖雨が霽れて、山また山の紅葉は絢爛の美を極めてゐた。關西などで歌枕になつてゐる紅葉の名所を見物するのとは違つて、私は絶えず濃い秋の色に浸つて、足を運んでゐたのであつた。左右口峠の頂上から、一眸遮るものゝない廣濶たる甲府盆地を俯瞰した時には、私達は思はず感歎の聲を放つ

た。そして、峠の草の上に円うて、精進の宿でつくつて呉れた握飯に舌鼓を打つた。あの時の握飯のうまさは、私がをりをり思出すほどのうまさなつだつたが、たゞ、鹽氣が足りなかつたのが殘念だつた。「これで、一撮みの鹽がありさへすれば、天下無類の御馳走なのだが」と、私が云つたことが、當時の秋景色の印象よりも、一層深く心に刻まれてゐる。

やうやく二十三丁を登り盡して、精進パノラマと外人によつて名付けられてゐる烏帽子ケ岳の頂上に立つと、その名の如く山嶽のパノラマを見せられるやうで、眼界は濶かつた。精進も本栖も眼下に幽邃な水を湛えて、河口西湖なども朗らかに見渡された。

意外にも、頂上には茶店があつた。

「この頃でもお客があるのかね」私は床几に腰をおろして、汗を拭ひながら、茶店の主人に訊ねた。

「今日は二十人ばかり登つて來ました」

「この土地に今朝からそんなに見物人が來るのかね。一人も目につかなかつたが」

「この茶店も、明日の日曜がすんだらおしまひにします。」

茶店の主人は、私の問ひに應じて、周圍の山々を指差して說明した。日本アルプスの連山、七面山、天目山、大菩薩峠などが、西に東に、あるひは遠くあるひは近く聳えてゐる。何方を向いても地上は山の波だ。これ等の波と波との底に、小さな人間の生活が營まれてゐるのである。

午後の日光は天の一方を焼らせて、茶店の主人の指差した駿河灣の方は、烟の中に沒してゐた。甲府からあの東海道へ通ふ路は、この湖畔についてゐたので、鐵道開通前には、沼津から甲府方面へ魚類などを輸送する駄馬や人夫が、晝夜の別なく、この街道を往來してゐたと、茶店の主人は、問はず語りをしてゐたが、私はさういふ話を聞流しながら、數百年の昔、信長や家康が、自分々々の得意の時節に、わが物顔にこの街道を通過したことを思出してゐた。

日暮れ頃にホテルに歸つて、湯に入つて寢臺に横たはつたが、胸の鼓動が靜まらなかつた。夜も眠づらかつた。

（二）

私は、このホテルに三晩泊つた。

毎日快く晴れてゐた。毎夜月は明るかつた。千年の熔岩や樹木に千年の苔の蒸してゐる樹海の一端を横切つて、本栖の湖畔まで一度散歩して、山の懐にやさしく抱かれてゐるやうな精進の小村落へも一度行つて見たゞけで、あとは、晝も夜もホテルに留まつて湖面に親しんでゐた。夫婦連れあるひは獨旅びの外人がをり／＼食堂に現はれてゐたが、私は、話相手もなしに日を過した。

靜かな朝は、水面に逆さ富士が映つた。一面に水氣が舞上つた。かすかな風が起つても、力の衰へてゐる黄葉は、夥しく湖面に向つて散りかゝつた。が、落ちた木の葉は、水に漂つてゐるでもなく、何時の間にか姿を消してゐた。

月の夜の湖面の寂しさと云つたら、骨髓に徹しるやうであつた。鞄に入れて持つて來たたゞ一冊の、小形の芭蕉全集のなかに「月はあれど留守のやうなり須磨の夏」なんて云つてゐるが、精進のこの月の夜は「留守のやうなり」と云つていいやうな風流な寂しさではなかつた。シエレーの詩にある銀色の蛇が湖面を渡る様を空想する方が私の心には相應はしかつた。

一人の背の高い外人が、紅みのある健かな頬を月に照らしながら、私の部屋の外を歩いてゐるのが、ガラス越しに見られた。しかし、それは私には無縁の人であつた。

樹間を潜つて聞えて來る眞夜中のさゞ波の音も、私の耳には、風流な歌を一つ讀ませるやうな快い刺戟としては、響いて來なかつた。

「悲しさ寂しさ云ふ方なく―」と云ひながら、当夜は此の境地に沈湎することを好んでゐたらしいが、私には、「悲しさ寂さ」が、限りなく背負つてゐる運命のやうであつた。

私は、昼でも夜でも、眠りたければ寝臺に横たはり、目が醒めると、湖水を見下した。前面に聳やんだ嶺を覗いて、顔を白く塗つた富士と、目睫の間に黙々として相対した。

山嶽や湖水を相手に、寂寞の境地に獨居してる今、心の螺旋を一つ廻はすと、幻想はいくらでも湧いて来るのであつたが、それは、衆人稠座の間にあつても、心の螺旋を一つ廻はすと、自から湧いて出る幻想と同じことであつた。「荒廃」「沈黙」の世界に職く者は、群衆雑沓の街上にも、赤い死の假面を見つけるのであつた。……自殺するにはいゝ場所だと思つたりした。

私は、三度の食事の時間を待設けてゐたが、山上の洋食は、私の味覚を喜ばせるものではなかつた。

此處を立つと、私の行先は、甲府の結婚式場と決定されてゐるのであつた。最初は珍らしかつた田舎の略式な結婚式も、今度は三度目なので、可成く缺席しようと思つてゐたのであつたが、結婚者自身が、心から私の列席を切望して來たので、それほどに云はれるのを、すつぽかすのは忍ばれない氣がした。……結婚式と云へば、私は弟妹の結婚式にも多くは出ないで濟ましたのだし、數十年の東京生活の間に、知人の結婚披露に招待を受けたことは一度もなかつた。全體さういふ華美なお目出たい場所へ身を置くのは、私にはふさはしくないのであつた。

兎に角、甲府へ向つて歸途に就くには、來た時のやうに自動車を飛ばすのは、風趣甑（？）く物足りない思ひがされたので、舟津まで五里の間を徒歩で歸ることにした。

（三）

他人の家に寢泊りすることのなかつた私も、妻の實家の甲府の家には、これまでにたび〳〵來てゐたが、いつも居心地がよかつた。東京生活に飽いた時に此方へ來て、この家を足場にして、氣まゝに近邊を旅行するのを樂みにしてゐた。海濱で育つた私には、甲信の山地の四季の風物は珍らしかつた。最初そこの長男の結婚式に招かれた時には、私の方では安定した家のなかつた時分だつたので、式日の三週間も前から出掛けた。

私は父の長男として生れながら、父の家に落着いてゐられず、自分の心にかなつた住所を何處かに見つけようといふ氣にもなれず、何時も、ある一時期を假りの宿屋で暮してゐるやうな氣持になつてゐた。それで、甲府のその家などの用意周到な堅實な家庭の經營振りに感心することもあつた。日本在來の家庭の標本を見てゐるやうに私はそれを見てゐた。家長の意志で統一されて、家族は狹いところに皆んなで羽がひを集めて温め合つてゐるのであつた。それで、私達が、伊香保や輕井澤や大磯や東京の宿屋などを轉々して不定の生活をしてゐるのを見て、心元なく感じたらしい其家の主人は、「此方にお住ひになる氣なら、一軒小奇麗な家を空けさせてお貸ししませう」と云つて、長男を顧みて、「××の家ならいいぢやないか」と言葉を掛けた。

「さうです」と、長男も素直に同意した。

それは、私も知つてゐる、市中に在る二階建ての家であつた。好意は有難い譯であつたが、私は、甲州の山中にさう長く滯在する氣にはなれる筈がなかつたので、空返事をしてゐた。

緣者に對してさういふ好意を寄せてゐた主人は、自分の子女については、尙更細心な注意を拂つてゐたらしかつた。長男には、普通の教育を受けさせたあとで、稼業を相續させて、自分は樂隱居をする。次男は兄を助けて仕事をする。子供達の嫁も夫と心を合せて、兩親を尊んで孝行を盡すと、一家の將來は型の如くに豫定されてあつた。子供の方でも、私達兄弟のやうに、親の意志を無視してまで自分々々の好みに從つて、職業を撰ばうとはしないで、父祖の稼業を嗣ぐのに不

平のないばかりでなく、むしろそれを喜んでゐるらしかつた。

「君の家は學資に困る家ぢやないから、商人になるにしても、東京の學校で修業して、遠大な計劃をたてゝやつたらどうだらう。……それに、東京の學生々活は面白いよ。僕等は充分な學資を貰つてた譯ぢやなかつたが、それでも若い時分の下宿生活は、今から考へても懐かしいよ。若い時分に親の監督ばかり受けてると、人間の持つて生れた天分がいじけやしないか知ら」

私は、其家の次男に向つて、煽動的に云つたことがあつたが、

「わたしの知つた人に、東京の高等商業なんか卒業して會社へ出てる人もありますが、ろくな月給を取つてやしませんよ」

と、彼れは答へて、決して心を動かさなかつた。

私は、少年の頃、東京の學校へ行きたくつて／＼、親が許さなければ、無斷で飛出さうかと思つたくらゐだつたのに、今の時世に、修業が出來る境涯にゐながらそれを望まないのは不思議なやうにも思はれた。

私が列席したこの家の最初の結婚式は、なか／＼賑かであつた。私達兄弟の結婚が質素簡單を極めてゐたのに比べて、私は、德川時代からの慣例に倣つた資産家の結婚の儀式が、いかに煩はしく、且つ外形の華やかさを衒つてゐるかの實例をはじめて見せられた。この地方だけの習慣でゝもあらうが、角樽が頻りに持込まれたり持出されたりしてゐた。羽織袴の男が扇子を持つて頻りに出入りをした。さういふ取込みの中に、私のやうな役に立たない人間が寄寓して、お大名を極め込んでゐては、邪魔になるだらうと氣になりだした。それで、東京へ一週間ばかり空家搜しに出掛けたが、家については興味を有つてゐない私は、熱心に搜す氣はなかつたので、目的は果さないで、結婚式の前にぶらりと甲府の家へ歸つて行つた。花嫁の荷物は、時代でくすぶつた舊い家に目ざましく華やかに並んでゐた。一點の批の打ちどころのないやうな仕度

だと、見る人が皆感歎してゐた。さう感歎されたいために、娘を行つた世間の親は苦勞するのだらうと、私は推察した。

結婚式が目出たく終つて、相續者の匹偶が極つて、この青木家の基礎が堅くなつたので、式日の翌日は、皆んなが重荷を卸した氣輕さを喜んでゐた。初春の清新な光が、日あたりの悪い家の中にも漂つてゐるやうであつた。

私達夫妻は、當時一定した住所を有つてゐなかつたが、さう長く此處に滯在する譯には行かなかつたので、式後一日を隔てゝ、兎に角東京へ向つて出立することにした。

彼岸明けの日であつたが、朝から雪がちらついて、山國らしい底冷えがして、炬燵の離れづらい日であつた。さういふ日に、賑かな華やかな團欒から別れて、落着く當てのない旅に出るのは、私の妻に取つては必淋しい思ひがされるのであつたが、私は、いつものやうに、出立と極まると、頻りに心が急がれた。それに、老主人は、今までとちがつて、お世辭にも引留めようとはしなかつた。それは、他人に長く居られては、新來の花嫁が氣詰りであらうと、案ぜられたゝめらしかつた。

その晩東京に着いた私達は、駿河臺の高等旅館に宿を取つたのであつたが、そんな宿料の高い所に長く落着いてはゐられなかつたので、ある知人の紹介で赤坂の安値な宿屋に移つて、そこの、靜かなだけを取得の、粗末な部居を借りて、花時から青葉の頃まで二月あまりを過した。その間に、青木家からは、結婚後のもつれについて、老主人や長男から、私の妻に宛てゝ、頻繁に手紙を寄越しだした。[老主人自身に訪ねて來て屈託した溜息を吐いたこともあつた。

その頃、文學者の生活も稍々豐かになりかけたらしく、ある書店は、私の撰集を續刊しようと申込んで來たし、賣行の悪いに極つてゐた私の短篇集の出版をも望んで來たところがあつたりしたが、汚らしい宿屋の一室では、私は落着いて筆を執り書物を讀んではゐられなかつた。それで、妻に連れられて、毎日のやうに市中や郊外の借家捜しに出掛けたが、つひに思はしい家が見つからなかつたので、弱つてゐた揚句に、偶然のことから、大磯のある家を買入れることになつた。

買入れの手續きを濟ませて、そこへ移つた時は梅雨時であつた。その年はことに梅雨が激しかつた。東京に住んでゐた頃の、あちらこちらの借家に比べると、はじめて家らしい家に住むやうな感じがされたが、知友緣者のない土地に、一人きりで暮すと事が極ると、淋しくないことはなかつた。移つて來た最初の日には、途中で買つた汽車辨當を、晩餐として食べながら、樹木の掩ひかぶさつた庭に降り灑ぐ雨を鬱陶しい思ひをして見てゐたのであつた。

一年あまり甲府の家に預けてあつた荷物が届いて、一通り家の中の整理がつくと、私は、仕方がない、讀書でもして殘生を過さうかと思ひついた。少年時代には何よりも好きだつた書籍にも、世の中へ出てからは次第に遠ざかるやうになつてゐたのだが、老境に入つた私は讀書でもしなければ、外に身に相應しい銷閑の方法はなかつた。それで、私は、年少の頃讀噛つた書物を新たに讀直さうと企てた。

借家住ひとは異つて、自分の所有家屋に住むとなると、轉居が自由にならなかつた。甲府などへも出掛けることがなくなつた。その代りに、甲府の方では、大磯といふ風光明媚な療養地に私達が住むのを幸ひに、孱弱な子女を、をり〳〵保養に來させた。老主人の性質として、その子女を、一人で旅へ出すのは危かしがるのであつたが、親類の家たら、安心してゐられると思つてゐたのであつた。淋しい私の家では、妻の話相手や手助けになるので、甲府からの轉地療養者を歡迎した。そのをり〳〵に、山國の出來事や家庭の內情が私達の耳によく入つて、何處にでもある浮世の樣が察せられるのであつたが、どうかすると、話す方でふと口を噤んで警戒の色を現はすことがあつた。

「小說に書かれちや困るから」と云つて、罪人が刑事巡査の前に立つたやうな恐れを感じるのであつた。

日本の現代の小說家と、新聞記者とは敬して遠ざくべきもので、油斷して親しくすると、自分のアラを明るみに持出されていやな思ひをしなければならないのである。商賣一方の甲州氣質で、小說と云へば、岩見武勇傳とか、水戸西山公の廻國話見たいなものと、漠然思つてゐた昔本系と、その周圍の人々に、知つたつて一文の足しにもならない今時の小說に

ついての概念を與へたのは、私の作品であつた。

しかし、さういふ小説家と不思議な御縁で緣を組んだのだから爲方がなかつた。すべてが後の祭りであつた。……それで、一たん緣が結ばれた上は、親類緣者が團結する山國に有勝ちな古い風習に基くのか、商賣違ひの私の仕事についてもいやに注意を拂つてゐるらしかつた。商家に不似合な讀賣新聞が購讀されだした。ことに、老主人は私に肩を入れてゐた。私の仕事が大した金にならないことを知つて、金にならないことに骨を折る量見は嫌はれながらも、兎に角新聞面の名聲だけでも、盛になるのは、男としての出世であると喜んでゐた。自慢の種にしてゐたらしかつた。

この老主人の外に、本當に私を贔屓にしてゐる男が、青木家の近親に一人あつた。大村といふ家の一人息子であつて、市の中學では首席を占めてゐたのださうだが、卒業後には、東京の學校へ一年ほど通つたきり、退學して、その後は家の中に籠居して本をばかり讀んでゐるといふ噂を、私は屢々耳にしてゐた。父祖の資産を守つて、世を避けて暮らしてゐる珍らしい家であつたが、一人息子の吉太郎は、友人と交るでもなく、年中外出することも稀れで、たゞ自分の書齋に閉籠つて、明けても暮れても本ばかり讀んでゐると云はれてゐた。そして、書齋は掃除も自分でして、他人に足を踏込ませないと云はれてゐた。

「あれでは身體のためにも惡からう。何かしたらよからず」と、近親者は氣遣つてゐた。

「どんな本を讀んでるのか」

近親の誰れも、その青年がどんな書物を讀んでゐるのか知らなかつた。

私は甲府へ行くたびに、大村家へ招かれて饗應されるのが慣例になつてゐたが、その青年は、滅多に姿を見せなかつた。たまに顏を出して挨拶しても、話の仲間には入らなかつた。

ところが、私はその青年の結婚式に招かれて行つた。

私に、最初は珍らしかつた甲府近邊の風物をも、たび/\のことで、すでに見飽いてゐたし、青木家の相續者に妻子がお出來た上は、家庭の情況も變つてゐるらしく思はれたので、今後は成べくそちらへ近づかないやうにと心掛けてゐたのであつたが、吉太郎の結婚式には、當人が是非私に列席して呉れと、青木家を介して頼んで來た。「小説にどう書かれてもいゝから來て貰ひたい」と云つてゐるさうであつた。

それで、私達夫妻は、式日の前日に甲府に着くやうに、大磯の家を立つた。時節は、この前の青木家の結婚と同樣に、春の彼岸時分であつた。梅花で色取られた初春の山家の眺めが私を樂ませた。宿は青木家に泊つたのだが、その家には、相續者にすでに子供が生れてゐた。子供のない私の妻は、身内の子供にでも愛着して、それを抱して喜んでゐた。

式はこの前と同じ料理屋で擧行された。列席者は多くは商人で、私だけが職業が懸離れてゐるので、水に油を點じたやうな不調和が感ぜられた。皆んな挨拶が上手でお世辭が上手であつた。私は、かういふ種類の人々の集まる宴會の席にはかつて出たことがなかつたので、はじめのうちは珍らしくつて、人々の話にも耳を留めてゐたが次第に倦怠を覺えだした。座に侍んべつた藝者は、この前と同樣に、「さて婚禮の吉日は……」と、古出し三番か何かの一くさりを、お祝儀に唄つてから、例によつて、小枝達に鶴龜を舞はせた。

その翌日、私は、妻を實家に留めて、自分だけ、中央線で名古屋へ出て、故郷へ歸ることにしたが、出立際に、大村家では、妻に何か包んだものを呉れたやうだつた。旅費を使つて遠路を來て呉れたことに對する謝意を籠めた贈り物であるらしかつた。

(四)

精進を出て甲府に着いたのは、日暮れ頃であつた。停車場を出て、町の明りと賑はひを見ると、大都會へ來たやうな感

じがした。この町でも、見窄らしい乘合自動車が雜沓するやうになつたし、古城趾の外壕が埋められて住宅地にならうとしてゐるし、以前の風致は崩されて、新代の無雜な都會を出現しようと焦せつてゐる。

私が最初この小都會に來たのは十數年前であつたが、あの時は、市中がもつと薄暗くつてひつそりしてゐて、町々の商店も今風の安つぽい裝飾が施されてゐなくつて、舊幕時代の面影がまだ殘つてゐた。靑木家の家の中も、昔の商家らしく、採光や通風の用意が不行屆きで、陰欝であつたが、今度行つて見ると、若い人達の居室は、窓を切下げて、ガラス戸を嵌めて、光線が室內をあまねく照らすやうになつてゐた。そして、私達の居室に當てられた離れの二階は、土藏を改築したもので、外の室とは違つて小奇麗で靜かで、居心地はよかつたが、いやなのは、そこの欄間に、私のなぐり書きした色紙短册が、有合せの額緣に入れられて、揭げられてゐることであつた。歌にも何にもならない文字が、醜い形をしてそこに並んでゐるに過ぎないので、あんなものは破つて棄てたならどんなに胸がせい〳〵するだらうと思はれた。しかし、他人の所有權を犯して、無斷で引つぺがす譯には行かなくつて、何だつてあんなものを書いたのかと後悔するばかりであつた。

さう云へば、私が貧しい知慧を絞つて、覺束ない筆で綴り上げた小說のたぐゐが、一囘本の仲間入りをして、廣く世に流布されて、私のものなどは、讀みたくも思つてゐない人に、押しつけがましく讀ませるのも、いゝ趣味ではなかつた。本屋は三版でも四版でも重ねるつもりらしいが、私の書いたものも皆んなのなかにまじつて、私の死後にも、浮世に流轉しなければならないのか。

この家でゝも、雜談の間に、「印稅」の話が出た。

「それはいつか、印稅といふものも入つて來るでせう。本屋が潰れるか、買ひ手が中途で破約しないかぎりは」

「兎に角、五年か十年かの間にも、印稅といふものが入るといふ譯なんですね」

聴き手は真面目にさう云つた。世間の風評の噂でもあつたことを、さうしてゐた老主人は、それによつて、私達の生活が安定するであらうと思つて喜んでゐるらしかつた。

「書物は、本屋が賣藥や化粧品見たいに、大袈裟に宣傳して呉れるから賣れるんですが、僕の書は駄目ですよ。色紙や短冊は金になりやしません」

「しかし、書物だつて商品と見てもいゝんぢやないですか」と、若主人は云つた。

「さう云へばさうです」

文學の書物が、藝術品と呼ばれる偉げなものであらうとも、有りふれた商品であらうとも、兎に角、我々は、改造社や春陽堂や新潮社などの商賣上手な書店の努力によつて、世俗的聲價を高められたのである。「印税」獲得者の仲間に入つてゐるといふことのために、近親や一般の知人が私を見る目が違つて來たやうに思れてならない。

私は、その夜、自分の著作の題を留めた額の下で眠つた。私の父が中風症に罹る前に依頼に應じて書いたといはれる修身的文字の額も、私のと相對して掛つてゐた。此處は、明日からは、新郎新婦の居室に當てられるのであつて床の間には、諸方からの新婚の祝ひ物が堆かく積まれてあつた。花嫁の荷物もそこらに置かれてあつた。しかし、私は、かういふ祝ひ物や花嫁の持物を見ても、青年男女の新婚の喜びを、しみ〴〵と想像することが出來ないやうになつてゐた。そして、老人の淋しさばかりが、しみ〴〵と自分の心に觸れるやうになつてゐた。私は、それを先輩知人の上に見るやうになつた。郷里の父についてさう感じるやうになつた。此處の老主人についても、言語動作の上にさう感じるやうになつてゐた。そして、私自身の將來をそこに見るやうで、思詰めると、身の毛の彌立つ思ひがされた。氣力の旺んな若い時分には思ひもつかなかつた老人の淋しさに、どうかすると同感されるのは、自分の心に老ひの影の差してゐるためであつた。

「この頃は身内の結婚や出産を祝つてばかりゐなきやならない。自分にや子供がないから、自分の葬式に來て貰ふばかり

なんだ」と、私は妻に向つてよく云つてゐたが
「人のお祝ひをするばかりぢや詰らない」と、妻も同感してゐた。
「お父さんは頭は古くつてもよく考へてますよ。自分が總大將でまはりに皆んなを置いて、賑やかに暮さうとしてゐるんですね」と、妻は私達の生活の淋しさに比べて、さう云つてゐた。しかし、一つ家の中に老若男女が大勢額を突合せて暮すのは、今時の時世ではいゝ結果をあらはす筈がなかつた。
「おれは、此方の結婚式に來る暇があつたら、故郷の親爺の見舞に行つて來りやよかつたのだ。おれが式に顏を出したつて、出さなくつたつて本當はどうでもいゝんだから」と、妻に向つて云ふと、
「今度は、私一人で、式の當日にやつて來て、式が濟んだら、夜行でゝも直ぐ歸つたらよかつたんですよ」と、妻も云つてゐた。

私は、屢々歸省を志してゐながら、いつも斷行しかねた。今夜東京を立つと翌日の夕方までには父の家に歸れるのだから、雜作のないことであつたが、從來、世間の親のやうに子供に拘らはなかつた父も、一度病氣で倒れたあとは、人の異つたやうに氣が弱くなつてゐて、それを見るのが、私には心苦しかつた。去年の秋見舞に行つた時にも、私は父の目に浮ぶ淚を生れてはじめて見て驚いたのであつた。私が鄕里を立つ時に別れを惜むやうな氣色が見えるのを私は痛ましく感じた。

以前は、學生時代の暑中休暇にでも、その後をり／＼の歸省にでも、家を出る場合に、父に暇を告げると「もう行くのか」と云つて、上り框まで出て來て、微笑するのを例としてゐた父が、去年の秋には、私の氣づかない間に、不自由な足を運んで、海岸の道まで出て、俥に乘つて行く私を、電信柱の蔭からそつと見送つてゐた。私は、ふと振返つてそれに氣づくと、愕然とした。そして、その瞬間の父の影は、私の胸に深く刻まれて、をりに觸れては思出されるのであつた。夜

半に夢の醒めた時に暗中にこの影を見るばかりでなく、華やかな宴樂に在る時にも、机に向つて熱心に筆を執つてゐる時にも、ふとその影に襲はれて心を暗くするのであつた。……それは、子として親を思ふ自然の人情が、私の心にも潜在してゐるためであらうが、それとともに、私は、あの瞬間の父の影に、自分の將來の影を見るのであつた。……さうして、私は、歸省を志しながら、いつも足がすくむのを覺えるのであつた。

(五)

翌日も空は晴れて、いゝ結婚日和であつた。女達が皆んな髮を結つたり化粧をしたり新調の式服を着たりして、賑やかな笑ひ聲が家の中を明るくしてゐた。小さな小供は、珍らしいものを見てゐるやうに笑ひ興じてゐた。

式場は、最初の時も、二度目の時も、三度目である今度も、同じ料理屋であつた。式の方法も同じかつた。廣間の床の間の掛軸には、伊弉諾の尊、伊弉冊の尊と記されてあつて、その前には、神酒が供へられてあつた。前回と同じ二人の女中が、摺り足しで、花婿花嫁をはじめ、兩側に居並んでゐる列席者に、素燒の杯を運んで、酒を注いだ。一時間有餘の間、滿座寂として聲なし。これも小笠原流か何かの禮法に基いてゐるので、日本特有の結婚の儀式として、神聖と簡素を表はしてゐるのが面白いのであるが、私は、すでに三度同じものを見せられるので、倦怠を覺えた。痺れを切らしながら、つとめて威儀を正して、進行する儀式に目を注いでゐたが、先日精進の湖畔で、周圍に默々とした山々の聳えてゐる寂寥の境地を見詰めてゐた時にも勝つた寂しさが感ぜられた。式が終つて酒宴の席に移ると、この前の結婚式に二度とも出てゐたので、顏を覺えてゐる老妓が、若い藝者をひきいて現はれた。何年か間を置いて見るので、見るたびに彼女の顏面が老朽ちて行くのに氣がついた。額にも頬にも最早隱し切れない皺がきざまれてゐた。かういふ老女が、酒興を助けるために、強いて色つぽい口を利くのは、氣味の惡いものであつた。

「いくら藝がうまくても、あゝいふお婆さんのお酌では、酒がうまく飲めない」と、私の側にゐた老人がさゝやいてゐた。

その老妓は、例の如く、「さて婚禮の吉日は……」を唄つた。あとで、例の如く小妓どもに鶴龜を踊らせた。

「去年が丙寅で遠慮したせいか、今年は大變結婚が多いやうだ。往診の途中でよく花嫁さんに出くはします」と、これも何年目かにお目に掛るお醫者さんが云つてゐたが、さうして見ると、この老妓は、この頃は毎晩のやうに、結婚披露の席上へお取成しに出てゐるであらう。毎晩鶴龜を彈いたり、「さて婚禮の吉日は……」を唄つたりしてゐるのであらうが、彼女の目に映じる毎晩の新郎新婦の影は、今私の目に映つるそれと似てゐるのではあるまいか。

「かういふ結婚式を二度も三度も續けてやれるのは、こんなお目出たいことはないのです。私のやうに、一人しか子供のないものは、いつそ一人もない方がいゝと思はれます」

男の子一人つきりの大村家の老主人は、醉ひの廻はるにつれて、不斷になく昂奮して云つた。さういふ老いた心を有つてゐればこそ、一人息子を手離して他鄕へ出すのは忍ばれなかつたのであらうと、私にも察せられたが、しかし、大勢の子供をそれ〴〵に結婚さすことの樂しみは、私には、想像し得られることであつた。

「人間は古稀までは生きてゐなければ」と、その老人は云つてゐた。

この式上の列席者は、多くは老人であつて、おとなしく飮んで食つて、隣同士で浮世話を取りかはしてゐるだけであつたが、向うの廣間で賑やかな騷ぎがはじまつてゐるのが、ガラス越しに見られた。私は退屈醒ましに、廊下へ出てそちらを見てゐたが、洋服を着たオールバックの若い男や、和服の袴を引摺つた老人が、小妓と手を執り合つて、木曾の御嶽さんを踊つてゐた。

「何の會だね」と、通りがゝりの女中に訊くと、

「區會議員の方です。何事でもよく知つてゐらつしやいます」

酒の飲めない私は、日本流の宴會では、いつも胃腸の苦しみと所在なさとで悩まされるので、さういふ會に出席しなければ役目の勤まらない田舎の知事とか會社の重役とかの地位を結構な御身分だとは思はれなかつた。

例の堆い折詰を持たせられて席上を退いた時は、夜は可成り更けてゐて、市街は人の往來が鎭まつて、早くも冬の近づきを思はせるやうな底冷たい空氣が、人々の醉顔に觸れた。

青木家の部屋はみんな塞つてゐるので、私達は自動車で大村家へ連れて行かれた。數年前に結婚した其處の相續者の吉太郎も、すでに子供の父となつてゐて、以前は淋しかつた家の中にも、何となく温かみが漂つてゐるようであつた。

私達の寢床は、廣い新座敷に設けられてあつた。吉太郎の書齋は廻廊を隔てたひつそりしたところにあつた。彼れは、夜、子供が寢てから、獨りで遲くまでその書齋に閉籠つて書物に親しむのを例としてゐると云はれてゐた。私は、宴會で飽食したゝめに胃が重苦しくつて眠りづらかつた。それに、廻廊の電燈があか／＼と部屋の中に差込むので、神經が休まらなかつた。三時頃には目が醒めきつて、寢床で煙草ばかり吸つてゐるのが苦しくなつた。かういふ時に、何か興味のある書物を有つてゐたらよかつたのだが、私達は式服を着けて來たゞけで、持物はみんな青木家に預けてゐるのであつた。向うの書齋には、何か面白い書物があるのであらうが、無斷でそこへ取りに行く譯には行かなかつた。

仰向きに寢たまゝ、天井や、床の間の掛物を見てゐたが、壁上に揭げられた依田學海翁揮毫の「皆山也樓」といふ額に、私は暫く目を留めた。歐陽永叔の醉翁亭記の書出しの「滁を環つて皆山也」といふ文句から思ひついたのであらうと、私は、少年の頃に學んだ「謝選拾遺」を久振りで思出したが、それにつれて、二十餘年前に、ある家で學海翁に會つていろ／＼な氣焔を聽かされたことを思出した。

「此間私の家へ、漢學興隆會の發起人がやつて來て、漢學の衰微を歎いて、私にも會の發起人に加入しろと勸めたから、

私はかう云つてやりさした。世間の奴が漢籍を嫌つて讀まんのなら、勝手にするがいゝ。こんな面白いものを讀みたくないといふ人間に、强いて讀ませるには及ばない。おれ一人で讀む。誰れも讀まない面白い書物を自分一人で讀むくらゐ樂みなことはない。漢學の隆興會なんかを起すのは餘計なことだ」

翁の氣焔のうちでも、この痛快な言葉は、最もつよく私の記憶に留まつてゐる。漢學ばかりではない。何だつて同じことだ。

私は我慢して寢床にゐて、あたりの明るくなるのを待つて起上つたが、次の室には、すでに火鉢に火が盛られてあつた。廻廊の一端の浴室で顏を洗つてゐると、吉太郎の養母である主婦は、私達の側へ近づいて來て、微笑しながら、

「吉ちやんの書齋へ入つて御覽なさい。かまひませんよ」と、私がそれを見たがつてゐるのを察したやうに云つた。

「いやに思やしないかしら」

秘密部屋へ踏込むやうな遠慮を感じながら、私達は主婦に導かれて、茶室見たいな部屋へ入つて行つた。書庫は別なところにあつて、この机上には、僅少な洋書が置かれてあるだけであつた。手に取つて見ると、一つはラムの隨筆集であつた。一つはアナトールフランス論であつた。他は玉子色の佛蘭西の文學書であつた。

「えらい本を讀んでゐるんですね」私は意外に感じた。

そこから廻廊へ出ると、吉太郎に行會つたが、彼れは、立留つて、痩せた白い顏に微笑を洩らしながら、長身を心持屈めて、

「御覽になつたんですか」と、含羞（はにか）んだやうな口調で云つた。

「えゝ。君はなか〳〵面白いものを讀んでますね。佛蘭西ものも讀めるんですか。獨學ですか」

「はあ」

私は、彼れの愛讀書について尋ねたが、彼れは、六ケしい「サランボー」などでもよく讀みこなしてゐるやうだつた。エゴンクールの日記も知つてゐた。私が名も知らない佛蘭西作家のものをも讀んでゐるやうだつた。何年もかういふ所に籠つて、暇に任せてねちねち讀んでゐるのだから、讀方が叮嚀であるやうだつた。

「君は何か目的があつてさういふ書物を研究してゐるんですか」

「いゝえ」

「手當り次第に讀んでるんですか。系統を立てゝ讀んでるんですか」

「系統を立てて讀んでる譯ぢやありませんが、讀むものには自然に連絡をつけて居ります」と云つて彼れは、「私も何か商賣でもしてゐたらよかつたのでせうけれど。」と小聲で云つた。

二人は薄ら寒い廊下に立つて、和洋古今の文學の話を、ぽつりぽつりしてゐたが、間もなく別れて、私は部屋へ入つて行つた。昨夜の饗宴で胃の腑の疲れてゐた私は、大村家で豫じめ用意してゐた朝餐をも辭退して暇を告げた。

十年も前から、「若い盛りに家にばかりゐて、本ばかり買つてゐる」といふ噂を、私は、屢々耳にしてゐて、顏も甲府へ行くたびには見てゐたのであつたが、この青年の眞相の一端は、今度はじめて見たやうな氣がした。そして、私自身の少年時代の影をそこに見たやうであつた。「家の中に籠つて本ばかり讀んでる」と、周圍のものから不思議さうに云はれた時代が、私にも二三年はあつた。私に功名心がなくつて、家庭の事情がこの大村家のやうであつたなら、私も、何時までも田舍の家にすつこんだまゝ、世間を離れて、本ばかり讀んでゐたかも知れなかつた。しかし、私は、吉太郎のやうに父親の一人子ではなかつた。

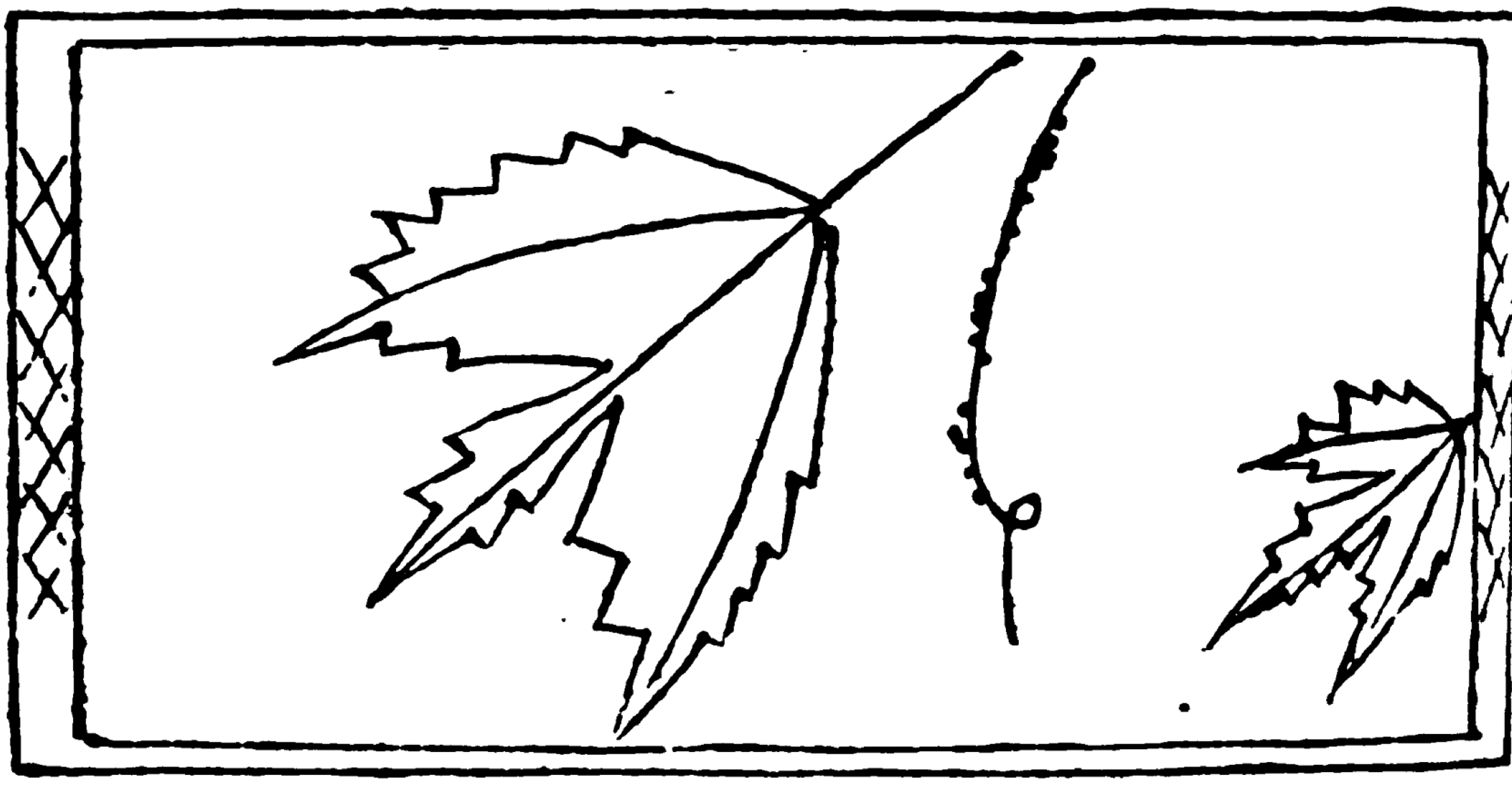
「あの時は密室で本を讀む面白さは、密室で色女に會つてゐるのと多分似寄つてゐるだらうと思はれるほどの面白さであつた」

（六）

細雨の中を俥で青木家へ歸つた私達は、大いそぎで荷作りをして、慌たゞしく暇を告げて、辛うじて間に合つた汽車に乘つて、東京へ向つた。

東京に着いたつて、私達を待つてゐる知人もないし、用事もないのであつたが、それでも、山を下り平野を横切つて、汽車が東京へ入ると、世界も心も廣くなるやうな感じがした。

「あなたでも、肩身の狹い思ひをすることがありますか」と、青木家の若主人が皮肉らしく云つてゐたが、私だつて、他人のなかにまじつてゐると、肩身の狹い思ひをしたり、氣兼ねをしたりして、大切な神經を浪費していけない。



牧歌

Cogito ergo sum.

犬養健

一

その水泳寄宿舍の天幕は汀から一町ほどの松林のなかに二十ばかり塊つてゐた。天幕がいゝとその眞白い布は一列にまぶしく反射した。遠くから見れば簡素なさつぱりした生活のやうだが實際は風通しがわるくて蒸暑い。しかし泳ぐ事と食ふ事と騒ぐ事と眠る事と、それだけでもう費ひ果される時間は一ぱいで、生徒達は不滿足を感じる餘地がなかつた。

生徒達は日に燒けて——彼も勿論その一人だが——顔から背中まで既に一度皮がむけ、二度目に燒けた部分は一種變な艶のある焦臭いやうな色に變つてゐた。この焦臭い皮膚に赤褌といふいでたちだつた。或る卒業生のひとりが訪ねて來て彼

眞機を取り出すほどに面白がつた。

「やあゴオガンの土人が一杯ゐるね」

レンズに向ひながら彼等は大聲で笑つた。運動と大食とでまつたく土人のやうに笑つた。新らしい文藝雜誌で、しかも彼等の學校の卒業生の立て籠つてゐる「S」誌がその當時盛んに後期印象派の畫家を紹介してゐたので、ポオル・ゴオガンの描いたタヒティ島の土人の皮膚と腰卷がどんな色をしてゐるか、知つてゐるものも少くなかつたのだ。

二

毎日凪ぎ過ぎるほどの天氣が續いた。松林の奧手に瓦葺の母屋があつて、年下の生徒と監督の敎師達が寢起きしてゐた。この母屋にゐる英語擔任の安井氏が、村の通りや濱邊で彼に出會ふたびに

「大分元氣になつたやうですね」

とか

「心配事はもうないのですか」

とか聲をかけた。

彼は曖昧な返事をした。安井氏の尋ねてくれる「心配事」は彼にはまだ始末がついてゐなかつたが、しかし海では默がる友達を無理に沈めて見たり、天幕のなかでは母屋にも十分聞えるほどの銅鑼聲で唱歌をうたつたりしてゐる手前、このやうに眞面目にしみじみ尋ねられると、彼は稍々工合のわるいかたちだつた。

「えゝ。こゝにゐる間は暢氣にしてゐようと思うんです。その方がつい面白いものだから――」

「それあいゝでせう。その方がいゝ。試驗の頃は君は疲れてゐたからな」

七月の學期末考の頃に彼が疲れてゐたといふのは、あながち律義なノオトの持主であるためばかりではなかつた。殊にその年の春から將來の職業に就いて母親や親戚と云ひ爭つてゐた。彼は大體に學藝に關した方へ行きたいと云ふし、親戚の者はまた何か實着な世間並みの職につけようとしてゐた。殊に義母との云ひ爭ひは、それが義理の關係といふ事から餘分の感情の勞はしさまでが附き纒つて來た。

「君のやりたいといふ、さういふ仕事をして、結局何が望みなのかね」

銀行の課長をしてゐる親戚の一人から兩親の前で尋ねられた時に、彼は傲慢に答へた。

「まあ賢い人間になりたいのですね」

「賢人かね。賢人なぞは滅多に出ないよ」

「僕相當に賢くなればいゝんです」

「ほかの仕事ぢや賢くなれないのか」

「自分がなぜ生きてゐるかといふ事なぞ——」

中途で彼は氣が差して赧くなつた。

「いや、これは重大事になつた」と親戚の男が笑顔を拵らへて彼の母を振り返つた。「これは六つかしい問題ですな」

「わたしはもうどうでもいいのです」

しかし彼の母の返事には妙な遠慮が籠つてゐた。その意味ありげな遠慮が却つて彼を苦しませた。

「わたしはまあかういふ實業の仕事をしてゐて、これでもぽつちりづつ賢くならうとしてゐるのだがね」と親戚の男がまた云つた。「しかし君の餘り頭からして生命とか死とか——いや、これはもう私の範圍ぢやない」

「あなたの範圍ぢやない事は始めつから分つてゐるのです」

母の遠慮のために焦立つてゐる氣持の吐け口を、彼は自然とその罪のない銀行家に向けてしまつてゐた。彼の父は別に息子のかういふ傾向に不賛成なのではなかつたが、その彈ね返すやうな、思ひ上つた語調には苦苦しい貌を見せてゐた。しかし彼にしても父親と同じ事だつた。彼もまた自分の荒荒しい返事で周圍の者、殊に母親を苦しめるのを後悔してゐた。云ひ爭ひに疲れて、自分の神經のいかにも落ち着きなくみじめに尖つてゐるのを十分認めてゐた。——彼はこの勞はしさから一時なりともすつかり脱れたかつた。そして自分の神經の棘棘しさを鍛練したかつた。

この騒ぎのうちに彼は七月の白い服に着替へた。

彼の學校は郊外の高台にあつて、夏の夕燒は殊更に大きく直接に圖書館の竝んだ窓の一つ一つに映つた。窓の多い、いかにも明るい健康な圖書館であつた。彼は其處で俄かごしらへのノオトを整理しながら、これも書庫から佛教に關した藏書を引き出して讀んでゐる安井氏に、話のきつかけから家の事情を聞かせたことがあつた。——といふ譯は安井氏も英語を衣食のために教へてゐるので、本來は佛教の研究を續けてをり、禪居士で一種の自由思想家（フリーシンカア）であつて、かういふ話の聽き手としては學校のなかで一番の適任者だつたのである。

九十度の暑さが續いて、圖書館では試驗勉强の誰しも、何かの觀覽席でのやうに團扇をせはしく動かしてゐた。

彼は安井氏がその年の夏期寄宿舍の監督當番にあたつてゐるとは少しも豫期しなかつた。釋宗演のごく内輪の弟子で休暇毎に圓覺寺の小さい庵を借りる安井氏と、殺風景な騒がしい水泳生活とはどうしても聯想されなかつた。だから乘合馬車の通ふ魚臭い村の入口で先着の安井氏と最初に顔を合せた時に、彼の驚いたのは無理もなかつた。

「××君が病氣でね」と、襦袢風の水着一枚に褌履きといふ、水泳寄宿舍獨特の身なりにまだ馴れない安井氏が笑つて立つてゐた。「それでわたしが臨時の代役を仰せつかつたんですよ。——どうです。君はあれから變りありませんか

三

若い理科の教師が兩時間書室の開け放たれた窓際に坐つて鰕の解剖を綿密にやつてゐる傍で、彼は安井氏の和譯した釋宗演の「米國に於ける宗教講演集」を讀んでゐた。一體安井氏はその講演の當時、米國で宗演の通譯をした當人であつた。――これは西邦の異教徒にもよく分るやうにと念を入れた佛教の講演で、禪宗に無智な彼にはかういふもの丶方が却つて入り易かつた。またそれは禪宗に對する彼の豫期とはちがつて、明るくて象徴的で、昂揚で感覺的なところのある、彼の急所を撫でてくれるひどく面白い講演に思はれた。釋宗演に就ては彼は「生臭」だといふ評判をしかこれまでに聞いた事がなかつたが。――

讀み疲れると彼は立つて、もう二三冊の禪書を本棚から捜し出した。

「おい、この筋肉をちよつと覗いて見ないか。」

理學士が白い切り身を載せた檢微鏡から眼を離して、彼に呼びかけた。

「今朝、鰕捕りに淡島（あはしま）へ行つたのは君等だらう? 君等は捕りさへすれば、たゞ食つてしまふのだからな」

「腹がへつて、腹がへつて仕樣がないんですよ。さゞえなんぞは待ち切れなくつてその場でやつちまうのです」

「生（なま）でかい。まるで餓鬼だね。それで禪宗の本もないもんだ」

餓鬼道だからなほ讀むのですよ、などといふ應酬も頭に浮んだが、彼は兎に角急所を一本突かれて苦笑した。事實彼は海を見晴らす靜かな圖書館にゐる時に、純粹な讀書慾ばかりを感じてはゐなかつた。時をり天幕からの騒ぎが聞えて來ると、彼は赤褌の仲間のなかで殆んど自分ひとりが始終此處へ出入りしてゐるのだといふ自覺に思はず滿足する事があつた。その癖彼は本に倦きると、同じ天幕に歸つて友達をいきなり戯れに突き飛ばしたり、友達から蹴り返されたりして時

間を過す有様だつた。――東京のあの勞はしさから逃れて來たといふだけで、彼は自分でも持て餘すほどの快活さを知らず知らず恢ひ戻してゐた。

四

その海は深い入江で、入江のためにに自然重たい蒼さを帶びてゐた。正面には伊豆半島の西沿岸が長く伸びて水平線の半分を奪つてゐた。それは湖水のやうな靜かさだが、しかし彼等の村へは稍々憂鬱な眺望をしか與へなかつた。――この對岸の或る船付場までの遠泳が歸京の前々日に行はれる筈だつた。天幕の方の年上の生徒は大部分これに加はるので、彼もその足馴らしを毎日續けてゐた。

その遠泳の前日の夕方だつた。學校の旗をつけたピンネース型の帆船が潮流の工合を調べに夙うに出て行つた。彼等は影の長い濱邊に寢ころんでその報告を待つてゐた。砂を踏む音がして安井氏がそこに近づいた。そして安井氏の一番話しかけ易い生徒は彼だつた。

「向ふ岸のN村といふと、どの邊なのですかね」

「丁度この正面の、一寸左寄りです」

しかし歸路に就いたピンネースが、丁度その村の西日を受けた微かな家並を隱してゐた。

「何里あるだらう。大變だね」

「二里半でせうか。でも潮に乘るのですから二里ぐらゐにしか當りませんよ」

「それにしても大變だ。――君は確信があるのかね」

「えゝ」と彼は皮膚にくらべて白く目立つ歯を見せて笑つた。「大勢で泳ぐのですから、本當はあんまり威張れないんです

よ」

「要するに——君達は非常に若いんだね」

安井氏は近眼鏡越しに、砂地に投げ出された彼の脛を笑つて眺めた。

「その足をくるくる動かして行かうと云ふんだね。まるで蟻だね」

しかし彼はその言葉から例の理科教師の揶揄を思ひ出した。——彼はそれを安井氏に話した。

「それあちつとも構はないぢやないかね」と安井氏は案外眞面目だつた。「禪では生命の盛んなのを少しも嫌ひはしないよ。たゞ現在與へられたたゞの生命をどう觀ようかといふのが禪なのだよ」

帆をふくらませて、ピンネースは潮流が複雜なのか、妙に懶く船首の方向をたびたび變へてゐた。

五

安井氏の言葉で云へば蟻のやうに對岸まで泳いだ彼等は、免状を貰つて、翌々朝の上り列車に乘り込んだ、此處でも彼は安井氏の隣りに坐つてゐた。汽車はぢきに箱根の上り坂を長い時間かゝつて登つてゐた。友達の誰しもがもう漁村の生活に倦きて、新らしい變化を望んでゐた。しかし彼だけは東京に歸つてまた家族と同じ云ひ爭ひを繰り返すのを恐れてゐた。東京驛で友達に別れて、さて急に日中の市内電車にひとり乘つた後の退屈が今からはつきり想像された。それに夏休みはまだ一と月も殘りがある。——

國府津を過ぎて安井氏はそろそろ網棚の荷物を纏めてゐた。例年のとほり鎌倉の圓覺寺の庵で暮すのだ。——だが、安井氏のかういふ樣子を見ると、彼はやつと先刻から躊躇してゐた事を口に出した。

「先生、僕は圓覺寺であとの休みをつぶさうと思つてゐるんですが。——」

「ふむ」

安井氏はまた腰を落ち着けた。

「勿論先生のお宅には御厄介になりません。大勢の人と一所でいゝのです」

「それあよく考へて見たのですか」

「えゝ。――さういふ場所で、さしあたり神經を尖せない方の鍛練だけでも出來ると、僕には實際的に有り難いのです」鍛練といふ言葉を大袈裟なものに感じて、彼は控へ目に云ひ淀んでゐた。「それは勿論公案も受けたいと思つてゐます」

「禪は一年きりといふわけに行かないのですからな」彼の心理を細かく呑み込んで、安井氏が親切に云つた。「ではと、圓覺寺よりもいつそ淨心寺へ紹介してあげませう。鐵山といふ、宗演さんの直弟子にあたる和尚のゐる寺です。これはまた至極嚴格な和尚だから、其處でまあ二週間ぐらゐ、少し見學するのですな」

窓の外の湘南らしい景色を見ながら、彼は至極嚴格なといふ人物にぼんやり不安を感じた。

「飯も非常に不味いですよ。辛棒出來ますか」

と耳の傍で安井氏が念を押してゐた。しまひまで彼に勝手な餘地を與へて置くといふ風だつた。さう云はれると彼はまた一寸迷つた。休暇をもつと面白く複雜に暮すことに未練が出るのだつた。――しかし彼のは、修行よりもつと差し逼つての實際的な要求だつた。夏休みのうちに多少でも應揚な人間になり變れたならば――澄んだ秋になつて、彼はその新手の應揚さで家族との意見の違ひを頭から無視しようといふのだつた。

「辛抱出來ればいらつしやい。――まあわたしも近所にゐる事だし」

「でも僕の動機にはどうも」と、彼は安井氏に見拔かれるのを恐れて工合のわるい顔をした。「どうも純粹でないものが混つてゐるかも知れませんよ」

「そんな事はあまり氣にしなさらないでいゝのでせう」安井氏が言下に取りなした。「完全な動機なんていふ物はなかなかないさ。兎に角私達の寺に一寸でも來て見たいといふのならば、それはもう來た方がいゝ證據だと思つてもいゝのですよ」

そして安井氏は手帖の頁を切つて淨心寺の地圖を書いた。それから、門札が古びてゐるし附近には他の寺も多いのだからと云つて、往來から見た山門と石段との工合を繪にして添へてくれた。

六

平面圖で見覺えのあるその山門をくゞつて、彼は急に影の多いのと蟬の聲の激しいのとに驚いた。影も蟬の聲も南隣りの急な崖地が生んでゐるのだ。巒の突きあたりに小作りな格好のいゝ中門があつた。誰か中門の裏で掃いてゐた。彼の足音でその箒の主が出て來た。顏色の稍々蒼い、頰骨の高い、口もとの尖つた四十三四の坊さんであつた。

「わたしが鐵心だが」と彼の名刺を見て、剃つた頭の凸凹の妙に目立つその人が云つた。「——ああ。安井さんから紹介のあつたお人ですな。お知らせがないから、多分もう止めなすつたのだらうと思つてゐましたよ」

誰が見ても海水浴を樂しんで來たとしか思はれない、黑光りのした彼の皮膚をじろじろ視しらべながら、その人は「多分」といふ言葉に早速用捨のない響きを含めてゐた。

最初に彼が手荷物を置いた庫裡の疊は汚かつたが、方丈も本堂も坐禪堂も、氣持よく古雅に纏つた鎌倉代の建物で、ひと口に云へば中門が象徵してゐるやうに小作りの麗しい寺だつた。それに和尚は孤獨を好む天性らしく、寺男としては東京生れの青年が一人、ほかに毎夏來るといふ學生の修業者が一人泊つてゐるきりだつた。瘦せた一國な和尚は此處を小さくて靜かで嚴格な地域にして置きたい樣子だつた。それが鐵道線路を隔てゝ筋向うにある圓覺寺の、いかにも大道場とい

趣の多人數とは、一寸意固地な對照をつくつてゐた。

着いた夕方に、彼は方丈に呼ばれて拜禮と坐禪の組み方とを敎はつた。彼はまるで體操の敎師から新らしい體操でも敎はつた時のやうに、和尙の前で稽古をして見せた。

「よろしい」と和尙が云つた。「いま覺えたとほりに禮をして、室に入つておいでなさい」

彼は改めて廊下から入つて行つた。すると、和尙は新らた弟子として彼に最初の公案を與へた。前から書物で馴染の「父母未生以前の本來の面目」といふ公案だつた。

「あなたはまだ若いことだから當分相見はしません。そのかはり「禪關策進」といふ書物を每朝講釋してあげます」

しかし相見がないとすれば、彼はたゞ公案を景物として授つたやうな氣がした。

「まあさし當つてはよく坐る事、よく用をする事、この二つを守つて行つて御覽なさい」

「ぢやあ禪關策進だけを伺つてゐればいゝんですか」

東京の古本屋に禪書を賴む必要もあつて、稍々當の外れたかたちの彼は念を押した。

「それは無門關とか碧巖錄とか名の通つたものもあるが、かへつてあなたにはまだよろしくない。禪關策進は古人の修行の苦心を記したもので、初學者には第一の書物です。一體禪には書物が一番よろしくない。この頃の學生共は小才が利いて本さへ讀めばいゝと思つてゐるが」

「ぢやあ學校の本もあんまりいゝ譯はないんですか」

「いやいや學校の本はよく讀まんければいかん」

彼の反問が單純に響いたので和尙は自然笑ひ出した。彼は眼の前に急に面を脫いだ人を見たやうに思つた。そこで彼も下手な結跏を組んだ儘和尙に笑顏を向けた。うつかり笑顏なぞ見せて一喝されるのではないかと用心しながら。——

七

その小作りな寺にゐて最初に感じたことは、彼が住人のなかで一番若く、一番元氣だといふ事實だつた。ほかの二人の青年は何か沒醉な蕊（しん）を持つて、坐禪にやつれたやうに振舞ふに引替へ、彼はと云へば最初の日に和尚を驚かしたあの色艶を公らに見せてゐた。漁村の潮臭さが奥地に來て急に目立つ形だつた。

朝まだきに彼は井戸水を汲む役目を云ひつかつてゐた。灌木の繁みに隱れた風趣の豐かな井戸であつたが、庫裡からは茄子畑を隔てゝかなり遠い。しかし彼は、人生の經驗のためにではなく運動競技の激しい練習のために、水汲みはさまで苦くはないのだ。掃除も同じ事だつた。だが彼のつい現はしてしまふこのやうな身輕さは、庫裡のなかで妙にちぐはぐな關係をこしらへ始めた。彼にして見れば若い人間の若若しいといふ事に或る値打ちを認めようとする、さういふ習慣がついてゐる、しかしそれがこの寺では何か異樣な、仲間外れの匂を立てるのだつた。

「よくそんなに陽氣にしてゐられるね」

と和尚が彼を揶揄つた。

一體和尚は滿ちた胃腑と何か關係があるかと思はれるほどに、食卓で皮肉を連發した。しかし和尚が上手な滑稽を云ふと、彼は待つてゐたやうに笑つた。笑ひ癖が附いてゐるのだ。

「箸が轉んでも可笑しい齡頃といふのはあるが」和尚がまた彼を槍玉にあげるのだつた。「あれあ娘ばかりぢやないと見えるね」

「えゝ、なるべく陰氣になるまいと思つてゐるんです。どうでせう。いけませんか」

「いや、いゝとも。始終にこにこして居られるやうになればわれわれも申し分はないさ」

すると今度は他の二人が和尚の顔色を見て一齊に笑ふのだつた。

彼は段段自分の快活さに拘泥した。

和尚は毎朝「禪關策進」を怒るやうな調子で講釋した。何何禪師嘗て何何す、とか、何何和尚嘗て何何に問て曰く、とかいふ、一種單純で歌調の朗らさに似た朗らかさを持つたその文體も、一旦和尚の口を通すとプロテスタントかサヴオナロオラ一派の宗教史でも說いてゐるかのやうな激しさを帶びて來た。和尚は時々唾を本のうへに散らすのであつた。

和尚はまた方丈で暗いうちから朝燒雲の散る頃までに――それは美しい朝燒雲の毎日續く時候であつたが――日課の第一課たる讀經を勸めた。その甲高い性急な聲が、

「我に三等の弟子あり。

所謂猛烈にして諸緣を放下し

…………………

これを上等と名づく」

こんな風に響きわたると、彼はバケツを下げながらあの猛烈さを宗濟は愛してゐるのだなと考へた。和尚はまた夜の徒然に自分の若い時の話を――自分の若い頃の憂鬱を――罵倒して聞かせた。自分の鈍根に絕望して、雲州松江のあの湖の渚を裸足で廻りながら公案を考へつゞけた事や、丹波の或る農家の庭石にひと晚坐りつゞけて憂鬱を持て餘しながら夜を明かすと頭の上の森で鴉がいかにも暢氣に啼いてゐた事や、それから尾張で肺を惡くして、その時はもう自分も無知のまゝ駄目になつてしまふのかと考へた事や――すると和尚は突然彼に大聲で云ふのだつた。

「さうさね。君のやうにさうやつて洒脫になれたのは、いつ頃からだつたらうな―

宵の七時に寢て明け方の四時に起きる生活に慣れると、彼の頭腦も周圍に影響されて「公案」の周りをめぐりはじめた。喫煙が癖になるやうに、一つの方言が口癖になるやうに、父母未生以前の自分といふ變な觀念が彼の頭のなかで一つの癖になつた。しかし彼の死の恐怖は蒙昧人のそれと五十歩百歩だつた。そして彼の生活意識は結局意味のない、他愛のない、過剩な若若しさから成り立つてゐた。自分の生きてゐる事が實に奇妙なものだと分つた以上に、そして自分の生きてゐる事が一體何なのだらうといふ考の大切なものだと分つた以上に、彼の頭は結局一歩も進めなかつた。いや、彼の健康な器能がそれを喜ばないのだ。要するに公案を解かうとする彼は、公案といふやうな手綱を喜ばない彼にくらべて、いかにも貧しく、力がなく、厚みを欠いてゐた。

或る午後だつた。彼と東京の學生とは時間が來て坐禪堂に入つた。坐禪堂の三方は開け放たれて海からの風がわたつてゐた。蟬と青葉と風と。其處は諸縁を愛する人の亭のやうな快さを具へてゐた。如來の金色の顏にまで照り返しが蒼く動いてゐて、彼は眠氣を押へるのが精一杯だつた。

何かの物音を聞いて彼は振り返つた。すると東京の學生はいつの間にか細長い台――修行者のために故意と幅を狹めて坐りにくゝ作つてある台――のうへに、馴れた腰つきで横になつた儘眠入つてゐた。彼は一瞬間呆氣にとられた。しかしさういふ事がいゝのならばといふ工合で、彼も忽ちそれに倣つた。すばらしい快樂に壓倒されて彼も眠入つた。

ふと彼が眼を覺ますと、和尚がすぐ鼻先きで香を焚いてゐた。和尚は如來に合掌してゐた。しかし彼は今更再び起きのも變なものだつた。長い午睡の後で第一、急には身體が利かなかつた。やがて眠た振りをしてゐる彼の足元を廻つて和尚が出て行つたと知ると、彼は再びうつらうつらした狀態で青葉や反射の快さを感じてゐた。彼は睡魔を一心不亂に――無

邪氣な小兒のやうに一心不亂に捉らへたといふ「禪關策進」のなかの古人をぼんやり懶く想ひ出してゐた。が、それにも係らず眠りに對する今しがたの要求があまりに自然で素直だつたので、彼はどうも惡い事をしたやうには思へなかつた。

翌る朝の提唱の時間に、果して彼と東京の學生とは獨特の皮肉を浴せられた

九

安井氏に誘はれて、彼は白ほこりのまぶしい道を一町ほど先きの松巖寺へ從いて行つた。老年に入つた釋宗濟は圓覺寺には住はずに、手頃の廣さを持つた其處に移つてゐるのだ。

「宗濟老師にも一度お目にかゝつて置くがいゝせう」

彼はしかし淨心寺に着いた第一日のやうな率直さをいつの間にか失つてゐた。公案といふ不思議に無表情な壁を與へられて以來、彼は自分の單純な若さ――幼稚さに絶えず引け目を感じてゐる有樣だつた。彼は元氣もなく、たゞ安井氏の後から松巖寺の石段を登つて行つた。

「さつぱりしたいゝ寺でせう。昔は尼寺で名高かつたのですよ」

汗を拭いてゐる安井氏に聲をかけられて、彼はふとよく手の入つた前庭で油蟬のかはりにもう法師蟬の啼いてゐるのに氣がついた。さうだ、海では今頃さぞ波のうねりが大きいだらうな、こんな泳ぎたい慾望が彼の頭をかすめてゐた。まつたく彼は寺に來て以來一度も町なかには出なかつたのだ。

いま久しぶりに眞夏を越えようとする往來に出て、彼はこの何日間か狹い地域のなかで、自分が何も分つてゐないのだといふその一つ事に絶えず頭を向けてゐた彼自身を、今更物珍らしく傍觀してゐた。しかし結果から云へば彼は少しの謙讓を得たかはりに、あの水泳寄宿舍當時の神經のなだらかさを――自身の思ふ方へぐんぐん進む氣力を失つてゐたに違ひ

なかつた。自分を[illegible]

宗演は奥まつた八畳ほどの僧の部屋にゐた。がつしりした體の骨組の逞しい、皮膚に艶のある、眉の垂れさがつた、風采の[illegible]い、立派な相貌であつた。宗演は彼のゐるのを忘れたやうに、安井氏にぽつりぽつり氣輕な世間話をしかけてゐた。時をり眉の奥の大きい眼がぎろりと動くのを見て、彼は僧の間で才氣煥發であつたに違ひないその二十代を想像した。平常耳にしてゐた噂を思ひ合せて、この人はきつと自分の才氣に困つた事のある人だと彼は思つた。しかし眼の前の宗演は彼にとつて格幅(かつぷく)のひろい、圓熟した、やはり何處か頼るべき人だつた。根本の事柄を尋ねてもいゝ人だつた。要するに彼は博學な暖かい安井氏を信じてゐたので、安井氏の信じてゐる宗演をも信じたかつたのである。

「夜どうも身體が冷えるので、やはり葡萄酒を少しづつ飲んでゐるが」

と宗演は安井氏に云つてゐた。なるほど淨心寺の鐵心の方が一途で頑固で清淨派らしい修業者だと彼は思つた。彼は其處に所謂鈍根とは正反對な天性を見たやうに思つた。しかしこれは噂のやうな「生臭」の印象とは何か違つたものだつた。

「この頃淨心寺の方はどうかね」

不意に宗演が、今まで忘れたやうに扱つてゐた彼へ振り向いた。

「淨心寺の老師から公案を授つたかな」

「まだ相見(しやうけん)はして戴きませんが、授かりました」

と彼が答へた。

「うむ、相見はさきでいゝ。どうだね、よく坐つてをるかな」

彼は默つてゐた。

「相當にやつて居るやうです」安井氏が相變らず寛大に取りなしてくれた。「年の割合には何か考へてゐるやうにも見えます」

「どういふ事を普段考へるかな」

彼はどう答へていゝ事柄か分らなかつた。

「生命といふものをこの頃の學生はどう考へてゐる」

躊躇した後で、彼は藪から棒に

「べつに好意でさづかつたとは思つてゐません」

と云つた。そして返答のまづさに苦ながら赧くなつた。

「では惡意でさづかつてゐるといふのかな」

彼は一瞬ぎろりと向けられた眼差を見て、和尚がこの生意氣な若い奴と思つたのだなと直感した。そして又もや云ひそびれた。

「さういふ意味ではないのでせうが、この學生は少し家庭の事情が、そんな事を早くから考へ易いやうになつて居るやうです」

と安井氏が云ひ添へた。彼は振り向いて安井氏を見た。以前安井氏にそれに近い事を云つた覺えはあるが、今のはそんな意味ではないのですといふ合圖のつもりであつた。

宗濟はそれきり彼には話しかけなかつた。しばらくして「精々勉强するといゝ」から簡單に云つて、客のあるらしい別室へ立つて行つた。そして彼は自分のいかにも畏縮けきつてゐるのに腹を立てながら、再び安井氏の後からまぶしい表におり立つた。

COGITO ERGO SUM.

十

英國の民衆藝術といつた工合の下手な味はひを持つた板彫りが、安井氏のその隣の書齋の壁にかゝつてゐた。云ふまでもなくデカルトに附きものゝ「われ考ふ。ゆゑにわれ在り」の羅典語だつた。われ考ふ、ゆゑにわれ在り。——この筆法で云へば彼もその何日間か寺で愚かにしか、そして單純至極にしか考へる力がなかつたが、しかし何かを考へてゐる點で、また何かを考へようとしてゐる點で、彼の存在はやはりたしかな譯だつた。彼は風ではない。虚空ではない。彼は夏の日盛りのなかにたしかに存在してゐる。細細としてではあるが。——それで、この板彫りの斷言は薄暗い壁から氣の弱つてゐる彼をしきりに慰めてゐた。

彼は松陵寺の歸り途にその足で安井氏の庵に立ち寄つたのだつた。玄關に並んでゐる夫人の下駄と女の子らしい小さい下駄とが彼を何といふ事なしに親しみをもつて落ち着かせた。それから彼は、安井氏が途中であつらへてくれた氷水を氣恥かしいほどの勢ですゝつてゐた。本堂を包む杉の大木を正面に見たその庵には小さい池があつて、よく伸びた荷葉がすでに蒼黒い水面を覆ひ盡してゐた。緣先きから足を伸ばすと葉を搖ることも出來さうな近さなのだ。

しかし安井氏が松陵寺からの歸途に彼を誘つたのは、多少の用件をも含んでのことらしかつた。

「君はもう何日になります」

と安井氏が、風通しのいゝ緣先きに坐を移しながら切り出してゐた。

「八月二日からだから、十一日目です」

「ぢやあ二週間と云つてももうすぐですね。あとどうします。——はじめの話のとほりにして、ひと先づ歸るとするか」

安井氏の語調は相變らず彼に氣儘な返答の餘地を與へてゐた。

「僕はどつちでもいゝのです」

と彼は遠慮がちに答へた。

「十何日か寺にゐて、さし當りどういふいゝ事がありましたね」

「何もありません」彼は稍々羞んで云つた。「一體、紹介して戴くのが今年ぢやあまだ早過ぎたやうにも思つてゐるんです」

「そんな事もないだらうが。なぜね」

「なにしろたゞぶらぶらして、相見さへして戴けない程度なのですから」

「相見を願へばいゝぢやありませんか」

「そこまで僕が行つてゐないのです」

自身でも思ひがけず、彼は顏を擧げて安井氏を見ると、昂奮した聲を出した。

「誰でも始めの年はさうさ」

と、默つてゐた安井氏が宥めた。

「さうでせうか」

「誰しも始めは、粗食と勞働に馴れゝばいゝのさ。それだけでも十分な獲物だと思ひますがなあ」

彼は慰めて貰へたと同時に失望もする變な心持を味つた。「要するに君は非常に若いんだね」——帆船がいつまでも潮流を調べに出てゐたあの夕方の安井氏の言葉を、彼ははつきり想ひ出してゐた。

「君は一體禪宗を、どうなんです——感想は」

と又安井氏が突込んで訊ねた。
「好きなのです。好きといふのは變ですが」
「いや、何宗によるかといふのは結局好き嫌ひでいゝんだよ」
「さうでせうか」
「さうさ。――君は人生の完全といふ事が欲しいんぢやないか」
「そんな事はありません」
一々返答する自信がなかつたので、心の動揺から彼は自然安井氏を睨むやうな眼付をした。しかし一方ではやはり、鐵心のあの放任主義に疲らされた後で、彼は安井氏のそのはきはきした肉迫を何となしに快く感じてゐた。
「そんな事はあきらめてゐます。たゞ不完全を、十分に納得したいんです」
しかしこれも讀書のうへの智識で、彼れにはいかにも手薄な、表面だけの返事しか出來なかつた。
「それがどうして禪宗ならば納得出來ると思つたの。――一度ははつきり開いて置いた方がいゝからね」
「自力で出發するところがいゝと思つたのです。はじめつから頼つてしまふ宗教は厭だつたんです。いゝ加減にだまされるやうな氣がして」
「だまされるつて」
「つまり――死の解決だとか――」
安井氏はまた默つた。しかし別に批評は加へなかつた。
「要するに初めつからの他力は厭なんだね」
「さうです」

「ぢや自力ならば」と、眼近かの苔臭い池を見ながら喋つてゐた安井氏が結論のやうに彼へ振り向いた。「猶更君に力のない間は仕様がないぢやないか。始めの一二年掃除ばかりするぐらゐ仕方がないさ」

彼は口を噤むだ。明快に云づてのけられたと思つた。が、やはり彼は淨心寺でのすべての日課が純粹に二三年先きのための豫備的訓練に過ぎないのだと知つてしまふと、もう豫定の日數を伸ばしても滯在する氣力を失つてゐた。それはあの無邪氣なほどに猛烈な鐵心に對しても云へた義理ではなかつたが、しかし彼はやはりその心持を打ち消すことが出來なかつた。——參禪の道の妨げにはなるがしかし自分の全部にとつては一概にさうも云へない場合がありはしないか。から二通りに物を考へる點で、彼はやはり純粹の弟子らしい弟子たる資格を失づてゐた。

その翌る日の午後だづた。小作りな麗しい中門の陰を掃いてゐる時に、彼は水泳寄宿舍で一所に暮した同級生の木村からの手紙を受け取つた。

「僕はこの間前橋から赤城山へ行つたよ」と木村が旅びとらしい快活さで書いてゐた。「山の天邊に湖水があつてそれを外輪山がぐるりと取り卷いてゐるのだ。つまり湖水は昔の噴火口たのだ。外輪山の傾斜はいやに柔かで、森には牛が放牧してある。牛が多くて散歩のをりにちよつと弱る時もあるがね。——宿屋は湖水のふちに建つてゐて宿賃が非常に安い。それから面白いことがある。その宿屋の主人の膽入りで、松峯順一さんが——無論「S」誌の同人の松峯さんだが——宿屋の裏手にひと間しかない小さな藁小屋を炭燒男に建てゝ貰つて住んでゐるのだ。奧さんとふたりきりで、この五月頃から來てゐるのださうだ。松峯さんは今も小說は書いてゐないやうだが、大變落ち着いた話しいい人だ。僕はもう一度出かける。君はどうだね。雷と蚤を我慢するとして、氣があるならば返事をくれ給へ。——K」

木村は彼が休暇の間家にゐたくないのを知つてゐるのだつた。して見れば、この便りは木村のもくろんだ親切からであつ

た。

海からの解けさうた雲が中門の眞上を通つてゐた。彼は一S一の松峯氏がその一二年小説の筆を止めて田舎に去つてゐる事を知つてゐた。また松峯氏がその一二年兩親の家から離れてしまつてゐる事も木村から聞いて知つてゐた。そしてかういふ事情の松峯氏の生活が、現在の自分に何か力になる暗示を與へはしまいかと、彼は一寸想像した。さういふ想像がその人に對しては好奇心めいて禮を失してゐるとは思つたが。——

掃除が終ると彼は方丈の縁に出てゐる和尚に近づいた。木村が今入りに對して寄した熱心さに刺激されて、彼は和尚に云ひそびれてゐる挨拶をも氣樂に果せさうだつた。

「何か用かね」

と、和尚が彼の顏色を見て尋ねた。

「やつぱり豫定どほりの日に失禮いたします」

「參つたね？」

ひと言云つて、和尚は笑ひ出した。

「いゝえ參りません」

彼も笑ひながら冗談まじりに應酬した。それは丁度最初の日の方丈でのあの問答にそつくりた取り合せだつた。しかしそれでもふたりは、採點試驗のすべて濟んだあとの試驗官と受驗生のやうに、笑つて、寛いで、蜩が庭で單調に啼く時刻までも雜談した。

十一

上州の水沼驛から三里ほどの山道を、木村と彼とは赤城の外輪山になつてゐる鳥居峠へ登つて行つた。木村の一行に彼が加はつて都合四人だつた。

まだまだ激しい暑氣のこもつてゐる東京に彼は二日しか留まつてゐなかつた。水沼からの峠道は近いかはりに急でもあつて、くつきりと浮き出た樹の多い頂がすぐ眼の前に見えながら、つゞら折りの登り坂はなかなか捗らなかつた。宿の番頭が先に立つて、誰しもいつの間にか景色には無關心になつてしまつてゐた。

不意に四人は軟かい草地に出た。風といふよりは氣流のいかにも自由に通つてゐる高い草地であつた。道はそこから緩やかに下る一方で、その道の盡きるところに光つた、動かない、水の色が見えた。漁村とはちがつて潮の音の少しも聞えない水だつた。なるほど外輪山の底にある湖水であつた。

空氣が奇妙に輕く、彼は何か間の拔けた心持だつた。ひと息入れながら意味もなく四邊の草と石とを見廻した。頭蓋骨を聯想するやうなこの音もない場所に來て、滿足してゐるのか物足らないのか分らなかつた。またそれは大宮、熊谷、高崎と、日射の強い車台に絶えず搖られて來たあとで急に汽車の停つた時の心持に似てゐた。

一種の快い錯覺であつたが……

彼等は今度は宿屋のあるといふ湖べりの方向にたゞ下りて行けばよかつた。牧牛の糞などの散らばつた靜かさで、何の緊張も要しなかつた。だが彼はその緩やかな傾斜に足をまかせながら、四人のうちで自分ひとりが何か肩のいかつてゐる——やうな心構へを持ちつゝあるのに氣がつくのだつた。それは水泳寄宿舍から寺へと續いて、自然に附いた習慣に違ひなかつたが、大氣の底ぬけに輕い此處ではそれが何となしに可笑しく門違ひだつた。

廣い野原の坂道で彼はやはりしきりに草と石とを見廻した。——

しかし[illegible]

を招いた。彼は楢の木陰の入口に立ちながら、その妻に[illegible]の籠つてゐる[illegible]は昔から彼等の學校の卒業生によく聞く評判だつた。藁小屋の窓から學校の[illegible]した形だつた。

小屋は内まで炭俵と同じ質のもので出來てゐた。四疊半ほどの廣さの部屋は眼に快い程度の[illegible]こしらへてゐた。彼等にごたごたと松岑氏に膝を突き合はすやうにして坐つた。影のなかで白いゝろの襟更に目立つ、額の[illegible]かた、品のいゝ奥さんは、疊の僅かな餘地で茶を入れながら狹いのを可笑しがつた。

客の日の用意なのだらう、隅に女羽織が疊んであつて、紅絹が少しばかり見えてゐた。それがこの藁の天井の下に若い婦人のゐる艶やかさを漂はしてゐた。

松岑氏は寛いで、暢氣な話をつぎつぎに持ち出した。暢氣な話を樂しんでゐた。この人は我の新鮮に張り切つた小說を書く短篇小說家であつた。しかし一年ほど前に不意に制作を中止したのだつた。そして今は兩親の家から離れてしまつてゐる譯だ。——彼はこれらの事實を計算して何か鋭い、深刻めいた空氣をその藁小屋に豫期してゐた。しかし彼は其處に和らいだ眼の大きい、額の廣い、手のがつしりした、そして我を靜かに制御してゐる人をしか見出せなかつた。それは自分の子供のやうに自分を休養させてゐる人だつた。休養の濟むのを待つてゐるらしい人だつた。それで彼は思ひがけない他力の香りを、自力の强い點に感服した人の部屋で嗅いでしまつた。

二時間あまりも遊んで彼等は外に出た。奥さんが洋燈を用意するのを見て立つたのだ。歸り路に山つゝじの多い湖べりの草原で、彼等は遠くに牛飼を見た。味噌籠を抱へた牛飼は「バア、バア、バア、バア」から長く呼んで外輪山の諸方に散らばつてゐる牛を集めてゐた。それがここでは日暮のしるしだつた。やがて牛が眠れば夜の[illegible]だつた。生活を極端に課目で割つてゐたあとに、時間のない土地を當てもなく散歩するのはやはり勝手の違ふ不思議な心持だつた。

文學通の木村は松峯氏に就ていろいろの智識を持つてゐた。しかし彼はあまり話を其方へ向けなかつた。二十の彼はいい學問をした譯だつた。彼は二週間で何か一段と違ふ人間にならうと意氣込んでゐた。またそれを當てにしてゐた。彼は人生を抽象一點張に考へてゐた。そして壁に打つかるやうにその人生に打つかつてゐた。が、さぞさうもあらうと思つた松峯氏は、たゞ眼の前のありのまゝの生活をその儘に叮嚀に扱つてゐる人だつた。——

「お寄り遊ばしませんか」

と頰の豐かな奧さんは、彼等が楢の林を通つて外輪山へ遊びに行くのを見かけると窓から誘つた。奧さんの聲をかける時は松峯氏も暇な時だつた。しかし何氣ないやうにして休養してゐる松峯氏の小屋へ、彼等は自然と書物の話なぞはせずにトランプを挑みに出かけて行つた。

「こはいわ。こはいわ」

子供らしい奧さんは扇形に擴げた持ち札を胸に隱しながら、狹い部屋に聲を響かせて、危(あやう)くなると松峯氏の指圖に賴る樣子だつた。なるほどさう云はれて見れば彼等は遠慮してゐるやうで、やはりその齡らしい一本調子に肉迫する戰ひ方をしてゐた。

しかし油が乘ると松峯氏もその短篇の作者らしい、明るく張り切つた我をほんの少しばかり見せた。煙草の烟がすぐ頭の上の天井にぶつかつて、それから楢の下枝にまつはつて行つた。

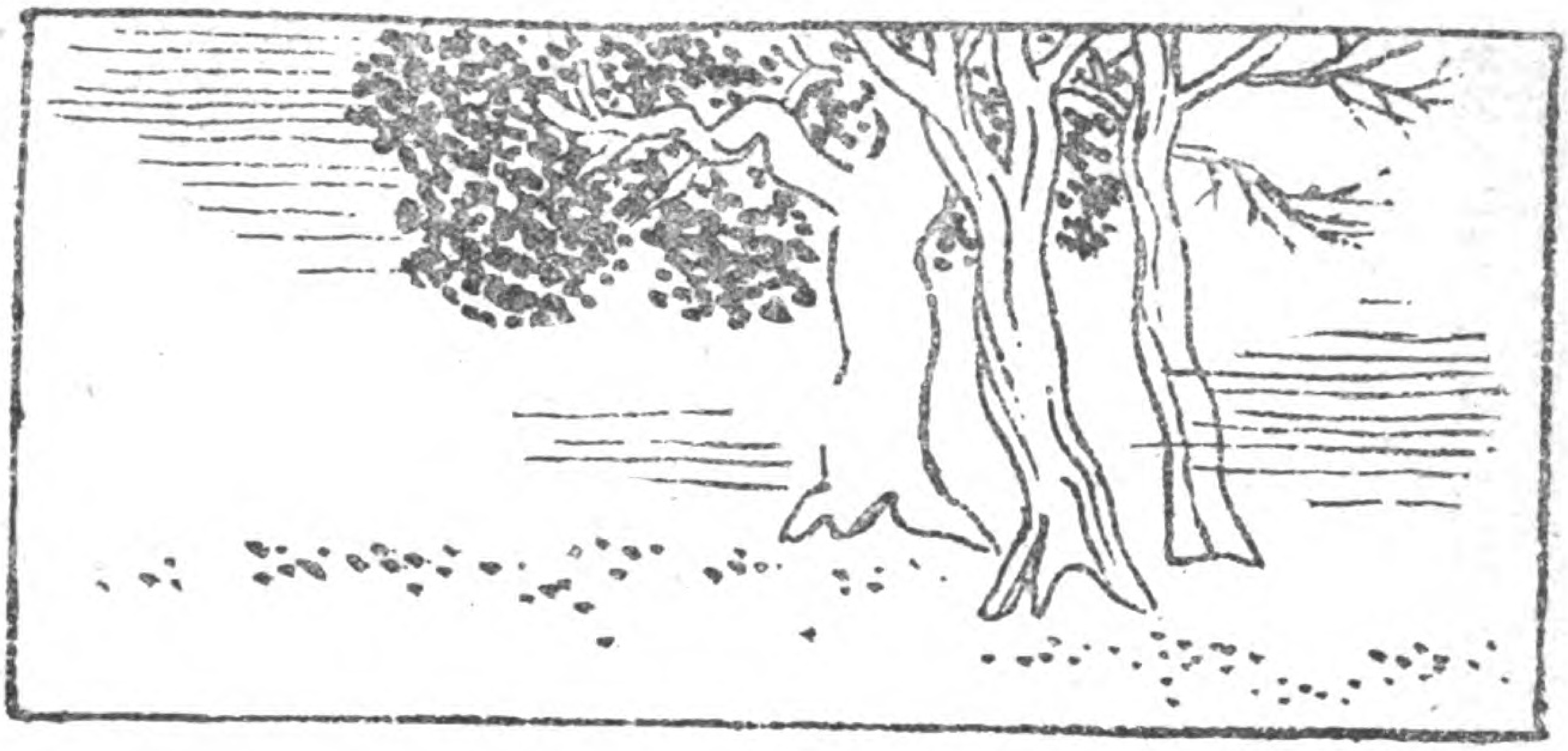
「これでもか」

「えゝよござんす」

と、眞向ひの彼が面白がつて松峯氏に應酬した。

「ぢやあこれはいゝさうだ」
「少し迷つたが、かうやれ」
「そらもう一枚」
「よし、かう行きます」
彼は力を入れて札を卓に投げて行つた。
「君もなかなか遊べるやうになつたなあ」松峯氏は彼のその不器用な格好に笑ひ出した。「ふうむ。隅に置けないぞ。——ゆうべも夜中まで舟を出して喜んでゐた。君達だね」
「はじめはお音無しかつたのにね」奥さんが傍から云ひ添へた。「もう皆さん、ちやんと分りましたわ」
「段段正體がでせう、奥さん」と木村が引き取つて云つた。「こいつははしやぎ出すと始末に終へないんですよ。御存知なかつたでせう。つまりむら氣なんですね。この間うちは一寸ね——まだまだ本音が出て來ますよ」
「さう、來た時よりまた元氣になつたの」
と、和らいだ氣持の松峯氏は大きい眼で彼を視しらべてゐた。
「木村君の方はそれあ始めつからだがね」
しかし彼は笑つて札を切りながら、松峯氏の云つたその「元氣」を、ゆつくり手足を伸ばしてゐるといふ意味に勝手に解つてゐた。——彼はまた新らしく札を配つた。
「そら、もうひと勝負どうです」

（終）



秋晴

里見弴

時――現代。

所――東京市内。

人――とき。（姉。二十六七。）

みつ。（妹。二十四五。）

きよ。（女中。四十あまり。）

ます。（同。十九くらゐ。）

常吉。（出入りの俥夫。）

その他、運轉手二人、小僧、御用聞。

景。出の手の、小路の奥へ五六間も引つ込みたる貸家。上下五間ほどにて、日當りよく、小ざつぱりと建つてゐる。下手よりに玄關、庭木戸。階上階下とも障子をあけ放ちあり。ここに移り住む者ある當日の樣なり。二階は既に掃除を終へ、夜具包、屛風、種類など置いてあれど、人はゐない。階下にも簞笥二棹、茶簞笥、姿見など、まだ置き所のきまらないままに雜然と置いてある。

初秋、午後一時頃の日射。

きよ、奥まつた臺所で掃除をしてゐる姿が時々見える。常吉は縁側を拭いてゐる。

常吉。どうしたんだらう、馬鹿に手間どるぢアないか。

きよ。なに？　あとの荷？

常吉。さうさ。もうさうたんともないんだらうがね？

きよ。あら、まだこの三層倍くらゐは來ますよ。

常吉。さうかな。そイぢア、今度はあつちの手が足らなくなつてやアしたいかな。

きよ。でももう、相原さんの奥樣が、小僧さんをつれて見えるでせうから……。

常吉。相原さんてえと、西河岸の、なんだね、お姉さんだね？

きよ。あら、お姉さんだつて……。（笑ふ。）

常吉。さうぢやあねえかい？

きよ。お姉御さんですよ。

常吉。へーえ、さうかい。俺ア一遍お盜りしたことがあるつきりで、よくも憶えてねえが、あの西河岸の奥さんの方が、よつぽどふけてなさるやうに思つたがなア。

きよ。それア、さう申しちアなんだけれど、御器量がね……。

常吉。それもさうだし、一つにやアまア、あちらは堅氣の奥様だし……、ねえ、これア矢つ張りどことなく違はアね。

きよ。生意氣お云ひでないよ。うちの奥様だつて、何も……。

常吉。さうまアむきンなんなさんなよ。(笑ふ。)然し、お前さんは、感心に主人思ひだなア。

きよ。それアまた誰だつてあたりまへのことぢアないか。

下手、表通の方にあたつて自動車の爆音。

常吉。あ、來たやうだぜ。

緣先に出て、庭木戸の彼方を伸びあがり見る。

常吉。あ、奥さんだ。

きよ。あら、さうお。

きよ、常吉、玄關に出迎へる。

とき、小さな風呂敷包と手提とを持つて登場。耳隠し。やゝ華美好みのお召の袷。羽織なし。草履。

とき。もうすつかり掃除できて?

きよ。はい。まア、あらかた……。(おもてを覗き、)お一人でいらつしやいましたんですか?

とき。(常吉を顧て、)あんた、そんなとこでぽかんと突ッ立つてないで、荷物を取つて來なさいなね。運轉手一人ぢア仕様がありやアしないわ。

常吉。あ、ヘツ、畏りました。

出て行き、運轉手とも〴〵に、佛壇、神棚、小机、その他、毀れやすさうな品ばかり、何度かに運んで來る。それにはかけ構

きよ。おますさんは、どういたしましたんです？

ひたく、一方、屋内の中をとに角に眺く。

とき。だつて、お前、いまだに誰一人西河岸から來てくれアしないんだもの。あの人と來たら、朝早くから行くのなんのつて……。自分が來られなけれア、せめて正どんでも小僧でもいゝから、先によこしてくれりやアいゝんだのに……。

云ひながら、うちのなかをぐる／＼廻つて見て歩く。きよ、それについて廻る。

きよ。ぢア、あちらは、今、おますさん一人ツきりなんでございますか？

とき。うゝん、いゝ按配にね、濱田屋の小父さんが來たから、とつ捉へて、手傳はしてやつてゐるんだよ。たまさか伺へば、こんなもんだ、なんて、愚痴をこぼしてたけど、それでも感心に、ますと二人で、うん／＼云つて暖簾なんかかけてたわ。

そこへ、常吉が部屋のなかまで荷を持ち込んで來て、

常吉。どちらに置きませう。

とき。假にまア、どこイでもいゝから置いといて、あんたは、今の自動車ですぐうちへ歸つて頂戴。そイでね、もし姉が來てゐたら、すぐまたその自動車でこつちイ來るやうにつて……。毀れやすさうなものは、成可くそんとき一緒に載せてよこすのよ。

常吉。へ、畏りました。

とき。あゝ、それから、へんな、若いやうなお爺さんみたいな人がゐるからね、どうも御苦勞さんでしたつて、よく禮を云つて歸しツ頂戴。――近いうちに、こつちのうちに來てくださいつて、さう云つてね……。所番地は、あたしも

敎へといたけれど……。

常吉。もしまだ西河岸の奥さんがお見えンなつてませんでしたら、一旦自動車は歸しちまつてよろしいんですね？

とき。それアさうよ。……そイでね、あんたは、すつかり荷物を積み込んぢやつたら、よく火の元に氣をつけて、大家さんに聲をかけといて、そイから、その荷物自動車のてつぺんに乘つかつて來なさいよ。ね？（微笑。）ますは、先に電車でよこしてくれてもいゝわ。

常吉。往きは、一人でふんぞり返つて行ける代り、歸りがトラックと來て、おまけにそのてつぺん……。

とき。よくあるわよ、あんたみたいな人が、荷物のてつぺんにとまつて……。

常吉。とまる？　まるで蠅ですね。

とき。蠅よ。蠅とまるすべる、つてね。滑り落ちないやうに氣をつけていらつしやいよ。

常吉。おや〳〵。ひどいことになるもんだな。

とき。愚圖々々いつてないで、早く行つてらつしやい！

常吉。へ。

おもてにとんで出て、下手より退場。とき、きよに何か云ひつけたりしてゐる間もなく、常吉、駈け戻つて來る。

常吉。西河岸の奥さんがお見えなさいましたよ。

續いて、みつ登場。風呂敷包を持つ。丸髷。大島の袷、一重羽織。

とき。（緣先より伸びあがつて、手招ぎしながら。）こつちからいらつしやい、こつちから！

みつ。（庭木戸からはいり。）どうも、おそくなつてすみません。

とき。ほんとよ！　朝早くから來る、なんてつといて、一體今時分まで何してたのよ！

みつ。ほんとにすみません。今朝になつて、急にうちの宿、名古屋まで行つておかなくちアならないなんて……。

とき。（常吉が出て行く後姿を見て呼びかける。）ちよいと、常さん！ ちよいと待つてよ

常吉。へえ。（戻つて來る。）

とき。（台所の方へ、）ねえ、きよ！ さうしたら、お前も一緒にあつちイ行つて、あとの荷造りの方に廻つておくれな。その方が早く片づいちまつていゝし、それに、大家さんには、矢つ張りお前が顔を出しといた方がいゝわ。常公ちア、なんだか、きちんとしさうもないからね、さうおしなさいよ。

きよ。（この臺詞の間に台所から出て來て、みつにも挨拶し、低聲に、）今、相原さんの奥様に、お茶でも差上げませうと存じまして……。

とき。いゝわ、お茶なんぞ……。

みつ。えゝ、どうぞもうそんな……。

とき。だからさ、こつちのあと片づけは、幾ン日かゝつたつていゝんだから、總がゝりであつちをやつておしまひよ。ね、その方が、ものがきちんとしていゝからさ。

みつ。尤、うちの小僧も、一人あつちを手傳はせて置きましたけど……。

とき。あれでせう？ あの、薩摩ツぺえでせう？ あんなの駄目よ！（きよの方へ、）いゝよ、こつちは、二人で暢氣にぼつぼつ片づけものでもしてるから、矢つ張りお前、行つて來ておくれよ。

きよ。はい。畏りました。

挨拶をし、割烹着をぬぎながら、水口より出、下手、玄關の奥に抜けて、常吉と前後して急ぎ足に退場。

みつ。（沓脱よりあがり、）いゝうちだわね、ちよいと見せて貰はふ。

とき。どうせお花様のやうな具合に、手廣くは參りませんがね……。（と、笑ひながら先に立つて案内する。）

みつ。まア、いやなお姉さん。（部屋を通りぬけながら、）八疊、六疊ね。こゝは吹き通しだから、きつと夏は涼しいわよ。

兩人、台所から、裏側の（看客には見えない、）女中部屋、湯殿など見歩きながら、大體次のやうな捨臺詞よろしくあるべし。

みつ『この女中部屋は少し暗いわね』とき『でも、寢る時だけだから』みつ『それアさうね』とき『ちよいと、見てごらんなさいよ、可愛いゝお湯殿でせう？』車戸の音、『まあ、利口に建つてるわねえ』等々。

二階にあがり、八疊、六疊を見歩く間も、よろしく捨臺詞。おりて來て、住みつかば、茶の間になるべき八疊の間に腰を据える。

とき。座布團も、どつかに來てゐる筈なんだけど……。

みつ。あら、引越のお手傳に來て、坐り込んぢまつちやア仕様がないわ。（持參の風呂敷包をとき、餅菓子の箱か何かを取り出し、茶簞笥の中段に入れながら、）あとで、みんなのおやつにでも使つて頂戴。

とき。何？　なに持つて來てくれたの？

みつ。駄目よ！　姉さんなんぞの食べられるもんぢアないわ。（云ひながら、まづ羽織をぬぎ、包から取り出した割烹着を着、手拭を姐さん被りにする。）

とき。（それと見て、）もの〳〵しくも出立つたもんね。そんなに、あんた、働く氣で來たの？

みつ。それアさうよ！　……さア、なんかしませう。一體、何から手をつけたらいゝの？

とき。そんなに慌てなくつたつて、みんなが來てからでいゝわよ。

みつ。相變らず暢氣ねえ、姉さんは。

とき。だつて、もうこゝイ來ちまへば、何もそんなにガチヤ〳〵することはないんですもの。まア、お坐ンなさいれ。

みつ。えゝ、でもね、たゞぽかんとしてたつて仕様がないから、なんか、坐りながらでも出來るやうなことない？

とき。さうね、まア、鏡臺の抽斗か、机の抽斗でもお片づけなさいよ。

みつ。折角來て、なんかしなきやアね……。

鏡台を持ち出し、その抽斗や開きのなかに、新聞紙でくるんで詰め込んである化粧品その他を出し、ほぐして入れ換へたりする。

ときもそこへよつて來て、鏡に顔をうつし、ちよつと前髪を抑えてみたりしながら、

とき。あたしもなんか被らう。そイでないといかにも怠けてるやうに見えていけないから。（と手巾を出し、ふわりと髪の上に載せるが、）へんね、よさう。（と、すぐまた取る。）何しようかな。あたしも、なんか働くことないかな。

みつ。お姉さんは、まア、そこに坐つてらつしやればいゝわ。

とき。よし！（と、男のやうな調子で、）久振りで、ひとつ、背なかの上に乗つかつてやらうかな。

みつの肩に兩手を置き、ぴよいと飛びあがつて背なかの上に坐る。

みつ。（上體をぐらつかせながら、）いやよ！　苦しいから降りてよ！

とき。（降りて、鼻を突き合せんばかりに坐る）一體、君は、なんで來たんだい？

みつ。どこに？

とき。こゝにさ。

みつ。電車で來たわ。

とき。それにしちア早かつたね。

みつ。お姉さんが出かけると、ほんの一足違ひだつたんですつて。

とき。こつちから自動車を迎ひにやれば、その間に電車で來る、さういふ間抜なんだから……。

みつ。だつて、仕様がないぢアないの。

とき。さうさ。これぱかりは、焼き直さなけれア仕樣がないさ。
みつ。なんだか、とても御機嫌なのね。どうしたの?
とき。どうもしやしないよ。

　　ふと、同じことに關する考へが、二人の胸へ落ちかゝつたやうな間。
　　どこからともなく、櫻の落葉が庭先へ舞ひ込んで來る。

みつ。だけど、ずいぶんだしぬけで、あたし吃驚しちやつたわ。
とき。(心持は違つて來てゐるが、なほ冗談の調子を捨てない。)いゝぢやアないか。
みつ。それア、いづれ姉さんのこつたから、何遍も何遍も、よウく考へた擧句のことだらうとは思ふけれど……。
とき。それアさうさ。
みつ。いゝえ、眞面目にさ、……表町さんだつて、あんないゝ方なんだし、それに、なんてつたつて、十年近くもお世話になつて來て……。
とき。(なほ冗談句調で、)あたしはね、あなたより餘計お正月をして來てゐるんですよウ。
みつ　それアさうにきまつてるけど、うちのだつて、ずいぶんに心配してたわ。いきなり電話で、明日引起すの、表町さんとはもうなんでもなくなつちやつたのつて、何も彼も一緒こたなんですもの。
とき。(やつと少し眞面目になつて、)さうさ。またそのとほりなんだもの。
みつ。(云ひ憎いのを、一生懸命に、姐さん被りを取つたりしながら、)それアね、あたしもね、お姉さんのことで、ちよつと聞いてないわけでもないのよ。だから、なにか事が起らなきやアいゝがと思つて、蔭ながら……。
とき。(急に、むきになつて慍る。)生意氣いふのね、あんたは! 何が蔭ながらよ! 蔭ながらなんてことは、目上の人

が、心持にうんと餘裕があつて、どうもあれにも困つたものだけれど、云へば云ふでどうだとかかうだとかツて、やうな時に……」

みつ。いゝえ、お姉さん、あたし、決してそんな……。

とき。ぢア、はつきり仰有いなね。あたしが、間島さんを好きンなつて、表町の方を斷つたことが、つまりあんた方の氣に入らないつて云ふのね？

みつ。氣に入るも入らないも……。

とき。そんならどうだつて云ふのよ！

みつ。間島さんて方がどんな方なんだか、それアあたしたちは知りませんよ。ですけど、表町さんの方なら、永い間、それアもウほんとに、はたで見てさへ羨しいほど、何から何まで氣もおつきなさるし……。

とき。知らないことに、なんだつてそんな、餘計な口出しをするの！

みつ。（怨めしげにときを見詰める）

とき。あたしはあんたの姉さんよ！

みつ。（一生懸命涙を抑えて、）ですから、そのたつた一人のお姉さんが……。

とき。あたしの行末が案じられるつて云ふの？　え？　妹のあんたが……？

みつ。さうあんたみたいに、何もかも姉さん姉さんで……。

とき。えゝ、云ふわよ！

みつ。あたしばかりぢアないわ。うちのだつて、叔母さんだつて……。

とき。うるさいのね！　そんな人たちが、何人よつてたかつてかゝつて來ようと、ちつとも、びくともするんぢアないけ

ど……。ほんとにうるさい人たちつたらないわ！

みつ、先頃から、だん／＼片づけものゝ手附が荒つぽくなつて來、その時、机の抽斗を取り落す、帳面、書簡箋その他いろ／＼飛んで出る。「あら」と、低聲に呟き、拾ひ込むうちに、小紙片を取りあげ、讀む。

とき。なに？（と、覗き込む。）

みつ。まア！ 表町さん、あんまりお氣の毒だわ！

とき。なによウ！（ひつたくつて見る。吃驚する。）あら、なアに？ これは。

みつ。三千圓の小切手よ……。

とき。まア、いつの間にこんなもの……。（と、當時を追懷する眼差。）

みつ。知らなかつたの？

とき。あたりまへぢアないの！ あんたは、へえ、さようですかつて、あたしがこれを受け取つといたと思ふの？

みつ。さう、知らなかつたかの！ ぢア、姉さんが階下イでも行つてる間に、そうツと入れてお歸ンなすつたんだわね。

とき。さうなんでせうね。（有聲に少し潤れて、）まア、ちつとも氣がつかなかつたわ。

みつ。姉さん、だから、あんた、悪いこと云はないから、もう一度考へ直してみたらどう？ それアね、御夫婦の間にだつて、時にやア喧嘩といふこともあるんだし、今度のことなんぞまつたく一時の氣迷ひだと思ふわ。つまり、脚がさしたとでもいふんでせうか……。ですから、あたし、もう一度お姉さんの方からあやまつて行つて……。もしなんなら、うちのなり、あたしなり、喜んでお使ひに行くわ。さうすれば、――まだ今のうちなら、世間にはあツとしたつてわけぢアないんだから、表町さんだつて、どんなにお喜びなさるかわからないし、あたしたちの顏も立つわけですからね。ね？ さうなさいよ、ね？ お姉さん！

とき。（ちつと空に眼を据えたまゝ。）あんたは、こんなことよく知つてゐるけれど、一體この小切手つてものは、たゞ取つた方で銀行に出しにさへ行かなけれア、お金はもと〳〵どほりその人のもんでゐるんでせうね？

みつ。えゝ、それアそうよ。

とき。（シュッ〳〵と、惜げもなく小切手を破り捨てる。）

みつ。あら！　姉さん！　あんたつて人はまア……。

とき。（手を出さうとするのを、すばやく、くる〳〵ッと掌の平に丸めて、庭に捨てる。）

みつ。何が氣に入らなくつて、そんな面當がましいことをするの？　實際、あんたつて人の我が儘にも呆れるわね！　ほんと云へば、うちのだつて、叔母さんだつてさう云つてるわ、今度のことばかりは、いくら贔屓目に見やうとしたつて、どこまでもお姉さんがよくないつて。大不贊成よ！　それアあたしは、お姉さんの氣持だつて、薩張わからないわけぢアなし、さう一概にも云へないと思つてるんだけれど、……間に立つて、ほんとに困つちまふわ！

とき。さう、それア惡かつたわね。あたしが困るのは、いくら困つたつて、これア自業自得で仕様がないけれど、あたしのために、あんたを困らしちア氣の毒だわ。だからもう決して間になんぞ立たないで頂戴！　夫婦ときようだいの間ですれば、それア無論御亭主の方につくのがあたりまへなんだから、いつでも相原さんと一緒になつて、あたしの惡口を云つてれアいゝぢアありませんか。なまじつか、間になんぞ立つて、困られたりしちア、却つてこつちが迷惑するわ！　お嫁に行つたからには、なんでも女は、御亭主にさへついてれアいゝんだから。

みつ。また始つた……。

とき。また始つたつて、さうぢやないの。それア、あたしも間抜なのよ。あんたを妹だと思へばこそ、あたしの嬉しいことなら、なんによらず、あんたにも喜んで貰へるものとばかり思ひ込んで、自惚きつたのが大間違だつたのよ。だ

けど、もう今日（けふ）といふ今日は目が醒めたわ。今後は、あたしの方でも、決してそんな馬鹿げた夢はみないから、あんたの方でも、どこまでも他人のつもりでゐて頂戴！　他人なら、何としようと、別段あんた方の顔にかゝはることもないんだから、あんた方（はう）の方でも氣が樂だらうし、あたしだつて、のう〳〵としたもんだわ！

みつ。姉さん！　あんたそんなこと云ふもんぢアないわよ！　ですから、あたしは、姉さんの氣持だつて解つてる……。

とき。いゝえ、解る筈ないわ！　だつて、あんたなんぞに、ひと言だつて相談した覺えもないし、惚氣（のろけ）一つ聞かせたことはないつもりよ。それが解つたら大へんだわ！

みつ。だつて、それア、いくらあたしが馬鹿だつて、少しは解りますわ。先刻（さつき）あたしが來た時みたいな、あんな御機嫌のいゝ姉さん、あたし始（はじ）めてよ。そんなにまで喜んでなさるのかと思つて、それアあたしだつて、ずゐぶん嬉しかつたんだけれど……。

とき。（ぐいと胸にはこたえるが、どこまでも意地を強く。）それアあたしが馬鹿だからよ。くだらないことに、子供みたいに嬉しがつたりして、ほんとにみつともないわね。

表通に、自動車のとまつたらしい響。

みつ。（急き込んで。）姉さん！　あたしが悪かつたんだから、かんにんしてね？

とき。とんでもない！　あんたの云ふことは一々尤よ。ひとつも間違つてやしないわ！

みつ。そんなこと云はないで……。ほんとにあたし、生意氣ばかりいつて……。

とき。兎に角、あたしは、今日限り姉なんぞないつもりで暮すわ。親もなし、きようだいもなし……、その方がよつぽどさば〳〵していゝことよ！

と、立ちあがる時、きよ、ます、常吉、小僧、先刻のとは別の運轉手、ガヤ〳〵と荷を運び込んで來る。とき、玄關に出て、さも快

満げに、（と云ふことは、先刻の心からの快濶に從はれて、）一同を勞ふ。

とき。すつかり片付きつた？

常吉。へえ、まアどうやらかうやら。

とき。そイで、お前たちも（と、女中たちに）みんな一緒に荷物のてつぺんにとまつて來たの？

きよ。いゝえ、わたしどもは、一足先に出まして、電車で參りましたんですけれど、丁度その円角のところで、彼方から來る自動車が見えましたもんですから……。

とき。あゝ、さう！　それア丁度よかつたわね。

この間に、みつは、大急ぎで涙を拭きとり、ちよつと鏡を覗いてみたりして、家のなかにどや〳〵と女中たちがあがり込んで來ると同時に、急に鏡台を隅の方へ持つて行くなど、さも忙しく働いてゐるやうに見せる。男たちは、玄關や縁先へ、どん〳〵荷物を持ち込んで來る。小僧は、ときの前に、ピヨコリと頭をさげる。

とき。あゝ、どうも御苦勞樣！　わからないことは、みんなに訊いてね……。

以下、あつちこつちで、騒然と捨台詞を云ひ合ひ、立ち働く。

例へば、女中、『旦那樣、これは……？』とき、『なアに、それ？』女中、『お掛軸ばかり一緒になつて居りますんですが……』とき、『あ、さう。ぢア、二階だわ』或はまた、とき、女中に、『お前たちのものは、なんでもいゝから、ひとまづ二階に抛り込んどいてね、あとでゆつくりほどきなさいよ』或はまた、とき、常吉に、『お前さん。あとで手がすいたら、臺所に棚を吊つてやつておくれよ。板が足りなかつたら、どつか近所で買つて來てね』常吉、『へえ、畏りました』或はまた、水口に半身を見せる御用聞きと、女中のやりとり、『ええゝ、三河屋でございますが、お米、味噌、醤油、お酒の御用、罐詰類もございますから……』女中、『今まだ取り込んでますからねいづれ落ちついてからゆつくり……』等々。

二階、階下、水口、玄關、縁先、あつちでもこつちでも、主にときを中心にして、捨台詞が重り合ひ、やゝ暫く騒がしく續くなか

に、みつ一人が、仲間はづれのやうな態にて、まごついてゐる。たま〳〵ときと摺れ違ひざまに、「姉さん、これは……」などと、手に持つたものに就いて、何か訊かうとするが、ときの方では、素ッ氣なくひつぱづして、ほかの者にばかり口を利く。

きよ。（臺所から。）奥様、お茶をお淹れなさらなかつたんですか？

とき。あゝ、どこにお茶があるんだか、……めんどくさかつたから。

きよ。あら、よくお湯が沸いて居りましたのに……。

とき。さうお。たくさん沸しといておくれよ。もう少ししたらおやつにするからね。……そイから、先刻たのんどいたあれ、買つて來てくれたでせうね。

きよ。は。往き道に、自動車で乗りつけたもんですから、あすこの人が、驚いて居ましたわ。

とき。序に、常公と一緒に、二つ三つつまんで來たんぢやアないの？

きよ。あら、奥様……。（笑ふ）

みつ。（そばへよつて來て、庭を指し。）姉さん、あれ、あんなことしといていゝの？

とき、見向きもしずに臺所の方へ去る。みつ、涙ぐみ庭へおり、先刻ときが投げ捨てた小切手を拾ひあげ、更に細に千切り、塀のそとに擲らうとしてよし、うちへあがつて臺所の方へ行く。とき、そこから出て來る。

みつ。（ちよつと掌の平を開いてみせて。）燃しちやつた方がいゝでせう？

とき、すまして八疊の方へ行く。みつ、一旦臺所へはいり、出て來ると抑えがたき涙を、人目のない二階へ持つてあがる。

この間にも、他の者の捨臺詞は、依然綾を織るが如くなるべし。

みつ、二階座敷の眞中に、ぺたんと坐つて泣く。

これより、ときは、平氣を裝ひながらも、時々二階を氣にするこなし。

とき。(ますに、)これ、二階だよ。どこの隅でもいいから、置いて、すぐおりといでよ。

ます、文机のやうなものを二階へ持つてあがる。

みつ。(泣顔を反けて立ち、)なアに？

ます。いゝえ。(と、そこらに置いてすぐおりる。)

とき。ますウ！

ます。はい。(と、そばへよる。)

とき。(背を向けたまゝ低聲に、)相原さんの奥さん、二階にいらつしたかい？

ます。はア。

とき。何してたこと？

ます。えゝ、(困つたやうな笑ひ顔で、)わたくし、すぐおりて参りましたから……。もう一度行つて、見て参りませうか。

とき。馬鹿！ いゝんだよ。

常吉。(庭先から、)荷はすつかりもうおろしましたが、トラック、歸つて貰つてよろしいんでせうか。

とき。あゝ、ちよつと待つて！ (と、帯の間から銀貨入を出し、若干か常吉に渡して、)お帳面になつてるんだからね、これは御祝儀だけです、つてさう云つて、歸しツ頂戴！

常吉。へ、畏りました。(と、去る。)

とき。(臺所に向つて、やゝ大聲に、)きよウ！荷がすつかり運び込めたつて云ふから、おやつにしようぢやないの。お湯も出來てるんでせう？

きよ。は。よろしうございます。

人々、よろしく捨臺詞にて、八疊の荷を隅に片よせ、眞中を開いて席を設ける。茶道具、皿、折詰の鮓などが運ばれる。みつの持つて來た菓子箱は、ときが自分でそこへ持ち出す。

この間に、二階では、い〻氣持に涙を出したあとのぽかんとした眼つきで、秋晴の空を眺めやつてゐる。スー〳〵と、赤蜻蛉が椽を掠め、柱をよぎつて飛び交はす。

階下では、おやつの支度が出來、常吉や小僧も、呼ばれて、そとでぽん〳〵と着たものをはたいたりしてから、のこ〳〵あがつて來る。

ます。（ときのそばに來て、）相原さんの奥様をお呼びして參りませうか。

とき。（鮓を皿に取り分けながら、）あ〻。

ます、立つて行かうとする。

とき。あ〻、ちよいと！　い〻よ〳〵。今、あたしが行くから。（常吉たちに、）あんた方、さぞお腹がすいたでせう？　なんでもいいものを、勝手にとつて食べツ頂戴ね。

常吉。へ。どうも御馳走様です。

とき、皿や箸を二人の前に置き、忙しく身を起して二階へあがつて行く。

この間に、みつは、欄干にとまつた一匹の赤蜻蛉を見詰めてゐるが、やがてぬき足さし足よつて行き、捉へにか〻る。その指先と蜻蛉とが、五寸くらゐの近さに迫つた時、ときが階段をあがりきる。

とき。みつちやん！（何氣なく呼ぶ。）

みつ、振り向き、聲をたてるな、といふこなし。ときも、身を竦めてそつと近より、低聲に、

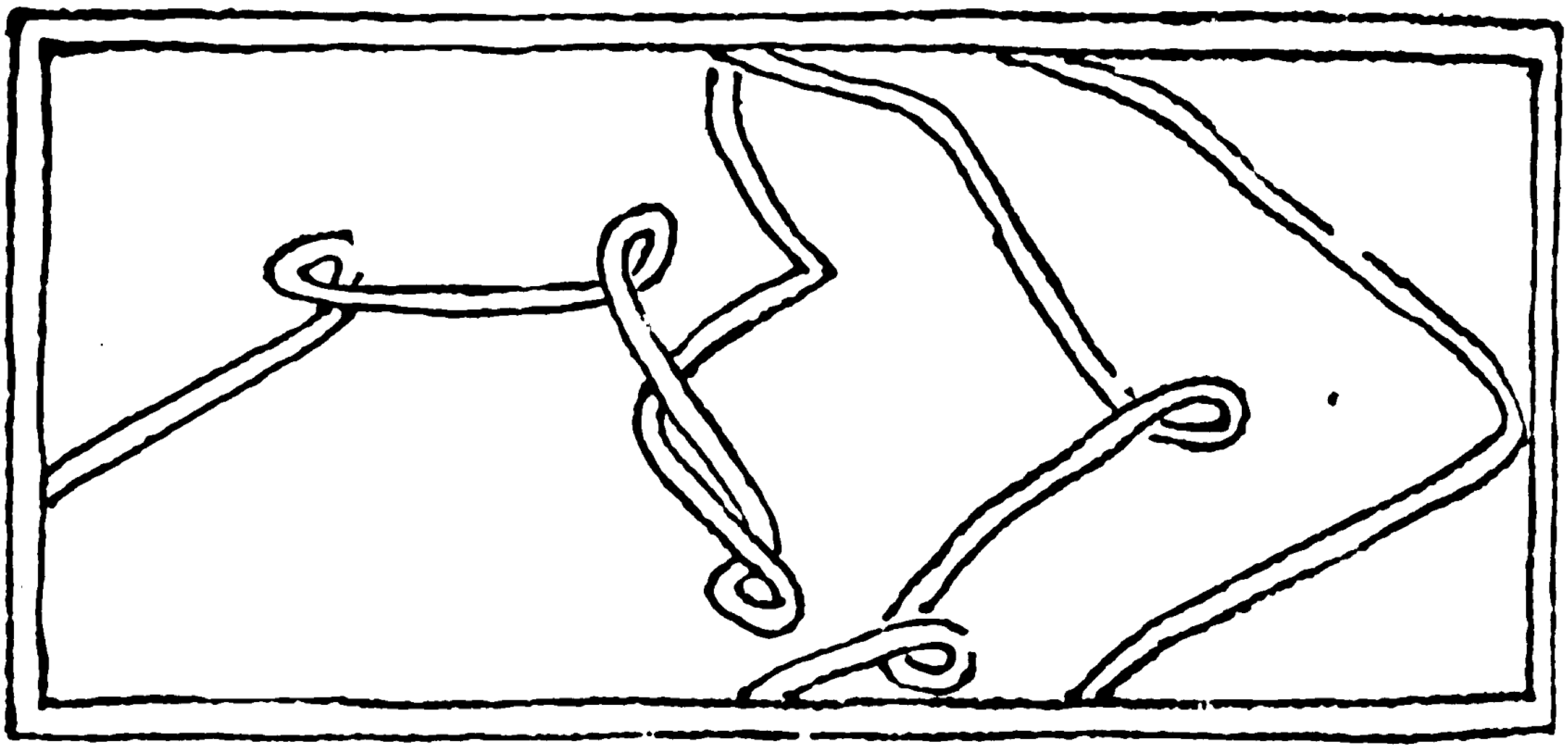
とき。なアに？

みつ、左はうしろに廻して、靜に、靜に、といふ手つきをしながら、右で、すばやく赤蜻蛉を捉へる。

みつ。つかまイた！
とき。なアにイ？
みつ。蜻蛉よ！　赤蜻蛉よ！
とき。つかまイたの？
みつ。つかまイたわ！（羽根を指の間に挾んで、相手の鼻の先に突き出す。）
とき。あら、うまいわね！
みつ。赤くつて、姉さんが好きさうね。
とき。あら、いゝわねえ。
みつ。糸、ないかしら。
とき。あるわ。（階下へ向いて、大聲に、）ますゥ！　糸もつといで！
ます。（階段のあがり口に駈けよりながら、）はア？　なんでございます。
とき。糸！　糸！　白でも黒でも、木綿でも絹でもなんでもいゝわ。
ます。はい！　（と、とつて返し、そこらまご〱して歩きながら、）おきよさん！　あんた、針箱知らない？　針箱！
きよ。（用をしながら、）さア……。
とき。（二階から、）なんでもいゝんだから早くさ！　針箱がめつからなきやア、……あゝ、今のお餅の折が結いてあつた紐でもいゝわよ！
ます。はアい！
急ぎそれを持つて二階にあがる。とき、それをうけ取ると性急に、シウ〱とそのひら紐を裂き、二三本繋ぎ合せる。みつ、その

先をくつて、赤蜻蛉の肩に縛りつけ、手をはなす。
とき。待つてよ！
と云ふ時は、自分の手元から糸が伸びて、蜻蛉はあちこちへ飛び廻つてゐる。
とき。（喜び勇んで）あら！　飛んでるわ！
みつ、目のなか一杯に涙をため、下唇を噛んで、その様子を見詰めてゐる。
ます。あら、ずゐぶん元氣がよろしいんでございますね。
と、これは蜻蛉の動きに見惚れる。ときは、子供のやうに、無邪氣に嬉しがる。
階下の男たちは、茶を飲んでゐる。夕日の影あか〳〵と、靜に、

——幕——



晩唱

宇野千代

私は、癖のやうに、故郷へ歸らうかと思ふ。さう思ふことが續くと、その夜にも支度をして、ほんたうに歸つて了ふ。さうして、私は、この夜遲くひとりで故郷の小さな停車場におり立つた。

ひとが、知らぬ他國へ出てその故郷へ歸らうと思ふときは、ひどく仕合せなときか、またはひどく不仕合せなときかである。ひどく仕合せなときは、何か心がおごつてゐて、そのおごりを人に示したく、またひどく不仕合せなときは、その不仕合せを人に隱れてひとり堪へ忍ぶだけの勇氣さへもたくなつて、くたくたにへたばる。そして、何かほんの藁しべほどの援けにも取り縋りたいやうなひ弱い心から、その生れ故郷へ、足をひき摺り乍ら歸つて行くのだ。不仕合せなときには、人の心を疑ふほどの氣力さへもなくなるのだ。――だが、私のことはこの二つの場合のど

ちらでもない。では、如何して歸つて來たのだらう。斯うして、誰に知らせることもなく歸つて來ると、この小さな、暗い停車場の何とがらんとして見えることだらう。私は、歸つて來なかつた方が宜かつたやうにも思ふ。この感情はどこにひそみ隱れて居たのか。ひどくおちぶれて歸つて來た旅人のやうな哀愁が私の心を掠めるのを感じる。私は誰にもめつかつては不可ないやうに思ふ。さうだ。お前は、十年前、この停車場から逃げるやうにして姿を隱したあの同じ女ではないのか。誰もあのことを忘れて居はしないぞ。第一お前自身がそんなにもよく覺えて居る。お前はそのことで、ただそのことだけで、こんな夜更けにひとり歸つて來たのではないのか。さうだつた。お前はそれを訊かなくてはならない。あの男を殺さうとまでしたあのお前の情熱が、如何してあんなにも空しく報いられたままに終つたのかそれを訊かなくてはならない。では、お前は、あの男に逢ふのだな。逢ひに戻つて來たのだな。――さうだらうか。おお、馬鹿な。そんな馬鹿なことを思ふのも、この、停車場といふ、人間を一人づつ一人づつしか通さない改札口といふものを持つてゐるこんな格好をした建物から來る、ただの錯覺なのさ。ここではどんな人間でも一ぺんはそんな氣になるものなのさ。私は自分を慰め乍ら、小さなバスケットを提げてその改札口を通り過ぎる。切符をうけとる男が顏を見る。知らない。故郷を留守にして居る間に、私は全くの旅人になつて了つてゐる。

翌くる朝、私は自分の生れた家の暗い蒲團の中で遲くなつて眼を醒した。母は仕事に行き弟は學校へ行つて留守番の犬ばかりながながと寢そべつてゐる裏座敷の椽側に坐つて、そこからは花の咲いた蜜柑畑を距てて遙かな竹藪とそれに續く廣い田圃と、その向ふを村境の峠の方へ續いてゐる石垣で積み上げた白い、高い堤の、まるで芝居の花道のやうに浮んで見える遠景に、十一時か十二時か午近いころと見えて、峠の上の茶店まで茶を買ひに馳けて行く煮賣りの女たちの、五人七人と連れ立つて影人形の絵のやうに足を揃へて忙しない姿まで、まるで、そつくりと十年前のそのままなのを飽くともなく見詰めてゐると、私の眼は次第に昔へ戻つて來る。ここでは少しも時が經つてゐないその感じが、何の不思議もなく私の頭に浸

みーごな。私はいまにも走り上つて、この[illegible]化粧をして、それから長い橋を渡いて、ここからは川向ひになる長野村の板橋の方へ歩いて行きさうな氣がし[illegible]。この橋の直ぐ側には、ほんの腹つばほどの運動場とその運動場の片隅の機械體操と、それから長野村立尋常小學校と書いた木札とが[illegible]の小學校があつて、しかし私は、ほんの女學校を出たばかりの十七にもなるかならずの頃だつた。その學校で、玩具のやうな先生になつてゐたことがある。その一年間の習慣が、強く私を支配する、行くまいと思つてもやつぱり私は行つて了ひさうな氣がするのだ。やつぱり髮を梳かさう。それから念入に化粧をしよう。私には如何もつい昨日あつたことのやうな氣がして、その昨日の今日だもの、やつぱりあのお寺のやうな學校へ一寸行つて見たいのだ。ふいと見ると昔にたがはず、軒下の土竈には、もはや火も消えてもえさかり許になつてゐるけれども微かな湯氣が立つて一ぱいの湯が掛けてある。古バケツに古雨の蓋をして、母が仕事に出るまへに掛けておいて呉れたのだ。あのころから念入りなお洒落の好きな私であつた。長い間熱いタオルで顔を蒸して、それからゆつくりと、まるで絵をかくやうにゆつくりと化粧に變身をやつす癖があつたので、それを母が心配して、ねえお前、自分で鏡を見るのだから見えぬことはあるまいのに、それではあんまり先生らしうないぞ。子供を教へる先生ではないか。もの分りのよいお前にも似合はぬ。つい上つらのことしか見ない世間のことだから、ひよいとそんなお前のことを身持のよくない娘のやうに言ひ觸らさないものでもないぞ。とそんなことでも言ひたさうないつまでも土間の框に腰かけ一私の様子を見守つてゐたこともあつたけれど、私には生みの親ではないこの若い母はそれさへも思ひ切つて言つたことはなく、同じやうに毎朝毎朝、このお洒落娘のつかふ湯を沸かして呉れた。この習慣がいまの母にも残つたのだ。長い風雨の山で土竈の傾れには、ころあひのベンガラ石が立てかけてあり乍ら、それでもぬつくりと沸いてゐる。私は顔を洗つた。暗い箱の底から、鏡はやや若くない私の顔が私を見る。私もその顔をじつと見る。――いつの頃からか私は私の顔が若くたいことを知り始めた。

この感じを私は強める。自分の若くないことは私を落付かせる。私は色戀の世界から離れて、自分の坐るところへ坐らなければならぬ。また坐れると思ふ。この感じは、たやすく、老をたのしむかたちに變ることも出來る。或るときのことであつたが、私は一枚の黒塗の盆を拭いてゐて、何心なくその盆の面にうつつた自分の顔を見た。それは陰ばかりのやうに一面にくろずんで、ほんとうにさうであるよりもなほ老つた顔であつた。これは面白い。私はそれからの暫くの間、この黒塗りの盆のやうな滑らかな光澤のある黒い平面、古い家の太い柱や扉や、それから底知れない淵や、それからひよいと通りすがつた自動車の、車體に塗つたエナメルや、そんなものの上に映し出された自分の顔を見る、これを一つの遊戯にすることを思ひついた。このどす黒い面のやうな、何となく誇張された陰慘な顏の中には、逃れようのない老衰の感じがこびりついてゐるではないか。もう少し年をとるとこれと同じ顔になる。自分はさう思ふ。すると、自分の心は老衰の隣にゐて、落付いた馴々しさを感じるやうな氣がする。はじめは態とさうしてゐたが次第に習慣になつて、後には、ひよいと映る。これはおばあさんになつた自分だな、とさう思ふ。その觀念が直ぐに來た。（これは絶えず浮はついてばかりゐる自分を制へつけるための役に立つ。）いま、この古里の古鏡のところどころ水銀も剝げおちてさだかに見えぬその仄暗さにうかび出た我が顔が、ふいに私を呼び醒した。これがお前だ。――子供のころのお祭に五厘投げては覗いて見たあの覗き眼鏡を思ひ出す。ひよいとその覗き口から離れた瞬間の、思ひきや、コロタイプ版の空の色ははつと眼鏡をはなれると、眼鏡のそとに屋台の上にお祭の上に、青々と擴がつてゐる。ああ、これがほんたうの空だつた。私は愕然と見る。そのやうな眼の醒め方で、私は現實へ戻つて來る。ではお前は、長野村へは行かないのかえ。お前のあの學校へ行つて見ることは止めたのかえ。――

その學校の前には私の伯母のひとりが連れ合と死に別れほそぼそと學用品の商ひをしてゐるのだが、その伯母さんにも逢ひたいし、それに、――と、私はうかうかと何時の間にか新しい足袋を穿き財布も帶の間に挾んで、私が行つて了つたなら犬ひとりになるこの家の雨戸をがらがらと繰り乍ら、それに、自分ひとりの心では、いはばあそこは古戰場のやうな

ものさ。あんなことがあつたあとで、また一廻り[illegible]が廻つて、何事もなく[illegible]いてゐる、あの同じ場所をもう一度見たいと言ふ欲望をむきになつて制へないでもよいではないか。前の氣持の反動で、何となく私は不貞腐れて考へた。若しひよいと、途中であのことを知つてゐる昔の誰かと逢つたとしても、向ふの勝手に思ひたいやうに思はせておくことさ。そんなことなぞ、こつちではまるで心にもかけてゐない。その心にもかけてゐない有様を人に知らせて遣るためにもちよいと行つて見たいのだ。起ち上つて私は、母が仕事から戻つて來たとき直ぐにもそれと分るやうに上り框へ石ころのおもしをして、それを書いた紙切をおいた。長野の伯母さんの家へ行つて來ます。泊らないで歸る積りですが、おさきへ休んでゐて下さい。——

秋の鰯の上つたばかりでふうんと一面に潮の匂の立ち上るやうな、何となく昂騰してゐるやうな感じの町の中を、眞麻の袖なし襦袢を着た仲買の男が幾人となく、大きな秤を持つて行つたり來たりする。私は日傘を傾けては通り過ぎる。まるで、昔と變らぬ町の、それから私の光景である。

この町の外れまで來ると、があらんがあらんと仰山な、客を呼ぶ電車の鈴を聞いて、私は狼狽てて駈け出した。（この故里の電車の何といふ小さいこと。この町から向ふの村までほんの一里足らずのみちのりを、三十分おきくらゐに一ぺんづつ出るのだけれど、出るたびにまるで港を出て行く汽船のやうにあの仰山な鈴を鳴らすのだけれど、もしあの鈴が鳴らなかつたなら、何時出るのか氣の知れないこの氣儘な電車に乗ることを諦めて、どんな人でもすたすたと歩き出すに違ひない。時間の都合の悪いときには、歩く方が早いのだ。）新しいボタンをつけた若い車掌が一人、車の後から前へと古ぼけた救助網を運び乍ら、私の方へ、それからもう一人私の後から黒い洋傘を杖にして腰を振り振り走つて來たお婆さんの方へ、ちらりともの馴れた憐れみの微笑を投げた。それから、もう一度運轉台の床にある呼鈴を乱暴に踏み鳴らした。があらん、があらん。私は呼吸ぎれのするのを感じ乍ら低い踏台を這ひ上つた。電車は動き出した。見るともなく、私は窓か

ら顔を出して、この電車はどんな道を走つてゐるのかと言ふやうに見る。軌道はあんまり上等ではないと見えて、ときどき車が跳び上る。不覺にもそのたびに、私は私の腰の下の固い鐵板のやうなクションに體を打ちつけて、またがくんと跳び上つた。小窓のそとの風景も私の體と一緒に跳び上る。まるで、波乘りのやうだな、と私は思ふ。東京の家にゐたときは、私はよく隣りの子供を連れて玉川の遊園地へ遊びに行つたつけが、が、うーう、が、うーうと音を立てては急坂をかけ下りる、それからじきに、うーうとのろくなりいまにも止りさうになる、あの遊園地の波のりの電車のことを思ひ出し乍ら、それとも、これは馬車かな、私はまたさう思ふ。この固いクションも、塗り替へたての安ペンキのま靑さも、それからこの小窓のうち側にひらひらする色褪せたポプリンのカアテンも、この車の中の有樣はまるでそつくり馬車ではないか。私の坐つてゐるところからは、運轉手の圓い背中と頭とだけが見える。その帽子の下の兩側にちよこなんと坐つてゐる二つの小さな耳は、陽をうけてあかあかと、世にも鮮やかな血色に透けて見え乍ら、その耳をそのまま、少しも動かすこともなくて、絕えず後の若い車掌へ話しかける。多愛もない世間話を話しかける。その合ひ間合ひ間には、道ばたに遊んでゐる子供をどなりつけ、行き違ふ荷車に聲をかける。まるでそつくり、あの怠け者の御者ではないか。——すると私は、自分はいま、その馬車に乘つてどこか見知らぬ街道を行くところだと思ひ始める。私の向ひ側の、こつくりこつくりと車の微動に任せ乍ら居眠りをしてゐるお婆さんまで、何とそれらしい道連れでさへあることか。ときどき、ほんの一町ばかりさきのところに、小さな田甫の畦道と交つて、板切などの列べてある玩具のやうな踏切が見える。そんなところからは、きまつて、子供が、それから大人が、お爺さんが、電車の通り過ぎるのを待つと言ふよりもそれの來るのを迎へるやうに、一心な、幼い視線をおくつてよこすので、（いまだにそれらの表情は、この車が、始めてこの町を通り拔けたときの、强い印象からいくらも離れてはゐないのだ。）私はまた、ああ、あそこがこの馬車の立場だなと思ふ。あの人たちは乘るのだ。さう思ふ。——誰かがこちらへ向いて手を上げた。合圖なのだなと思ふ。これと同じ光景を私はどんなによく覺

えてゐることだらう。さうだ。あそこに立つてゐるのは、あの男だ。あの小さな、七つか八つにしか見えない一人の子供は、あの男の子供なのだ。私の知らない十年の間に、私の知らないどこかの女に生ませた子供なのだ。私は、わざとさう思ひ拵へて、じつと見る。すると、——だが、この感じは、誰にでもあることに違ひない。いつだつたか私は、そつくりこんな小說を書いたことがあつたのだ。それはどこの町のことだか知らない。私は、とある町へ通じるとある街道で、と書き始めた。その街道を古ぼけた一台の馬車が通つてゐるのだ。その馬車の中には、幾年振りかでその町へ歸つて來た私が乘つてゐる。馬車が搖れる。田甫も丘も搖れる。遠い道端に、洋服を着た一人の男とその子供が二人、立つて馬車を待つてゐるのが見える。その男は手を上げた。馬車が停つた。男はその子供を一人づつ抱きかかへて馬車の中へ入れた。背の高い男であつた。馬車の屋根におさへられて蝦のやうに脊を曲げてゐる樣子や、その洋服の色褪せた袖先や、絶えずその子供らに向けられてゐる喩へようもない溫顏や、それらのためにその男の風貌は五十を過ぎてゐるくらゐに爺むさくすんで見えるけれども、その蒼白い顏の半ばをおほうてゐる濃い鬚を除いたならば、思ひもかけず忘れられた青春の面影が現はれるであらうやうなそんな男なのかも知れない。見るともなく私の視線は、その男の橫顏から肩を辿ひ、手を流れた。狹い馬車の中を、子供らには席を得させ、さて己れはどこへ腰を下したものであらうと言ふやうに、その蝦のやうな背中のままゆるく輪を描いて見廻し乍ら、やがて、くるりと私の前へ腰を下した。——あの男だ。一瞬間、その男の凝め中に埋れた西洋人のそれのやうに切れの長い赤い大きな眸から、惧れるもののやうに私は眼を外した。すると私の眼は、その手が、長いうす赫い毛におほはれた、或る力を感じさせる大きな、吸盤のやうな手が、子供の肩に置かれてあるのを見た。あの手だ。蛙のやうに蒲團の上に腹這ひ乍ら、さて眠らうとして、ゆつくりと眼鏡を外した、あの、私の知つてゐる手だ。あの手頸の蔭に隱れて見える、いまは光さへさだかでないあのカフスボタンが、もしやひよつとこの私から贈つたあの同じカフスボタンではないと如何して言へよう。——

だが、これは私の書いた愚かな小說の一節に過ぎない。それだのに私は、何時の間にか、ほんたうにそれがあつたよりもはつきりと私の頭に刻みつけて了つたのだ。私はその街道を知つてゐるやうに思ふ。そしてほんとうにあの男に逢つたやうに思ふ。それはあり得ないことではないのだ。あの男を見なくなつてからの久しい月日の間に、私はあの男がどこでどんな風にして暮すやうになつたのか、それについては露ほども知つては居ないのに、それだのに、あの男には二人の子供があると思つてゐる。そして、あの男はもうすつかり老いぼれて了つて、さうだ、あの空想の馬車の中で私の前へゆつくりと坐つて了つて、さてそれからやうやくに私がそれと氣附いたほど變り果てて了つてゐると思つてゐる。「お父さん。しやつぽをぬいでもいいかえ。」と小さい方の子供が言つた。あの男は限りないその溫顏を動かして懶うさうにうなづいた。それから、仰向けに頭を後の窓枠にもたせかけ、靜かに眼を閉ぢた。淺い眠りを眠り始めた。――私はさう書いたのだ。おしまひまで、あの男は私を見分けようとはしなかつた。さう書いたのだ。それは私の眼に映つたあの男がさうであつたよりも以上に、私の姿が變り果てて了つたためであるか、或ひは私の、この記憶に對する安つぽい感傷に比べて、あの男のそれは、遠く遠くあとかたもなく生活の波に押し流されて了つたほどに遠いものになつて了つてゐる、そのためなのか私には分らない。私はさう書いた。私の空想に浮んで來るこの邂逅の中の後日物語では、決して、二人は泣いたり笑つたりそれから何か感動的な恐るべき言葉を投げ合つたりはしなかつた。私の空想はぽきりとここで折れたのだ。――

その、小說には避けて書くことのなかつた最も小說的な一つの場面を、――と、私は、長い長い愚かな私の妄想から醒め乍ら考へた。――最も小說的な一つの場面を、私はいま、この馬車のやうな、それはそつくりそのまま馬車のやうなこの故鄉の電車の中で始めようとしてゐるかも知れないぞ、小說に書いたそのあとから、そつくりそのままのことが追ひかける。これは、なささうなことに見えてありさうなことなのだ。小說と現實とがそつくり重なる。――とは言へ私は、この半ば遊戲に過ぎない妄想をさう澤山は信じてゐなかつた。それはふいに私を襲ひ、またふいに消えたと言つても

よい。私達のきたこの車が私の空想よりものろく、うーう、うーうと弱い音を立てて古ぼけた體をひき摺り乍ら近づいてこの踏切をのりこえて、そこに立つて私たちの近附くのを待つてゐたやうに見える男も子供もお爺さんも、みんな後へ消えて見えなくなつて了つたとき、私は、うふう、と一つ大きな呼吸をした。何となく、ざまあ見ろ、と言ふやうな亂暴な言葉が言ひたかつたのだ。それは、こんな馬鹿げたことを考へる自分にか、或ひはいま後へ消えてなくつた男や子供たちへか知らない。何しろ、さうやすやすと驚天動地なことがあるものではないのだ。現實はいつでもしつかりと地についてゐる。さあお前も、この固いクションにしつかりと腰を下して——と、私は何もかも、この電車も故郷といふものも私の妄想も私の歸郷も、それから私自身をも一緒くたに馬鹿にしたいやうな氣になつて、何かそれらのことについての考へから逃れるもののやうに眼を閉ぢた。遠い水車のやうな音が聽える。へぶう、ごう。機械の革の廻る音だ。發電所だな、と私は思ふ。（あそこで電氣をつくつてゐるのだ。まるで、蓄電池みたいな可愛いい發電所なのだけれども。）私の眼の中に、そこの堆く積み上げられた石炭の山が見える。その陰から、（山の片側はシャベルですくひとられて少うし形がくずれてゐる。）少うし、發電所の屋根が見える。さう言へば、そのシャベルが一本は石炭の中につき立てたまま、もう一本は道端に轉がつたまま投げ捨ててあるのまで見える。——そこまでは、町からずうつとこの列んで來たこの電車道と街道とが發電所とそれからその後の小さな招魂社の丘とを挾んで二つに分れる。二つとも、同じ高さのゆるい勾配にかかるのだ。この街道を私はどんなによく覺えてゐることだらう。毎朝毎朝、私はここを通つて行つた。工夫のやうな男が仕事を止めて、道端で煙草を吸つてゐることもあつた。そんな男が、ひよいと冗談に、折柄通りかかつた電車へ、とびのつて見せることもあつた。そんな輕業の出來ることが見せたくもある。しかし、もともと、そこでは道が弓なりに曲つてゐるので、ぽーきい、と音を立ててのろくのろくカーヴする、そんな車へとびのりをすることはさう難しくもなかつたのであらう。一人づつ、その眞似をするものが殖えた。その側の街道を歩き乍ら、（私はたいてい歩いて通つた。）私はよく、郵便配達夫

や、町から歸る肴屋や中學生や、偶には、すぐそばの發電所から出て來たばかりの役目らしい男などまでそんな眞似をするのを見た。やがて、何時の間にか　そこは新しい停留場のやうになり、また何時か赤いペンキ塗りの柱が立つやうになつたのだが、その遠い昔のことを一どきに思ひ出し乍ら、ぼんやり私は考へた。こんな風にすればどこへでも好きなところへ停留場がつくれるかな。――――（私は浮世のさまざまな出來ごとにこの停留場といふ文字をあてはめて、戲れに考へたのだ。こんな癖は誰にもあるに違ひない。）

私の電車は私の記憶に應じて杜を曲る。すると、その赤い停留場の柱が見えた。こーきい、と音を立てて電車がとまる。と、足もとから、そのときまで柱の根もとにしやがんででも居たのか私の眼には見えなかつた一人の男が、ふいに立ち上つたのが見えた。何氣なく、その洋服の眞白さに眼をかして、おや、と思ふ間にまたその男の手の下から、縺れるやうにさきを爭うて攀り乍ら二人の子供が踏台を上つて來た。私は輕い叫聲を上げた。（それはそつくりあの通りだ。）思ひもかけず私の前に現れた光景は、だが、その子供らの後から丈高い背を屈めて續き乍ら、ひよいとその新しい麥藁帽子の下からもたげたその顏は、あの男のそれではなくて、（ああ、それはそんなにもよく似てゐる。）あの男の兒のであつた。私はどんなによくこの男をも知つてゐることだらう。それは十三年振りかそれどころか殆んど二十年振りくらゐなのかも知れないのに、私は自分の眼があの男の兒であるこの男をも見分けたと言ふことで、子供のやうな喜びを感じた。まるで作り話を見つけたやうな喜びだ。あの男と私とが不仕合せな夢を見てゐたあの頃には、この男は四里ばかり町から離れた或る漁村の小學校長になつてゐたけれども、もつともつとそれより前には、町の小學校でただの訓導であつたこともある。私もまだ小さな子供で、この男に教はつた。その時分には恐らく二十三か四にもなつてゐなかつたことかも知れない。それはこの兄弟の何れにも共通な、揉上げから頸にかけて靑靑と類もなく美しい剃痕と女のやうに列びの細かい白い齒のちらちらと見え隱れする異人のやうな美しい唇とが、幼い私の眼に朧ろな戀を感じさせ、（どんな幼い者でも戀人を持つもの

だ。」さまざまな他の感情からも、私は、凡ゆる熱心をもつてこの若い教師の學課を聴講したことであつた。しかしあるとき如何言ふ事情であつたか一年にも足らず遠くのよその學校へ轉任して行くことになつたので、そのとき私は村の峠を越して峠の向ふの、軒一ぱいに大きな松の枝葉のおひ冠さつてゐる茶店までひとりでついて行つた。その茶店では名物の外郎（ういらう）を賣つて居た。私たちはそれを喰べた。茶店の軒にはひろく垂れるやうに一ぱいに葭簀が張つてあつて、それに、まだひ弱な藤蔓が這はせてある。その根もとに、もう早やすがれて白くなつてゐるすみれの花が咲いてゐた。「これは何科植物か知つてゐるか。」太いステッキのさきでつつき乍ら若い教師はそんなことを尋ねた。「先生それはすみれです。」「何科植物か知つてゐるか。」「白いすみれです。」私にはそれよりほかの何ごとをも考へることが出來なかつた。その間にもまじまじと私の顔を見守つて、（それはこの男には何の意味もなかつたことだ。）絶えず微笑して居た。そのときの顔が見える。はつと思ふ間に私は、不可思議な自己暗示の中で、この幼い自分の姿を思ひ浮べ、激しかつたあの自分の戀情ももとはこの兄弟の何れに對するものがほんたうであつたのだらうかと怪しくもわれとわが心を疑つた。（だが、このいまの瞬間にこんなことを思ふなどとは、何といふ愚かなことだ。それはただこの兄弟がそんなにもよく似てゐると言ふそのことだけのためではないか。）そんな愚かな疑ひすらこの男を見分け得た私の喜びの妨げにはならなかつた。あの時の出來ごとには、この男の心をもどんなにか騒がしたことに違ひないし、よそ乍らの噂もしなければ、と、喧噪の間にもそんなことを考へ乍ら、それに、何も彼もすつかり過ぎ去つて了つたことだ。私はくるりと戻らなければならぬ。昔の昔の子供の自分とそれからその子供の先生であつたこの男との關係にまで戻るのだ。私は喜びのつづきをなほも瞬間に續け乍ら考へた。それにこれは、悲しいほどに滑稽なことではないか。そつくりそのまま二人の子供を連れてゐるこの男が、あの男ではなくてその兄弟の、そして自分の昔の先生であつたその男だと言ふことは。「三村先生！」

われにもなく私は呼んだのだ。（それはあの男のと同じ名だ。）男は反射的に顔を上げて、おお、と答へた。私はこの男が

私を認めたことを感じた。だが、その二日ほど伸び過ぎたやうに思はれる夥しい髭鬚の上を優しい微笑が掠めたと思ふと、消えた。そしてそれは、惧れを交へた驚きの表情に變つた。すると、その男の表情を追うて、同じやうなものが自分の頰をも掠め去るのを私は感じた。(何と言ふ哀れなことだ。これがいまのいままで續けてゐた妄想の報ひなのだ。そして、これが、何事も過ぎ去つては居ないと言ふことの知らせなのだ。)私の心は微かに平衡を失つた。すると、その心の隙間から粗暴な自嘲に似た感情が流れ込み、私の顏はもの哀れな社交的な笑ひを浮べた。

「ほんにお久しう………」

私の聲はひとりごとのやうに消えた。男とその子供たちとは私の前を通り過ぎる。床の上に大きい、小さい靴のあとが、赫土の塊をおとして殘る。今日は日曜日なのだ。この父親と子供たちとは招魂社の杜へ山登りに行つて來たのだ。私はぼんやり考へる。私の眼はおづおづとけれどもしつつこくその赫土の跡を追うて、この三つの大きい小さいズボンが、用心深くかたくなに組合はさり私の遠くへ腰を下すのを見屆ける。子供の一人が顏を上げて何か言ふのが見える。う、う、とその父親は背を屈めて子供の上に冠さる。子供の靴の紐が解けたのだ。ゆつくりと何とゆつくりとそれを結んでゐることだ。私は穴のあくほどに見詰める。この間に、電車は行くところまで行つて了ひ、そしてこの苦しい瞬間が永久に過ぎ去つて了ふであらうことを、私は呼吸を殺すやうにして念じる。すると、私の貪り見てゐる(おお、その帽子を脫いだ顳顬の何とちらほらと白いことよ。)耳朶の後に小さなほくろのあるのが見え、思ひなしか、そのほくろのままに顫へてゐる。あの耳朶も同じことを念じてゐるのだ。——長い長い時間ののちに、私の心は靜かになつた。私は非常にゆつくりと過ぎ去つた昔のことを思ひ出すことが出來た。この男の態度はまことに正しい。あの時でさへこの男は、私の恐しい熱情のまへにその兄弟の體をさらすことを、あんなにもはつきりと拒んだではないか。その氣持の續きだ。いつまでも同じ續きだ。——私は情けなく悲しかつた。と、男は子供の靴から顏を上げた。その瞬間に氷のやうな無關心な一瞥が、けれど

も何と言ふ無關心をもつて、制するやうに其の[illegible]に返した。[illegible]こにまつて居だ。私はひとりでここにとどまるべきであらうか。何ごとも諦めるより賢明なことはないのであらうか。ぼんやりとその[illegible]けて、まだこの瞬間にこの己れ自身ここへ降りるのか降りないのかそれさへも分らずに、私は起ち上つた。男と子供たちは、私の眼には私を遺れて行くとしか思へない騒がしさで下りて行つた。運轉手と若い車掌とは、もう一度同じ町の方へひつ返すために、地べたへ下り、また、ゆつくりと救助網を運んでゐる。――けれども、ほんたうにこんなことがあつてもよいものか。私は情けなく哀しかつた。私はふいに、着物の裾を踏みしだくやうによろめいて下りた。ついて行くのだ。この男と、それからあの男の生活のあるところまでついて行くのだ。――二人は板橋の方へ曲つた。私ははたはたとその後から追ひすがり、（だが、何と言ふ哀れなことだ。これは、最後の一番最後まで自分の運命を試すのではなくて、さうすることに依つて僅かに殘された運命のかけらをも費ひ果して了ふことにしか終らない。）

「どちらへ、――先生も長野の方へいらつしやいますの、」

「へえ、」

男は振り返らずに不確かな聲で答へた。私はわれとわが心を唆しかけるやうにその後を追ひ乍ら、――けれども、何を言ふことがあらう。この男の、田舍者らしい根深い猜疑心が、私の心にひそみもしなかつた何ものかを誘ひ出したのだ。そんなにこの私が恐しいのか。それではお前はお前のあの兄弟から何を聽いたと言ふのだ。わたしがまだあの男を殺しに來たとでも思ふのか。そんな、こちこちの、そしてただ一本の道しか通らない妄想を持つてゐるお前には、お芝居と言ふことが分らないのだ。お芝居に人を殺すやうな眞似も出來る。けれどもそれはお芝居さ、直ぐに消えてなくなるお芝居さ。（おお、ほんたうにさうだらうか。）もう、こんなにも色褪せた昔の物語りに、この私がもう一ぺんあの同じやうな短刀を買ひに行くことが出來るかえ、でも、お前が、そんなにも怖れてゐると言ふのなら、ほんたうだ、或ひはひよいとそんな氣にならな

いものでもない。それに、私がさうしようと思ひさへすれば、私はもう一度お前の兄弟を殺すことも出來るのだ。——おお何と馬鹿なことだ。世界中があの男ひとりのことで埋つてはゐまいしさ、自惚もたいがいにしたが好い。——私はこれだけのことを一どきに、いま私の前を走つて行くこの男の背中へ投げつけて遣りたかつた。さうすることも出來ないで、いぢ汚くちよこちよこと追ひすがり、なほさら相手に惧れられる。まるでそつくり、あの男との最後ではないか。嫌はれるものが如何ならう。もう、すつかり橋を渡つて了つた。(何故ともなく私は、この板橋が五百枚橋と言ふ名であることを思ひ出した。そして或るとき、その上を歩き乍ら一枚一枚その板を數へたとき、それは三百六枚しかなかつた。そのことをまで忌々しく思ひ出した。)右へ行くか左へ行くか。わああ、と言ふやうな聲をあげて、まづ、二人の子供たちが驅け出した。それからその後をあの男もつゞいて小學校の裏手へ續く土手を、私には一瞥をも與れないで逃げ去つた。——さうだ。あの土手の杉垣の蔭には、恐らく、彼等にはそれほどにも大切な、そして私にはまるで用事のない生活がある。——私はいまにもわつと泣き出したいやうな心になり、けれども半分はふてぶてしく、へへらへへらと笑ひ乍ら、男たちの消えてなくなつた反對の小道へ曲るために立ち留つた。——さようなら、あの男の兄貴よ。そして昔の先生よ。若しあの男に逢ふことがあるのだつたらさう言つてお呉れ。(それからお前も安心してお呉れ。)私はもう、遠いところに私自身の生活を持つて居る。この故里へ歸つて來たのも、ほんのちよいとしたはずみの出來心にしか過ぎない。ほんの、いはば、あの子供のときのお祭に、覗いて見た五厘の覗き眼鏡を覗きに戻つて來たやうなものなのだから。——

私はとぼとぼとひとりで歩いて行つた。すると私の哀しみは空氣の中のごみのやうに、のろのろと音もなく沈んで行つた。どんな不仕合せなときにも、ひとりになるのはよいものだ。その不仕合せは唄(うた)になつてわれとわが心を慰める。構ふことはない。あの男たちの馬鹿馬鹿しい取越し苦勞とそれからお前自身の哀しみとを遠くから客觀して見ることとさ。そしてお前は、そんな風なあの男たちとそれからお前自身とを哀れんで見ることとさ。——何時の間にか私は、伯母さんの家の前まで

來た。古い障子とこれからまだ作つて間もない、ふうんと木の香の漂ひさうな白木の桟の新しいガラス障子とがちやんぽんに組めてある。見ると、椽側の板も五六枚、それからただの柱も一二本新しい木で繼いである。いつにも變らず、工面のよくない伯母さんであることだ。こんな具合にちよつぴりづつ繼ぎ足しをした家ほど古ぼけて情けなく見えるものないのに、と、私はふと、長い間便りらしい便りもせず、勿論に、びた一錢の仕送りさへもしなかつた私自身だ、斯うしてひよろりと故郷へ戻つて來たからと云つて、このよるべない伯母さんを氣紛れな出來心で訪ねて來たと言ふことは、あまりにも身勝手なことではなかつたのかと言ふことを考へた。けれども今更ひき返すほどのことではない。私は頬を寄せて硝子障子の中を覗いた。もともと店をするために建てられたのではないこの家は、なみの通りの百姓家で、その板敷きの上り框に、私の眼には伯母さんの體のやうに見馴れてゐる昔通りの貧しい商品が、一錢の鉛筆、五厘の消しゴム、それから鉛の鉛筆けづりと一列ならべに行儀よく列べてある。その上に、來年の種子にするとうもろこしのまつ黄色な實が日に向けて倒さに吊してある。

「伯母さん、」

返事はなくて、けれども直ぐに伯母さんが顔を出した。あの顔だ。艶艶と脹らみ、皺のないのが自慢で、見るからに元氣さうな、どうぞ儂の一人暮しを見てお呉れ。儂はちよつぴりもへこたれては居らぬ。それは一人で如何しようもなく困ることはあるけれども、そんなことでへこたれるやうな儂ではないことを見てお呉れ。さう言つてでも居るやうな男優りな痩せ我慢な顔が、さうであればあるほどに或るときは痛々しくさへ思はれる、そんな、休息のない元氣さうな顔をして、ただ昔と違ふのは、眼鏡をかけて居ることだ。その艶の好いまるまるとした鼻の中ほどまでずりこけてやつと止つてゐるその眼鏡には、もつと下まですべり落ちないやうに澤山澤山、紙がまいてある。あたふたと、何かしかけて居た手仕事から體を起して、じつと眼を据えて見る。その眼が、恐らく私には見馴れないその眼鏡のせいに逆ひない。何となくうとまし

く疑深く見えるのだ。そんな筈はない。伯母さんは見忘れて了つたのかな。だが、こんなとき、まるで殼の中ばかりにゐる蝸牛のそれのやうに臆病になる私の神經は、再び、私はここへ來るのではなかつたかなと思ひ疑ひ乍ら、もの哀れな微笑を浮べて、

「伯母さん、三千代じやが。伯母さん、伯母さんは如何かしとゐでる。」

「おお、やつぱし汝じやつた。儂はまた、今年は繭が安うての、賣られもせんけえ、精一ぱい絹を織るのは今年じやと思うての、それに氣を取られて呆けとつたのぞい。ほう、――ほう、上つた、上つた。」

と、ふいに伯母は元氣の好い聲で叫び乍ら、けれどもその顏は、あの嬉しい悲しいに拘らずその感情を押し隱し、氣丈者のきまりのやうに氣忙しない時にきまつてする夥しい縱皺を眉根に深く寄せ乍ら、先づ自分からそそくさと家の中へ馳け込んだ。どこにゐたのか、こ、く、こ、く、ここここと鳴き乍ら、一番のちやぼがその後から追つて行つた。私の蝸牛のやうな神經は何を感じることか分らない。絕えて一昔も逢ふことのなかつた姪にとつて、今年の繭の安からうことが何の拘りであらうぞ。それを言ひ出す一息まへに、伯母は何か、もつと違つた何かを言ひ出さうとして、その代りにふいと思ひついた繭の話を始めたのに違ひない。私は、そんなことを考へる自分を情けなく思ひ乍ら、何か言譯しないではゐられない氣持になつて、ちやぼのまた後から伯母を追つて行つた。

「わしはつい、昨日の朝までは戾つて來る積りはなかつたのぞい。ふいと思ひ立つて、矢も楯も堪らずに戾つて來たのぞい。じやから、土産も何もない、てぶらじや。」

「てぶらで上物じや。儂らにはお前の顏が何よりの土産じや。」

伯母はさう言葉を切つて、「じやが、汝あ、もつぱら辛棒せとるちう話じやけえ、ほんのしるしのもんでええんじやが、何かあると宜かつたがの。」

と、片田舍のならはしで隣り近所のつきあひのうるさいことは話した。それから、ついこの春のことに、或さ、おお戻つて來ただれそれの娘とやらは、この伯母の家へまで配り物をして行つた。如何も、汝お戻つたとなると、何かしるしでも返し物をせぬと工合が惡い。あとで、白砂糖でも買うて持つて行つて置かうか。だが、汝の顏はこの村では知らぬ者もあるまいに、暗うなるまではあんまり表へ出るなよ。そんな、——と、伯母はちらりと私の顏を見て、——工面のよくない時は戻つて來ぬでも宜かつたのに。汝あ、何時までもその癖が止まぬ。そんなことをくどくどと話すのであつた。私は伯母の横にしやがんで、私のために何か溫い食物でもして呉れる積りであらう、ペシペシと音を立ててその骨太な兩手の間に枯柴を折りくべ乍ら、あかあかと竈の焰に照らされてなほなほ赧く艶艶と、如何かすると塗り油でもこめたやうなその伯母の赧ら顏を見詰め乍ら、鹽辛い涙のやうなものが咽喉もとへつかへて來るのを感じた。いつまでもその癖が止まぬと言ふのは、この伯母自身のことではないか。しやきしやきと言ひたいだけのことを言ひ、ひとの心は思ひ遣る習慣のない伯母のことだ。若しくは、自分を隱してものを言ふ方法を知らない伯母のことだ。如何かするとそれがひどく意地惡く思はれるのであるけれども、だが、それはなまじひな思ひ遣りよりもひとの心を慰める。私はこの伯母の意地惡るらしい心から、ひとり遠のいて考へる。ひとが故鄕へ歸るにはただ一つだけの歸り方しかないのだ。よい着物を着、よい下駄を穿いて、それから母や伯母へはなくとも隣り近所のたれかれへは充分の手土產を用意して、まだその前に、何日何時は歸るからと手紙をやつて、わが身をのせた小さな汽車が停車場へ着いたときには、親兄弟やそのほかの凡ゆる馴染の古い顏がわが身の方へ笑ひかけるやうにせねばならぬのだ。そしてそれらのみんなと伴を列ねて町筋を歸るのだ。すると、どの軒からも和やかな笑顏が覗く。その夜は町中のどのランプの下でもわが身のことが語られる。そんな歸り方しかなかつたのだ。私はゆくりなくももう一つの私の歸鄕を思ひ出した。汝あ、はあ、戻つて來たのかや。何でもうちいと辛棒せざつつらう。と、そのときもこの伯母は泣くやうにして言つたつけが、あのときには今度よりも酷かつた。私は乞食のやうになつて歸つて來た

のだ。汽車の都合も考へずに歸つて來たので、自分の姿を誰にも見られたくなく、夜までの時を消さねばならないのにそれを待つ間もどこへも行くところがなく、勿論に母の居る家へは歸れなく、こつそりとこの家の裏木戸を潜つて椽さきへ忍び込んだのであつたが、誰も見えない。私は懐に隱してゐた鬱金木綿の袋を、そつとその椽側の戸袋のかげへ隱した。誰の眼にもつかなかつた。その袋の中には一振りの短刀が這入つてゐる。私はそれを下の關の波止場でほんの連絡の汽車を待つ間の僅かな時間に買つたのだ。そんなものを買ふまでもなかつたのだ。ただ、そんなものを買つたりそれを誰にも知られることなしに懐に忍ばせたりしてゐると、ただそれだけで私の心は慰められる。私は自分がしようとさへ思へば一番おしまひのことが出來るのだ。そんな阿呆な芝居ごころを持たないでは、生きてゐる空もなかつたのだ。あのときに比べるといまの私は仕合せだ。あんな風な自分をもまたこんな風な自分をも、まるで、おどけた他人(ひと)ごとのやうに客觀することも出來る。そんな心になつてゐる。だが、歸つて來ようが悪かつたのだ。さあ、ここで廻れ右をして、もう一度東京驛へひき返すのだ。空間が、お前を遠くへ運んで行く。すると何も彼も十年前の幕のうしろへひつこんで了ふ。消えて了ふのだ。——だが、私はやつぱりしやがんでゐた。伯母は何時の間にか眼鏡を外してゐる。昔に變らぬその顔の中から、私は私の哀れな心に少しも氣附かない無心な伯母を、そして、伯母ひとりにしかない喜び方でやつぱり私の歸つて來たことを喜んでゐる伯母を、感じた。野天の竈(かまど)はよいものだ。ふうふうと鍋の湯氣が空の果の雲の方へ伸びて行く。それから、低い生垣を越えて學校の運動場の大きい三角じようぎのやうな廣つぱへも伸びて行く。見える限り、まるで穴のあいたやうに誰もゐない運動場だ。さうだつた。今日は日曜日だつた。ふいと私の眼に、赫土を運んで來たあの電車の中の大きな小さな三つの靴を思ひ浮べたとき、まるで、私の思ひに吊られて來たのだ。その廣い運動場の私に許された視野の中へ、あの二人の同じ子供が、毬のやうに飛んで來たのだ。そして、もつれ合ひ乍ら、遊び始めたのだ。これはまことによくあることだ。私は明るい不思議な喜びに驅られ乍ら、けれどもゆつくりと落付いて訊いた。

「伯母さん、あの子供らは三井先生の子じゃらうかの、」

「うう、兄さまの方の子じゃぞ。――ええ眼じゃの、お前の眼は、あのお子らも弟さまの方へもよう似てはお出でるが、じゃが 兄さまの方のじゃぞ。」

「さうぢゃ、いんま、ここへ來る電車の中で會うたばかりじゃ。そいじゃ、この近くにあのお人らは住まうてお出るのかや。」

呼べば聲も聽えるであらう。半丁とは距てずに、新しいトタン屋根の一棟が堤つぱに沿うて建つて居る。その一つの窓ぎはには赤い裏のねんねこが干してある。その開かれた窓から見える部屋の中の一つの柱には、トランプの札のやうな、めくり暦が貼つてあつて、おお、その上に、今しがた電車の中で見た許りのあの同じ新しい麥藁帽子さへかけてある。伯母はその窓の一つを指して、

「ほれ、見ようがの、あのお家じゃ。あのお人はこの春から、ここの校長さまにお成りたのじゃ。それはよく出來たお人での。お蔭で儂らの商ひもどらほど遣りよいか知れぬことじゃ。」

伯母の商ひの妨げをしてはならぬ。――私はその窓から眼を外した。いまにもその男がそこへ半身を見せるかも知れぬ。そして、もう一度私がさうしようと思へさへすればその男の心へ寒い恐怖を傳へることも出來るその窓から。――だが、蝸牛のやうにひつこんで了ふのは、最早やこの私ではなくてその男だ。最早や決して、あの窓へ顏を出すことではない。その男はどんなによく私がここに斯うしてしゃがんでゐることを知つてゐることだらう。――

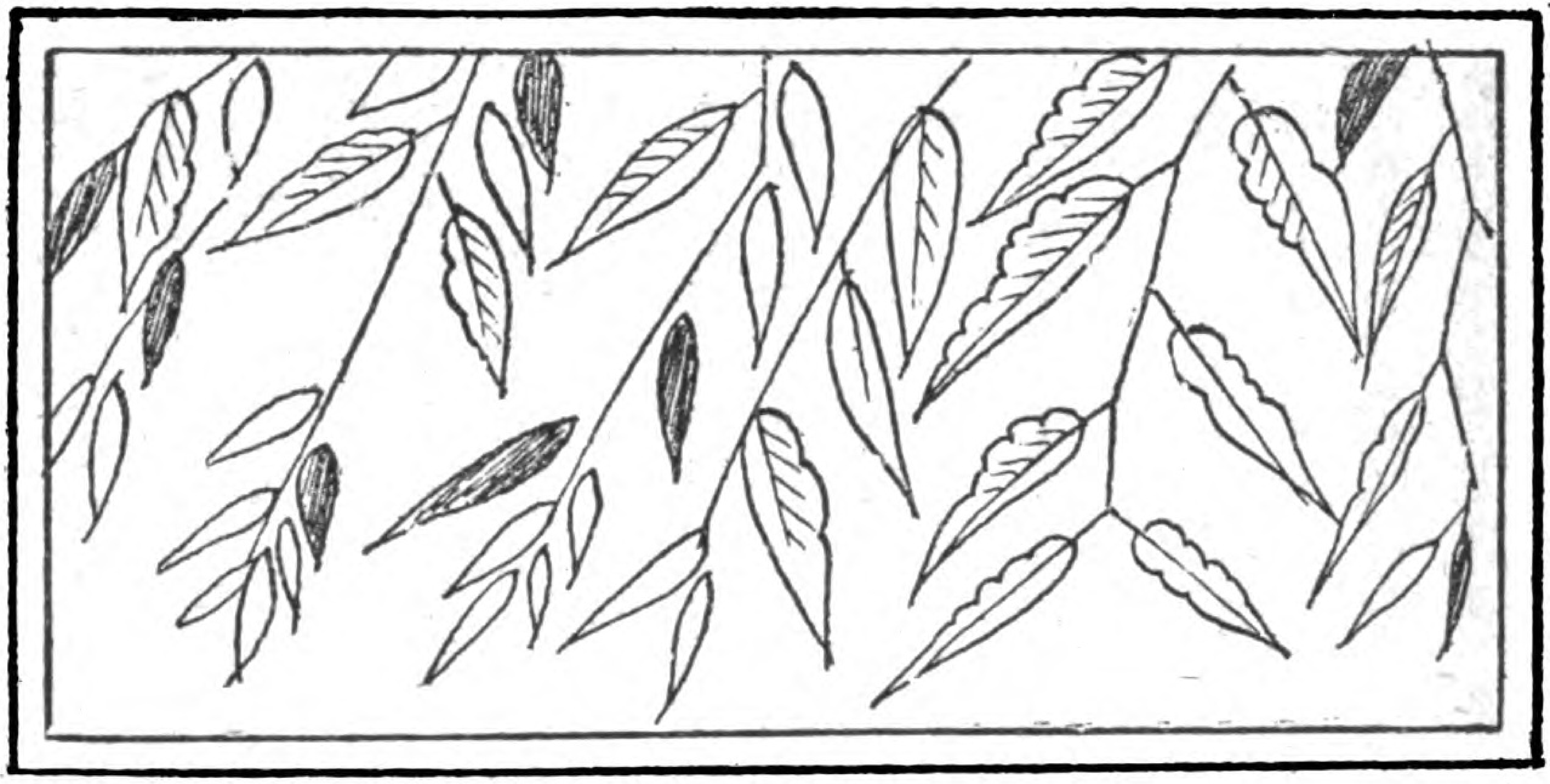
いつの間にか鍋の煮物は煮えて居た。蓋をとると、夥しい湯氣が上つて一寸の間は何も見えない。軈てほのぼのと、まつ黄色にひび割れて、如何言ふ譯かこの地方では爺殺しと言ふ名で呼ばれてゐるうまい種類の甘藷(いも)が見えた。伯母は口を尖らしてふうふうと吹き乍ら、剝げちよろけた塗り箸にそのお太鼓を突きさして、まるで子供に與れるお八つのやうに私に

それを持たせるのだ。私たちは椽側に腰をかけた。椽側からは黒い一塊りの雲のやうにこもつて見える學校裏の椎の木立が邪魔をして、あの窓は隠れて了ふ。伯母は甘藷を喰べ乍らつぎほなく誰彼の噂をして、さてそのあとへ何心もなげにつけ加へた。みんな過ぎ去つて了つたことだ、と言ひ乍ら、あの先生の弟さまの方も、いまではうまく落付いて、二三年前の春、思ひもかけずこの村の丹波屋と言ふ太物屋の娘のところへ婿養子にお出でた。いまだに子供はないけれども、聟はやつぱり町の學校へ行き、夜は夜で店番の手傳をして、覺束なくそろばんも彈いてお出る。うちの始末も宜ささうな。と、まるで子供に聽かせるお伽噺のやうにゆつくりと語つて聽かせた。その話は私の心へしみ通る。私は古い芝居を見てゐるのではないかと思ふ。何と言ふ和やかなことだ。私はその娘を知つてゐる。色の白いまるまつちい、一重瞼の美しい娘であつた。あの娘はいつでも店に坐つてゐた。いまも坐つてゐるかも知れない。だが、(今度は私が、こんな情けないころの私が蝸牛になつて了ふのだ。)私は決してあの店の前を通ることではない。――私はあの頃にあの店で、ほんの少しばかりの縮緬の小ぎれを買つたことがある。あの娘がものさしをあててその小ぎれを切つて呉れた。私はそれであの男に始めての贈り物を、何と言ふ月並な、梅の花型の肱突をこしらへて遣つたのであつたけれども、じきにそれは私の知つてゐる暇に汚れ果てて了つて居たから、何れはどこかの塵箱の中へでも投げすてられて了つたに違ひない。そして、そんなことはあの男も忘れてゐる。――だが、何と十年の間に、それはまるでありふれた小説の結末のやうにちんまりと縮こまり、まとまつて了つた風景であることか。これでおしまひになつた。誰の生活もいまあるところを動くことはない。

けれども、夕方になつて、私は伯母の家を出た。うす暗がりの中では、誰の心もいくらかは精神病になるのかも知れぬ。私は歩き乍ら、あの話を聽いたときの靜かな心が、もつと違つた靜けさの方へ惹かれて行くのを感じた。私は裏木戸の方へ廻つて、そこへ立留つた。そこでは、あの窓が裸に見える。私はそこへ留つたまま、まるで行者のやうに、自分で自分に暗示をかける。ほれ、あの窓に明りがつくぞ。さう思ふ。すると、間もなく、窓の障子の棧を浮かして窓一ぱいに、ぱ

あかあかと明るくなる。これもよくあることなのだ。何でもありはしない。丁度そのときに校長さまのおくさんがランプへ灯をともしたのだ。でも、こんなことがあると、愚かにも、われとわが身が運命の支持者のやうに思へるではないか。さうでも思はないでは、こんな静かなうす暗がりをひとりで歩けるものではない。——私はまた歩き出した。そして、あの話を聴いたときには、決してその前だけは通ることではないと思つてゐたあの丹波屋の、若い夫婦の住居ときいた裏の離れの窓を見に行きたくなつた。このあたりの道はよく知つてゐる。私は狭い田甫道をやたらに通り抜けた。すると、一面に葱の植込の列んでゐるその向ふに、私の立つてゐるところからはほんに芝居の舞臺にあるあづまやのやうなその離れが、あかあかと灯をともした窓をとざして眼についた。どこの窓も明るいことだ。そして、よその窓は何時見ても明るく見えるものだ。——ふいに私はさう思つた。まるで泥棒のやうに、放火者(ひつけ)のやうに、あの平和な窓へ忍びよつて、ろうそくの火でもつけて遣りたい。めらめらと障子の紙だけ燃え上る。裸の骨が殘る。その隙間から見て遣りたい。——だが、私はまるで火をつけそくなつた泥棒のやうにこそこそと引き返した。そしてさうすることの代りに、次のやうな物語りを私は書き始めたのだ。この文字はあの窓を燒いて呉れ。

さて、と長い前置をして、その女は語り出したのだ



ともに老ゆ

佐佐木茂索

一

黒井は今夜の結婚披露の宴の盛大であるのを知つた。新郎新婦と媒酌人の並んで、來者に迎接してゐる前を通るときに、廣間の方から相當ざわざわしてゐるらしい物音が傳つて來たから。

彼は廣間の入口で一寸立止ると、最初に目に入つた見知り越しの顏の一團の方へ歩み寄つた。輕い挨拶を交すと、すすめられるままに一脚の椅子を占めた。

――もう可なりの人數が集つてゐた。

廣間には幾個かのテエブルが置いてあり、どのテエブルの上にも灰皿と煙草が載せてあつた。テエブルはいづれも五六個の椅子で圍まれてゐた。人人は思ひ思ひの

一緒になつて、テエブルと椅子を占領してゐた。それは黒井の加つた一團と少しも異つてゐなかつた。それらの上に燦と明るい飾電燈が灯いてゐた。——そして賑かな談笑が、愉快な談笑が、——さういふものが湧いてゐればいいのだが、あいにく不愉快な談笑さへも湧いてゐない、人人は唯煙草をくゆらし、時時意味のない微笑を浮べてゐるだけであつた。

黒井も誰からか話題が出て、それが質問の形式を具へてゐる限り、何か返事をしてゐた。彼は私かに愉快な談笑を欲してゐながら、さうして他人の不愉快な沈默を飽き足らず思ひながら、彼自身では表に現しては、どうしても笑へなかつた。語るべき機會の遠慮なく過ぎ去るのを、ぼんやり頭の何處かで掠れさしてゐた。他人を責めながら彼自身は矢張漫然たる喫煙と無意味な微笑の一人であつた。他人を責める爲には、僕は病人だから、さう口の中で呟いてゐた。事實、かうしてみると僕は矢張り病氣らしいと思つてゐた。

そのうちに來る程の人は來てしまつたのであらう、今まで入口に立つてゐた新郎新婦は、媒酌人に連れられて廣間へ姿を現した。人人は、分けて新婦に視線を聚めた。花嫁は愼しやかに、一團から一團へと靜かな御辭儀を續けて廻つてゐた。黒井は、人々の視線が何處までも附纏つて行く花嫁を氣の毒に思つてゐた。別して、同性から行く視線を憎惡してゐた。來賓の中には、當の新婦より半年か一年先輩らしい若夫人が數人ならずゐた。彼女等は、新婦の愼しやかさとは反對に、——一應は相當愼しやかであつたが、何處か態度は、「私はもう濟んだのよ。」といひたさうな惡い落着きを見せてゐた。輕蔑したくなるなと、黒井は思つてゐた。どんな場合のどんな事柄にも、ああはなりたくないと思つてゐた。同時に、今晩の新婦も、いづれは他人の披露宴に臨んだら、ああいふ態度を見せるやうになるだらうと、——

彼は一座のさわめいてゐるのを機會に、今まで倚つてゐた席から立上ると、一隅の長椅子の上に移つてしまつた。その邊はもう新郎新婦達の挨拶して廻つた跡で、彼はおそらく御辭儀せずに過せさうなところだつた。

さう思つて彼が煙草を啣へ直したときだつた。

「どうですか。」

静かな、少しも感情を含まないやうな聲がした。——傍らに並んで腰を下した川北氏を見ると、黒井は初めて嬉しさうな微笑を浮べた。しかし口では「ああ」と云つたきりだつた。さうして言葉の代りに、——川北氏の掛ける餘地は既に十分あつたが、彼自身を少し側へ避けさした。川北氏は、——川北と呼び棄てにするほどの交りではなかつた。同時に、川北氏から呼ばせれば、黒井氏だつた。——川北氏はどんな激情を現すにも不適當ないつもの顔付に、今は僅かに静かな暖かさを漂はせてゐた。

「なかなか盛大ですね。お一人？」

「あなたも？」

互ひに細君を連れて來なかつたといふ意味であつた。しばらく何か云つたあとで、川北氏は訊ねた。

「此頃不眠症はどうです？」

「不眠症にも倦きました。」

「倦いたのですか。絶望したのぢやないのですか。」

「さうぢやありません。絶望したのぢやないのです。さうだとまだしもなのですがね。ただ倦いただけなのですよ。」

今度は黒井が訊ねた。

「どうです、神經衰弱は？」

「神經衰弱ですか。お互ひぢやありませんか。——倦きましたよ。」

「それはどうも。」黒井は笑ひ出した。「分りますね。」

川北氏も笑ひ出した。

「困つたものだといふ氣さへ起りませんな。つまり、年取り過ぎてゐるといふのでせうな――」

そんな話をしたあとで、突然川北氏は云つた。

「どうです、旅行しませんか？」

「旅行？　旅行はしたいですね。」

「いつかは到頭別別になつてしまひましたね。今度はあゝいふことのないやうに――どうです、四五日のうちに？」

「四五日のうちに、――さうですね。」

黑井は一寸躊躇した。躊躇の意味を川北氏は直ぐ洞察したやうだつた。

「閑はあるでせう？」

「ええ、時間はどうやら。――まあ、何とでも都合はつきます。」

「そんならいいぢやありませんか。閑さへあれば、――ね、是非一緒に行きませう。四五日のうちに。」

その時給仕人が、これから宴の始まることを告げて歩いた。

「ぢや、並んで掛けませう。」

「いや、豫め席はきまつてゐるやうですよ。私は鶴です。」

「さういへば何か貰ひましたね。」

川北氏はポケットから紙片を出した。

「あゝ僕は高砂です。」

彼等は別れ別れに席に着いた。乾杯の時には遠くから微笑し合ひながら、シャムパンの杯を上げた。

二

彼等は奈良のホテルにゐた。昨晩着いて、今朝は常にない早起をして、晩秋の公園をもう散歩してきたのだつた。

「――しかし温泉嶽とはひどく遠い所にきめたものですね。」

「だつて、あなたがいつか云つてたぢやありませんか。」

「勿論今でも行きたいと思つてゐるのは變りはありませんがね。」

「一緒だし、そんなに遠くはありませんよ。此前は一人で十和田湖まで行つたぢやありませんか。」

「あゝ、あの時はなぜ一緒に行かなかつたのですかねえ。――ストトン丸なんて發動汽船が浮いてゐたりたんかして、變に傍なかつたつけ。――」

「温泉はどうですかね。もう紅葉は過ぎてゐるだらうし、――山上のペンキ塗のホテルかなんかに、これも變に傍ないのぢやないかな。」

「そんなことはない。僕はきつと爽快な二三日、いや一週間ぐらゐ過せるかも知れないと思つてゐますよ。」

彼等は他に二組ほどの客しかない、がらんとした食堂を見廻した。

「季節だらうのに、ずゐぶん閑散ですね。」

「これくらゐな綺麗さがあればいいですかね。」

「温泉ですか。さあ勿論輕井澤の弟分ぐらゐぢやありませんかね。」

「いづれにせよ、出來るだけ早く行くことにしませうよ。」

川北氏には神戸で足さなければならない用事があつた。川北氏の神戸の店の支配人が變るので、その爲四五日は温泉行

のを一日を潰す必要な、東京を出る時から分つてゐたのだつた。その爲に河瀬は一度奈良へ來て宿いて、[illegible]戸に出向く豫定になつてゐた。その間は黑井は奈良に一人待ち合してゐなければならないのだつた。

「分りきつた用事ですからね、直ぐ引返してきますよ。」

「いや、順路ですから、用の濟んだ時分に、僕の方から追つかけて行きませうよ。今夜行きますね？」

「いや、雨の中に出掛けるつもりです。」

「雨の中に？　そりや僕の方も、早いほど結構ですよ。」

午後川北氏を停車場に見送ると、黑井は又公園を散歩した。

翌日黑井は半日を博物館で過した。そのあと、此前來た時見殘した新藥師寺を拜觀に行つた。彼は尼さんに扉を開いてもらひ、土臭いお堂の中に半時間ほどを過した。それからいつか夕暮れてくる縁側に掛けたから、尼さんのすゝめてくれる番茶を呑んだ。四邊はかたりとも音がしなかつた。さつきお堂を閉める時扉のきしつた音がまだ耳に殘つてゐる氣持だつた。物音といへば一日死んだそのきしりが耳の底に生きてゐるだけだつた。

「靜かですね。」

彼は思はずさう呟いた。尼さんはにこにこしてゐた。

「へえ、靜かなことは、そらもう、――」

さういふ尼さんに彼は一封を渡して、ゆつくり土塀の荒れた門前に出た。宿に歸るとまだ早かつたが夕食を濟ませ、彼はさつさと寢床に横になつた。眠れたら、と思ひながら、彼はいつまでも本を讀んでゐた。閑なホテルでは廊下を歩く足音さへ響いて來なかつた。

十一時に近い頃黑井は俄かに起き上ると、枕元の呼鈴をいつまでも押してゐた。急ぎ足にボイがはいつてきた。

「君、急だけどね。これから神戸へ行くから、鞄なんか片付けてくれないか。」

彼はさう命じながら、もう忙しく着換へにかゝつてゐた。

「はあ、さよですか。神戸ですと、もう汽車が、――」

「大軌で行けるだらう。それからタクシで、そして阪急ぢやないか。」

「はあ、さよですな。それにしても急なことで、――」

「あゝ、莫迦に寂しいんでね。」

黒井は云つたあとで、何をボイを掴へてと苦笑した。

鞄などすつかり片附けてボイが去ると、黒井は俄かに自分を取戻した。これから神戸などへ行つてどうしやうといふのだと考へ出した。川北氏にも迷惑するだらうしと考へると、無理に電車を乗り繼いで行くのも大業な氣がして來た。彼が部屋の中をあつちこつちしてゐると、ボイが勘定書を持つて自動車の來てゐることを告げに來た。

「ところがね、一寸待つてくれよ。神戸行はよさうかと思つてゐるところなんだ。」

「さうでござゐますな、明日にでもなさいましたら――。」

その一言で黒井は斷然ネクタイを外してしまつた。上着も脱いでしまつた。今までの逡巡をてきぱきした動作に代へてしまつた。

「ぢや自動車も逆戻りさしてくれたまへ、かうなると明日もどうなるか分りはしないよ。都合で當分滯在するかも知れない。――もういゝからあつちへ行つてくれ給へ。」

彼はボイを去らすとまた寢卷に着換へて、枕許の電燈の下に本を開いた。

翌朝、彼は神戸からの電話と相對してゐた。

「――だから僕は行けないかも知れないのです。もししたらしてゐて、僕は兄に會はなければならないかと思つてゐるのです。だとすると、僕は東京へ歸るか、兄の來るのを待つてゐるかしなくちやならないのです。」

川北氏は電話でさういふことを云つてゐた。黒井は丸で期待してゐないことの中止のやうに平氣で聞いてゐた。

「――何しろ平常ちつとも店のことなど、關係しなかつたものですからね。」

川北氏は電話の中でさう云つてかすかに笑つた。黒井は、氣にしないやうにと云つた。

「ここまで來たのでも、いい旅行でしたよ。若し溫泉（うんせん）へは行けないにしても。」

それから二日後、黒井は川北氏の電報を受取つた。果して溫泉（うんせん）へは行けないことになつてゐた。彼は何か當然なことのやうに電報を讀み下してゐた。

どうしても行けぬ、一旦中止したし、お歸りを待つ。

この電報は東京から打たれてゐた。無斷で東京へ歸る程の急用が出來た以上、「どうしても行け」ないのも止むを得ないと思つた。だが黒井は何故に此電文を前にも一度讀んだことがあるやうな氣がしてゐた。――彼は神戸と電話で話したときに、もう讀んでゐたのだ、と云つてもいいかなと、思つてゐた。

彼は漫然と奈良に日を消してゐるうちに、九州の果まで行くのも遠いなと思つてゐた。何かはるばると遠きに過ぎるところへ、といふ氣がしてゐた。何か突然の事故で中止にでもならないかなと私かに思つてゐた。だから電報を手にすると、何處かほつとするものがないではなかつた。彼はその日一日、散歩もしないでホテルの寢台の上に横たはつてゐた。――それではもう一度ゆつくり寺寺を見て歩かうかなと黒井は寢台の上で計畫してゐた。明日は法隆寺へ出かけようかと考へてゐた。

だが翌日になると彼は猛烈な孤獨感に襲はれ出した。僻んで云ふと、旅先で一人おいてけ堀にされたといふやうな心持

ちさへその中にひそんでゐた。一人ゐるに堪えられないものがあつた。數日誰にも出合はない生活だつたといふ意識が、ひよつこり頭の中で働き出した。すると彼は忽ち誰かを摑へてと、考へ出した。かういふ時、古寺の古佛達では、――何かそんなものに緣の遠い心が動いてゐた。

三

久しぶりの京都だなと思ひながら、さうして絕えず目に入る山山をなつかしみながら、黑井は京都の町をゆつくり步いてゐた。

しかし、町並さへ變つてゐると思はずにはゐられなかつた。いつか彼は町幅の五倍にも擴がつてゐる河原町通りに驚いてゐた。變らないやうな四顧の山山さへ、――比叡山はいつか索道車を通はせてゐた。夜になると山には一筋の電燈が連なり灯るといふ、その變りようを思つてみた。彼は、夏にだけ唯一度、大文字の灯るだけだつた、ほんの子供の時分を思つてゐた。

してみれば――。

黑井はさつき會つた規子の衰へを、まことに自然だと認めないわけには行かなかつた。だが同時に、彼自身も劃然と老ひてゐるのだなと――。

さつき規子は何か話のとぎれたときに云つた。

「隨分變りましたわね。」

「え?」

「それや、私もお婆さんになりましたけど。――」

「あ、老けたこといふのですね。――僕はもう頬に肉はありませんとも。」

さう云ひながらも、黒井は規子の目の下の醜くたるんでゐるのを、もう一度そつと見た。

「そんなに御覧になつちや――」

さういふ時、でも規子は娘のような嬌羞を見せた。

「あまり久し振りに會ふといふことは。――」彼は思ひ切つて云つた。「よくありませんね。」

「ええ、一度に年とつてゐますわね。」

規子も平然と黒井を見据えて云つた。

――黒井はゆつくり京都の町を歩きながら、比叡山さへ變るのだからと考へてゐた。自分だけが、規子だけが變らずにゐられるものでもないと思つてゐた。

彼は、古寺の古佛達に眺め入つてゐた方が、遙かによかつたなと思つてゐた。どうして誰かに會ひたくなどなつたのだらうとかすかに悔ひてもゐた。豫定通り温泉に行つてゐたらとそんなことも思つてみた。

彼はゆつくり京都の町を歩きながら、さうして絶えず目に入る山山をなつかしみながら、いつか見知らない他國を感じ出してゐた。



齒痛

徳田秋聲

M―市を通つてA―溫泉へ着いたのは、もう夜であつた。

今年は殊に萬遍なく暑さの續いた夏の半以上を東京で過した融は、愛子同伴で、次男の養子問題についての用件を帶び旁々三四日の豫定で、山の空氣を吸ひにS―湖畔の親類を訪ねた歸りを、彼は煤烟に惱まされ通しの、中央線を避けて、途中どこかへ寄つて別の方面から歸るつもりで、交通の便利のいゝA―溫泉へと立寄ることにしたのであつた。彼がその溫泉を見るのは六七年目であつた。格別氣に入つてゐた譯ではなかつたけれど、死んだ娘を旅へ連れ出したのは、その溫泉より外にはなかつたので、何んとはなし心を惹かれるのであつた。

「ほんの遊散場に過ぎないんだけれど、割合色々な人が行つてゐるんだ。」融はM―市を通過しつゝある自動車のなかでそんな話をした。

わづか三四日の旅行なので、成るべく有效に使ひたいとも思つたし、この四日間に旅行して見たい處が澤山あるけれども、結局そんな平凡な處へ落着くより外なかつた。子供達を郷里へやつてある關係から、東京を長く離れることは許されなかつた。

「さう。何處でも可いのよ。出た以上は少し旅行氣分を味はつて歸りたいわ。」

「A—で一泊して、それから又途中どこかへ寄らう。何んなところか輕井澤へおりて見ようかしら。」

「好いわ。行きたい！」

融の亡妻の親類であるだけに、好意はもつてゐてくれても、愛子に取つては何となし息苦しい其の家を立つて來たので、彼女は遙かに元氣づいてゐた。

「私幸福よ！」愛子はさう言つて、袴をはいた彼の膝のうへに片手をおいた。

親類の家を立つとき、彼はごわくした袴を穿いた。平易な裝の好きな彼が何のために袴をはいたのか、それは彼自身にもわからなかつた。多分湖畔では、事によると何時かのやうに同好の人達が集つて、自分を招くやうなことがないとも限らないと、さう思つたので、袴だけは用意して來たのであつたが、近來藝術家としての彼の値打も大分下落してゐたのに、一夕晩しかゐなかつたので彼の來たことは誰の耳にも觸れずに濟んだのであつた。トランクが一杯なので、荷嵩を低くするためでもあつたが、愛子をつれてゐると、多勢の人に彼が誰であるかと直ぐ判るので、いくらか體裁を繕ふ意志も働いてゐないとは言へなかつた。彼は形式家ではなかつたけれど、しかしまるでそれを無視するほど超越してもゐなかつた。彼は汽車のなかで、時々それをかなぐり棄てたいやうな氣がしてゐた。

馴染の旅館の門の内へ自動車が辷りこんだ。そして二人は風通しのいゝ二階の一室へ通された。

「こゝなら好いね。」

「え、好うございますわ。おゝ好い氣持だこと。」彼女は手摺のところへ出て、M―市の町の灯の遠くに見える夜色を眺めてゐた。

「この家にはちよつと極りが悪いんだよ。」融は浴衣に着かへるべく、袴を取りながら言つた。

「さう。」

「前に來たとき、下の部屋で、女中が火をもつて來て、十乃を引くら返して、取替へたばかりの青畳を台なしにして了つたんで、其の上へ火鉢を置やうにしてゐたけれど、歸つたあとで多分僕の所爲になつてゐやしないかと思ふんだ。」

「ほ。」

「四月のことでその邊に菜花が咲いてゐたが、風邪が癒らないんで、M―市の親類の家へ、豫定より早く引揚げたんだがね。後からわざ〳〵主人の弟が自身豆腐を運んでくれたりして……豆腐はこゝの名物だ。」

「さう。食べたい。けど、介意はないわ、そんな事！」

料理のうちに櫻豆腐も註文して、風呂へ行つた。丈の高い彼女は、つんつるてんの浴衣を着て、踊りながら廊下へ出た。

風呂場の勝手が大分ちがつてゐた。いくつかの家族風呂が増築されたばかりで、部屋も新築されたらしく、新らしい廊下を傳つて行くと、まだ壁の塗られない箇所があつたりした。

湯に浸りながら、融は今親類にのこして來た子供のことを思ひ出してゐた。總てを計算すると、融にしては殆んど一年弱の勝手元の費用に近いものを、瞬く隙に濫費した彼ではあつたけれど、百方閊踠いた果てに行詰つて、あのやうに萎れてゐるところを見ると、やつぱり胸に痛みを感ずるのであつた。

「それでいくらか實世間に觸れて、やつぱり順序正しく進んで行くより外ないと云ふことが解つてくれゝば、費つたもの

は惜しむに足りないんだ。己が何をしてゐたので、お前達はお前達で勉強してゐれば可いぢやないか。己には己の生活があるんだし、お前達にはお前達の個人々々の生活があるんだから、混同しないやうにしなければ可けない。己を苦しめるのは可いとしても、自分の生活を壊すのは馬鹿々々しいぢやないか。己も遅いかも知れないけれど、お前達に女はまだ早い。酒もぴつたり止しなさい。」

父と愛子との問題もあつたには違ひないが、一年休んでゐるうちに彼自身學校が厭になつて、もつと氣安い世間並の生活に取りつからうとしたことは明らかであつた。不良な友人と酒と女とが、弱い彼の頭腦を滅茶々々にしてしまつた。親類の家にゐる彼の顔は、憑いてゐた狐がおちたやうに、げつそりしてゐた。日々の生活に怠屈してゐるやうにも見えたし、水商賣のあの家の養子として悉皆板に着いてゐるやうにも見えた。

「強いて引立てるのも何うかと思ふんだね。」

「でも寂しさうだつたわ。今に東京へ出てくるでせう。先生のお子さん方には、先生の家よりよいところはないんですよ。」

「しかしあれはあれで可いんぢやないかな。そんな氣もする。」

何だかみつ子が泣いてゐるやうな幻が浮んで來た。十年前まだ四つか五つであつたみつ子は、その旅行のあひだよく泣いた。學校へ上るやうになつてからは、悉皆これを忍ぶことを覺えた。そして年々に誰れよりも優れた頭腦と才能の芽生を見せて來た。

「あんな子が何うして死んだのかな。今でも不思議だな。」

いつかしら彼は愚に返つてゐた。

「死んだ家内はあれ一人を頼りにしてゐた。」

「菓子ちやん似てるといふぢやありませんか？」

「いくらか似てゐるけれど……。」

彼女はまた一昨年の暮に亡くなつた弟のことを言ひ出した。

融は憂欝になつてゐた。しかし部屋へ還つてからは直きに晴れやかになつた。二人は食膳に向つた。

「豆腐はどうだ。」

「おいしいわ。でも少し硬いのね。鳥鍋の方がずつと好い。」

「何んにもないね。」

「これで澤山だわ。氣分よ。餘所の家で食べものを遠慮なんかするの厭！ 食べた〳〵としなくて。先生の家ではこんな事ないけれど。」

彼女は童女のやうにふるまつてゐた。

翌朝は別の部屋にゐた。昨夜寢所がそこに延べられた。

朝飯をすまして、一昨日から昨夜へかけて愛子が讀んだ小説の話なぞしながら、融は行先きを決しかねてゐた。

「先生の好いところなら何處でも好いわ。」

そこへ宿の主人が短冊をもつて來た。

「いつか書いたときより、いくらか上手になつたかな。」

「里村先生にも何うぞ。」

「ふ。私たんか。」

「この人は歌です。字は此頃一茶を稽古してゐます。」
「さうですか、是非どうぞ。」
「こゝは一茶の本場だからね。」
「さう。」
「一茶のやうな字は書けないね。」
主人は一茶のことを能く分つてゐた。彼は俳人であつた。そして暫らくすると、一茶の幅や草稿のやうなものな幾つも持ちこんで來た。到頭彼は乞ひによつて「門涼み」の畫讃の軸の箱に字を題してしまつた。
短冊帖が其の後から二人の前に展げられた。

　行く當てもないのに急ぐ旅路かな

といふ句がふと目を引いた。これはM、H―氏のものだつたからであつた。
「面白い。あの男の全部だ。」隘は聲を出して快笑つた。
「好いわね。」
「字も面白い。」
「さうよ。」
輕井澤へ行く汽車の時間と道筋を調べなどしてから、二人は其處を立つた。
「町を少し見せて！」
自動車が町へ入つて來たところで、彼女は言つた。
「さうね、かう云ふ町はどこも型が極まつてゐるからね。天主閣でも見るかね。」

「どこでも可いわ。」

城のお濠のあたりは、去年彼女に案内された彼女の國での都會A—市に似てゐた。

「どこへ行つても、皆なかうやつて遣つてゐるものなのね。窮屈さうだわ。」愛子はステイションへ向ふ途中、町筋を眺めながら呟やいた。

M—市から乘換場所のS—驛へ出る途中の暑さといつたらなかつた。どこへ行つても風は一滴もなかつた。しかし途中の自然は彼等の目を樂しましめた。融の疲れた顏に汗がじり〳〵入染出た。頭腦が虬でも湧いてゐるやうに、感覺がもやもやして來た。彼は今迄で氣がつかずにゐたが齒根の腫れあがつてゐるための發熱が、殊にも彼の氣分を惡くしてゐた。齒痛は時候の變り目などに、時々彼を惱ませた。彼の生活は近頃殊に不規則になつてゐたので、いつ根底的に齒の療治をするといふ日もなかつた。腮が屢々骨までうづかせたが、でも年を取つたら何うなるかと思はれる齒が、順々に徐々に蝕まれて行つても、何うかかうか生命を支へるのに大した支障を來さない程度には保つて來たので、一本一本と衰へて行く齒に人生の黄昏を物寂しく感じながらも、思ひ切つた療治もしかねてゐた。それは又日かくれて道の遠い彼の人生の姿にも似たものであつた。彼には解決しなければならない問題が、眼前に澤山横はつてゐた。現實の力に引摺られすぎる弱さが、いつも彼を臆病にした。

融は齒の腫れてゐることに氣づかないほど、暑さに茹つてゐた。彼はその熱がどこから來るかを知らなかつた。

「遣り切れない暑さぢやないか。」融は泣顏をかくすやうな顏に笑つた。

「ほんとうに。早く涼しい處へ行きたい。」愛子は窮屈らしい苛ついた表情をした。

「しかしお前は汗をかゝないやうだね。」

實際また何時でも清らかに見える彼女であつた。

「さうでもないわ。ガーゼの肌襦袢がじつとりよ。帶といふものが又何といふ厄介なものなんでせう。でも洋服は貴方は厭でせう。」

「いや、さうでもないけれど……。」

「さう。」

「おれは矢張體が惡いね。」

「そんな事ないわよ。暑さに疲れたのよ。私も目がくら〱するの。」

乘替驛のS—近くへ來た頃には、それでも日がもう沈みかけたところで、いくらか凌ぎ易くなつた。久しく目に馴染んでゐる溫泉場の廣告立札が山の裾に並んでゐるのが見えたりして、熱病患者のやうな融の遊蕩を刺戟した。彼は輕井澤までの切符を買つてゐたけれど、未だ一度もおりて見たことのない其の土地に、妙に一種の反感に似たやうなものを感じてゐた。その理由は彼自身にも明瞭しなかつた。別莊地だけに、プルヂョウア氣分が濃厚だらうといふ、先入的豫感も確かに一つの理由であつたが、避暑地として近來尤も人氣が多いと云ふことや、初め外國の宣敎師によつて發見されたといふ其の高原地が、外人の新發見なるが故に、殊に有難味を感ずるといふよりも、日本人では自國の避暑地の發見すらが外人に待たなければならないのだと云ふことが、何かしら日本の國土に住む日本人としての不安を感じしめるのであつた。

つひ去年の此の頃のことであつた。彼は友人の知つてゐる或る大プルヂョウアの思ひものであつた婦人を、友人と一緒に訪問したことがあつた。彼女はその時、ちやうど夏から秋へかけて、毎年そこの別莊に立籠ることになつてゐる輕井澤から、二三日中歸りしてゐた。そして連りに其の避暑地氣分を稱讃してゐた。

「輕井澤から伊香保へ行くと、まるで貧民窟へ來たやうですの。問題になりませんね。」婦人は言ふのであつた。

その上彼は自分の戀愛に對してその婦人から意見でもされてゐるやうな高慢な態度を示された。彼女は延いて日本人の文學が、總て外國の模倣で、それゆゑ舶來品に比べて、無下に劣等なものであることを口にした。勿論善良で無教養な彼女は頭の天邊から、足の爪先きまで凡俗な物質主義で凝つたやうな舊い型の女であつた。

融はまた今朝A―温泉で見たM―の俳句から、夫婦きりで輕井澤における愛と藝術の幸福な彼の生活を想見して、何かしら羨望的なものを感じてゐた。長いあひだ仲間のうちでは一番氣が合つてゐると思はれてゐた彼から、眞向上段に振翳された融の戀愛問題と藝術生活についての最近の非社的大論文が、人が思つてゐるほど、友情的なものでないのは、藝術批評としては寧ろ當然としても、そして彼と自身との生活態度や藝術傾向に、大きな溝のあることも仕方がないとしても、彼の戰闘的氣分は兎に角、多方面的な彼の仕事が質から言つても分量から言つても、最近の文壇的存在を輝かすに十分なものであるのに比べて、融自身の破綻だらけな生活や卑小な仕事が、いかにも慘めなもののやうに思へた。融はそれを考へると内心明かに不愉快であつた。

「方向を轉じて、いつそ赤倉へでも行つてみれば可かつた。」

「赤倉て知らないわ。」

「僕も行つて見たことはない。しかし懷かしい北の海が見えるといふから……。」

さうは言つても、彼は成るべく東京へ近づいて行きたかつた。汽車は碓氷峠へと差しかかつてゐた。

夜の輕井澤へ二人はおりた。暗いステイション前には出迎への提灯の灯に照されて、ぴかぴかする自動車や、人の影が見えた。少し物怯したやうな態度で、融はそこへ出て行つた。そして誘はれるままにMホテルの自動車に乘つた。自動車は場末のやうな町を通つて、淋しい木立のなかの道へと縫つて行つた。そしてうねり曲ねつてゐるうちに、ホテ

ルの大仮正面玄関から、左手の日本館へと引返された。通されたところは、幾つかの増築した建物の中の一つで、狭い段梯子を上つた取りつきの部屋であつた。二タ間ぶつ通しであつた。

「餘り凉しくもないね。」融は半病人のやうになつた顔を、床の前の座布團の上に投げ出した。

「今日は暑いのよ。でも部屋があつて可かつたわ。」

風呂に入らうとして、融が浴衣に着かへ、愛子がいつでもさうする通りに、断髪のカアルの延びるのを恐れて、タオルで姉さん冠りをしてゐるところを、山風もないのに、灯が一時にぱつと消えた。そこらは闇となつた。でなくとも、電燈は一體薄暗いのであつた。部屋のなかは勿論、外の木立なども見えなかつた。

湯氣に包まれた蠟燭の光をたよりに、穴や何かに山國らしい感じのされる狭い風呂場で融と愛子はざつと汗を流した。やつと氣分が蘇生した。

飯を食ふ時分には、電氣も來てゐた。M、S—もこゝへ最近毎年來てゐて、つひこの夏も、若しかして來られるならば、借屋を見つけても可いと言つてくれた程であつた。

「M、S君のところを、愛子は知つてゐる筈だつたね。」

「え、所書きがあつた筈よ。」彼女はそんなものをごみ〳〵した手提のなかから捜してゐた。

「行つても可いけれど、呼んだら何うかね。悪いか知ら。」

「悪いことないでせう。直ぐ使をやりませう。それからV、N子さんにも逢ひたい。」

「さうだ。」

M、S君へ使を出してもらふ事にした。

本來ならば、何は兎に角こゝへ來れば融はM氏夫妻を訪問するところであつた。しかし今は途中で逢つても、避けはしないまでも、餘り親しい感じはもてないであらうことを、融は寂しく思つた。途中も彼はMのことは口へ出さなかつた。たゞ折々あの俳句を口にするだけであつた。

食後本館の外廊で、籐椅子にかけながら、夜氣に當つてゐた。M、S君が暗い木下闇の向ふから其の姿を現はした。融たちはその時その邊を逍遙してゐた。庭は暗かつた。木の間を透けて噴水が微かに銀色に光つてゐるのと、誰れかの煙草の火が見えるきりであつた。空はどんよりして、空氣が爽やかを缺いでゐた。

「やあ。」

「いらつしやい。お呼立てして。」

M、S君は外套を著てゐた。

「遠いんですの。」

「え、ちよつと有りますよ。いつお着でした。」

「もうちよつと先き。Sの親類へ行つた歸りですよ。外套なんか着てるんだね。」

「風邪をひきますからね。」

「そんなに涼しくはないぢやないか。」

三人は上へあがつて、飲料を命じたりした。愛子はM、S氏からきいて、Y、N子へ急いで電話をかけた。

直きにN子の洋裝姿が、そこへやつて來た。

融はMのことが何となし頭腦を壓してゐたので、二人に對しても恥かしいやうな感じで、晴やかにはなり得なかつた。

「こゝは好いのよ。私なんかの宿よりかも。その代りお高いけれど。でもあの宿も親切で好いのよ。」

彼女の生活も、向上して來た。二三年前までは山の奥の、餘り開けない温泉から、一年もつゞいて[illegible]であつた。今彼女はその旅館に同性の友人と來てゐた。こゝへ來てゐる人達の噂が出たりした。

「みんな好いもんだな。」

「先生もいらしたら何うです、私なんか東京にゐるよりかかゝらないんです。」

やがて部屋へ行くことにした。

「好いわね。こんな部屋が二タ間もあつて。」N子は少し驚いたやうに言つた。

「明いてるからでせう。不景氣なんぢやない？」

愛子は珈琲と水菓子を吩咐けた。皆んなは廊縁へ出て椅子にかけてゐた。

「現代生活もなか〱厄介ね。避暑にも行かなければならず、行けばさう慘めなことも厭だし。」N子は煙草の煙を吐きながら言つた。

「ほんとうよ。私達はブルヂョウア氣分は厭だけれど、美に對しては人一倍敏感なだけに、物質がほしいといふんぢやないに、其時々の氣分で或程度の贅澤も必要なのね。」愛子はナイフの刃をポンと林檎に打込んだ。

「ホテルは何だか不愉快だね。浴衣がけでは室外へ出られないなんて、夏、浴衣がけで散歩も出來ないとなると、何時まで經つても外人本位だね。」融は今更のやうにいつた。彼はやゝ明るくなつてゐた。

「さうでもないですけれど。」

「あすこらにゐる外人は、何となし日本人に對して優越感をもつてゐるらしいわね。己達の領域だと言つた風に。」

「何とかしたら可いぢやないかね。」

「ホテルは爲方がないでせうが、輕井澤では一體にさう云ふ氣分がないことはないんですよ。僕が子供に小便をさして

ゐると、通りかゝりの西洋人が——婆さんでしたが、かう云ふところで小便さんかなしては可けないつて眞劍になつて咎めるんです。僕は小便をさしてから、後を追ひかけて、これは我々の民族的習慣だから、餘計なおせつかいはしてもらひたくない、日本語でさう言つてやつたのです。多分通じたかつたらしいけれど。」S君が話すのであつた。

談話が多方面へ飛んだ。最近自殺した若いA氏の藝術批評から、輕井澤へ來る女歌人のうわさや、それらの歌の批評などへも繋がつて行つた。其中の一人のS夫人の融と愛　戀愛に對する非難も問題に上つた。

「Aの俳句は好いのかね。」

「好いですね。」

「僕は思つたほど感心しなかつた。干からびてゐるぢやないか。」

「いや、さうぢやないですね。歌は兎に角として俳句は、僕は男の歌も嫌ひですが、歌なんか詠む女も話らないと思ふね。」N君が言ふ。

「さうですか。でも歌も好いぢやありませんか。」

「僕も歌はわからなかつたけれど、近頃はさうでもないな。女性のものとしては歌も情感があつて好いぢやないか。」

勿論愛子も歌をもつてゐた。

愛子が贈つたハタ〳〵のお禮に、N君の贈つた詩集の話が出た。

「幼馴染に何んとかして……お茶呑みに來たまへと言へど、人妻に何んの語らひせんものぞ、かたみに別れ……何とか、あれ好きよ。」

郷土氣分のものだけに、融にも其の歌の感じはよく解つた。

「S君は郷里に庭を作つてゐると言ふぢやないか。輕井澤がひどく氣に入つた譯だね。」

「一頃は郷里へ引込もうかと思つて、土地も買つたんですけれど……。」

「奥の方で少し不便だけれど、安い別荘があるのよ。私も勧められましたの。輕井澤がすつかり氣に入つちやつたから、買はうかと思つてるんですけれど。先生もお買ひにならないこと。」N子が言つた。

「此處がそんなに好いかね。」

「居なじむと、それあ好いところよ。愛子さん何う。」

「私？　今來たばかりだから解らないけれど、來る途中汽車の中から見た此の邊の自然が素敵に好かつたわ。こゝも惡度好いと思ふの。」

「水の音がしないのでね。」融は非をつけた。

「水もあるのよ。翌朝方々お歩きになつて見ると可いわ。私たちお誘ひに來てよ。」

「いやあ……。」

融ははづまなかつた。そして二人が歸つてからも氣分がよくなかつた。彼は翌朝は伊香保へでも行かうかと思つたりした。

「愛子がゐるなら二三日殘つてゐても可い。」何かの拍子に彼は不機嫌に言つた。

「いや、さういふことを言つてるんぢやないのよ。私獨りなら些とも面白くないのよ。貴方と二人ゐるのが幸福なんぢやありませんか。わかつてる癖に……。」

融は默つてしまつた。

翌朝融は廊緣へ出て、何の興味もない庭をぼんやり見てゐた。下がコック場になつてゐるとみえて、煮物や何かの匂ひがしたり、コックの姿が庭先きへちらついたりした。高原らしい爽やかさが、どこにも感じられなかつた。目の下の櫻の

木の陰に、埃が堆く掻きよせられたまゝになつてゐた。古草履だの、ボール箱だの、紙屑や繿褸片のやうなもの……。それが妙に融の目觸りになるのであつた。

頬冠りをして、脚絆に手甲をした女が、庭を掃いてゐた。掃いた埃を棄てに行つては、また掻きよせてゐた。大抵隈なく掃除されてしまつた。しかし彼女は、すぐ融の目の下まで來ながら櫻の陰にたまつてゐる埃に觸れようとはしなかつた。氣がつかないのか。故意なのか。その上見廻つてゐる洋服の紳士も、どこからか遣つて來て、彼女を指圖してゐた。けれど其埃は彼の目にも入らないらしかつた。

融は少し苛ついて來た。

「何だつてあの埃だけ持つて行かないんだらう。氣になつて爲様がない。」融は腹立しさうに呟いた。

「何うしたんでせう。莫迦ね。」愛子も言つたが、深く氣にもしなかつた。

約束はしてあつたが、愛子の電話でN子がやつて來た。彼等は廊緣へ出て、朗らかに談してゐた。やがて食堂へ出て行つた。

「先生も入らつしやらない？」

融は食慾がなかつた。

「よさう。」彼はさう言つて、臥に寢そべつてゐたが、二人が出て行つたあとで、女中に次の部屋へ床を延べさせて、潜りこんでしまつた。直きに彼は眠りに陷ちた。

幾時間ほど眠つたらう。愛子たちに、M、S君の聲もまじつて、話聲が耳に入つて、彼が目がさめた。

S君は心配らしい顏をしてゐた。

「御機嫌が悪いやうですね。」彼は愛子に言つてゐた。

融は汐を見て目を開けた。

「今M、Sさんが入らして見たら、先生がよく眠つていらしたので、そつとしてお置きになつたんですの。」

「齦がわりいですか。可けませんね。」

「いや、大したこともないんです。齒齦に膿をもつてゐるんで。」

「それあ可けませんね。」

「今皆さんで散歩に誘つて下すつてゐるのよ。行きませう。」

「行つておいで。僕はこゝにゐよう、これから立たうと思ふ。」

「さう。それでも可いわ。」

「御氣分が悪くちやね。」

愛子はN子につれられて、その邊を一ト廻りして、汽車の時間の間に合ふやうに、ステイションで落合ふことにして、出て行つた。融は連りに誘はれたけれど、感情が釋れなかつた。皆んなに悪いと思ひながら、何うすることも出來なかつた。

N君が、時間の許す範圍で、町をそつち此方見せてくれた。

ステイションへつくと、N子と愛子はもう來てゐた。

その汽車の込むことと、暑いことと言つたら！融は筋肉がぐしや〳〵に熔けるかとおもふほど怖かつた。額に熱を感じた。齒齦から顎骨へかけて、氣味の悪い疼痛が襲つて來た。

愛子は先刻M、S君が、署名して持つて來てくれた、彼の最近の感想隨筆集を繙いて讀んでゐた。

「先生、M、Sさん大變貴方を讚めてゐるわ。ほら、これ御覽なさい。」愛子は融のペンネームの表題になつてゐる、其の評論文のところを開いたまゝ、嬉しさうに彼の前に差出した。

「お止し、見つともないから。」融は顔を顰めた。

愛子には其の聲が聞えなかつた。

「それ！こゝを讀んでごらんなさいと言ふのに。」彼女は翳りのない、無邪氣な目をして、重ねて彼に押しつけるやうにした。

「ちよつ。止せつて言つてるぢやないか。」

融は頑固にそれを押し返すやうにして、愛子の手を、本のなかへ閉ぢこめたまゝ押伏せた。

愛子は吃驚して目を見張つた。やがて彼の怒つてゐるのに氣がついた。彼はひどく不機嫌に見えた。

「貴方つて人は變な人ね。貴方みたいな呆れた利己主義者もないもんだ。餘り好い見方をしてゐるから、見せてあげようと思つたのに、女の氣持なんて些とも判らない人ね」

愛子は蒼くなつて言つた。

「お止しッ。」融は冠せるやうに言つた。

融は事によると愛子が次ぎの驛で、汽車をおりてしまひはしないかと、そんな事を考へながら、歪んだ硬い顔をして、窓の外へ目をやつてゐた。

側にゐた背廣服の若い男が、その時鞄のなから講談雜誌を取出した。

獰猛な暑さがじり〱浸みこんで來た。

河北新報

正月の神



チヤナスは兩面を有する羅馬の神で、歐米の正月は彼に捧げられてゐる。額の一面は過去と暗黑、他面は將來と光輝とに向つてゐる。

正月に當つては、病む者も弱き者も共に、**チヤナス**の神の如く、病苦の舊年より健康の新年を望む。

健康の新年に入る唯一の道は、從來の不徹底、姑息なる治療手段を棄て、根本的健康法に賴る事である。

根本的健康療法とは、局部的疾患を癒さんとのみ焦心するに非ずして、病に打勝ち得る健康を築上ぐるにあり、これが大自然の法であり、かつ最も確實迅速な治病法である、斯る健康は至極簡單に物理療器**オキシヘーラー**の使用によつて得らる。**オキシヘーラー**の詳細は說明書附實驗例(新刊二十四號進呈)にて御承知を乞ふ。

東京市牛込區神樂町一ノ一
オキシヘーラー奬勵會
電話牛込二二〇四・二二〇五

定價		定價	送料
一冊		八十錢	參錢
六冊		四圓八十錢	送料共
十二冊		九圓六十錢	同

每月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

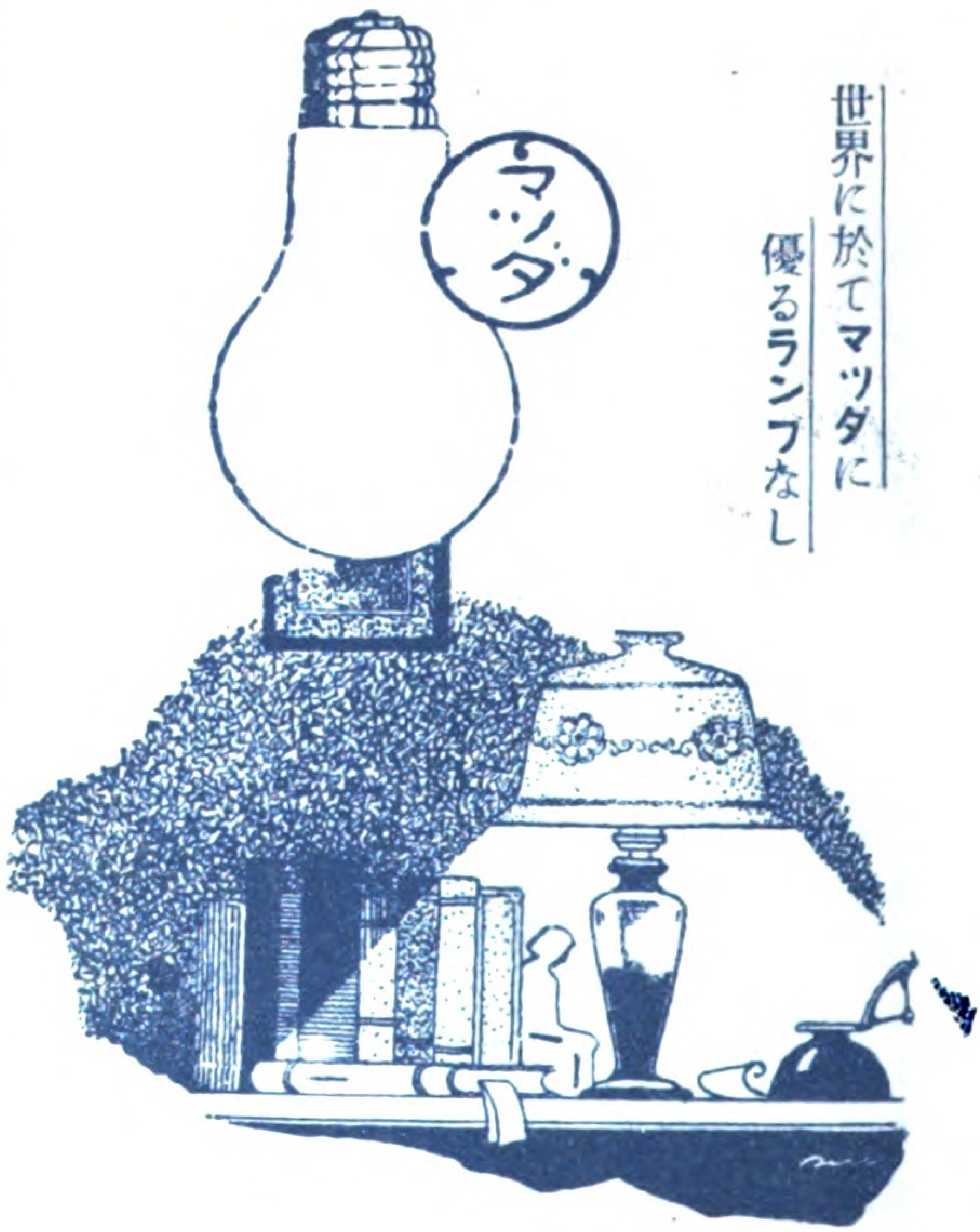
廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和二年十二月十八日印刷
昭和三年一月一日發行　(禁轉載)
編輯兼發行人　島中雄作
印刷人　高木鳥三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍
東京市丸ノ內ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ內二〇六番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番

新マツダランプ
新マツダ瓦斯入電球

世界に於てマツダに
優るランプなし



新春の壽

祝ふ睦月の夜家々に
かゞやき渡る美しき光—
新マツダランプこそ塵
に汚れぬ眞珠色の明る
い内面艶消電球であり
樂しきお部屋お部屋に
華かな春を齎らす明り
の神であります

東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.